

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第142集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集

南蛇井増光寺遺跡 I

B区・縄文・弥生時代

(本文編)

1 9 9 2

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第142集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集

南蛇井増光寺遺跡 I

B区・縄文・弥生時代
(本文編)

1 9 9 2

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



南蛇井増光寺遺跡航空写真（東方より）



南蛇井増光寺遺跡航空写真（南方より）



南蛇井増光寺遺跡航空写真（北方より）



南蛇井増光寺遺跡全景（北方より）



南蛇井増光寺遺跡B区全景（南方より）



B-115住居跡出土遺物



B-116住居跡出土遺物

序

西毛の鎭川流域は、武蔵国から信濃国への交通の要路として早くから開けてきました。その要路に高速自動車道の上信越自動車道が建設されることになり、工事によって消滅するところの埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が昭和61年度よりはじまりました。

高速道が通過する富岡市南蛇井の増光寺地区も埋蔵文化財調査の対象となりました。昭和62年10月から平成3年3月までの長期にわたる調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての竪穴住居跡約785軒、大量の縄文時代の土壌等が発見、調査されています。特に、弥生時代後期の集落は、鎭川流域のこの時代を研究する上で豊富な資料を提供してくれています。

これらの遺構・土壌等は平成3年度より平成8年度までの予定で報告書作成のための整理作業に入りましたが、今年度その成果の一部がまとまりましたので、ここに増光寺地区の遺跡の第1分冊の報告書を刊行することにしました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、日本道路公団東京第2建設局、同富岡工事事務所、地元関係者の方々から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で広く活用されることを願い序とします。

平成4年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「南蛇井増光寺遺跡」の発掘調査報告書である。本書は、南蛇井増光寺遺跡Ⅰ、Ⅱ区縄文・弥生時代編で、南蛇井増光寺遺跡の調査結果の1冊である。
- 2 南蛇井増光寺遺跡は、群馬県富岡市大字南蛇井字血の池・増光寺、大字中沢字久保界戸・中里地内に所在する。遺跡名は当遺跡の中心を占める小字名増光寺を用いて「南蛇井増光寺遺跡」とした。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台3-15-8所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者は以下のとおりである。（（ ）内は当時の職名）

- (1) 発掘調査 調査期間 昭和62年10月1日～平成3年3月31日
調査担当者
昭和62年度 依田治雄（専門員）、三浦茂三郎（調査研究員）
昭和63年度 大木紳一郎（主任調査研究員）、小野和之（主任調査研究員）、若林正人（調査研究員）、飯塚 聡（調査研究員）、津金澤吉茂（専門員）
平成元年度
Ⅰ班 依田治雄、伊藤 肇（主任調査研究員）、若林正人
Ⅱ班 小野和之、飯塚 聡、桜井美枝（調査研究員）
Ⅲ班 飯塚卓二（専門員）、新井 仁（調査研究員）、高島英之（調査研究員）
Ⅳ班 綿貫鋭二郎（主任調査研究員）、斎藤利昭（調査研究員）、船藤 亨（調査研究員）
平成2年度
Ⅰ班 依田治雄、伊藤 肇、桜井美枝
Ⅱ班 小野和之、飯塚 聡、高島英之
Ⅲ班 飯塚卓二、飛田野正佳（調査研究員）、亀山幸弘（調査研究員）
- (2) 整 理 整理期間 平成3年4月1日～平成4年6月31日、整理担当者 伊藤 肇
- (3) 事 務 常務理事 白石保三郎（昭和61～63年度） 邊見長雄
事務局長 井上唯雄（昭和61・62年度）、松本浩一（昭和63～平成3年度）
近藤 功
管理部長 大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄（昭和62～平成2年度）、佐藤 勉
調査研究部長 上原啓已（昭和61～63年度）、神保侑史
課 長 岩丸大作（平成2・3年度）、斎藤俊一
主 任 国定 均、須田朋子、吉田有光
主 事 柳岡良宏、船津茂、高橋定義

非常勤嘱託 松下 登、土橋まり子
臨時職員 野島のぶ江、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ
関越道上越線調査事務所
所 長 井上 信(昭和61～63年度)、高橋一夫(平成元～平成2年度)、阿部千明(平成3年4月～11月)、松本浩一(11月～3月兼任)、吉田 肇
総括次長 片桐光一(昭和61～平成元年度)、大沢友治(平成2～3年度)
次 長 原田恒弘(昭和62年度)、徳江 紀(昭和63～平成2年度)
課 長 長谷部達雄(昭和61年度)、鬼形芳夫(昭和63～平成2年度)、依田治雄
庶務課 係長代理 黒沢重樹(昭和61～63年度)、宮川初太郎(平成元～2年度)
主任 国定 均(昭和63～平成元年度)、笠原秀樹(平成2～3年度)、吉田有光
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、本城美樹、後閑玲子、田中知恵美、高田千恵、吉田登志子

6 報告書作成関係者

編 集 伊藤 肇
本文執筆 伊藤 肇、依田治雄(第1章第1節1、第2章第2節、第3章第1節)
遺構写真 依田治雄、伊藤 肇、三浦茂三郎、若林正人
保存処理 関 邦一((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
小材浩一((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員)
遺物写真 佐藤元彦((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
遺物観察 縄文・弥生式土器 伊藤 肇、新井悦子、石器 桜井美枝
整理補助 新井悦子(嘱託員)、手塚ふみ江、長岡和恵、水出かおる、藤井文江、小林幸枝、茂木範子、小久保トシ子
委託関係 航空写真 有限会社青高館、シン航空写真株式会社、国際航業(株)
遺構測量、遺構・遺物トレース 株式会社測研 残存脂肪酸分析 株式会社ズコーシャ

7 出土遺物・図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターが保管している。

8 報告書作成に当たり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表す次第である。(敬省略、50音順)







富岡市教育委員会、小野和之、柿沼恵介、岸田治男、小山岳夫、斎藤利昭、桜井美枝、飛田野正佳

9 発掘調査従事者

相川よし江、赤尾由市(故人)、赤尾チエノ、浅香重作、浅香法子、浅香春造、阿部千代子、新井英子、新井俊成、飯野幸代、飯野しげ、飯間 操、五十嵐りん、池田泰夫、池田美子、石井るい、磯貝アイ、磯貝千代、井田松寿、市川かず子、市川定吉、市川佐太郎、市川さの子、市川近太郎、井上進一、猪野広吉、今井千枝子、今井鉄夫、岩井英治、岩井英次郎、岩井 稔、岩井幸雄、岩井すみ、岩崎うたの、上原ヨネ、臼田秀子、浦野幸子、小島福次、小野沢しづ子、小野沢トヨ子、恩田たけ、加藤静江、神戸キヨ子、神戸好教、木戸幸子、木戸 茂、木戸ゑみ、木戸ふじ子、久保みち子、黒沢利次、黒沢富美子、小坂橋廣、木暮広起、小柴さよ子、斎藤隆男、斎藤リン、佐々木音吉、佐藤 清、佐藤節子、沢田由夫、佐俣功、清水富士江、清水よう子、下山あき、神宮一枝、瀬間きみ、高橋栄子、高橋加市、高橋武秀、

武田トヨ、武田 巽、田村梅之祐、田村嘉三郎、田村カメ、田村キヨ子、田村 清、田村けさ子、田村
たけ、田村仁平、田村ふみ、田中イサミ、津金沢信子、出浦郷助、中野セツ、中野利一、中村保男、広
澤幸子、広澤はる、広澤八重子、藤本 弘、古屋慶子、増田道雄、黛きみ子、黛みつ、松井シズ江、茂
木げん子、茂木文次郎、茂木 実、柳沢昭一、山内勝広、横尾幸子、吉岡わか

凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。
住居跡—1/60、炉等付属施設—1/30を原則とし、大型住居のみ住居跡—1/80、炉等付属施設—1/40とした。又、基準としてスケールを配している。
- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表す。
- 3 遺構実測図の方位記号は、座標北を示す。(国土座標IX系)
- 4 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。
土器については、縄文土器1/4、弥生土器・断面実測の土器1/3、石器・砥石については1/3、石鏃2/3、紡錘車1/2、を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。
- 5 遺構及び遺物実測図中のスクリーンパターンは、下記のことを示す。
(遺構)  焼土  炭化物・灰  粘土  軽石
(遺物)  石器使用面  石器柄の装着面
- 6 出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。
- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色要監修「新版標準土色帳」1988年度版を使用している。
- 8 住居跡の面積値は、プランニメーターで3回計測し、その平均値を用いている。
- 9 報告書中に掲載した第1・5・6図は、いずれも国土地理院1:50,000の地形図「富岡」を使用した。

目 次

巻頭カラー写真図版

序

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

写真図版目次

抄 録

第 1 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯と調査の経過 依田 治雄 1

第 2 節 調査方法 伊藤 肇 6

第 3 節 基本土層 伊藤 肇 8

第 2 章 地理的環境及び歴史的環境

第 1 節 地理的環境 伊藤 肇 9

第 2 節 歴史的環境 依田 治雄 10

第 3 章 検出された遺構と遺物

第 1 節 南蛇井増光寺遺跡B区概要 依田 治雄 18

第 2 節 縄文時代住居跡と出土遺物 伊藤 肇 20

第 3 節 弥生時代住居跡と出土遺物 伊藤 肇 55

第 4 節 埋甕と出土遺物 伊藤 肇 180

第 5 節 土坑と出土遺物 伊藤 肇 185

第 4 章 考察及びまとめ

第 1 節 縄文時代の遺構遺物について 伊藤 肇 194

第 2 節 弥生時代の遺構遺物について 伊藤 肇 196

参考文献 207

第 3 節 井出遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析 (株)ズコーシャ総合科学研究所 208

中野寛子・福島道広・長田正広

帯広畜産大学物資源化学科

中野 益 雄

抄 録

写真図版

付 図

挿 図 目 次

第 1 図	南蛇井増光寺遺跡位置図	1	第 59 図	23号住居跡出土遺物実測図	61
第 2 図	南蛇井増光寺遺跡調査区及びグリッド配置図	7	第 60 図	28号住居跡(1)	62
第 3 図	南蛇井増光寺遺跡基本土層図	8	第 61 図	28号住居跡(2)、炉	63
第 4 図	甘楽郡郷配置図(富岡市史より)	11	第 62 図	28号住居跡出土遺物実測図	63
第 5 図	縄文・弥生時代 周辺の主要遺跡	12	第 63 図	29号住居跡	64
第 6 図	古墳・奈良・平安・中近世時代周辺の主要遺跡	13	第 64 図	29号住居跡炉	65
第 7 図	96号住居跡	20	第 65 図	29号住居跡出土遺物実測図(1)	65
第 8 図	96号住居跡出土遺物実測図	21	第 66 図	29号住居跡出土遺物実測図(2)	66
第 9 図	111号住居跡(1)	22	第 67 図	29号住居跡出土遺物実測図(3)	67
第 10 図	111号住居跡(2)	23	第 68 図	31号住居跡	67
第 11 図	111号住居跡埋設土器	23	第 69 図	31号住居跡出土遺物実測図(1)	68
第 12 図	111号住居跡個別遺物出土状況図	24	第 70 図	31号住居跡出土遺物実測図(2)	69
第 13 図	111号住居跡出土遺物実測図(1)	25	第 71 図	32号住居跡(1)	70
第 14 図	111号住居跡出土遺物実測図(2)	26	第 72 図	32号住居跡(2)、炉	71
第 15 図	111号住居跡出土遺物実測図(3)	27	第 73 図	32号住居跡出土遺物実測図	72
第 16 図	120号住居跡(1)	28	第 74 図	33号住居跡	73
第 17 図	120号住居跡(2)	29	第 75 図	33号住居跡出土遺物実測図	74
第 18 図	120号住居跡出土遺物実測図(1)	29	第 76 図	36号住居跡	74
第 19 図	120号住居跡出土遺物実測図(2)	30	第 77 図	36号住居跡出土遺物実測図	75
第 20 図	120号住居跡出土遺物実測図(3)	31	第 78 図	39号住居跡	76
第 21 図	121号住居跡(1)	31	第 79 図	39号住居跡出土遺物実測図	76
第 22 図	121号住居跡(2)	32	第 80 図	51号住居跡	77
第 23 図	121号住居跡出土遺物実測図(1)	32	第 81 図	51号住居跡出土遺物実測図(1)	78
第 24 図	121号住居跡出土遺物実測図(2)	33	第 82 図	51号住居跡出土遺物実測図(2)	79
第 25 図	122号住居跡	34	第 83 図	51号住居跡出土遺物実測図(3)	80
第 26 図	122号住居跡遺物出土状況図、出土遺物実測図(1)	34	第 84 図	59号住居跡(1)、炉	81
第 27 図	122号住居跡出土遺物実測図(2)	35	第 85 図	59号住居跡(2)	82
第 28 図	122号住居跡出土遺物実測図(3)	36	第 86 図	59号住居跡出土遺物実測図(1)	82
第 29 図	124号住居跡	37	第 87 図	59号住居跡出土遺物実測図(2)	83
第 30 図	124号住居跡炉	37	第 88 図	60号住居跡	84
第 31 図	124号住居跡出土遺物実測図	37	第 89 図	60号住居跡出土遺物状況図	85
第 32 図	166号住居跡	38	第 90 図	60号住居跡炉	86
第 33 図	166号住居跡炉	39	第 91 図	60号住居跡出土遺物実測図(1)	86
第 34 図	166号住居跡出土遺物実測図	39	第 92 図	60号住居跡固体別出土遺物状況図	折り込み
第 35 図	179号住居跡(1)	40	第 93 図	60号住居跡出土遺物実測図(2)	89
第 36 図	179号住居跡(2)	41	第 94 図	60号住居跡出土遺物実測図(3)	90
第 37 図	179号住居跡炉	41	第 95 図	60号住居跡出土遺物実測図(4)	91
第 38 図	179号住居跡出土遺物実測図(1)	42	第 96 図	60号住居跡出土遺物実測図(5)	92
第 39 図	179号住居跡出土遺物実測図(2)	43	第 97 図	60号住居跡出土遺物実測図(6)	93
第 40 図	179号住居跡出土遺物実測図(3)	44	第 98 図	61号住居跡	94
第 41 図	183号住居跡遺物出土状況図	45	第 99 図	61号住居跡出土遺物実測図(1)	95
第 42 図	183号住居跡出土遺物実測図(1)	46	第100 図	61号住居跡出土遺物実測図(2)	96
第 43 図	183号住居跡出土遺物実測図(2)	47	第101 図	62号住居跡	97
第 44 図	183号住居跡出土遺物実測図(3)	48	第102 図	62号住居跡出土遺物実測図	98
第 45 図	183号住居跡出土遺物実測図(4)	49	第103 図	75号住居跡(1)	99
第 46 図	184号住居跡(1)	50	第104 図	75号住居跡(2)、炉	100
第 47 図	184号住居跡(2)	50	第105 図	75号住居跡出土遺物実測図	101
第 48 図	184号住居跡炉	51	第106 図	79号住居跡	101
第 49 図	184号住居跡出土遺物実測図(1)	51	第107 図	79号住居跡出土遺物実測図	102
第 50 図	184号住居跡出土遺物実測図(2)	52	第108 図	87号住居跡	102
第 51 図	184号住居跡出土遺物実測図(3)	53	第109 図	87号住居跡出土遺物実測図(1)	103
第 52 図	184号住居跡出土遺物実測図(4)	54	第110 図	87号住居跡出土遺物実測図(2)	104
第 53 図	5号住居跡	55	第111 図	97号住居跡(1)	105
第 54 図	5号住居跡出土遺物実測図	56	第112 図	97号住居跡(2)、1・2号炉	106
第 55 図	22号住居跡	折り込み	第113 図	97号住居跡出土遺物実測図	107
第 56 図	22号住居跡出土遺物実測図(1)	59	第114 図	98号住居跡(1)	108
第 57 図	22号住居跡出土遺物実測図(2)	60	第115 図	98号住居跡(2)	109
第 58 図	23号住居跡	61	第116 図	98号住居跡炉	110

挿 図 目 次

第117図 98号住居跡出土遺物実測図(1)……………110	第175図 132号住居跡出土遺物実測図(1)……………161
第118図 98号住居跡出土遺物実測図(2)……………111	第176図 132号住居跡出土遺物実測図(2)……………162
第119図 98号住居跡出土遺物実測図(3)……………112	第177図 162号住居跡……………163
第120図 99号住居跡(1)……………113	第178図 162号住居跡炉……………164
第121図 99号住居跡(2)……………114	第179図 162号住居跡出土遺物実測図(1)……………164
第122図 99号住居跡炉、貯蔵穴……………115	第180図 162号住居跡出土遺物実測図(2)……………165
第123図 99号住居跡個別遺物出土状況図……………116	第181図 164号住居跡(1)……………166
第124図 99号住居跡出土遺物実測図(1)……………117	第182図 164号住居跡(2)、炉……………167
第125図 99号住居跡出土遺物実測図(2)……………118	第183図 164号住居跡出土遺物実測図……………167
第126図 99号住居跡出土遺物実測図(3)……………119	第184図 168号住居跡(1)……………168
第127図 99号住居跡出土遺物実測図(4)……………120	第185図 168号住居跡(2)……………169
第128図 101号住居跡……………121	第186図 168号住居跡出土遺物実測図(1)……………170
第129図 101号住居跡出土遺物実測図(1)……………122	第187図 168号住居跡出土遺物実測図(2)……………171
第130図 101号住居跡出土遺物実測図(2)……………123	第188図 174号住居跡(1)……………172
第131図 105号住居跡(1)……………123	第189図 174号住居跡(2)……………折り込み
第132図 105号住居跡(2)……………124	第190図 174号住居跡出土遺物実測図(1)……………175
第133図 105号住居跡出土遺物実測図……………124	第191図 174号住居跡出土遺物実測図(2)……………176
第134図 106号住居跡(1)……………125	第192図 178号住居跡(1)……………177
第135図 106号住居跡(2)……………126	第193図 178号住居跡(2)、炉……………178
第136図 106号住居跡炉……………127	第194図 178号住居跡出土遺物実測図……………179
第137図 106号住居跡出土遺物実測図(1)……………127	第195図 1～5号埋壘……………181
第138図 106号住居跡出土遺物実測図(2)……………128	第196図 1・4・5号埋壘出土遺物実測図……………182
第139図 107号住居跡(1)……………128	第197図 2・3号埋壘出土遺物実測図……………折り込み
第140図 107号住居跡(2)……………129	第198図 9・6・7・18号土坑……………186
第141図 107号住居跡出土遺物実測図(1)……………130	第199図 17号土坑……………187
第142図 107号住居跡出土遺物実測図(2)……………131	第200図 9号土坑出土遺物実測図……………187
第143図 108号住居跡(1)、炉……………132	第201図 17・6号土坑出土遺物実測図……………188
第144図 108号住居跡(2)……………133	第202図 6・7・18号土坑出土遺物実測図……………189
第145図 108号住居跡個別遺物出土状況図……………134	第203図 18号土坑出土遺物実測図……………190
第146図 108号住居跡出土遺物実測図(1)……………135	第204図 グリッド出土遺物実測図(1)……………191
第147図 108号住居跡出土遺物実測図(2)……………136	第205図 グリッド出土遺物実測図(2)……………192
第148図 108号住居跡出土遺物実測図(3)……………137	第206図 グリッド出土遺物実測図(3)……………193
第149図 112号住居跡……………138	第207図 時代別遺構分布図……………195
第150図 112号住居跡出土遺物実測図……………139	第208図 横羽状文・縄文施文土器出土分布図……………204
第151図 113・114号住居跡……………140	第209図 土器および土壌試料採取地点図……………213
第152図 113号住居跡出土遺物実測図……………141	第210図 土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成……………214
第153図 114号住居跡出土遺物実測図……………141	第211図 土器試料に残存する脂肪の脂肪酸組成……………215
第154図 115号住居跡(1)……………142	第212図 土壌試料に残存する脂肪のステロール組成……………216
第155図 115号住居跡(2)……………143	第213図 土器試料に残存する脂肪のステロール組成……………217
第156図 115号住居跡(3)、炉……………144	第214図 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図……………218
第157図 115号住居跡出土遺物実測図(1)……………144	第215図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関……………219
第158図 115号住居跡個別遺物出土状況図……………145	
第159図 115号住居跡出土遺物実測図(2)……………146	
第160図 115号住居跡出土遺物実測図(3)……………147	
第161図 116号住居跡(1)……………148	
第162図 116号住居跡(2)……………149	
第163図 116号住居跡炉……………150	
第164図 116号住居跡個別遺物出土状況図……………折り込み	
第165図 116号住居跡出土遺物実測図(1)……………153	
第166図 116号住居跡出土遺物実測図(2)……………154	
第167図 116号住居跡出土遺物実測図(3)……………155	
第168図 116号住居跡出土遺物実測図(4)……………156	
第169図 116号住居跡出土遺物実測図(5)……………157	
第170図 116号住居跡出土遺物実測図(6)……………158	
第171図 116号住居跡出土遺物実測図(7)……………159	
第172図 118号住居跡……………159	
第173図 118号住居跡出土遺物実測図……………160	
第174図 132号住居跡……………160	

表 目 次

第1表	周辺主要遺跡一覧表	14	第5表	紡錘車一覧表	203
第2表	南蛇井増光寺遺跡報告遺構一覧表	18	第6表	縄文・横羽状文施文土器一覧表	205
第3表	弥生時代後期住居跡 面積・規模・形状一覧表	198	第7表	土器および土壌試料の残存脂肪抽出量	212
第4表	炉一覧表	199	第8表	試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合	212

写真図版目次

P L 1	航空写真 遺跡全景		P L 50	60号住居跡出土遺物	
P L 2	航空写真 B区全景		P L 51	60・61号住居跡出土遺物	
P L 3	第2次調査遺構検出状況		P L 52	61・62・75号住居跡出土遺物	
P L 4	作業風景		P L 53	79・87・97・98号住居跡出土遺物	
P L 5	96・111号住居跡		P L 54	98・99号住居跡出土遺物	
P L 6	111・120号住居跡		P L 55	99・101・105号住居跡出土遺物	
P L 7	120・121号住居跡		P L 56	106・107・108号住居跡出土遺物	
P L 8	122号住居跡		P L 57	108号住居跡出土遺物	
P L 9	166・179号住居跡		P L 58	108・112・113・114・115号住居跡出土遺物	
P L 10	183号住居跡		P L 59	115・116号住居跡出土遺物	
P L 11	183・184号住居跡		P L 60	116号住居跡出土遺物	
P L 12	2・3号埋壘、9・17号土坑		P L 61	116号住居跡出土遺物	
P L 13	1・5号埋壘		P L 62	118・132・162号住居跡出土遺物	
P L 14	4号埋壘、6・7・18号土坑		P L 63	162・164・168号住居跡出土遺物	
P L 15	5・22号住居跡		P L 64	168・174号住居跡出土遺物	
P L 16	22・23号住居跡		P L 65	178号住居跡、1～4号埋壘出土遺物	
P L 17	28・29号住居跡		P L 66	5号埋壘、6・7・9・17・18号土坑、グリッド出土遺物	
P L 18	29・31号住居跡		P L 67	グリッド出土遺物	
P L 19	32号住居跡				
P L 20	33・36号住居跡				
P L 21	51号住居跡				
P L 22	59号住居跡				
P L 23	60号住居跡				
P L 24	61・62号住居跡				
P L 25	75・79号住居跡				
P L 26	87・97号住居跡				
P L 27	97・98号住居跡				
P L 28	98・99号住居跡				
P L 29	101・105号住居跡				
P L 30	106号住居跡				
P L 31	107・108号住居跡				
P L 32	108・112・113・114号住居跡				
P L 33	115号住居跡				
P L 34	116号住居跡				
P L 35	116・118号住居跡				
P L 36	132号住居跡				
P L 37	162・164号住居跡				
P L 38	164・168号住居跡				
P L 39	174号住居跡				
P L 40	178号住居跡				
P L 41	96・111号住居跡出土遺物				
P L 42	120・121・122号住居跡出土遺物				
P L 43	122・124・166・179号住居跡出土遺物				
P L 44	183号住居跡出土遺物				
P L 45	184・5号住居跡出土遺物				
P L 46	22・23・28・29号住居跡出土遺物				
P L 47	29・31・32号住居跡出土遺物				
P L 48	32・33・36・39・51号住居跡出土遺物				
P L 49	51・59・60号住居跡出土遺物				

抄 録

1 遺 跡 の 概 略

本遺跡は、群馬県富岡市大字南蛇井字血の池・増光寺、大字中沢字久保界戸・中里地内に所在する。発掘調査は、昭和62年10月1日から開始され、平成3年3月をもって終了した。

遺跡は富岡市の南西、鎭川左岸の段丘上に広がる平坦面に位置し、調査前には桑・こんにゃく等の畑地として利用されていた。発掘調査により、縄文・弥生・古墳・奈良・平安、各時代の住居跡を初めとして、縄文時代の配石遺構、多数の土坑群、弥生時代の方形周溝墓、中・近世の大溝、掘立柱建物跡、土坑などが検出され、鎭川流域有数の規模を誇る大複合遺跡であることが判明した。

2 遺 構 数 量

種 別	時 代	数 量	備 考
住 居 跡	縄 文 時 代	約 72	縄文時代前期～後期、敷石住居跡も含む。
	弥 生 時 代	約 185	弥生時代中期4軒、弥生時代後期181軒検出。
	古墳～平安時代	約 528	古墳時代の住居跡は殆どが後期のものである。
掘立柱建物跡	古 代 ～ 中 世	約 44	B軽石を含むものと含まないものがある。
周 溝 墓	弥 生 時 代	約 2	2基とも方形周溝墓と思われる。
土 坑	縄文時代～近世	約 1430	縄文時代のものが多い。
埋 甕	縄文～弥生時代	約 6	
中 世 古 墓	中 世	1	瀬戸系の四耳壺を伴う。
溝		約 20	中世の大溝を含む。
この他、配石遺構・集石遺構・道路状遺構・井戸・ピット等を含む。			

◎本報告書は、上記のうちB区の縄文時代住居跡10軒、土坑2基、埋甕2基、弥生時代住居跡38軒、土坑3基、埋甕3基を対象としている。

3 ま と め

縄文時代 前期黒浜期から後期堀之内式期にかけての竪穴住居跡、配石遺構、土坑、埋甕等が検出されている。中期末から後期の敷石住居も比較的良好な遺存状態で検出されている。鎭川流域での縄文時代の集落址の調査例は少なく大変貴重な調査例といえる。出土遺物としては、縄文式土器の他に硬玉大珠、独鈷石、石棒等があげられる。

弥生時代 弥生時代の竪穴住居跡は中期4軒、後期181軒が検出されている。後期の住居跡としては県内でも最大規模を誇る大集落であったことが窺える。その他に、方形周溝墓、埋甕、土坑等が検出されている。出土遺物としては、弥生式土器の他に石包丁、磨製石鏃、土製勾玉、扁平片刃石斧等があげられる。

古墳時代～奈良・平安時代 古墳時代には後期を中心に多数の竪穴住居跡が検出されている。奈良・平安に至ってもこの傾向は続き大規模な集落が展開される。掘立柱建物跡も検出されている。

中・近世 箱薬研形の大溝が検出され青磁片が出土している。また、瀬戸系の四耳壺を伴う中世古墓、道路状遺構、掘立柱建物跡等が検出されている。

以上、本遺跡は縄文時代前期から中・近世に至る遺構が複雑に重複して存在する複合遺跡としての性格を持ち、今後当地における地域史研究を進めるうえで大変重要な遺跡であるといえる。

第1章 発掘調査の経過

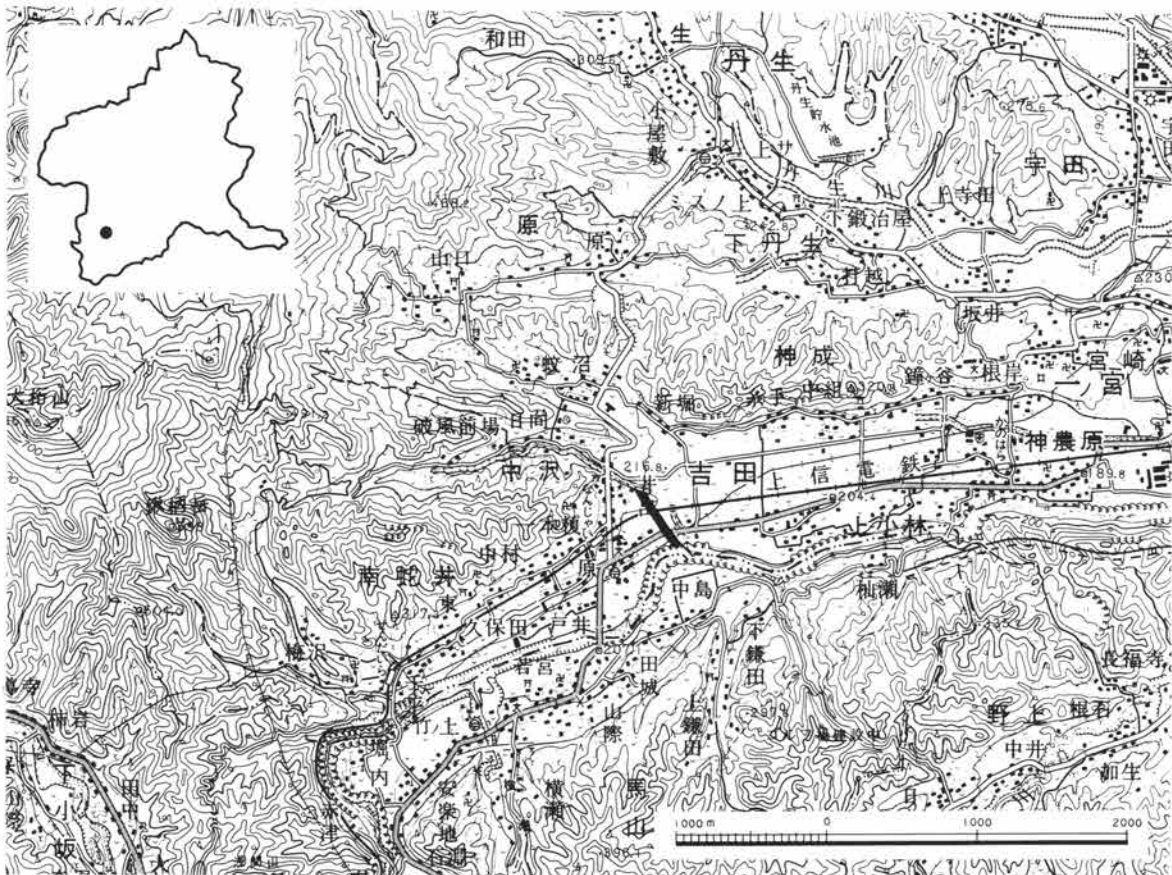
第1節 調査に至る経緯と調査の経過

1 発掘調査に至る経緯

関越自動車道上越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車道国道として、日本道路公団東京第二建設局によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長280km(内練馬～藤岡間は関越自動車道新潟線と併用)である。今回建設される藤岡インター～佐久間は約67kmで群馬県藤岡市(5.6km)、吉井町(6.3km)、甘楽町(4.3km)、富岡市(11.6km)、妙義町(2.5km)、松井田町(19.5km)、下仁田町(5.3km)、長野県佐久市(11.9km)の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町(東部)・松井田町(東部)、同57年松井田町(西部)・下仁田町(西部)・長野県佐久市までの路線が発表された。

関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。
昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけること、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。



第1図 南蛇井増光寺遺跡位置図

第1章 発掘調査の経過

昭和55年度 県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県（企画部交通対策課）より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定して、55遺跡を認定した。（後の試掘により52遺跡に変更）そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ① 発掘調査終了年度を昭和66年度末（平成2年度末）とする。
- ② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③ 事業団の出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併せ行う。
- ④ 機関別対応面積は次のとおりである。

埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 4月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で発足する。以降、6班22人体制（昭62）、9班36人体制（昭63）、12班45人体制（平元）、12班45人体制（平2）。平成2年度までに一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より平行して実施していたが、平成3年度からはほとんど整理作業のみとなり、平成8年度終了予定である。

2 南蛇井増光寺遺跡の調査の経過

南蛇井増光寺遺跡は、鑄川の下位段丘上に位置し、南は鑄川を比高差約30mの段丘崖で臨み、北は中沢川に至る広大な範囲に広がっている。遺跡の名称は、遺跡地の中心部を占める小字名増光寺を用い南蛇井増光寺遺跡とした。中沢川の北側には、東に伸びる舌状台地上に中沢平賀界戸遺跡が続いている。

南蛇井増光寺遺跡の調査実面積は、約29,000㎡にわたり、調査地域ほぼ全面に大変密に遺構の存在が認められた。

昭和62年に入ると、本遺跡の鑄川橋梁部分にかかる埋蔵文化財の先行調査問題が持ちあがり、保護課・事業団・公団との協議の結果、10月より調査が開始されることになった。調査対象地域は、国道254号線から鑄川の段丘崖に至るB区南半部及び側道部4,000㎡であり、昭和63年2月19日をもって終了した。昭和63年度には、その北方へ広がる遺跡地への調査が計画され、昭和63年9月にまず国道以北の全域（南蛇井増光寺遺跡～中沢平賀界戸遺跡）で試掘調査を行った後、国道以北・上信電鉄以南を調査対象地（南蛇井増光寺遺跡C区）として、11月1日から本調査を開始し、平成元年3月31日まで調査を行った。62・63年度二度にわたる調査の結果から当初の予想をはるかに上回る縄文時代前期から平安時代に至る大集落を中心とする遺構群が検出され、他の調査区においても集落の旺盛なる展開が予想された。この結果、平成元年度には、4班体制

で対応することとなり、I班は国道南(B区)、中沢川の南岸(E区)、を調査区とした。II班は国道北側(C区)を主として担当したが、12月から約2カ月間はIII班と合同で上信電鉄南側を調査した。III班は国道から上信線に至る工事用道路と上信線南側(DS区)を主として担当し、平成2年1月～2月にかけて上信線北側(E区)の調査を実施した。IV班は4月～10月にかけて上信線北側(DN区)と上信線から中沢川に至る工事用道路調査を実施した。平成2年度も調査は継続して行われた。I班は、主に中沢平賀界戸遺跡(F～I区)を担当し、10月より一部C区の応援に入ったが、調査は2月末で終了した。II班は4月～5月までIII班と合同でDS区の調査を行った。5月からはC区の調査に戻り、8月末以降はIII班と合同で調査を行い、10月以降一部I班の応援を得て2月末で調査を終了した。III班は4月～1月末までDS区、4月末～9月初までE区、8月末～3月初までC区の調査を行い、3月初に調査を終了した。

南蛇井増光寺遺跡・中沢平賀界戸遺跡の整理は、膨大な資料の蓄積があり、短期間の整理作業では終了できないことから平成3年度より毎年継続して行うこととし、2班体制で開始された。整理事業は調査区毎、時代別に行うことを基本として、最終整理で全体をまとめることとしている。今年度は、B区の縄文、弥生時代住居跡、土坑、埋甕を報告する。なお、国道254号線の北側に位置するB区については、整理の都合上C区の中で取り扱い、調査区の南端に僅かにかかるA区については、すべてB区の中で取り扱うこととする。

3 B区発掘調査の経過

南蛇井増光寺遺跡B区の第1次発掘調査は1988年10月1日より開始された。調査対象は鎗川に架かる橋梁建設工事のための橋脚部分と、その工事用進入路部分、合わせて約4,000㎡である。当初は3カ月という調査期間が設定されたが、遺構の検出数が多く、重複等で調査も困難を極め、1989年2月19日に至り、調査を終了した。第2次調査は1990年4月7日より調査を開始した。調査対象は第1次調査区から国道254号線に至る4,600㎡である。12月8日に全調査を終了した。

調査日誌(抄)

1988年度の調査(第1次調査)

- 10月1日(木) 現場作業の開始、発掘用具の数量確認、桑の根切り作業、重機による表土掘削作業を開始する。遺構確認作業開始。
- 10月7日(水) 杭打ち作業(グリットの設定)を行う。(測研委託)
- 10月13日(火) 遺構の掘り下げ開始。
- 10月14日(水) 遺構概念図作り。
- 10月26日(月) 工事用道路部分遺構確認作業開始。
- 10月27日(火) 道路公団工事長来跡。
- 11月4日(水) 文化財保護課・交通対策課来跡。
- 11月6日(金) 文化財保護課梅沢課長来跡。
- 11月11日(水) 作業員募集のチラシ配る。
- 11月16日(月) 工事道路部分掘り下げ開始。
- 12月16日(水) 工事道路部分トレンチによる遺構確認作業開始。
- 12月22日(火) 吉田小学校5・6年児童見学。(約100名)
- 1月8日(金) 道路公団本部局長視察。
- 1月26日(火) 航空写真撮影準備。
- 1月27日(水) ヘリコプターにより第1次調査区の航空写真撮影を行う。(国際航業委託)

第1章 発掘調査の経過

- 1月28日(木) 栃木埋蔵文化財事業団調査第1課長山口仁氏来跡。
- 2月2日(火) 文化財保護課梅沢課長・近藤係長来跡。
- 2月6日(土) 87号住居跡より扁平片刃石斧・大型蛤刃石斧出土。
- 2月12日(金) 全体図作成。(測研委託)
- 2月19日(金) 最終チェックを行い第1次調査区調査を終了する。竪穴住居跡92軒、土坑5基、埋甕3基を検出した。
- 1990年度の調査(第2次調査)
- 4月6日(木) 南蛇井増光寺遺跡担当者会議。現場作業員の班編成、10日より重機による表土掘削を開始する。発掘作業準備。
- 4月13日(木) 発掘調査を開始する。遺構確認作業を開始する。
- 4月19日(水) 遺構掘り下げ作業開始。
- 4月25日(火) 全体概念図作り。下仁田町・南牧村教育委員会に作業員募集のビラの配布を依頼に行く。
- 4月27日(木) 重機による表土掘削終了する。
- 5月16日(火) 工程会議。
- 5月18日(木) 調査区南部の遺構確認作業。
- 6月12日(月) 重機による排土運搬を開始する。
- 6月21日(水) 県議会議員文教部会来跡。
- 6月30日(金) 重機による排土運搬終了する。
- 7月5日(水) 調査区の南半部分の表土掘削及び遺構確認作業を開始する。B区北半空撮準備。
- 7月6日(木) 調査区北半部分のバルーンによる空撮を行う。(青高館委託)
- 7月7日(金) 調査区の南半部分、方眼杭打ち測量(測研委託)
- 7月10日(月) 調査区北半部分西側の標準土層作成。
- 7月19日(水) 梅雨明け宣言。ハイライザーによる写真撮影。
- 7月31日(日) 29日、30日の豪雨により土山が崩壊、国道に一部流失、人力と重機により復旧作業を行う。
- 8月28日(月) 昨日の台風17号のため住居水没。水のくみ出し作業を行う。
- 9月14日(木) 現地説明会の打ち合わせを行う。
- 10月12日(木) 青山学院大学吉田章一朗教授来跡。
- 10月17日(火) 空撮準備。
- 10月18日(水) セスナにより南蛇井増光寺遺跡全体の空撮を行う。(シン航空写真委託)
- 10月21日(土) 4班合同で南蛇井増光寺遺跡の現地説明会を行う。
- 10月22日(日) 現地説明会第2日目、2日間で904人の見学者があった。
- 10月25日(水) 全体図作成。(測研委託)
- 11月9日(木) 調査区西半分埋めもどしを開始する。
- 11月13日(月) 新潟大学甘粕健教授来跡。
- 12月6日(水) 古環境研究所杉山氏来跡。
- 12月18日(金) B区の全調査を終了する。竪穴住居跡85軒、埋甕2基、掘立柱建物跡8棟、土坑18基を検出することができた。

4 整理作業

南蛇井増光寺遺跡の整理作業は発掘調査時の区ごとに行うことを基本とした。B区の整理作業は平成3年度から5年度にかけて3カ年で実施される。本報告書は平成3年4月から実施されたB区「縄文・弥生時代編」である。以後引き続いて古墳時代以降の整理作業が行われる。



遺跡現況 下仁田町下鎌田より遺跡地を望む(平成4年7月)



整理作業状況

第2節 調査の方法

1 遺跡名の選定

遺跡名称は発掘調査当初は事業名称の「井出遺跡」をそのまま使用していた。その後、昭和63年8月に遺跡名が検討され、埋蔵文化財調査事業団担当遺跡については、原則として大字小字の連記を遺跡名とすることが決定した。「井出遺跡」は、遺跡地を東西に流れる中沢川を境に、中沢川以南のB・C・DS・DN・E区は遺跡地の中心を占める小字名増光寺を用いて『南蛇井増光寺遺跡』に、中沢川以北のF・G・H・I区を小字名中沢平賀界戸を用いて『中沢平賀界戸遺跡』に変更した。『南蛇井増光寺遺跡』には、大字中沢地内も含まれるが、同じ台地上に位置することや遺跡の性格等を考慮し、同一の遺跡名とすることが決定した。

2 調査方法

南蛇井増光寺遺跡および中沢平賀界戸遺跡の発掘調査区は南北に細長く続き、富岡市南蛇井から富岡市中沢にかけての約800mの間におよんでいる。建設工事用測量杭のSTANa272~280がほぼ両遺跡の調査範囲に該当する。この路線に5m四方のメッシュをかぶせられるように調査原点を設けた。(国家座標 X=26500、Y=-90900が原点。グリッドは南東コーナーの杭をもって呼称した。)グリッドの設定水準点の移動は、(株)測研が実施した。また、大文字で標記した100m毎の大グリッドを南からA、B、C、DS、DN、E、F、H、I区として発掘調査時の調査区名称とした。

発掘調査は昭和63年度から平成2年度にかけて行われた。なお、C区以北については、63年度に試掘調査を実施した後、本格的調査が実施された。遺構の調査は前記の調査区毎に実施され、遺構番号も原則として各区毎に設定し、“B区1号住居跡・B区1号土坑”等と表示した。遺構の調査は平面プランを確認し、土層観察用の十字状のセクションベルトを残して掘り下げるといった方法で行った。調査記録は実測図・遺構写真として残した。遺構平面図は20分の1で作成することを基本とし、住居跡のカマド、炉、詳細な遺物出土状況等は10分の1で作成した。遺物は原則として出土位置、高さを記録して取り上げることとしたが、出土位置が不明になったもの、耕作溝等の新しい遺構に伴うものについては一括して取り上げた。遺構写真撮影は、白黒写真は6×7と35mmフィルムを使用し、カラーリバーサルは35mmを使用することを原則とした。遺跡航空写真は、第1次調査では、国際航業(株)に委託しヘリコプターで撮影した。第2次調査では(有)青高館とシン航空写真(株)に委託し、セスナとバルーンで撮影した。



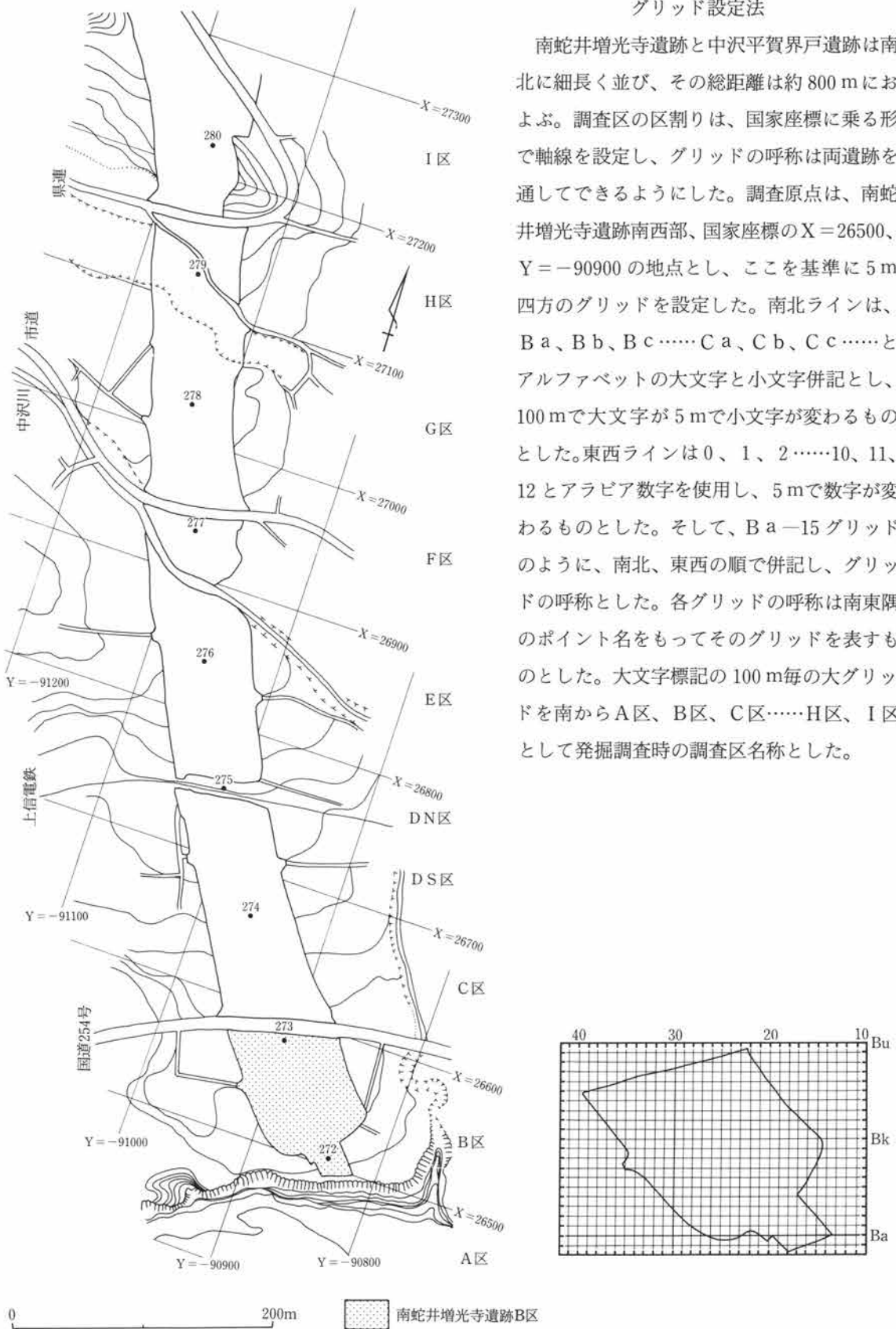
下仁田町下鎌田より遺跡を望む



遺跡地近景 近景第1次調査(東より)

グリッド設定法

南蛇井増光寺遺跡と中沢平賀界戸遺跡は南北に細長く並び、その総距離は約 800 m におよぶ。調査区の区割りは、国家座標に乗る形で軸線を設定し、グリッドの呼称は両遺跡を通してできるようにした。調査原点は、南蛇井増光寺遺跡南西部、国家座標の X = 26500、Y = -90900 の地点とし、ここを基準に 5 m 四方のグリッドを設定した。南北ラインは、B a、B b、B c……C a、C b、C c……とアルファベットの太文字と小文字併記とし、100 m で太文字が 5 m で小文字が変わるものとした。東西ラインは 0、1、2……10、11、12 とアラビア数字を使用し、5 m で数字が変わるものとした。そして、B a -15 グリッドのように、南北、東西の順で併記し、グリッドの呼称とした。各グリッドの呼称は南東隅のポイント名をもってそのグリッドを表すものとした。大文字標記の 100 m 毎の大グリッドを南から A 区、B 区、C 区……H 区、I 区として発掘調査時の調査区名称とした。



第2図 南蛇井増光寺遺跡調査区及びグリッド配置図

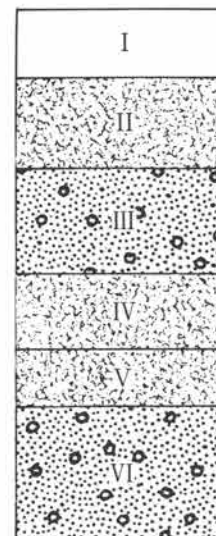
第3節 基本土層

南蛇井増光寺遺跡B区は、鑄川左岸の下位段丘上に位置している。調査区内の地形は比較的平坦であるが、北から南に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の南端は鑄川と接し、比高差 30 mの段丘崖となっている。遺跡は北西から流れ下る中沢川が谷あいから押し出した礫を多量に含む堆積土の上に広がっている。B区の基本土層は表土層（耕作土）、粘質褐色土、黒褐色砂礫層、茶褐色土、暗黄褐色粘質土、黄褐色粘質土、礫層となる。表土の耕作土の堆積は薄く、これを除去すると褐色の粘質土が現れる。しかし、地点により地形形成過程の微妙な違いを見せており、北西部分の一部では褐色粘質土の堆積がほとんど認められず、砂礫層が厚く堆積し、遺構確認面においても広い範囲で観察できる。遺跡の東側では褐色粘質土の層が比較的厚く堆積し、広範囲に広がっている。

本遺跡の基本土層は以下に示すとおりである。

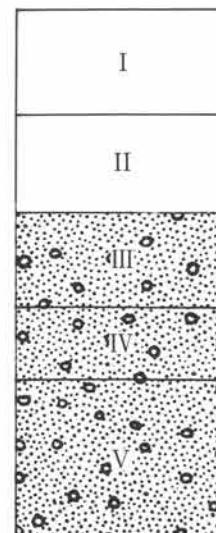
B区南東部（第1次調査）

- 第I層 茶褐色土 小砂利を多量に含む耕作土。しまり弱い。厚さは10～30 cmほどである。
- 第II層 褐色土 粘質土。厚さは30 cmほどである。
- 第III層 黒褐色土 こぶし大の礫を含む砂礫層。厚さは10～70 cmほどである。
- 第IV層 暗黄褐色の粘質土。厚さは5～30 cmほどである。
- 第V層 黄褐色の粘質土。厚さは10～20 cmほどである。
- 第VI層 褐色土 おおぶらな礫を含む。



B区北半部（第2次調査）

- 第I層 茶褐色土 耕作土、厚さは30～40 cmである。
- 第II層 黒褐色土 小砂利を含み、比較的パサパサしている。厚さは20～40 cmである。
- 第III層 黒褐色土 こぶし大の礫を含む。厚さは20～40 cmである。
- 第IV層 黒褐色土 こぶし大～人頭大の円礫を含む。厚さは10～30 cmである。
- 第V層 黄褐色土 こぶし大～人頭大の円礫を含む砂礫層。



第3図 南蛇井増光寺遺跡基本土層図

第2章 地理的環境及び歴史的環境

第1節 地理的環境

南蛇井増光寺遺跡が所在する富岡市は、群馬県の南西部に位置している。東西およそ16km、南北およそ14km、その面積は93.63km²である。西方は甘楽郡下仁田町と接し、内山峠を経て長野県佐久市に至る。県境の山々から発した流れは鑓川となり、富岡市のほぼ中央を西から東に流れている。この鑓川流域一帯は、遺跡の分布密度も高く、古くからの交通の要地であったと考えられる。

「かぶらの谷」と呼ばれる鑓川流域には、下仁田町馬山から藤岡市上落合まで上下二段の河岸段丘がよく発達している。下位段丘は両岸に発達するが、上位段丘は南岸において顕著な発達を見せる。これは、地殻の傾動運動による鑓川南岸の相対的な隆起に起因し、徐々に鑓川が北に移動しつつ起こされた浸食作用の結果形成されていったものと考えられている。北岸の上位段丘は西中学校、貫前神社等がある高台で、標高は210～240m、下位段丘との比高差は30～40mある。下高瀬の光厳寺の南から内匠、岡本にかけての平坦面も上位段丘である。標高は200～240mで、南から北へ緩やかに傾斜している。下位段丘との比高差は40～50mである。上位段丘が形成されたのは数万年前から十数万年前の洪積世末期とされ、その後浅間火山による上部ローム層が上位段丘面に堆積するころには、下位段丘面を鑓川が流れていたと考えられる。従って、下位段丘面にはロームの堆積は見られない。下位段丘は、南蛇井、神農原、七日市、富岡、高瀬、田篠、星田など鑓川に沿った地域に広がっている。国道254号線・上信電鉄などの主要交通路が通り、甘楽・富岡の人々の生活の主な舞台となっている。下位段丘面の標高は西部の千平で230m、東部の星田で130m程あり、緩やかに傾斜した連続した平坦面を形成している。下位段丘面の南北方向の幅は南蛇井付近で600mであるが、上高瀬・一の宮で急に広がり約3,000mとなる。さらに東方では2,500m前後の下位段丘面が続いている。この下位段丘面を削り込んで鑓川が流れているが、南蛇井から上高瀬までは下位面の南端を、七日市、富岡ではほぼ中央を流れるようになり、東部の星田から下流までは、北端に近い流路を通るようになる。

南蛇井増光寺遺跡は、富岡市南蛇井字血の池から増光寺を経て、富岡市中沢にかけての地内に所在する。ここは、富岡市南西の地域で、西方は甘楽郡下仁田町と接している。この地域はかつては、甘楽郡吉田村の一部であったが昭和30年に富岡市に編入されて現在に至っている。また、南蛇井を那射郷比定の地とする説もあり、南蛇井駅東の上信電鉄沿線には土器の散布が多く、以前から大集落の存在が推定されていた。

調査地域は南端で鑓川と接し、北端を中沢川とする南北約400mの地域である。この中沢川を境に、南を南蛇井増光寺遺跡、北を中沢平賀界戸遺跡とした。遺跡の南端より約100m程の所を遺跡を貫く形で国道254号線が東西に伸びており、更にその北側には国道に平行して私鉄上信電鉄が走っている。南方には、鑓川を隔てた丘陵上に縄文時代中期の大集落下鎌田遺跡が、さらにその後方には古くからの信仰の山稲含山が遠望できる。西方には、南蛇井古墳群の分布を見、妙義山塊から続く大桁山系の山々が迫っている。東方約1kmには宇芸神社の地が近接し、さらには上小林古墳群の分布を見ることができる。

当地は地形的には、鑓川沿岸に発達する河岸段丘の下位段丘に相当する河谷平野に立地し、北西から鑓川にそそぐ小支流中沢川との合流点に程近い段丘上に位置している。遺跡地の標高は210～219mあり、遺跡の南端は鑓川と接し、比高差約30mの段丘崖を形成している。北端には、中沢川が東西方向に流れ、東に伸びる段丘面との境をなしている。現在は畑地として利用され、下仁田ねぎ、こんにゃく等が栽培されている。

第2節 歴史的環境

「甘楽の谷」は三方を山に囲まれ、東側が関東平野に向かって開かれている。そして、鑄川がこれらの山系の水を集めて、東流している。この鑄川の浸食によってできた下位段丘、上位段丘が現在もこの地域の人々の生活の場となっており、遺跡の分布もこの地形に大きく影響を受けている。

縄文時代から弥生時代の遺跡の分布状況を見ると、上位段丘の台地上に多くの遺跡が見られるが、そのほとんどは分布調査が主で、発掘調査を実施した遺跡は少なかった。しかし、昭和61年に開始された関越自動車道上越線建設に伴う埋蔵文化財の調査によって、多くの遺跡が発掘調査され、この地域の実態が明らかになってきた。

縄文時代前期では本遺跡で黒浜期、下高瀬寺山、中高瀬観音山遺跡で諸磯b式期の住居跡が検出されている。中期は田篠中原遺跡の環状列石、配石群が特異な遺跡として注目される。また、本遺跡対岸の下仁田インターチェンジで調査された下鎌田遺跡は中期の大集落として特筆される。この遺跡では、信州系の土器が多く出土しており、この地域の特性が浮かび上がってくる重要な遺跡といえよう。本遺跡でも下鎌田遺跡と同様の土器が出土しており、この傾向がこの地域では特殊でないことを示している。後期になると遺構量が減ってくる傾向が見られるが、富岡インターチェンジ付近や本遺跡で住居跡が検出されている。縄文時代を通してみると、概して前・中期の遺構が多く、これに後期が続いている。早・晩期の遺構はほとんど発見されていない。

弥生時代の遺跡は縄文時代遺跡と比べると低地に移る傾向がみられ、上位段丘から下位段丘に移るような場所に数多く検出されている。多くは後期の遺跡で、中期の発見例は少ない。中期の遺構としては、本遺跡で竪穴住居跡4軒、小塚遺跡で7軒の竪穴住居跡と環濠と思われる溝が検出されているに過ぎない。後期になると、遺構量は増加し内匠上之宿、内匠日影周地、下高瀬寺山、中高瀬庚申山遺跡で小集落が発見されているが、中高瀬観音山遺跡では103軒、本遺跡では181軒に及ぶ大集落も出現している。しかし、この時期の食糧源となっている水田址はこの地域では確認されていない。だが、本遺跡では県内ではまだ数点しか発見例のない収穫具である石包丁が出土しており、付近に水田が存在したことを裏付ける発見となった。

古墳時代の遺跡は主に下位段丘面に展開するが、上位段丘、丘陵面に存在する。この地域の最も古い古墳は北山茶白山古墳、北山茶白山西古墳で上位段丘の単独丘陵頂上部にあって、山を削出して、墳丘を造成している。この2つの古墳はこの地域を最初に統一した首長の墳墓と考えられている。鑄川兩岸の下位段丘面に展開する群集墳はほとんどが平坦地に分布しているので、古墳のない他の部分は住居域、生産域としての領域が考えられようか。一部この平地の周辺の丘陵地にも後期古墳の分布がみられる。「本宿・郷土遺跡」では豪族の居館址と考えられる遺構や、多くの竪穴住居跡の調査がなされている。その南東には一ノ宮古墳群が展開し、その当時の生活を彷彿とさせるものがある。田篠古墳群と原田篠遺跡もしかりである。こういった調査がなされて行く中で、それぞれの遺跡同士の関連づけが進み、さらにその当時の生活実態が明らかになってくる。したがって、本遺跡も南蛇井古墳群との関連づけは必要な作業となろう。

その他、関越自動車道上越線関係の遺跡でも、多くの古墳時代の遺跡が発見されている。特に富岡市の南の通称「離れ山丘陵」に位置する下高瀬上之原遺跡では、埴輪窯2基が検出され、この地域で最初の発見例として注目を集めた。

奈良・平安時代の集落は古墳時代後期の集落から継続して営まれていることが多い。しかし、実際には、古墳時代の集落よりは軒数は減る傾向がみられる。古墳時代の集落と同様に下位段丘面を中心とした集落の

発達と考えられるが、生産址である水田址の発見例はまだ少ない。田篠上平遺跡、中沢平賀界戸遺跡で1000㎡以下の浅間B軽石下水田が発見されている。ともに川に沿った小規模な谷地水田であり、多くの人々の糧となるには心もとない。しかし、鑓川右岸にある通称「高瀬たんぼ」は下位段丘面の広い低地に立地し、条里制の区割を残すと考えられる畦畔、道路が存在し、一部発掘調査により、現用水路下から、浅間B軽石の堆積する水路が確認されているため、条里制水田があった可能性が考えられる。

甘楽郡（現在の富岡市・甘楽郡）は倭名抄によれば以下の13郷である。

貫前奴木乃佐、酒甘、丹生、那非、端下、宗伎、端上、有只、那射、額部奴加倍、新屋爾比也、小野平乃、拔針（古活字本）

これらの郷名を富岡市史では下図のように比定している。



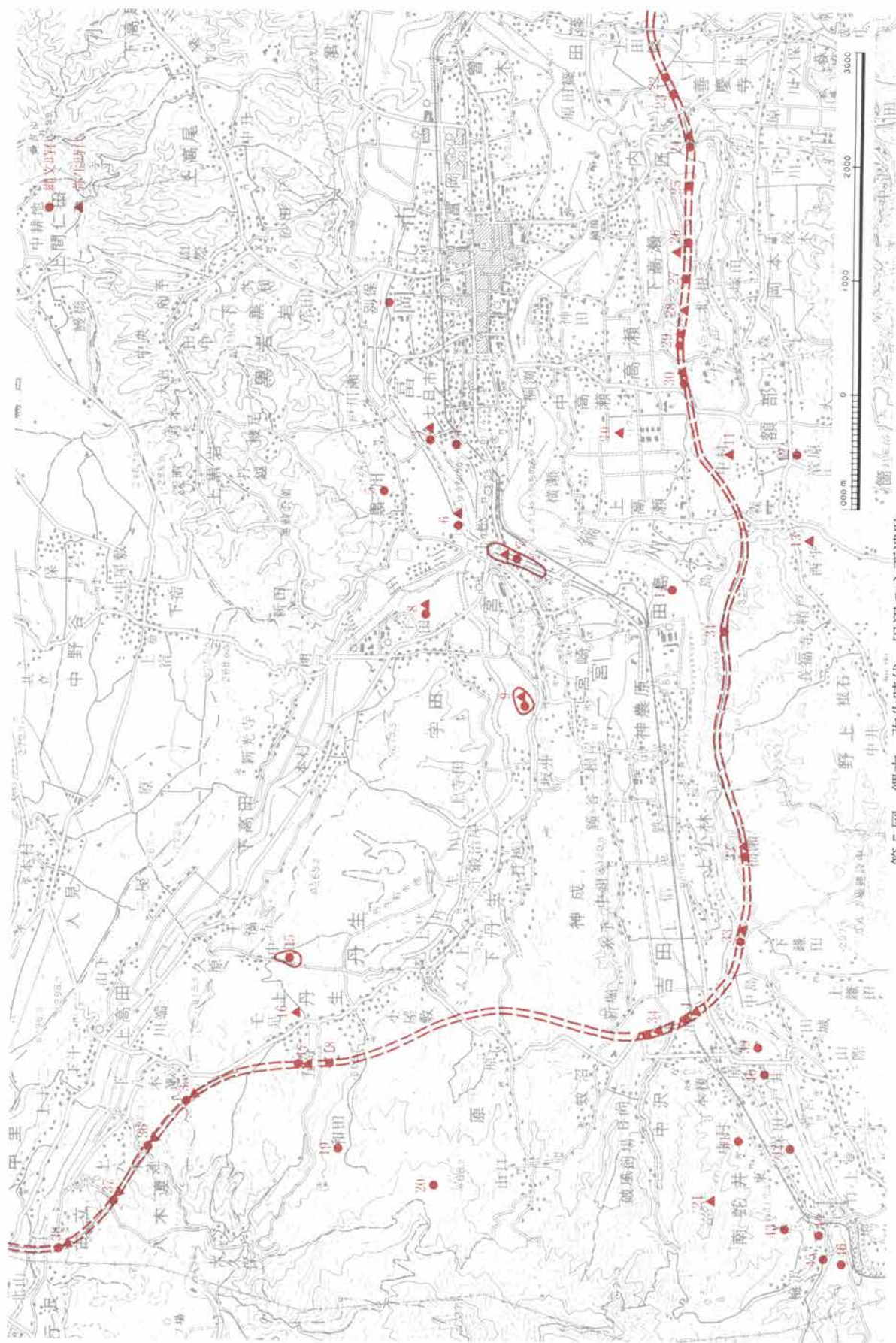
第4図 甘楽郡郡郷配置図（富岡市史より）

これによれば、本遺跡の位置する郷は「那射郷」にあたる。この地には貫前神社に次ぐ宇芸神社（式内社）が鎮座している。南蛇井地区には南西神社という神社も存在していることから南蛇井は那射から語源を発していると思われる。

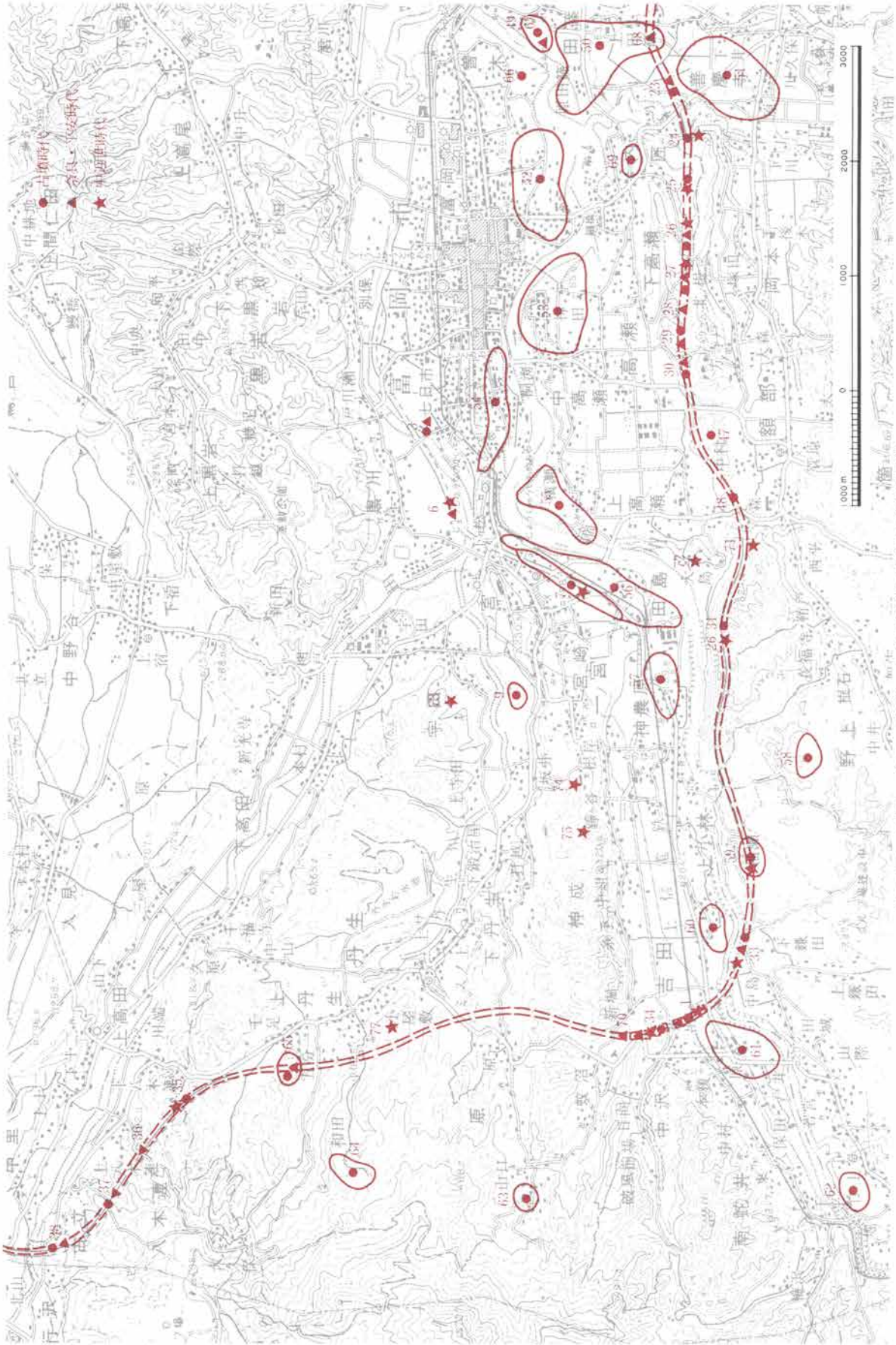
中近世の遺構はほとんどが城郭と墓墳である。富岡の平坦部を取り囲む峰々にはほとんど小城が築かれている。発掘調査例は少ないが、宮崎城で二の丸の大部分と本丸東半分の調査が行われ、本丸堀と柱穴6基が検出されている。宇田城では西城が発掘され、西面に犬走りが検出された。

関越自動車道上越線の調査では、内匠城の外堀、土塁が調査された。その西の大島土城ではテラス・柱穴列等が調査されている。内匠諏訪前遺跡では江戸時代の屋敷跡、それに伴う井戸跡等が検出されている。

本遺跡内でも大溝、墓墳が検出され、その北側の中沢平賀界戸遺跡でも竪穴状遺構、塚等が調査されている。これらの中世の発掘調査例の増加に伴い、少しずつではあるがこの地域の実態が明らかになりつつある。



第5図 縄文、弥生時代 周辺の主要遺跡



第6図 古墳、奈良・平安、中近世時代周辺的主要遺跡

第2章 地理的環境及び歴史的環境

第1表 周辺主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
1	南蛇井増光寺遺跡	富岡市南蛇井	昭62～平成2年度	縄文時代前期～平安時代の集落を中心とする複合遺跡である。検出された竪穴住居跡は約785軒を数えることができる。縄文時代前期～後期（敷石住居を含む）72軒。弥生時代中期4軒、後期181軒。古墳時代～平安時代は約528軒が検出されている。その他に縄文時代を中心とする土坑多数。方形周溝墓、箱葉研形の中世大溝等が検出されている。今回報告分はB区で検出された縄文時代前期9軒、中期1軒、弥生時代中期4軒、後期34軒である。	本書所収
2	小沢西遺跡	富岡市七日市字小沢西	昭62年度	高田川にかかる小沢橋から上流へ南西約400mの右岸。標高165.5m。縄文時代竪穴住居跡3軒、土坑71基。	篠原幹夫編「小沢西遺跡」1989年富岡市教育委員会
3	観音前遺跡	富岡市七日市観音前	昭63年度 平成元年度	七日市駅北側に位置。縄文時代中期後半の土器が散布。昭63・平成元年度の調査で弥生・古墳～平安時代の住居跡、土坑、溝等を検出。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市 年報8・9 埋文事業団
4	七日市遺跡	富岡市七日市		観音前遺跡の南西約100mの位置。縄文時代中期の竪穴住居跡が検出されている。	
5	辻平遺跡	富岡市黒川字辻平		小塚遺跡の北東500m。上位段丘上に立地している。標高188m。縄文土器片散布。	
6	小塚遺跡	富岡市黒川字小塚	昭59年度	高田川の左岸下位段丘上に立地する集落遺跡。縄文前期の住居跡2軒。中期の住居跡1軒。弥生中期後半の住居跡7軒、土壇12基、溝3条。平安～中世の遺構も検出されている。	井上太編「小塚・六反田・久保田遺跡」1987年富岡市教育委員会
7	本宿・郷土遺跡	富岡市一之宮	昭53・54年度	国道254号一ノ宮バイパスの周辺。古墳時代の豪族居館跡、竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡2棟、堀跡3条の他、縄文・弥生の住居跡、中世建物等を検出。	井上太編「本宿・郷土遺跡」1981年 富岡市教育委員会
8	阿曾岡遺跡	富岡市宇田		高田川と丹生川に挟まれた残丘上の南向緩斜面に位置する。縄文・弥生土器片散布。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
9	押出遺跡	富岡市一ノ宮	昭63年度 平成元年度	一ノ宮から丹生へ行く県道と丹生川右岸の間に位置している。工業団地造成工事に伴い調査。古墳時代の竪穴住居跡20軒の他、縄文・弥生時代の竪穴住居跡も検出されている。	富岡市教育委員会調査
10	中高瀬遺跡	富岡市中高瀬	昭52年度	鑄川右岸の下位段丘面。弥生土器片散布。石鏃出土。1977年富岡市教育委員会調査。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
11	中村遺跡	富岡市南後箇字中村		浅香入川上流域左岸に立地。弥生後期の壺が採集されている。	//
12	菅原遺跡	富岡市南後箇字菅原		縄文時代前期・後期の土器片散布。古墳時代初頭石田川式の台付甕出土。	//
13	西平原遺跡	富岡市野上		野上川と岩染川の合流点、北東に突き出た丘陵の先端。弥生後期初頭の壺・甕、県立博物館蔵。	//
14	神農原遺跡	富岡市神農原		鑄川左岸段丘上に立地。縄文土器片散布。	「群馬県遺跡台帳II」1972年 群馬県教育委員会
15	中山遺跡	富岡市上丹生		丹生川右岸。磨製石斧出土。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
16	松原遺跡	富岡市上丹生字松原		丹生川と支流の合流点、南東向きの段丘先端部。弥生後期土器片散布。	//
17	千足遺跡	富岡市上丹生		丹生川右岸の段丘上。縄文中期土器片、弥生後期土器片散布。	//
18	五分一遺跡	富岡市上丹生	昭63年度	縄文土器片のみ採集。遺構なし。	富岡市教育委員会
19	和田遺跡	富岡市上丹生		縄文前～中期の土器片散布。	
20	下丹生山口遺跡	富岡市山口		大桁山の山麓に発達した傾斜地。遺物の散布。	「群馬県遺跡台帳II」
21	三笠山岩陰遺跡	富岡市南蛇井	昭42年度	破風山塊中、三笠山中腹、北東に面する岩壁小テラス上に位置する。弥生時代後期の杯3点、台付鉢1点、石鏃、焼骨とみられる数百点の骨片が出土している。県立博物館蔵。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市

第2節 歴史的環境

No	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
22	田篠中原遺跡	富岡市田篠	昭61・62年度	縄文時代中期末の環状列石1カ所、立石1基、敷石住居跡11軒、竪穴住居跡2軒、配石遺構36基、屋外埋設土器12基、配石墓・土墳墓22基、その他を検出。	「田篠中原遺跡」1990年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
23	善慶寺早道場遺跡	甘楽町善慶寺	昭63～平成元年度	田篠中原遺跡の西に隣接。竪穴住居跡36軒（古墳後期～平安）、古墳後期の古墳1基。縄文時代の遺構は土坑2基と包含層が検出されている。	「年報」9 1990年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
24	内匠上之宿遺跡	富岡市内匠	昭62年度	簗川右岸の上位段丘面。通称「離れ山丘陵」の東端に位置する。標高213～221m。竪穴住居跡22軒（縄文後期4、弥生後期4、古墳後期14）中世城郭（内匠城外堀2・土塁1）、その他。	「年報」7 1988年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
25	内匠諏訪前遺跡	富岡市内匠	昭63年度	内匠上之宿遺跡と谷地を隔てて西側に位置する。竪穴住居跡10軒（縄文前期2、古墳後期8）、近世の屋敷跡等を検出。	「年報」8 1989年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
26	内匠日影周地・内匠日向周地遺跡	富岡市内匠	昭63～平成元年度	縄文・弥生・古墳時代等の竪穴住居跡31軒、古墳2基、水田3面（平安・中世・近世）等を検出。B下水田下の旧河床面より古代呪符木簡出土。	「年報」9・10 1990・1991年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
27	下高瀬上之原遺跡	富岡市下高瀬	昭63～平成元年度	滑石製品の加工を行った古墳後期～平安時代の集落及び水場が展開。埴輪窯、近世墓等も検出。縄文時代の竪穴住居跡1軒。	〃
28	寺山遺跡	富岡市岡本字寺山	平成元年度	小範囲の舌状台地に縄文前期の小集落が展開。住居跡9軒、土坑41基、集石遺構5基等を検出。その他に住居跡3軒（弥生1、奈良・平安2）。	「年報」9 1990年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
29	中高瀬観音山遺跡	富岡市中高瀬字観音山	平成元年度	比高差60mの丘陵上に展開する弥生後期の大集落である。竪穴住居跡103軒、土坑13基、掘立柱建物跡10棟検出。その他の時代は住居跡15軒（縄文3、古墳9、奈良3）が検出されている。	〃
30	中高瀬庚申山遺跡	富岡市中高瀬	平成元年度	中高瀬観音山遺跡の南西に位置。住居跡16軒（縄文後期3、弥生後期7、古墳～平安6）を検出。	〃
31	野上塩之入遺跡	富岡市野上	昭62・63年度	竪穴住居跡7軒（縄文前期1・中期2、奈良・平安4）を検出。	「野上塩之入遺跡」1991年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
32	杣瀬遺跡	下仁田町馬山	昭62・63年度	縄文時代の住居跡・土墳、弥生時代土墳・集石、古墳、中世城郭検出。下仁田町遺跡調査会調査。	「年報」8 1989年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
33	下鎌田遺跡	下仁田町馬山	平成元～2年度	下仁田インターチェンジ地点。台地端部に形成された縄文中期の馬蹄形の大集落。住居跡220軒、土坑1,682基、集石16基、埋甕70基を検出。その他に弥生時代住居跡4軒、古墳11基（内1基は方形周溝墓）、平安時代の住居跡5軒、土坑4基、中世城郭跡等を検出。下仁田町遺跡調査会調査。	下鎌田遺跡現地説明会資料
34	中沢平賀界戸遺跡	富岡市中沢	平成元～2年度	中沢川を境に南蛇井増光寺遺跡の北隣に位置。竪穴住居跡154軒（縄文中期1、弥生後期15、古墳～平安138軒）を検出。他に縄文の埋甕2基、中世墳墓1基、近世墓墳8基を検出。平賀城跡。	「年報」10 1991年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
35	八木連荒畑遺跡	妙義町八木連荒畑	昭62年度	八木連理沢遺跡と丘陵部を挟んで南東約500mに位置する。縄文前期住居跡3軒、土坑18基、弥生中期～後期の住居跡11軒を検出。その他に古墳～平安時代の住居跡18軒、寺院址と思われる礎石建物跡3棟等を検出。	「八木連荒畑遺跡」1990年 妙義町遺跡調査会
36	八木連理沢遺跡	妙義町八木連理沢	昭62年度	古立中村遺跡の東南東約500m、高田川の南段丘上に位置する。縄文土器片数点出土。弥生後期住居跡11軒、奈良～平安時代の住居跡21軒を検出。	「八木連理沢遺跡」1990年 妙義町遺跡調査会
37	古立中村遺跡	妙義町古立中村	昭62年度	古立東山遺跡と谷を隔てて約400mに位置する。縄文前期～中期の住居跡4軒、土坑38基。弥生時代の住居跡12軒、土坑25基、溝4条、方形周溝墓1基を検出。その他に古墳時代住居跡17軒、奈良～平安時代の住居跡6軒を検出。	「古立中村遺跡」1990年 妙義町遺跡調査会
38	古立東山遺跡	妙義町古立東山	昭62～63年度	高田川に臨む小さな舌状台地に立地。縄文時代住居跡2軒、土坑11基、弥生後期住居跡15軒、古墳時代住居跡18軒、奈良～平安40軒を検出。	「古立東山遺跡」1990年 妙義町遺跡調査会
39		富岡市南蛇井		簗川左岸段丘上。縄文前期土器片散布。	「群馬県遺跡台帳II」1972年
40		〃		簗川左岸段丘上。縄文前期土器片散布。	〃

第2章 地理的環境及び歴史的環境

No	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
41		〃		鍋川左岸段丘上北方。縄文土器片・石器片散布。	〃
42		〃		鍋川左岸段丘上北方。南西神社の南。縄文土器片散布。	〃
43		〃		鍋川左岸段丘上北方。上信電鉄の北100m。縄文土器片散布。	〃
44		〃		鍋川左岸、梅沢川右岸の丘陵上にのびる舌状台地上。縄文土器片、石器片、黒曜石片の散布。	〃
45		〃		鍋川左岸。小倉川、梅沢川に挟まれた舌状台地。縄文土器片、石器片、黒曜石片多量に散布。	〃
46		〃		鍋川左岸、梅沢川左岸の台地傾斜部。縄文土器片散布。	〃
47	北山茶臼山西古墳	富岡市南後箇	明27年度 昭35年度	鍋川右岸。上位段丘の頂上に立地する。富岡の全域を展望できる。盛土はわずかで、山地形を削り整形している。底部穿孔壺型土器、神人竜虎画像鏡、石剣、勾玉出土。4C後半築造。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
48	北山茶臼山西古墳	富岡市南後箇	昭61年度	北山茶臼山西古墳の西約500mに位置する。前方後円墳。木棺直葬の主体部。方形規矩鏡、変形四獣鏡、鉄矛、鉄斧、刀子等出土。前出の北山茶臼山西古墳よりも古い時期の古墳。	「大島上城・北山茶臼山西古墳」1988年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
49	原田篠古墳群	富岡市田篠		原田篠遺跡に隣接しており、7基確認できる。6C～7C築造。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
50	上田篠古墳群	富岡市田篠	昭57・61年度	鍋川右岸の下位段丘面。雄川左岸の平坦面に位置する。古墳後期の群集墳。現在30数基存在している。富岡市教育委員会が5基調査し、関越自動車道上越線地内で3基調査している。	「上田篠古墳群・原田篠遺跡」1984年 富岡市教育委員会 「田篠上平遺跡」1988年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
51	善慶寺古墳群	甘楽町善慶寺		上田篠古墳群の南西に位置する。古墳後期の群集墳。かつては50基以上が存在していたが、構造改善により破壊。現在約20基残っている。	
52	芝宮古墳群	富岡市富岡	昭58年度 平成2年度	鍋川流域で最大の古墳群。100基以上の円墳からなる。すべて横穴式石室をもつ。6C～7Cの築造が考えられる。約半数は削平されている。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
53	桐瀬古墳群	富岡市高瀬	昭45～46年度	鍋川右岸下位段丘上に位置する。団地造成に伴う調査で17基が調査された。現在は22基が残っている。6C～7Cの築造が考えられる。	〃
54	七日市古墳群	富岡市七日市	昭29年度 昭43年度	鍋川左岸下位段丘上に位置する。26基が確認されている。後三社古墳のみが前方後円墳で他は円墳である。6C～7Cの築造が考えられる。	〃 「富岡5号墳」1972年 群馬県立博物館
55	横瀬古墳群	富岡市上高瀬横瀬	昭62・63年度	鍋川が大きく蛇行する右岸の舌状台地に占地。16基が調査されたが、そのほとんどは終末期の古墳である。西方に未調査4基が残っている。7C後半～8C築造。	「横瀬古墳群」1990年 富岡市教育委員会
56	一ノ宮古墳群	富岡市一ノ宮		鍋川がこのあたりで蛇行し、北流する。17基のうち前方後円墳が2基あり、当時の集落・居館址の本宿・郷土遺跡との関連が考えられる。他の円墳も大型のものが多い。6C～7C築造。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
57	神農原古墳群	富岡市神農原		鍋川左岸の下位段丘面に位置する。胴塚を中心として、鍋川縁辺部に古墳が分布していたようであるが、現在は集落の中では確認できない。	「群馬県遺跡台帳II」
58	中山古墳群	富岡市野上		野上の長福寺北の丘陵地に数基の古墳が分布している。	
59	杣瀬古墳群	下仁田町馬山		鍋川右岸の上位段丘上に小円墳が数基分布している。	
60	上小林古墳群	富岡市上小林		国道254号の南、鍋川左岸段丘上の縁辺部。2基存在する。上毛古墳総覧では5基となっている。	「群馬県遺跡台帳II」
61	南蛇井古墳群	富岡市南蛇井		国道254号で下仁田町に入る直前の国道周辺部に占地する。鍋川の下位段丘面。現在は52基が確認できる。本遺跡との関連が窺える。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」1987年富岡市
62	竹ノ上古墳群	下仁田町馬山		鍋川流域の最も西に位置する古墳群である。鍋川右岸の国道254号と鍋川の間にある。現在7基の古墳が確認できる。7Cの築造である。	

第2節 歴史的環境

No.	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
63	山口古墳群	富岡市原		大桁山の東側、和田古墳群の南約1500mの丘陵地に分布している。現在5基確認できる。	「群馬県遺跡台帳II」
64	和田古墳群	富岡市上丹生		大桁山の北東、上丹生の金乗寺の西方。標高330mの丘陵地に分布。現在7基確認できる。	
65	千足古墳群	富岡市上丹生		上丹生の岡部温故館の北西の丘陵上に位置。数基の古墳が存在する。	
66	久保遺跡	富岡市曾木字久保	昭57年度	簗川へ突出する低い丘陵上に立地している。古墳時代後期の祭祀遺跡。滑石製模造品、銅製、鉄製の製品が多数出土している。	「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」 1987年富岡市
67	原田篠遺跡	富岡市田篠	昭57・58年度	簗川右岸の下位段丘上。竪穴住居跡18軒(古墳～平安)、中近世墓壇検出。	「上田篠古墳群・原田篠遺跡」 1981年 富岡市教育委員会
68	田篠遺跡	富岡市田篠	昭61・62年度	簗川右岸の下位段丘上。雄川の扇状地。竪穴住居跡50軒(古墳～平安)、水田址等を検出。	「田篠上平遺跡」 1989年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
69	内匠遺跡	富岡市内匠	昭56年度	簗川右岸、内匠上之宿の北裾。県道北側団地内。竪穴住居跡27軒(古墳～平安時代)等を検出。	富岡市教育委員会調査
70	前畑遺跡	富岡市蚊沼	昭63年度	簗川左岸下位段丘上。中沢平賀界戸遺跡の北に位置。古墳～平安時代の竪穴住居跡、土坑等検出。	富岡市遺跡調査会
71	大島上城跡	富岡市大島	昭61年度	南・東を野上川、北は大島の集落、西は山地が続く。虎口、曲輪等が調査された。	「大島上城遺跡」 1988年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
72	大島下城跡	富岡市大島		簗川と野上川の合流点近く、二つの川に挟まれた細長いところに築かれている。上城の里城。	「群馬県古城墓址の研究」 山崎 一
73	宇田城跡	富岡市宇田		南北300m、幅120m、北よりの最高所が本丸で、西に続く尾根を堀切りで断ち、その堀切りの南端は堅壘となる。本丸は径30m、その南の郭は50m×30mとはっきりしていて、保存状況もよい。	//
74	宮崎城跡	富岡市宮崎		乗願寺の東の低所を城谷とよび、ここから城内としているが、櫓跡西端までは430mあり、そのうち築城した形跡の明らかなのは西部の170m程の地域である。	//
75	神成城跡	富岡市神成		本丸を要として、400m、350m、70m、200mのところまで築城されている。二の丸、三の丸、北曲輪等が残っており、保存状況もよい。	//
76	塩之入城遺跡	富岡市野上	昭63年度	主郭部と曲輪6カ所が検出されている。他に古墳1基が調査されている。	「塩之入城遺跡」 1991年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
77	丹生城跡	富岡市丹生		金乗寺南の山に築かれた城で、本丸を中心に「ひとで」形に派出した七つの尾根に築かれている。	「群馬県古城墓址の研究」 山崎 一

参考文献

- (1) 富岡市教育委員会「富岡市史 自然編 原始・古代・中世編」 1987年
- (2) 富岡市教育委員会「横瀬古墳群」 1990年
- (3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「田篠上平遺跡」 1988年
- (4) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「田篠中原遺跡」 1990年
- (5) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「野上塩之入・塩之入城遺跡」 1991年
- (6) 群馬県教育委員会「群馬県遺跡台帳II(西毛編)」 1972年

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 南蛇井増光寺遺跡B区の概要

本遺跡は便宜上100mの大区画で南からA～E区に区分している。本報告書対象地のB区は、A区が測量上のことでわずかに遺跡地にかかるだけなので実質的に本遺跡中最も南の地区となる。南側は鑄川によって削られた比高差約30mの浸食崖で区切られ、北側は国道254号線によって区切られた面積約8,600㎡の区画となっている。この区画はほぼ平坦であるが、南側に向かって、わずかに傾斜をもっている。

検出された遺構は竪穴住居跡が主で、重複も多くかなり濃密な分布を呈している。

縄文時代の遺構は住居跡10軒（前期黒浜期9軒・中期加曾利EIV式期1軒）、前期の土坑2基、中期の埋壘2基が検出されている。住居跡は他住居との重複等で範囲が不明瞭なものが多く、柱穴や炉跡等の住居内の施設も明瞭でないものが目立った。

弥生時代の遺構は竪穴住居跡38軒（中期4軒・後期34軒）、土坑3基（中期1基・後期2基）、中期の埋壘3基が検出されている。弥生時代中期の竪穴住居跡は床面レベルが高く、範囲が明確に確認できないものもあった。規模は比較的小形で、形状は隅丸長方形もしくは長方形を呈する。少ない遺構の中で、この時期の特徴的遺物である大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧等が出土している。弥生時代後期になると住居数が急増する。この時期の住居跡は、一般に一辺5～7mの長方形の住居跡が多いが、一辺10m程の大形住居跡も数軒検出されている。1軒を除いては長軸を南北方向、短軸を東西方向に持ち、形状は長方形を呈する。気象条件（特に冬の北西風）、出入口の方向等で自然とこの形式の家になったものと考えられる。炉は細長い河原石の転石を炉石として使用したものが多く、炉石の片側をわずかに掘りくぼめて炉床としている。炉の位置は北側の支柱穴間にくるものがほとんどであるが、複数の炉をもつ住居や変則的な位置に炉を持つ住居跡も数軒認められた。遺物の出土量は比較的多く、この時期の特徴を示す土器が多種出土している。その他の遺物としては、土製紡錘車、石鋤、磨製石鏃等があげられる。また、県内では出土例の少ない石包丁も出土している。

古墳時代から平安時代の竪穴住居跡は約129軒が検出されている。この他に掘立柱建物跡8基等が確認されている。

今回の報告はこの中の縄文時代と弥生時代の遺構が中心である。

本報告書中の遺構の概略は以下の通りである。

第2表 南蛇井増光寺遺跡報告遺構一覧表

縄文時代住居跡

住居No	位置(グリッド)	平面形	規模(m)	面積(㎡)	壁高(cm)	主軸方位	炉	ピット	時期	備考
96	Be-24・25	—	—	—	—	—	—	3	縄文前期	
111	Bp・Bq-26	—	—	—	33	—	—	—	縄文前期	埋設土器2基
120	Bn・Bo-29	長方形	東西 3.24	(16.20)	26	—	—	—	縄文前期	
121	Bq-32	不正円形	—	—	44	—	—	—	縄文前期	
122	Bn-30・31	長方形	4.90×3.60	16.10	15	N-2°-W	—	—	縄文前期	
124	Bn・Bo-26	—	—	—	—	—	石囲炉	—	縄文中期	
166	Bi-30	長方形	3.92×3.04	11.59	11	N-39°-W	石囲炉	5	縄文前期	
179	Bo-22	楕円形	5.58×5.08	(22.80)	34	N-87°-E	地床炉	—	縄文前期	
183	Bn-25・26	—	—	—	—	—	—	—	縄文前期	
184	Bo-23	—	—	—	24	—	石囲炉	—	縄文前期	

第1節 南蛇井増光寺遺跡B区の概要

弥生時代住居跡

住居No	位置(グリッド)	平面形	規模(m)	面積(m ²)	壁高(cm)	主軸方位	炉	ピット	時期	備考
5	Ba・Bb-16	長方形	6.18×4.70	27.72	9	N-12°-E	地床炉	柱4	弥生後期	
22	Bc・Bd-23~25	長方形	8.12×6.24	49.64	33	N-47°-W	—	柱4・他3	弥生後期	
23	Bc・Bd-26・27	隅丸長方形	4.20×3.40	12.88	24	N-15°-W	—	—	弥生中期	
28	Bb-25	隅丸長方形	(4.34)×4.00	(16.86)	25	N-10°-W	地床炉	柱4・他1	弥生後期	磨製石鏃出土
29	Bd~Bf-22・23	隅丸長方形	10.08×6.28	59.00	70	N-33°-W	地床炉	柱4・他1	弥生後期	
31	Bg・Bh-17・18	長方形	4.40×3.50	13.75	42	N-33°-W	—	柱4	弥生後期	
32	Bf~Bh-15・16	隅丸長方形	(9.30)×6.60	(58.38)	54	N-19°-W	地床炉	柱3・他1	弥生後期	
33	Bd・Be-16・17	長方形	7.04×6.70	(46.50)	5	N-36°-W	地床炉	柱4?	弥生後期	
36	Bh・Bi-15・16	長方形	5.66×5.00	(26.00)	12	N-19°-W	地床炉	柱4・他2	弥生中期	
39	Bh-21	長方形	東西 4.20	—	—	—	—	—	弥生後期	
51	Bj~Bl-18~20	長方形	10.40×6.84	70.12	54	N-27°-W	—	柱4	弥生後期	
59	Bj・Bk-20・21	長方形	5.32×4.28	21.44	32	N-26°-W	地床炉	柱4・梯2	弥生後期	
60	Bp~Br-21~23	長方形	10.60×6.32	63.76	52	N-21°-W	地床炉	柱4	弥生後期	遺物多数
61	Br・Bs-21・22	長方形	(4.50)×3.10	(12.91)	49	N-74°-E	—	柱4	弥生後期	
62	Bs-23	—	東西 6.90	—	32	—	—	柱2	弥生後期	
75	Bd・Be-25・26	長方形	6.20×4.80	26.77	55	N-68°-W	地床炉	柱4・他3	弥生後期	
79	Bi・Bj-15	—	南北 4.20	—	47	—	—	—	弥生後期	
87	Bm・Bn-19・20	—	南北 5.10	—	10	—	—	柱2	弥生中期	扁平片刃石斧出土
97	Bq・Br-24・25	隅丸長方形	5.92×4.72	24.97	32	N-88°-W	地床炉2	柱4	弥生後期	
98	Bp・Bq-23・24	長方形	7.48×5.68	40.39	45	N-15°-W	地床炉2	柱4	弥生後期	石包丁出土
99	Br・Bs-25・26	長方形	6.66×5.34	(32.92)	61	N-5°-E	地床炉	柱4・他1	弥生後期	
101	Bp・Bq-25・26	隅丸長方形	4.70×4.66	18.10	45	N-14°-W	—	柱4	弥生後期	
105	Br・Bs-27	長方形	東西 4.40	—	31	N-7°-E	—	柱2	弥生後期	
106	Bq・Br-29・30	長方形	東西 5.78	—	44	N-7°-W	地床炉	柱2・他4	弥生後期	
107	Bq-30・31	長方形	6.16×4.30	(27.76)	40	N-29°-W	—	柱2・他5	弥生後期	
108	Bo・Bp-31・32	長方形	(7.20)×5.08	(35.12)	36	N-29°-W	地床炉	柱4	弥生後期	遺物多数
112	Bq-33・34	—	東西 4.60	—	48	—	—	梯2	弥生後期	
113	Bq-33・34	—	—	—	34	—	—	他2	弥生後期	
114	Bq-32・33	—	—	—	12	—	—	—	弥生後期	
115	Bo・Bp-35~37	長方形	—	—	62	—	地床炉	柱2・梯2・他3	弥生後期	遺物多数
116	Bm・Bn-28・29	隅丸長方形	4.76×4.20	16.06	73	N-10°-W	地床炉	柱4・他1	弥生後期	遺物多数
118	Bo-39	—	—	—	75	—	—	—	弥生後期	
132	Be・Bf-28・29	—	—	—	—	—	—	—	弥生中期	
162	Bo-23	方形	4.70×4.50	(20.67)	30	N-19°-W	地床炉	柱2	弥生後期	
164	Bk-23・24	隅丸長方形	4.80×3.96	17.39	40	N-17°-W	地床炉	柱4・他1	弥生後期	
168	Bd~Bf-29・30	隅丸長方形	8.40×6.00	42.80	77	N-12°-W	地床炉?	柱4・他3	弥生後期	
174	Bl~Bn-24~26	長方形	10.80×7.48	78.58	28	N-66°-W	地床炉3	柱6	弥生後期	
178	Bh・Bi-24~26	長方形	7.92×6.60	48.36	62	N-8°-W	地床炉2	柱4	弥生後期	

土 坑

埋 甕

土坑No	位置	平面形	規模(m)	深さ(cm)	時期	埋藏No	位置	平面形	規模(m)	深さ(cm)	時期
9	Br-25	楕円形	0.87×0.82	44	縄文前期	2	Bo-35	—	0.49×—	31	縄文中期
17	Bo-23	円形	1.97×1.85	39	縄文前期	3	Bo-21	円形	0.51×0.49	25	縄文中期
6	Bp-30	長方形	2.14×1.16	30	弥生後期	1	Bp-30	楕円形	0.99×(0.63)	31	弥生後期
7	Bp-23	楕円形	1.48×1.06	45	弥生後期	4	Bq-21	楕円形	0.75×0.67	14	弥生中期
18	Bp-28	楕円形	0.97×1.10	30	弥生中期	5	Az-17	—	0.66×—	38	弥生中期

第2節 縄文時代住居跡と出土遺物

B-96号住居跡 (第7・8図、PL5・41)

位置 Be-24・25グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能

重複 住居の大半を47・75・95住に切られている。

壁 残存壁高0cm、堀込みが浅く、明確な立ち上がりは確認できなかった。

形状と規模 周壁が残存しないため形状は不明、住居の範囲は柱穴の位置、遺物分布状況からおさえた推定線である。規模も不明である。

床面 はっきりした床面は認定できなかった。

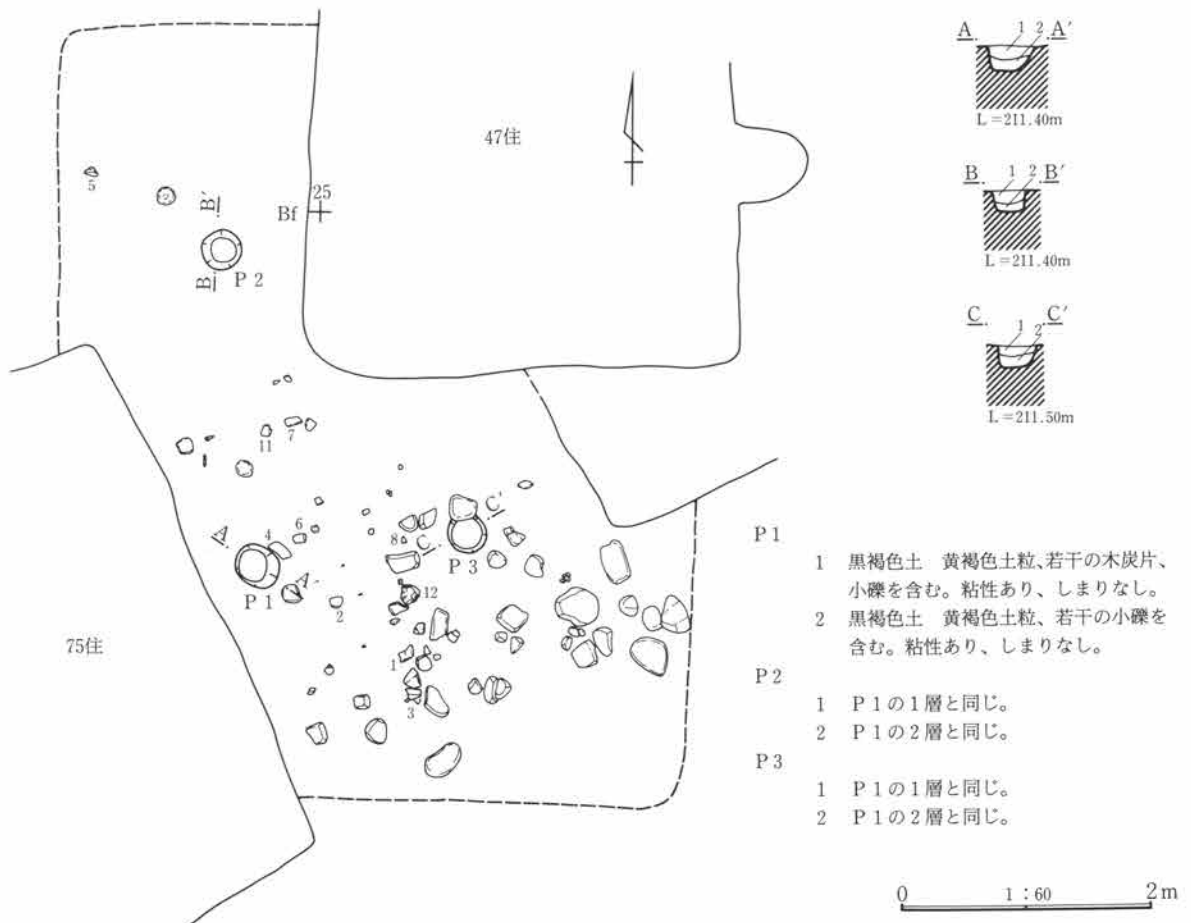
炉跡 検出されなかった。

柱穴 ピットは3基確認された。いずれも主柱穴になると思われる。P1は径36cm、深さ19cmを測ることができ、楕円形を呈する。P2は径27cm、深さ16cmを測ることができ、円形を呈する。P3は径30cm、深さ16cmを測ることができ、円形を呈する。

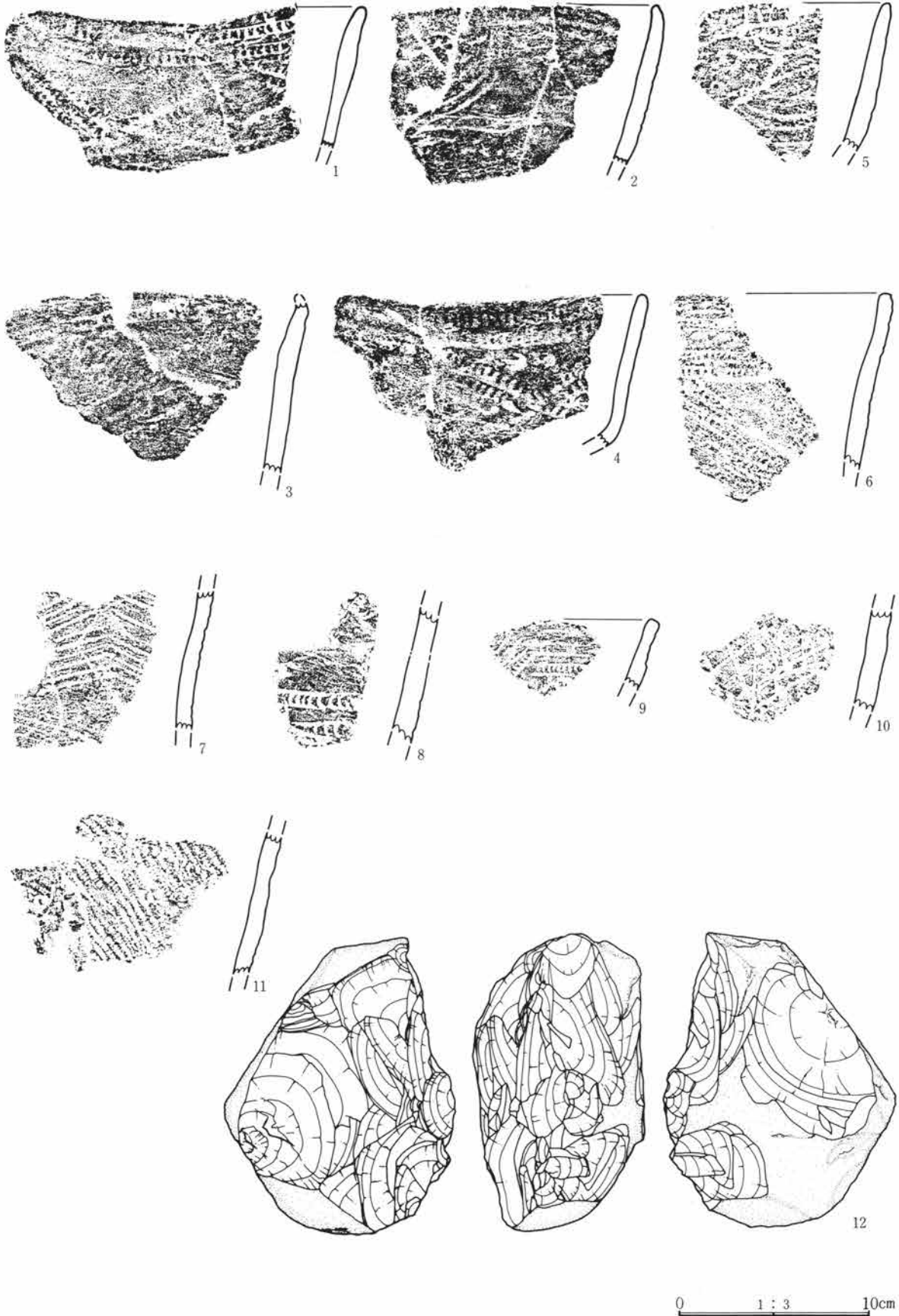
出土遺物 出土遺物は極めて少なく、縄文土器片30点、石器はコア1点、剥片9点、計10点であった。

時期 縄文時代前期黒浜期

備考



第7図 96号住居跡



第8図 96号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

B-111号住居跡 (第9~15図、PL5・6・41)

位置 Bp・Bq-26グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能

重複 住居の大半を101住と102住に切られている。

壁 重複によって西壁と東壁の大半が破壊されている。壁高は比較的残りの良い南壁で33cmを測ることができ、垂直に近い立ち上がりが確認された。小礫混じりの褐色土を壁面としている。

形状と規模 住居の大半を101・102住に切られており、平面プランは明瞭ではない。北壁よりと南壁よりに埋設土器が1個ずつ検出されている。残存部分が少なく規模は不明である。

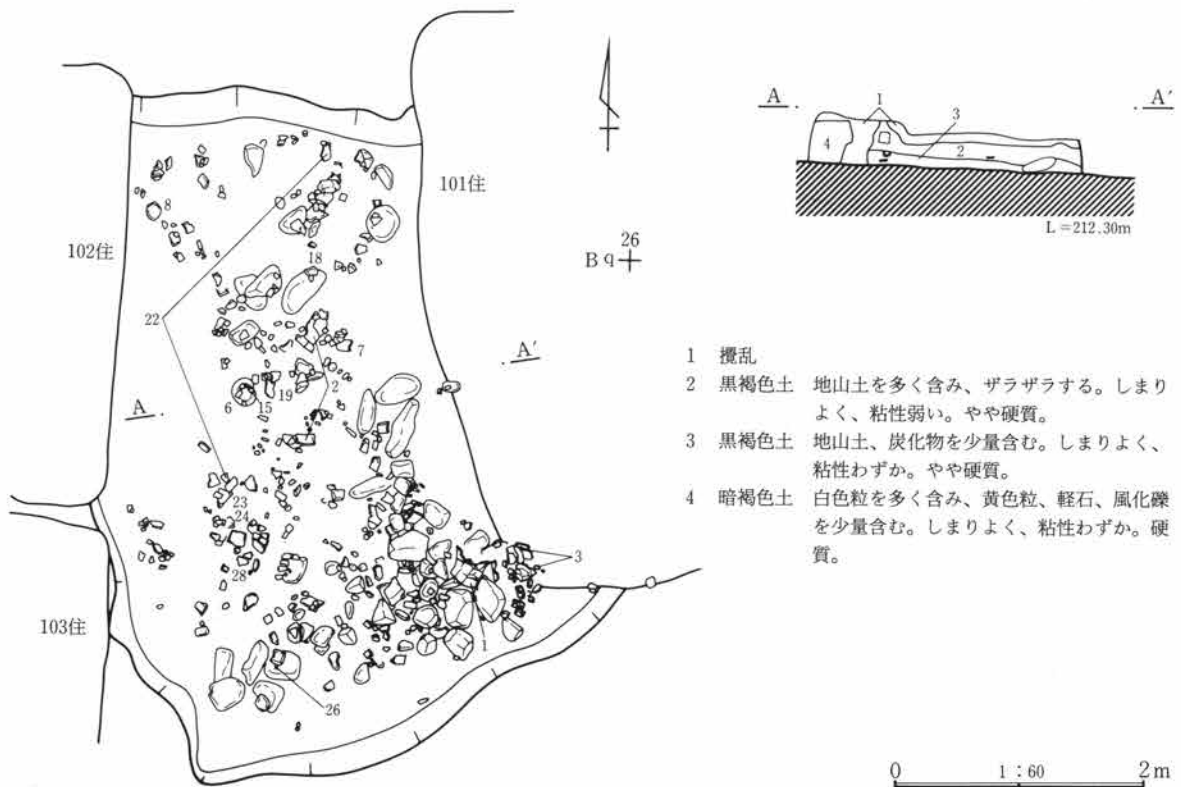
床面 黄色の砂質土(地山)を床面としている。比較的凹凸が少なく平坦な面が確認できた。

炉跡 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。

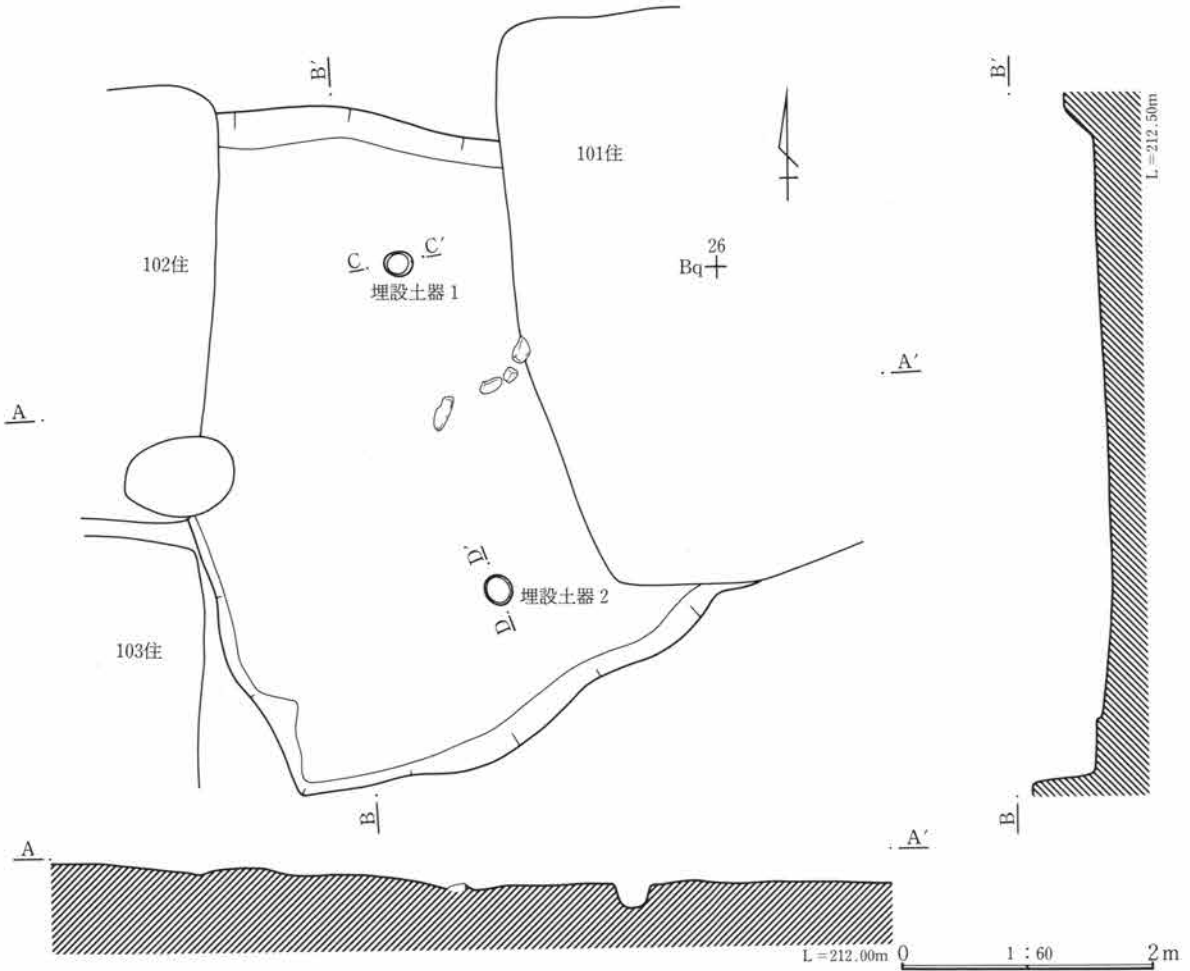
埋設土器 北壁よりの埋設土器1は、ほぼ完形に近く、正位の状態で出土している。掘り方は径35cm、深さ28cmを測ることができた。覆土は地山土(黄色砂層)を主体とする暗黄色土で、焼土、炭化物等の堆積は見られなかった。南壁よりの埋設土器2は、胴部のみが残存し、正位状態で出土している。掘り方は、径28cm、深さ18cmを測ることができた。覆土は小礫、地山土を含む砂質の暗褐色土で、焼土、炭化物の堆積は確認できなかった。

出土遺物 10軒の縄文時代の住居の中では、比較的まとまった遺物が出土している。埋設土器2点(4・5)の他に、縄文土器片が303点、石器は、石匙2点、コア1点、剥片15点、スクレイパー1点、計18点が出土している。覆土中のものが多く、全体に散在しているが、南側の埋設土器周辺には床面遺物が出土している。時期 縄文時代前期黒浜期

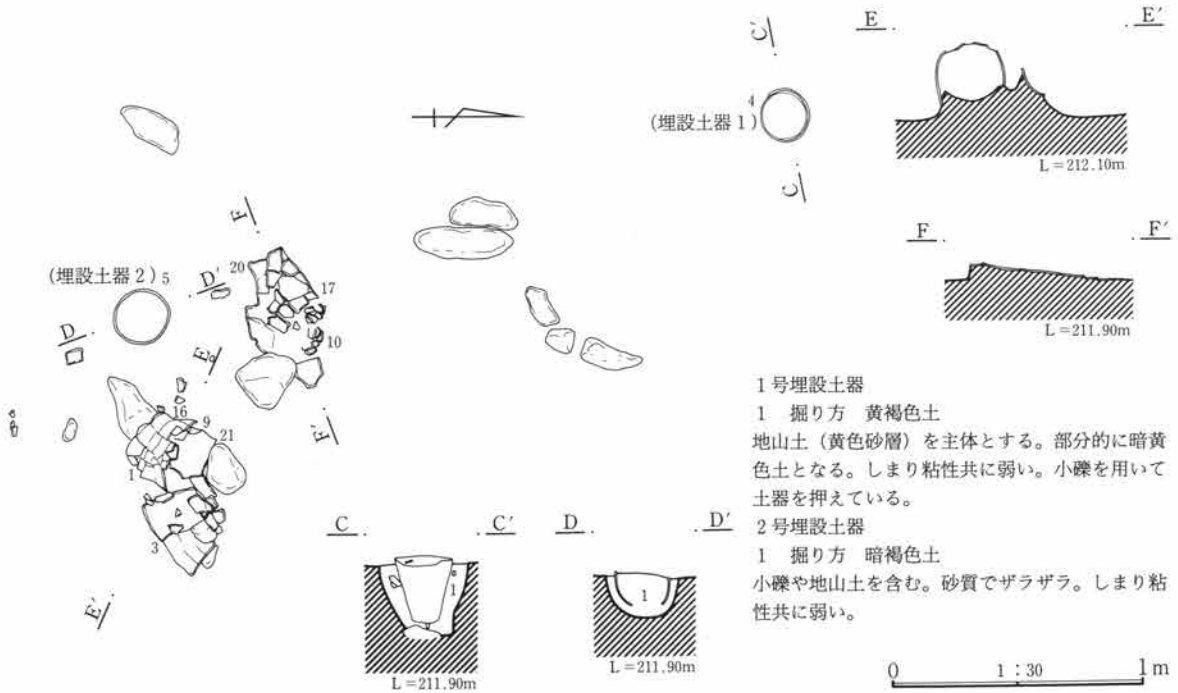
備考



第9図 111号住居跡(1)



第10図 111号住居跡(2)



1号埋設土器

1 掘り方 黄褐色土

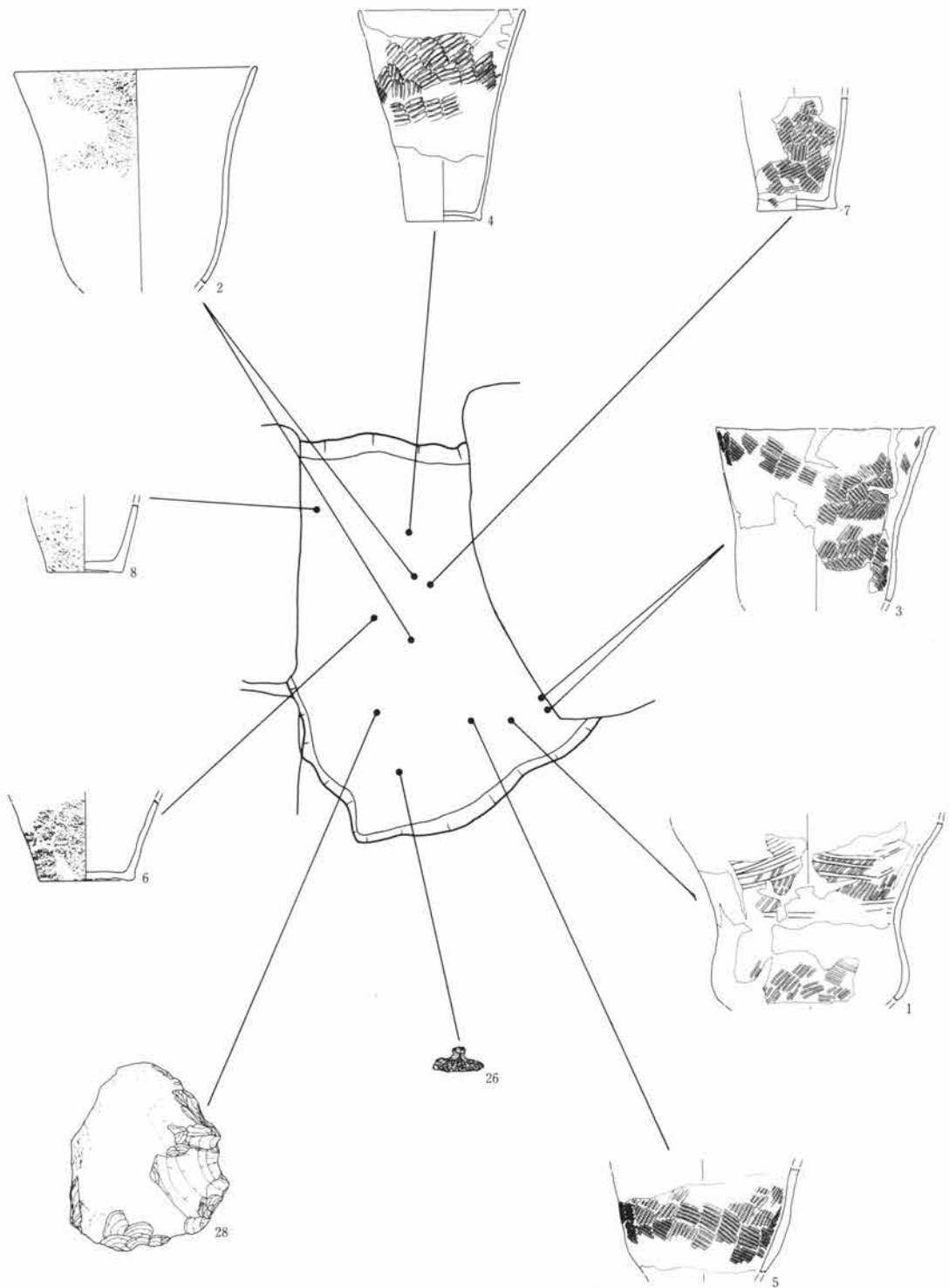
地山土(黄色砂層)を主体とする。部分的に暗黄色土となる。しまり粘性共に弱い。小礫を用いて土器を押えている。

2号埋設土器

1 掘り方 暗褐色土

小礫や地山土を含む。砂質でザラザラ。しまり粘性共に弱い。

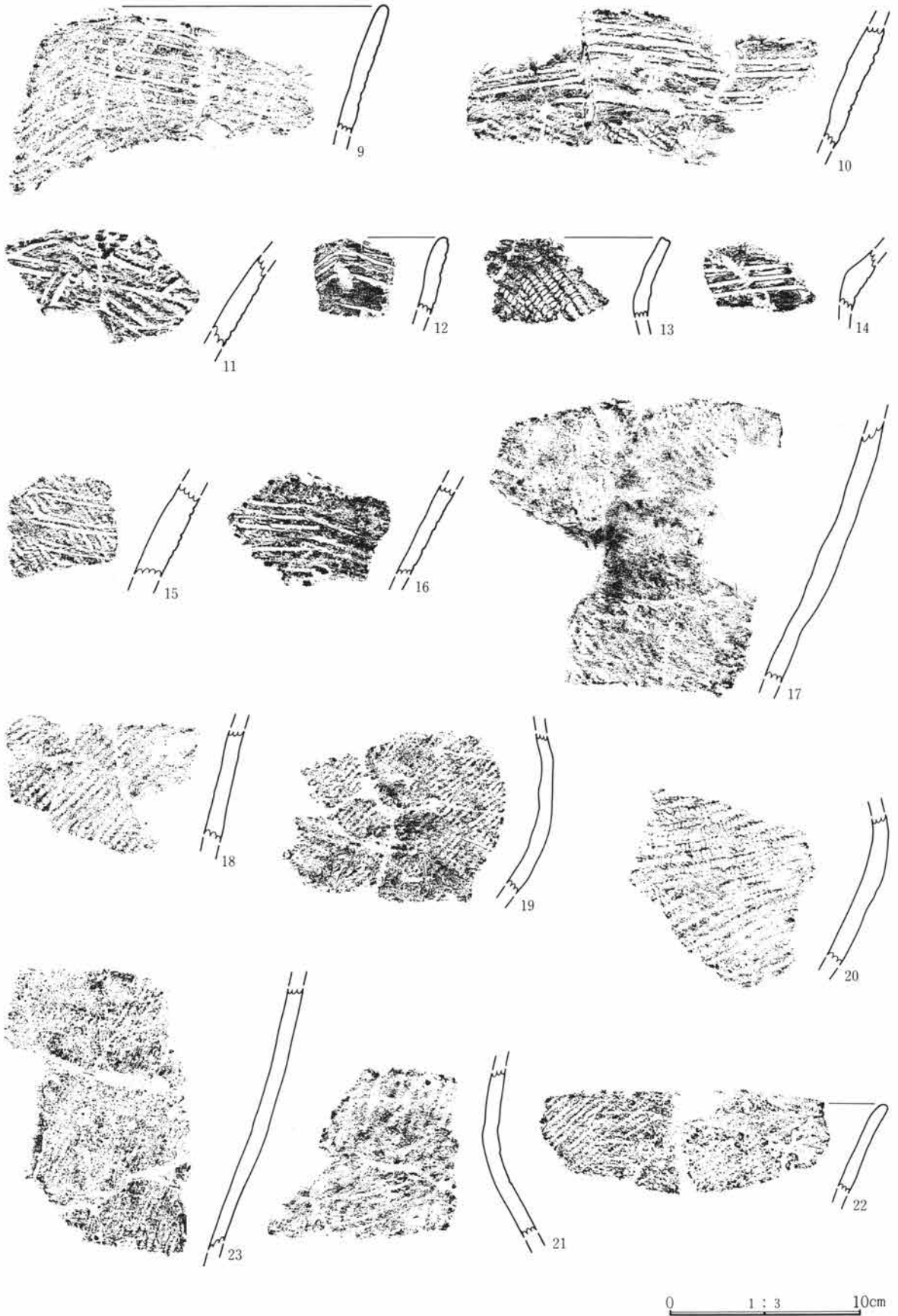
第11図 111号住居跡埋設土器



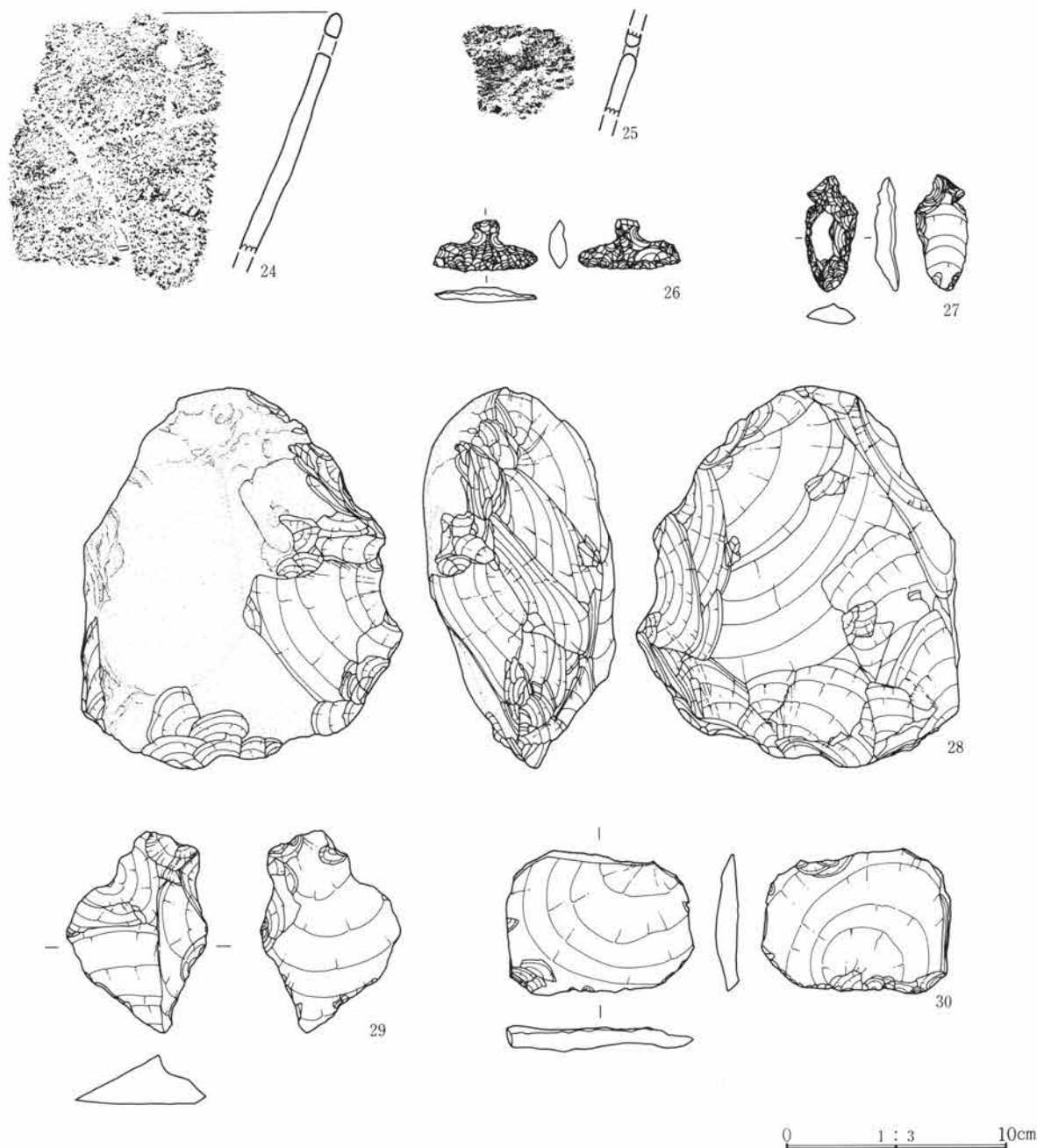
第12図 111号住居跡個体別遺物出土状況図



第13図 111号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図 111号住居跡出土遺物実測図(2)



第15図 111号住居跡出土遺物実測図(3)

B-120号住居跡 (第16~20図、P L 6・7・42)

位置 Bn-29~Bo-29グリッド 床面積 (16.2m²) 主軸方位 測定不能 重複 なし

壁 壁高は19~26cmを図り、なだらかに立ち上がるが、北壁の掘り込みは不明瞭であった。

形状と規模 北側の周壁がはっきりせず、明確なプランは確認できなかったが、残存部の形状から方形を意識したプランになると思われる。規模は長軸不明、短軸は3.24mを測る。

床面 礫混じりの褐色土を床面としている。西側に向かってやや傾斜しており、若干の凹凸が見られる。

炉跡 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。

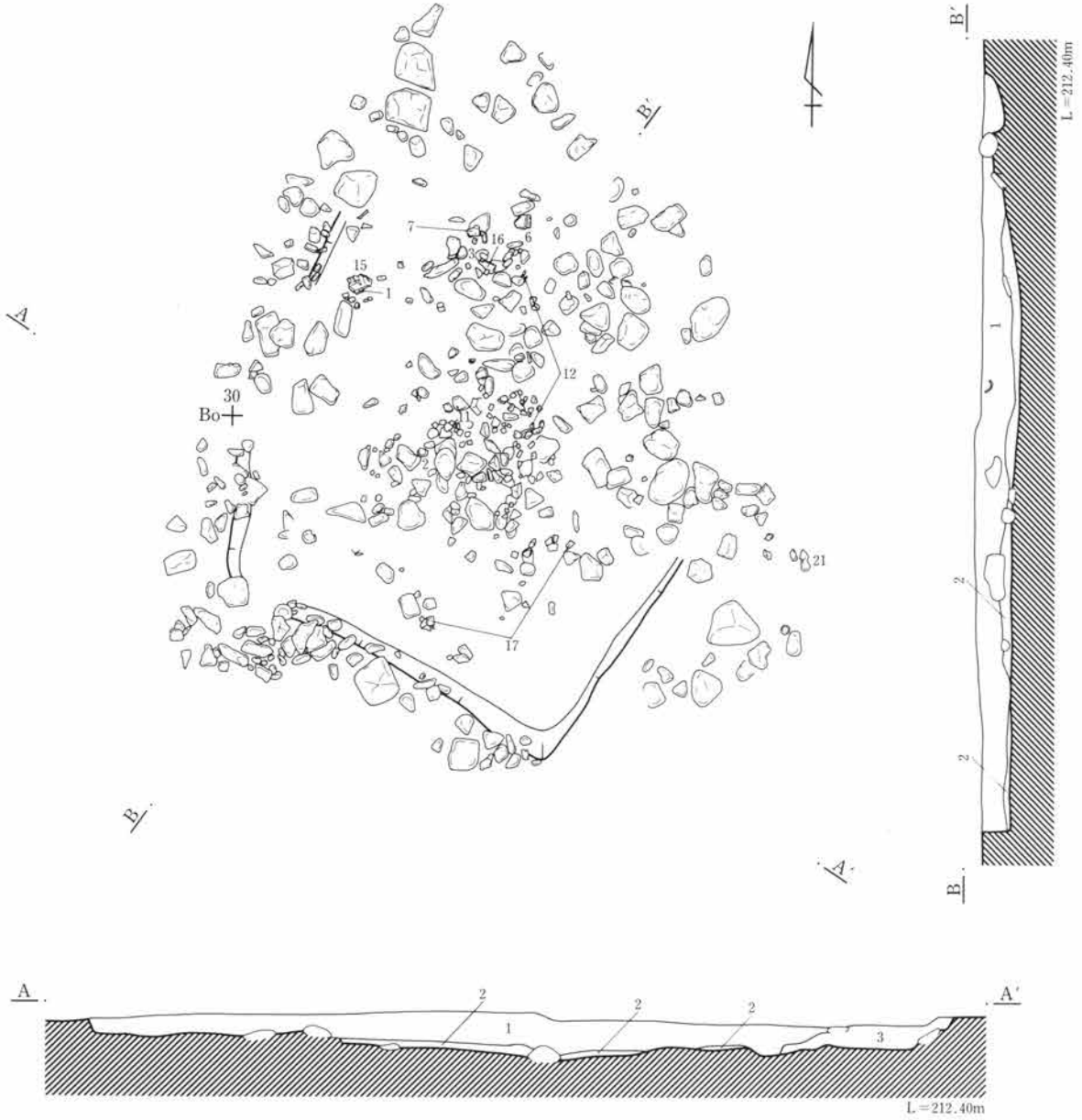
出土遺物 出土遺物のほとんどが覆土中のものである。縄文土器片128点、石器は少なく、打製石斧2点、打

第3章 検出された遺構と遺物

製石鏃2点、剥片2点、計6点であった。

時期 縄文時代前期黒浜期

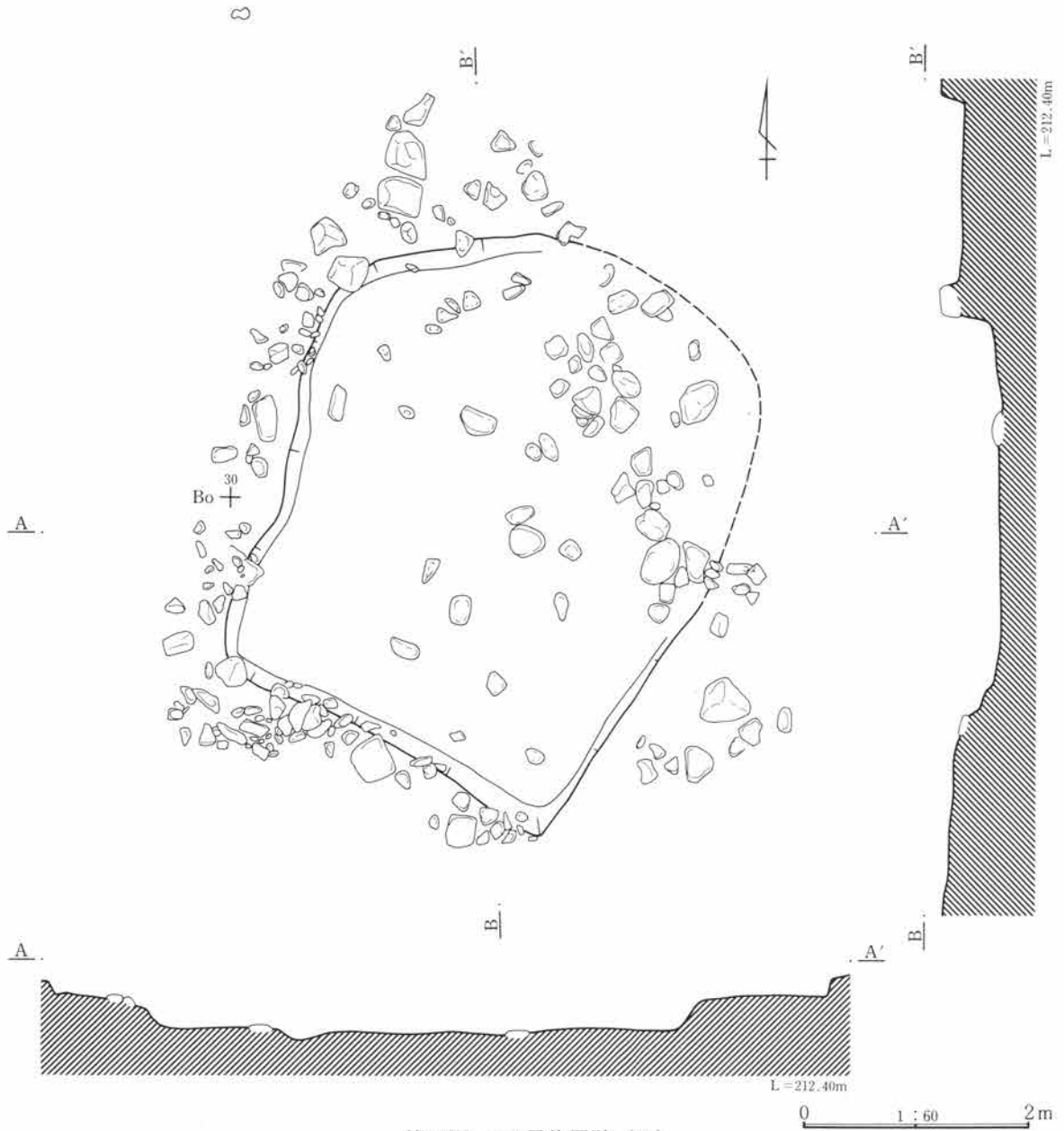
備考



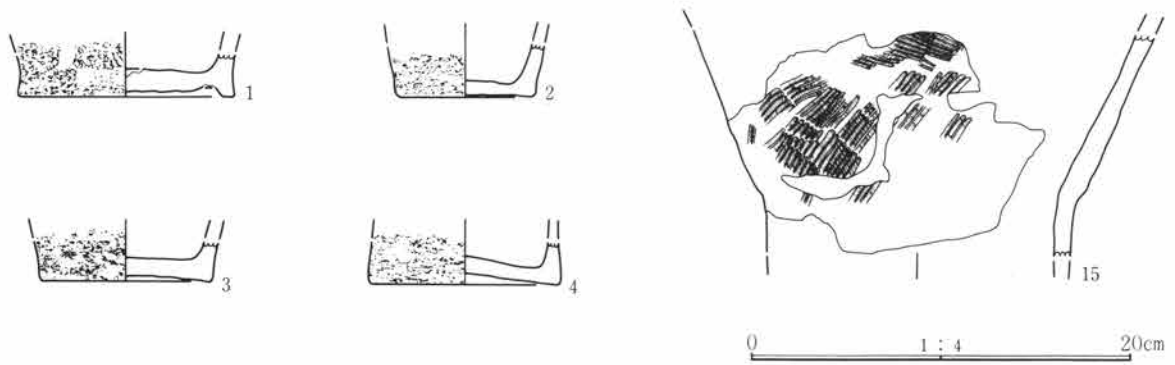
- 1 暗褐色土 (φ20~30mm)の礫、パミスを含み、大ぶりの石(φ100mm)を所々に含む。しまり良。
- 2 暗褐色土 大ぶりの石を所々に含む、土の粒子は1層より細かく、よくしまっている。
- 3 暗褐色土 パミス、粒子の細かい砂を含む。しまり良。

0 1 : 60 2m

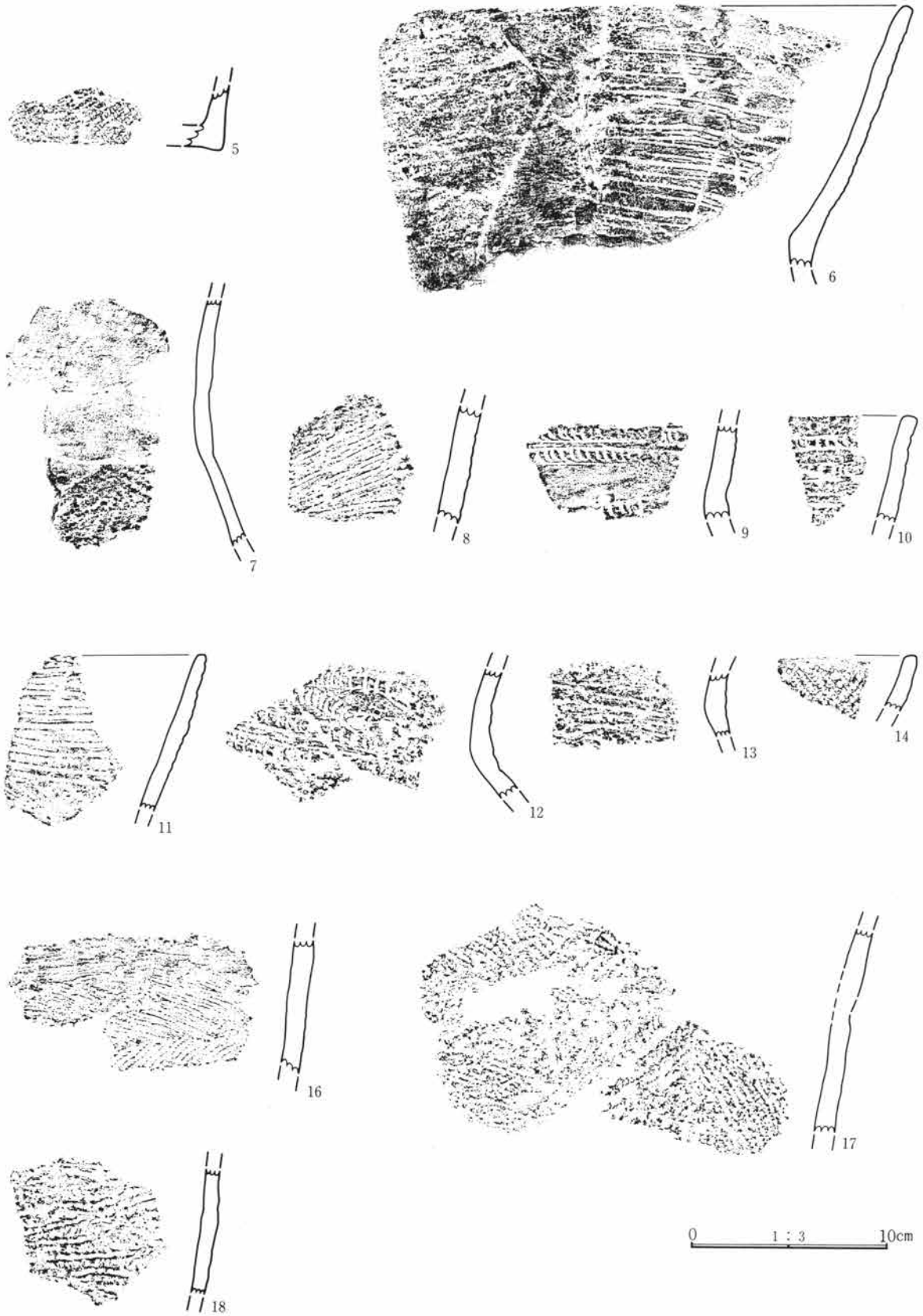
第16図 120号住居跡(1)



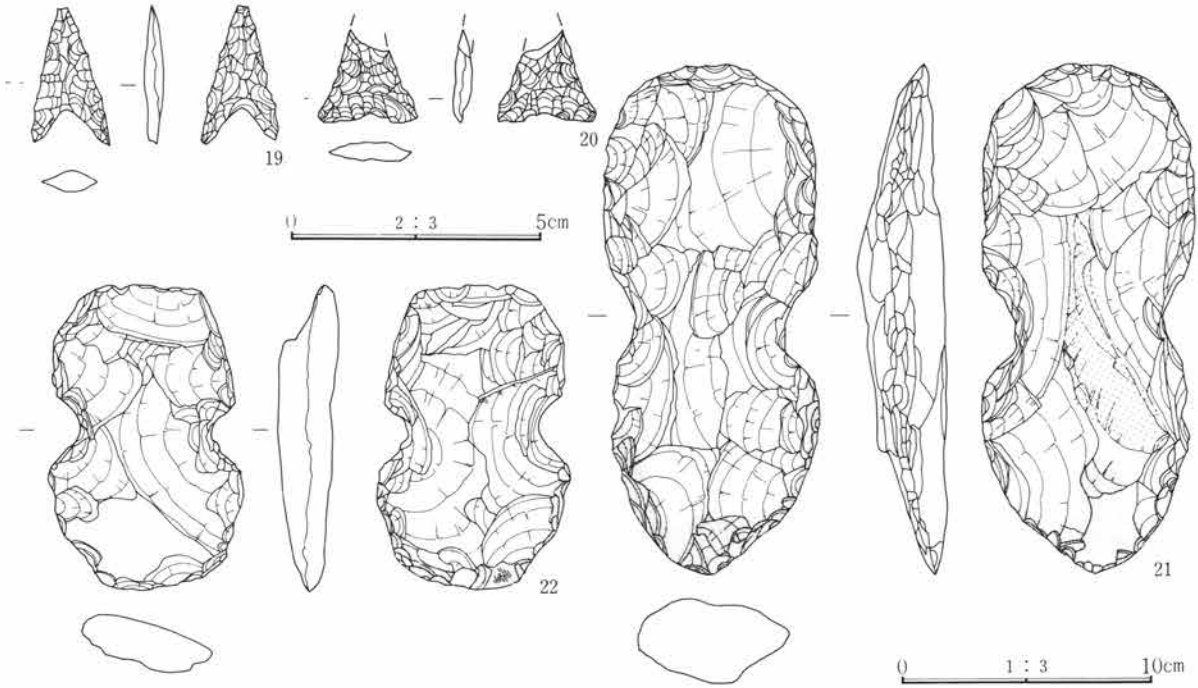
第17図 120号住居跡(2)



第18図 120号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図 120号住居跡出土遺物実測図(2)



第20図 120号住居跡出土遺物実測図(3)

B-121号住居跡 (第21~24図、PL 7・42)

位置 Bq-32グリッド **床面積** 測定不能 **主軸方位** 測定不能 **重複** 南壁の大部分を108住に切られている。

壁 残存壁高は19~44cmを測ることができる。北壁、西壁は小礫まじりの褐色土、東壁は粘質褐色土を壁面としているが、明瞭な立ち上がりは検出できなかった。

形状と規模 南壁の大半を108住に切られており、プランは不明確であるが、残存部の形状から不整円形を呈するものと思われる。規模は不明である。

床面 小礫混じりの粘質褐色土を床面としている。凹凸は少なく、比較的平坦である。

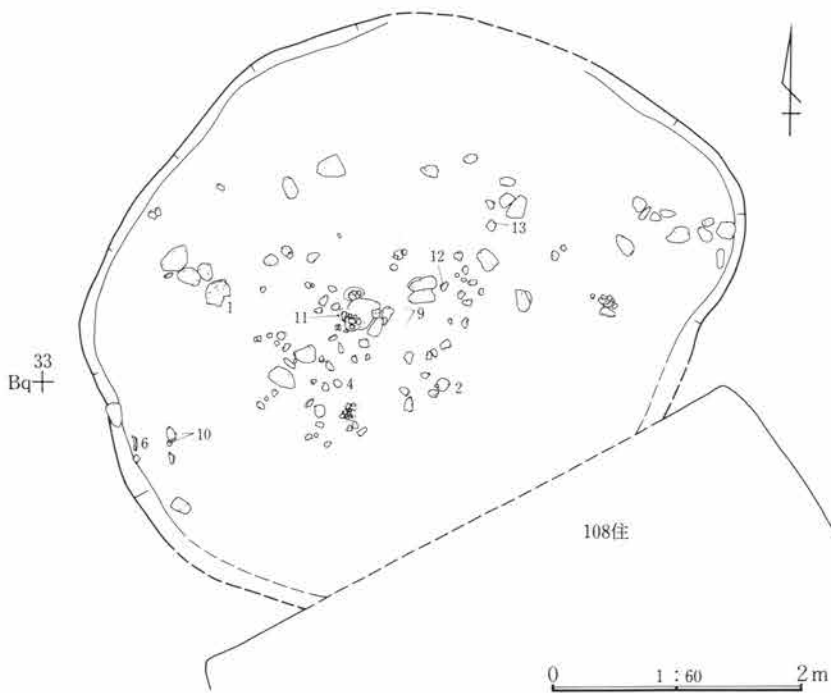
炉跡 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

出土遺物 出土遺物は比較的少なく、縄文土器片68点が出土したに過ぎない。いずれも、覆土中のものである。

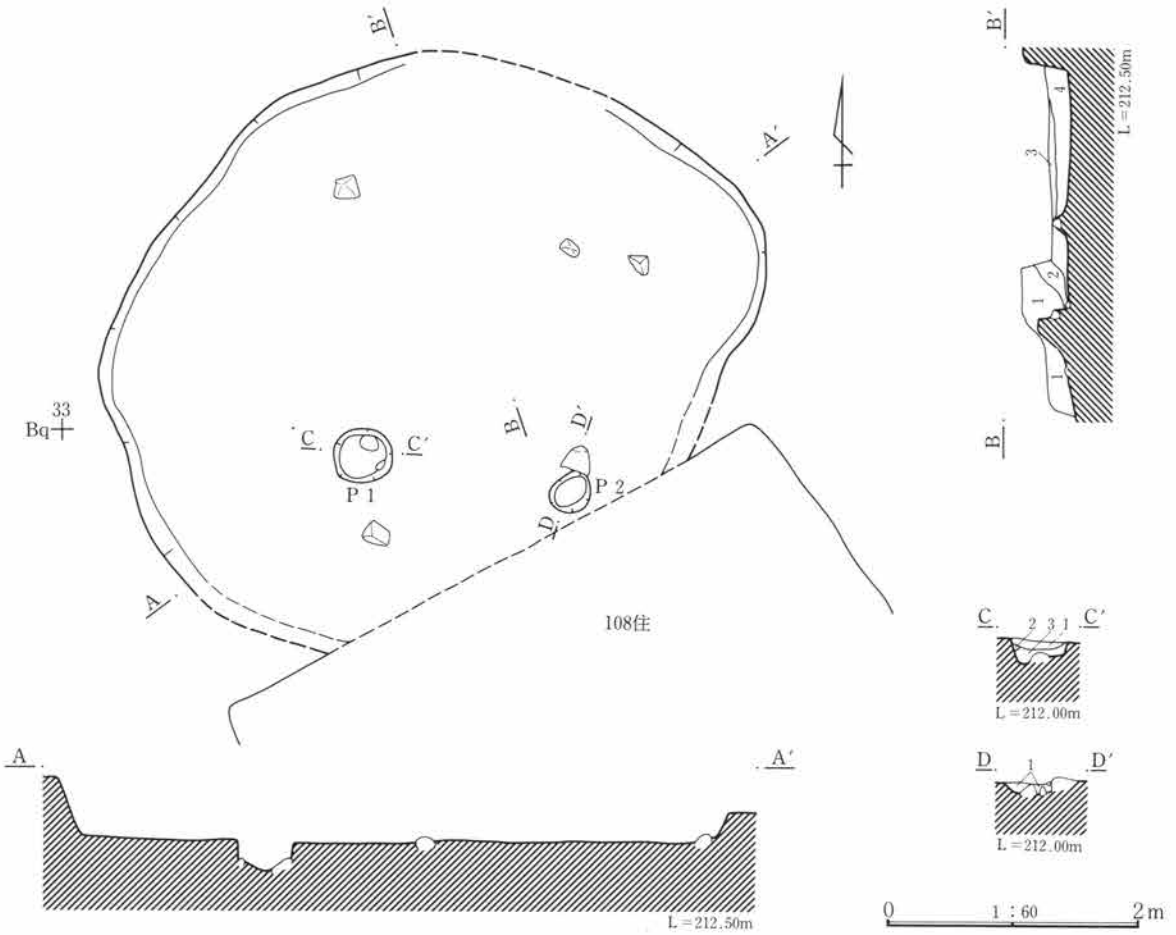
時期 縄文時代前期黒浜期

備考



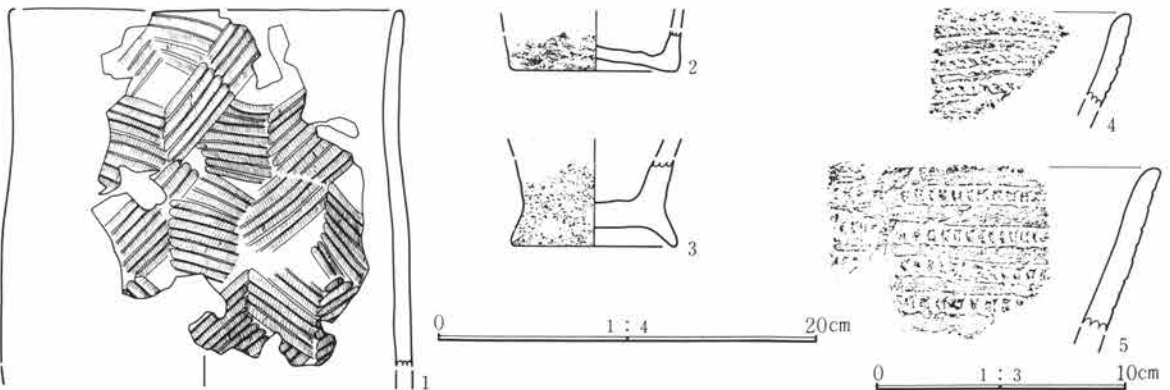
第21図 121号住居跡(1)

第3章 検出された遺構と遺物

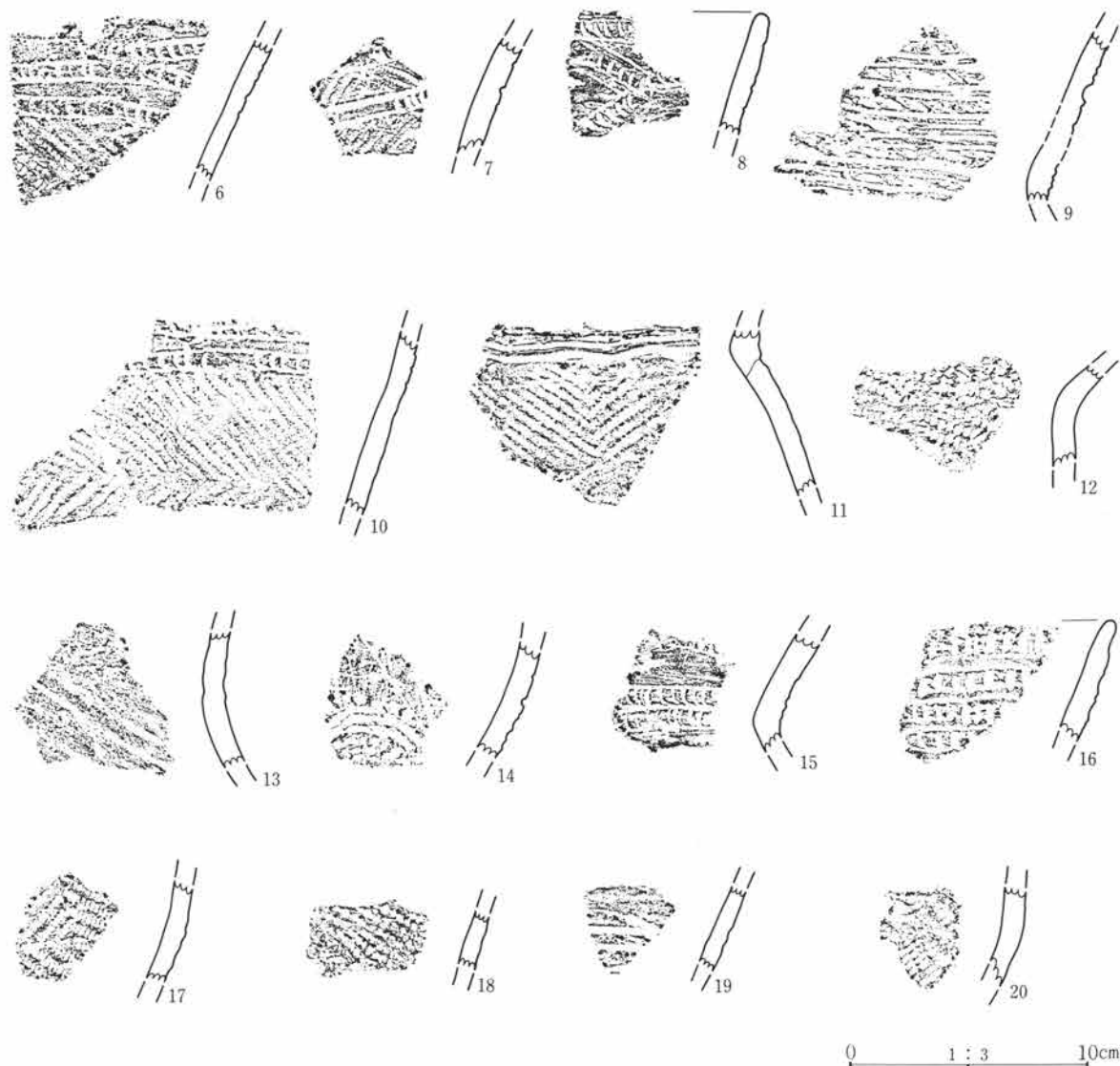


- | | |
|---|--|
| P1 | |
| 1 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫、小礫を多く含む。しまりよく、粘性弱い。硬質。 | 1 黒褐色土 地山土（黄色砂）を多く含む。しまりよく、粘性弱い。ザラザラ。 |
| 2 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫の混入は1層より少ない。しまりよく粘性あり。ややザラザラ。 | 2 暗褐色土 地山土を少量含む。粘質土ブロック。しまり良。 |
| 3 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫をおおく含む。しまりよく、粘性あり。 | 3 暗褐色土 地山土を主体とする。しまり良、粘性弱い。ザラザラ。 |
| 4 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫、黄色砂、礫を含む。しまりよく、粘性あり。ややザラザラ。 | |
| P2 | |
| | 1 黒褐色土 小礫(φ1~2mm)地山土を多く含む。しまりよく、粘性弱い。やや硬質。 |

第22図 121号住居跡(2)



第23図 121号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 121号住居跡出土遺物実測図(2)

B-122号住居跡 (第25~28図、P L 8・42・43)

位置 Bn-30・31グリッド 床面積 (16.1) m² 主軸方位 N-2°-W 重複 なし

壁 壁高が15cmと低く、立ち上がりはゆるやかである。

形状と規模 長方形に近いプランを呈する。長軸4.9m、短軸3.6mを測ることができる。

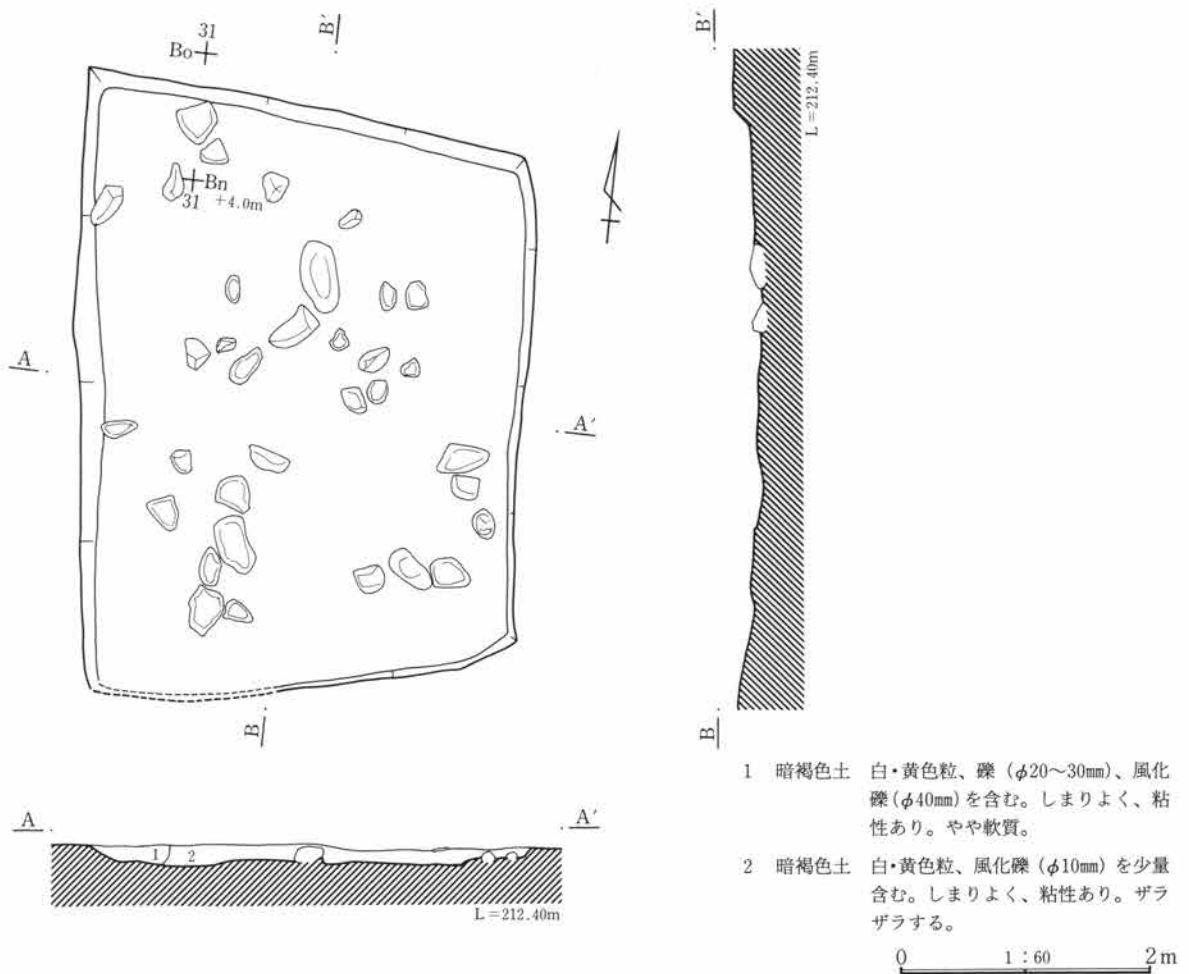
床面 大小の礫混じりの粘質褐色土を床面としており、凹凸が目立つ。

炉跡 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。

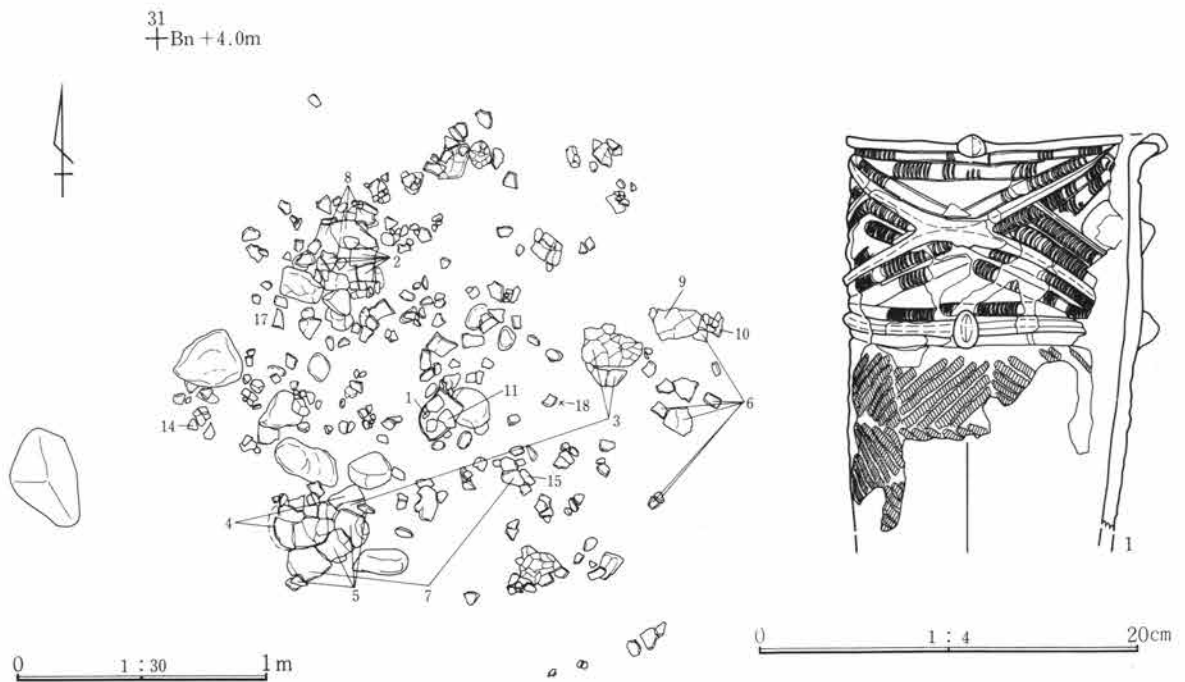
出土遺物 出土遺物は、縄文土器片200点、石器は黒曜石の打製石鏃1点である。大部分が覆土中からのもので、住居跡の中央からやや北よりにまとまって出土した。

時期 縄文時代前期黒浜期

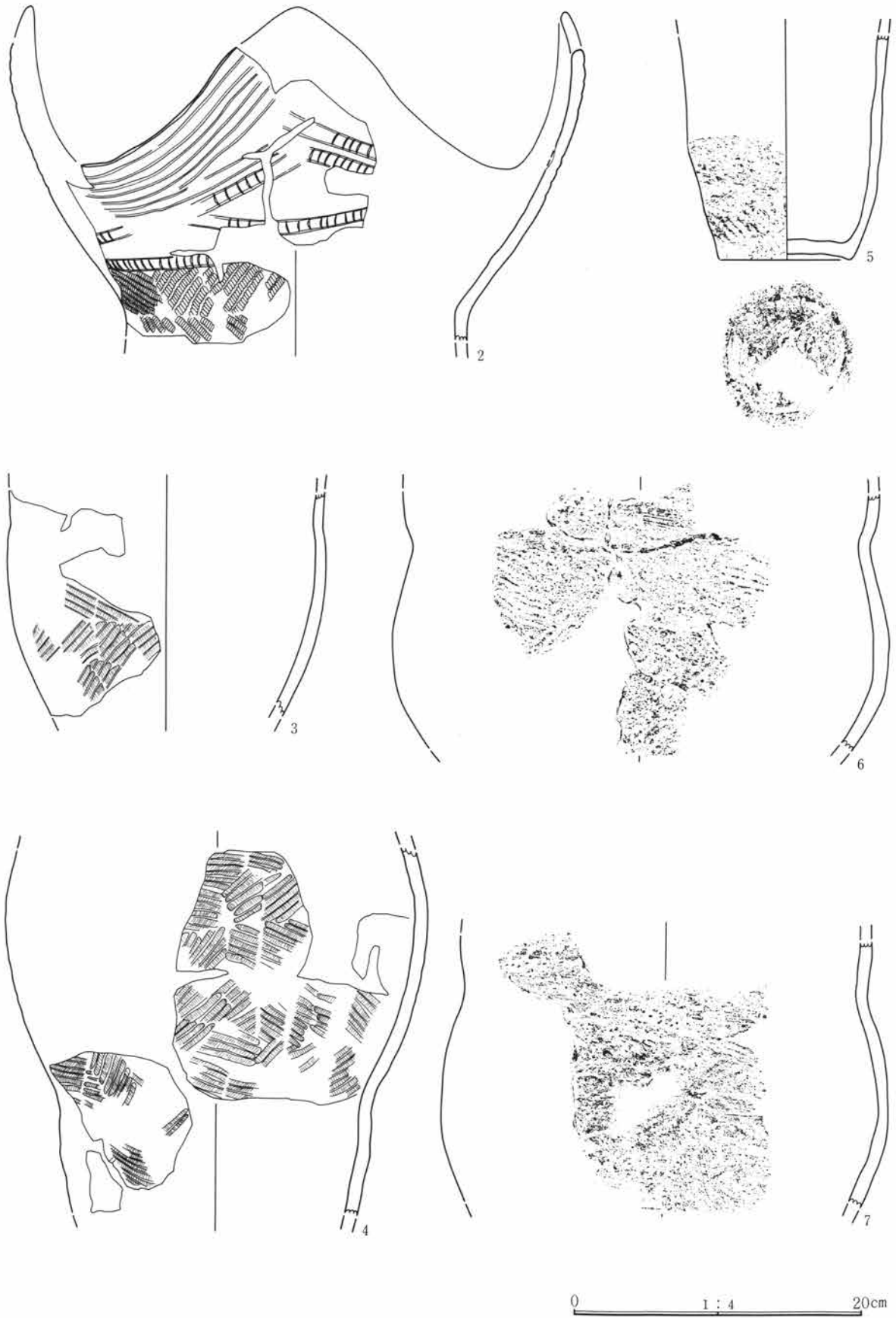
備考 覆土中に遺物と共に大小の礫が多数混入し、壁・床ともはっきり確認することができなかった。また、炉・柱穴等も検出されなかったため、住居跡かどうか疑問が残る。



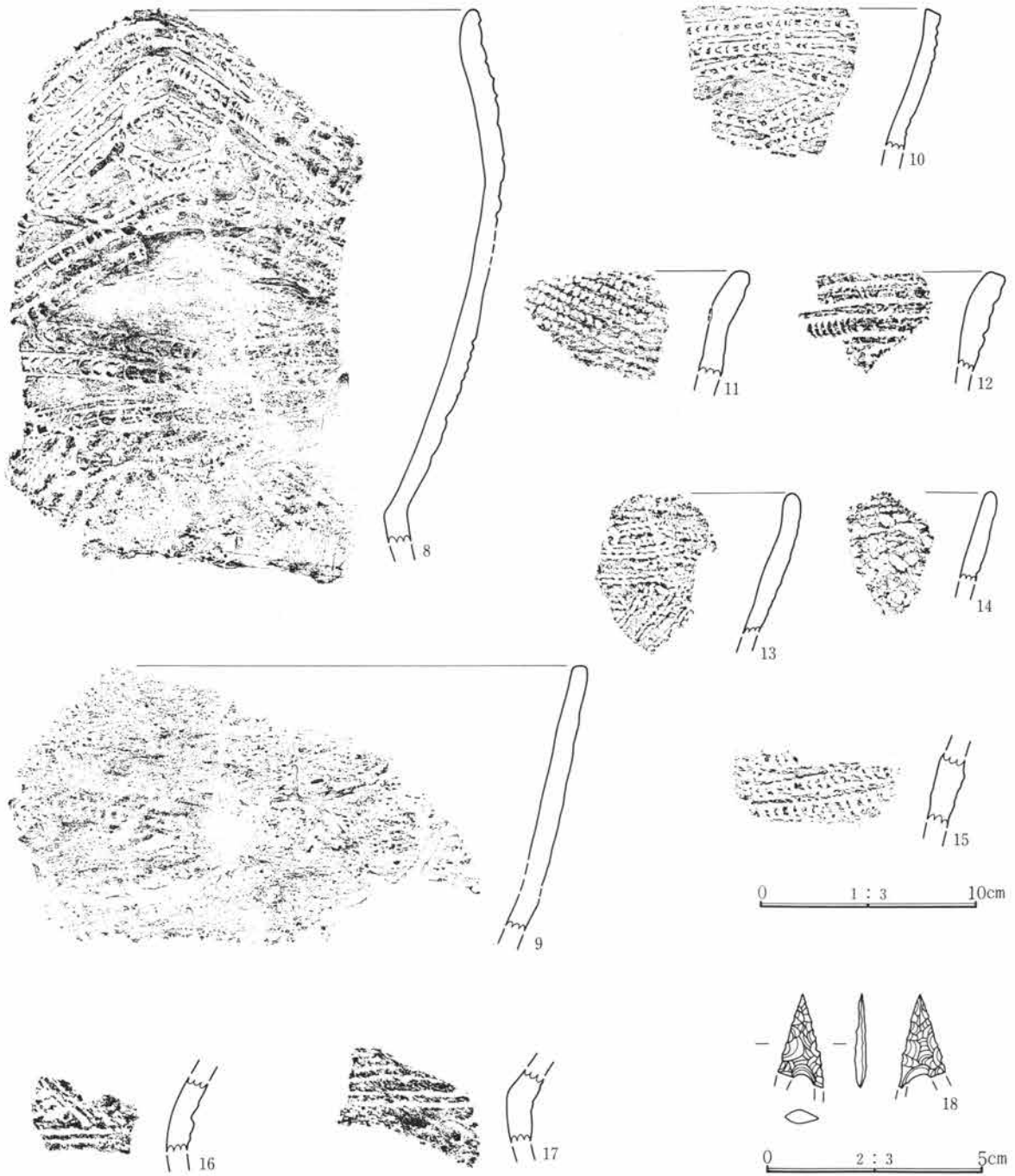
第25図 122号住居跡



第26図 122号住居跡遺物出土状況図、出土遺物実測図 (1)



第27図 122号住居跡出土遺物実測図(2)



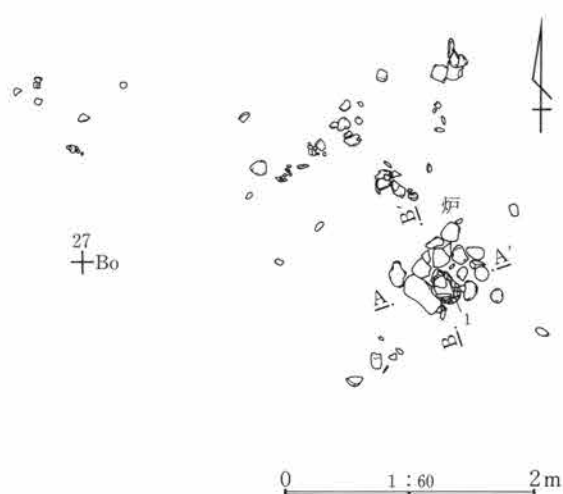
第28図 122号住居跡出土遺物実測図(3)

B-124号住居跡 (第29~31図、P L43)

位置 Bn・Bo-26グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能 重複 なし

壁 確認壁高0cm

形状と規模 長径67cm、短径54cmの範囲に砂岩を中心とした板状の石を配した敷石状の配石が残存していた。配石内には、埋設土器が斜位の状態で遺存していたが、調査の下手際から、炉になるかどうか明確ではない。



第29図 124号住居跡

配石や埋設土器の遺存状態から炉辺部に石を配した敷石住居の可能性も考えられる。掘り込みが浅いためか、表土掘削時やその後の調査でもプラン確認はできなかった。規模は不明である。

床面 床面は敷石の上面と考えられる。

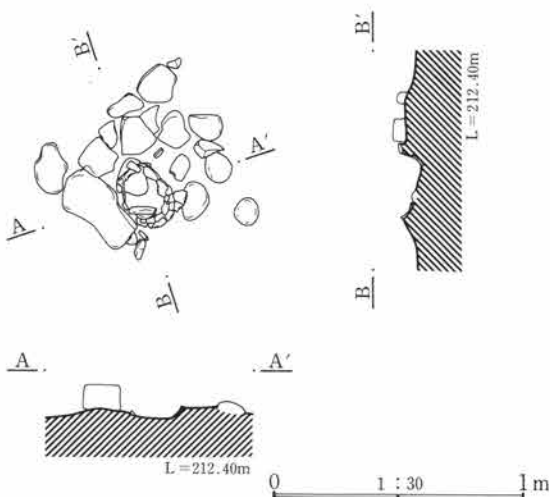
炉跡 10から35cmの礫を三方に囲った配石は埋設土器を伴い、炉である可能性が大きい。

柱穴 検出されなかった。

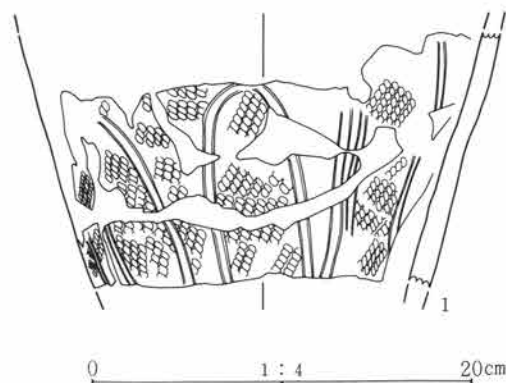
出土遺物 出土遺物はたいへん少なく、埋設土器の他には配石の周辺より、32点の土器片が出土しているにすぎない。

時期 埋設土器から縄文時代中期加曾利EIV式期と考えられる。

備考



第30図 124号住居跡炉



第31図 124号住居跡出土遺物実測図

B-166号住居跡 (第32~34図、P L 9・43)

位置 Bi-30グリッド **床面積** 11.59m² **主軸方位** N-39°-W

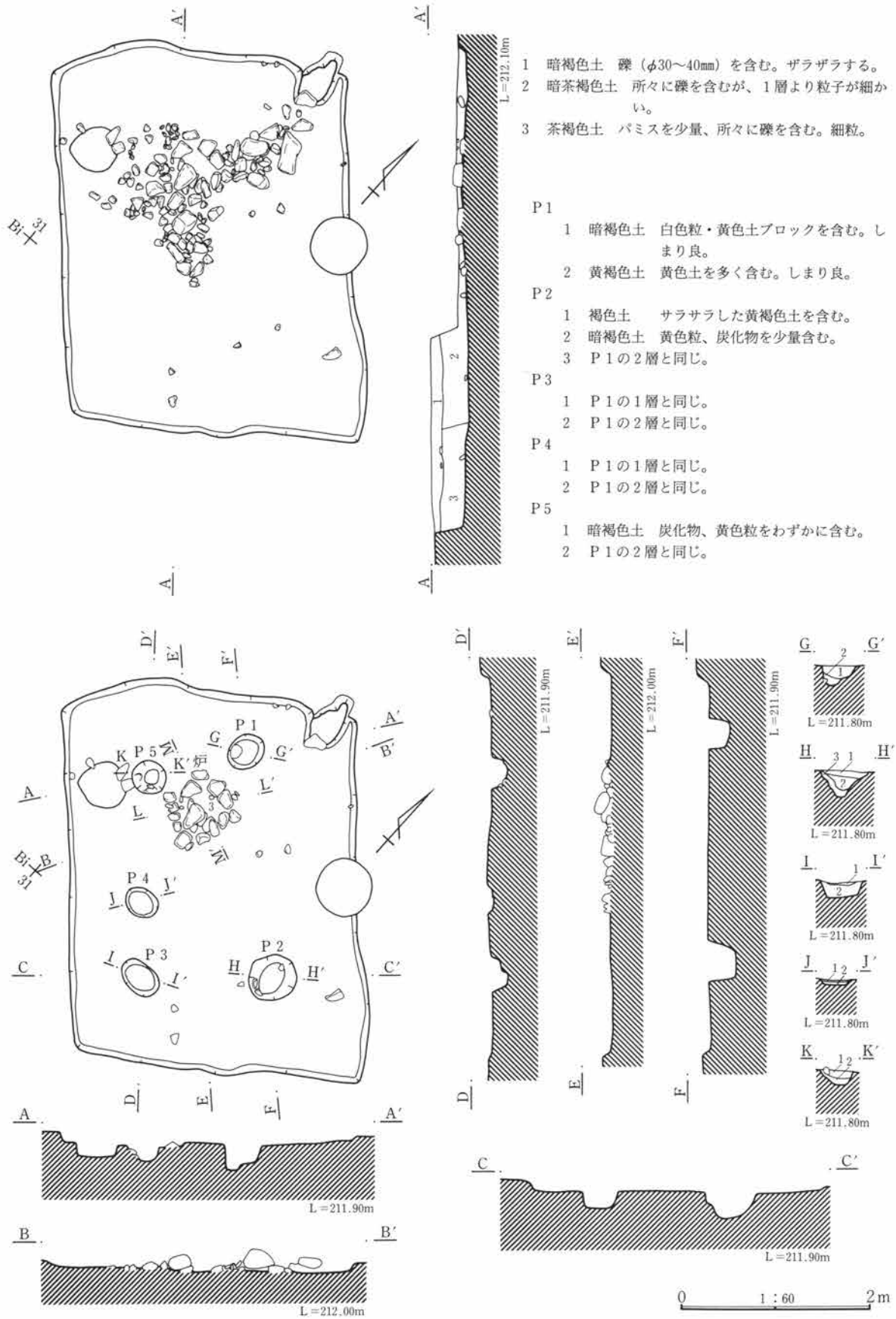
重複 上部を127・150住に切られている。

壁 住居の上部を他住居に壊されており、確認壁高はわずかに11cmである。壁面はゆるやかに傾斜している。
形状と規模 壁は直線的で長方形を呈する。長軸3.92m、短軸3.04mを測る。住居の北壁よりに石囲い炉を検出している。

床面 小礫混じりの黄褐色土を床面としている。比較的凹凸が少なくほぼ平坦である。

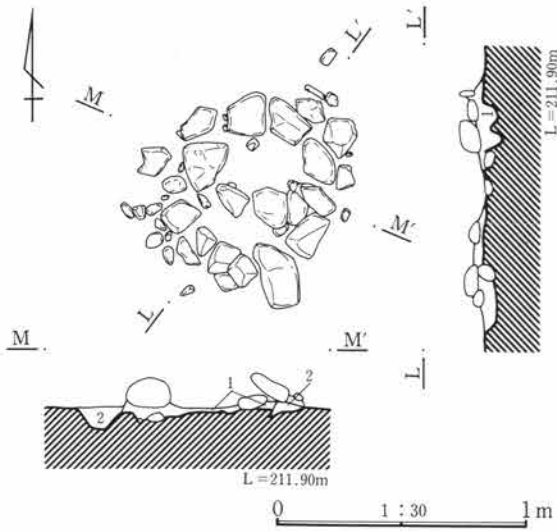
炉跡 石囲い炉が1ヶ所確認された。焼土面などは認められないが、覆土中に焼土粒・炭化物が混入する。炉は径10~20cmほどのやや偏平な石を使用して造られた方形の石囲い炉である。炉石はよく焼け込み、熱を受け赤化している。

柱穴 ピットは5基確認された。P 4 は掘り込みが浅く柱穴とは認められないが、他の4基は支柱穴になる



第32図 166号住居跡

第2節 縄文時代住居跡と出土遺物



第33図 166号住居跡炉

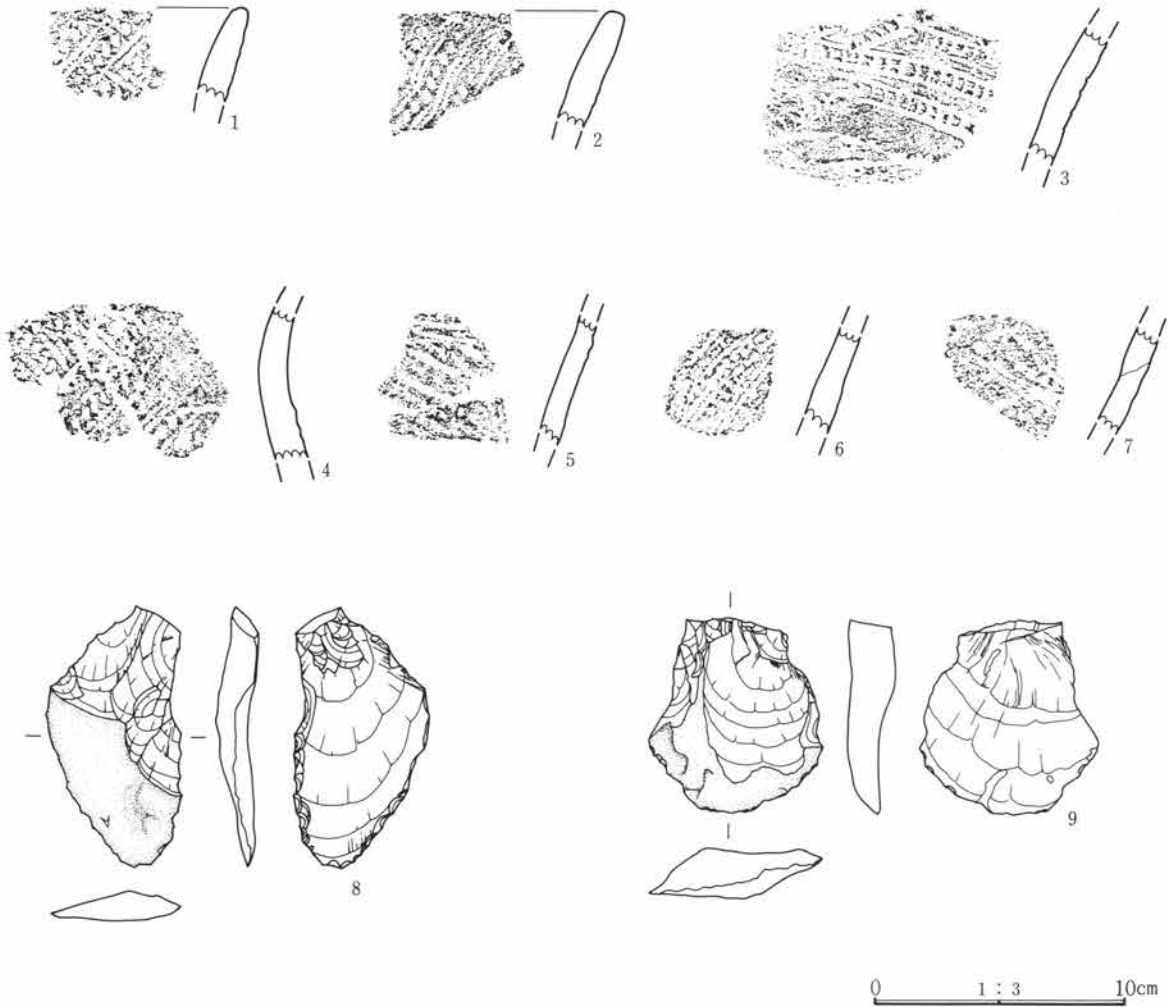
と思われる。P 1 は径40cm、深さ20cmを測り、楕円形を呈する。P 2 は径50cm、深さ27cmを測り、円形を呈する。P 3 は径43cm、深さ14cmを測り、楕円形を呈する。P 5 は径34cm、深さ15cmを測り、円形を呈する。

出土遺物 他住居に切られているため、出土遺物は極めて少なく、いずれも覆土中のものである。土器片数点、スクレイパー2点が出土している。

時期 出土遺物が極めて少なく、時期は判定しがたいが、数点の遺物及び住居の形態から縄文時代前期黒浜期と推定される。

備考

- 1 暗褐色土 黄色粒、焼土粒を少量含み、炭化物を多量に含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒、橙色粒を少量含む。



第34図 166号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

B-179号住居跡 (第35~40図、P L 9・43)

位置 Bo-22・23グリッド 床面積 (22.80) m² 主軸方位 N-87°-E

重複 157・162・169住に切られている。

壁 残存壁高は8~34cmを測ることができる。褐色粘質土を壁面としており、堅くしっかりしている。西壁は162住に切られ、立ち上がりが不明瞭であるが、他は概ね垂直に近い立ち上がりを示す。

形状と規模 西壁を他住居に壊されており、プランは明瞭ではないが、楕円形を呈するものと思われる。東西5.58m南北5.08mを測る。

床面 褐色粘質土を床面としており、全体的に堅くしまっている。凹凸は少なく平坦である。

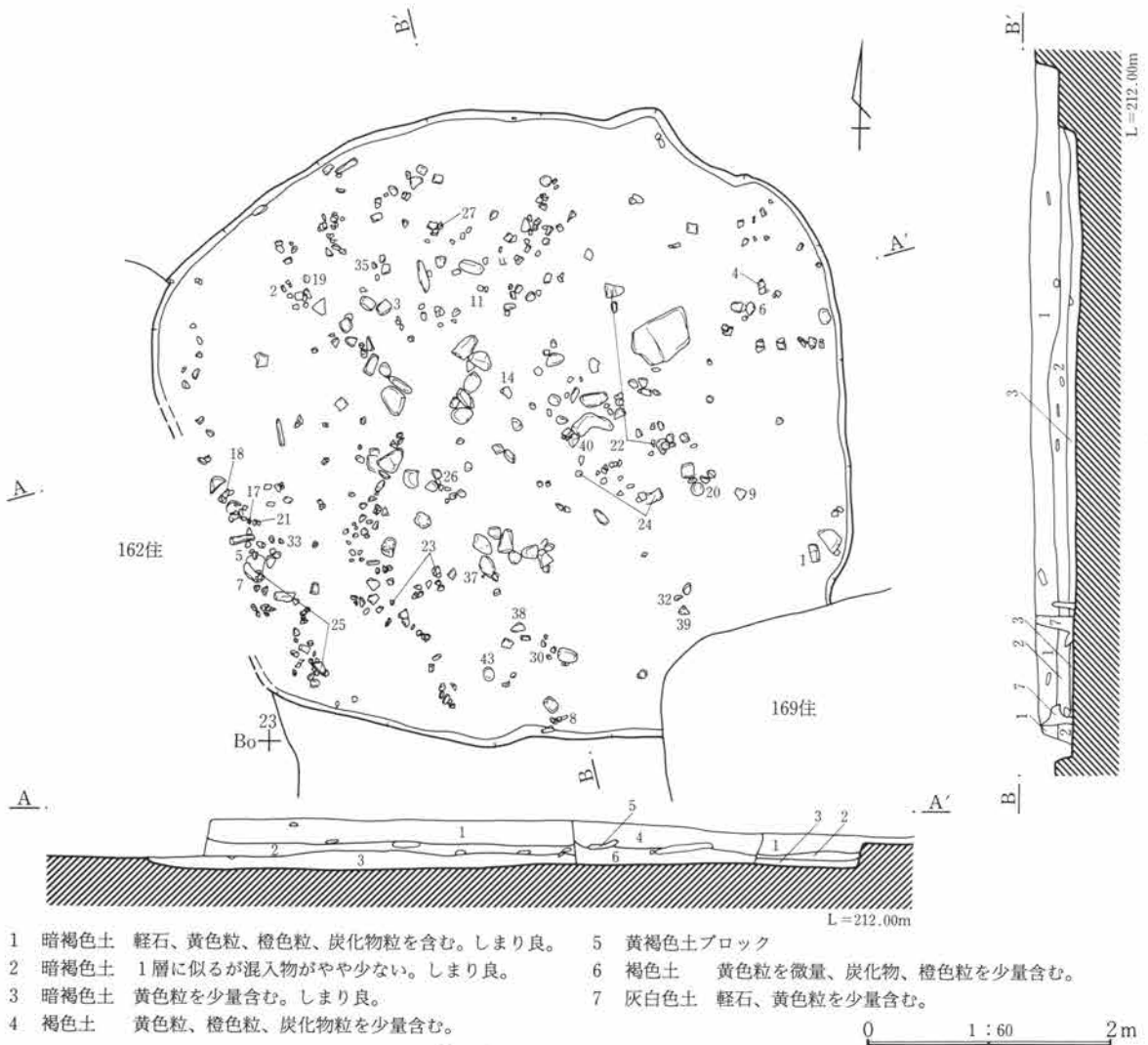
炉跡 西壁寄りに粗粒安山岩の礫を2個置いた径60cm程の焼土が床面に確認された。地床炉と思われる。石は熱を受け赤化しているが、焼土、炭化物の堆積はわずかであった。

柱穴 検出されなかった。

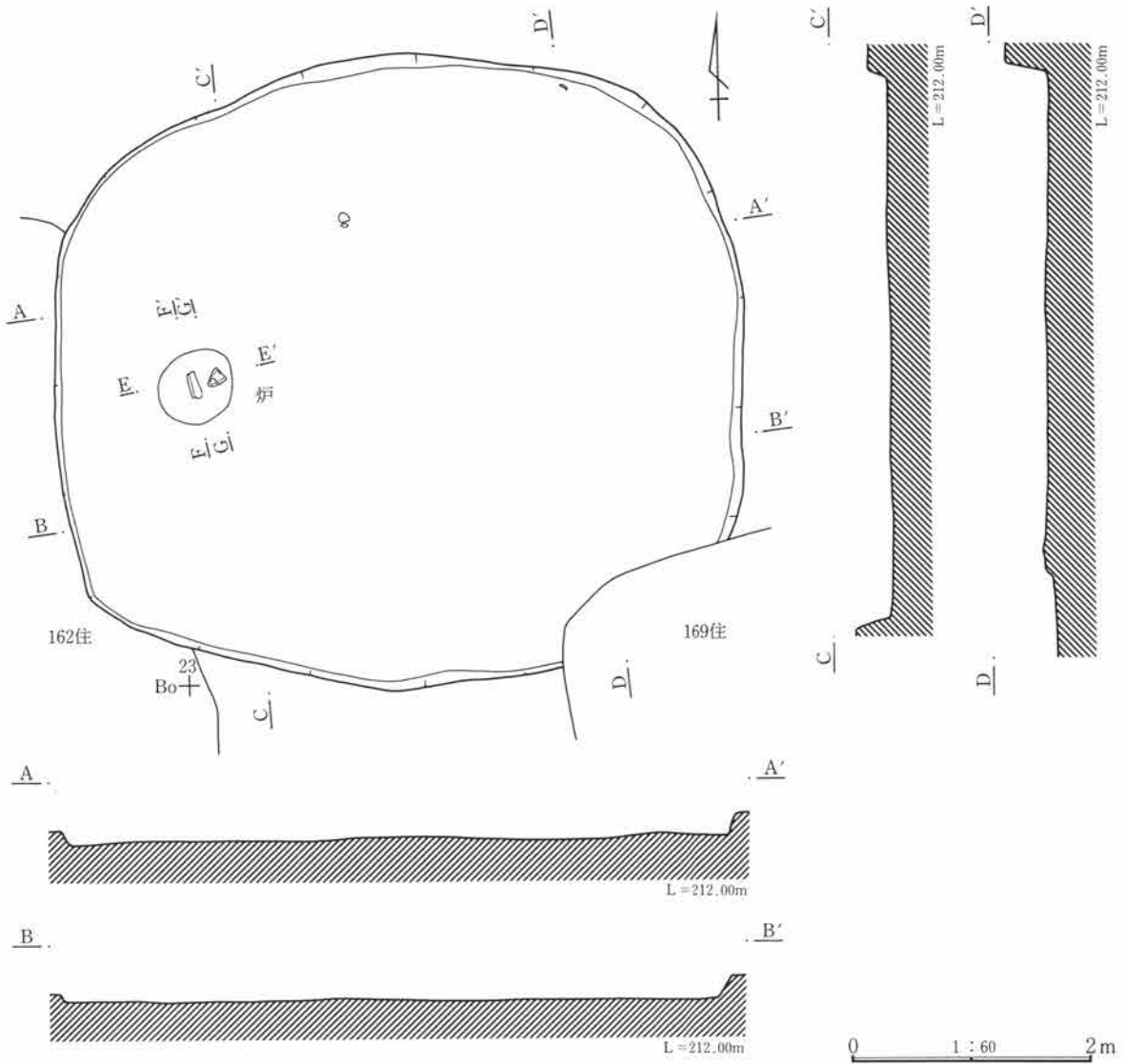
出土遺物 覆土中からの遺物が多く、住居全面に散在的に分布する。縄文土器片が264点、石器は、凹石1点、スクレイパー4点、その他剥片等が18点、計22点出土している。

時期 縄文時代前期黒浜期

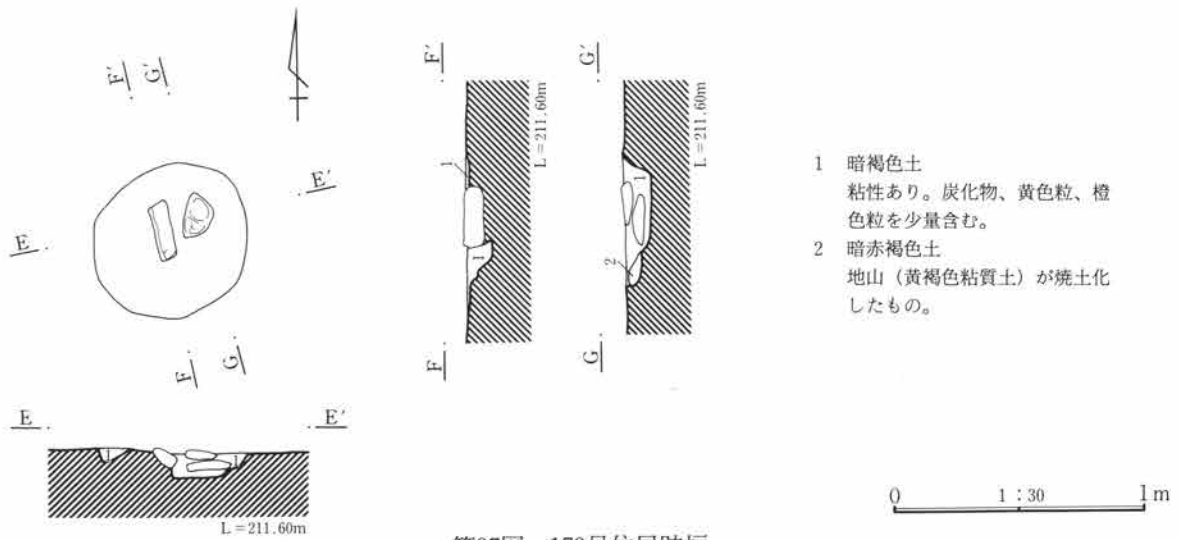
備考



第35図 179号住居跡 (1)

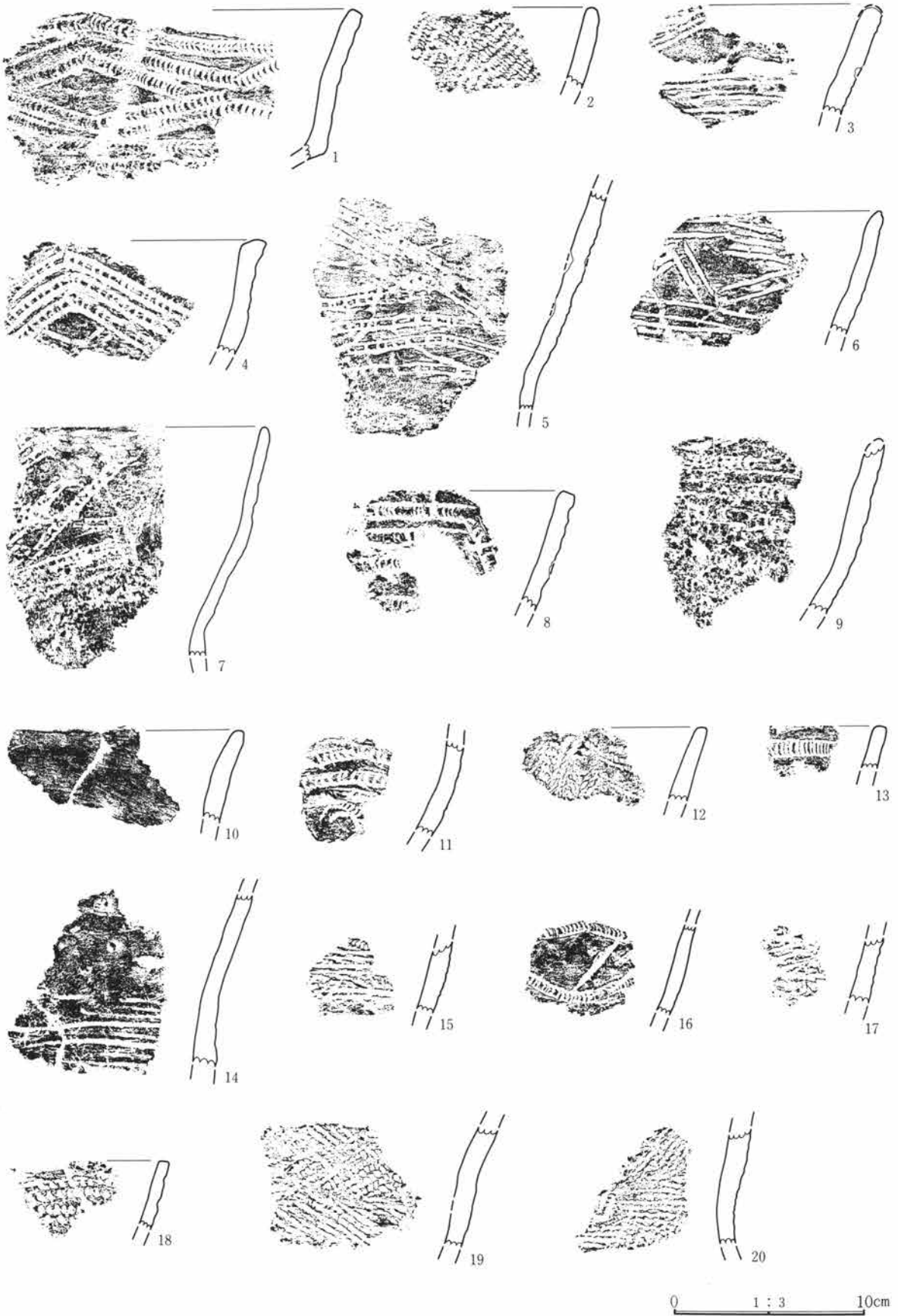


第36図 179号住居跡 (2)

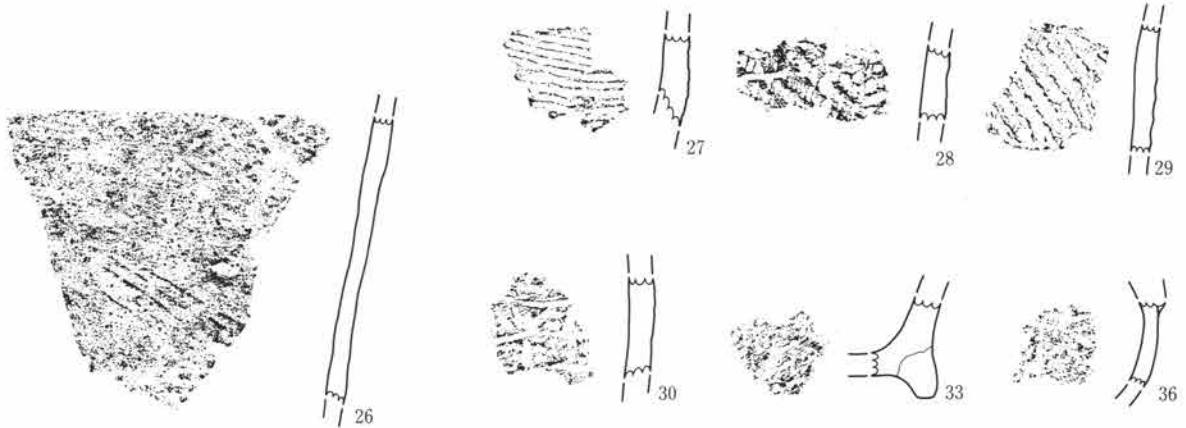
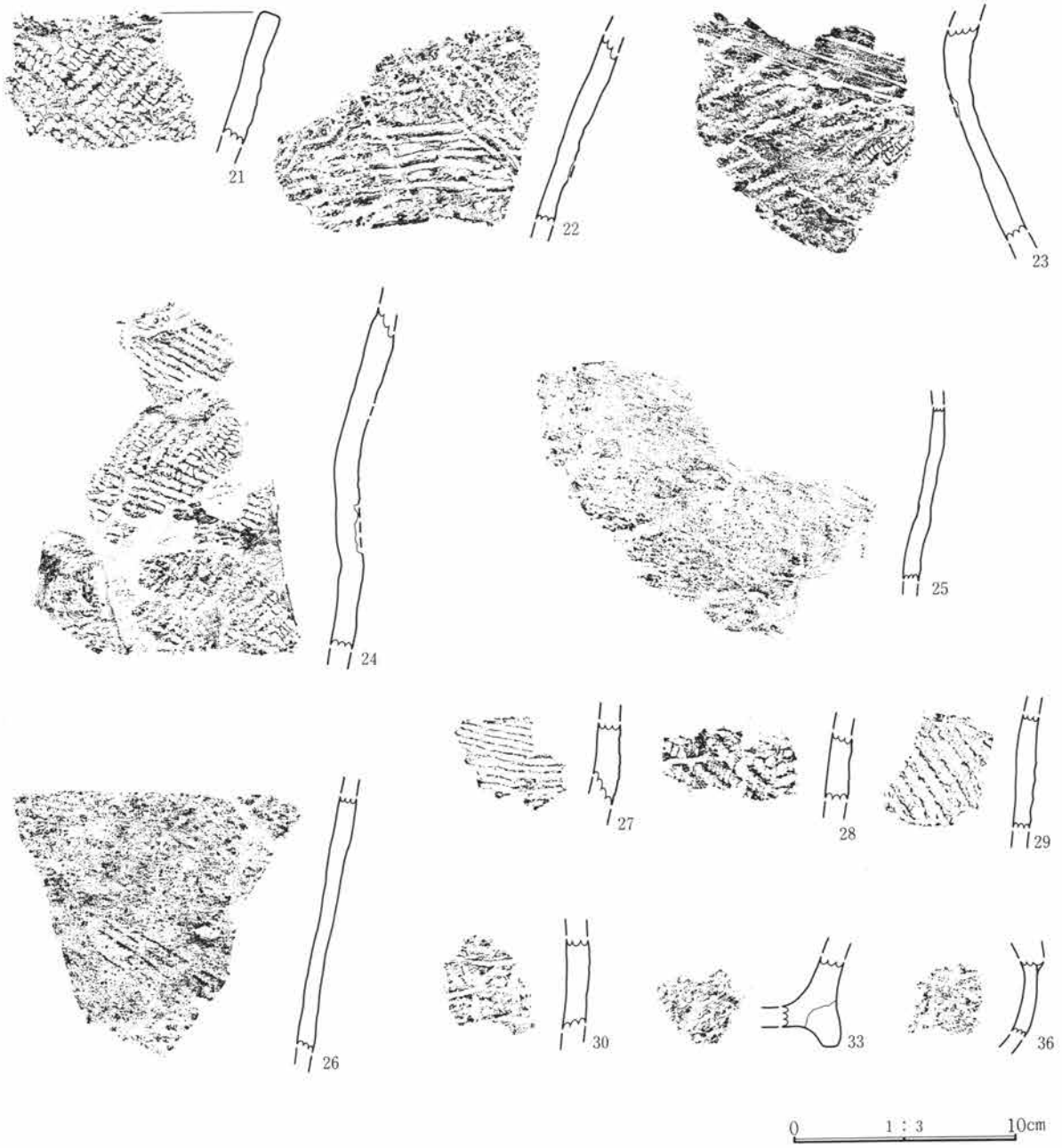


- 1 暗褐色土
粘性あり。炭化物、黄色粒、橙色粒を少量含む。
- 2 暗赤褐色土
地山(黄褐色粘質土)が焼土化したもの。

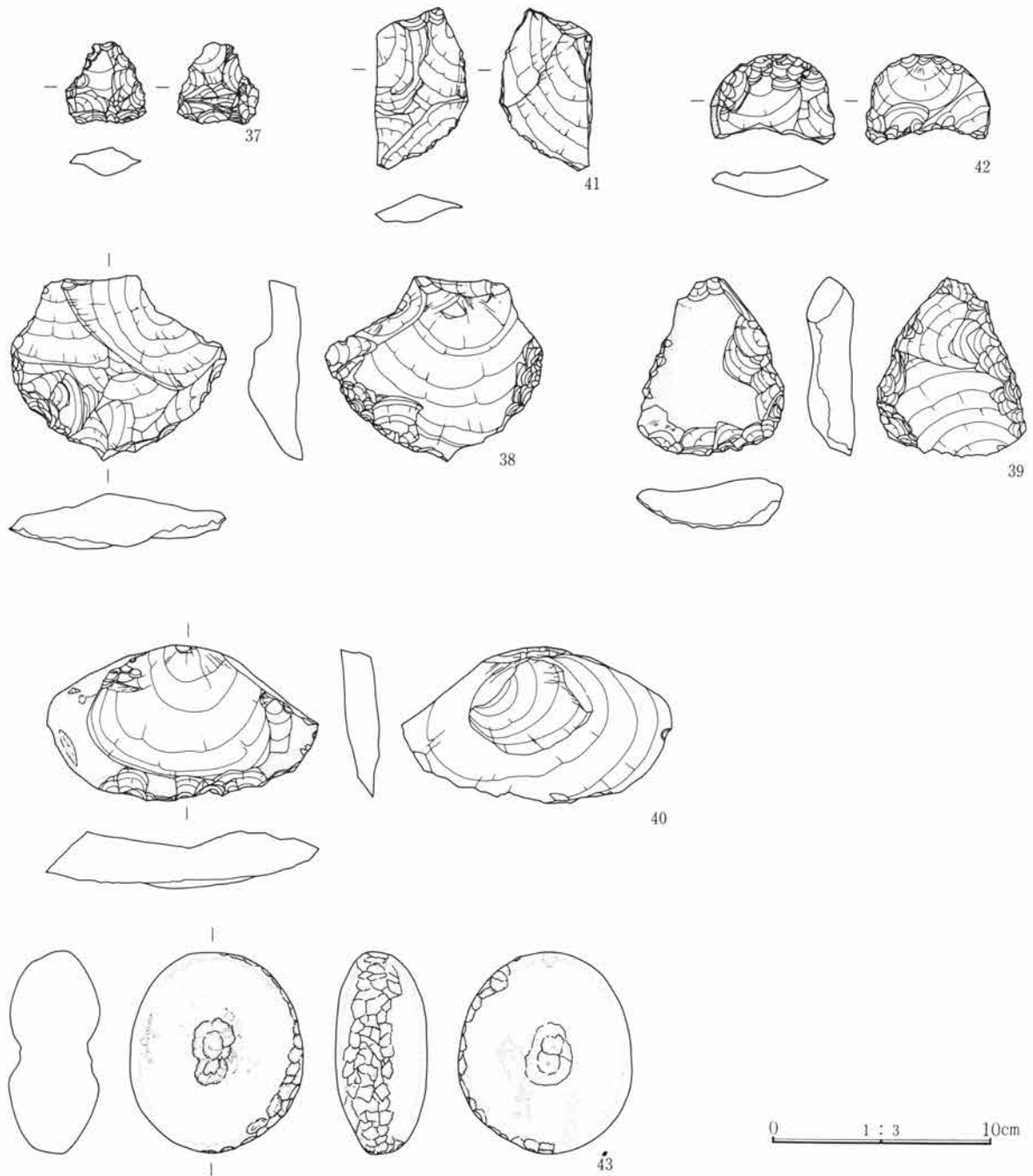
第37図 179号住居跡炉



第38図 179号住居跡出土遺物実測図(1)



第39図 179号住居跡出土遺物実測図(2)



第40図 179号住居跡出土遺物実測図(3)

B-183号住居跡 (第41~45図、P L10・11・44)

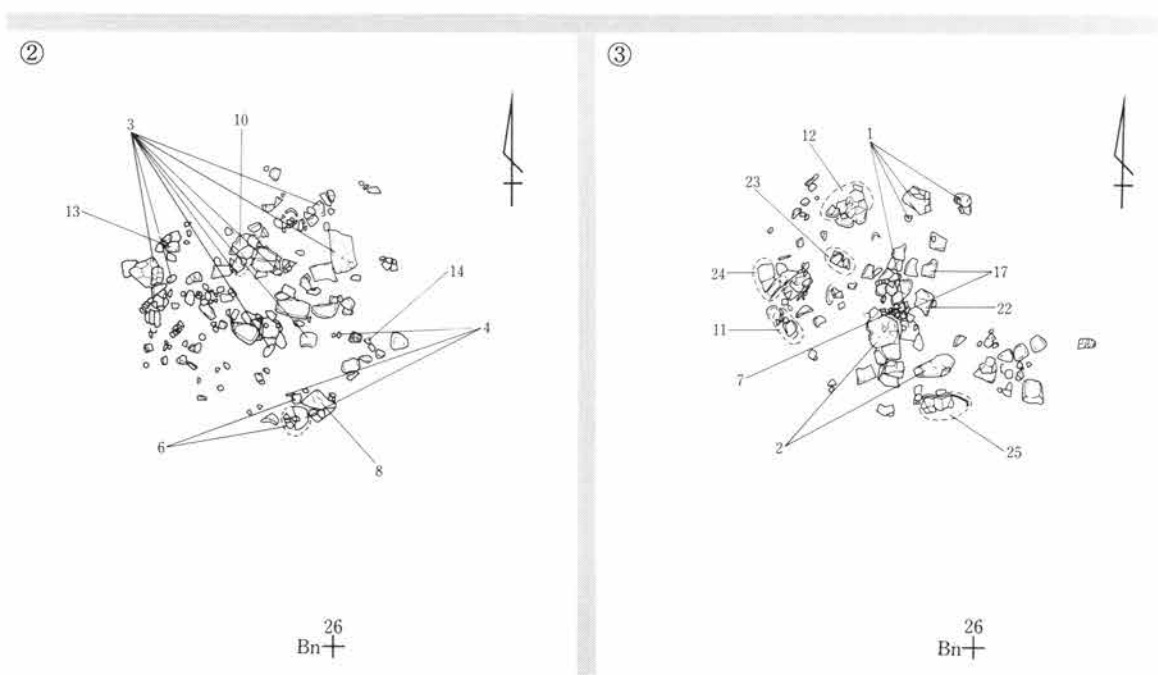
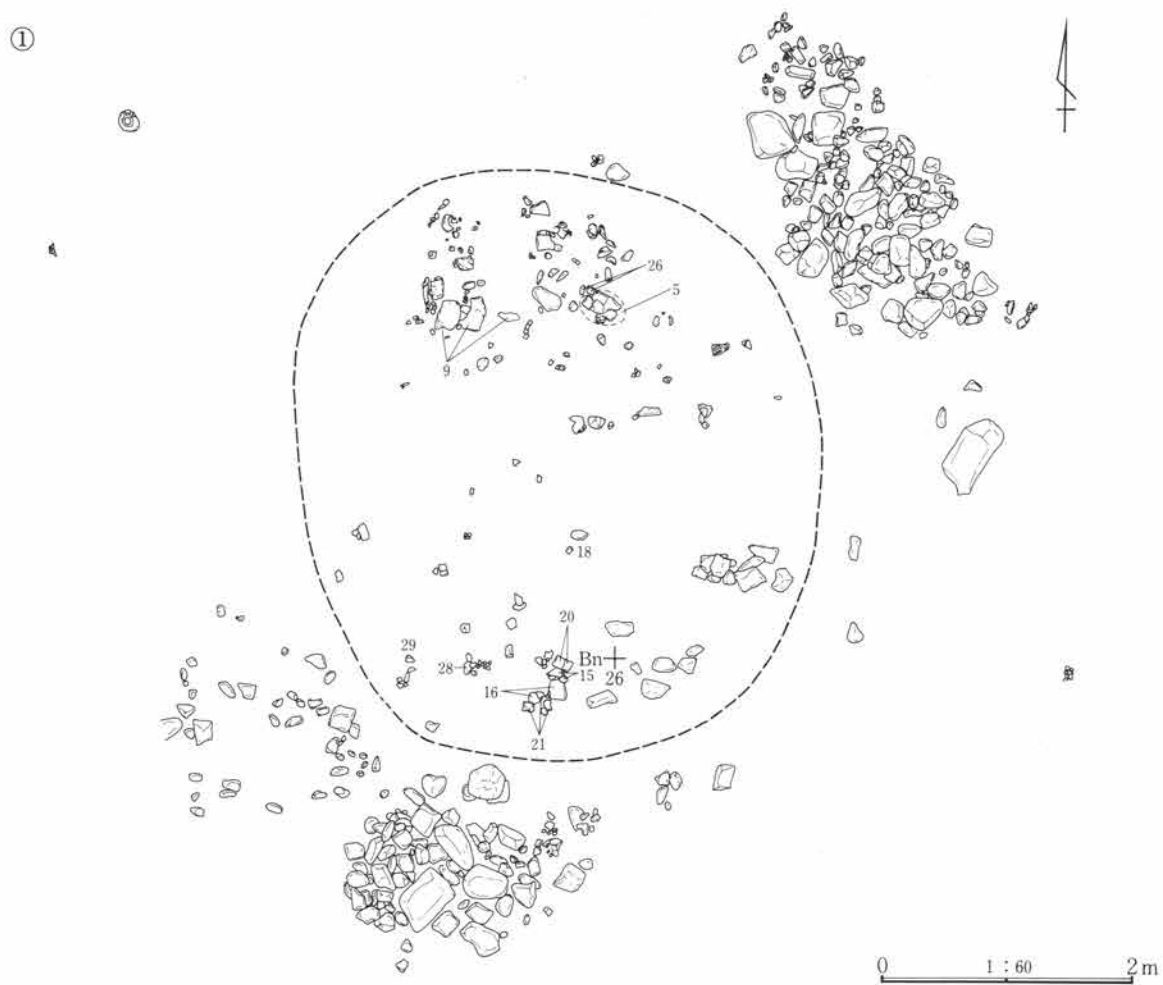
位置 Bn-25・26グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能 重複 なし

壁 残存壁高0cm

形状と規模 掘り込みが浅いため、表土掘削時に遺物が露出し、明確なプランは確認できなかった。破線は遺物分布範囲からおさえた推定線である。規模は不明である。

床面 明確な床面は認定できなかった。

炉跡 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。



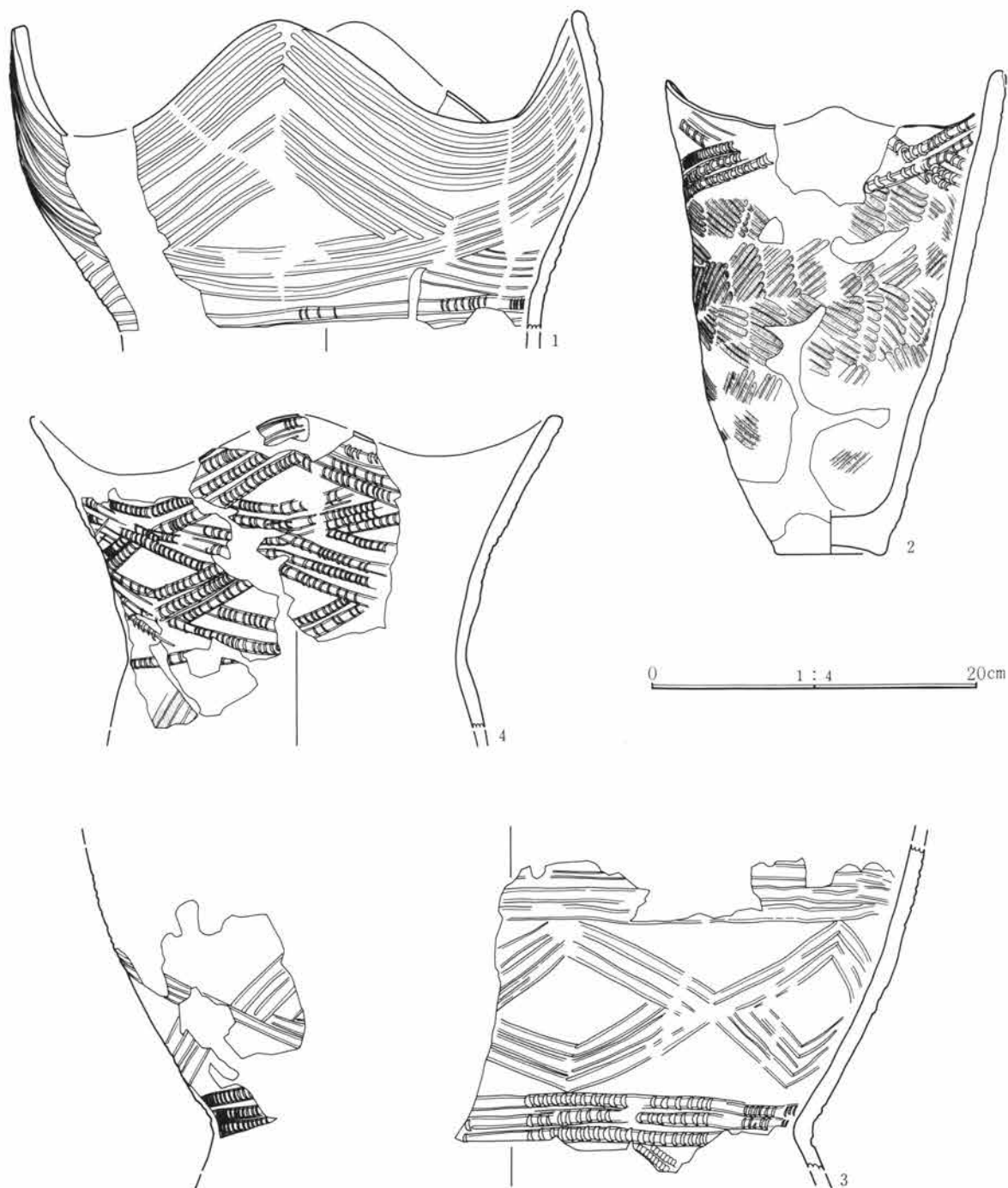
第41図 183号住居跡遺物出土状況図

第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 表土掘削時から遺物が露出しており、何層にも重なって遺存した状況が確認された。ほぼ完形の深鉢1点(2)、大形の深鉢の口縁部2点(1・3)、の他に縄文土器片218点、石器は打製石鏃1点、石匙1点、打製石斧1点、その他に剥片が5点出土している。

時期 縄文時代前期黒浜期

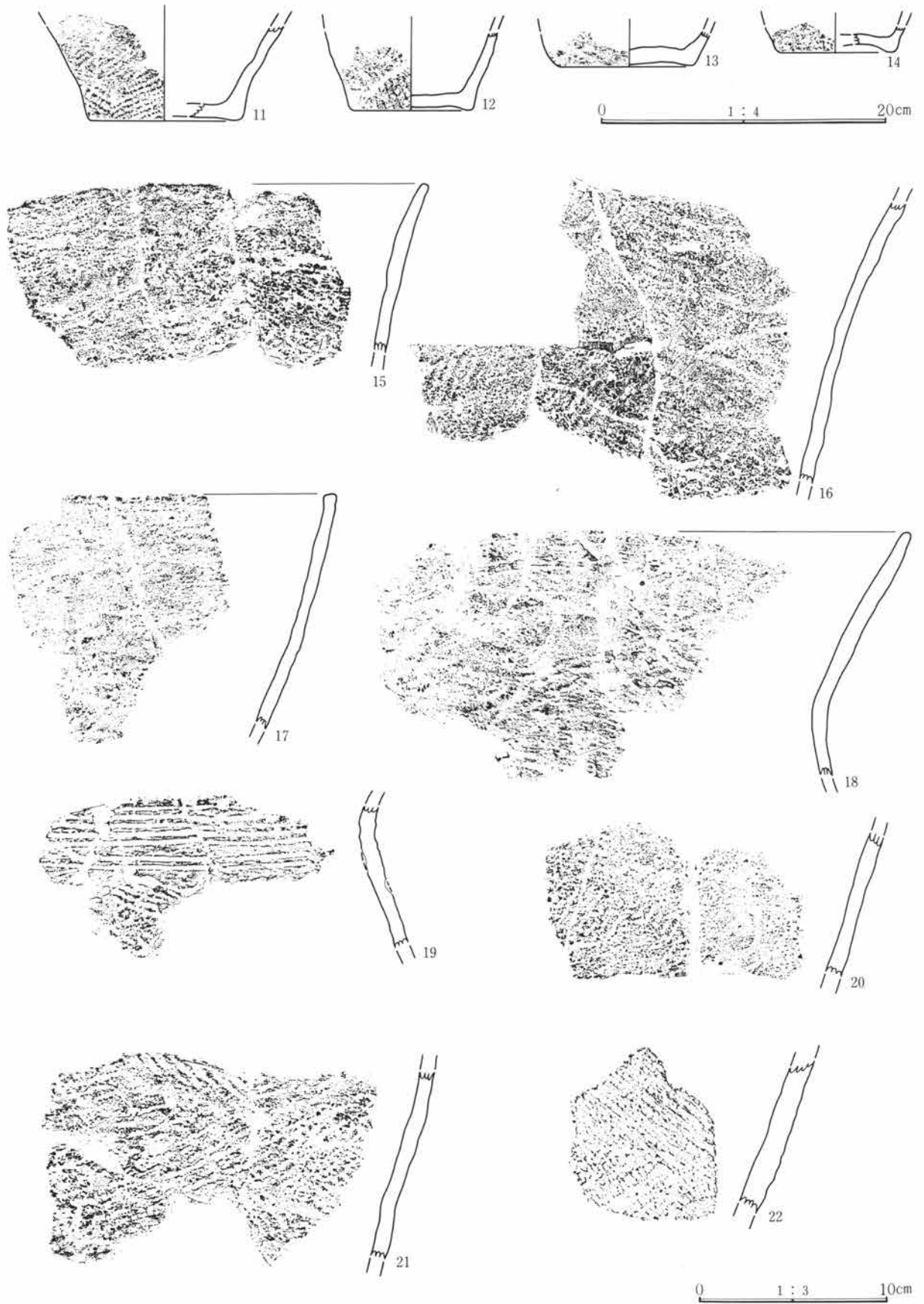
備考 炉、柱穴等住居に伴う施設が検出されず、住居プランもはっきりしないため、住居とするには疑問が残る。



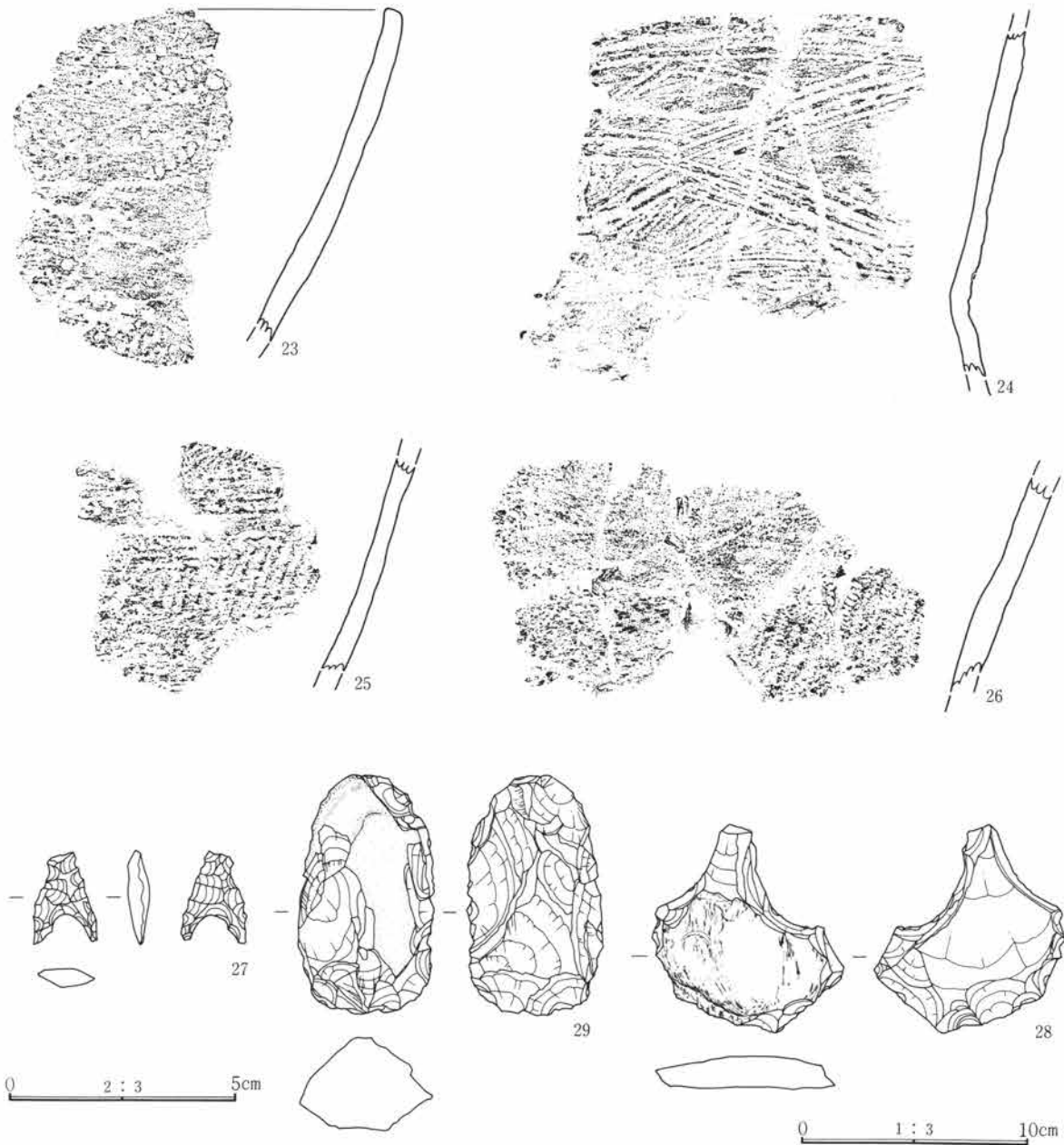
第42図 183号住居跡出土遺物実測図(1)



第43図 183号住居跡出土遺物実測図(2)



第44図 183号住居跡出土遺物実測図(3)



第45図 183号住居跡出土遺物実測図(4)

B-184号住居跡 (第46~52図、P L11・45)

位置 Bo-23・24グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能

重複 住居の北半は98住に、南は162・179住に切られている。

壁 立ち上がりははっきりせず、覆土との区別は難しかった。残存壁高は14~24cmである。

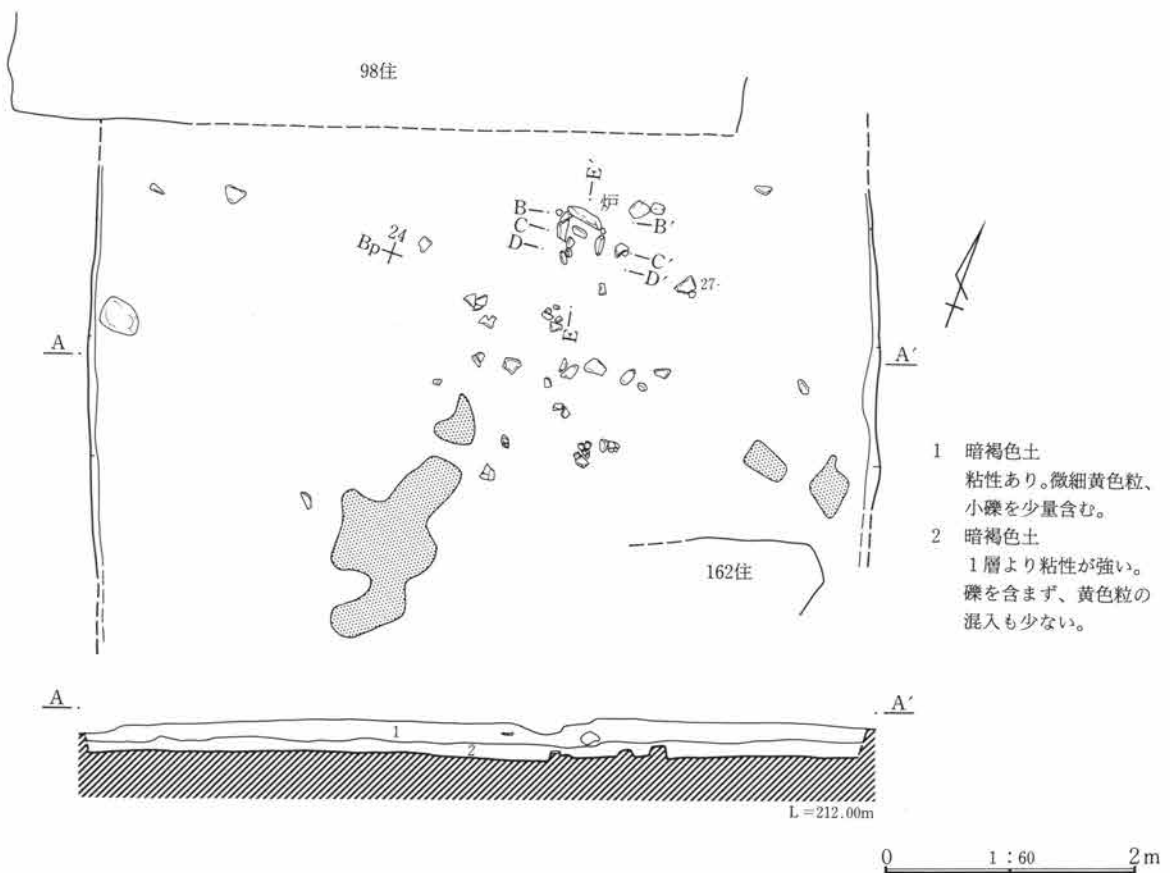
形状と規模 住居の掘り込みが浅く、壁ははっきりしないことと、住居の大半を3つの住居に破壊されていることから、形状は確定できない。残存部が少なく規模も不明である。

床面 粘質褐色土を床面としている。

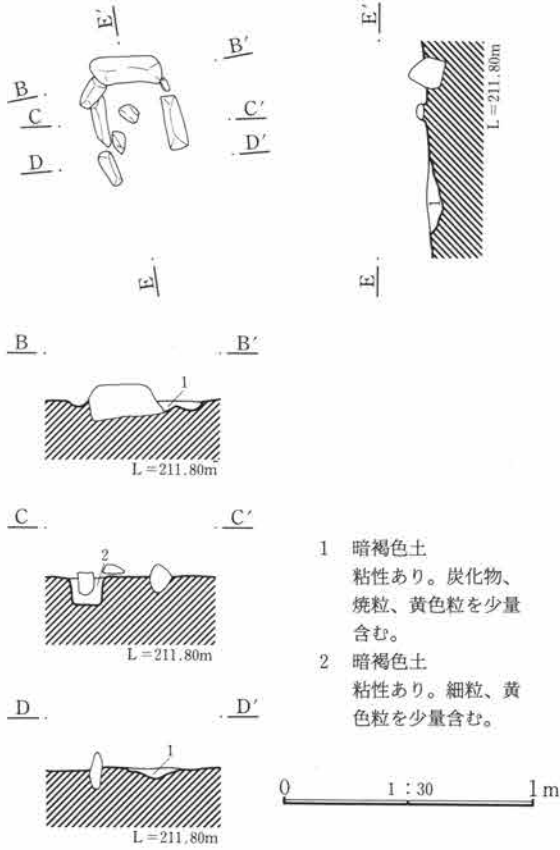
炉跡 残存部の北端に径20~25cm程の礫で三方を囲んだ石囲い炉が検出された。焼土の堆積はみられなかったが、覆土中に焼土粒、炭化物が検出されている。その他にも床面上に5カ所焼土の散布が確認された。



第46図 184号住居跡(1)



第47図 184号住居跡(2)



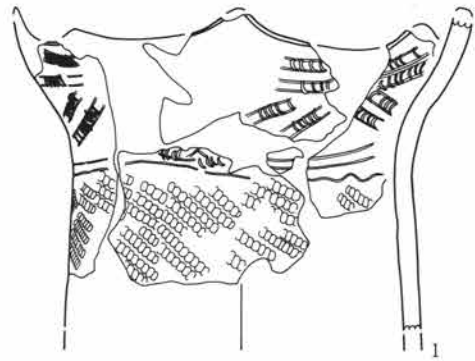
- 1 暗褐色土
粘性あり。炭化物、
焼粒、黄色粒を少量
含む。
- 2 暗褐色土
粘性あり。細粒、黄
色粒を少量含む。

柱穴 検出されなかった。

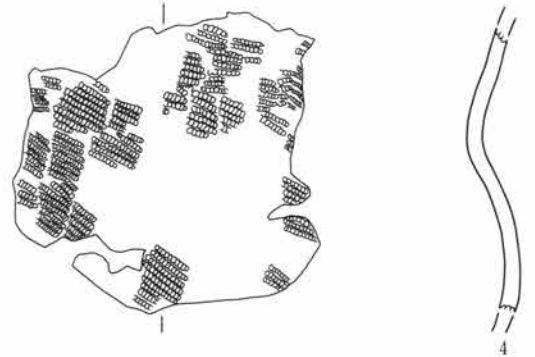
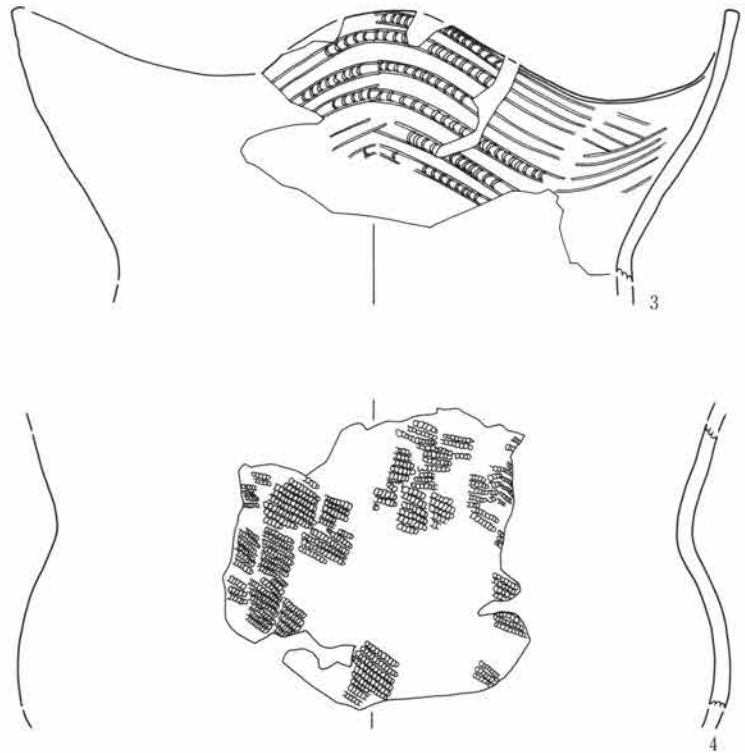
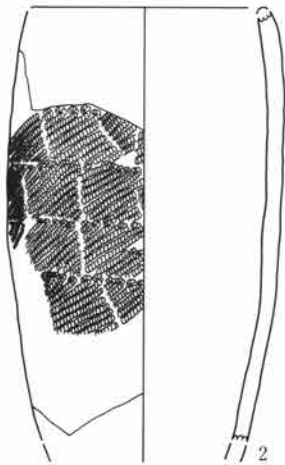
出土遺物 縄文土器片145点、石器は凹石1点、剥片、スクレイパー等7点、計8点が出土している。

時期 縄文時代前期黒浜期

備考

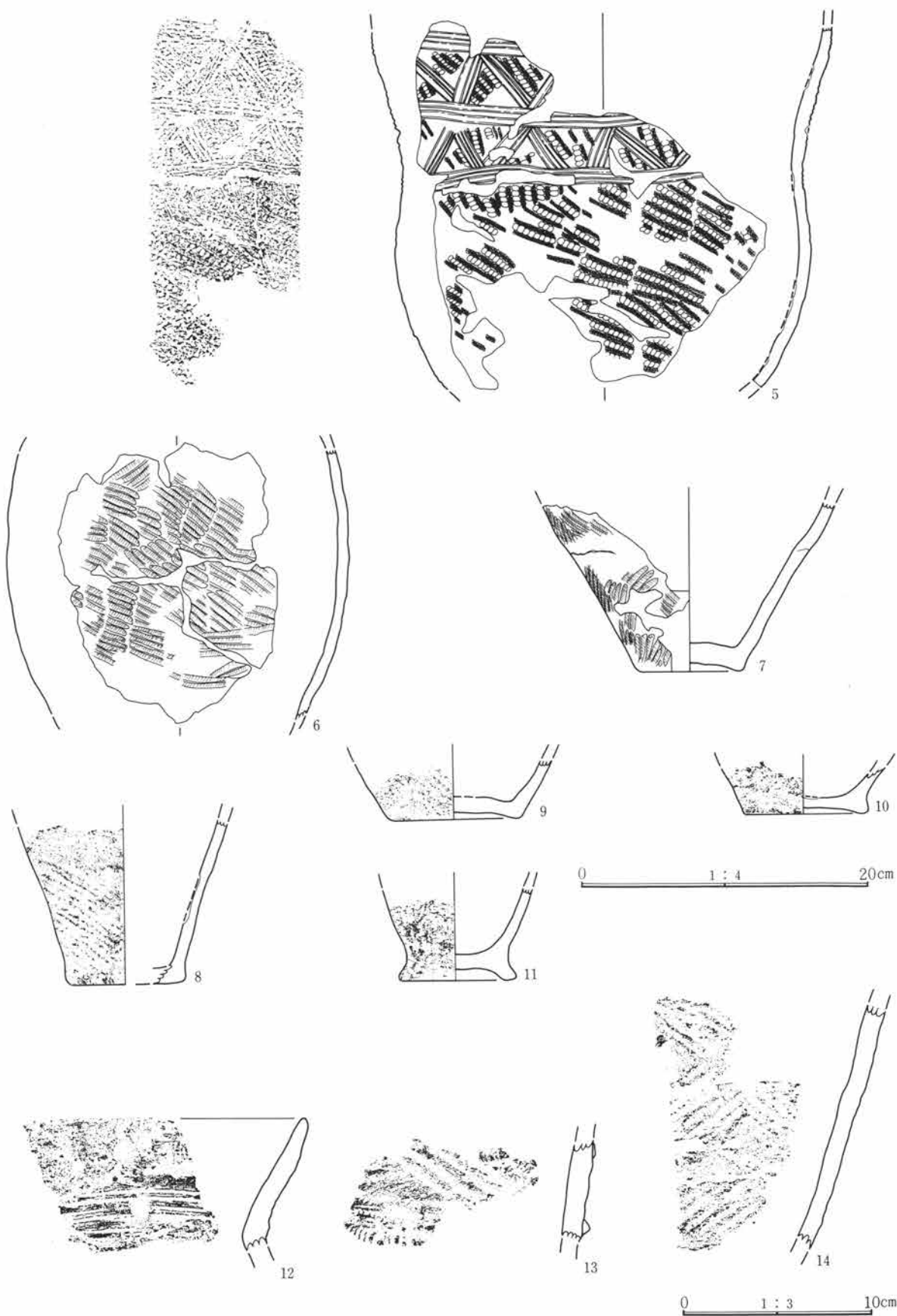


第48図 184号住居跡炉



0 1:4 20cm

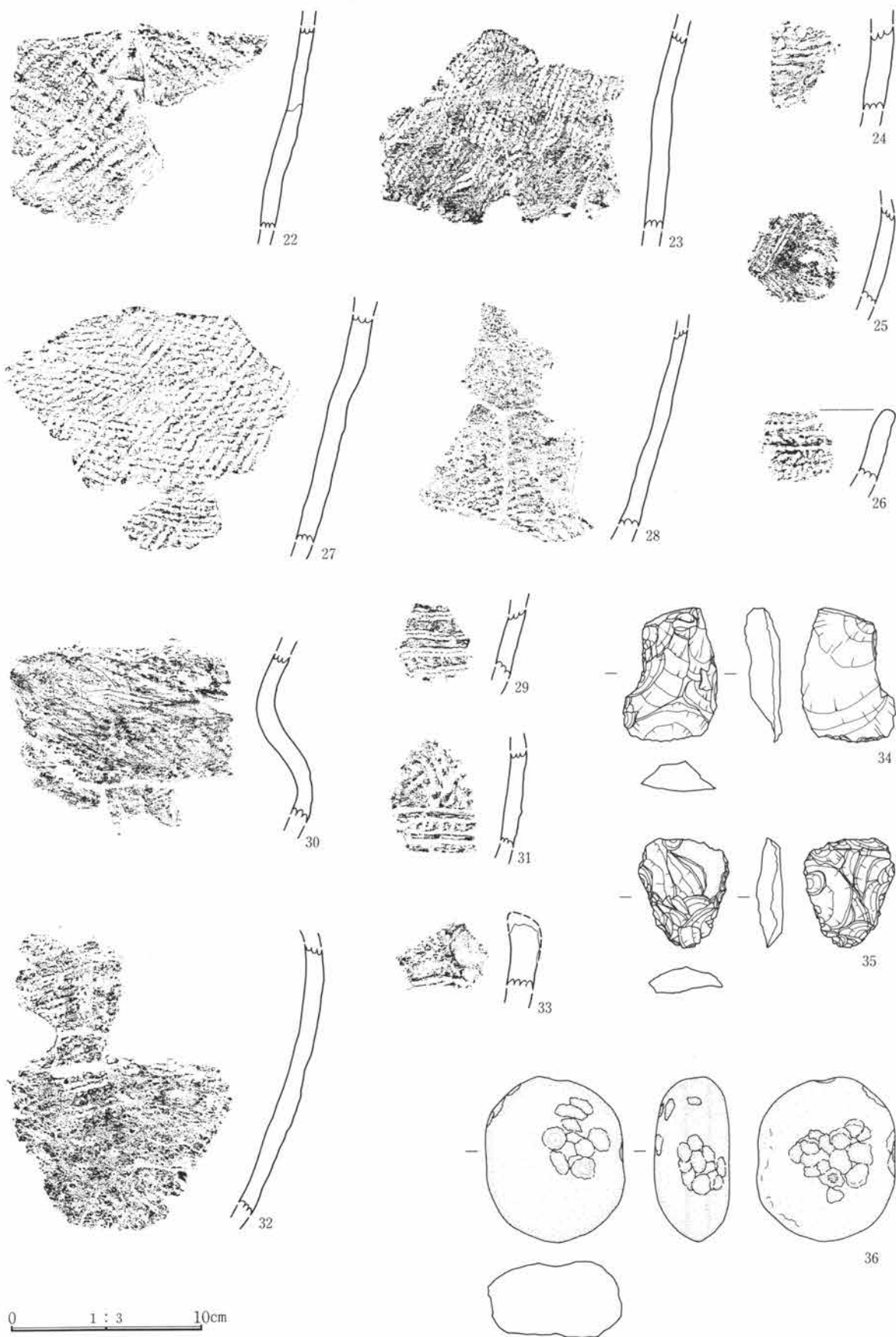
第49図 184号住居跡出土遺物実測図(1)



第50図 184号住居跡出土遺物実測図(2)



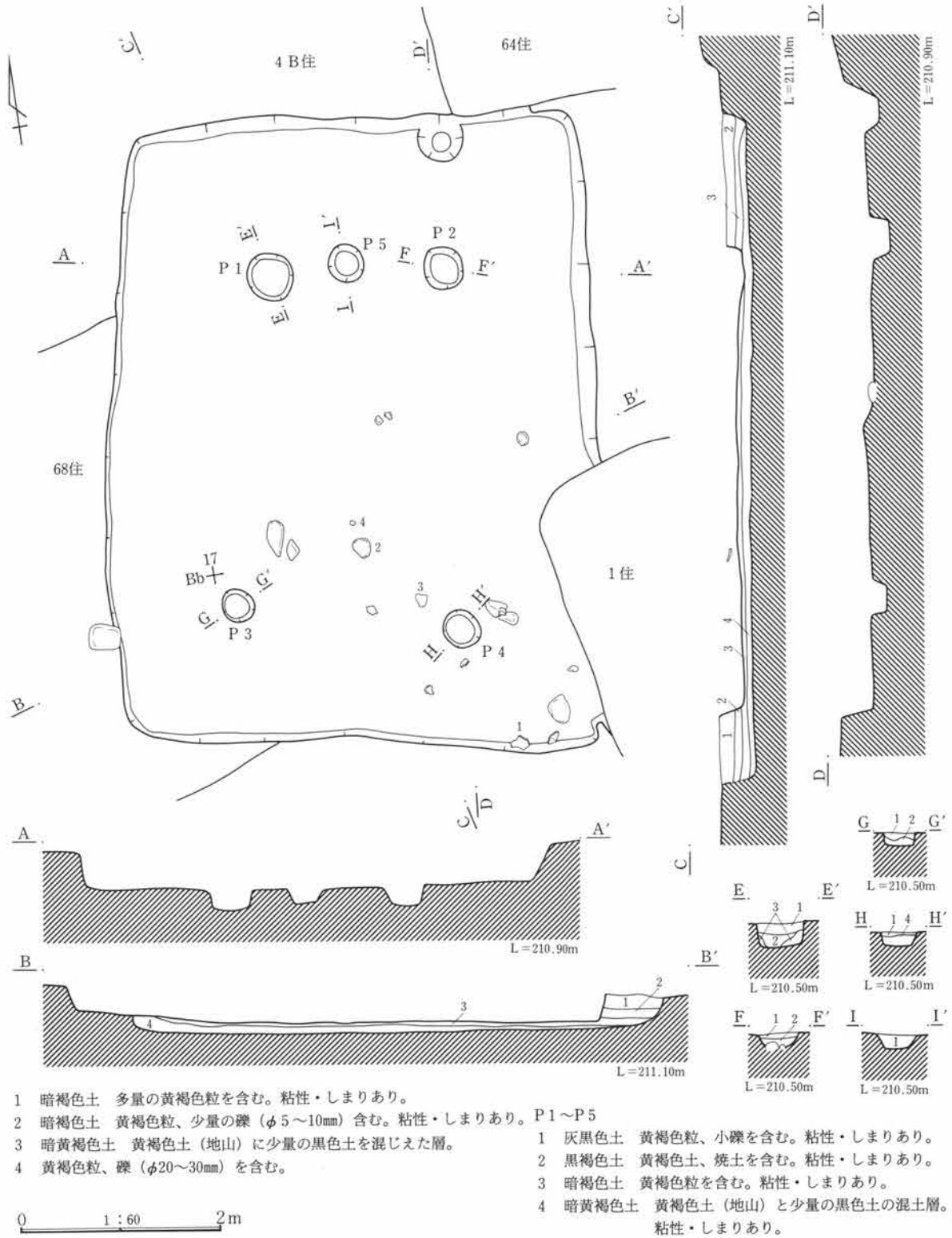
第51図 184号住居跡出土遺物実測図(3)



第52図 184号住居跡出土遺物実測図(4)

第3節 弥生時代住居跡と出土遺物

B-5号住居跡 (第53・54図、P L15・45)



第53図 5号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

位置 Ba・Bb-16グリッド 床面積 27.72m² 主軸方位 N-12°-E

重複 住居の北壁を4A・4B住に切られ、住居の大半を68号住に、また東壁の一部を1号住に切られている。

壁 遺構の重複のため、東壁の一部だけが、明確に遺存している。残存壁高は39cmを測ることができる。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸6.18m、短軸4.70mを測ることができる。

床面 所々に地山の礫が露出しているが、比較的平坦な面が確認できた。粘質黄褐色土を床面としている。

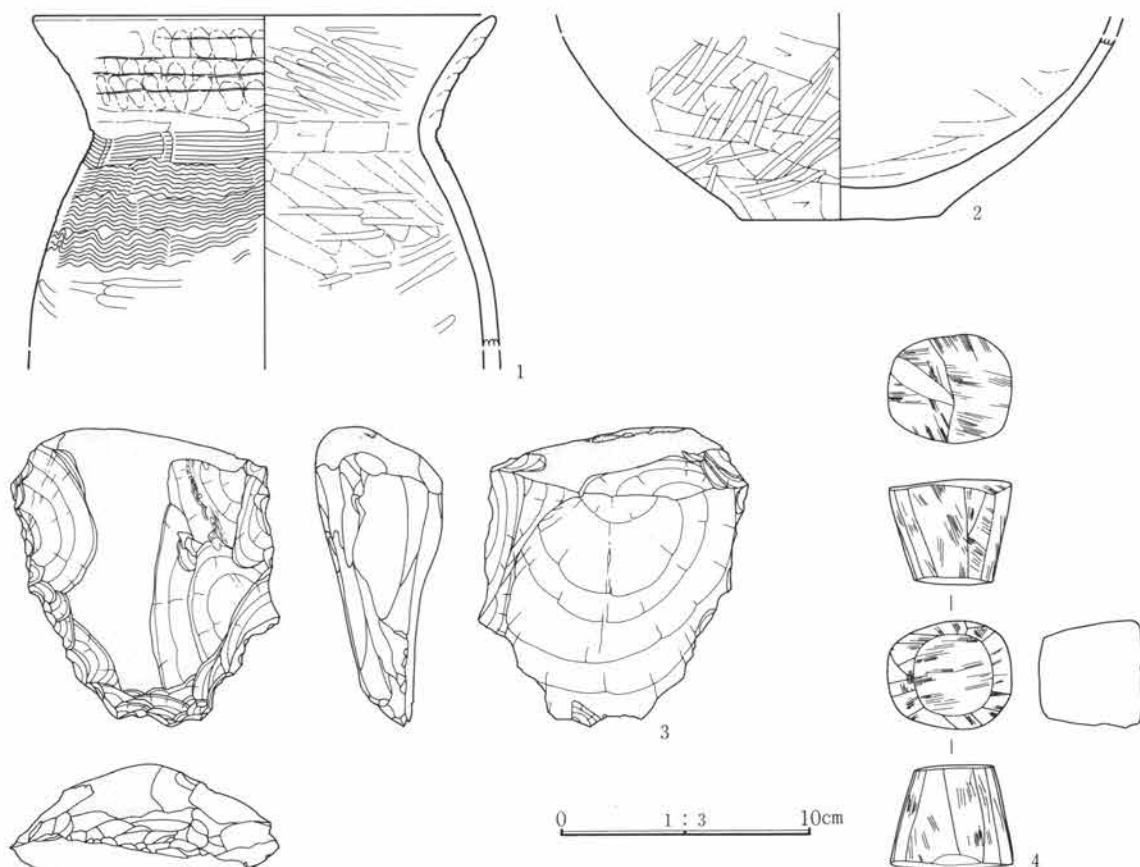
炉跡 住居のほぼ中軸線上、北側の支柱穴(P1・P2)間に長軸39cm、短軸36cmの円形の掘り込みが見られる。調査時には炉と認定しているが、焼土面が検出されなかったこと、掘り込みが深く覆土にも焼土、炭化物が見られないこと等を考慮すると炉とするにはやや疑問が残る。

柱穴 住居プランのほぼ対角線上に支柱穴を4箇所(P1~P4)で検出することができた。支柱は4本構造である。

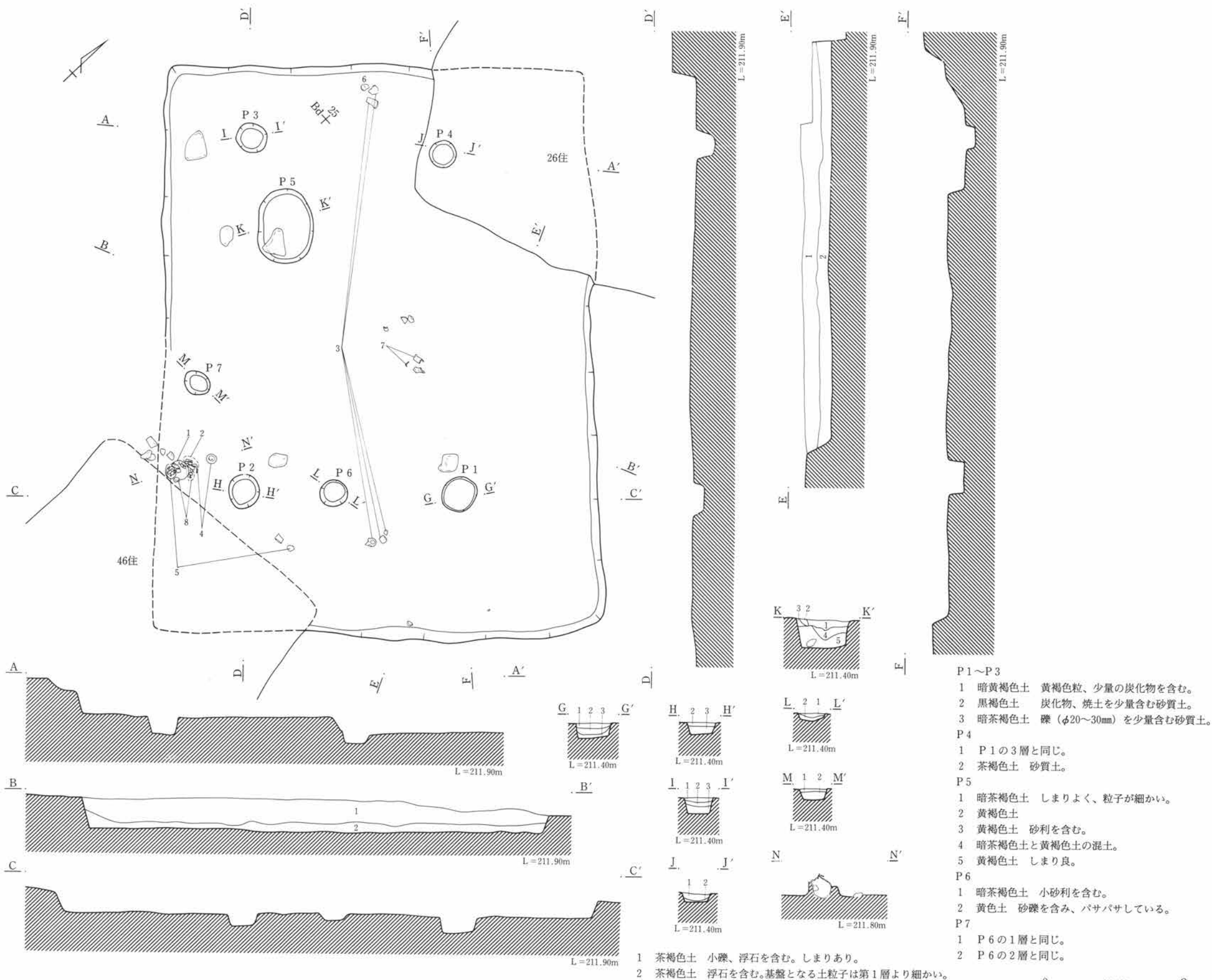
No.	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	50cm	44cm	32cm	39cm
下端長径	39cm	34cm	25cm	29cm
深 さ	21cm	20cm	12cm	14cm

出土遺物 出土遺物はきわめて少ない。覆土下部より甕2点(1・2)、スクレイパー1点(3)、砥石1点(4)を検出している。図化可能な遺物は上記の4点のみである。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と思われる。



第54図 5号住居跡出土遺物実測図



第55図 22号住居跡

B-22号住居跡 (第55~57図、P L 15・16・46)

位置 Bc・Bd-23~25グリッド 床面積 49.64㎡ 主軸方位 N-47°-W

重複 26・46・77号住と重複し、いずれよりも先行する。

壁 北及び南西隅を他住居に切られ周壁の一部が破壊されているが、他は概ね良好な壁面を検出することができた。立ち上がりはやや外傾し、残存壁高は33cmを測ることができた。礫混じりの粘質黄褐色土を壁面としている。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸8.12m、短軸6.24mを測ることができる。

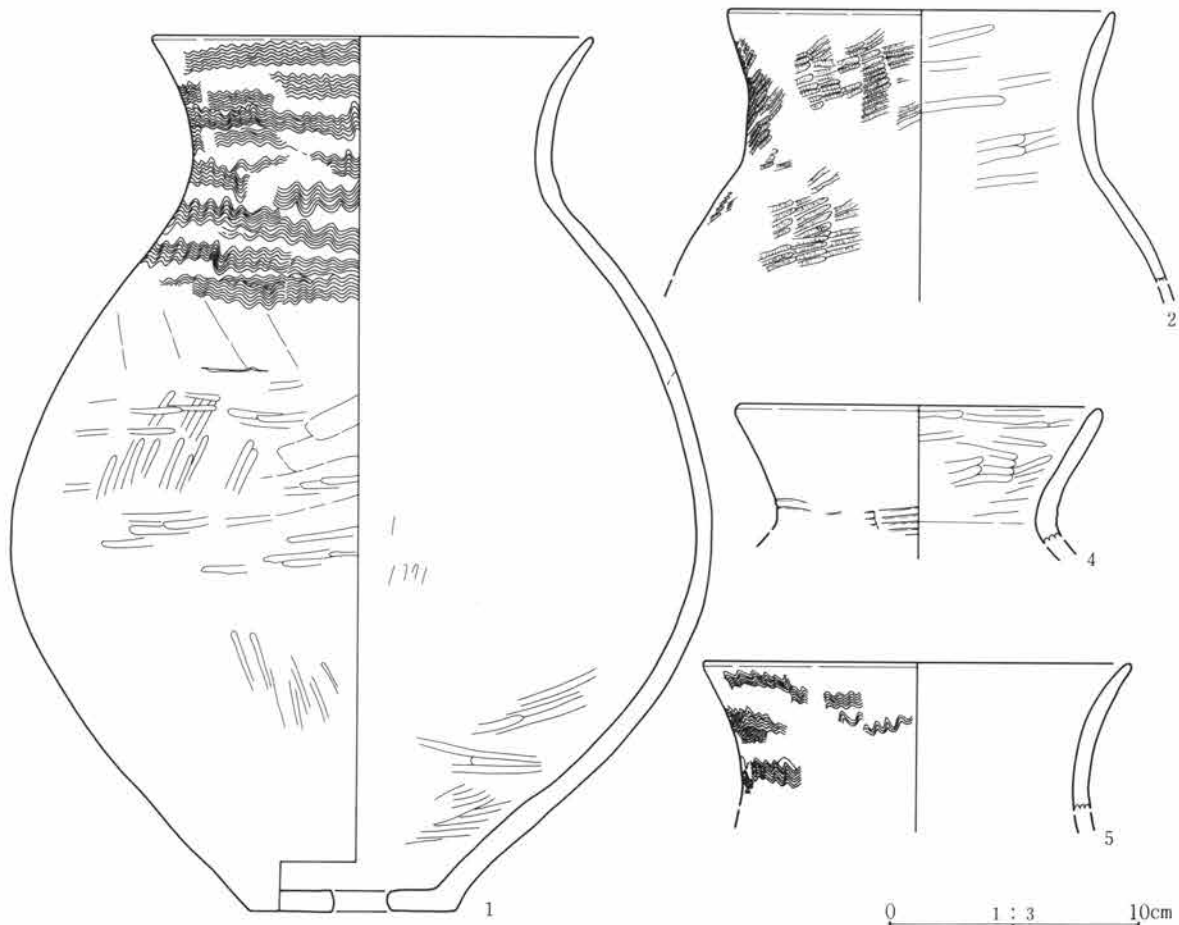
床面 比較的凹凸が少なく平坦である。粘質黄褐色土(地山)を床面としている。

炉跡 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 P 1~P 4 の4箇所が支柱穴になると思われるが、位置的に検討を要す。

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
上端長径	52cm	50cm	44cm	39cm	98cm	39cm	40cm
下端長径	46cm	38cm	30cm	30cm	92cm	30cm	28cm
深 さ	22cm	18cm	26cm	38cm	42cm	11cm	16cm

出土遺物 南西隅の床面直上より、完形の甕1点(1)が斜位の状態で出土している。また、その周辺からも甕2点(2・4)が床面直上より、甕1点(8)が覆土下部より検出されている。その他の遺物は散在しており、床面直上から甕3点(3・5・6)、高坏1点(7)、覆土中より磨製石鏃1点(9)が出土してい

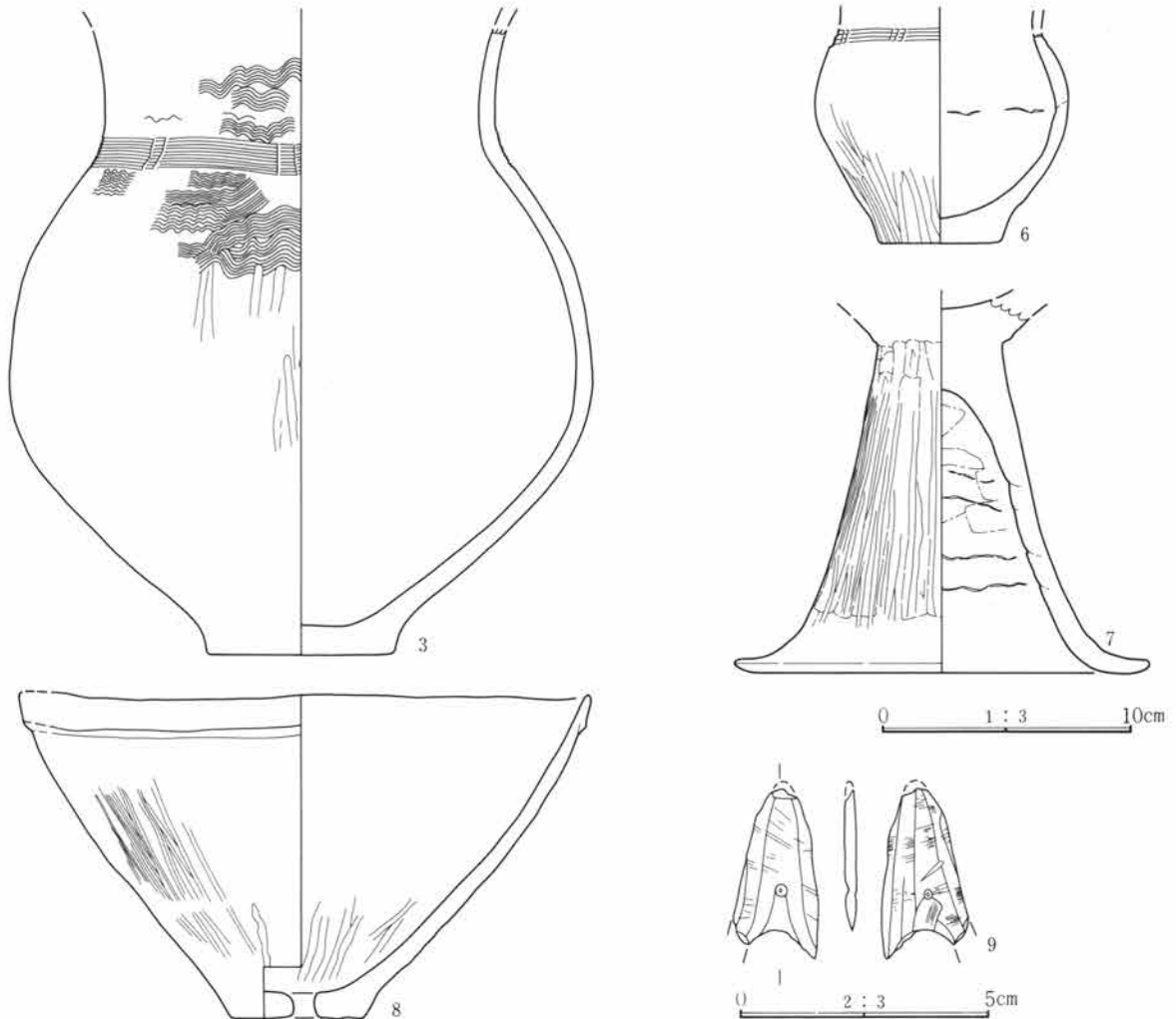


第56図 22号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

甕（1）は底部に焼成後の穿孔があり、甕に転用したものと思われる。甕（2）は原体Lの斜縄文を施した赤井戸、吉ヶ谷式の外来系の土器である。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と思われる。



第57図 22号住居跡出土遺物実測図（2）

B-23号住居跡（第58・59図、P L16・46）

位置 Bc・Bd-26・27グリッド 床面積 12.88㎡ 主軸方位 N-15°-W 重複 なし

壁 壁線はほぼ直線的で、周壁は全周する。立ち上がりはほぼ直立し、残存壁高は24cmである。

形状と規模 隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.20m、短軸3.40mを測ることができる。

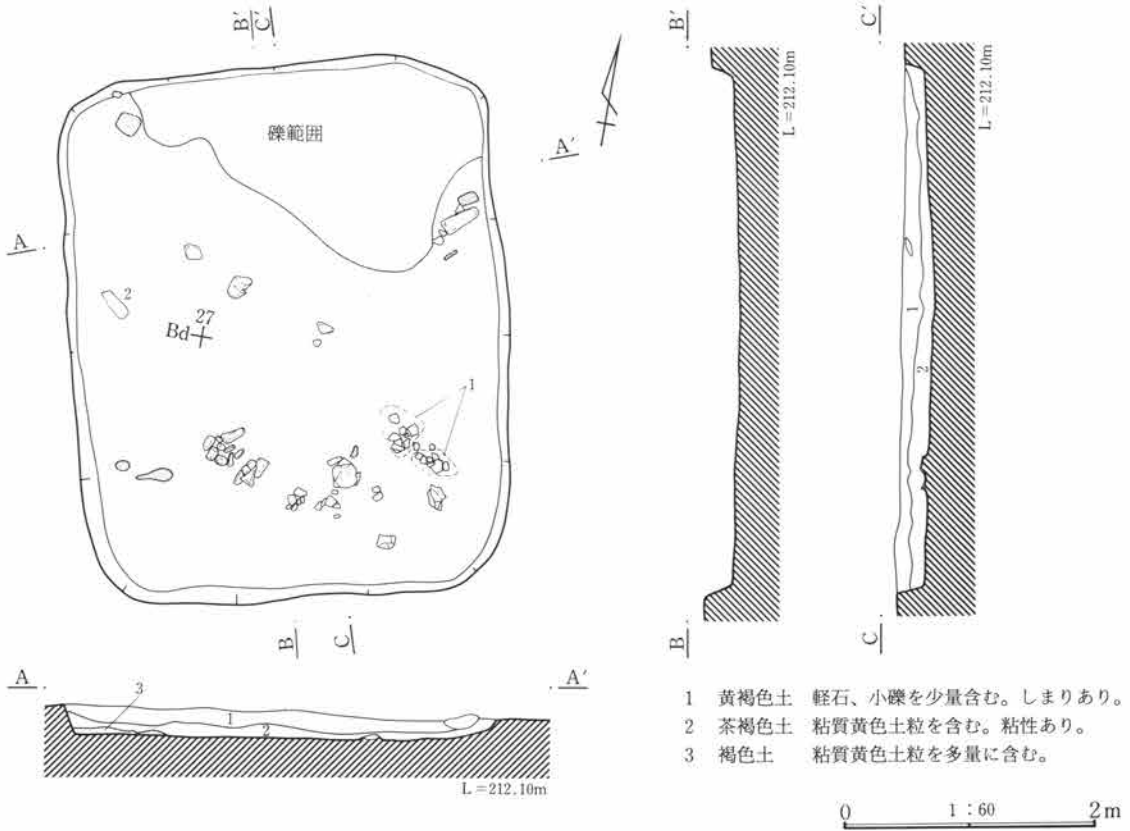
床面 住居北東隅に礫が密集して出土している。床面に炭化物が散在し、焼失家屋の可能性も考えられる。

粘質黄褐色土層（地山）を床面としている。床面は比較的平坦で、固く踏み固められている。

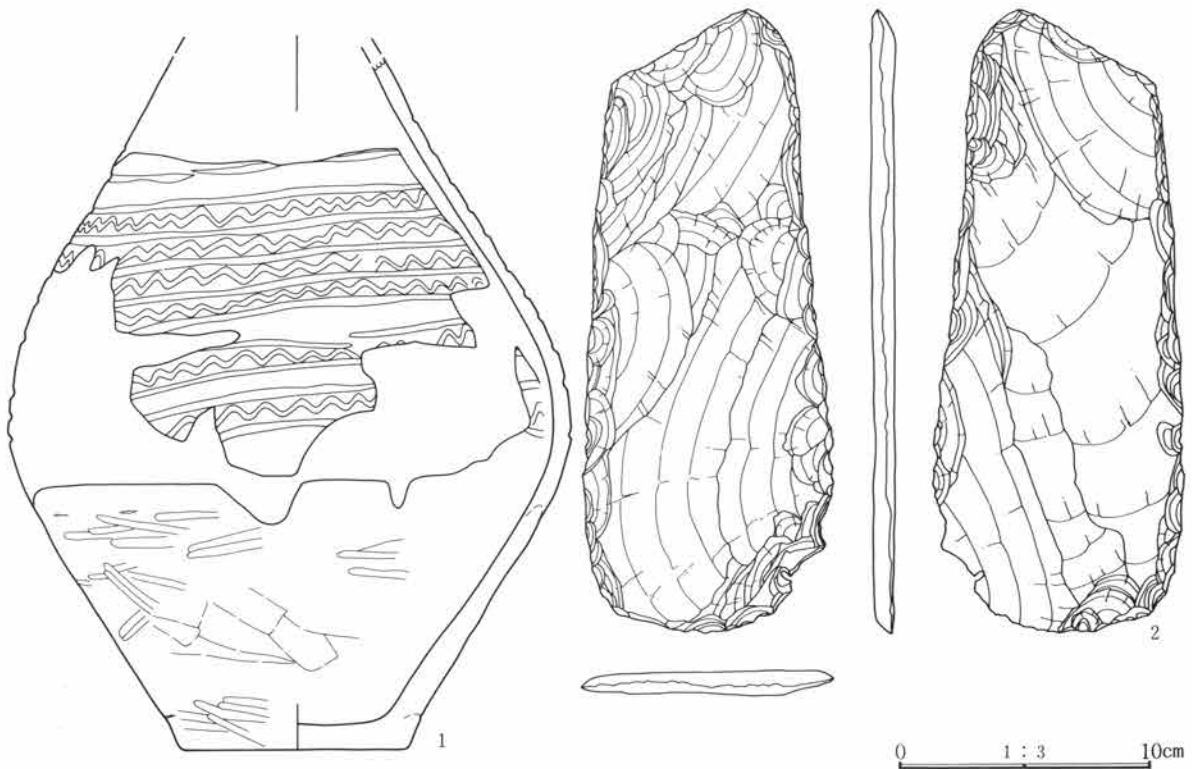
炉跡 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。

出土遺物 出土遺物は極めて少なく、住居の南東隅床面直上より竜見町式と思われる弥生時代中期末の壺1点（1）、石鍬1点（2）を検出したのみである。

時期 弥生時代中期後半



第58図 23号住居跡



第59図 23号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

B-28号住居跡 (第60~62図、P L17・46)

位置 Bb-25グリッド 床面積 (16.86㎡) 主軸方位 N-10°-W

重複 住居の南側を45号住に切られている。

壁 西壁と東壁が比較的良好に遺存しており、残存壁高は25cmを測ることができる。粘質黄褐色土を壁面としている。

形状と規模 住居の南側を45号住に切られ形状は明瞭ではないが、残存部の形状から隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は長軸4.34m、短軸4.00mを測ることができる。

床面 凹凸が少なく、ほぼ平坦である。

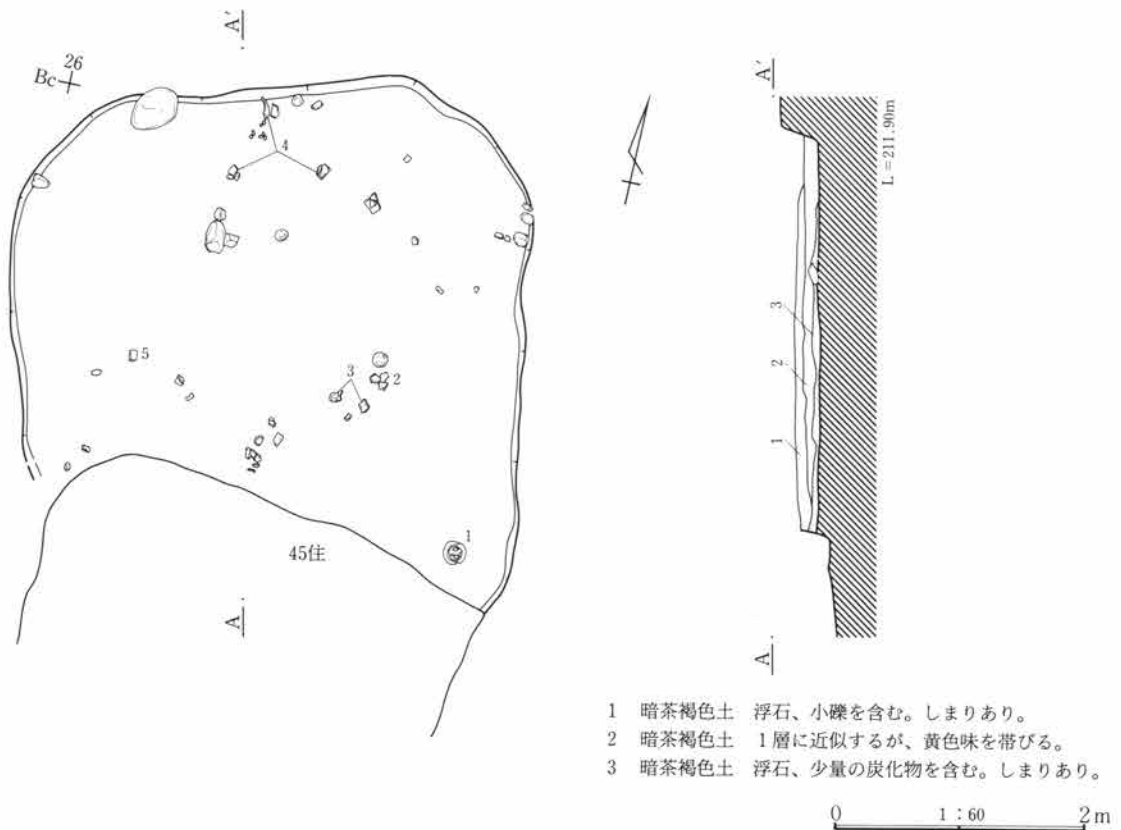
炉跡 住居の中軸線上よりやや東よりの北側支柱穴 (P1・P2) 間に位置する。規模は長軸55cm、短軸48cmを測ることができる。深さ5~6cm程のレンガ状に焼けた焼土面をもつ地床炉である。

柱穴 P1~P4の4基が支柱穴になると思われる。貯蔵穴 検出されなかった。

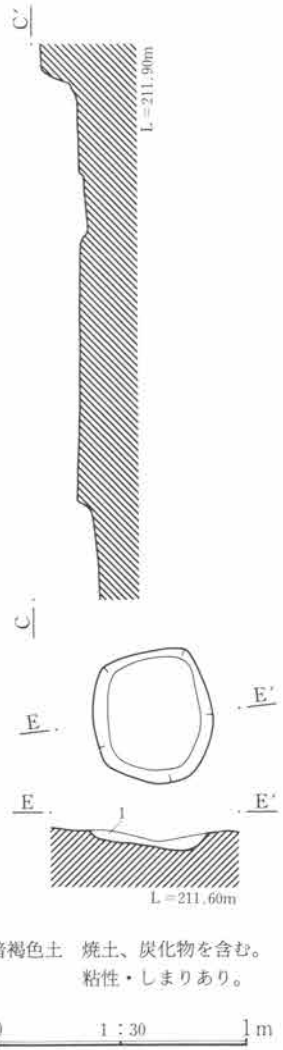
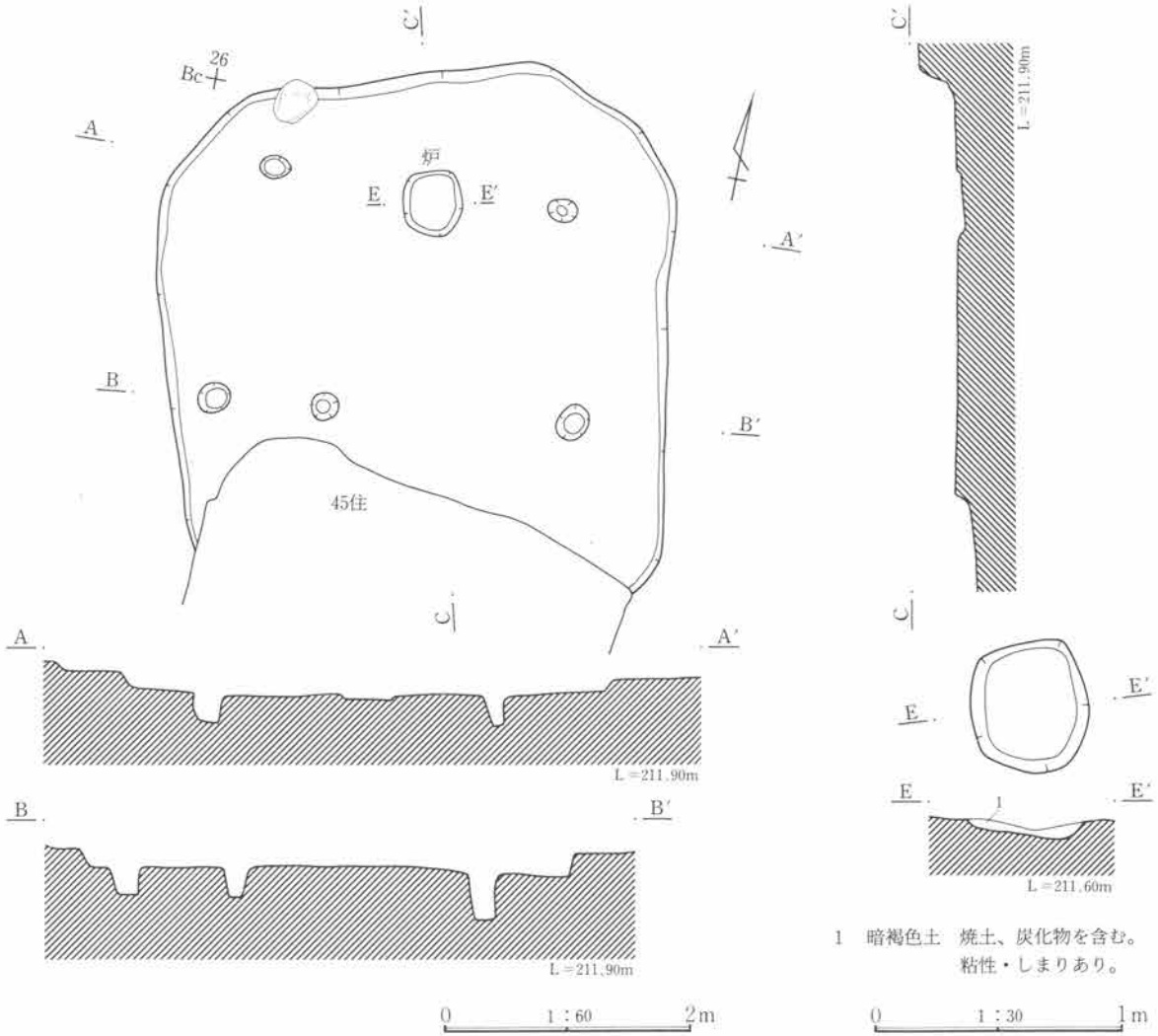
No.	P1	P2	P3	P4	P5
上端長径	25cm	24cm	29cm	24cm	27cm
下端長径	17cm	9cm	17cm	12cm </td <td>18cm</td>	18cm
深さ	23cm	25cm	37cm	23cm	22cm

出土遺物 出土遺物はきわめて少なく、散在して出土している。床面及び覆土下部から甕3点(1~3)、ほぼ完形の鉢1点(4)、赤色塗彩の鉢1点(5)を検出したに過ぎない。

時期 弥生時代後期

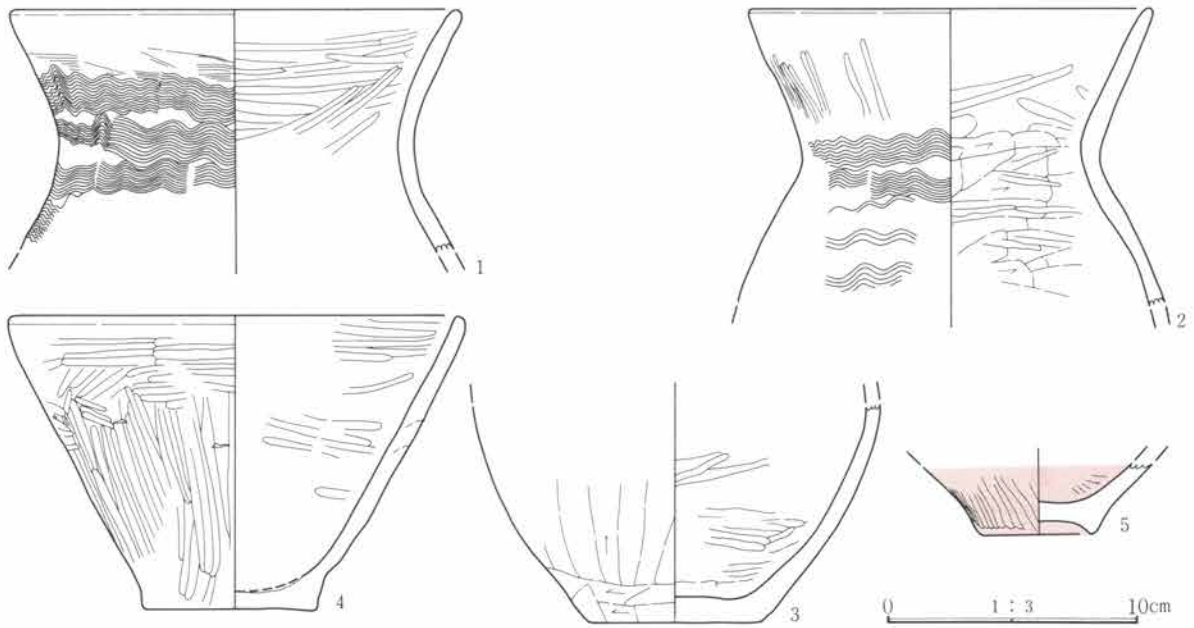


第60図 28号住居跡 (1)

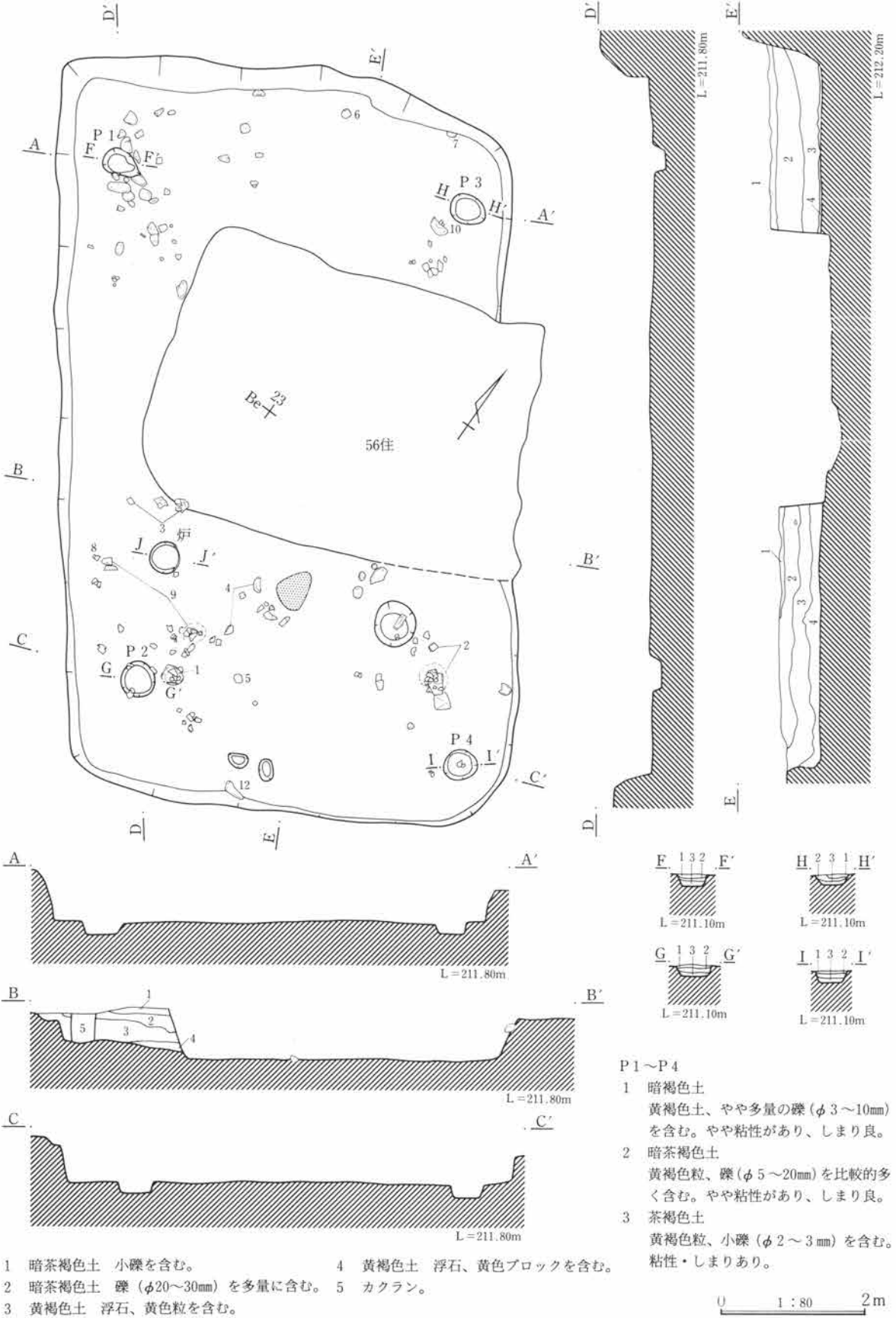


1 暗褐色土 焼土、炭化物を含む。
粘性・しまりあり。

第61図 28号住居跡(2)、炉



第62図 28号住居跡出土遺物実測図



第63図 29号住居跡

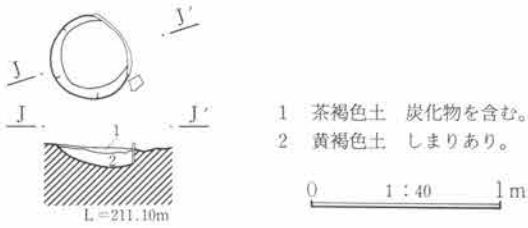
B-29号住居跡 (第63~67図、P L17・18・46・47)

位置 Bd~Bf-22・23グリッド 床面積 59.00m² 主軸方位 N-33°-W

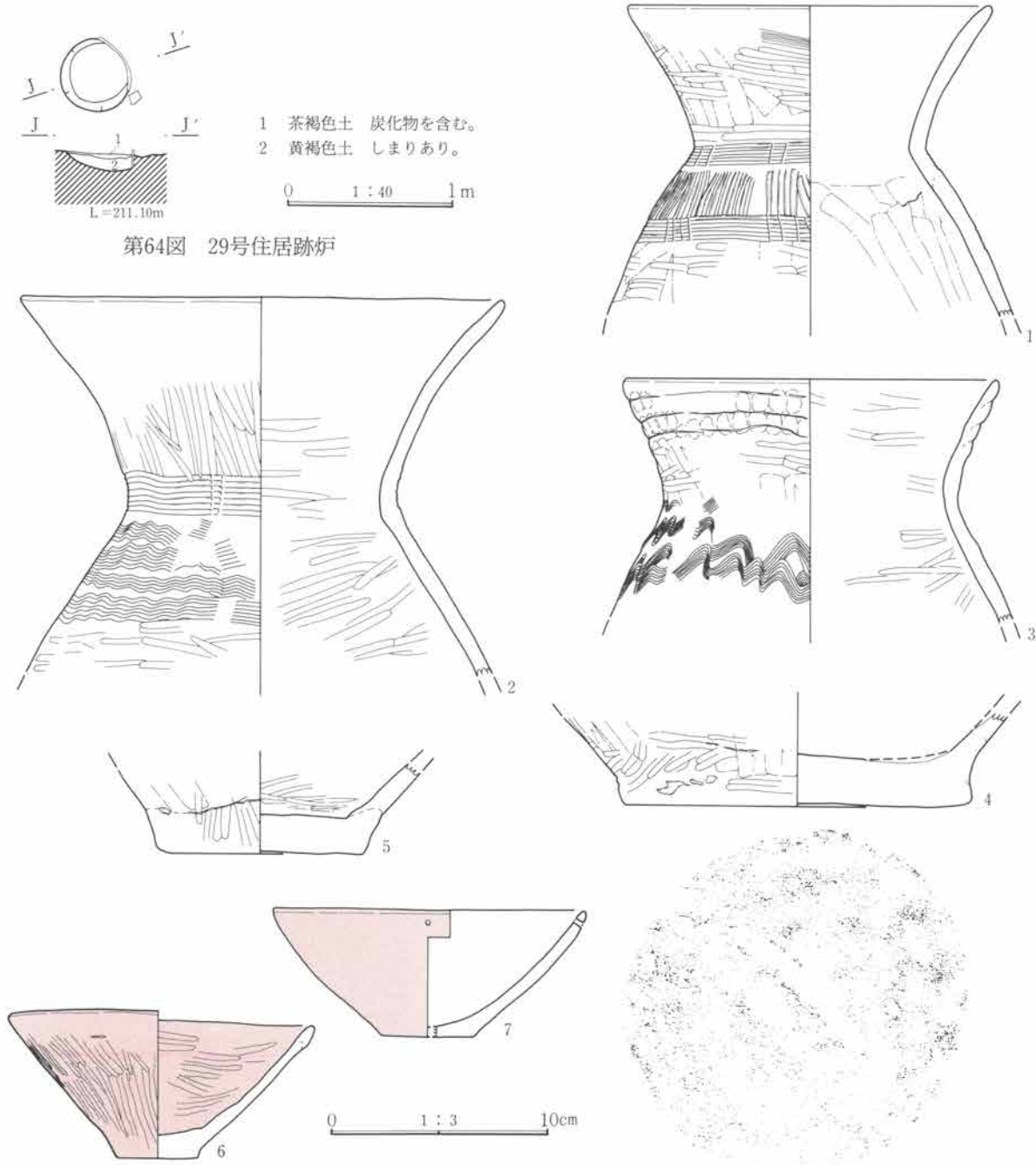
重複 住居のほぼ中央部を56号住によって切られている。

壁 56号住との重複によって東側周壁の中央部を欠損している他は概ね良好に遺存している。立ち上がりは僅かに外傾し、残存壁高は70cmを測ることができる。東・北側周壁はおおぶりの礫を多量に含む黄褐色砂礫層、西・南側周壁は粘質黄褐色土層を壁面としている。

形状と規模 隅丸長方形を呈する。規模は長軸10.08m、短軸6.28mを測ることができる。大型の住居である。



第64図 29号住居跡炉



第65図 29号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

床面 ほぼ平坦である。粘質黄褐色土を床面としている。

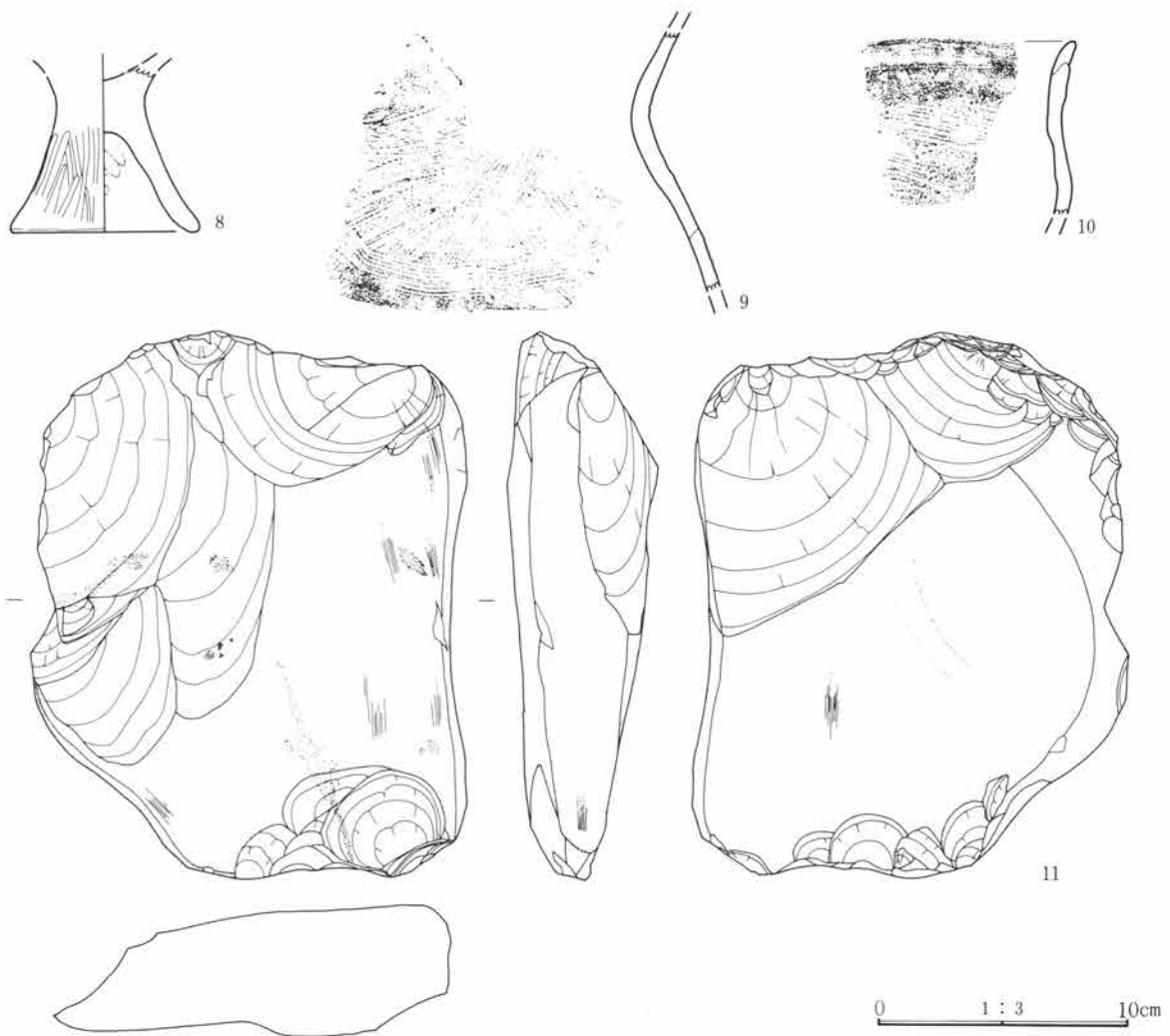
炉跡 住居の南西部に土器の胴部片を炉石がわりに用いた地床炉を検出した。規模は長軸45cm、短軸42cmを測ることができ、ほぼ円形を呈する。土器は火を受けてよく焼けこんでいるが、焼土の堆積は見られず、覆土中に炭化物が混入していたのみである。また、ここより1.4mほど東に長径58cmほどの焼土帯を検出しているが、炉跡になるか明確ではない。

柱穴 住居の4隅の4基のピットが支柱穴になると思われる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

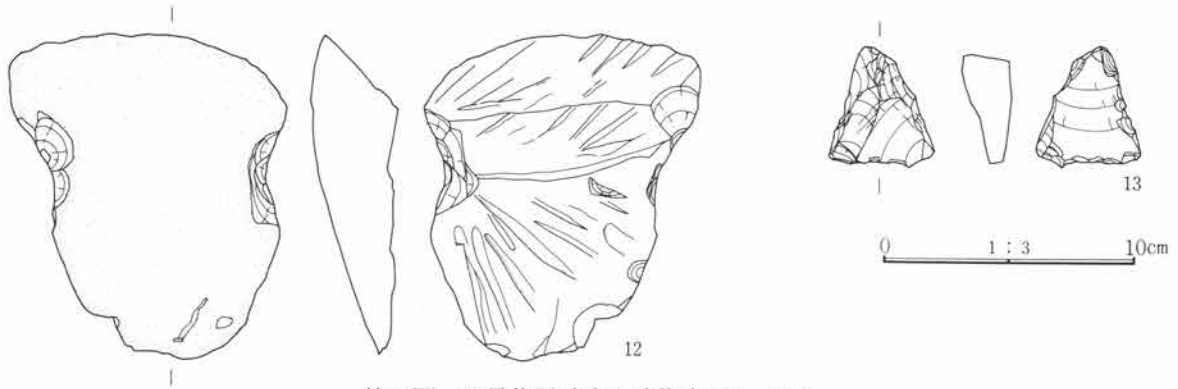
No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
上端長径	55cm	49cm	51cm	46cm	62cm
下端長径	40cm	40cm	36cm	35cm	40cm
深 さ	17cm	17cm	17cm	18cm	22cm

出土遺物 遺物は散在して出土している。床面直上からの出土は少なく、覆土下部からの出土が多い。甕7点（1～5・9・10）、赤色塗彩の鉢2点（6・7）、高坏1点（8）、磨石1点（11）等を図化することができた。甕1点（3）は口縁部に粘土帯接合痕を残している。

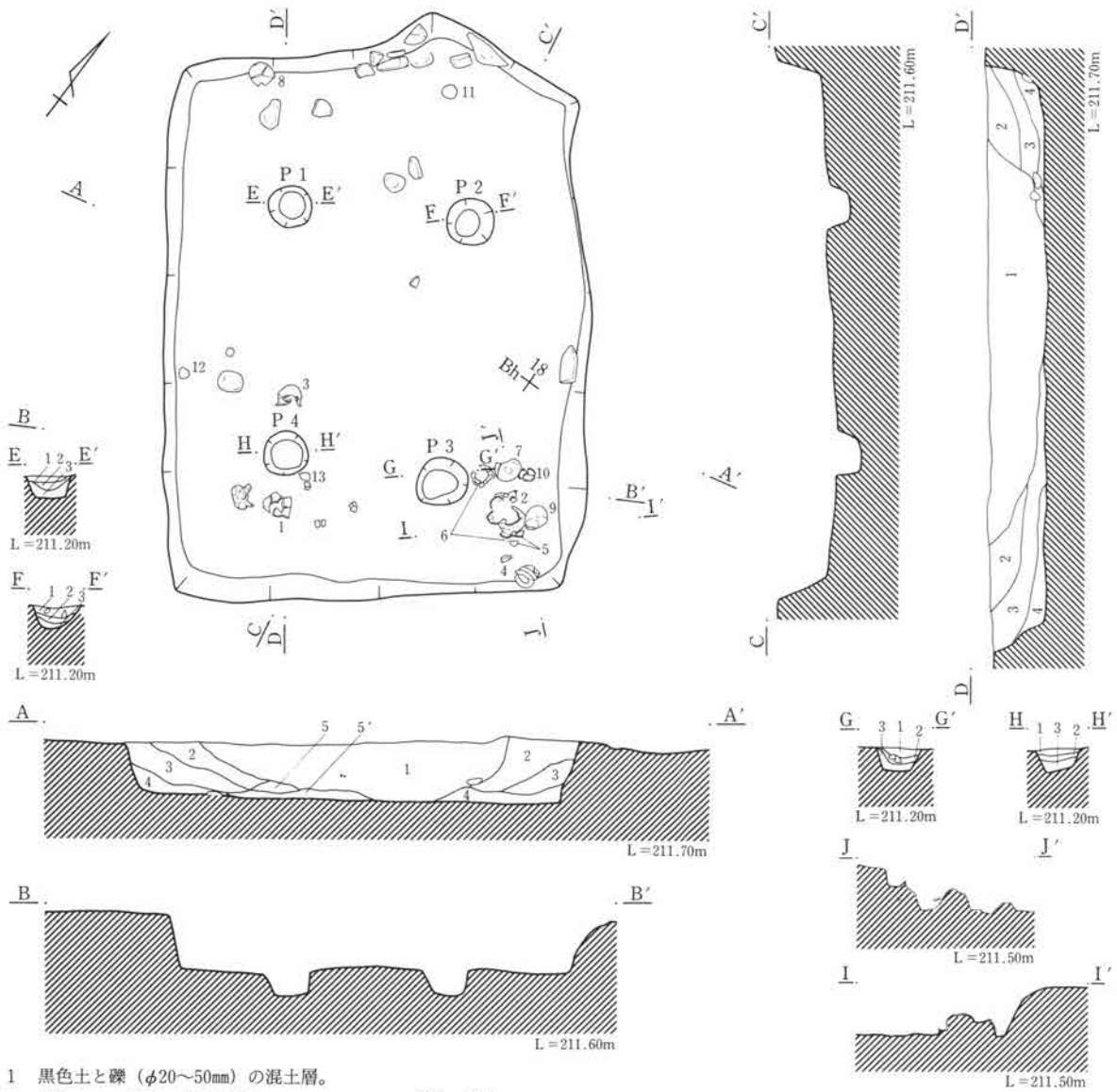
時期 弥生時代後期



第66図 29号住居跡出土遺物実測図（2）



第67図 29号住居跡出土遺物実測図(3)



- 1 黒色土と礫(φ20~50mm)の混土層。
- 2 褐色土 浮石、小礫を含む。
- 3 褐色土 浮石を少量含む。
- 4 暗褐色土 黄色粒、小礫を含む。粘質土。
- 5 暗褐色土 礫をごく少量含む。
- 5' 暗褐色土 黄色砂粒を含む。

- P1~P4
- 1 暗褐色土 黄褐色粒、小礫(φ2~3mm)を含む。粘性・しまりあり。
- 2 暗黄褐色土 多量の黄褐色粒、少量の礫(φ10~20mm)を含む。粘性・しまりあり。
- 3 暗茶褐色土 黄褐色粒、少量の礫(φ20~30mm)を含む。粘性・しまりあり。

第68図 31号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

B-31号住居跡 (第68~70図、P L18・47)

位置 Bg・Bh-17・18グリッド 床面積 13.75㎡ 主軸方位 N-33°-W 重複 なし

壁 周壁の遺存状態は比較的良好であり、ほぼ全周を検出することができた。立ち上がりは僅かに外傾し、残存壁高は42cmを測る。黄褐色礫層を壁面としている。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸4.40m、短軸3.50mを測ることができる。

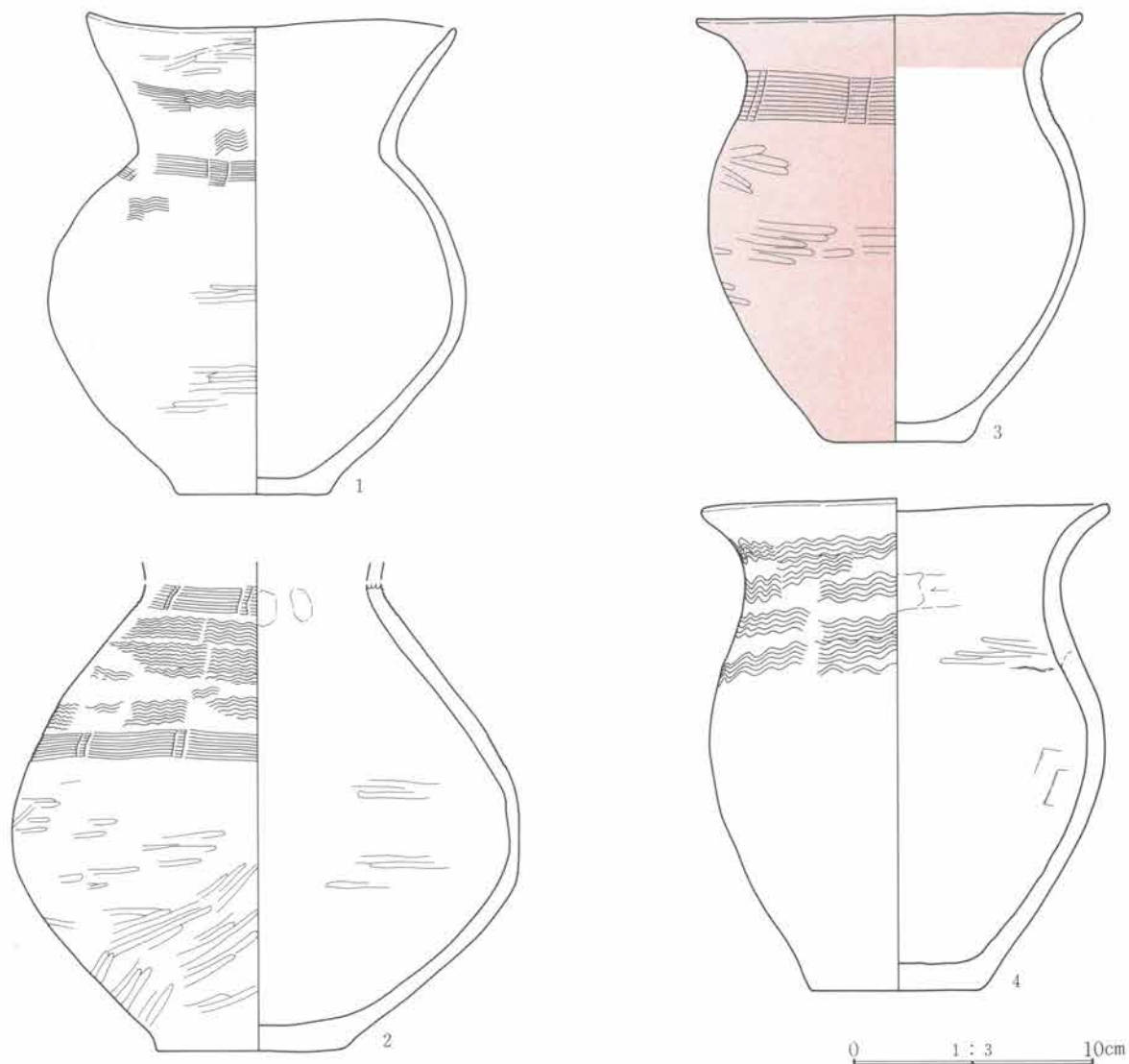
床面 床面はほぼ平坦であるが南に向かってやや傾斜している。

炉跡 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 支柱穴を比較的良好に4箇所検出することができた。支柱は4本柱構造である。

No.	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	37cm	40cm	46cm	38cm
下端長径	22cm	23cm </td <td>30cm</td> <td>27cm</td>	30cm	27cm
深 さ	19cm	21cm	20cm	22cm

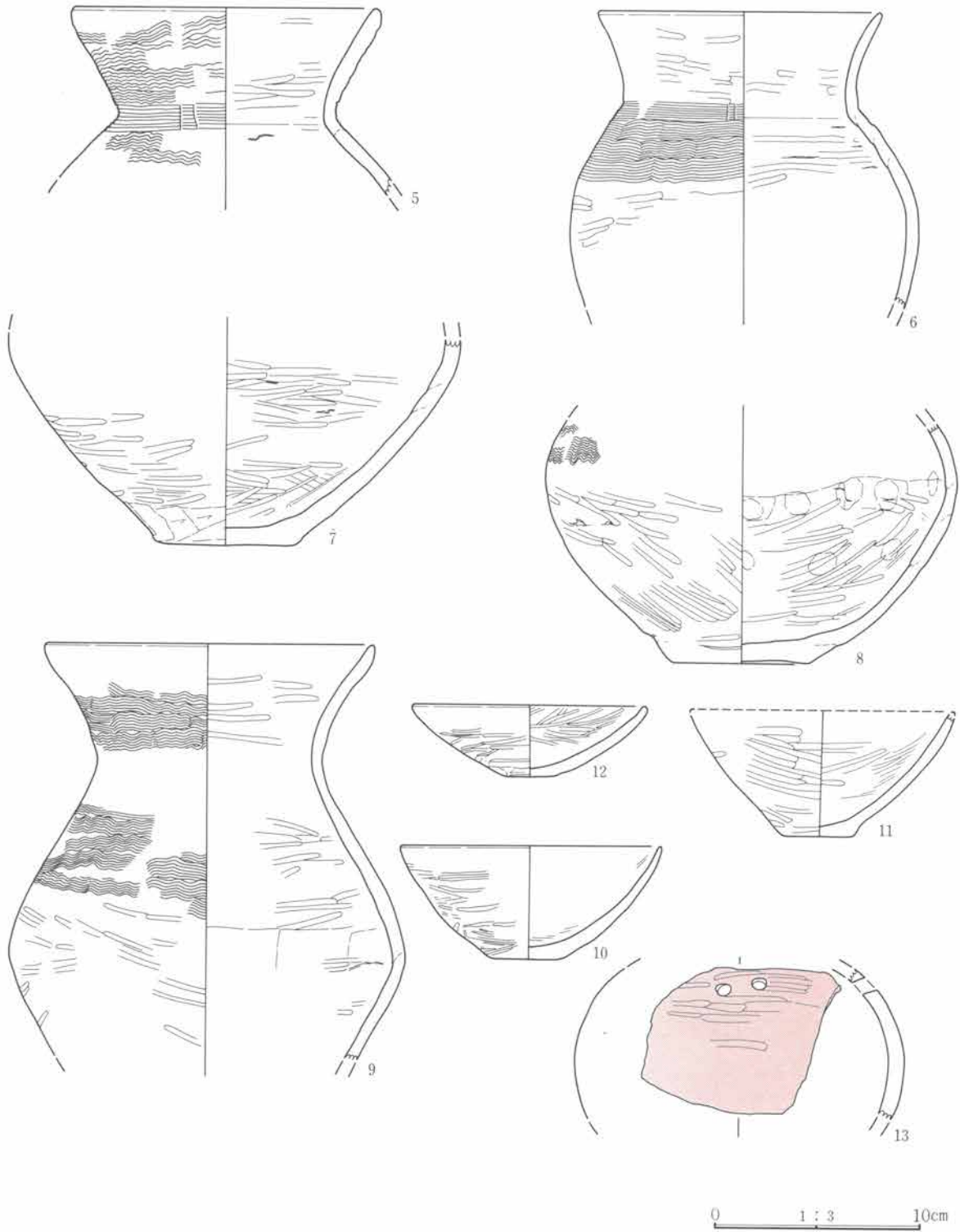
出土遺物 床面直上から良好な遺物を比較的多く検出している。南東隅付近から、壺1点(2)、甕5点(4)



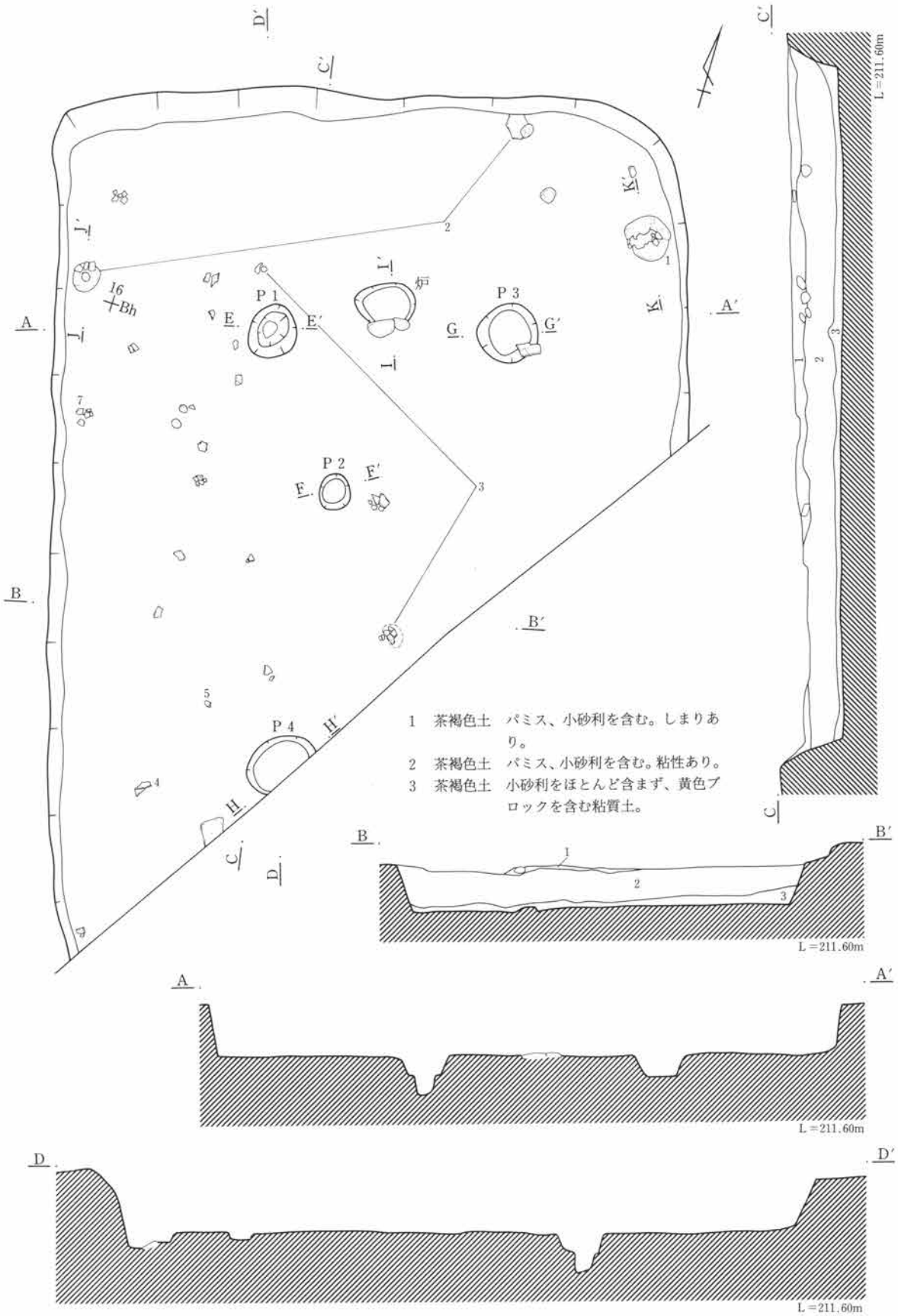
第69図 31号住居跡出土遺物実測図(1)

～7・9)、鉢1点(10)が集中して出土している。南西の支柱穴(P4)周辺には壺3点(1・3・13)、鉢1点(12)がまとまって出土している。壺(3・13)はいずれも赤色塗彩を施している。北壁よりには甕(8)、鉢(11)が検出されている。

時期 弥生時代後期

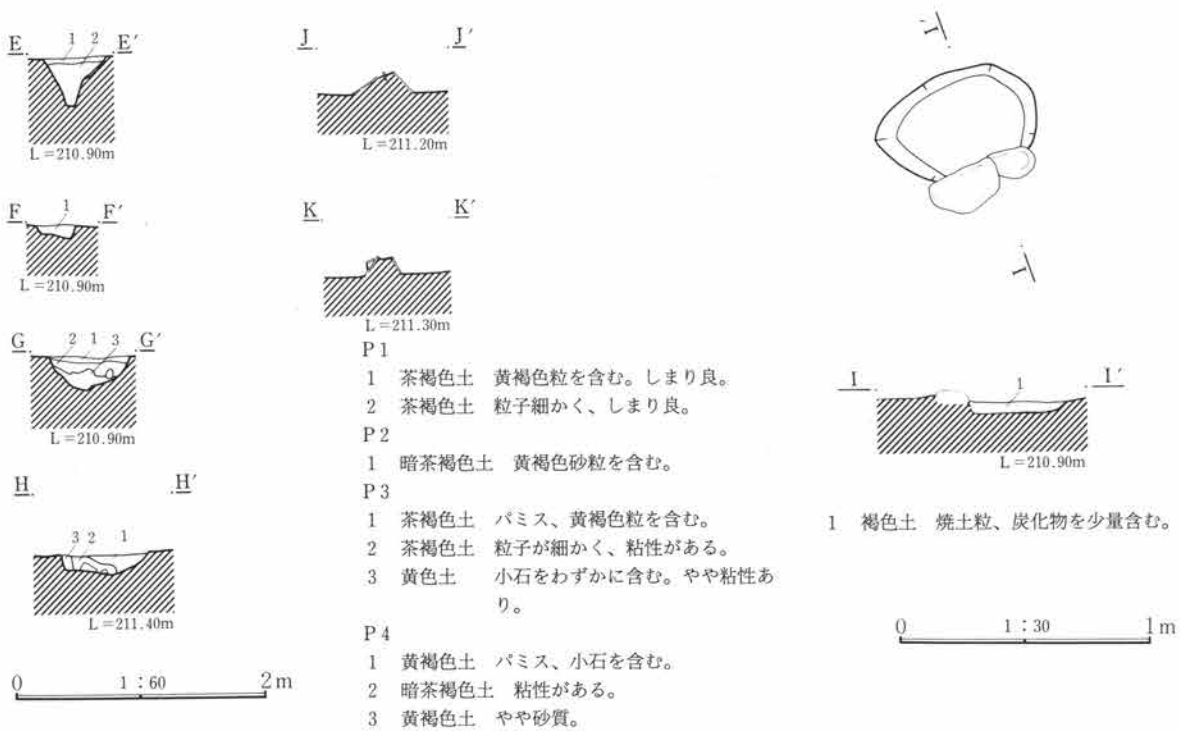


第70図 31号住居跡出土遺物実測図(2)



第71図 32号住居跡(1)

0 1:60 2m



第72図 32号住居跡(2)、炉

B-32号住居跡 (第71~73図、P L19・47・48)

位置 Bf~Bh-15・16グリッド 床面積 (58.38m²) 主軸方位 N-19°-W

重複 なし、住居の南東部3分の1は調査区外である。

壁 良好な周壁を検出できた。直立に近い立ち上がりを示し、残存壁高は54cmを測る。

形状と規模 住居の南東部が調査区外であるため、形状は明瞭ではないが、残存部の形から隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長軸(9.30m)、短軸6.60mを測ることができる。

床面 堅くよくしまった平坦な床面を確認することができた。

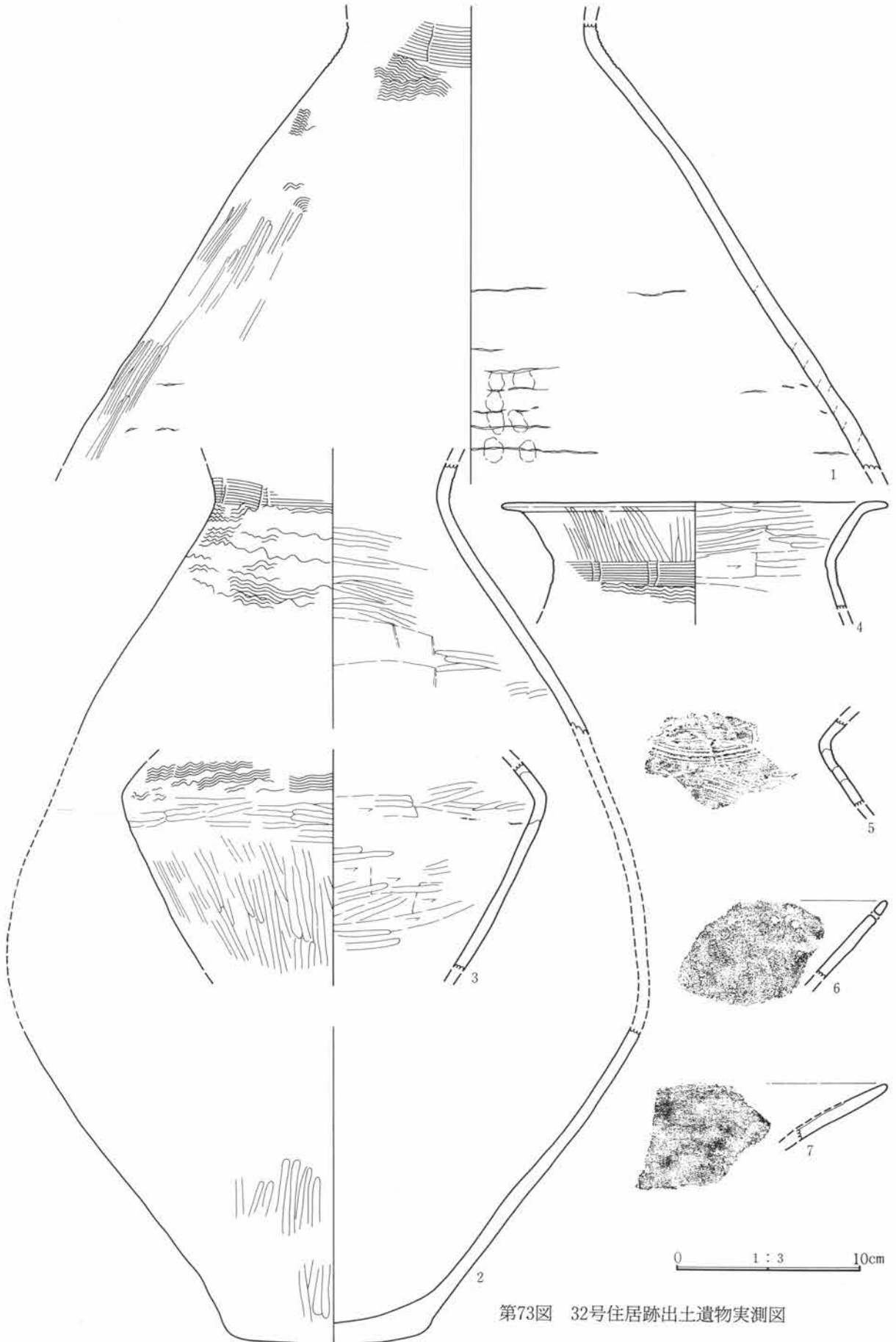
炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴(P1・P3)間にあり、炉石を据える形態である。規模は長軸65cm、短軸32cm、深さ5cmを測ることができる。焼土面は確認できず、覆土中に少量の焼土粒・炭化物が見られた。

柱穴 支柱穴を3箇所(P1~P3)で検出することができた。4本柱構造になると思われるが、1基は調査区域外であるため未検出である。

No.	P1	P2	P3	P4
上端長径	56cm	39cm	65cm	75cm
下端長径	40cm	27cm	44cm	61cm
深さ	40cm	22cm	25cm	15cm

出土遺物 住居の北東隅より大型壺(1)の頸部~胴上半部が、北西隅より大型壺(2)の頸部~胴上半部がいずれも床面直上より出土している。覆土中より、甕(3・4)、壺、高坏の破片等が出土している。

時期 弥生時代後期



第73図 32号住居跡出土遺物実測図

B-33号住居跡 (第74・75図、P L20・48)

位置 Bd・Be-16・17 床面積 (46.50㎡) 主軸方位 N-36°-W

重複 9・12・65号住と重複し、いずれよりも先行する。

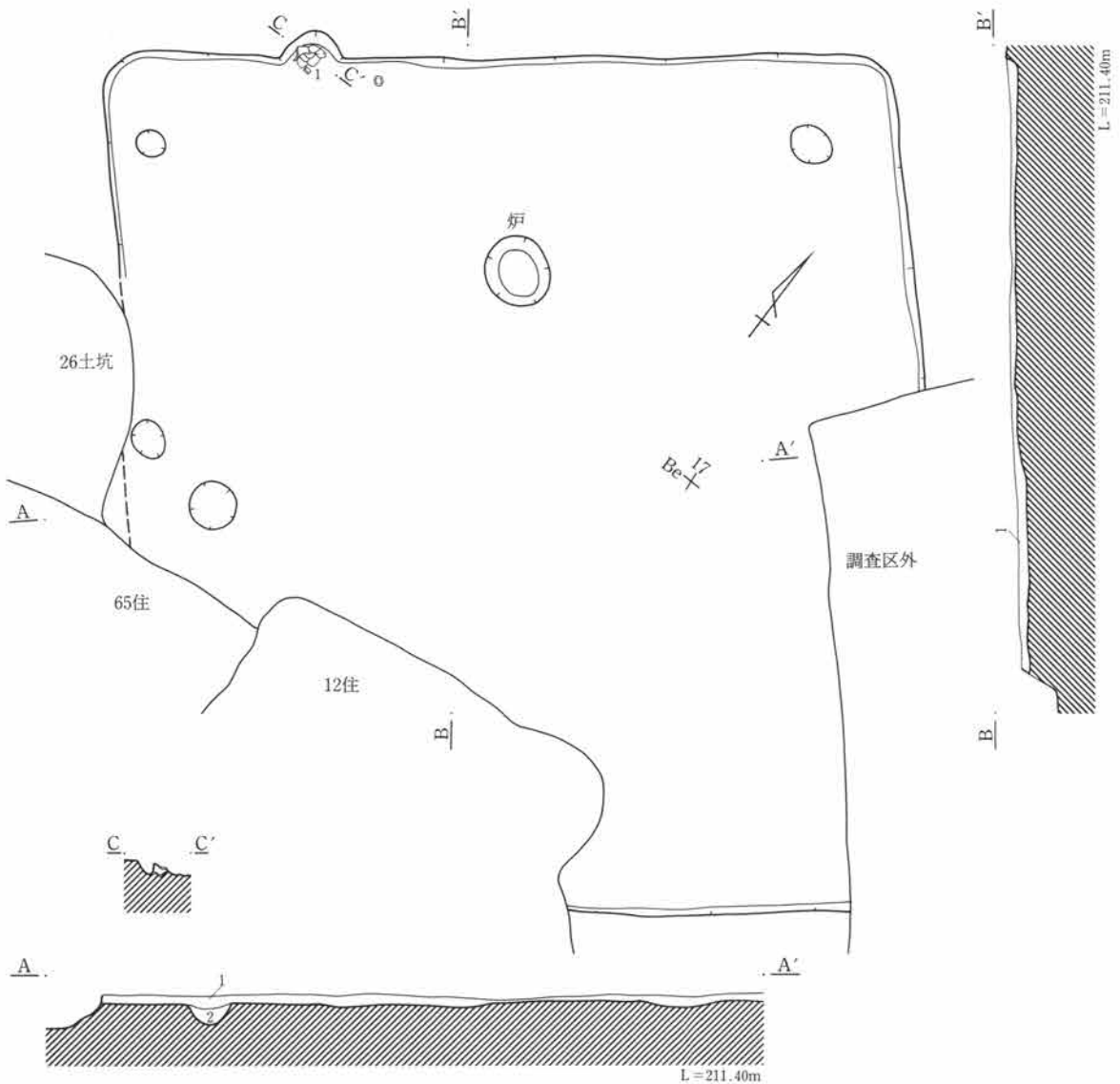
壁 周壁の検出状態は悪く、残存壁高はわずかに5cmである。

形状と規模 重複部では住居の輪郭を明確に把握することができなかったが、残存部の形状から方形に近いプランと推定される。規模は長軸7.04m、短軸6.70mを測ることができる。

床面 所々に地山の小礫が露出しており、わずかな凹凸はあるが、概ね平坦である。

炉跡 北東部中央に長軸60cm、短軸54cmの地床炉を検出することができた。

柱穴 ピットを4基検出したが、調査の下手際から詳細は不明である。

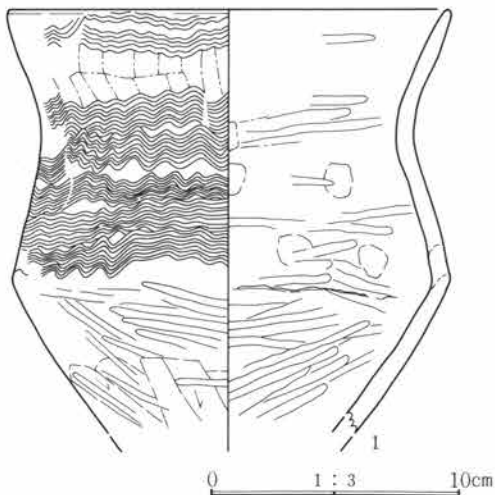


- 1 黒褐色土 小礫、少量の炭化物、焼土を含む。粘性・しまりあり。
- 2 黒褐色土 少量の小礫、黄褐色粒を含む。粘性・しまりあり。

0 1:60 2m

第74図 33号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



No	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	25cm	37cm	40cm	33cm
下端長径	不明	不明	不明	不明
深 さ	不明	不明	不明	不明

出土遺物 出土遺物は極めて少ない。北側の壁際より甕1点(1)を検出したのみである。

時期 弥生時代後期

B-36号住居跡 (第76・77図、P L 20・48)

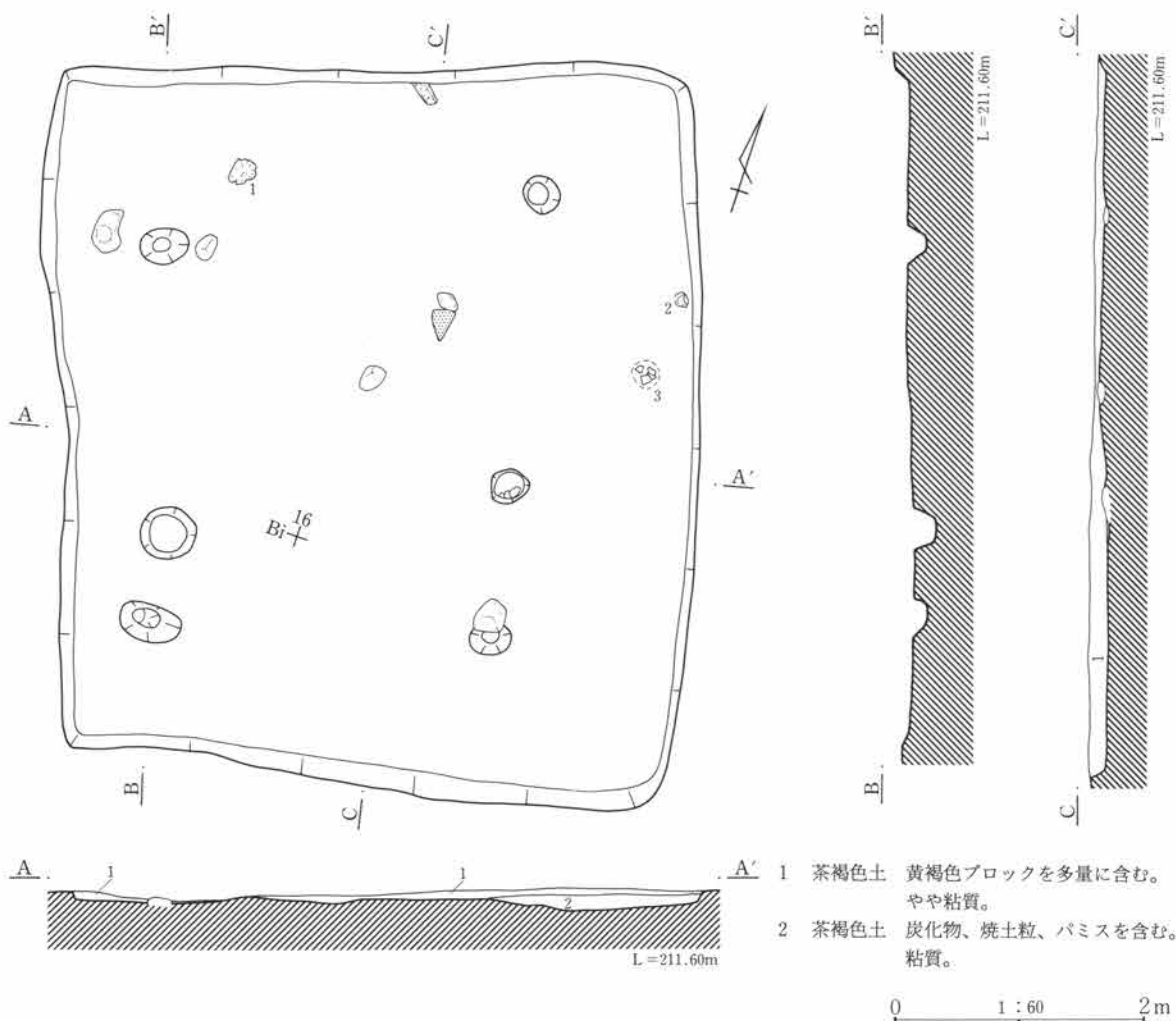
位置 Bh・Bi-15・16 床面積 26.00㎡

主軸方位 N-19°-W 重複 なし

壁 周壁の検出状態は悪い。残存壁高はわずかに3~12cm程である。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸5.66m、短軸5.00mを測ることができる。

第75図 33号住居跡出土遺物実測図



- 1 茶褐色土 黄褐色ブロックを多量に含む。やや粘質。
- 2 茶褐色土 炭化物、焼土粒、パミスを含む。粘質。

第76図 36号住居跡

床面 調査時に床面の認定を誤り、明確な床面は検出されなかった。床下には地山の大小の礫が広い範囲にわたって露出していた。

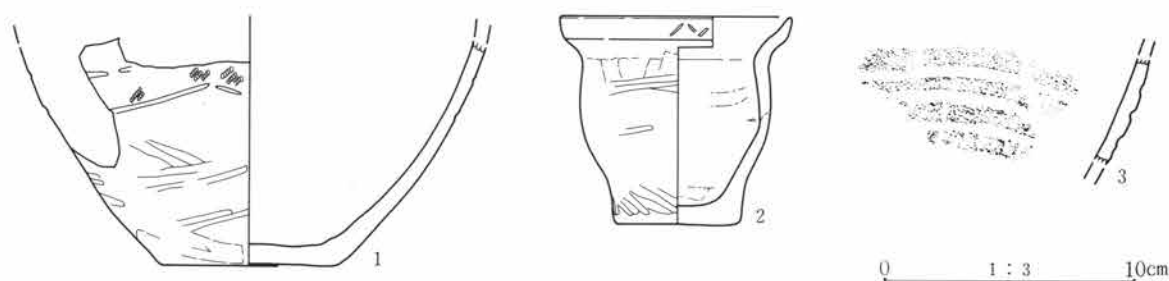
炉跡 住居北側の長径25cm程の焼土帯は地床炉の可能性はある。

柱穴 P1・P2・P4・P5の4基が支柱穴になると思われる。 **貯蔵穴** 未検出。

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
上端長径	39cm	30cm	30cm	35cm	49cm	45cm
下端長径	14cm	16cm	25cm	16cm	18cm	31cm
深 さ	16cm	16cm	12cm	16cm	15cm	14cm

出土遺物 出土遺物は極めて少なく、散在して出土している。図化可能な遺物は壺1点(1)、小形壺1点(2)、その他に壺の口縁部片が出土しているに過ぎない。

時期 弥生時代中期後半



第77図 36号住居跡出土遺物実測図

B-39号住居跡 (第78・79図、P L21・48)

位置 Bh-21グリッド **床面積** 不明 **主軸方位** 不明

重複 38・55号住に住居の大半を切られている。

壁 掘り込みが浅く、明瞭な立ち上がりは確認できなかった。

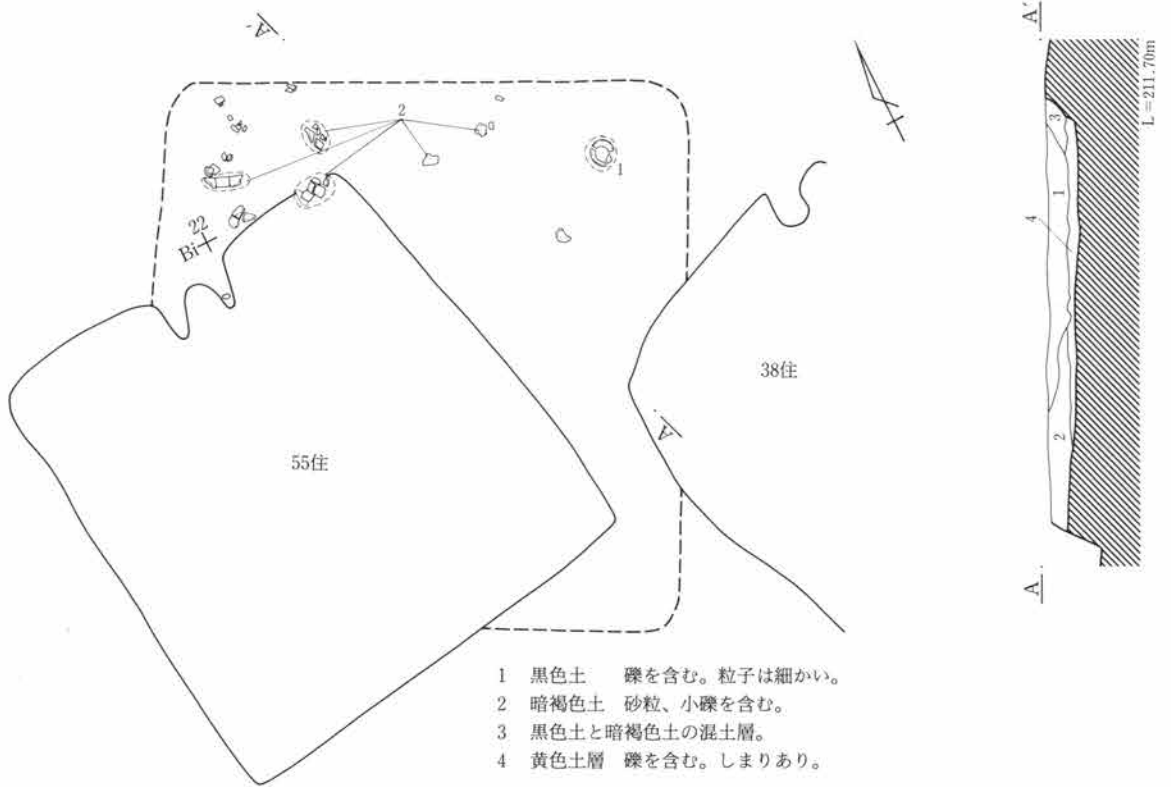
形状と規模 住居の大半を他住居に破壊されていることと、周壁が残存しないことから形状、規模ともに不明である。破線は遺物の分布状況から押さえた推定線である。

床面 住居の範囲が確定できず不明瞭であるが、調査時の住居推定範囲は概ね平坦である。

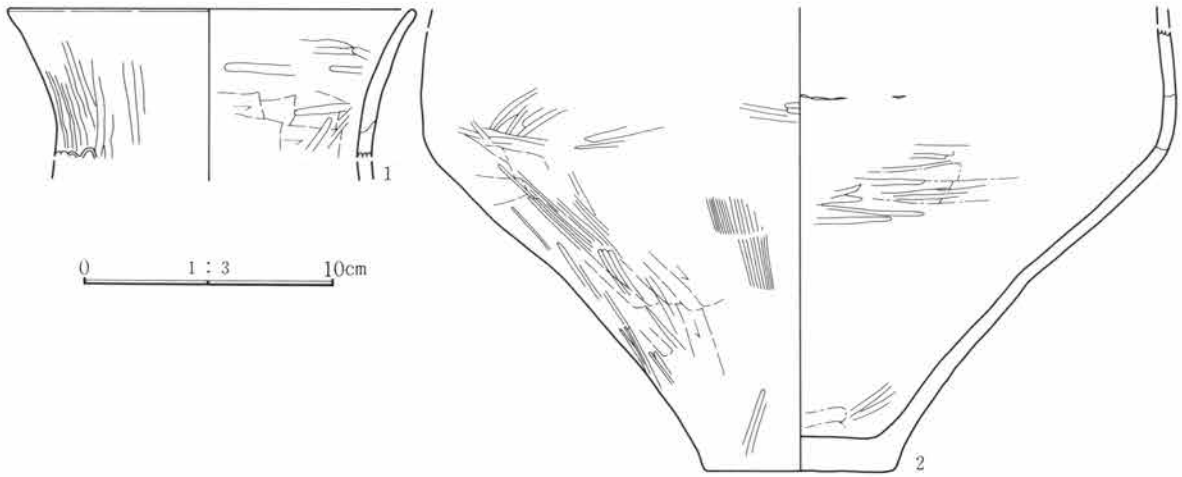
炉跡 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

出土遺物 遺物量は極めて少なく、散在して出土している。図化可能な遺物は甕の口縁部1点(1)、大型壺底部1点(2)のみであり、いずれも覆土下層からの出土である。

時期 弥生時代後期



第78図 39号住居跡



第79図 39号住居跡出土遺物実測図

B-51号住居跡 (第80~83図、P L21・48・49)

位置 Bj~Bl-18~20グリッド 床面積 70.12㎡ 主軸方位 N-27°-W

重複 北東隅で54・67号住と、南辺部で49・74号住と重複、いずれよりも先行する。

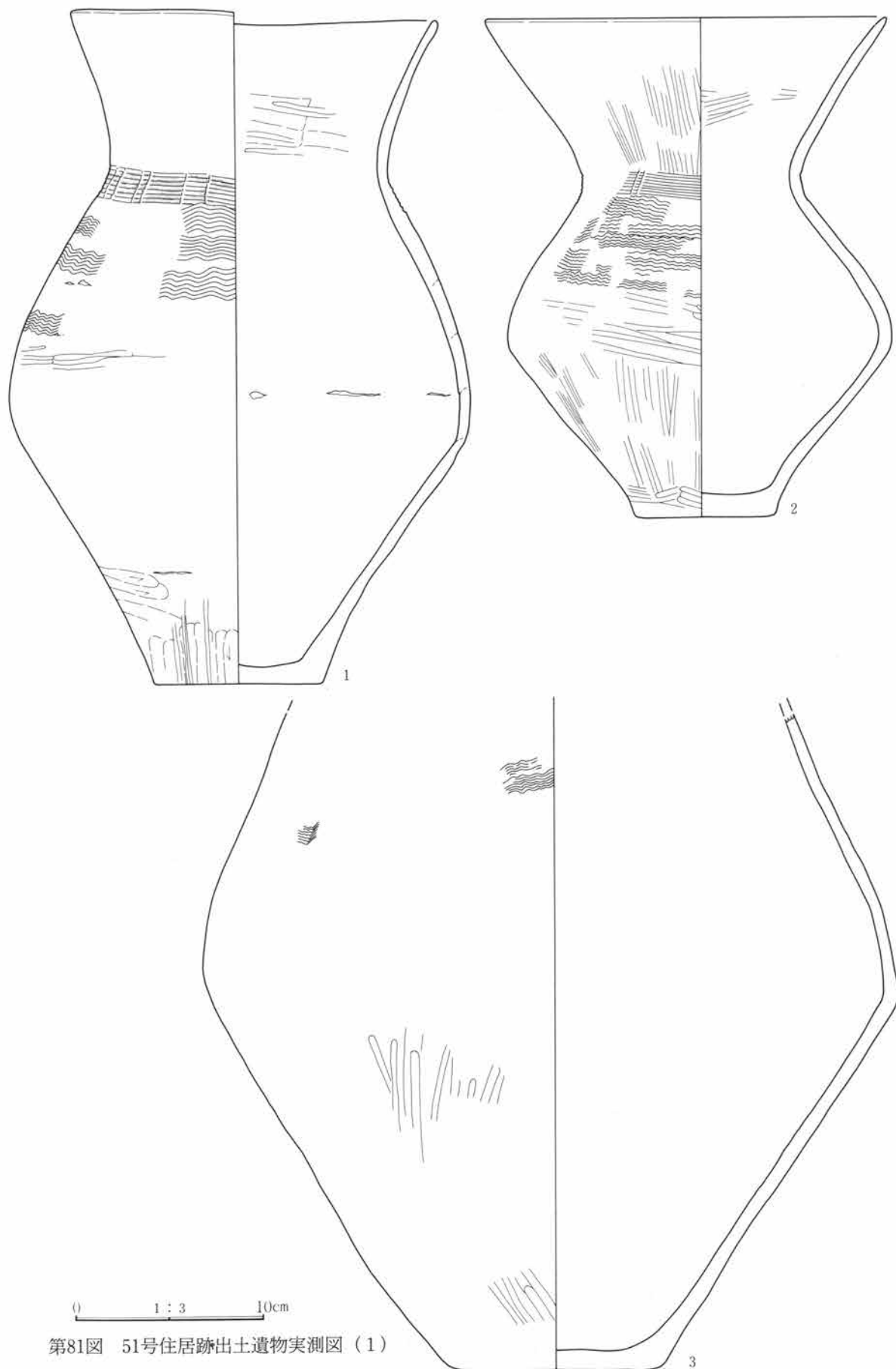
壁 54・67・49・74号住との重複部である北東部、南西部では周壁は明確に検出することができなかったが、他の部分では良好な遺存状態であった。残存壁高は54cmを測ることができる。

形状と規模 北東隅と南辺の一部は重複によって輪郭が明瞭ではないが、残存部の形状から長方形を呈するものと推定される。規模は長軸10.40m、短軸6.84mを測ることができる。大型住居である。



第80図 51号住居跡

0 1 : 80 2m



第81図 51号住居跡出土遺物実測図(1)

床面 住居の北西隅を中心に床面上に炭化材が散在することから焼失家屋の可能性が考えられる。床面は凹凸が少なく概ね平坦である。

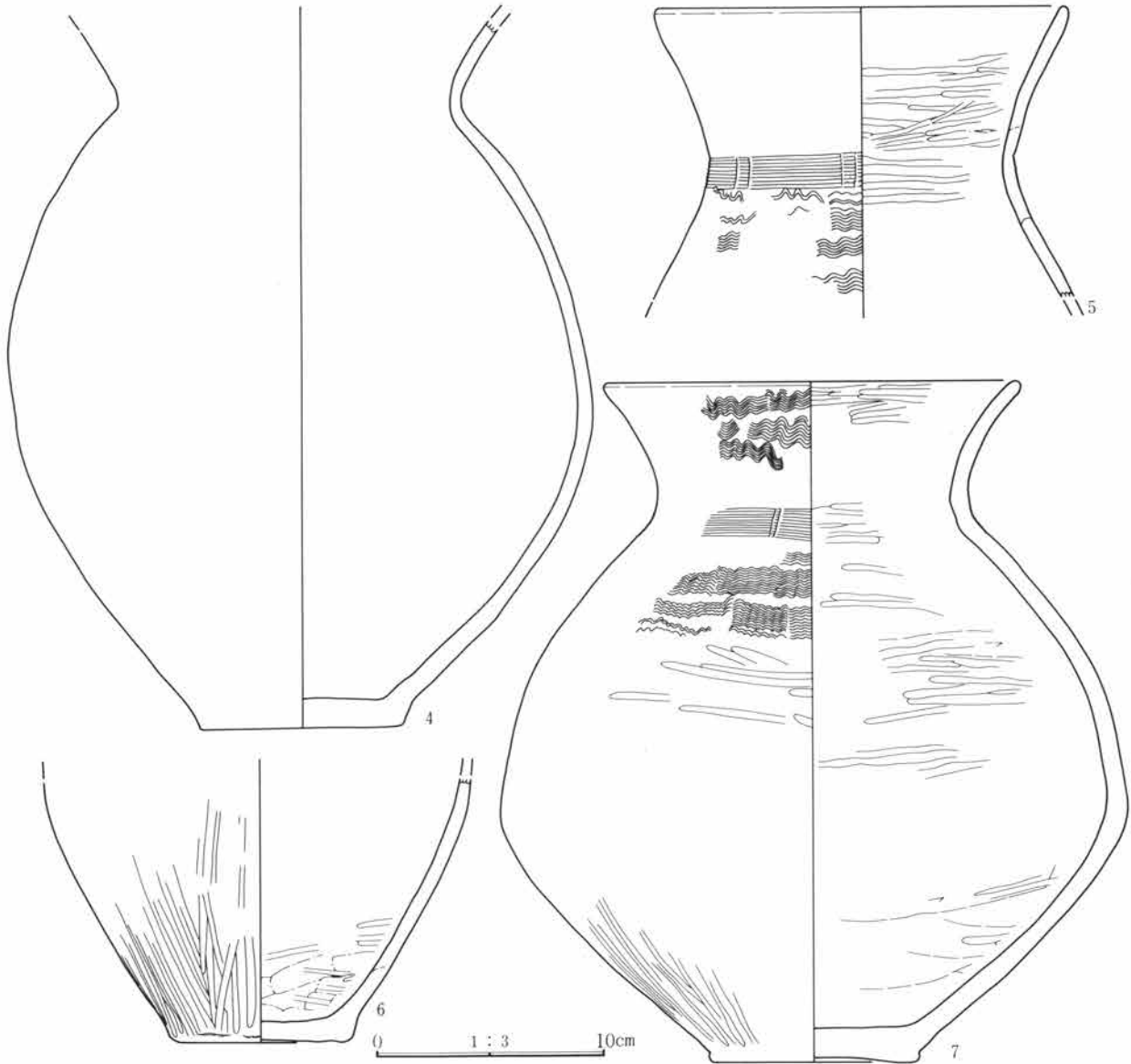
炉跡 検出されなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

柱穴 住居プランのほぼ対角線上に4基の支柱穴を検出することができた。4本柱構造になると思われる。

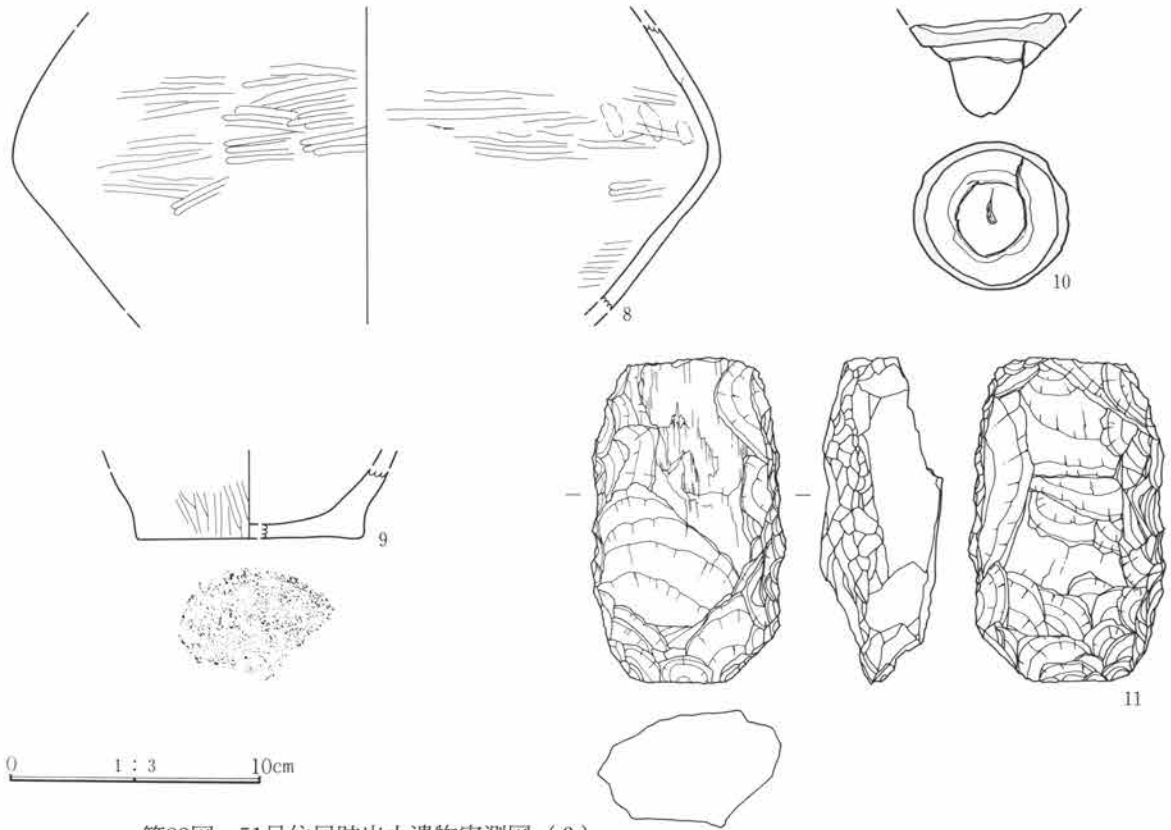
No	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	33cm	44cm	71cm	41cm
下端長径	25cm	26cm	59cm	24cm
深 さ	39cm	21cm	19cm	17cm

出土遺物 北西隅の床面直上から完形の甕1点(1)が斜位の状態で出土している。西壁際には床面直上及び覆土下部に壺2点(2・3)、甕2点(4・8)が集中して出土している。その他に甕3点(5~7)、高坏1点(10)、石鍬1点(11)を検出することができた。

時期 弥生時代後期



第82図 51号住居跡出土遺物実測図(2)



第83図 51号住居跡出土遺物実測図（3）

B-59号住居跡（第84～87図、P L22・49）

位置 Bj・Bk-20・21グリッド 床面積 21.44m² 主軸方位 N-26°-W

重複 北西部で177号住と重複、本住居が先行する。第1次調査では、177号住との重複部が確認できず59号住1軒として調査したが、第2次調査時に177号住を検出、北西隅を177号住に切られていることが確認された。

壁 北西隅は177号住と重複し、周壁のほとんどを失っているが他は概ね良好な周壁を検出することができた。立ち上がりはわずかに外傾し、残存壁高は32cmを測ることができる。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸5.32m、短軸4.28mを測ることができる。

床面 凹凸が少なく、ほぼ平坦である。

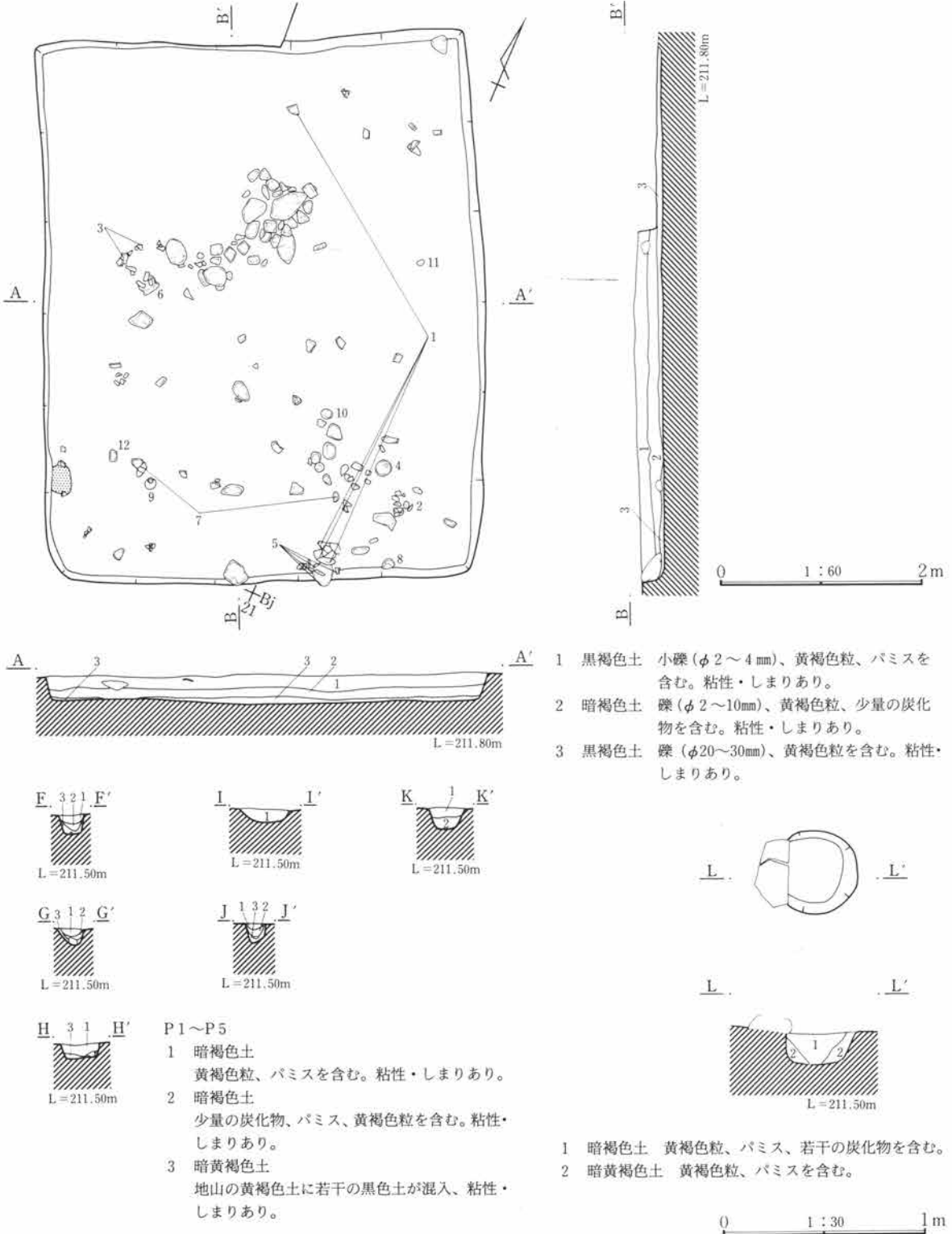
炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴（P1・P6）間にあり、炉石を据える形態である。規模は長軸42cm、短軸34cmを測ることができる。炉石は熱を受け2つに割れているが、焼土面は検出することができなかった。覆土中に若干の炭化物が確認された。

柱穴 第1次調査でP1・P2・P5の3基を検出、第2次調査ではP6を検出することができた。いずれも支柱穴になると思われる。4本柱構造になると推定される。P3・4は梯子穴か？

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
上端長径	25cm	30cm	46cm	55cm	25cm	42cm
下端長径	17cm	11cm	29cm	32cm	15cm	28cm
深 さ	19cm	17cm	15cm	15cm	18cm	21cm

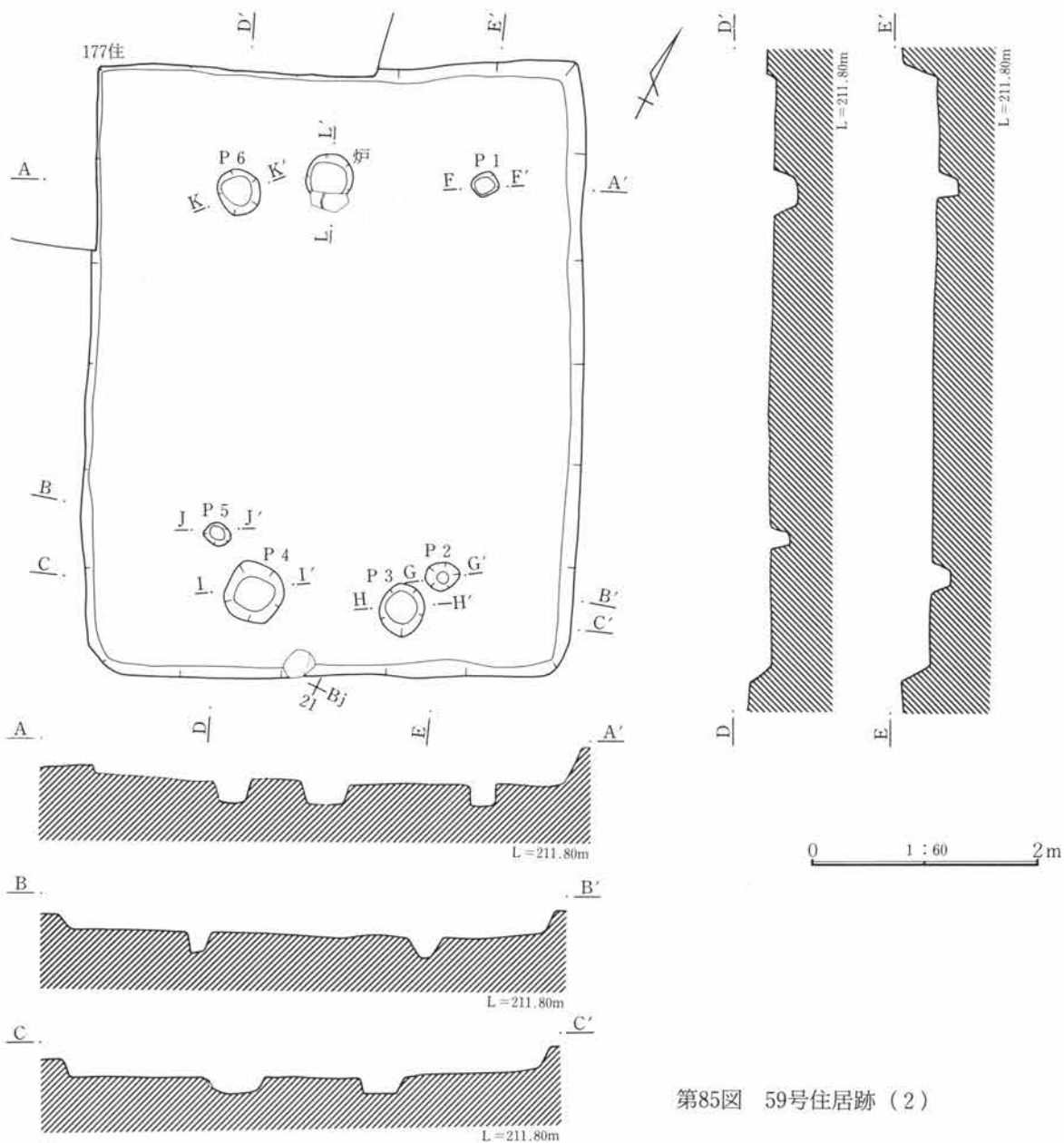
出土遺物 遺物は住居の南側付近からの出土が多く、壺1点(1)、甕1点(2)、台付甕2点(3・6)、甕1点(10)、高坏2点(8・9)、鉢1点(7)、スクレイパー1点(12)が床面及び床面近くから検出されている。その他に甕2点(4・5)、蓋1点(11)が出土している。

時期 弥生時代後期

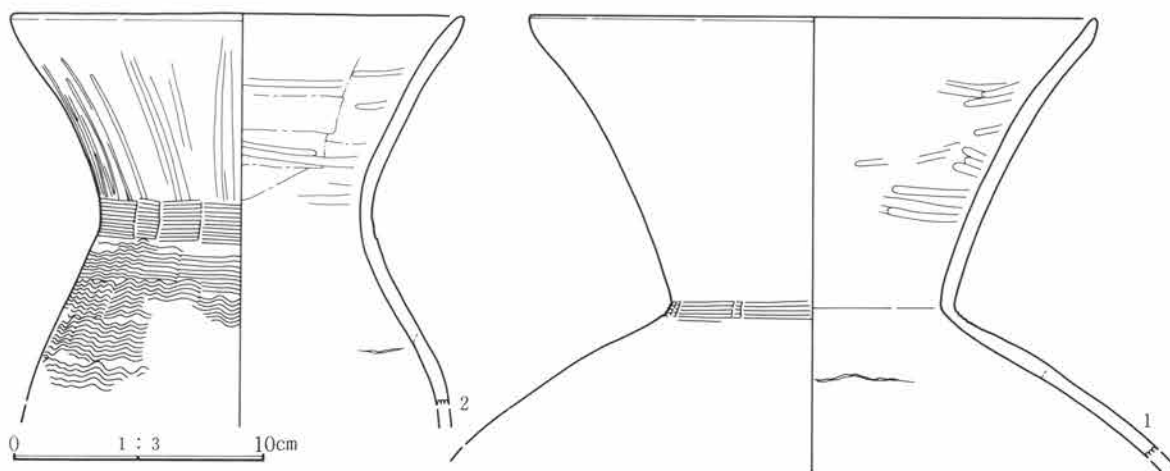


第84図 59号住居跡(1)、炉

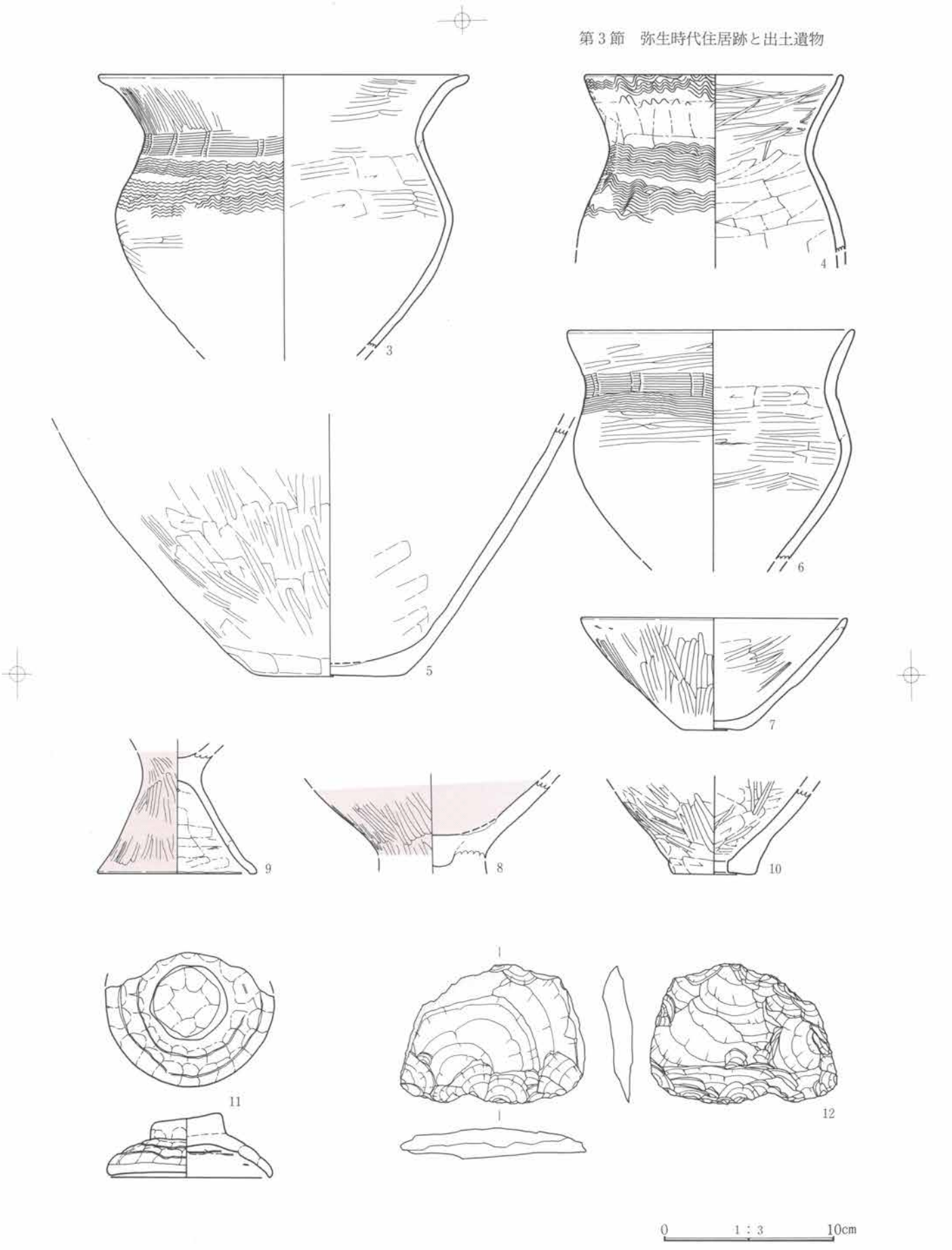
第3章 検出された遺構と遺物



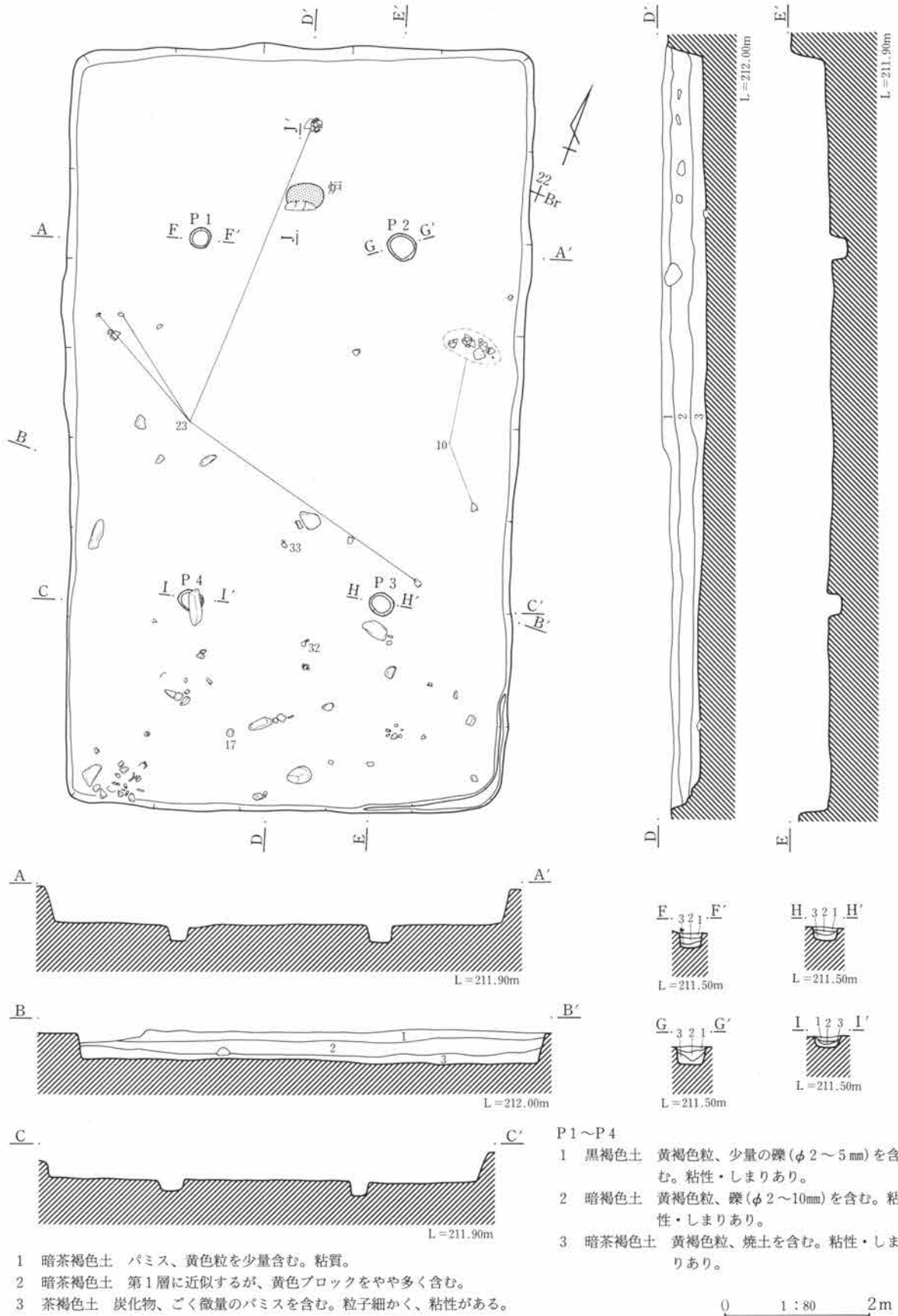
第85図 59号住居跡 (2)



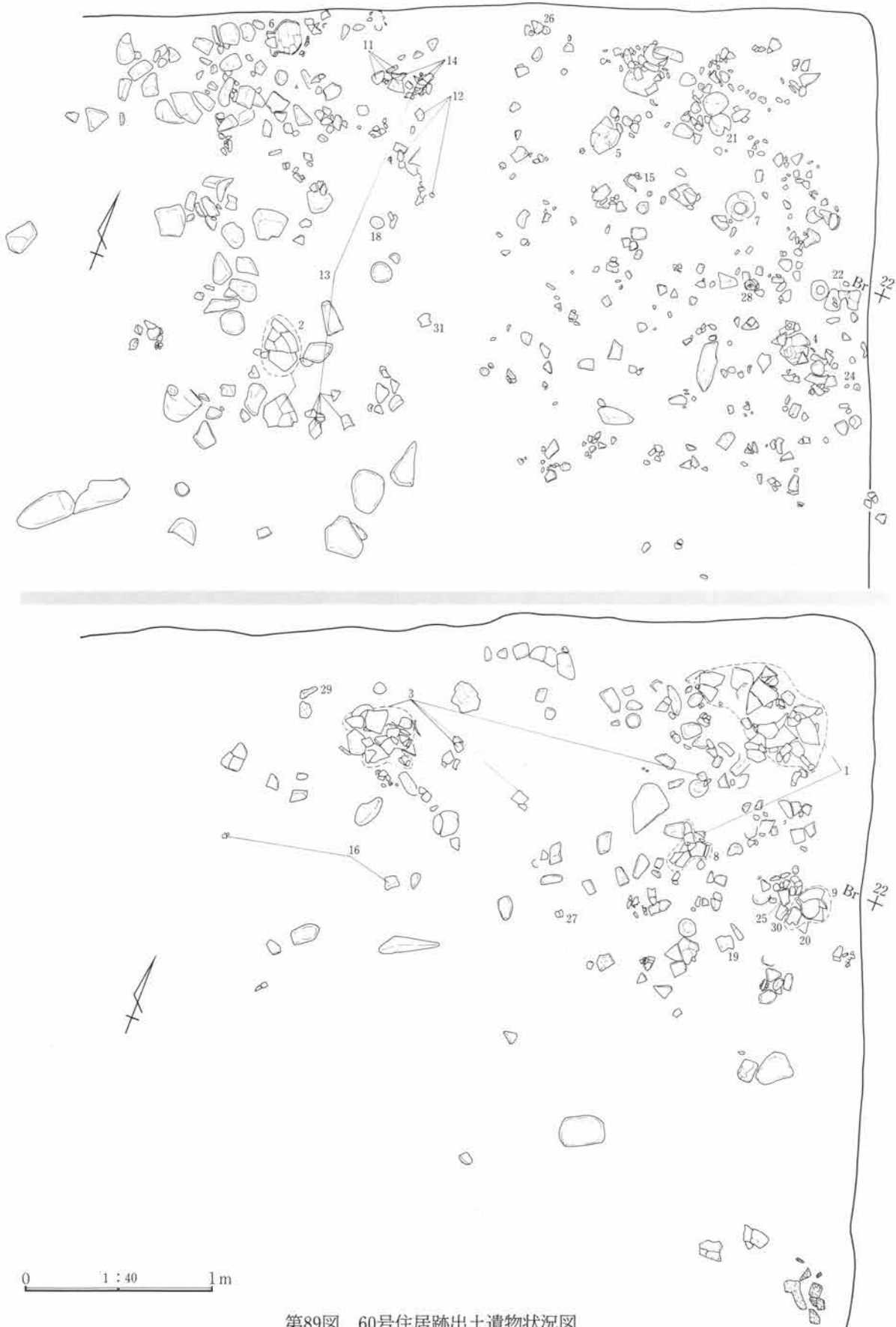
第86図 59号住居跡出土遺物実測図 (1)



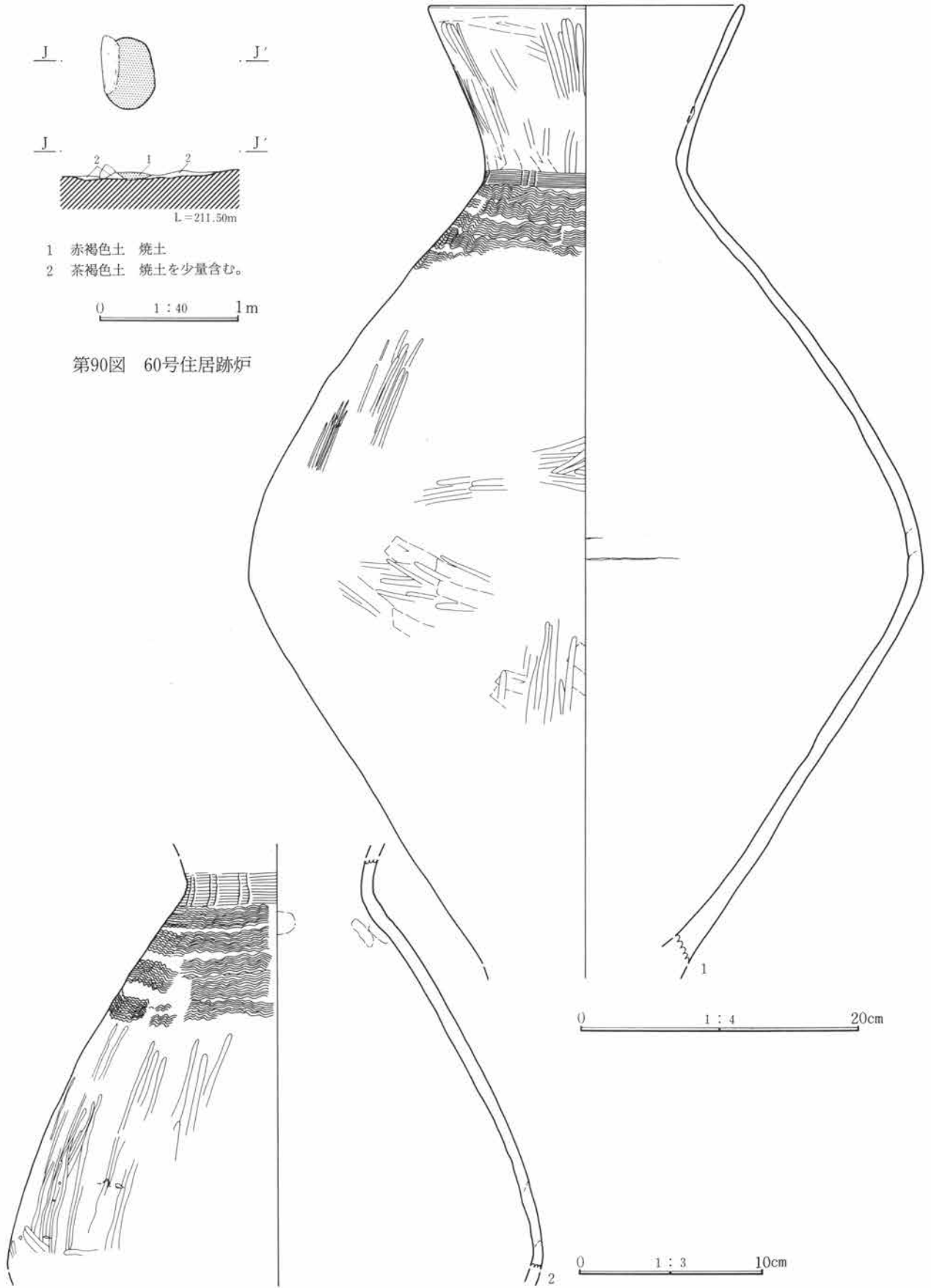
第87図 59号住居跡出土遺物実測図(2)



第88図 60号住居跡



第89図 60号住居跡出土遺物状況図



- 1 赤褐色土 焼土
2 茶褐色土 焼土を少量含む。

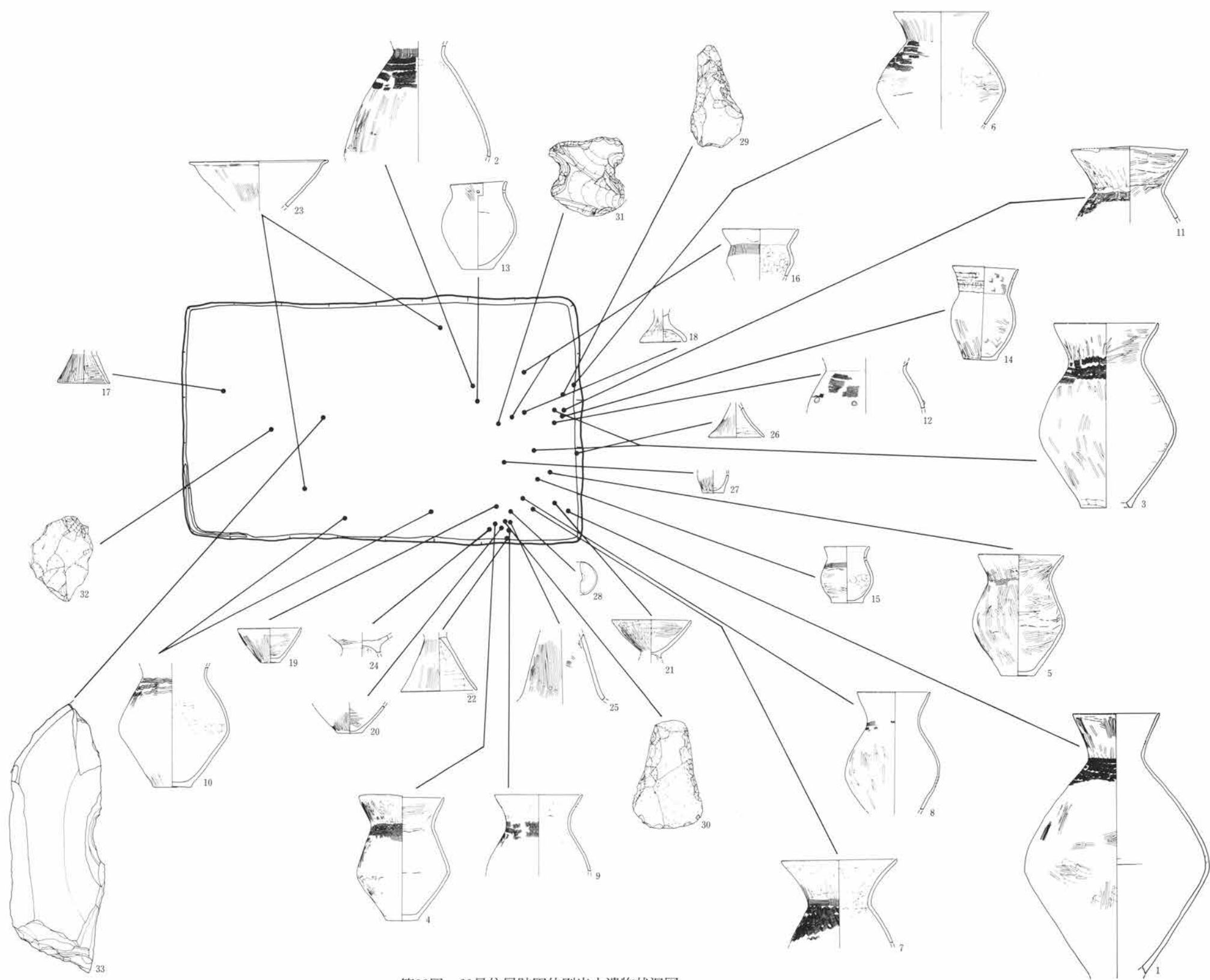
0 1:40 1m

第90図 60号住居跡炉

0 1:4 20cm

0 1:3 10cm

第91図 60号住居跡出土遺物実測図(1)



第92图 60号住居跡固体别出土遺物状況图

B-60号住居跡 (第88~97図、P L23・49~51)

位置 Bp~Br-21~23グリッド 床面積 63.76㎡ 主軸方位 N-21°-W

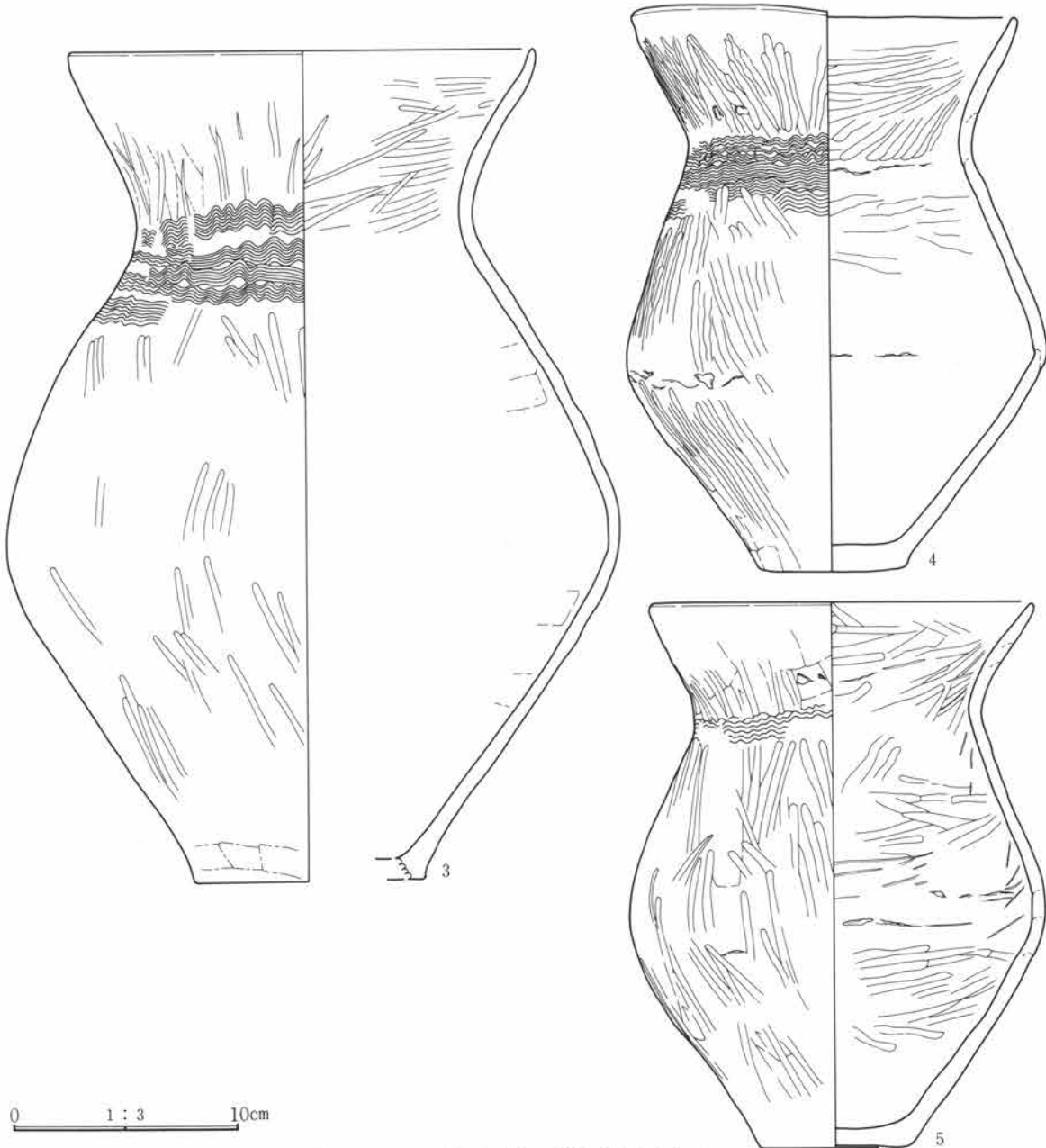
重複 東壁の上部に20号土坑が重複していた。

壁 住居の遺存状態は良好である。周壁は全周検出することができた。直立ぎみに立ち上がり、残存壁高は52cmを測ることができる。粘質黄褐色土を壁土としている。

形状と規模 縦に長い長方形を呈する。規模は長軸10.60m、短軸6.32mを測ることができる。大型住居である。

床面 床面はほぼ平坦である。

炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴間よりやや北壁よりに位置する。長軸50cm、短軸26cm、深さ5cmほどの楕円形の焼土面を有し、炉石を据える形態の地床炉である。



第93図 60号住居跡出土遺物実測図(2)

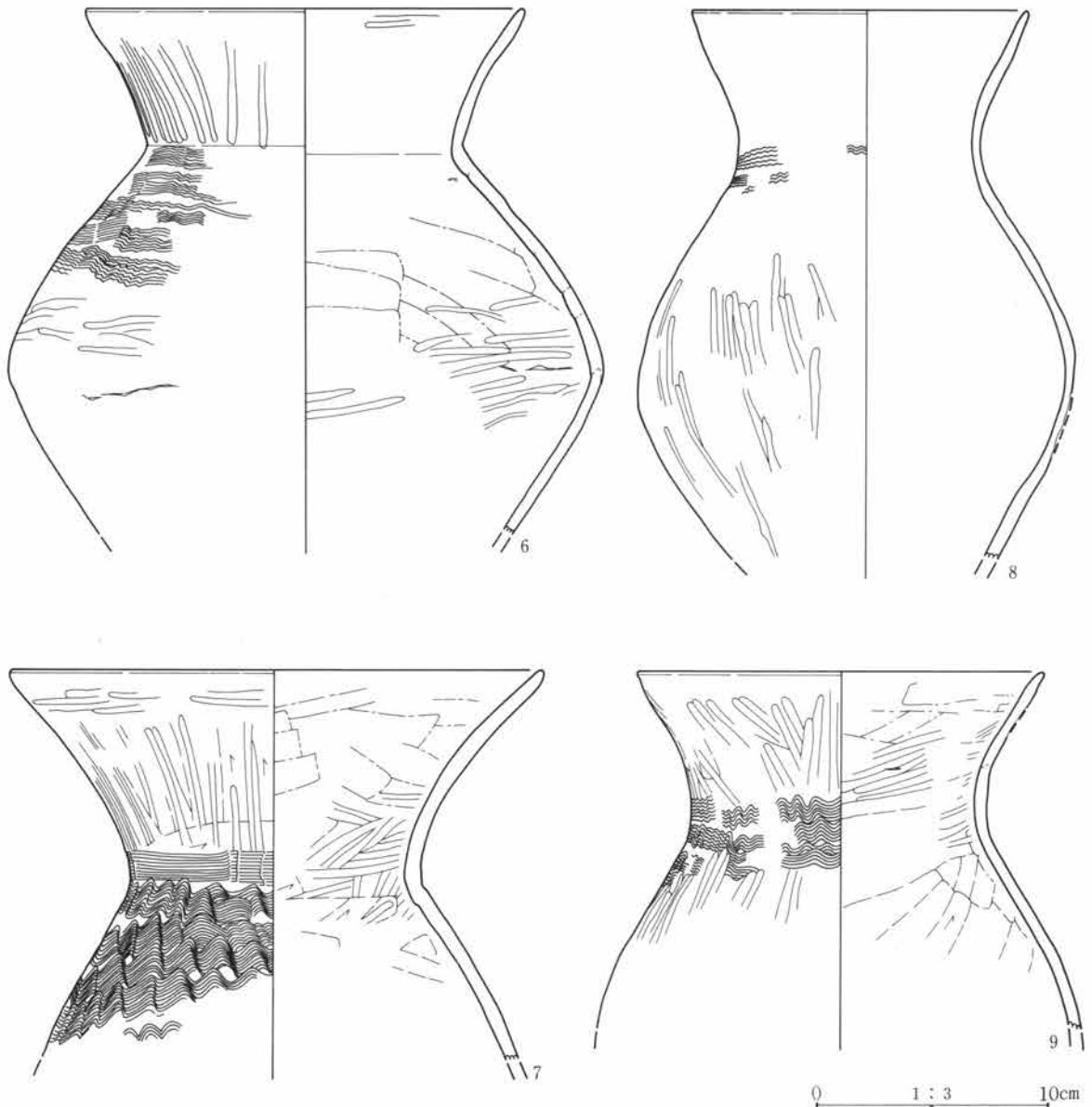
第3章 検出された遺構と遺物

柱穴 主柱穴を4箇所良好に検出することができた。本住居の主柱は4本柱構造である。

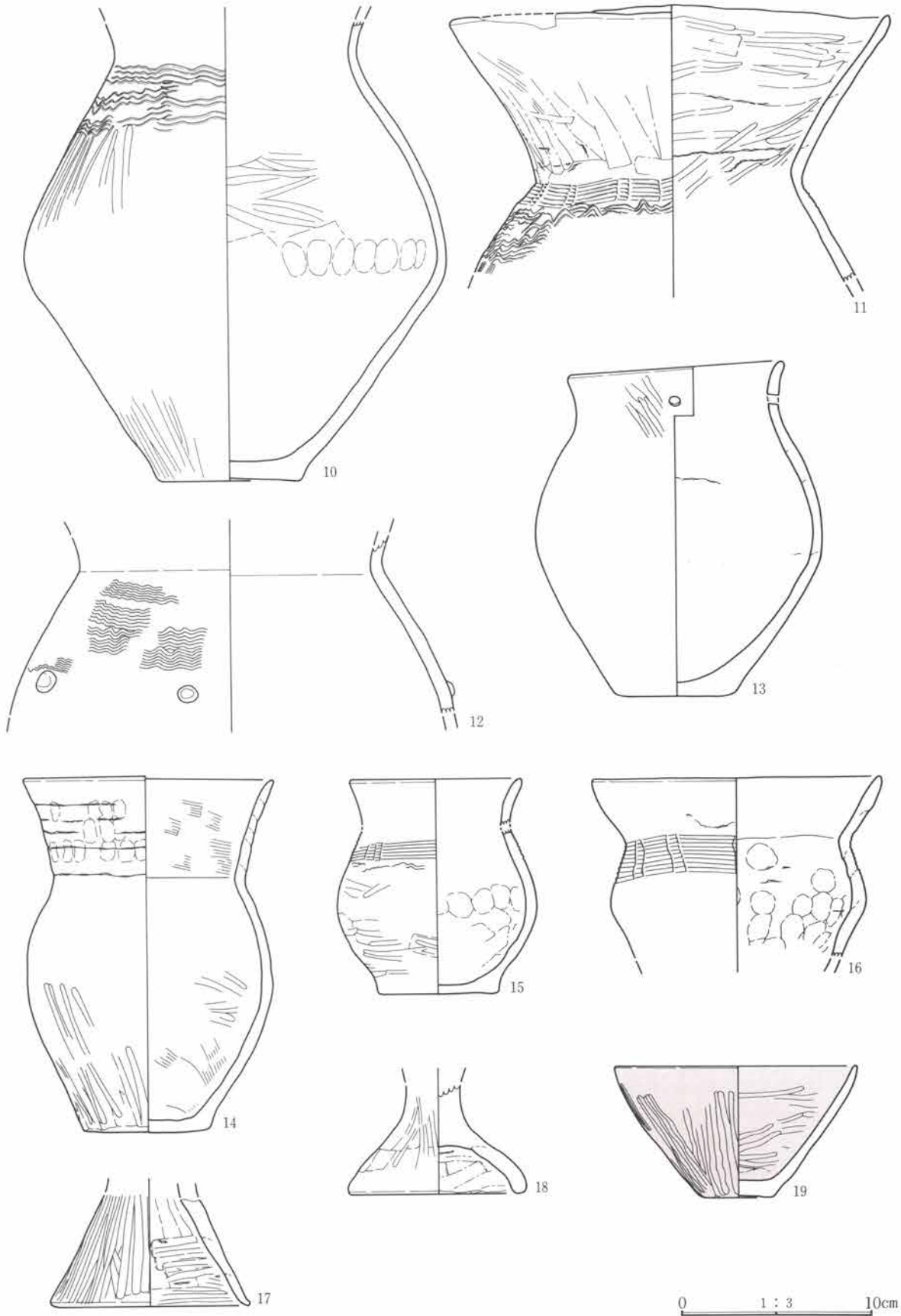
No.	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	30cm	39cm	34cm	35cm
下端長径	25cm	31cm	28cm	29cm
深 さ	20cm	24cm	20cm	16cm

出土遺物 出土遺物は非常に多く、住居の北側に集中して出土している。床面直上の遺物は極めて少なく、遺物のほとんどは覆土中に何層にも重なって出土している。図化した遺物は大型壺2点(1・2)、甕10点(3～12)、小型甕3点(13～15)、台付甕3点(16～18)、赤色塗彩の鉢2点(19・20)、高坏6点(21～26)、ミニチュア土器1点(27)、土製紡錘車1点(28)、その他に石皿、石鍬等の石器類5点(29～32)である。小型甕1点(14)は口縁～頸部に粘土帯接合痕・指頭圧痕を残している。

時期 弥生時代後期

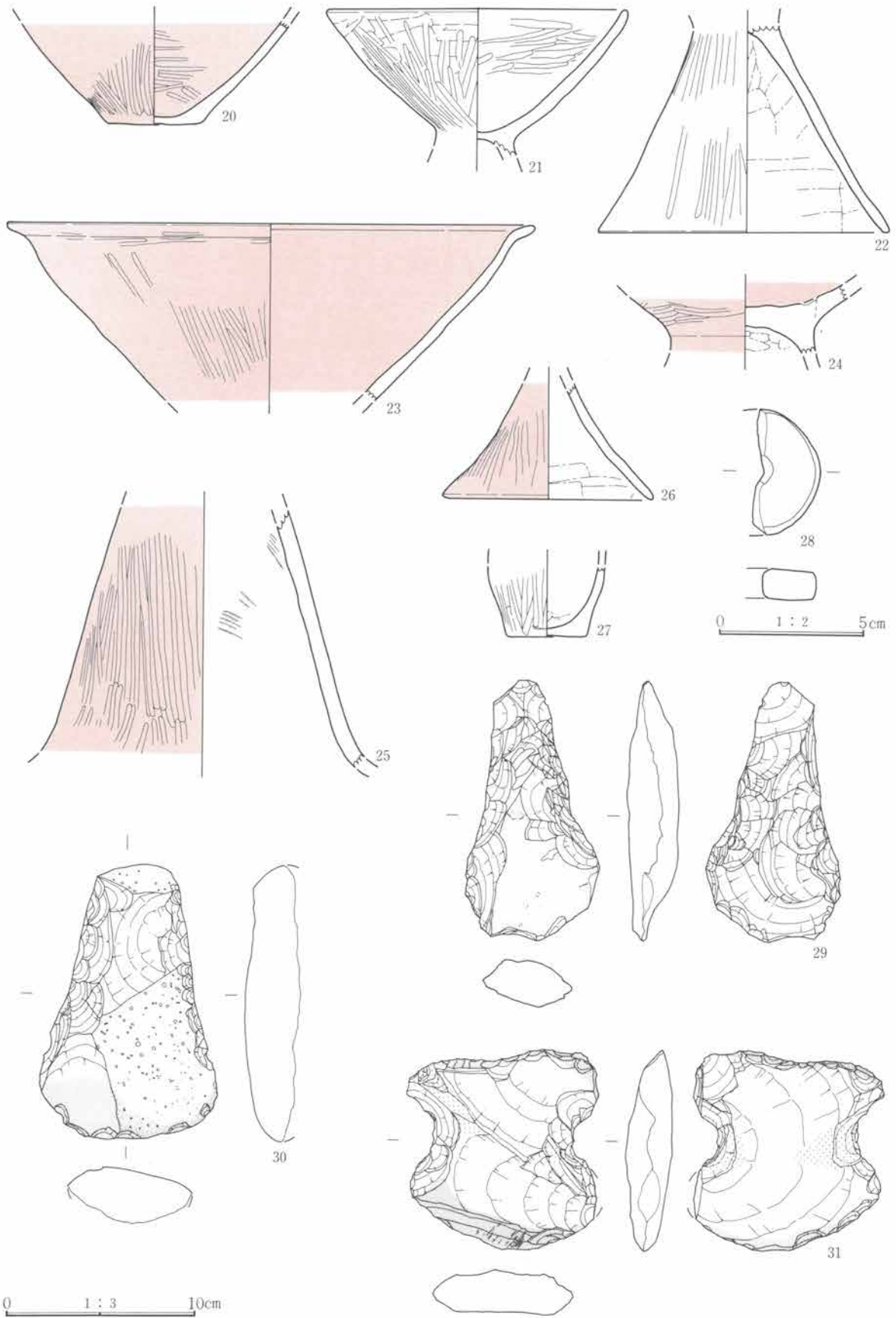


第94図 60号住居跡出土遺物実測図(3)

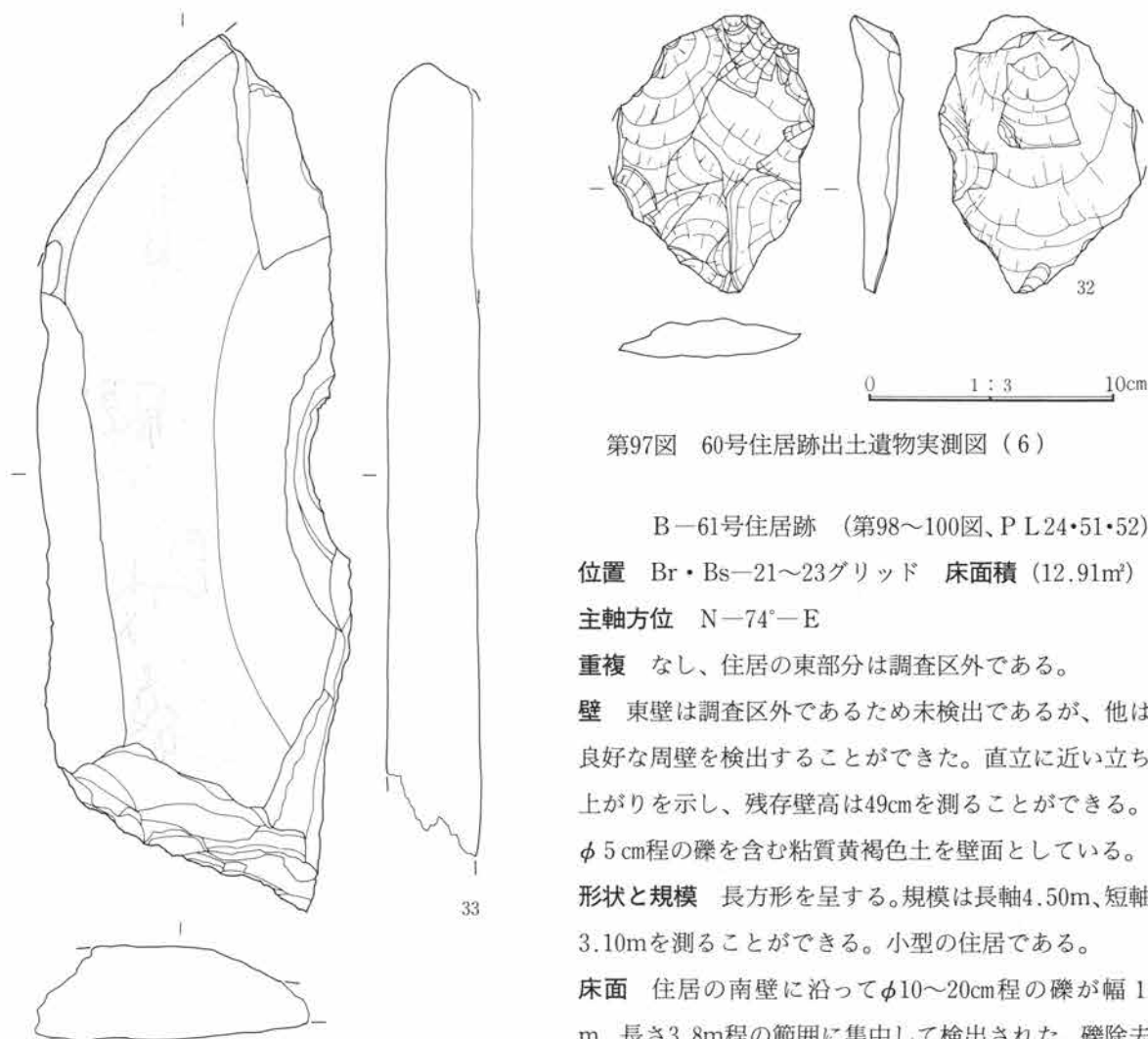


第95図 60号住居跡出土遺物実測図(4)

第3章 検出された遺構と遺物



第96図 60号住居跡出土遺物実測図(5)



第97図 60号住居跡出土遺物実測図(6)

B-61号住居跡 (第98~100図、P L 24・51・52)

位置 Br・Bs-21~23グリッド 床面積 (12.91㎡)

主軸方位 N-74°-E

重複 なし、住居の東部分は調査区外である。

壁 東壁は調査区外であるため未検出であるが、他は良好な周壁を検出することができた。直立に近い立ち上がりを示し、残存壁高は49cmを測ることができる。

φ5cm程の礫を含む粘質黄褐色土を壁面としている。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸4.50m、短軸3.10mを測ることができる。小型の住居である。

床面 住居の南壁に沿ってφ10~20cm程の礫が幅1m、長さ3.8m程の範囲に集中して検出された。礫除去後の床面は比較的凹凸が少なく平坦である。

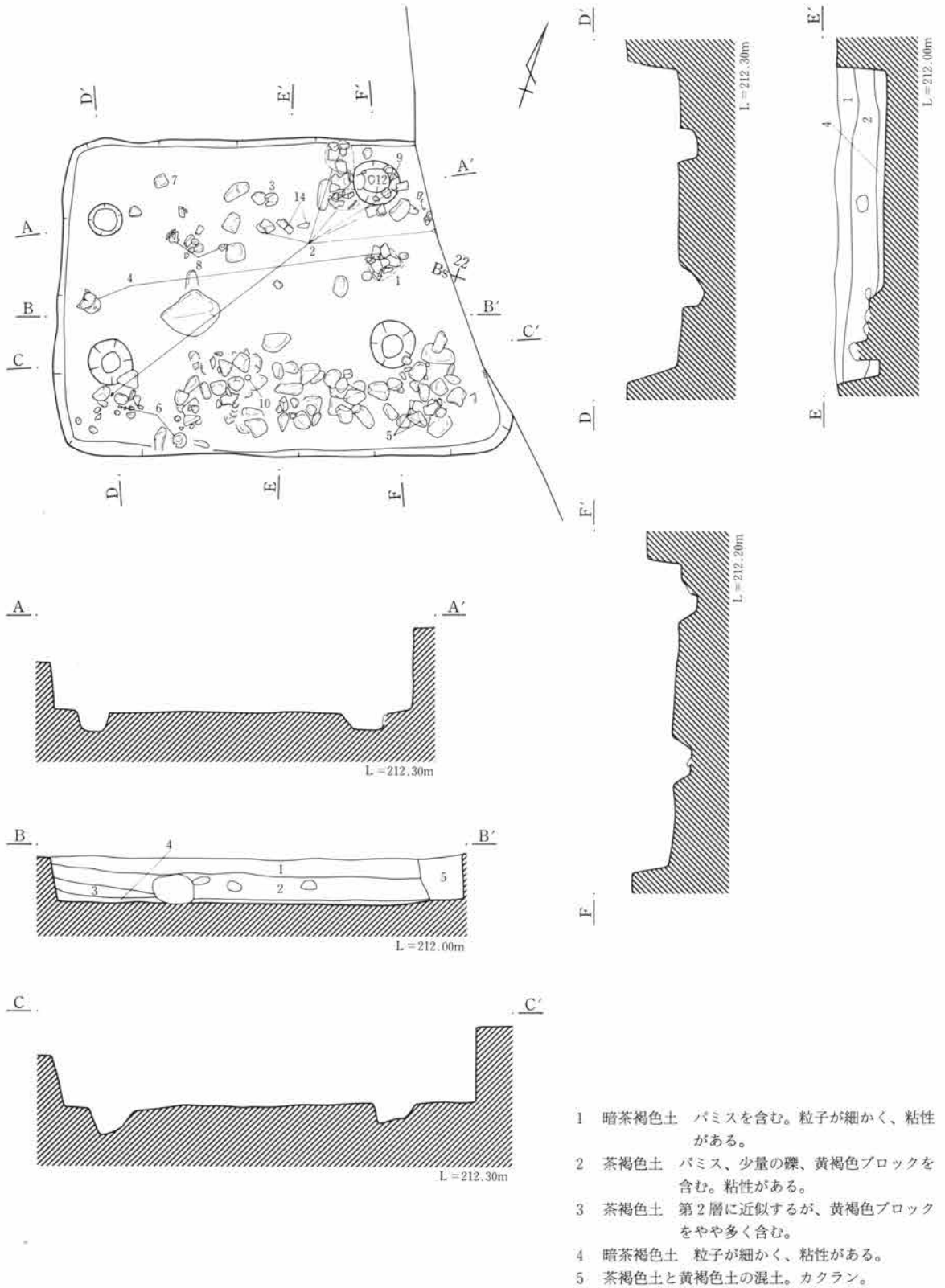
炉跡 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 支柱穴を4箇所検出することができた。P 1~P 4。

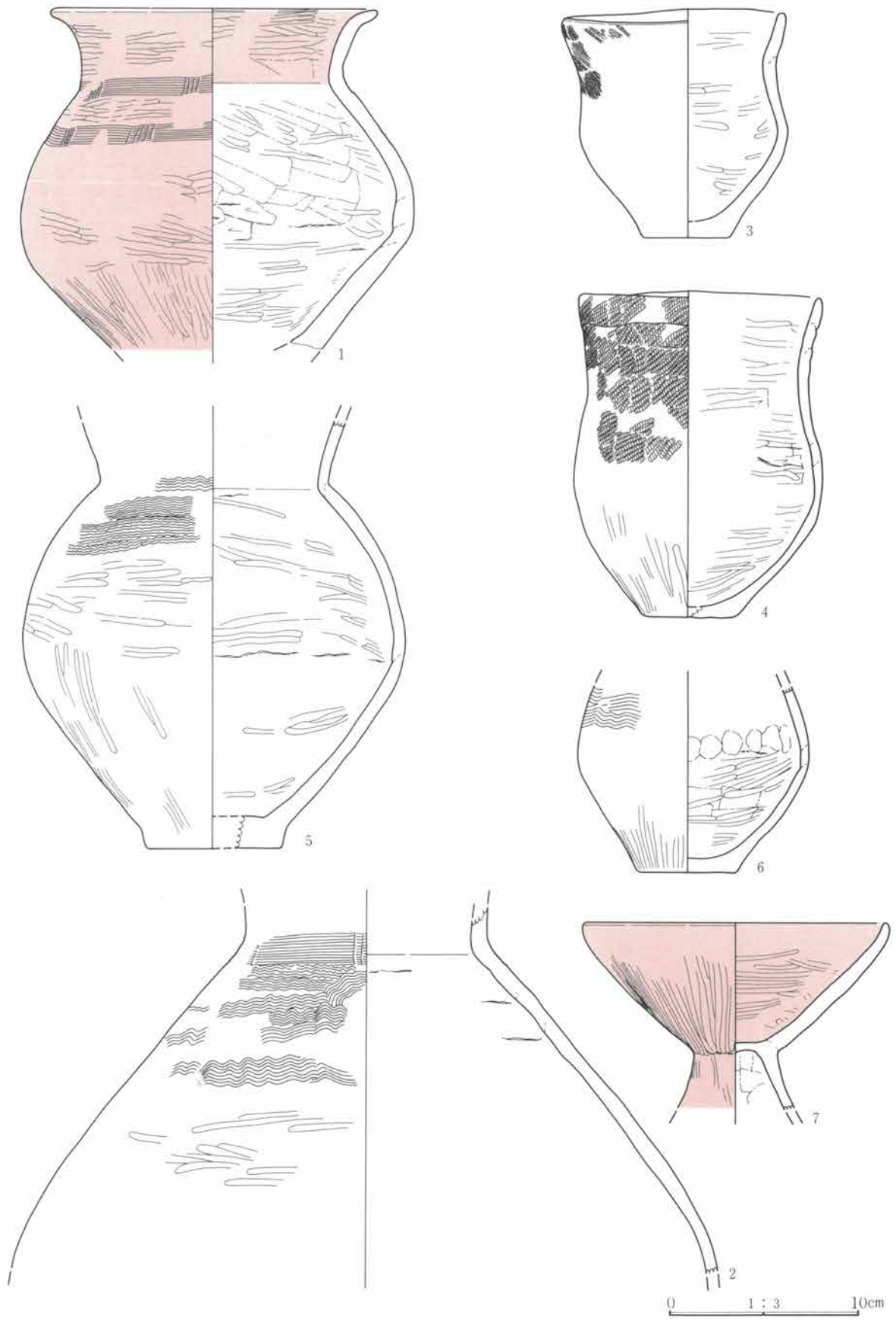
No.	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	32cm	45cm	45cm	43cm
下端長径	23cm	29cm	24cm	21cm
深 さ	18cm	18cm	18cm	24cm

出土遺物 小規模の住居であるが出土遺物は比較的多い。住居の西側P 2の周辺には外面に赤彩を施し、内面に赤色塗彩痕の残る壺1点(1)、大型壺1点(2)、甕1点(9)、蓋のつまみ部1点(12)が集中して出土している。北壁よりには原体Rの斜縄文を施した小型甕1点(3)、西側支柱穴間には原体LRの斜縄文を施した小型甕1点(4)が床面及び床面付近より出土している。小型甕2点は赤井戸、吉ヶ谷式系の外来系土器である。その他に甕3点(5・6・14)、高坏2点(7・8)、甕1点(10)、ミニチュア土器1点(11)、土製勾玉1点(13)、石鍬1点(15)等が出土している。そのほとんどが覆土中からの出土である。

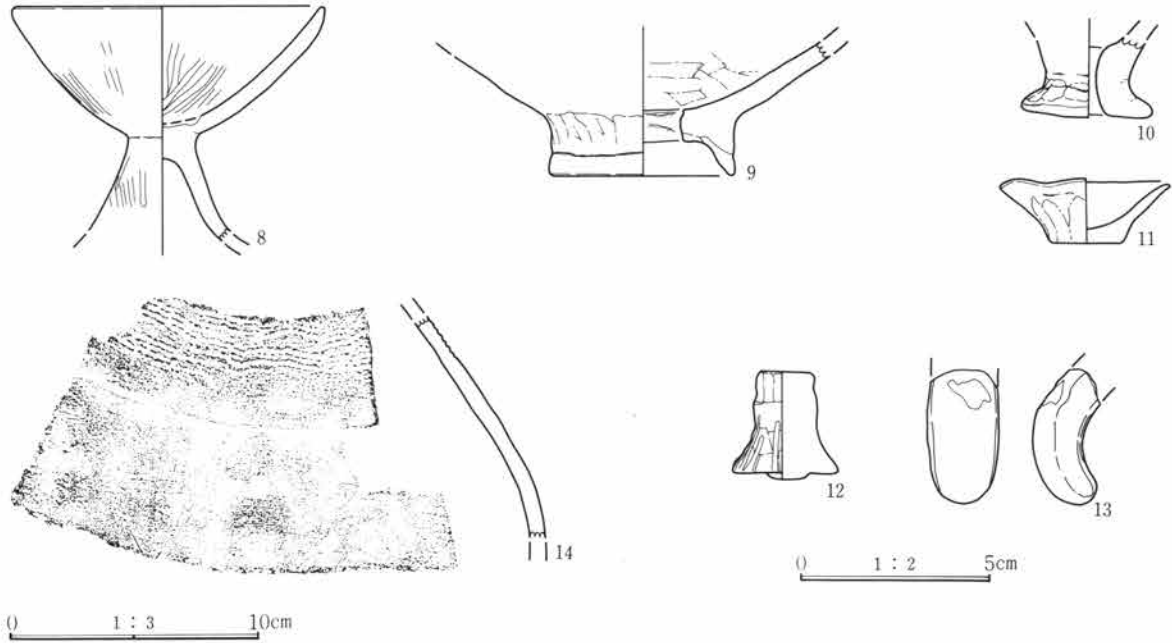
時期 弥生時代後期



第98図 61号住居跡



第99図 61号住居跡出土遺物実測図(1)



第100図 61号住居跡出土遺物実測図(2)

B-62号住居跡 (第101・102図、P L24・52)

位置 Bs-23グリッド 床面積 不明 主軸方位 不明

重複 48号住に住居の東辺を切られる。住居の北半は調査区外である。

壁 南壁と西壁の一部は良好に検出することができた。立ち上がりはやや外傾し、残存壁高は32cmを測ることができる。粘質黄褐色土(地山)を壁面としている。

形状と規模 住居の大半が調査区外であるため形状は不明瞭であるが、検出部及び柱穴等の位置から考えると、大型の長方形を呈すると推定される。規模は長軸不明、短軸6.90mを測ることができる。

床面 東側の一部は48号住と重複し、床面を失っている。粘質黄褐色土(地山)を床面としており、床面は平坦である。

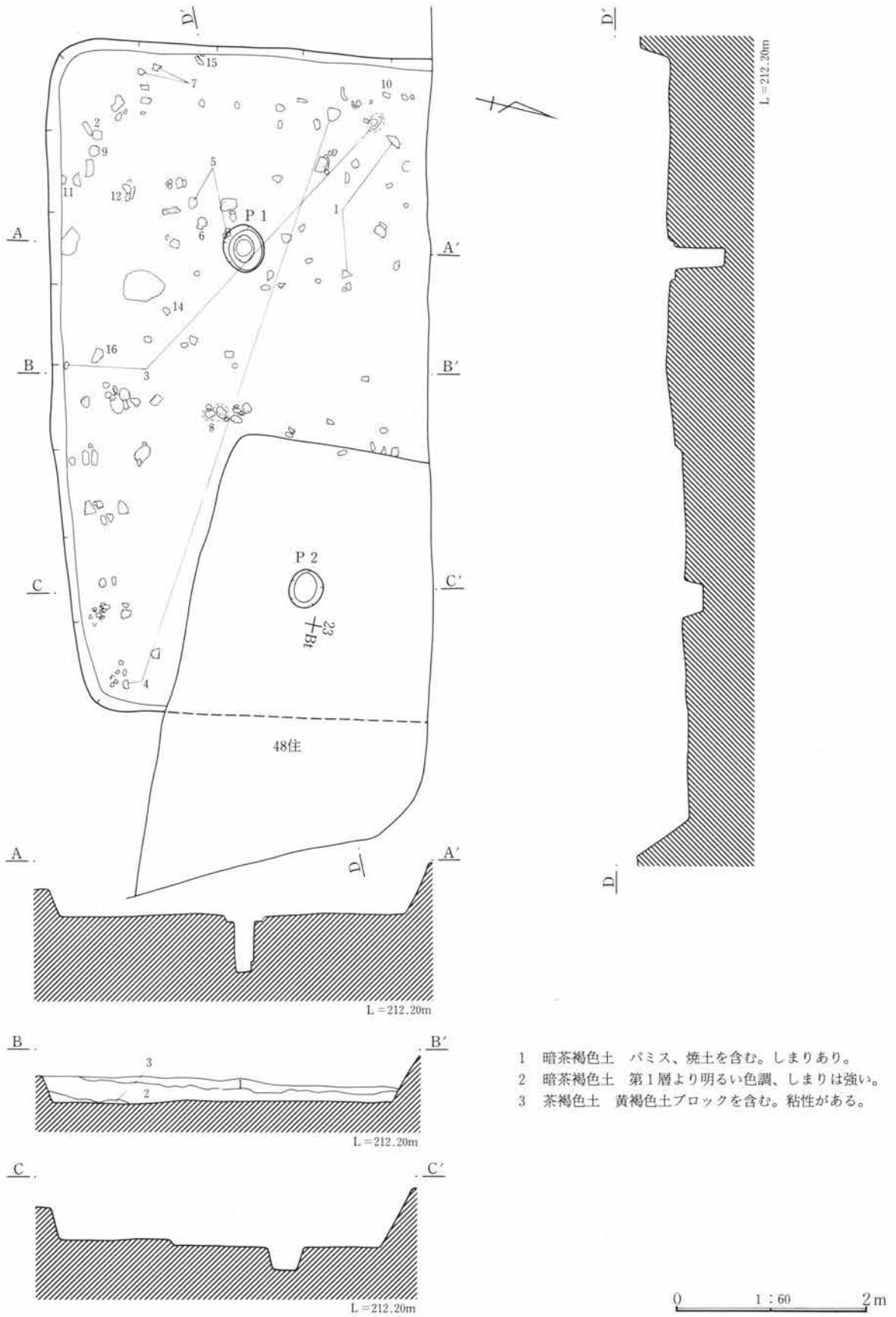
炉跡 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 P1・P2は主柱穴になると思われる。

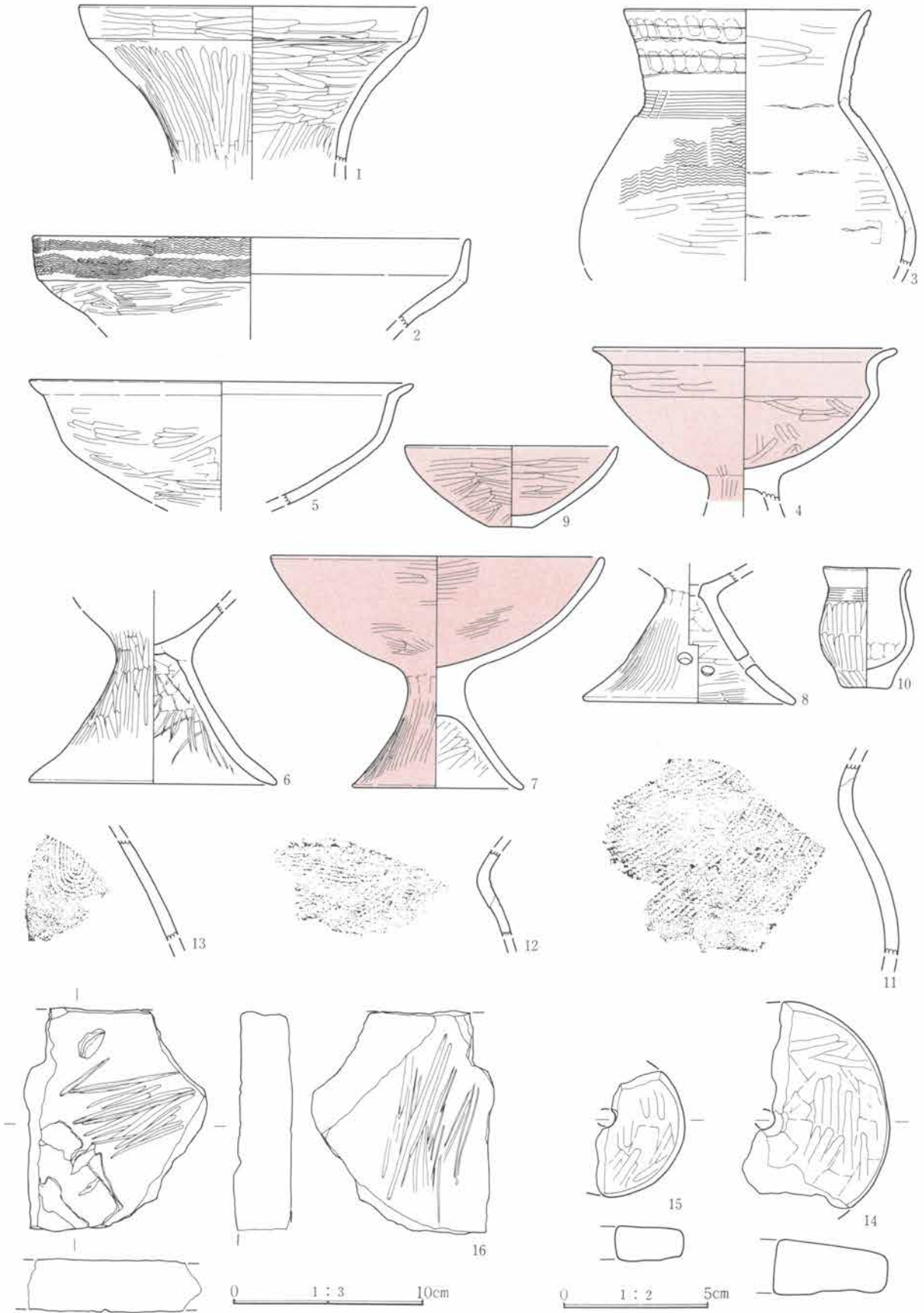
No.	P1	P2
上端長径	49cm	39cm
下端長径	12cm	31cm
深さ	58cm	23cm

出土遺物 重複部を除いた住居内全体に遺物が散在している。床面直上の遺物は少なく、覆土中のものが多い。図化した遺物は、壺の口縁部2点(1・2)、口縁部に粘土帯接合痕・指頭圧痕を残す甕1点(3)、高坏4点(4~7)、台部に4箇所の円孔を持つ器台1点(8)、赤色塗彩の鉢1点(9)、ミニチュア土器1点(10)、土製紡錘車2点(14・15)、等である。その他、破片中に原体LRの斜縄文を施す赤井戸、吉ヶ谷式系(11)の外来系土器が見られる。

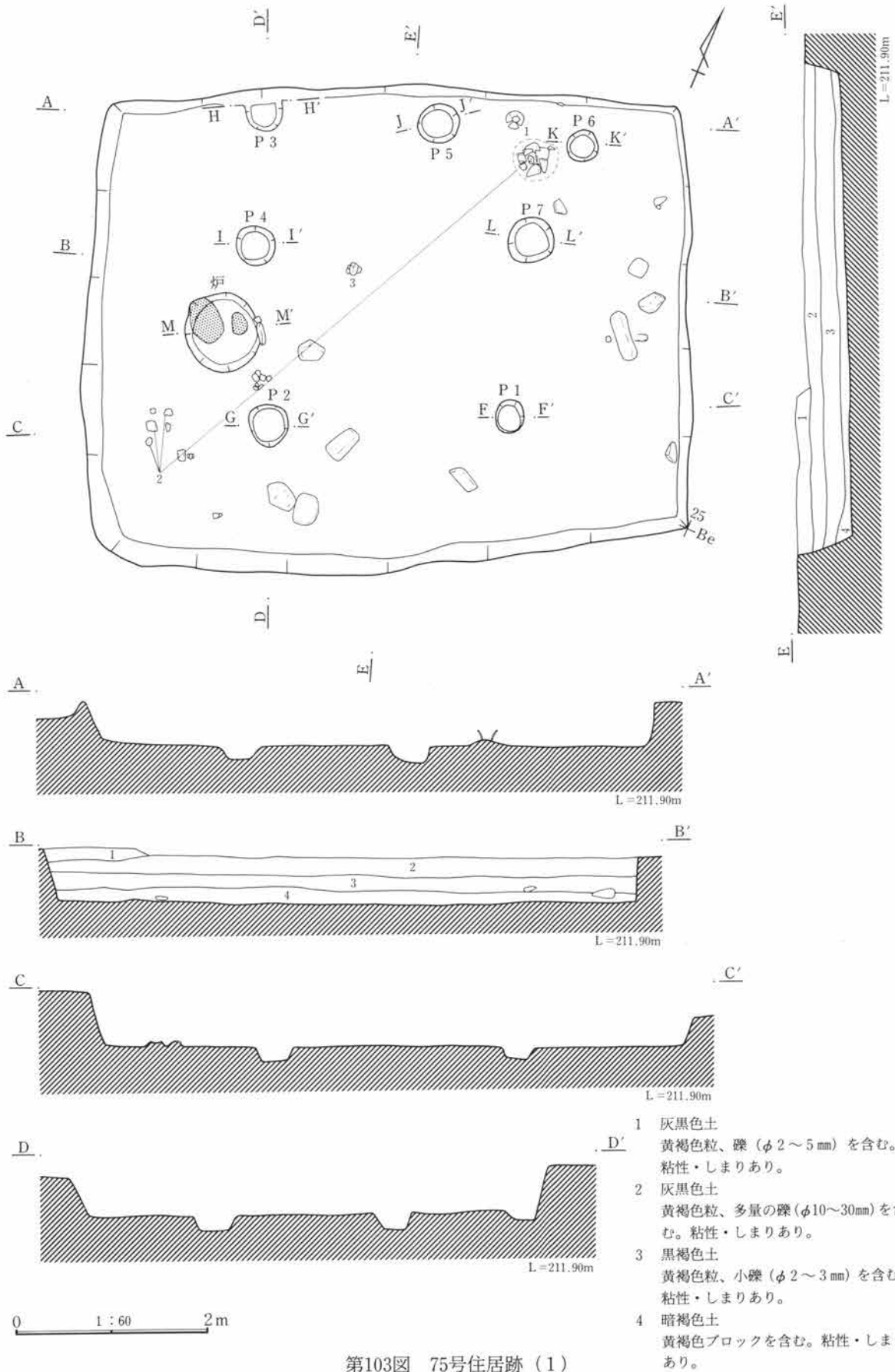
時期 弥生時代後期



第101図 62号住居跡

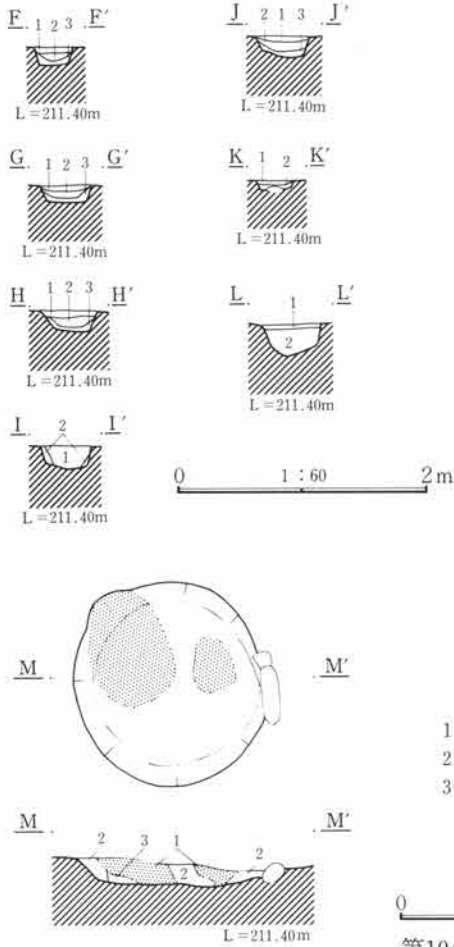


第102図 62号住居跡出土遺物実測図



第103図 75号住居跡 (1)

第3章 検出された遺構と遺物



- P1・2
- 1 暗褐色土 黄褐色粒、小礫 (φ2~3mm)、少量の焼土を含む。粘性・しまりあり。
 - 2 暗茶褐色土 黄褐色粒、小礫 (φ2~3mm) を含む。粘性・しまりあり。
 - 3 茶褐色土 黄褐色粒を含む。粘性・しまりあり。
- P3
- 1 暗黄褐色土 黄褐色土、小礫 (φ5~10mm) を多量に含む。粘性・しまりあり。
 - 2 P1の第1層と同じ。
 - 3 P1の第2層と同じ。
- P4
- 1 茶褐色土 黄色粒、砂粒を含む。
 - 2 茶褐色土 しまりあり。
- P5
- 1 茶褐色土 粒子が細かく、しまり良。
 - 2 P1の第1層と同じ。
 - 3 黄褐色土 茶褐色土を含む。
- P6
- 1 P1の第1層と同じ。
 - 2 P1の第3層と同じ。
- P7
- 1 茶褐色土 粒子が細かく、しまり良。
 - 2 P1の第1層と同じ。

- 1 赤褐色土 よく焼け込んだ焼土層。
- 2 暗茶褐色土 しまりあり。
- 3 黄褐色土と暗茶褐色土の混土層。

第104図 75号住居跡(2)、炉

B-75号住居跡 (第103~105図、P L25・52)

位置 Bd・Be-25・26グリッド 床面積 26.77㎡ 主軸方位 N-68°-E 重複 なし

壁 周壁の残りは大変良好であり、全周を検出することができた。立ち上がりはわずかに外傾し、残存壁高は55cmを測ることができる。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸6.20m、短軸4.80mを測ることができる。

床面 粘質黄褐色土を床面としており、ほぼ平坦である。

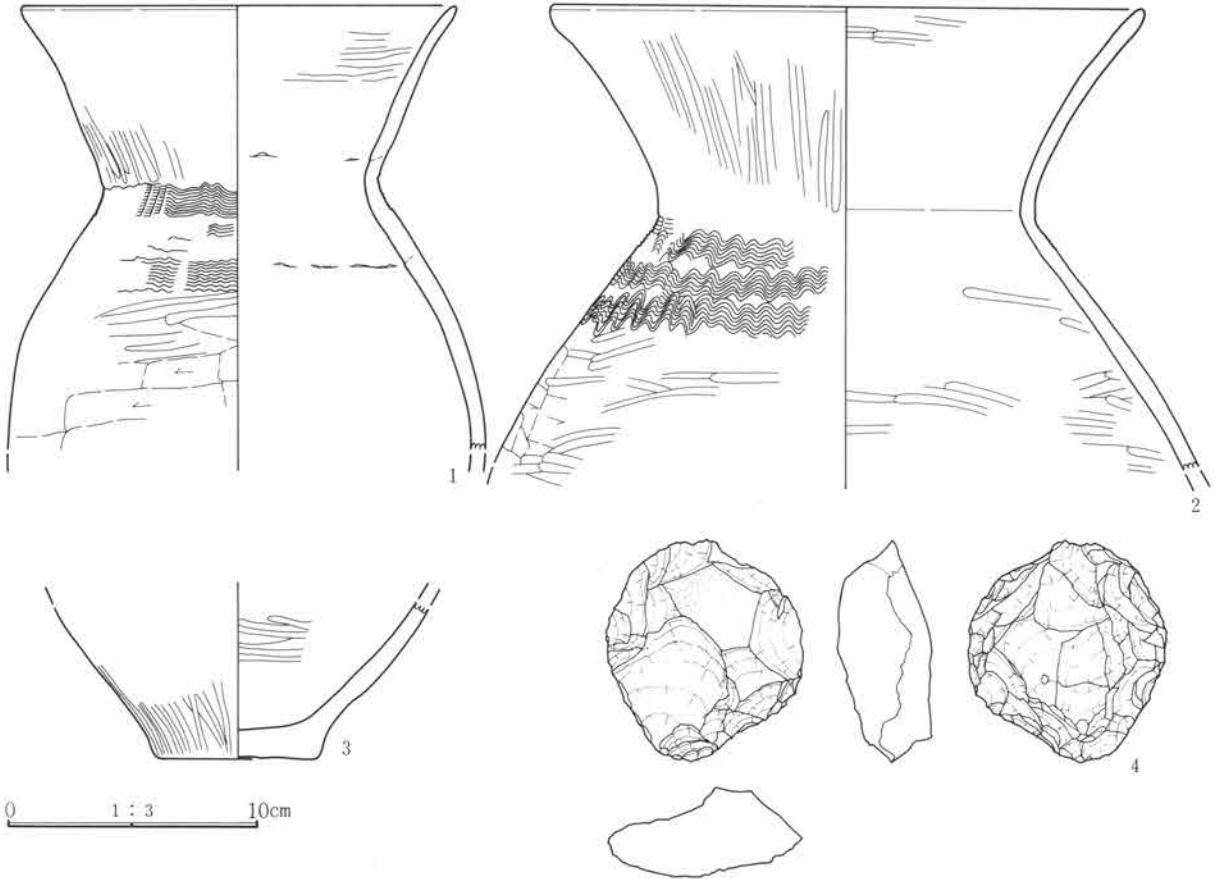
炉跡 炉は住居の中軸線上、西側の支柱穴間からややはずれた西壁よりに位置する。規模は長軸81cm、短軸75cm、深さ9cmを測ることができる。真赤に焼け込んだ楕円形の火床面を有し、炉石を据える形態の地床炉である。

柱穴 P1・P2・P4・P7の4基が支柱穴になると思われる。

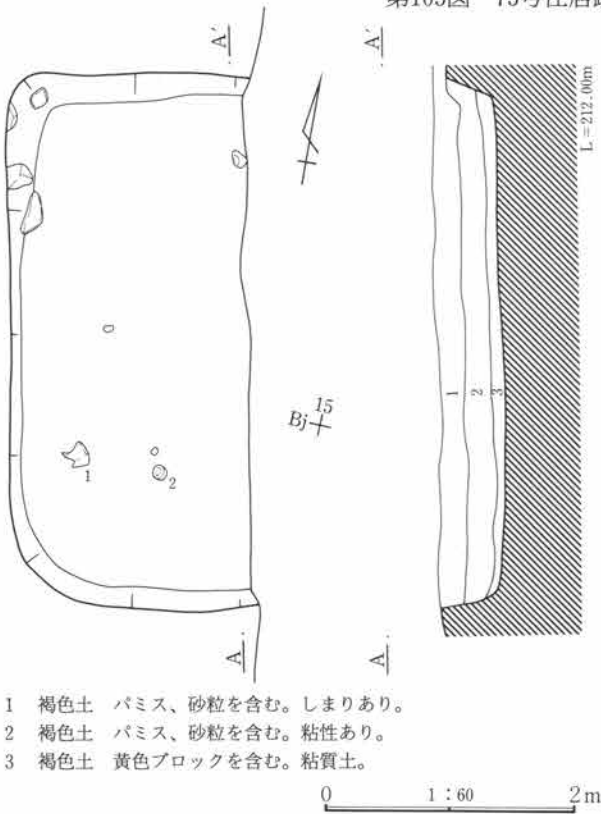
No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
上端長径	33cm	43cm	40cm	43cm	45cm	32cm	46cm
下端長径	27cm	34cm	25cm	29cm	33cm	24cm	35cm
深さ	14cm	14cm	9cm	19cm	16cm	8cm	24cm

出土遺物 出土遺物は極めて少なく、P6近くの床面直上から甕2点(1・2)、覆土中より甕1点(3)が検出されているに過ぎない。

時期 弥生時代後期



第105図 75号住居跡出土遺物実測図



- 1 褐色土 パミス、砂粒を含む。しまりあり。
- 2 褐色土 パミス、砂粒を含む。粘性あり。
- 3 褐色土 黄色ブロックを含む。粘質土。

第106図 79号住居跡

B-79号住居跡(第106・107図、P L25・53)

位置 Bi・Bj-15グリッド 床面積 不明

主軸方位 不明

重複 なし、住居の東半は調査区外である。

壁 検出部分の周壁の遺存状態は良好である。残存壁高は47cmを測ることができる。

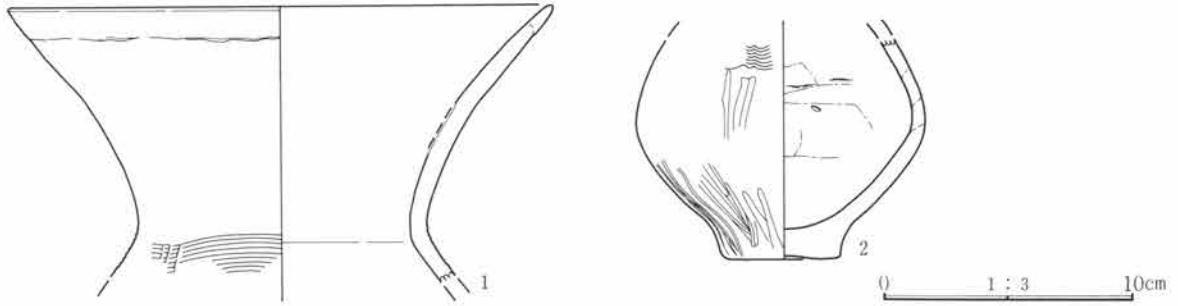
形状と規模 検出部が少なく形状は不明瞭であるが、方形もしくは長方形を呈すると思われる。規模は南北4.20m、東西は不明である。

床面 凹凸が少なく、比較的平坦である。

炉跡 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。

出土遺物 出土遺物は極めて少ない。図化可能な遺物は覆土上層より出土した甕2点(1・2)である。

時期 弥生時代後期



第107図 79号住居跡出土遺物実測図

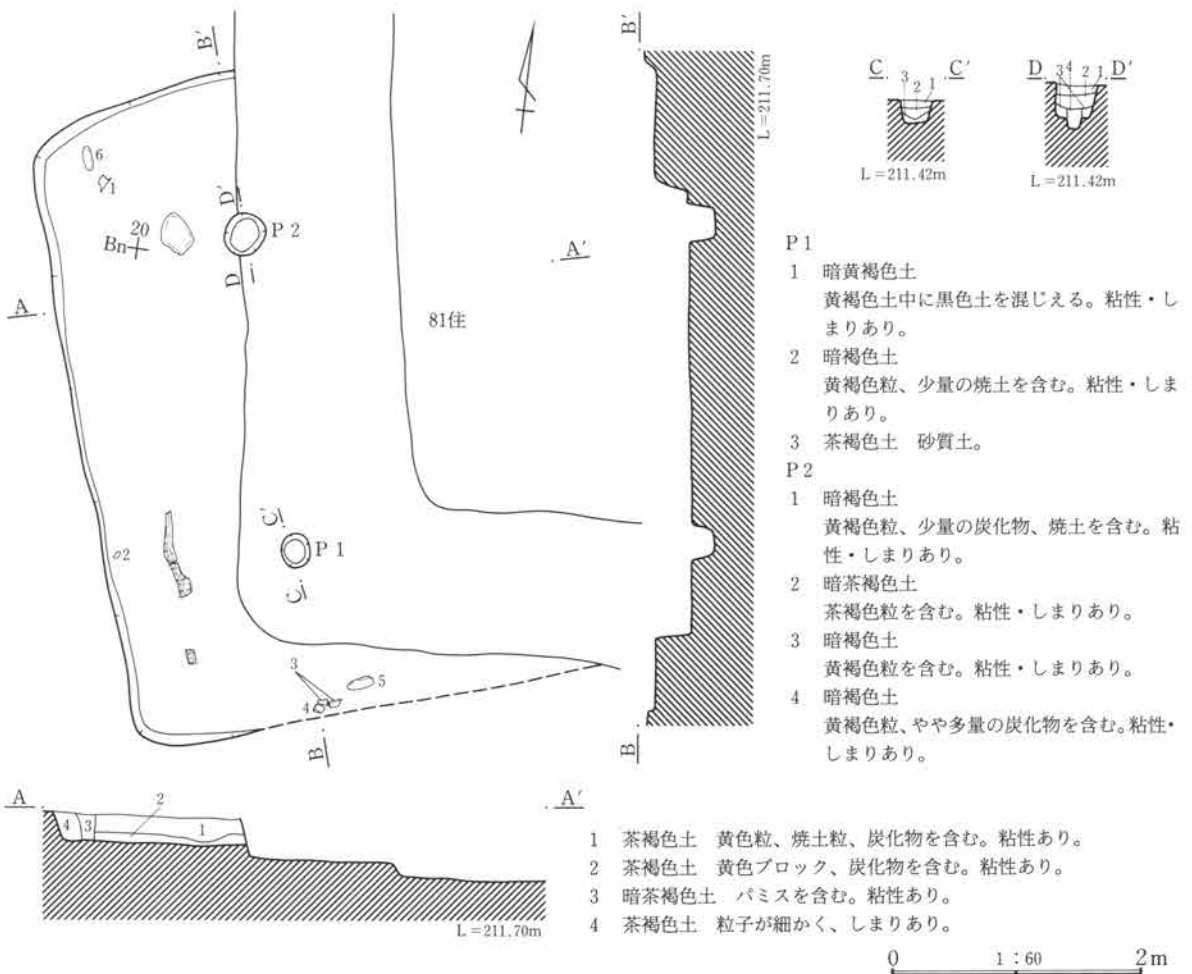
B-87号住居跡 (第108・109図、P L26・53)

位置 Bm・Bn-19・20グリッド 床面積 不明 主軸方位 不明

重複 住居の大半を81号住に切られ、残存部は4分の1程である。

壁 北壁の大半、東壁全部、南壁の一部を81住によって切られている。西壁のみすべてが検出できたが遺存状態が悪く、残存壁高はわずかに2~10cmである。

形状と規模 残存部が少なく形状は明瞭ではないが、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は南北5.10m、東西は不明である。



第108図 87号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

床面 床面に炭化材が散在しており、埋没土にも焼土や炭化物が多く含まれることから焼失家屋の可能性が考えられる。粘質黄褐色土（地山）を平坦に踏み固めて床面としている。

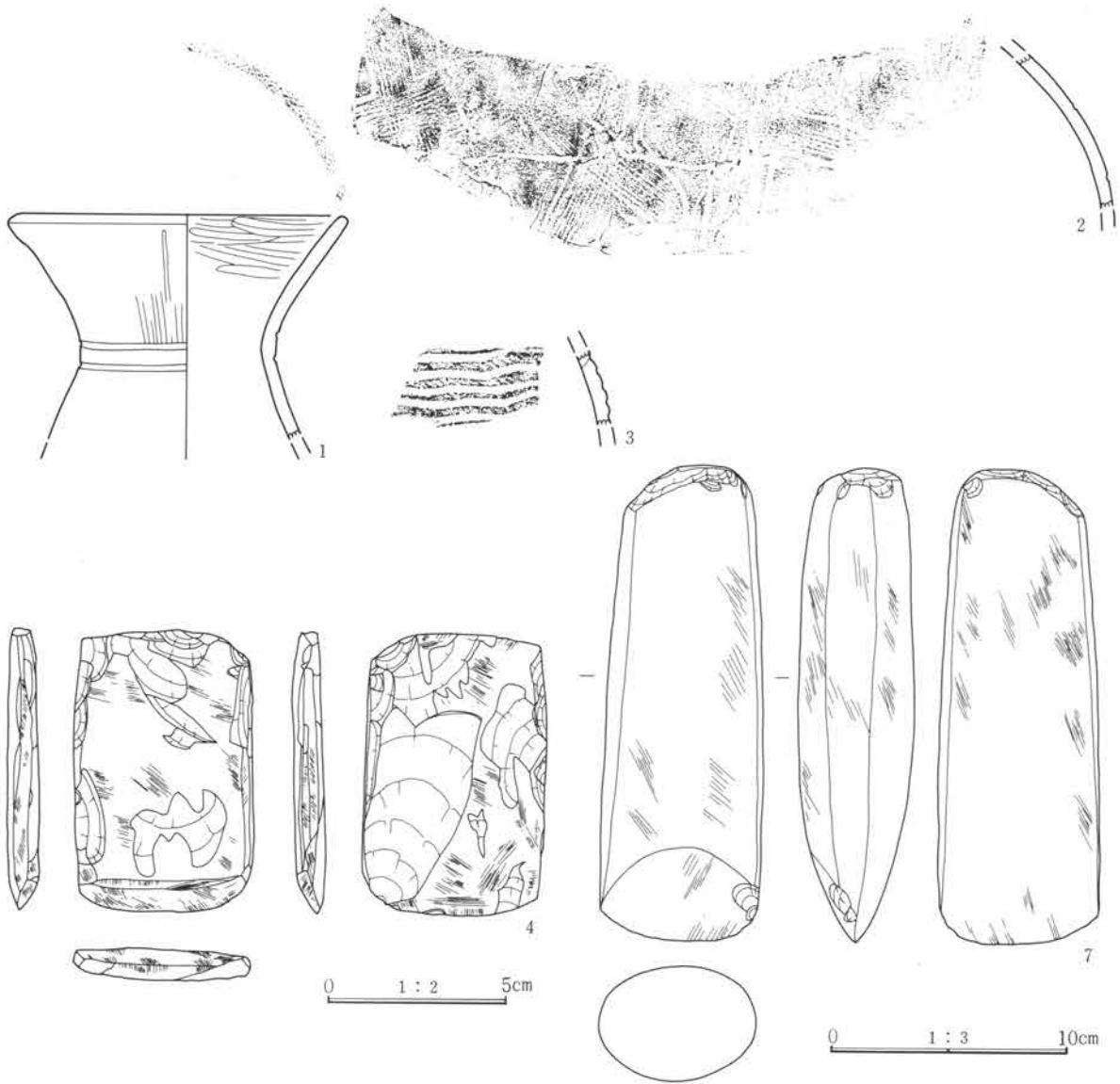
炉跡 検出されなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

柱穴 支柱穴は2箇所を検出することができた。他の柱穴は重複によって壊されており検出することができなかった。

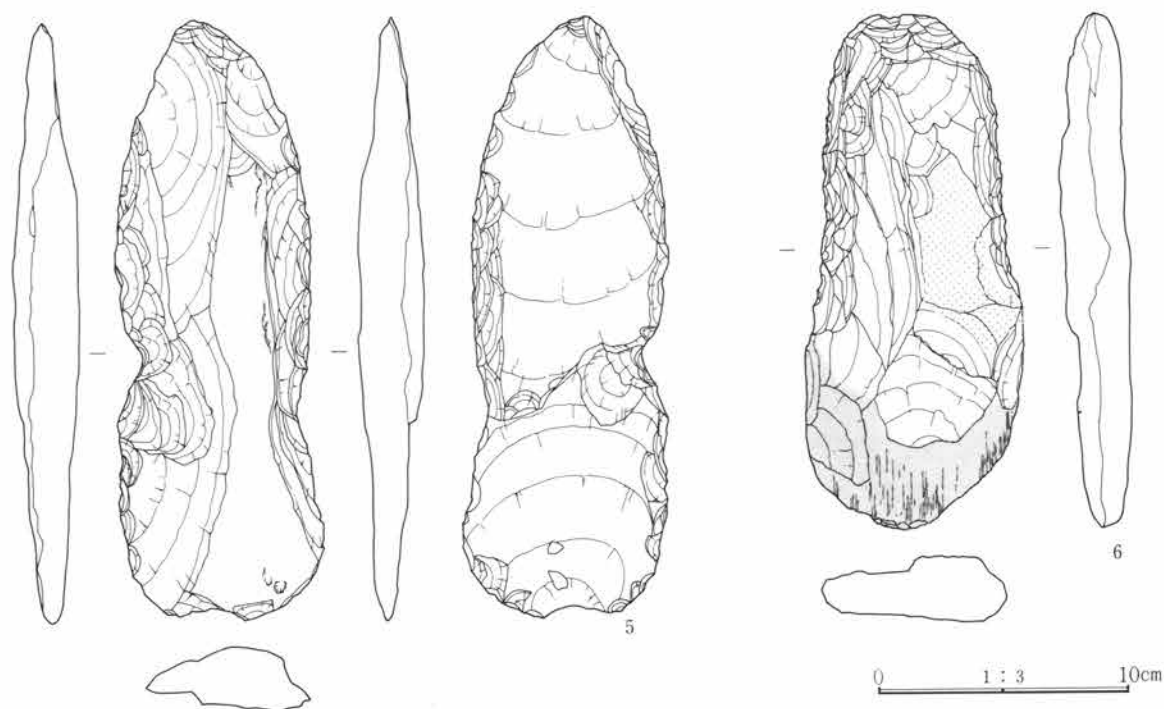
No	P 1	P 2
上端長径	34cm	26cm
下端長径	27cm	19cm
深 さ	18cm	34cm

出土遺物 出土遺物は少ない。床面より壺型土器の破片3点（1～3）、磨製扁平片刃石斧1点（4）、床面及び覆土中より石鋏2点（5・6）、覆土上層より磨製太型蛤刃石斧1点（7）が出土している。

時期 扁平片刃石斧や太型蛤刃石斧、壺型土器等の出土遺物から弥生時代中期後半の所産と考えられる。



第109図 87号住居跡出土遺物実測図（1）



第110図 87号住居跡出土遺物実測図(2)

B-97号住居跡 (第111~113図、P L26・27・53)

位置 Bq・Br-24・25グリッド **床面積** 24.97㎡ **主軸方位** N-88°-W **重複** なし

壁 周壁の残りはたいへん良好である。全周を検出することができた。立ち上がりは僅かに外傾し、残存壁高は32cmを測ることができる。粘質黄褐色土を壁面としている。

形状と規模 やや歪んだ隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.92m、短軸4.72mを測ることができる。

床面 ほぼ平坦である。粘質黄褐色土を床面としている。

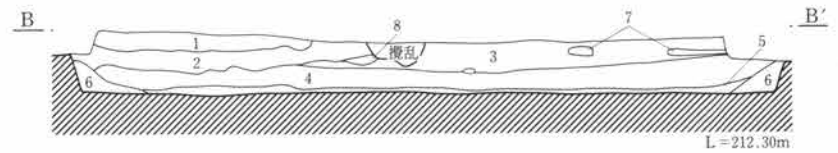
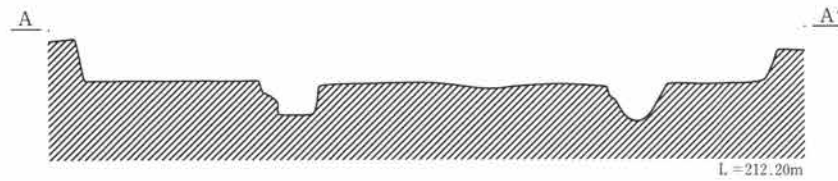
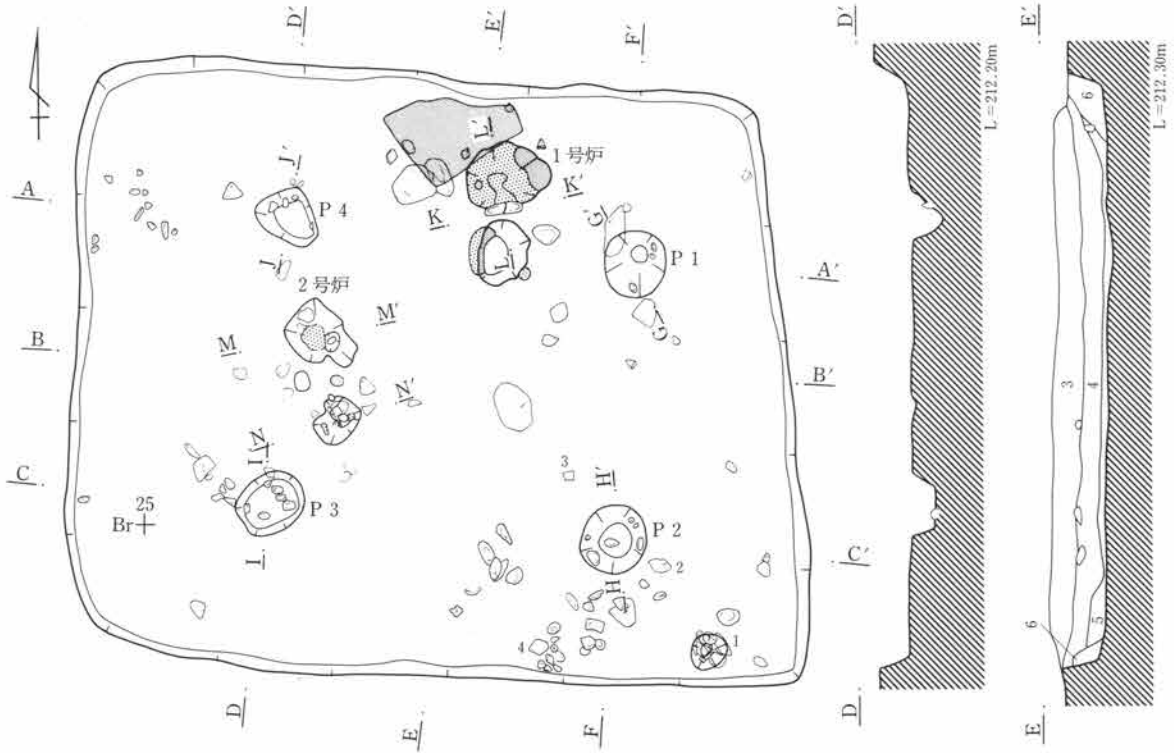
炉跡 北側の支柱穴(P1・P4)間のやや東よりに位置する炉1と西側の支柱穴(P3・P4)間に位置する炉2の複数の炉が検出された。炉1は長軸69cm、短軸49cm、深さ6cmのやや横長の楕円形を呈し、炉石を据える形態の地床炉である。炉石の北側に真赤に焼け込んだ火床面があり、その周辺には灰や炭化物の広がりがみられる。南側にも少量の焼土と浅い掘り込みが検出された。炉2では焼土を伴う浅い掘り込みが近接して2箇所を検出された。北よりの掘り込みは長軸59cm、短軸42cm、深さ10cmの不整な楕円形を呈する地床炉である。もう1つの掘り込みは焼土面も小さく、小規模で不明瞭である。

柱穴 住居のほぼ対角線上に4箇所の支柱穴(P1~P4)を検出することができた。

No.	P1	P2	P3	P4
上端長径	53cm	55cm	55cm	53cm
下端長径	13cm	27cm	44cm	36cm
深さ	30cm	17cm	19cm	24cm

出土遺物 出土遺物は極めて少なく、散在して出土している。南東隅の床面直上より甕の口縁部1点(1)出土している。他には覆土中より鉢1点(2)、甕の口縁部片1点(3)、砥石1点(4)が出土しているに過ぎない。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



- 1 褐色土 B軽石、少量の礫を含む。粘性なく、しまりあり。
- 2 黒褐色土 B軽石、黄色粘土を含む。粘性・しまりあり。
- 3 褐色土 B軽石、黄色粘土、少量の礫を含む。粘性なく、しまりあり。
- 4 暗褐色土 多量の黄色粘土、少量の炭化物を含む。粘性・しまりあり。
- 5 暗褐色土 やや黄色味を帯びる。粘性非常に強く、しまりあり。
- 6 暗褐色土 黄色粘土、白色粒を含む。粘性・しまりあり。
- 7 黒褐色土 樹根の跡か？ 粘性弱く、しまりなし。
- 8 第2層と第3層の混土層

0 1 : 60 2m

第111図 97号住居跡(1)

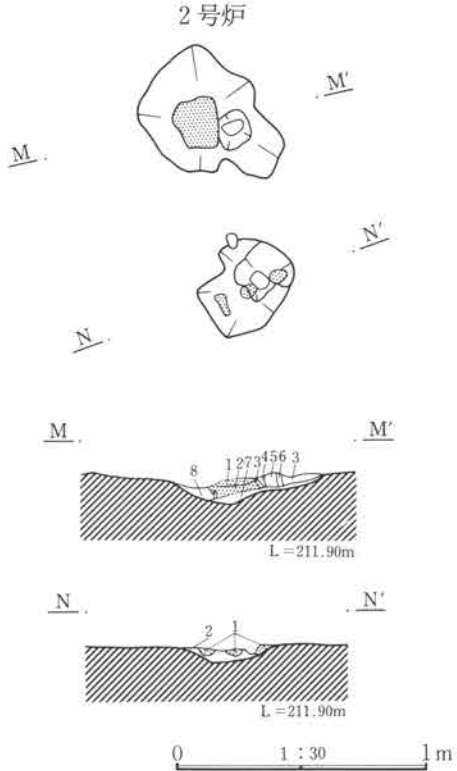
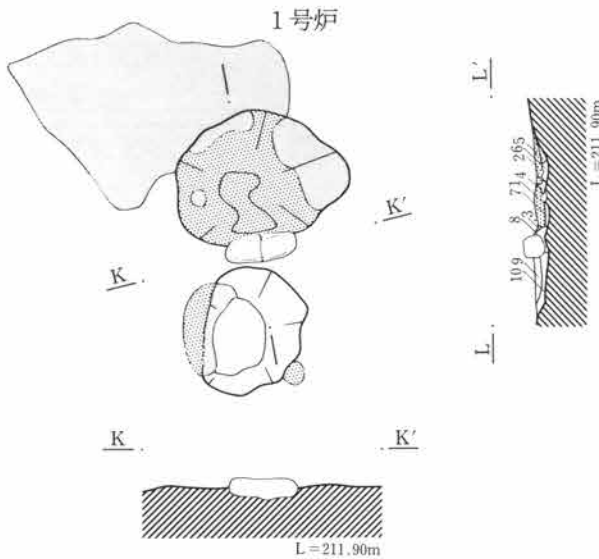
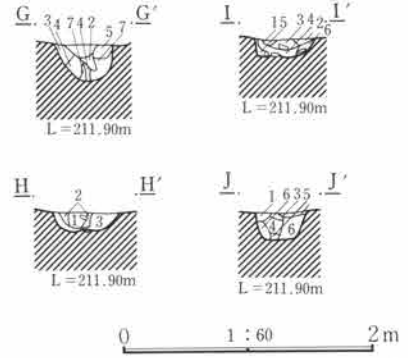
第3章 検出された遺構と遺物

- P1
- 1 暗褐色土 黄色粒、礫を含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 2 暗黄褐色土 粘性の強い黄色粒を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 3 黒褐色土 礫(φ30~40mm)、地山土を含む。粘性弱く、しまり良。
 - 4 暗褐色土 礫、地山土を多く含む。粘性あるが、しまり弱い。
 - 5 暗褐色土 白・黄色粒を含む。粘性・しまりあり。
 - 6 暗褐色土 地山土を少量含む。やや灰色味を帯び、粘性強く、しまり弱い。
 - 7 黄褐色土 地山土を主体とする。粘性・しまりあり。

- P2
- 1 暗褐色土 黄色粒をやや多く含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 2 暗褐色土 黄色粒を含む。粘性なく、しまりあり。
 - 3 褐色土 黄色粒を多く含む。粘性なく、しまりあり。

- P3
- 1 黄色土 黄・白色粒主体の層。粘性なく、しまりあり。
 - 2 暗褐色土 白・黄色粒を多く含む。粘性なく、しまりあり。
 - 3 暗褐色土 白・黄色粒、小礫(φ7~8mm)含む。粘性・しまりあり。
 - 4 黒褐色土 小礫、多量の黄色粒を含む。粘性・しまりあり。
 - 5 黒褐色土 黄色粒を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 6 暗褐色土 黄色粒を少量含む。粘性弱く、しまりあり。

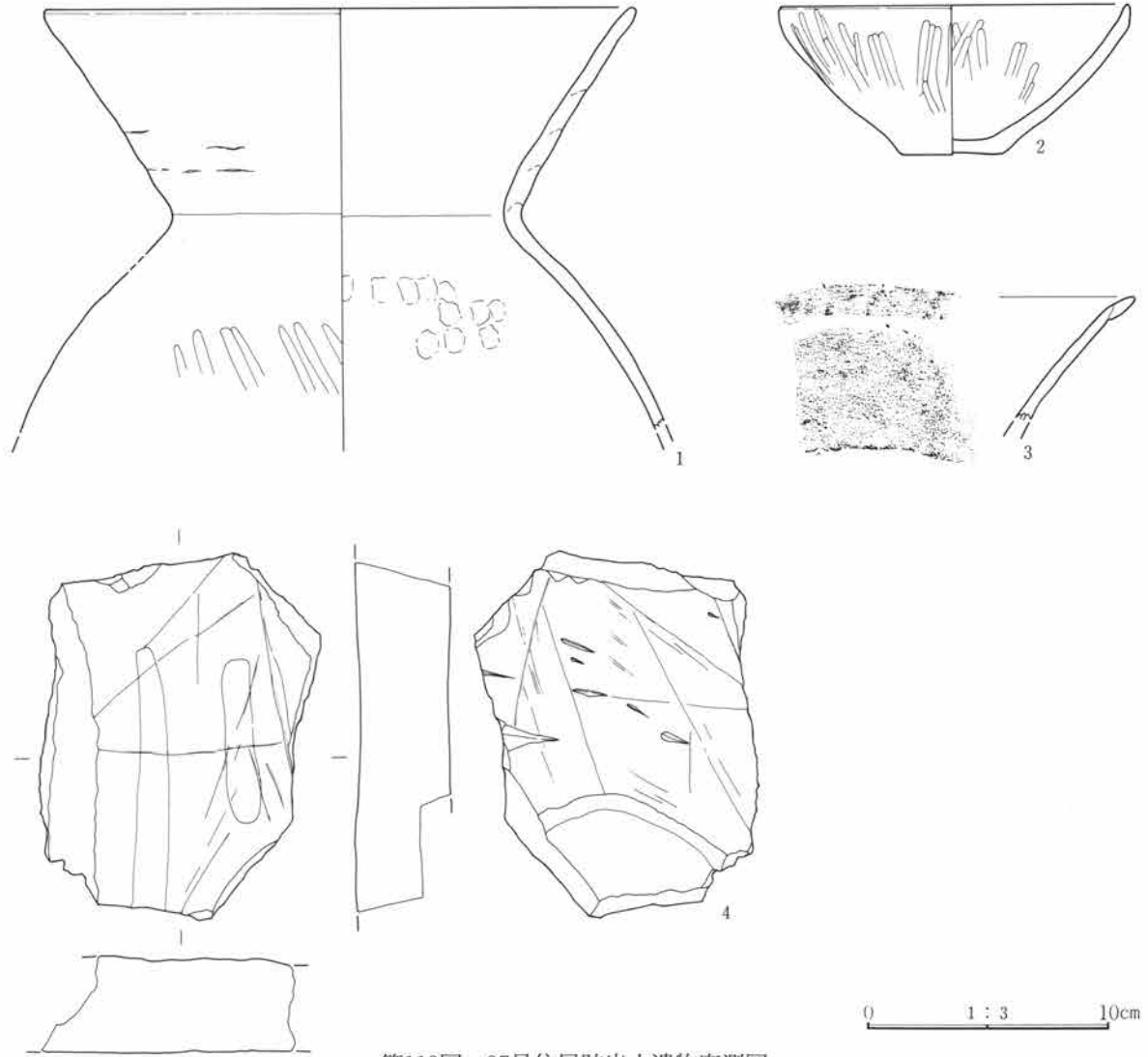
- P4
- 1 黒褐色土 黄色粒を含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 2 黒褐色土 黄色粒を少量含む。粘性・しまりあり。
 - 3 暗褐色土 黄色粒を含む。粘性・しまりあり。
 - 4 暗褐色土 黄色粒を少量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 5 暗褐色土 黄色粒を少量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 6 黄褐色土 黄色土ブロック(φ20~50mm)と暗褐色土の混土。粘性・しまりあり。



- 1号炉
- 1 焼土層 粘性なく、しまりあり。
 - 2 焼土層 粘性なく、しまり弱い。
 - 3 黄色土 地山土。貼ったものか？ 粘性なく、しまりあり。
 - 4 黒褐色土 焼土粒、白色粒を含む。上部に焼土が薄く堆積。粘性・しまりあり。
 - 5 黄褐色土 白・黄色粒、焼土を含む。粘性・しまりあり。
 - 6 黒褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性・しまりあり。
 - 7 黒褐色土 第6層に近似、白・黄色粒は含まない。
 - 8 黒褐色土 白・黄色粒を多く含む。上面に焼土が薄く堆積。粘性弱く、しまりあり。
 - 9 黒褐色土 白・黄色粒を含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 10 黒褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性・しまりあり。

- 2号炉
- 1 明赤色土 焼土層、しまり良、粘性なし。硬質。
 - 2 暗赤色土 白・黄色粒を少量含む。しまり良、弱い粘性。
 - 3 暗赤色土 2層に近似、2層より白・黄色粒を多く含む。
 - 4 灰色の砂岩、炉石の残片か？
 - 5 黄褐色土 白・黄色粒、焼土粒を含む。しまり良、粘性なし。
 - 6 5層に近似、焼土を多く含む。
 - 7 黒褐色土 白・黄色粒を含む。しまり良、弱い粘性。
 - 8 暗褐色土 白・黄色粒を含む。しまり良、粘性わずか。
- 2号炉南焼土面
- 1 焼土層 白色粒を少量含む。粘性なく、しまりあり。
 - 2 黄褐色土 白色粒、焼土を少量含む。粘性なく、しまりあり。

第112図 97号住居跡(2)、1・2号炉



第113図 97号住居跡出土遺物実測図

B-98号住居跡 (第114~119図、P L27・28・53・54)

位置 Bp・Bq-23・24グリッド 床面積 40.39㎡ 主軸方位 N-15°-W

重複 184号住(縄文)と重複、184住に後出し、住居の大半を破壊している。

壁 南辺部は184号住と重複しており、明瞭な立ち上がりを検出できず掘り過ぎてしまった。南壁の破線は遺物の分布状態及び残存部の形状からおさえた推定線である。他では良好な周壁を検出することができた。垂直に近い立ち上がりを示し、残存壁高は45cmを測ることができる。壁土は上層から粘質黄褐色土・黒褐色土・礫層を観察することができる。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸7.42m、短軸5.68mを測ることができる。

床面 礫層を掘り込んで床面としている。所々に地山の礫が露出しており、僅かな凹凸がみられるが概ね平坦である。

炉跡 炉は北側の支柱穴(P1・P4)間のやや北壁よりに位置する炉1と、西側の支柱穴(P3・P4)間に位置する炉2の複数を検出することができた。炉1は炉石を据える形態の地床炉である。炉石の北側に長軸64cm、短軸52cm、深さ8cmの浅い楕円形の掘り込みがあり、真赤に焼け込んだ火床面を有する。また炉

第3章 検出された遺構と遺物

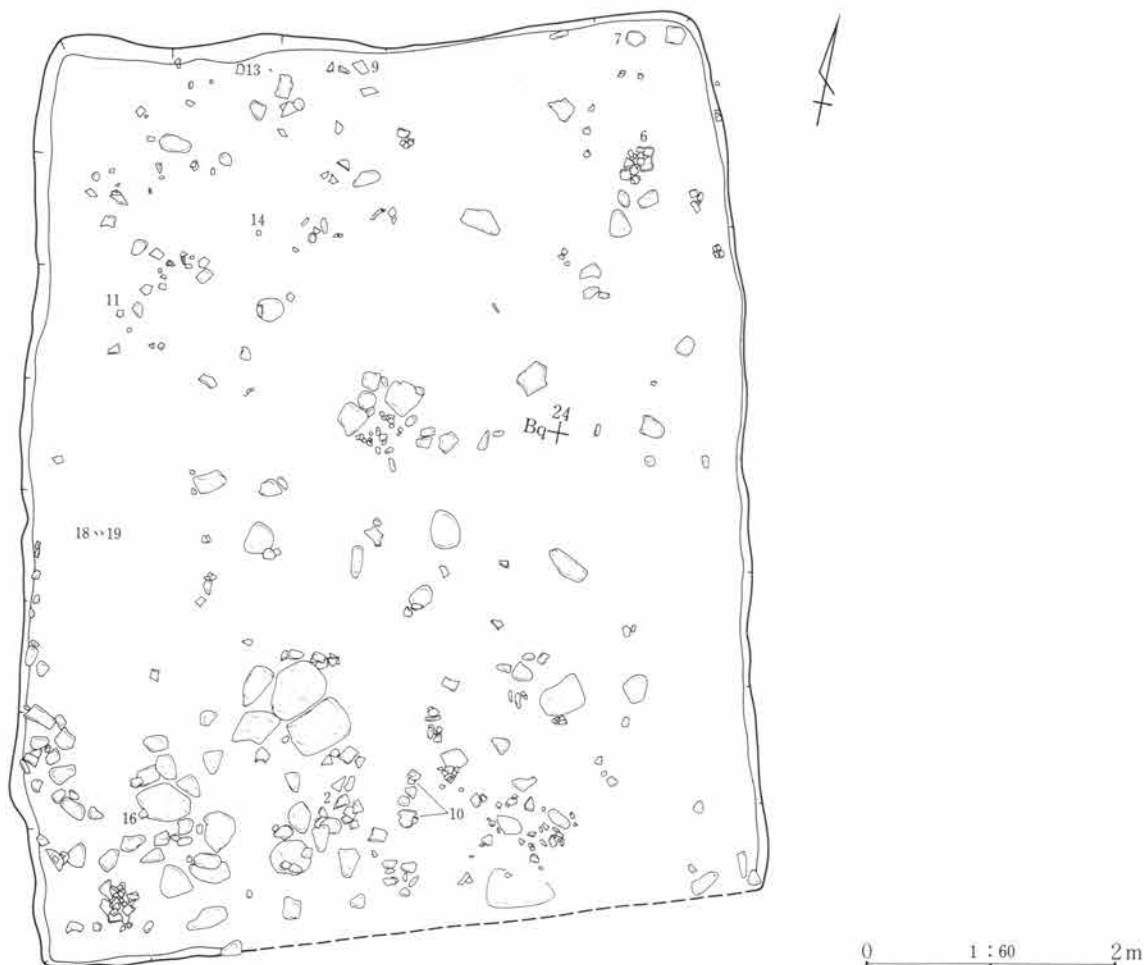
石の東端に口縁部を掛ける状態で火をうけた痕跡の残る赤色塗彩の壺が遺存していた。炉2は、炉石がほとんど埋もれており、焼土が東方にやや離れて検出されるなど変則的であることを考慮すると廃棄された可能性が考えられる。

柱穴 住居のほぼ対角線上に4箇所の支柱穴（P1～P4）を検出することができた。支柱は4本柱構造である。

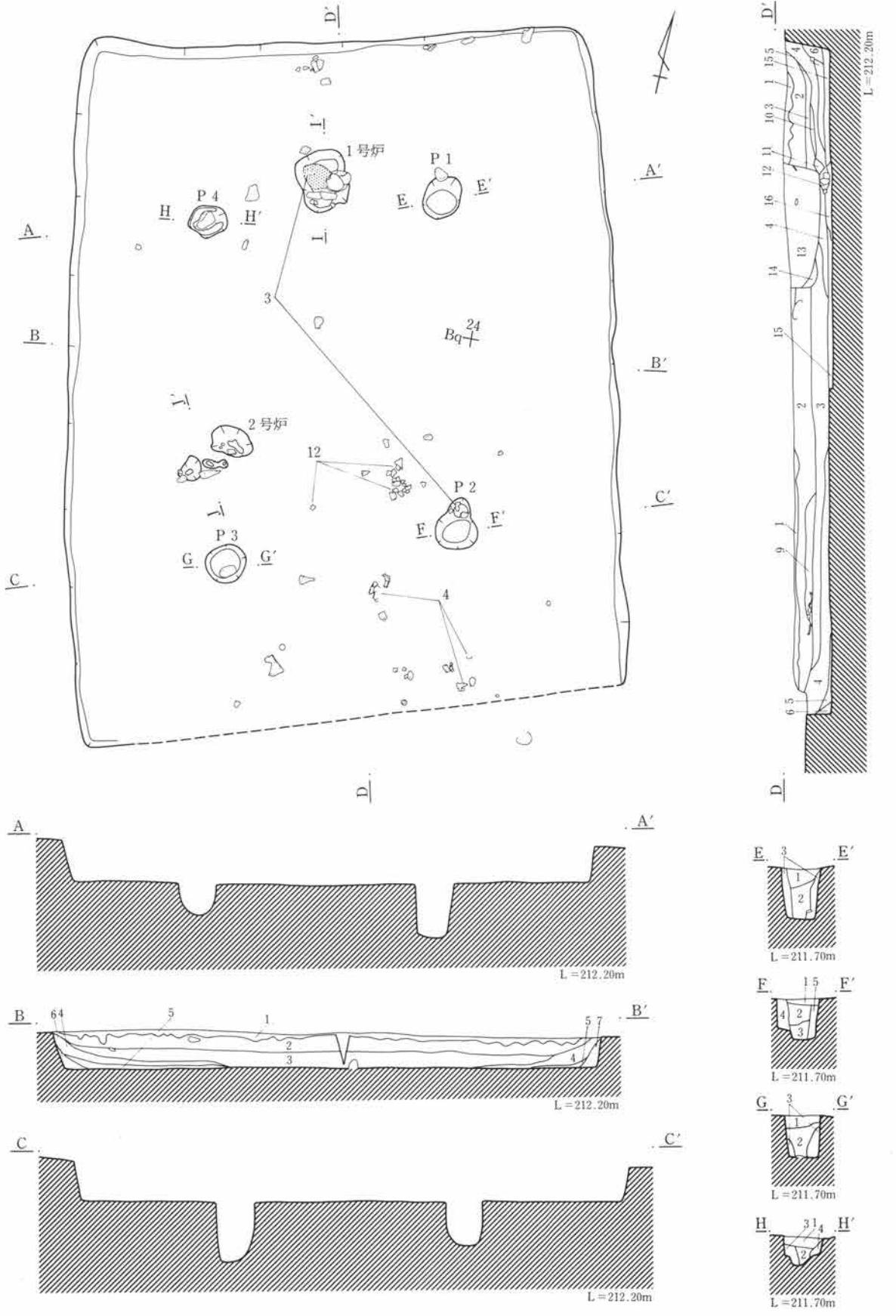
No	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	48cm	44cm	43cm	42cm
下端長径	30cm	28cm	32cm	29cm
深 さ	54cm	47cm	63cm	34cm

出土遺物 出土遺物は比較的多いが、床面直上からの出土は少ない。炉1内に火を受けた赤色塗彩の壺1点（1）が斜位の状態で遺存していた他は、多くの遺物が覆土中から散在して出土している。図化した遺物は壺2点（1・2）、甕5点（3～6・13）、鉢5点（7～11）、高坏1点（12）、石包丁等の石器5点（15～19）など19点である。甕（5）は口縁～頸部に粘土帯接合痕を残し、胴上位に原体R Lの斜縄文を施文している赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器である。壺（2）と甕（3・13）には、頸部に簾状文、胴上位に櫛描横羽状文が施されており、他地域からの影響が考えられる。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第114図 98号住居跡（1）

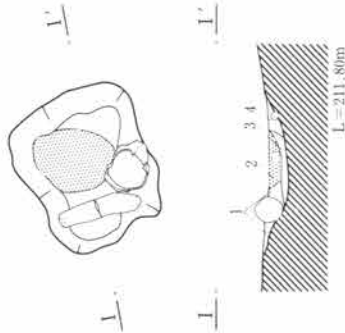


第3章 検出された遺構と遺物

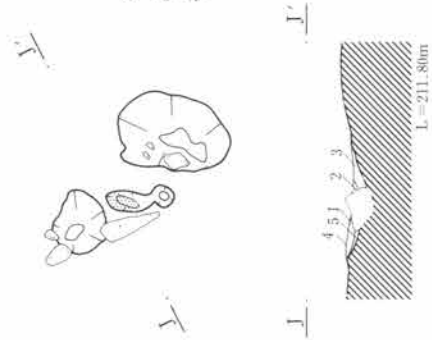
- 1 黒褐色土 耕作による攪乱層。軽石を含む。粘性なく、しまりあり。
- 2 暗褐色土 軽石、礫を微量含む。粘性なく、しまりあり。
- 3 暗褐色土 軽石を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
- 4 黒褐色土 多量の地山土、微量の炭化物を含む。粘性・しまりあり。
- 5 暗褐色土 地山土を含む。粘性強く、しまりあり。
- 6 黒褐色土 地山土を少量含む。粘性非常に強く、しまりあり。
- 7 暗褐色土 地山土を多く含む。粘性弱く、しまりあり。
- 8 黒褐色土 地山土を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 9 黒色土 軽石、礫、炭化物、土器片を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 10 黒褐色土 地山土を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 11 暗褐色土 地山土、少量の灰を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 12 黒褐色土 軽石、少量の風化礫を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 13 黒褐色土 軽石、礫を含む。粘性なく、しまりあり。(後世のカクラン)
- 14 黒褐色土 風化礫、地山土を含む。粘性・しまりあり。
- 15 暗褐色土 風化礫、白色粒、灰色の細粒を含む。粘性・しまりあり。
- 16 黒褐色土 白色粒、風化礫を含む。やや灰色味を帯びる。粘性弱く、しまりあり。

- P1
 - 1 暗褐色土 パミスを含む。しまりあり。
 - 2 暗褐色土 細粒で、粘性あり。
 - 3 暗褐色土 礫(φ50~60mm)を含む。
- P2
 - 1 暗褐色土 パミスを多く含む。しまりあり。
 - 2 暗褐色土 細粒で、粘性がある。
 - 3 暗褐色土 第2層に近似、砂粒を含む。
 - 4 黄褐色土 パミスと黄色砂粒を含む。
 - 5 暗褐色土 P1の第3層に同じ。
- P3
 - 1 暗褐色土 P2の第1層に同じ。
 - 2 暗褐色土 P2の第2層に同じ。
 - 3 暗褐色土 第2層に近似、やや黒味が強い。
- P4
 - 1 暗褐色土 P2の第1層に同じ。
 - 2 暗褐色土 P2の第2層に同じ。
 - 3 暗褐色土 P2の第3層に同じ。
 - 4 暗褐色土 第2層に近似、黄色粒を含み、やや黄色味を帯びる。

1号炉



2号炉



1号炉

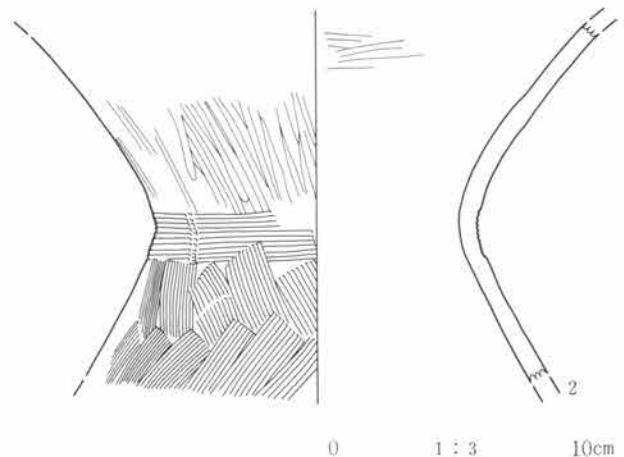
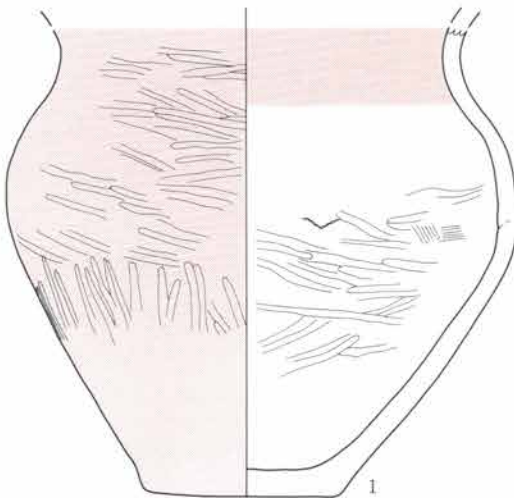
- 1 黒褐色土 白色粒を微量含む。粘性強く、しまり弱い。
- 2 焼土層 焼けた礫を含む。粘性・しまりともに弱い。
- 3 黄褐色土 地山土を主体とし、焼土を含む。粘性強く、しまり弱い。
- 4 黒褐色土 第1層に近似、地山土を少量含む。

2号炉

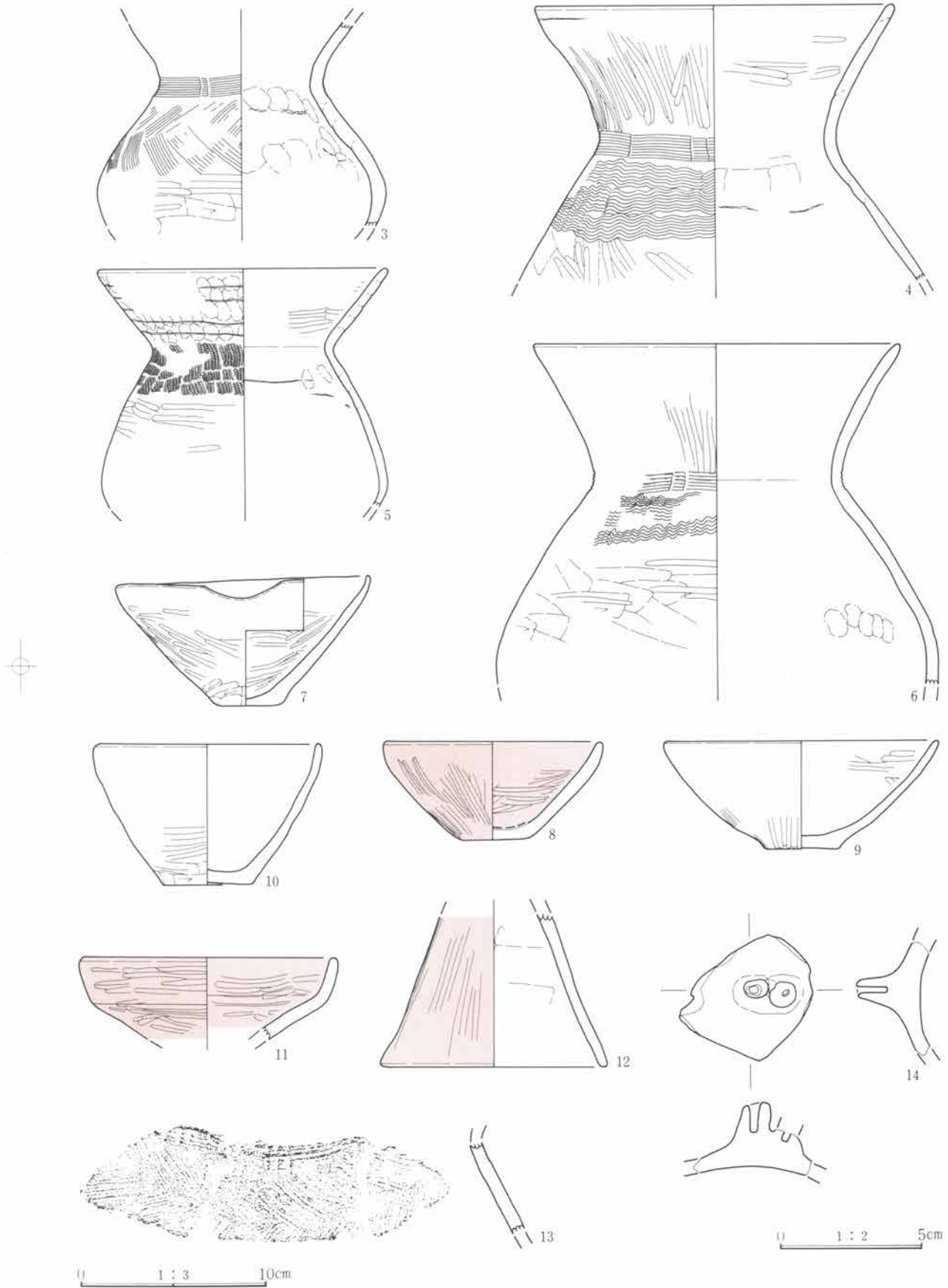
- 1 黒褐色土 白・黄色粒、焼土を含む。粘性なく、しまりあり。
- 2 赤褐色土 焼土を主体とし、焼けた小礫、少量の白・黄色粒を含む。粘性・しまりあり。
- 3 黒褐色土 白・黄色粒、少量の焼土を含む。粘性あり、しまり弱い。
- 4 黒褐色土 白・黄色粒を含む。粘性なく、しまりあり。たたきしめた感じあり。
- 5 黒褐色土 第4層に近似、粘性・しまりともにない。

0 1 : 30 1m

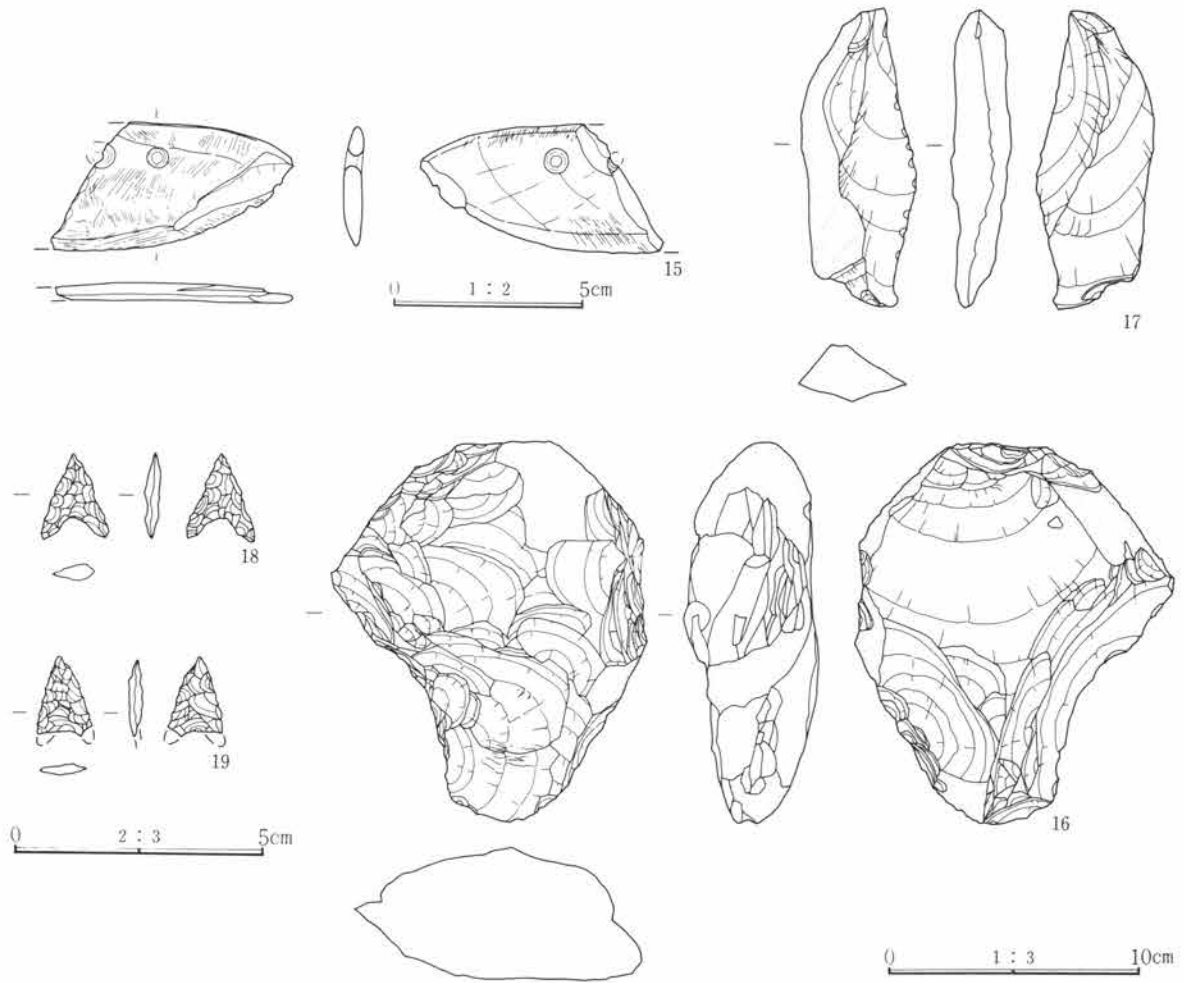
第116図 98号住居跡炉



第117図 98号住居跡出土遺物実測図(1)



第118図 98号住居跡出土遺物実測図(2)



第119図 98号住居跡出土遺物実測図(3)

B-99号住居跡 (第120~127図、P L28・54・55)

位置 Br・Bs-25・26グリッド 床面積 (32.92m²) 主軸方位 N-5°-E

重複 なし、住居の北辺は調査区外である。

壁 調査区外の北壁を除いて、良好な周壁を検出することができた。垂直に近い立ち上がりを示し、残存壁高は61cmを測ることができる。東壁に沿って壁下周溝が検出された。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸6.66m、短軸5.34mを測ることができる。

床面 住居の北側と南西隅の覆土中には大小の礫が集中して出土している。礫除去後の床面は概ね平坦であるが、西に向かってやや傾斜している。

炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴間からやや外れた北壁よりに位置する。炉石を据える形態の地床炉である。長軸41cm、短軸38cmの楕円形を呈し、掘り込みは最深部で5cmを測ることができる。焼土の広がりには炉石の北側にあり、35×25cmの範囲を有し、真赤に焼け込んでいる。

貯蔵穴 住居の南東隅南壁沿いに位置し、長軸77cm、短軸60cm、深さ21cmの半円形を呈する。上部に完形の甕がつぶれた状態で遺存しており、下部からは高坏の坏部が出土している。

柱穴 4箇所支柱穴(P1~P4)を良好に検出することができた。

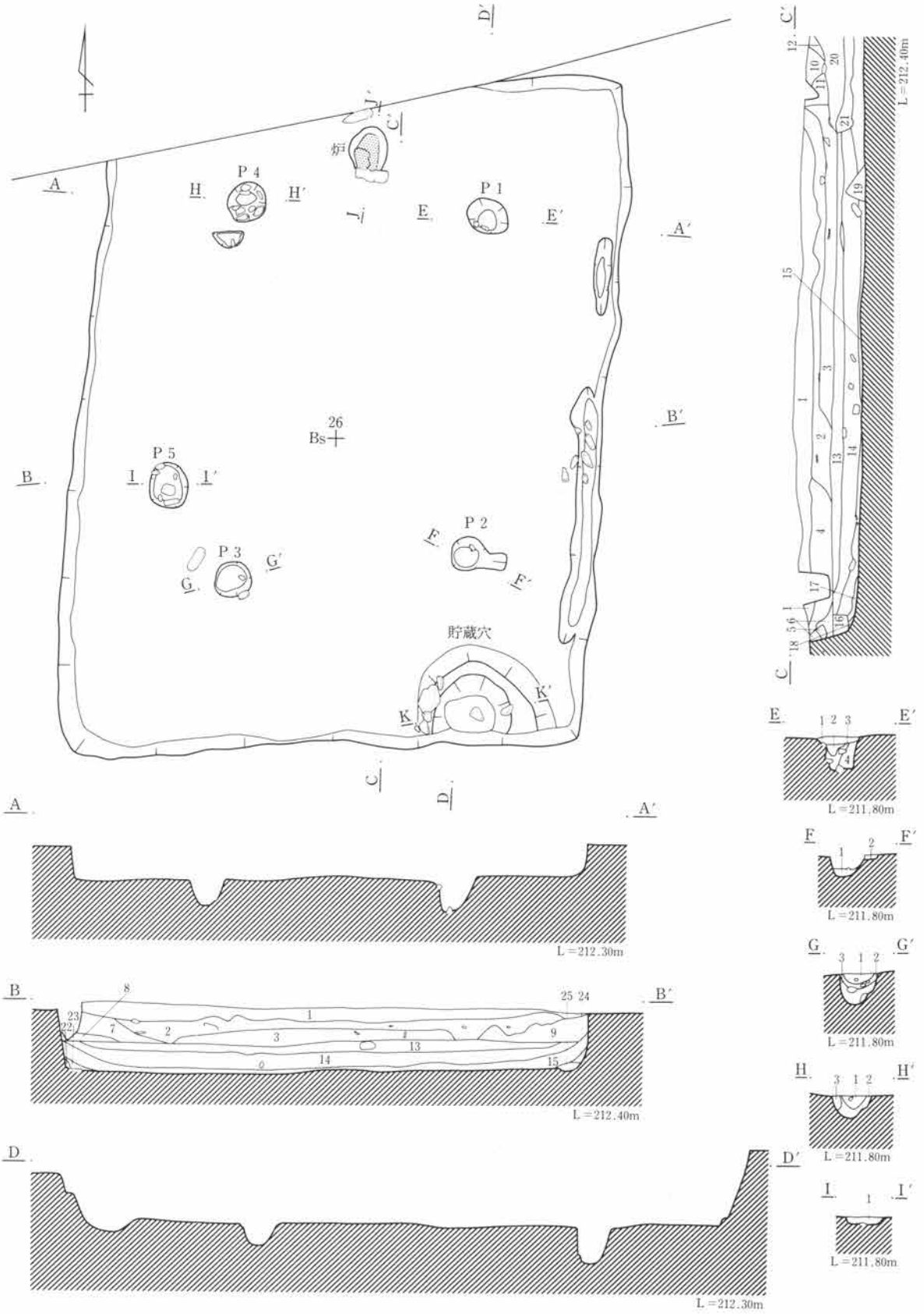
No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
上端長径	44cm	56cm	38cm	42cm	47cm
下端長径	21cm	49cm	31cm	21cm	34cm
深 さ	36cm	22cm	28cm	24cm	8 cm

出土遺物 本住居跡からは大変多くの遺物が出土している。しかし、貯蔵穴上部から出土した完形の甕1点(4)と高坏の坏部1点(22)の他は床面付近からの出土は少なく、覆土の上・中層からの出土がほとんどであり、散在して出土している。図化可能な遺物は、壺5点(1・3・12・26)、甕18点(4~11・27~35)、小型甕2点(13・14)、台付甕2点(15・16)、鉢4点(17~19・36)、高坏3点(20~22)、甌3点(23~25)、片口1点(37)、土製紡錘車1点(39)、石器5点(40~44)等の44点である。壺や甕に施文された文様は大変変化にとんでおり興味深い。波状文を施文した甕6点(4・6~9・11)、台付甕1点(15)の他に、胴上位に櫛描横羽状文を施文した壺1点(2)、甕2点(5・12)が検出されている。また、小型甕(13)には胴上位に原体R Lの斜縄文が施され、小型甕(14)には口縁部に粘土帯接合痕が残り、頸部から胴上位に原体Rの斜縄文が施されている。甕(10)も口縁部に粘土帯接合痕を残し、頸部から胴上位に原体L Rの斜縄文を施文している。その他にも破片中に縄文施文の土器が散見される。これらの縄文施文の土器はいずれも赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器と思われる。高坏(20)も口縁部に粘土帯接合痕を残しており、赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器に含まれる。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第120図 99号住居跡(1)



第121図 99号住居跡 (2)

0 1:60 2m

第3節 弥生時代住居跡と出土遺物

- 1 黒褐色土 小礫を多く含む。現耕作土下層。粘性なく、しまりあり。
- 2 黒褐色土 軽石（浅間B?）を含む。粘性非常に弱く、しまりあり。
- 3 黒褐色土 地山土、軽石（細粒）、炭化物を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
- 4 褐色土 多量の地山土（黄色小礫含む）、微量の炭化物含む。粘性なく、しまりあり。
- 5 褐色土 地山土を多く含むブロック。粘性弱く、しまりあり。
- 6 黒褐色土 地山土、微量の炭化物を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 7 黒褐色土 地山土、少量の軽石を含む。粘性なく、しまりあり。
- 8 黒褐色土 地山土を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 9 暗褐色土 地山土、少量の軽石（粗粒）を含む。粘性なく、しまりあり。
- 10 褐色土 小礫、微量の炭化物を含む。カクランか？ 粘性なく、しまりあり。
- 11 黒褐色土 地山土、少量の軽石（粗粒）を含む。粘性なく、しまりあり。

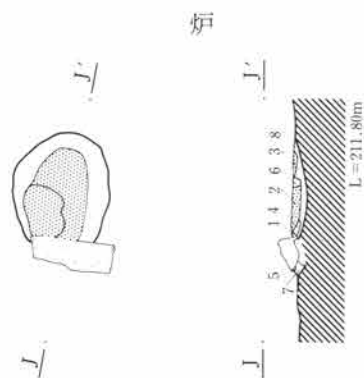
- 12 黒褐色土 軽石を少量含む。粘性なく、しまりあり。
- 13 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、地山土を含む。粘性なく、しまりあり。
- 14 暗褐色土 白・黄色粒含む。土色は第13層より黒味を帯びる。粘性弱く、しまりあり。
- 15 黒褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性・しまりあり。
- 16 暗褐色土 第14層に近似、大きな黄色粒を含む。
- 17 黒褐色土 黄色粒（微小）を少量含む。粘性・しまりあり。
- 18 黄褐色土 地山土（白・黄色粒等）を主体としている。粘性弱く、しまりあり。
- 19 黒褐色土 炭化材、黄色粒を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 20 暗褐色土 第13層に近似、白・黄色粒、小礫を多く含む。粘性なく、しまりあり。
- 21 黒褐色土 白・黄色粒、微量の炭化物・風化礫を含む。粘性なく、しまりあり。
- 22 暗黄褐色土 地山土、小礫を含む。粘性・しまりあり。
- 23 黒褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性あり、しまり弱い。
- 24 黒褐色土 白・黄色粒、小礫を含む。粘性なく、しまりあり。
- 25 黒褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性・しまりあり。

P1

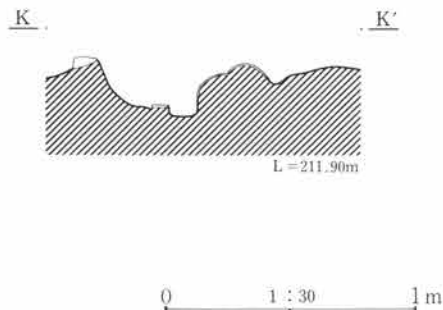
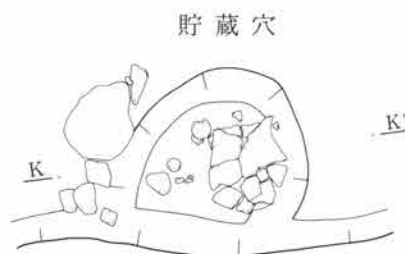
- 1 黒褐色土 黄色粒、風化礫を少量含む。粘性・しまりあり。
 - 2 黒褐色土 黄色粒、風化礫を微量含む。粘性なく、しまりあり。
 - 3 黒褐色土 風化礫を少量含む。下部には小礫が多い。粘性があるが、しまり弱い。
 - 4 黒褐色土 礫（φ70~80mm）、少量の黄色粒・風化礫を含む。
- P2
- 1 黒褐色土 小礫を少量含む。やや砂質。粘性・しまりともに弱い。
 - 2 暗褐色土 白・黄色粒を含む。粘性弱く、しまりあり。

P3

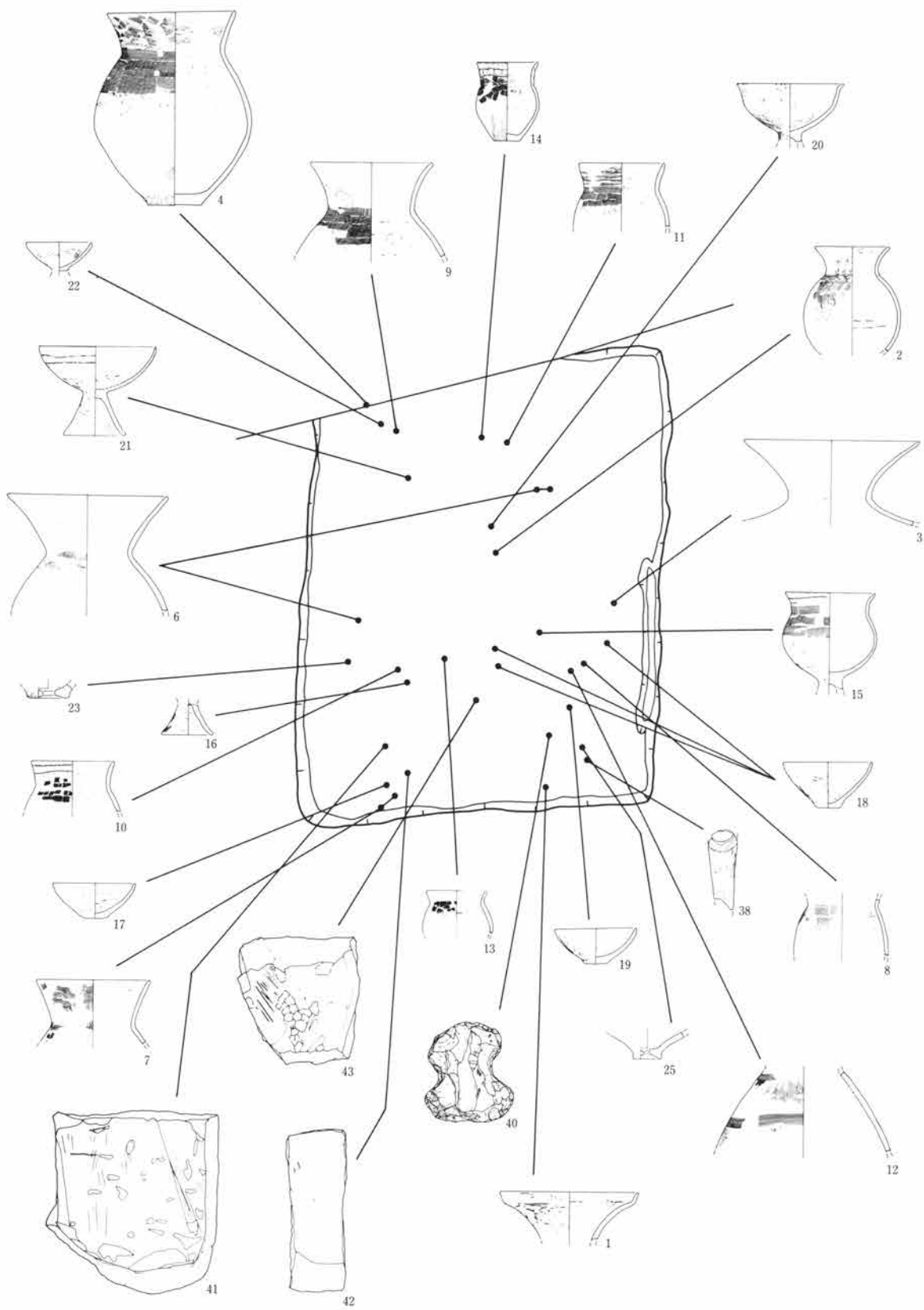
- 1 暗褐色土 黄色粒、風化礫、礫を含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 2 暗褐色土 黄色粒を少量含む。粘性・しまりあり。
 - 3 暗褐色土 黄色粒、小礫を微量含む。粘性あり、しまり弱い。
- P4
- 1 暗褐色土 黄色粒、小礫、風化礫、炭化物を含む。粘性・しまりあり。
 - 2 暗褐色土 黄色粒を微量含む。粘性あり、しまり弱い。
 - 3 褐色土 黄色砂質土（地山）を主体とし、礫を含む。
- P5
- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土、炭化物を含む。粘性・しまりあり。



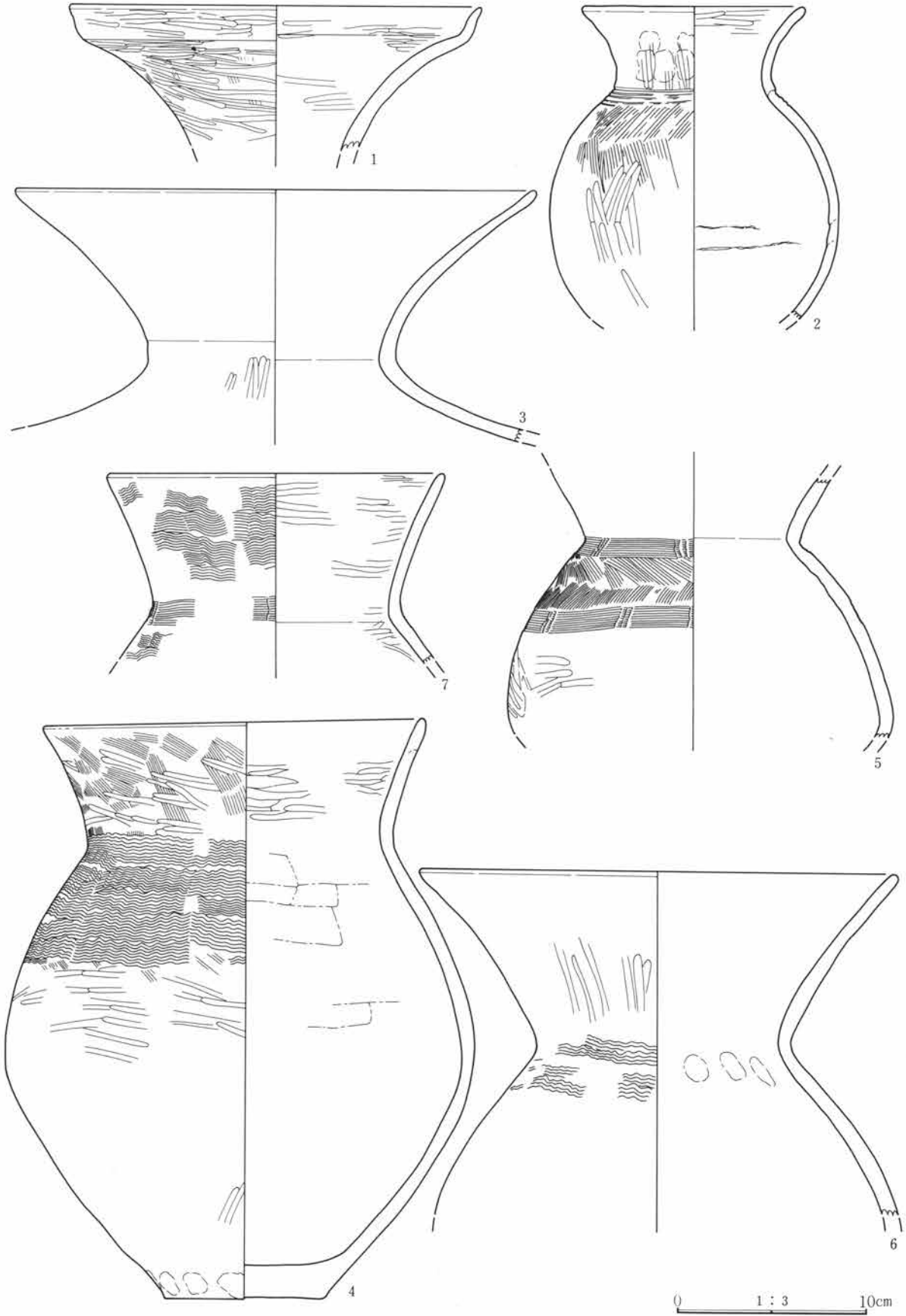
- 1 暗褐色土 少量の白色粒、微量の焼土粒を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 2 赤褐色土 多量の焼土、少量の白色粒含む。上部では焼土が層状となる。粘性弱く、しまりあり。
- 3 暗赤色土 焼土を多く含む。粘性・しまりともに弱い。
- 4 赤黄色土 黄色砂質土（地山）を主体とし、焼土を含む。粘性弱く、しまりなし。
- 5 暗赤色土 地山土を主体、焼土を多量に含む。粘性なく、しまりあり。
- 6 黒褐色土 焼土、白色粒、炭化物を少量含む。粘性・しまりともに弱い。
- 7 暗黄色土 地山土を主体とし、焼土を少量含む。粘性なく、しまりあり。
- 8 暗褐色土 焼土、白・黄色粒を微量含む。粘性・しまりあり。



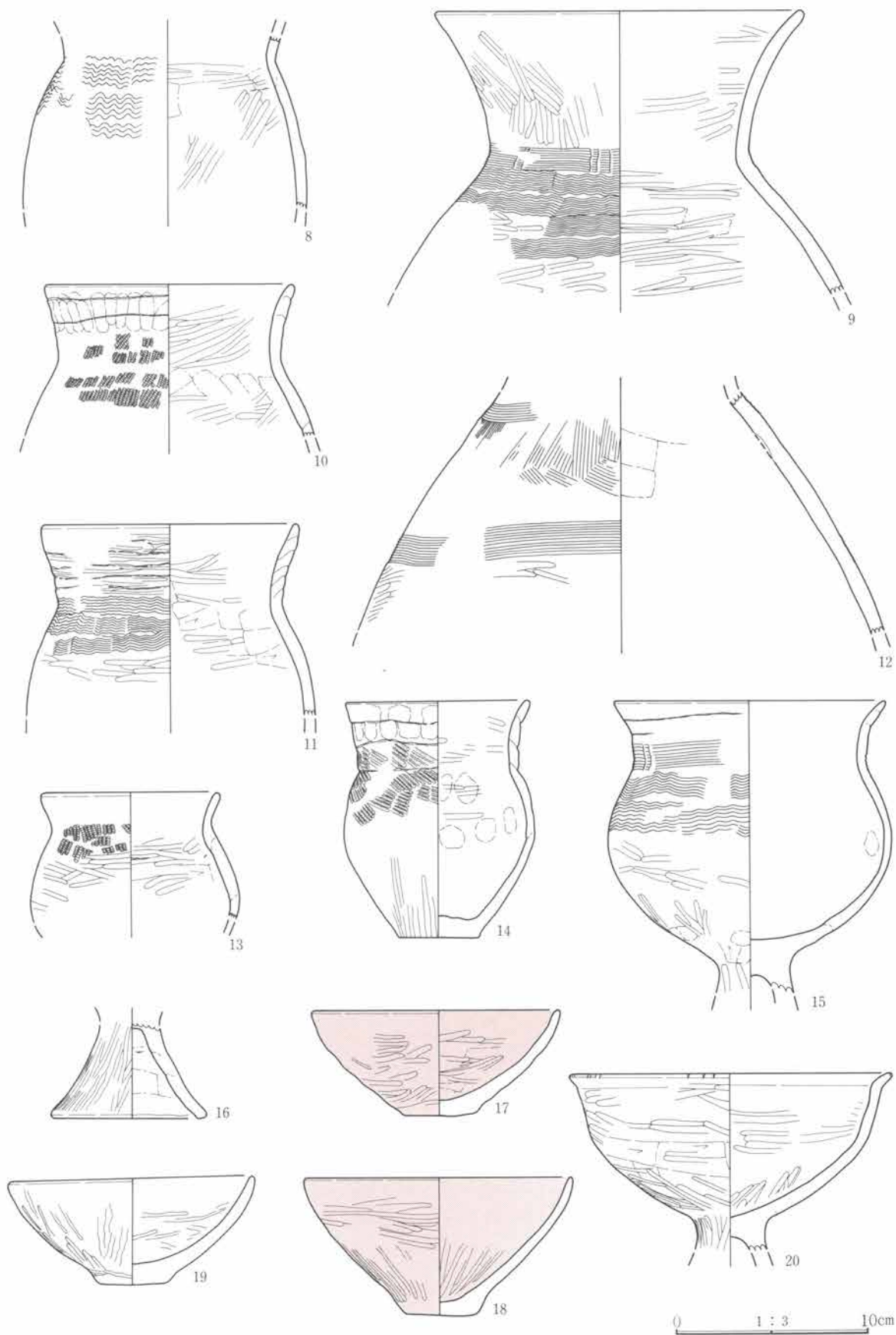
第122図 99号住居跡炉、貯蔵穴



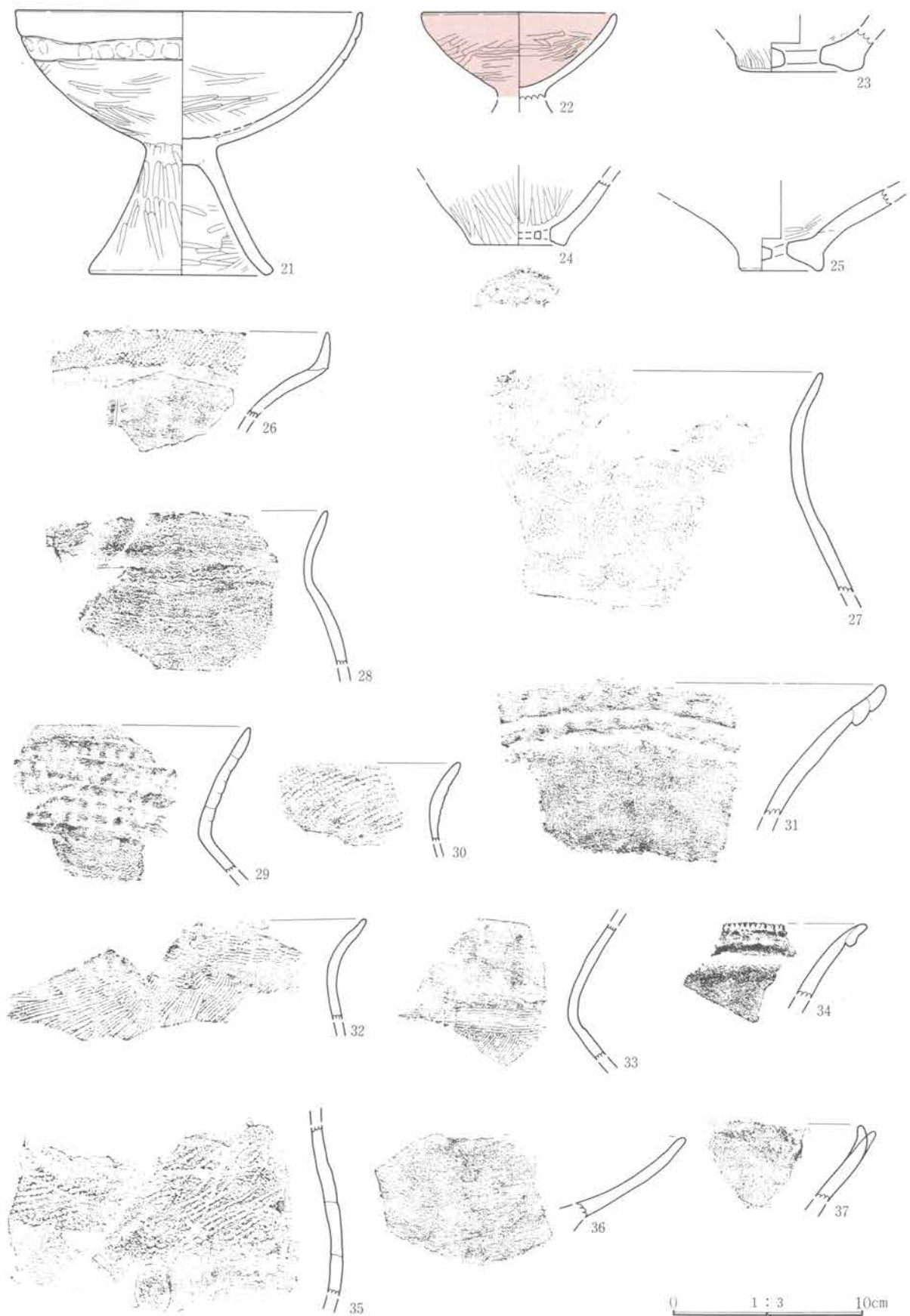
第123図 99号住居跡個体別遺物出土状況図



第124図 99号住居跡出土遺物実測図(1)



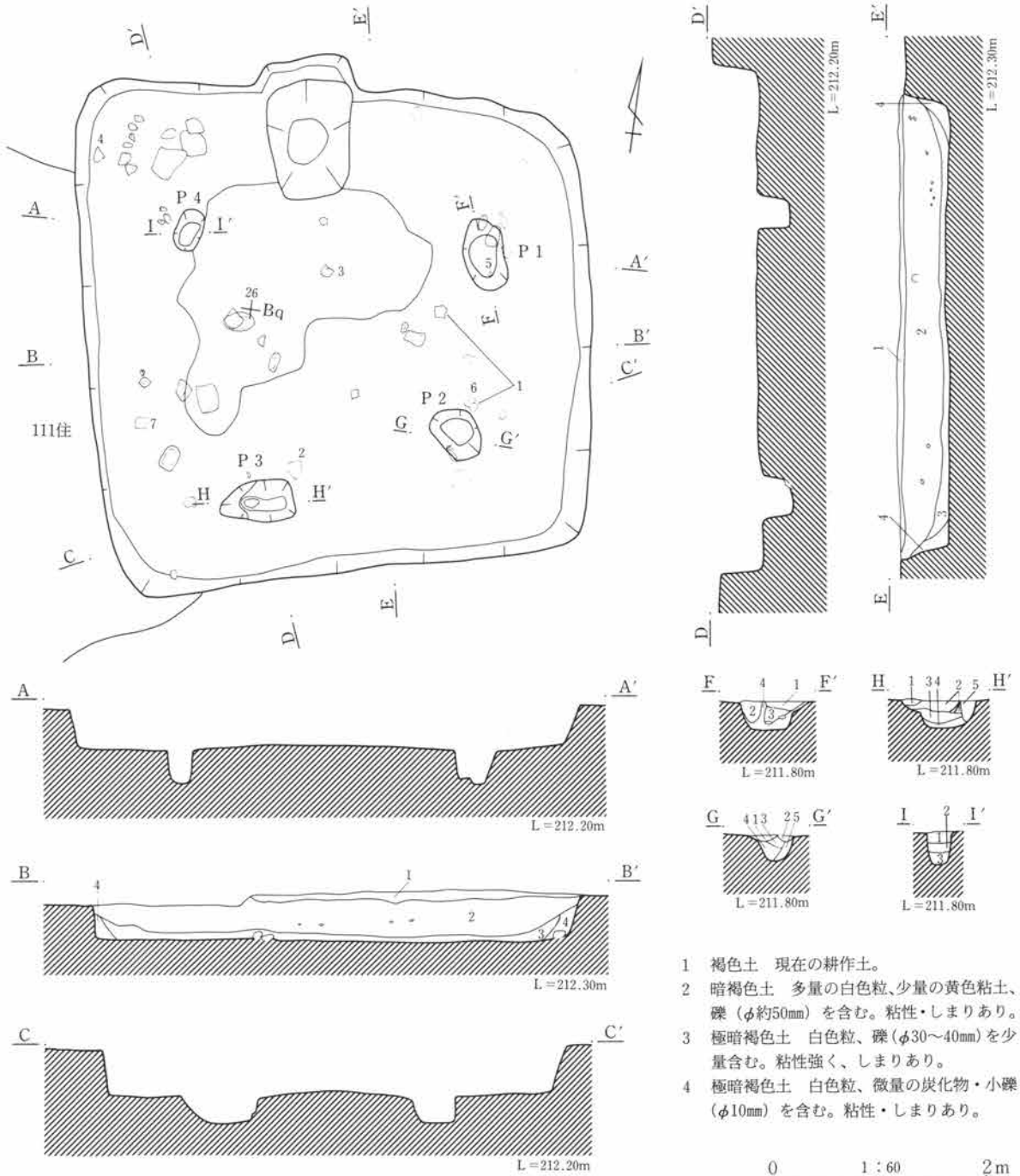
第125図 99号住居跡出土遺物実測図(2)



第126図 99号住居跡出土遺物実測図(3)



第127図 99号住居跡出土遺物実測図(4)



- P1**
- 1 黒褐色土 地山土を含む。粘性・しまりあり。
 - 2 黒褐色土 風化礫、地山土を含む。粘性・しまりあり。
 - 3 黒褐色土 地山土を少量含む。粘性強く、しまりあり。
 - 4 暗褐色土 地山主体、砂礫を多く含む。粘性・しまりあり。
- P2**
- 1 黒褐色土 円礫を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 2 黒褐色土 第1層に近似、円礫は少ない。
 - 3 黒褐色土 地山土を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 4 黒褐色土 小礫、黄色粒を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 5 暗褐色土 砂礫（地山）を主体とする。粘性なく、しまり弱い。

- P3**
- 1 黒褐色土 地山土（砂粒状）を含む。粘性・しまりあり。
 - 2 暗褐色土 地山土（ // ）を多く含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 3 黒褐色土 地山土を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 4 暗褐色土 地山主体。円礫を含む。粘性なく、しまり弱い。
 - 5 黒褐色土 地山土、少量の円礫を含む。粘性・しまりあり。
- P4**
- 1 黒褐色土 地山土、炭化物を少量含む。粘性強く、しまりあり。
 - 2 黒褐色土 少量の地山土、微量の炭化物を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 3 黒褐色土 地山土、微量の暗黄色土・炭化物・風化礫を含む。粘性強く、しまり弱い。

第128図 101号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

B-101号住居跡 (第128~130図、P L 29・55)

位置 Bp・Bq-25・26グリッド 床面積 18.10㎡ 主軸方位 N-14°-E

重複 西辺で111号住(縄文)と重複し、東壁の大部分を破壊している。

壁 西壁は111号住の覆土となっており立ち上がりは不明瞭であるが、他は概ね良好な周壁を検出することができた。立ち上がりは僅かに外傾し、残存壁高は45cmを測ることができる。

形状と規模 北西隅がやや張り出し、全体に歪んだ隅丸方形を呈する。規模は長軸4.70m、短軸4.66mを測ることができる。

床面 礫層を掘り込んで層中を床面としている。一部で張り床がみられるが、礫層に混じる暗黄色の風化礫が粒状になったものを使用している。

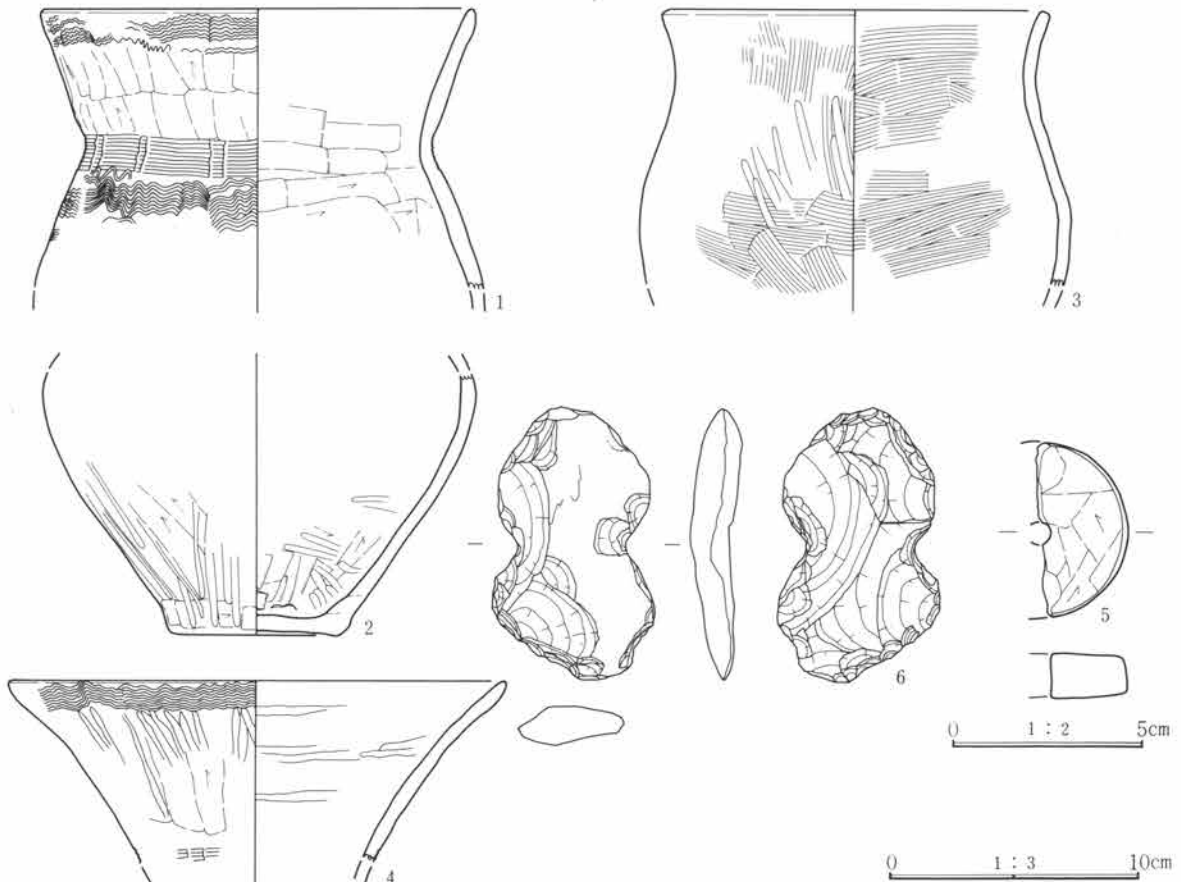
炉跡 近年の攪乱により北辺部が壊されており検出することができなかった。

柱穴 4箇所で支柱穴(P1~P4)を検出することができた。

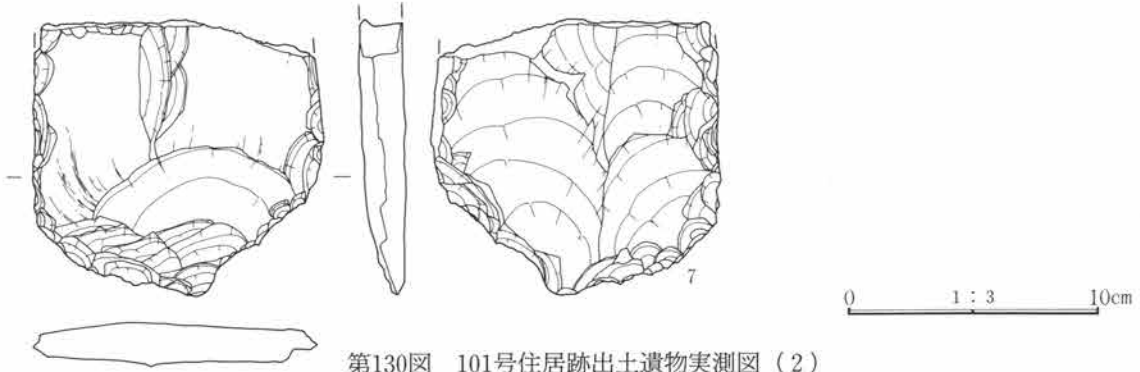
No	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	67cm	54cm	69cm	39cm
下端長径	33cm	27cm </td <td>29cm</td> <td>26cm</td>	29cm	26cm
深 さ	30cm	25cm	30cm	29cm

出土遺物 出土遺物は少なく、散在して出土している。そのほとんどが覆土中からの出土である。図化可能な遺物は甕4点(1~4)、土製紡錘車1点(5)、石器2点(6・7)である。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第129図 101号住居跡出土遺物実測図(1)



第130図 101号住居跡出土遺物実測図(2)

B-105号住居跡 (第131~133図、P L 29・55)

位置 Br・Bs-27グリッド 床面積 不明 主軸方位 N-7°-E

重複 東壁の大部分を後世の攪乱によって壊されている。住居の北半は調査区外である。

壁 南壁と西壁の一部のみ明瞭に検出することができた。やや外傾して立ち上がり、残存壁高は31cmを測ることができる。

形状と規模 調査範囲が少なく形状は明瞭ではないが、残存部から長方形を呈すると推定される。規模は長軸不明、短軸4.40mである。

床面 わずかな凹凸はみられるが概ね平坦である。

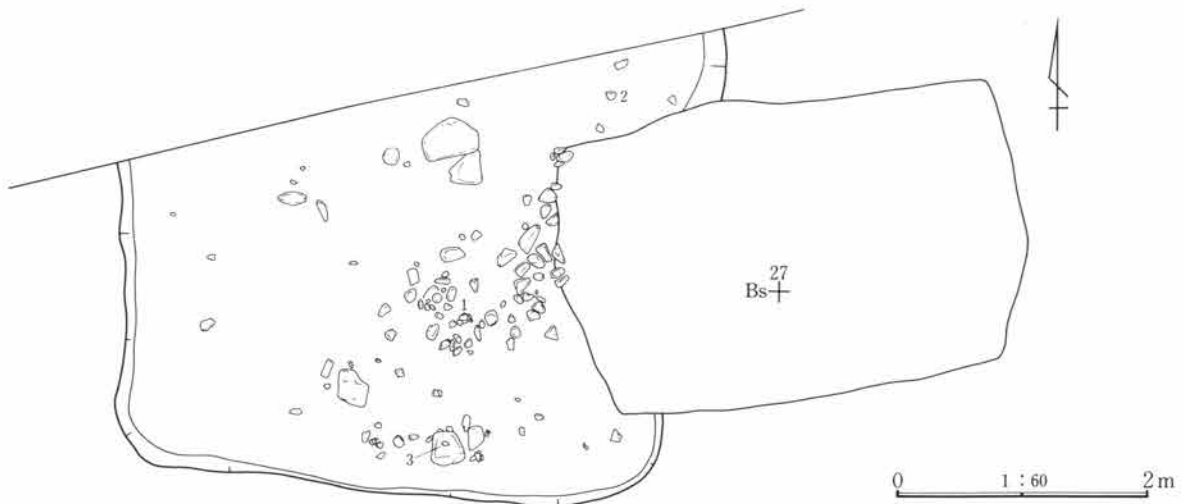
炉跡 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 P1・P2の2基が支柱穴になると思われる。他は調査区外で検出できなかった。

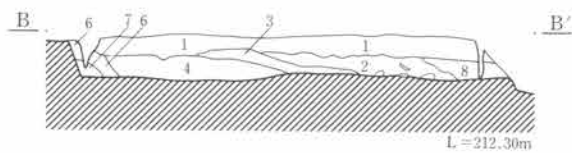
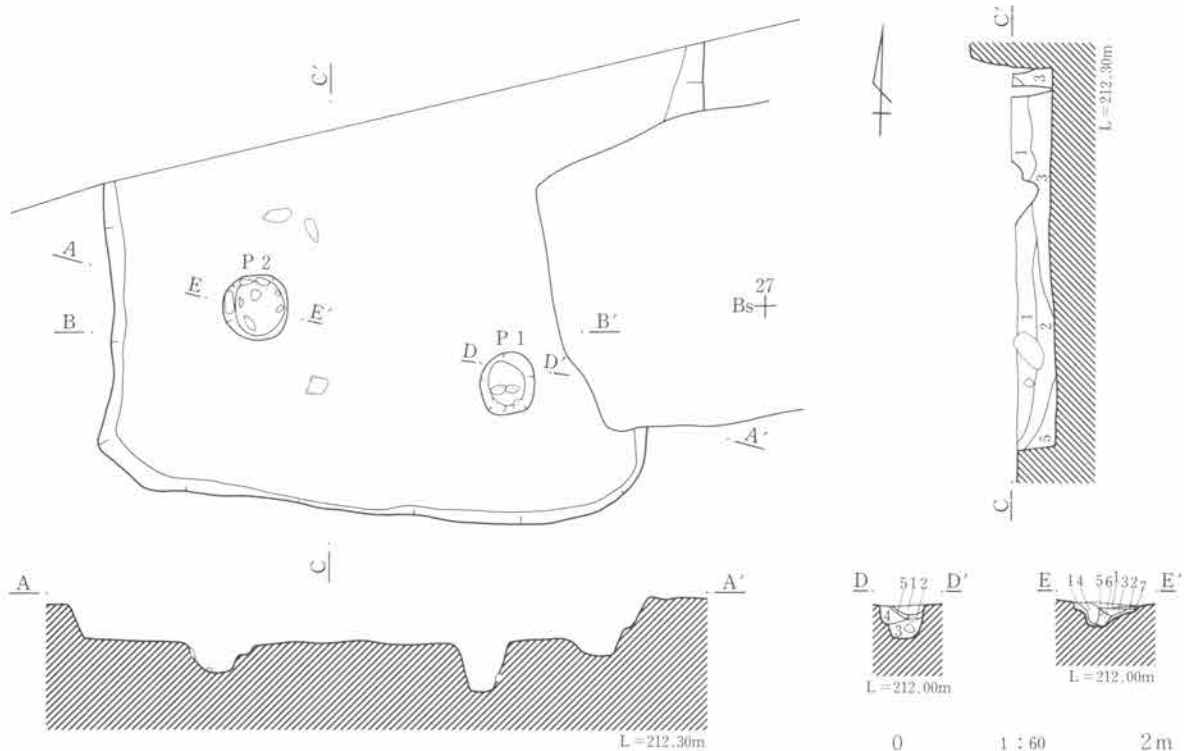
No.	P1	P2
上端長径	50cm	51cm
下端長径	36cm	43cm
深さ	20cm	38cm

出土遺物 出土遺物は極めて少なく散在して出土している。床面直上からの出土は少なく、ほとんどが覆土中の遺物である。赤色塗彩の鉢1点(1)、赤色塗彩の高坏1点(2)、甕の口縁部片1点(3)を図化することができた。

時期 弥生時代後期の住居跡と考えられる。



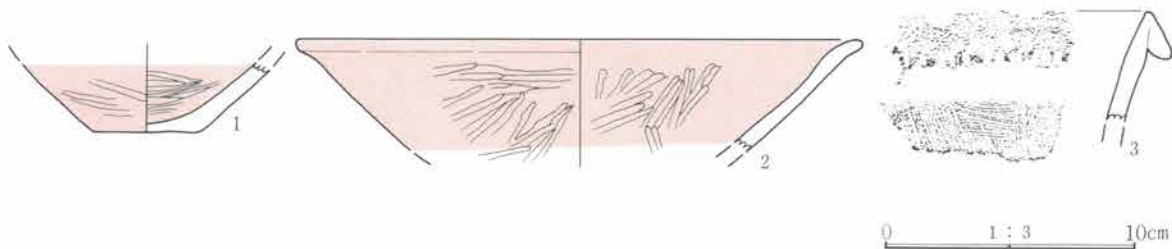
第131図 105号住居跡(1)



- 1 黒褐色土 多量の軽石、少量の小礫を含む。粘性なく、しまりあり。
- 2 黒褐色土 少量の軽石、微量の炭化物を含む。粘性・しまりあり。
- 3 暗褐色土 多量の黄色粘土ブロック、微量の炭化物を含む。粘性・しまりあり。
- 4 黒褐色土 黄色小礫（地山）、少量の軽石を含む。粘性・しまりあり。
- 5 黒褐色土 黄色小礫を少量含む。粘性強く、しまりあり。
- 6 暗褐色土 黄色小礫を少量含む。粘質。粘性強く、しまりあり。
- 7 暗褐色土 黄色小礫を少量含む。粘性強く、しまりあり。
- 8 黒褐色土 軽石（細粒）を含む。粘性弱く、しまりあり。

- P1
- 1 暗褐色土 白色粒を含む。粘性・しまりあり。
 - 2 暗褐色土 地山土を多く含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 3 暗褐色土 地山土を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 4 暗褐色土 地山土を少量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 5 暗褐色土 地山土を含む。粘性強く、しまりあり。
- P2
- 1 黒褐色土 白色粒、風化礫を含む。粘性弱く、しまりあり。
 - 2 赤褐色土 地山土を主体とし、白色粒、風化礫、多量の焼土を含む。粘性なく、しまりあり。
 - 3 黒褐色土 地山土を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 4 暗褐色土 地山土、少量の白色粒・風化礫を含む。
 - 5 暗褐色土 白色粒、風化礫を含む。粘性・しまりあり。
 - 6 暗褐色土 白色粒、風化礫を少量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 7 暗褐色土 地山土主体。粘性強く、しまりあり。

第132図 105号住居跡（2）



第133図 105号住居跡出土遺物実測図

B-106号住居跡 (第134~138図、P L 30・56)

位置 Bq・Br-29・30グリッド 床面積 不明 主軸方位 N-7°-W

重複 南東部で107号住と重複、本住居の方が後出する。住居の北辺は調査区外である。

壁 垂直に近い立ち上がりを示し、残存壁高は44cmを測ることができる。壁土は粘質黄褐色土・礫層の順に観察されるが、南・西壁の一部は107住の覆土となっている。

形状と規模 北辺が調査区外であり、明瞭なプランは確定できないが、検出部分の形状及び柱穴等の位置から、長方形を呈するものと思われる。規模は長軸不明、短軸5.78mを測ることができる。

床面 礫層を掘り込み床面としている。礫面の若干の凹凸があるが概ね平坦である。

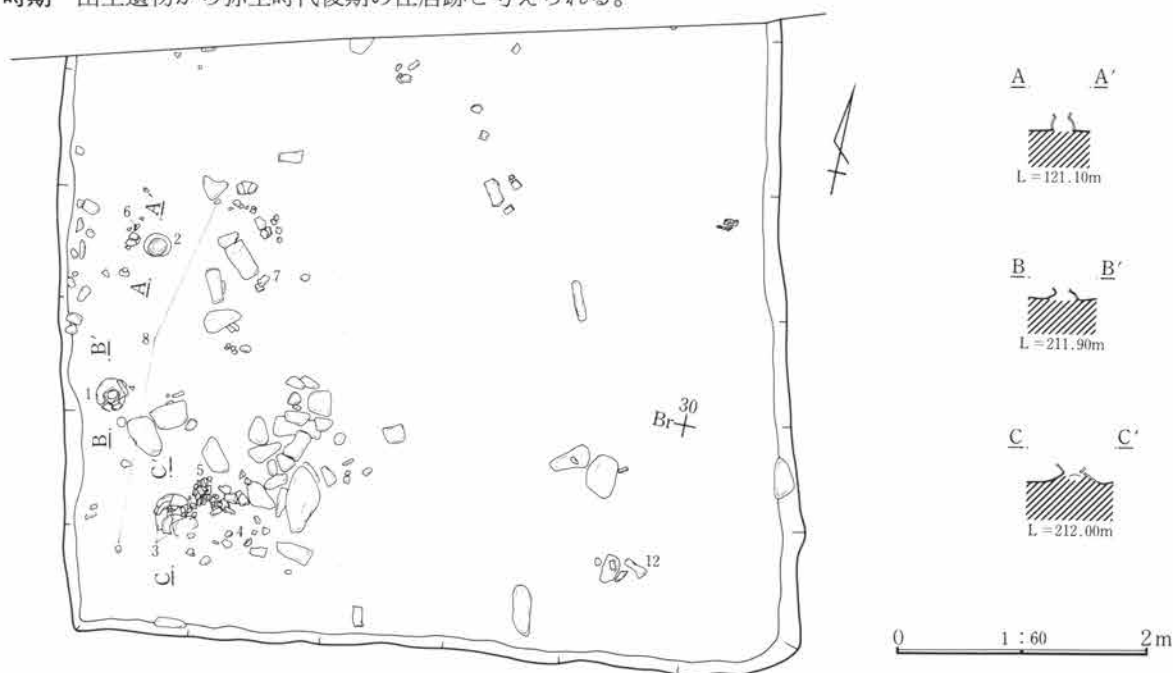
炉跡 住居の東側に火熱を受けた長方形の自然石が埋置されていた。炉石の周りの掘り込みは長軸47cm、短軸41cm、深さ7cmの楕円形を呈する。焼土は掘り方の下位にわずかに確認されただけである。炉石の西方に灰、炭化物を含む高まりが検出された。

柱穴 P 2・P 3が主柱穴になると思われる。他の2基は調査区外である。

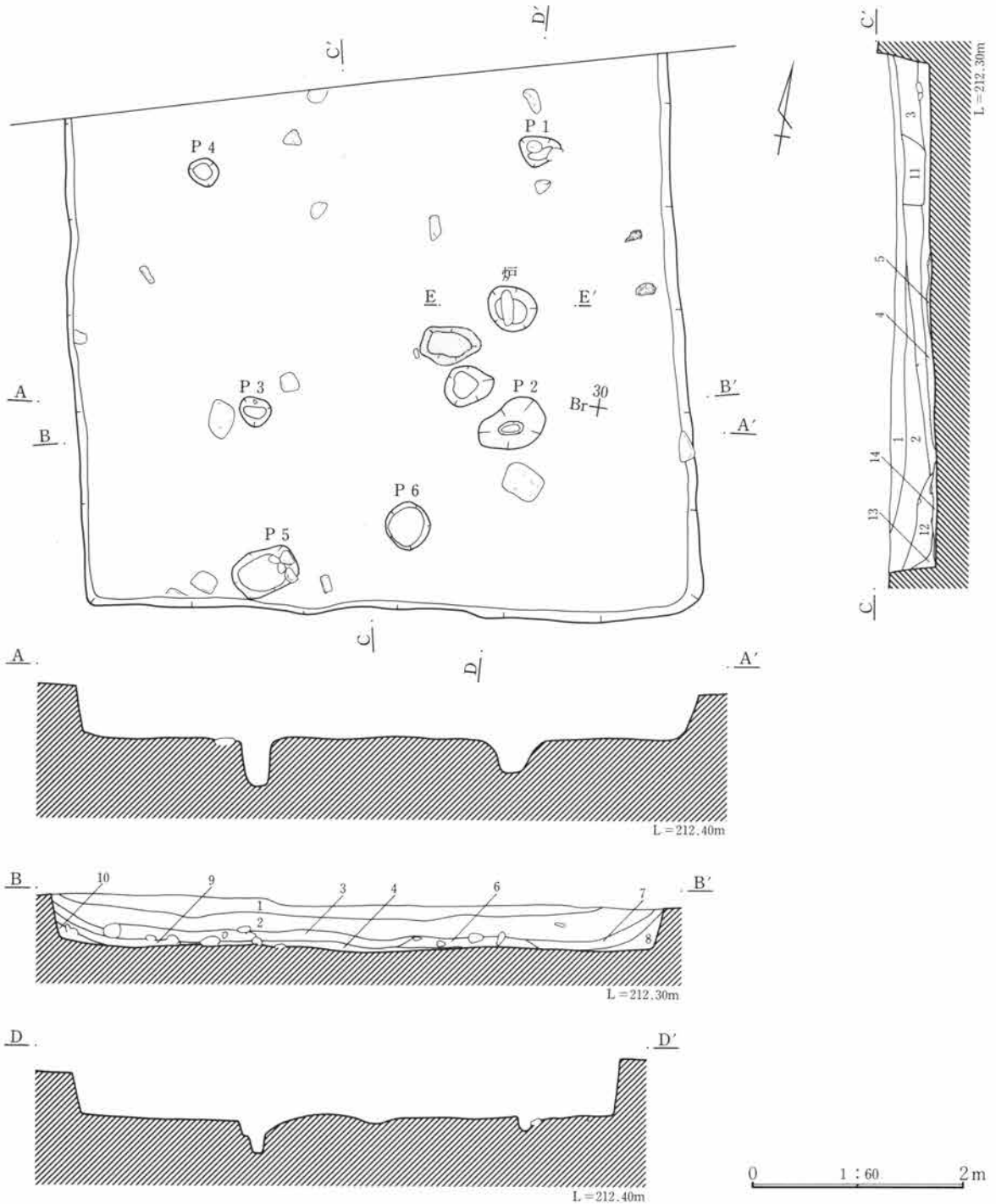
No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
上端長径	37cm	65cm	30cm	29cm	62cm	23cm
下端長径	23cm	23cm	21cm	19cm	44cm	18cm
深 さ	14cm	30cm	44cm	15cm	27cm	不明

出土遺物 遺物は住居西側より集中して出土している。西壁近くに底部を欠く甕1点(3)、逆位の壺の口頸部1点(1)、口縁上部に原体rの捺糸押圧、口縁部・胴上位に原体LRの斜縄文を施文した甕1点(2)がいずれも床面に据え置かれた形で出土している。その他にも原体LRの斜縄文を施した甕1点(4)、台付甕1点(5)が床面近くから、出土している。覆土上層からは縄文施文の甕破片2点(8・9)、赤色塗彩の鉢1点(6)、上面及び側面に赤色塗彩を施した土製紡錘車1点(11)等が出土している。縄文施文の甕4点はいずれも赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器と思われる。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

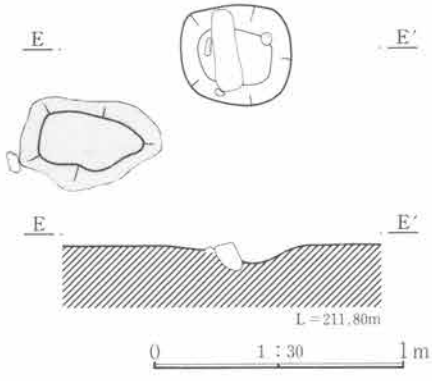


第134図 106号住居跡(1)

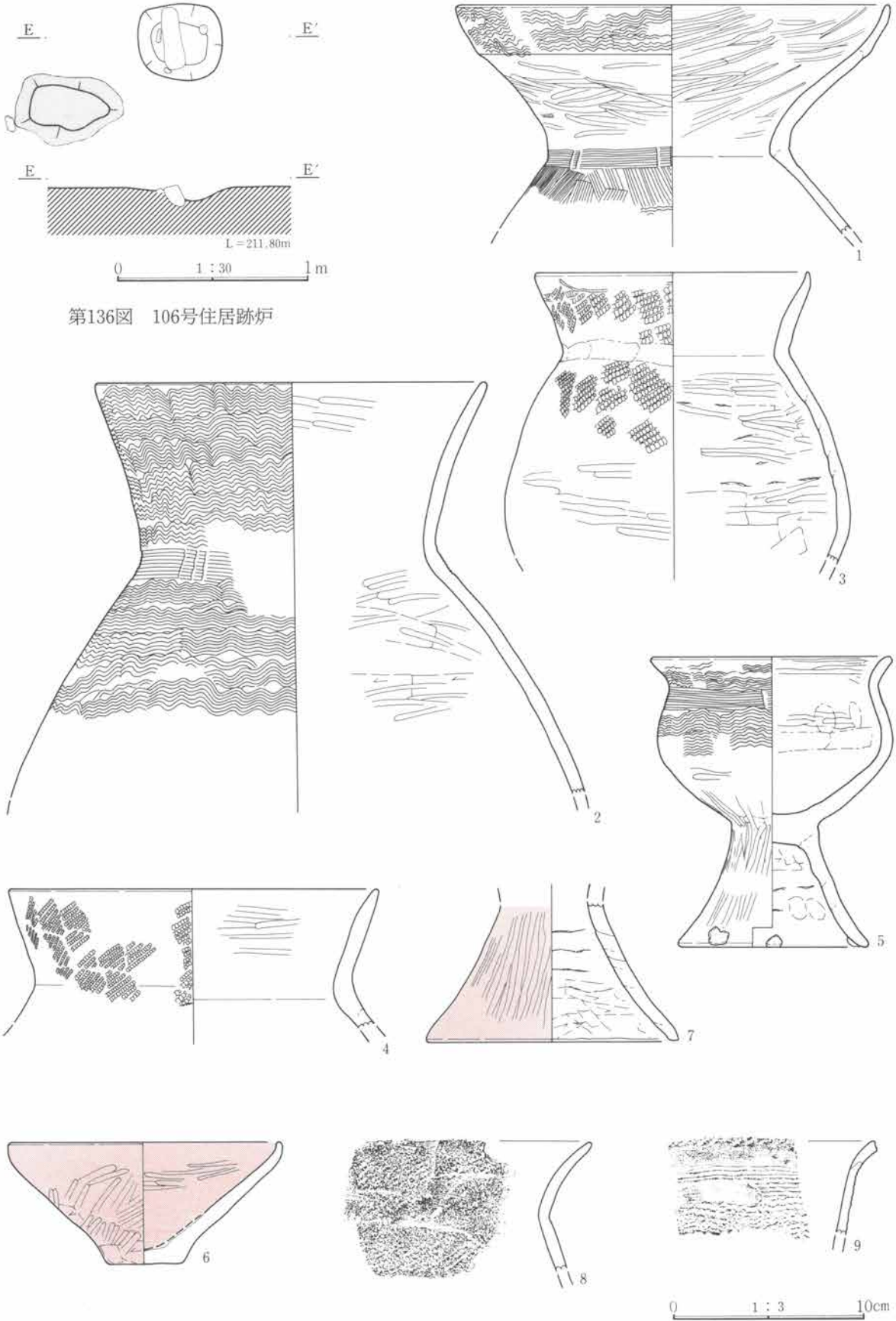


- | | |
|---|---|
| 1 極暗褐色土 白色粒、風化礫、少量の軽石・小礫を含む。粘性なく、しまりあり。 | 8 暗黄褐色土 風化礫、白・黄色粒を含む。粘性強く、しまりあり。 |
| 2 暗褐色土 炭化物、小礫、軽石、風化礫、多量の白色粒を含む。粘性は弱く、しまりあり。 | 9 黒褐色土 白・黄色粒少量含む。土色はやや黄色味を帯びる。粘性強く、しまりあり。 |
| 3 暗褐色土 白・黄色粒、黄色粘土を含む。粘性強く、しまりあり。 | 10 黒褐色土 白色粒、風化礫を微量含む。土色はやや黄色味を帯びる。粘性強く、しまりあり。 |
| 4 黒褐色土 含有物は第3層と同じであるが、その量は少ない。粘性強く、しまりあり。 | 11 黒褐色土 溝覆土（他遺構）。白・黄色粒を多く含む。下側半分は、黄色粘土を多く含む、黄色味を帯びる。粘性強く、しまりあり。 |
| 5 暗黄褐色土 白色粒、風化礫を微量含む。粘性強く、しまり弱い。 | 12 暗黄褐色土 白・黄色粒を多く含む。粘性・しまりあり。 |
| 6 暗褐色土 白色粒、礫を含む。粘性弱く、しまりあり。 | 13 暗黄褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性強く、しまりあり。 |
| 7 黒褐色土 風化礫、多量の白・黄色粒を含む。粘性・しまりあり。 | 14 暗黄褐色土 黄色粒を少量含む。粘性強く、しまり弱い。 |

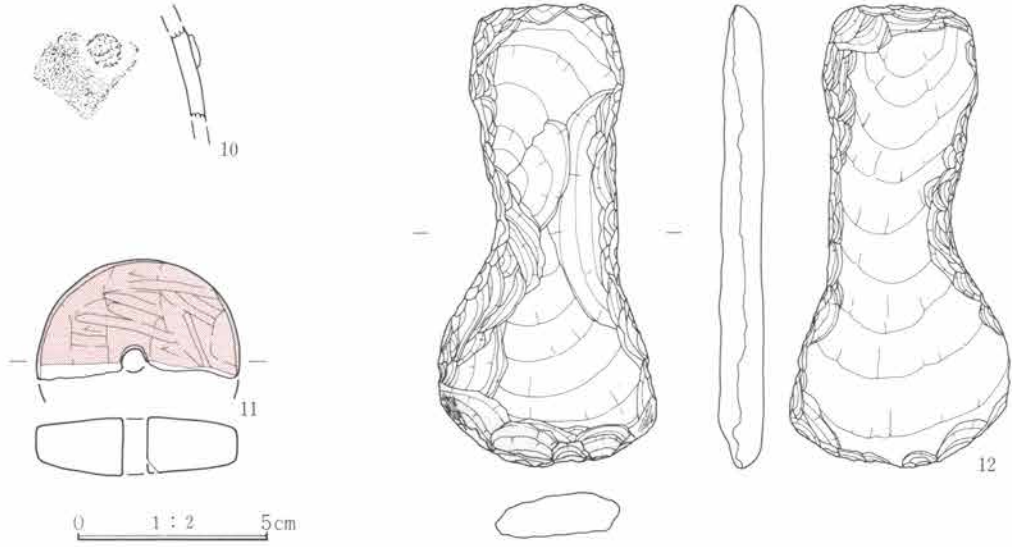
第135図 106号住居跡（2）



第136図 106号住居跡炉

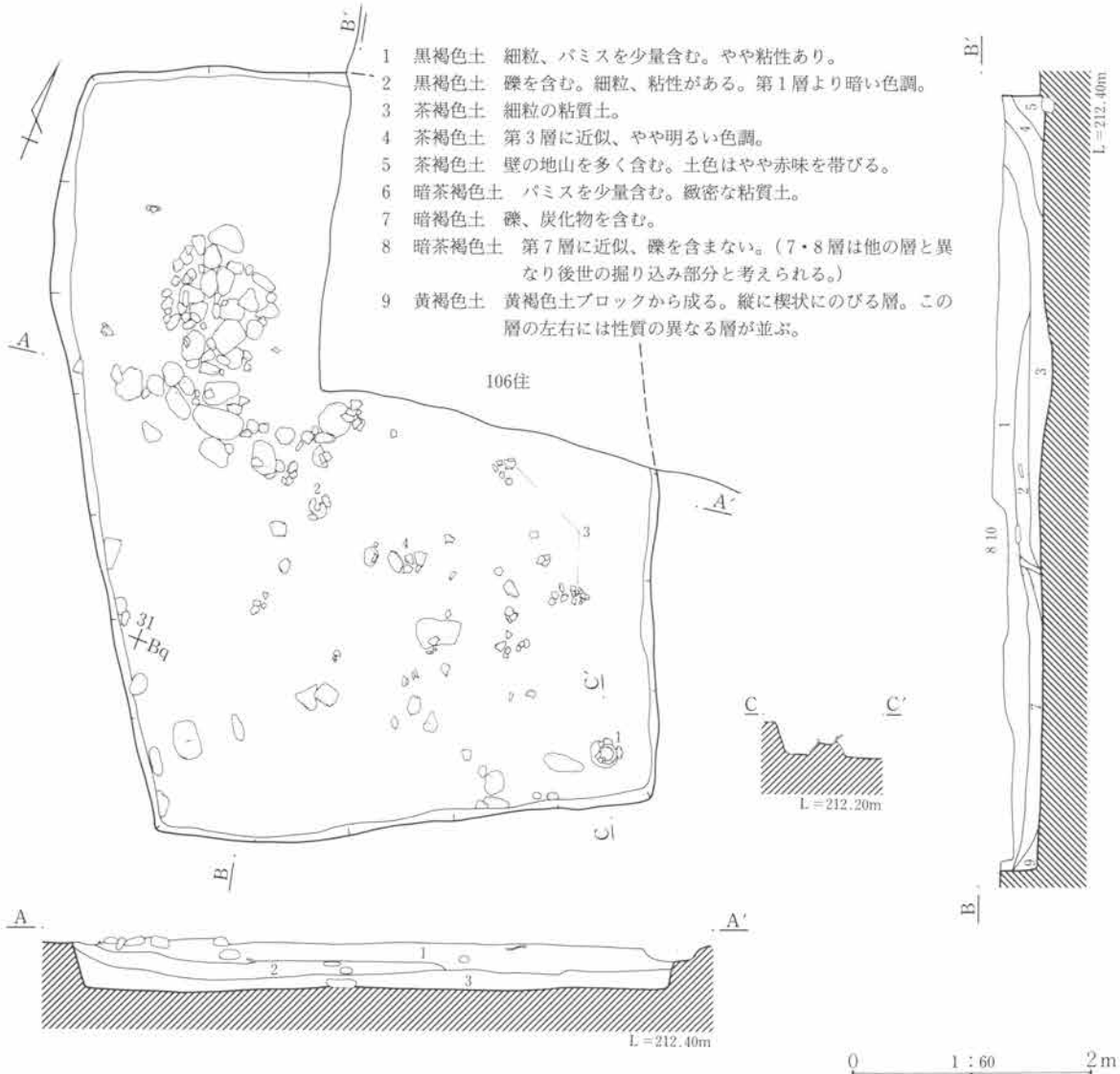


第137図 106号住居跡出土遺物実測図(1)

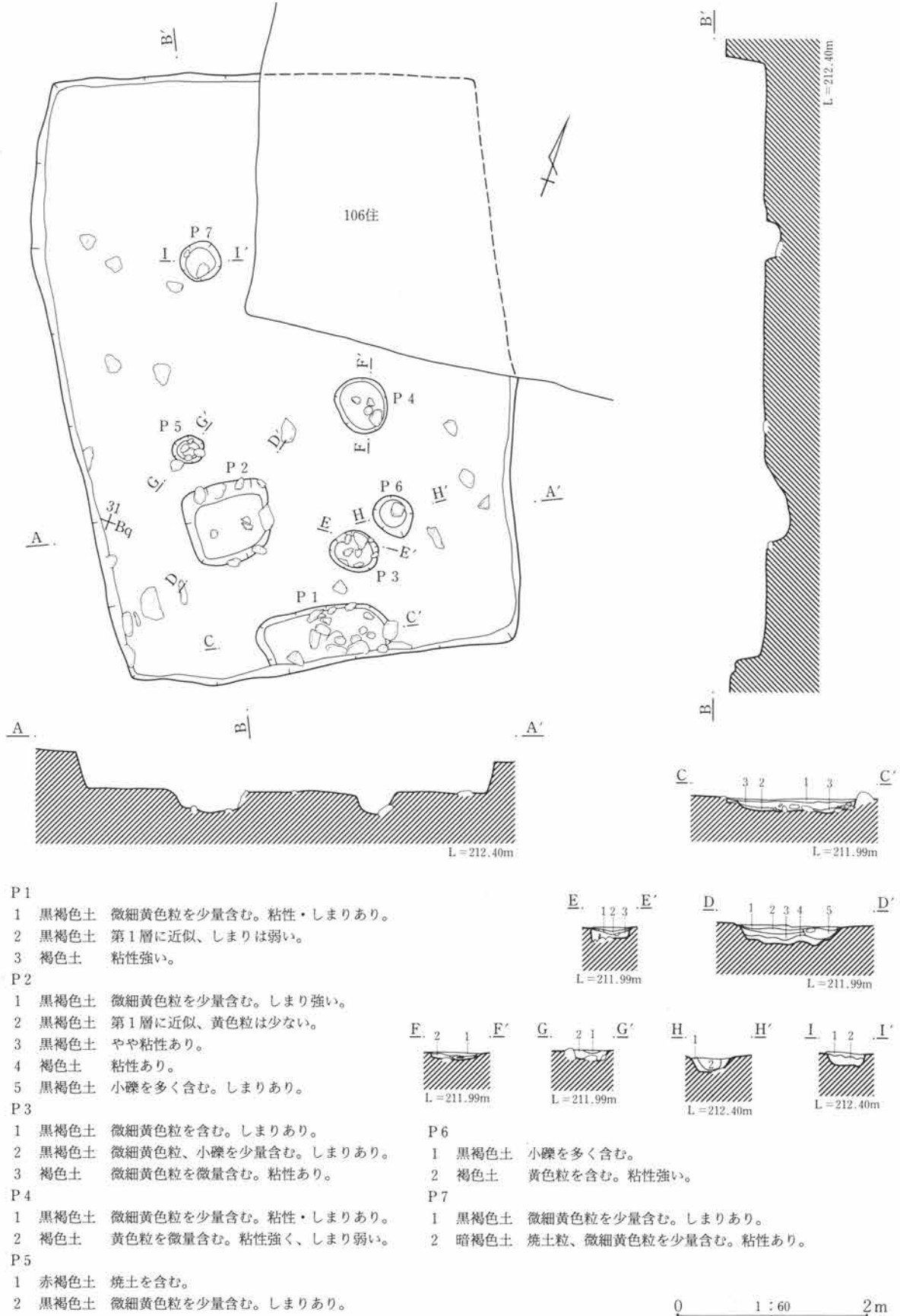


第138図 106号住居跡出土遺物実測図(2)

0 1:3 10cm



第139図 107号住居跡(1)



第140図 107号住居跡 (2)

第3章 検出された遺構と遺物

B-107号住居跡 (第139~142図、P L 31・56)

位置 Bq-30・31グリッド 床面積 (27.76m²) 主軸方位 N-29°-W

重複 北東部で106号住と重複し、住居の4分の1を切られている。

壁 北壁・東壁の一部は106号住によって壊されているが、他は良好な周壁を検出することができた。直立に近い立ち上がりを示し、残存壁高は40cmを測ることができる。壁土は上層より、粘質茶褐色土、礫層の順に観察できる。

形状と規模 やや歪んだ長方形を呈する。北東隅は他住居との重複のため輪郭は不明である。規模は長軸6.16m、短軸4.30mを測ることができる。

床面 住居の北西よりには大小の礫が集中して出土している。地山の礫層を床面としており、僅かに凹凸が見られるが概ね平坦である。

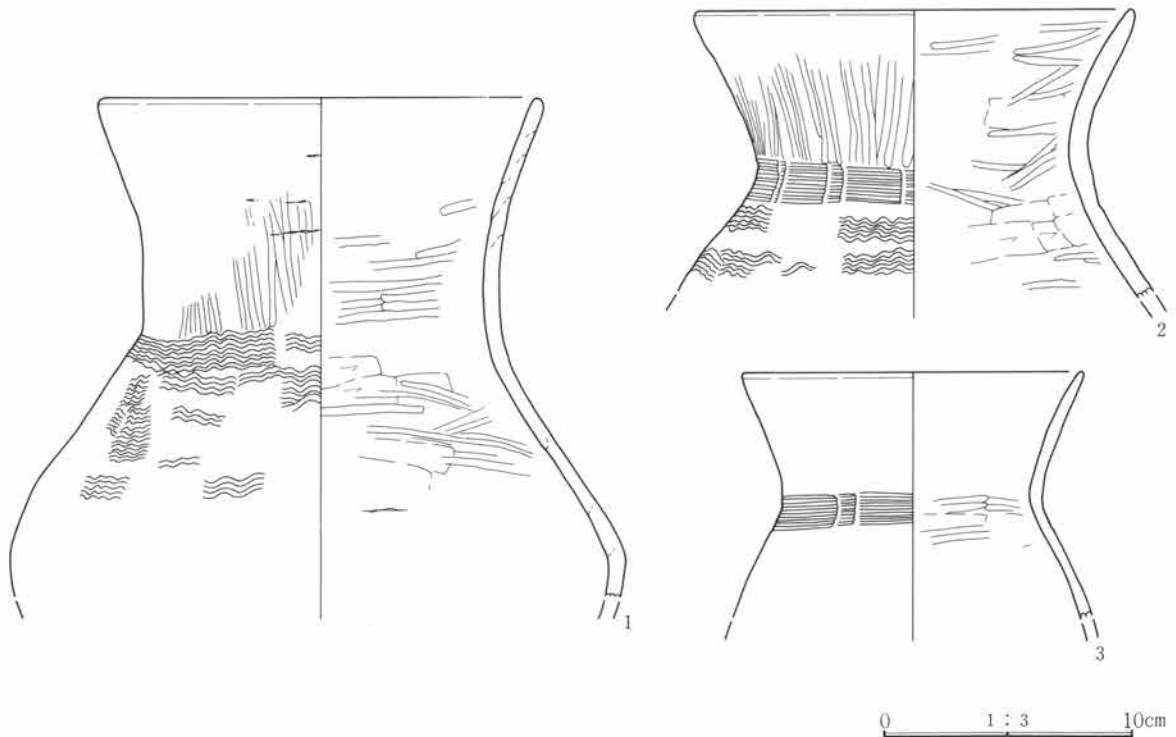
炉跡 検出されなかった。P 5の上層に少量の焼土が見られるが、位置も変則的であり、調査資料も乏しいことから炉と認定することはできない。

柱穴 P 6・P 7は支柱穴の可能性が考えられる。

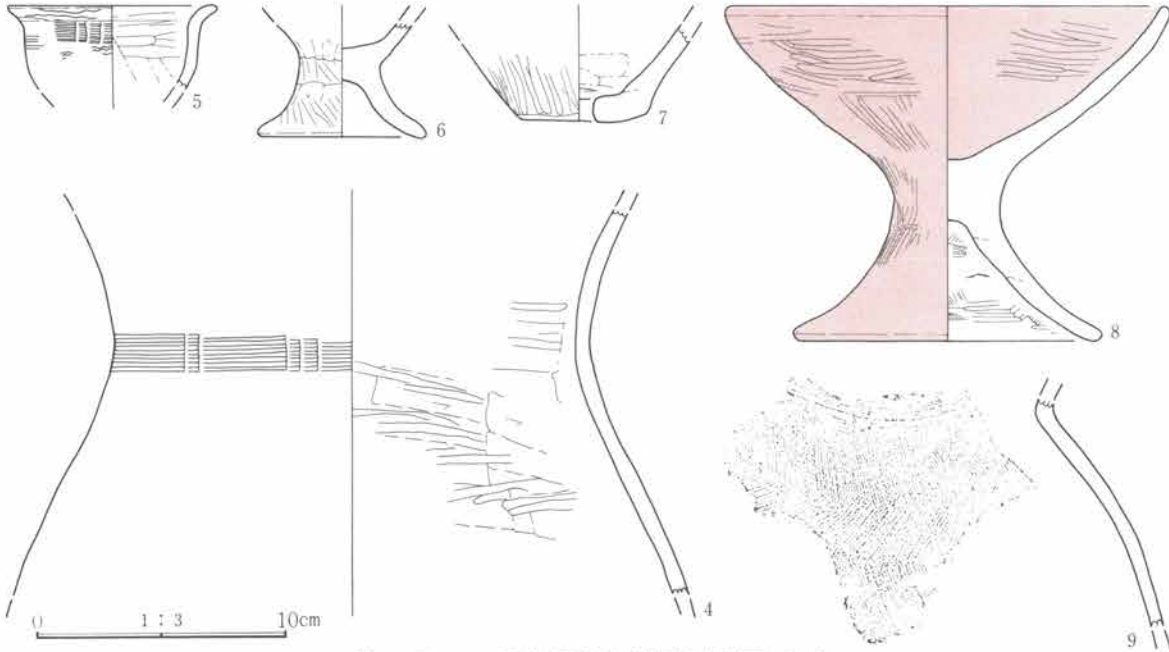
No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
上端長径	140cm	104cm	52cm	60cm	34cm	47cm	42cm
下端長径	128cm	84cm	40cm	52cm	24cm	39cm	31cm
深 さ	31cm	26cm	15cm	8 cm	10cm	18cm	17cm

出土遺物 出土遺物は比較的少なく、床面直上からの出土はほとんど認められない。覆土中・下層より甕4点(1~4)、高坏1点(8)、ピット内覆土より小型台付甕2点(5・6)、覆土上層より甕1点(7)が出土している。

時期 出土遺物より弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第141図 107号住居跡出土遺物実測図(1)



第142図 107号住居跡出土遺物実測図(2)

B-108号住居跡 (第143~148図、P L 31・32・56~58)

位置 Bo・Bp-31・32グリッド 床面積 35.12m² 主軸方位 N-29°-W

重複 北辺で121号住(縄文)と重複、121号住を切っている。

壁 北周壁を除いて、良好な周壁を検出することができた。直立気味に立ち上がり、残存壁高は36cmを測ることができる。

形状と規模 調査時に北辺の121号住との重複部の区別が困難を極め北側を掘り過ぎてしまった。北壁の破線は、柱穴の位置、遺物分布状況等をもとにした推定線である。形状は長方形を呈し、規模は長軸(7.20m)、短軸5.08mを測ることができる。

床面 礫混じりの粘質黄褐色土を床面としている。南半部は地山の礫が多数露出している。

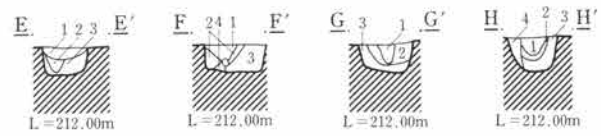
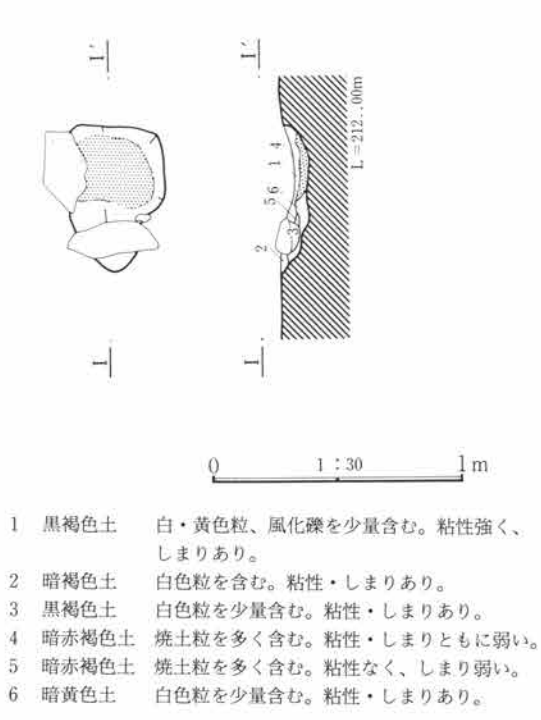
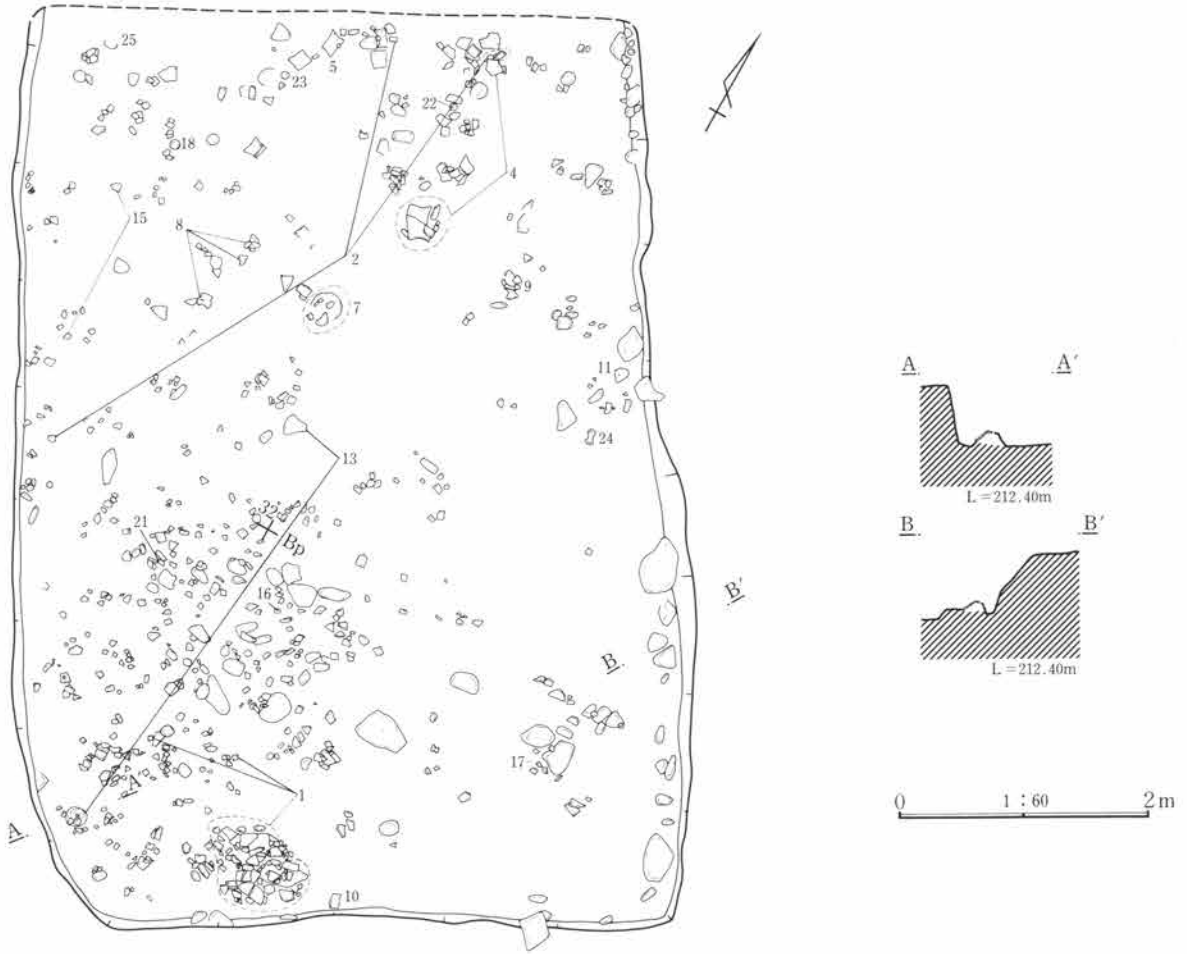
炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴(P1・P4)間にあり、炉石を据える形態の地床炉である。長軸58cm、短軸38cm、深さ10cmの楕円形の掘り込みを有し、長径28cmの暗赤褐色の焼土面を検出することができた。その他、2箇所に焼土混じりの高まりを確認できた。

柱穴 支柱穴は4箇所良好に検出することができた。

No.	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	35cm	50cm	43cm	43cm
下端長径	24cm	25cm	37cm	29cm
深 さ	31cm	45cm	32cm	30cm

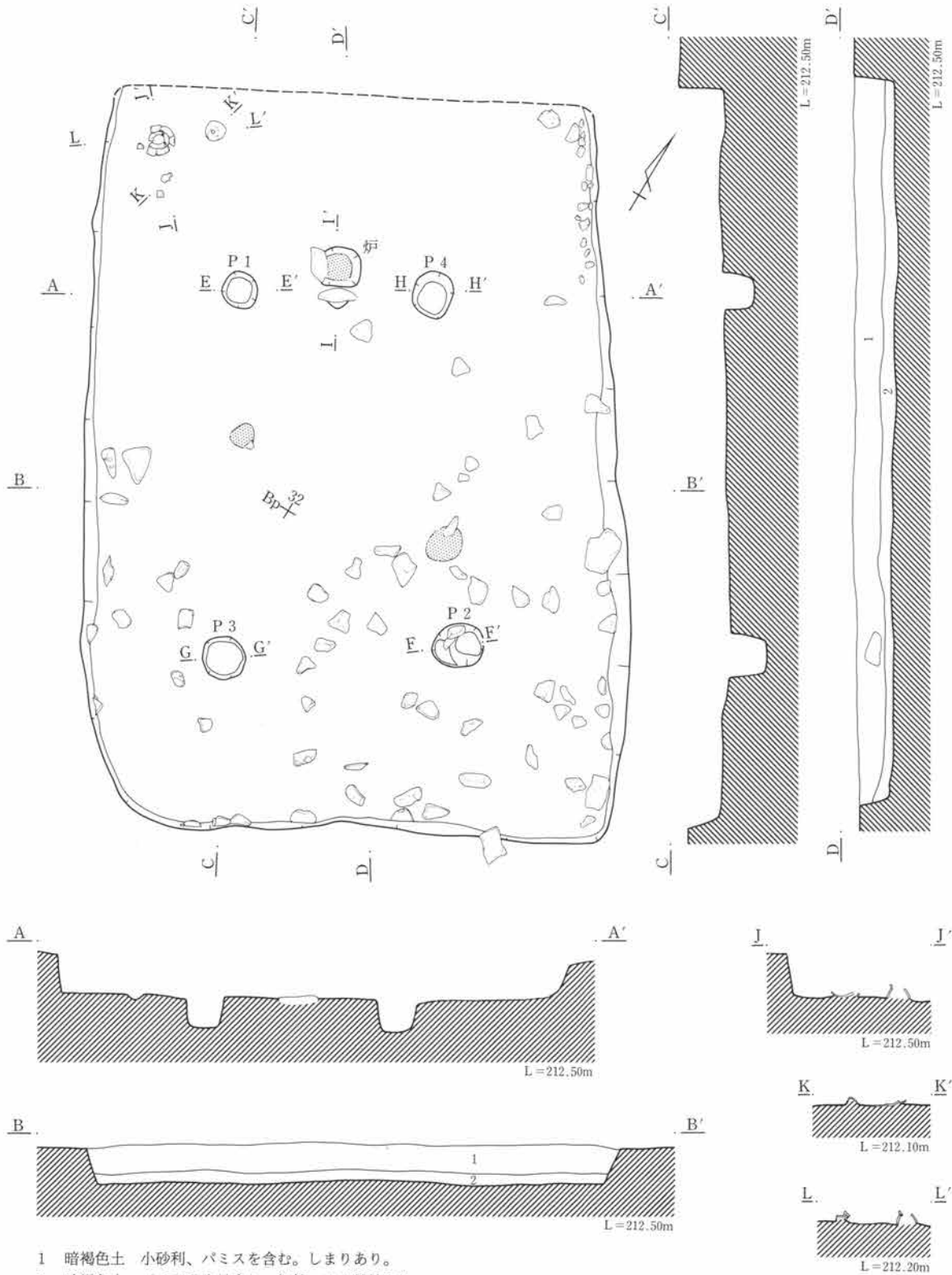
出土遺物 住居の北西隅の床面直上より甕2点(3・6)、高坏1点(14)が、中央部の床面直上より高坏1点(13)が出土している。覆土中からは壺3点(1・2・19)、甕5点(4・5・7・20・21)、台付甕2点(8・9)、鉢2点(11・12)、高坏1点(15)、甕2点(16・17)、ミニチュア1点(18)、土製紡錘車2点(22・23)、石器3点(24~26)などの多くの遺物が出土している。土製紡錘車(23)は全面に赤色塗彩が施されている。甕(20)は原体LRの斜縄文を施文した赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器である。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

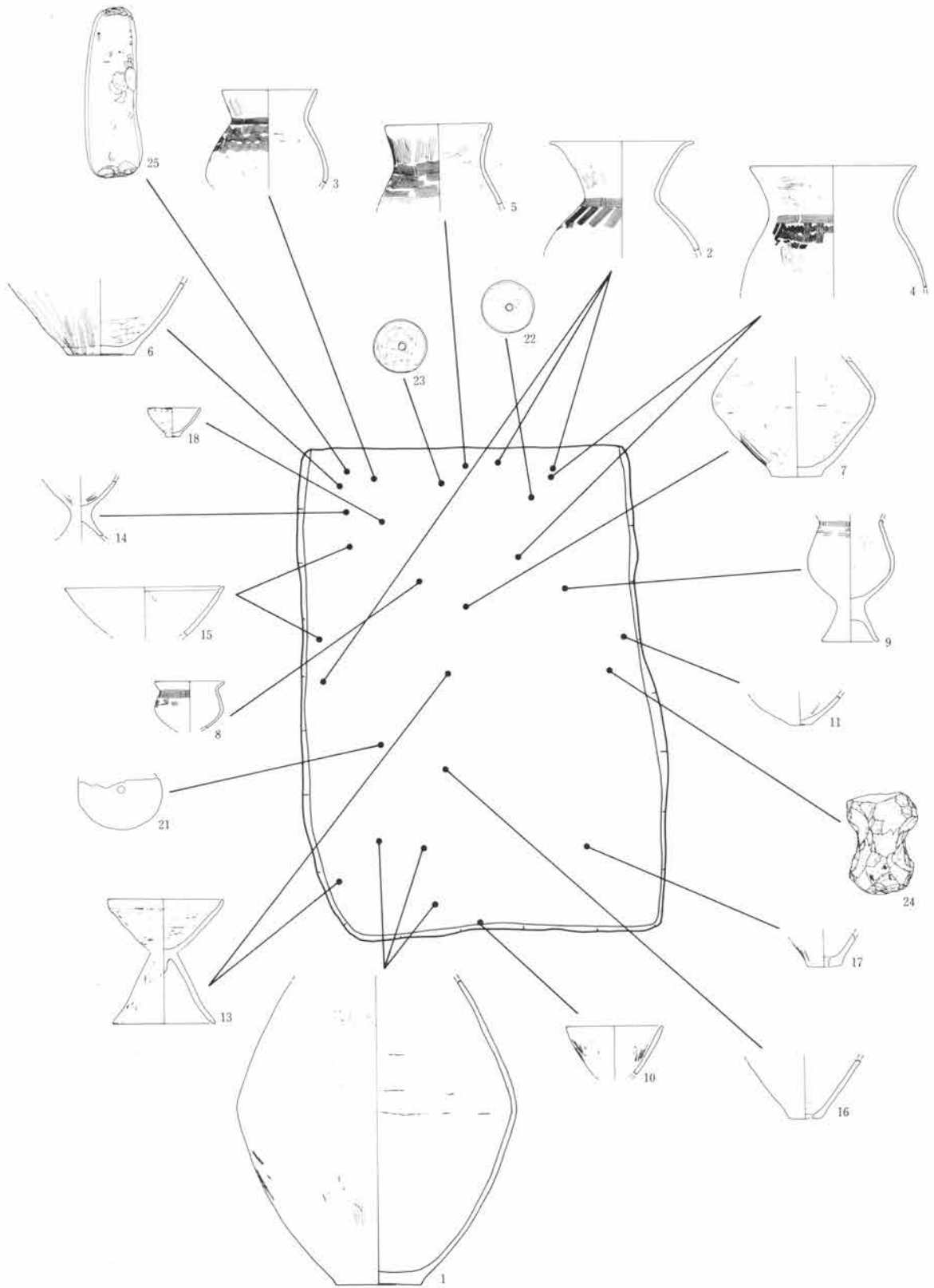


- P1**
- 1 暗褐色土 微細白・黄色粒を含む。粘性強く、しまりあり。
 - 2 暗褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 3 暗褐色土 多量の礫、少量の白・黄色粒を含む。粘性強く、しまり弱い。
- P2**
- 1 黒褐色土 白・黄色粒を含む。粘性強く、しまりあり。
 - 2 黄褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性強く、しまりあり。
 - 3 暗褐色土 白・黄色粒を微量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 4 砂礫層
- P3**
- 1 暗褐色土 白・黄色粒を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 2 黒褐色土 黄色粒、風化礫を少量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 3 黒褐色土 黄色粒、風化礫を微量含む。粘性強く、しまり弱い。
- P4**
- 1 黄褐色土 白・黄色粒、風化礫、小礫含む。粘性強く、しまりあり。
 - 2 暗褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 3 暗褐色土 礫、風化礫、微量の白・黄色粒を含む。粘性強く、しまり弱い。
 - 4 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫を少量含む。粘性強く、しまり弱い。

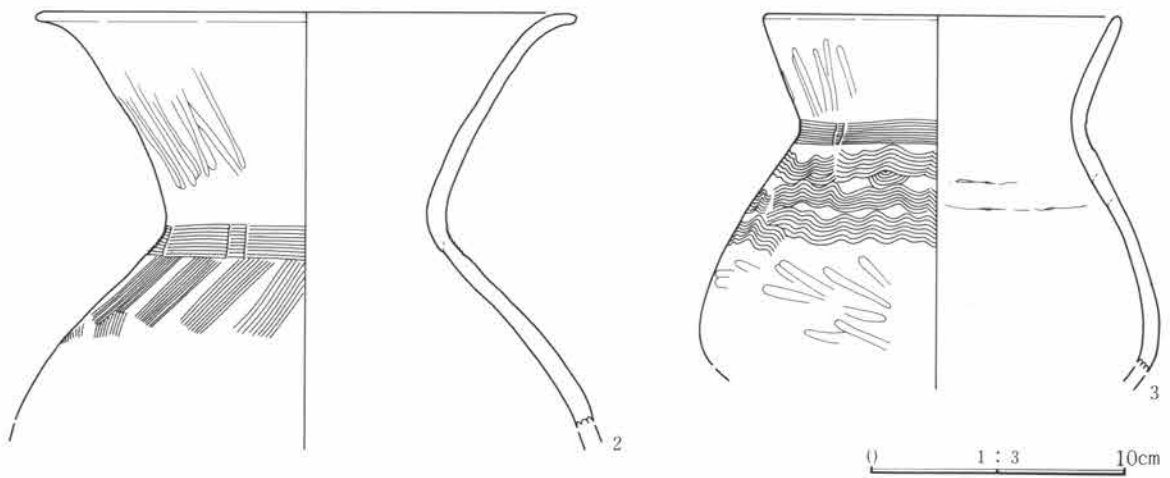
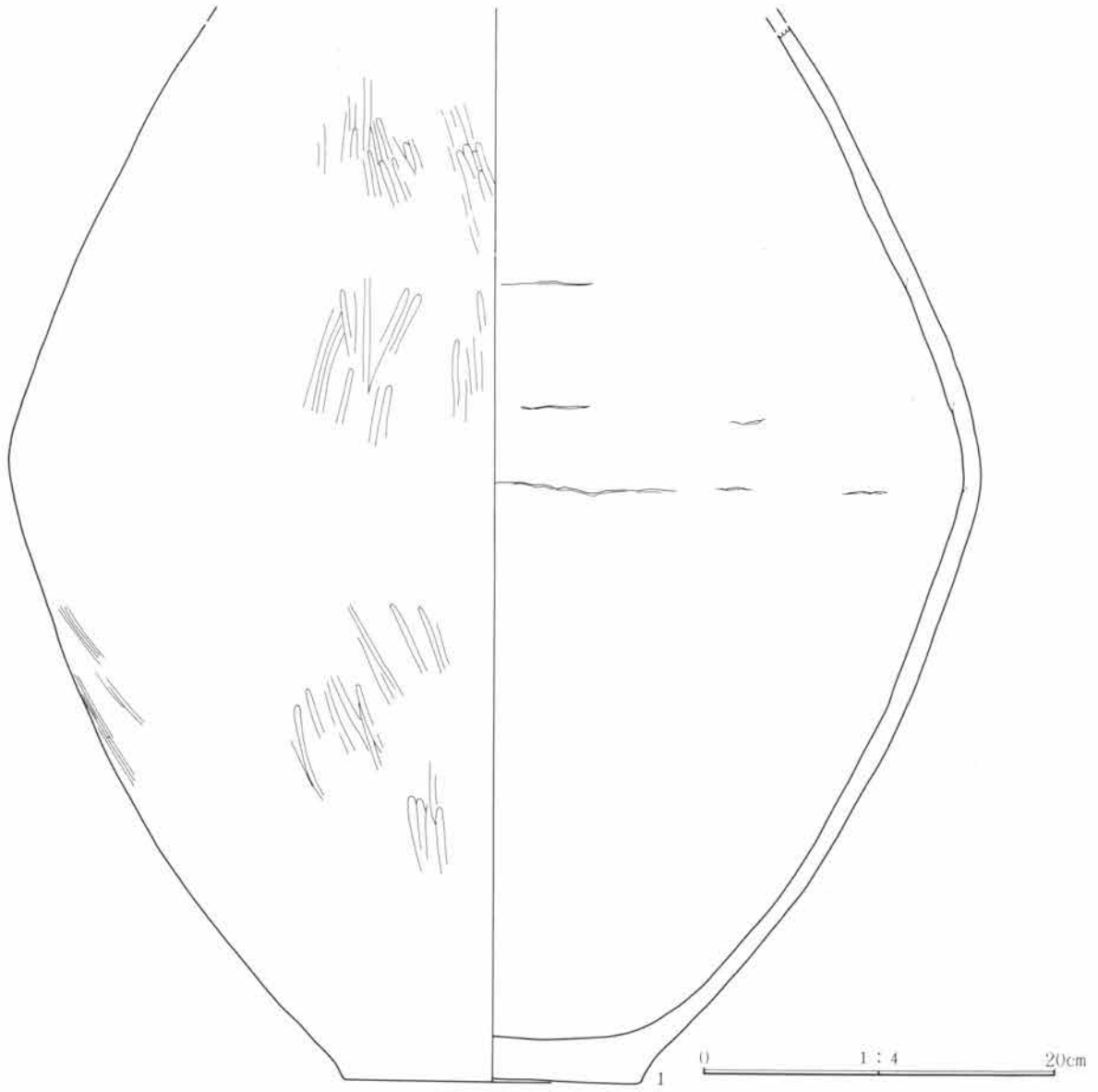
第143図 108号住居跡(1)、炉



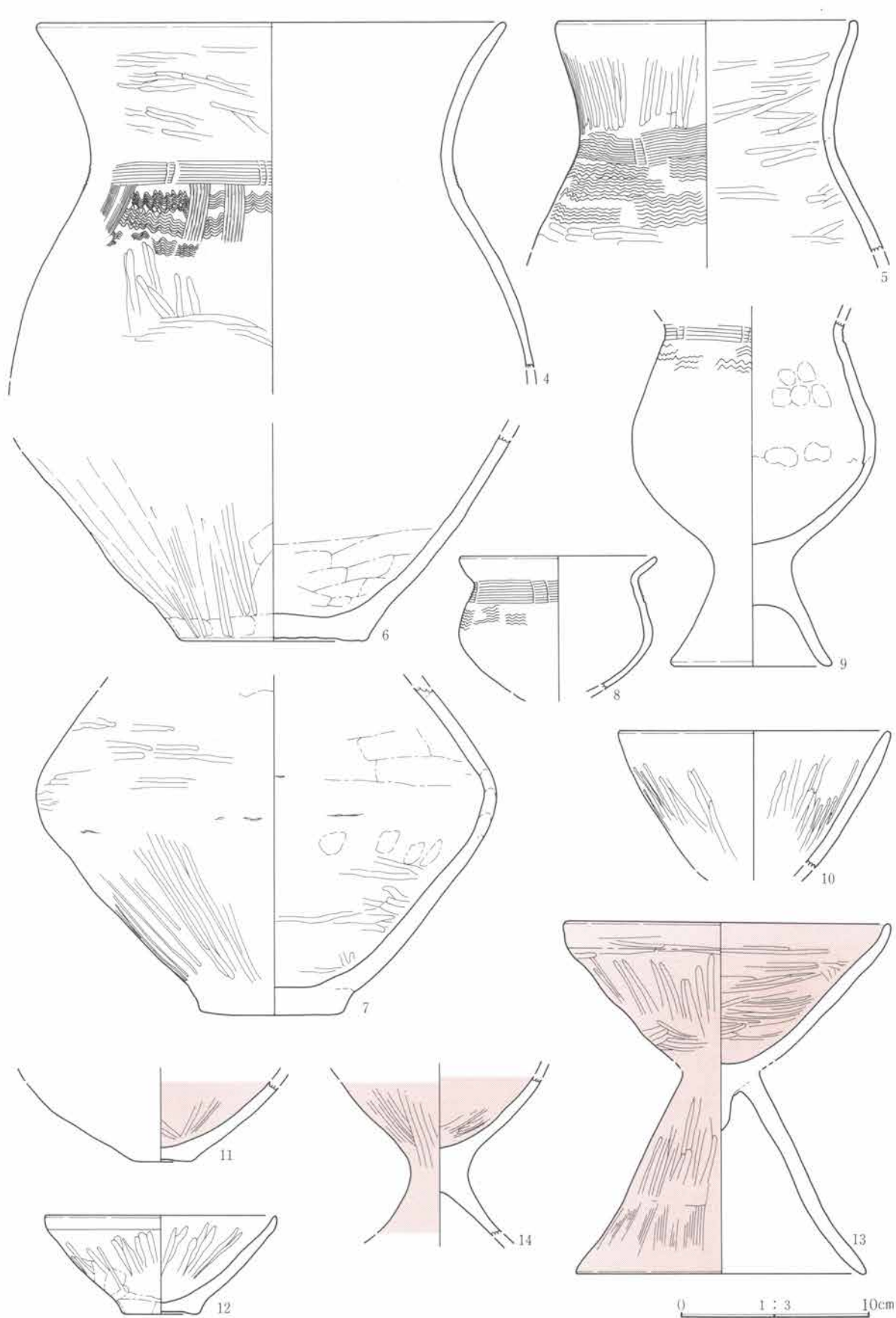
第144図 108号住居跡(2)



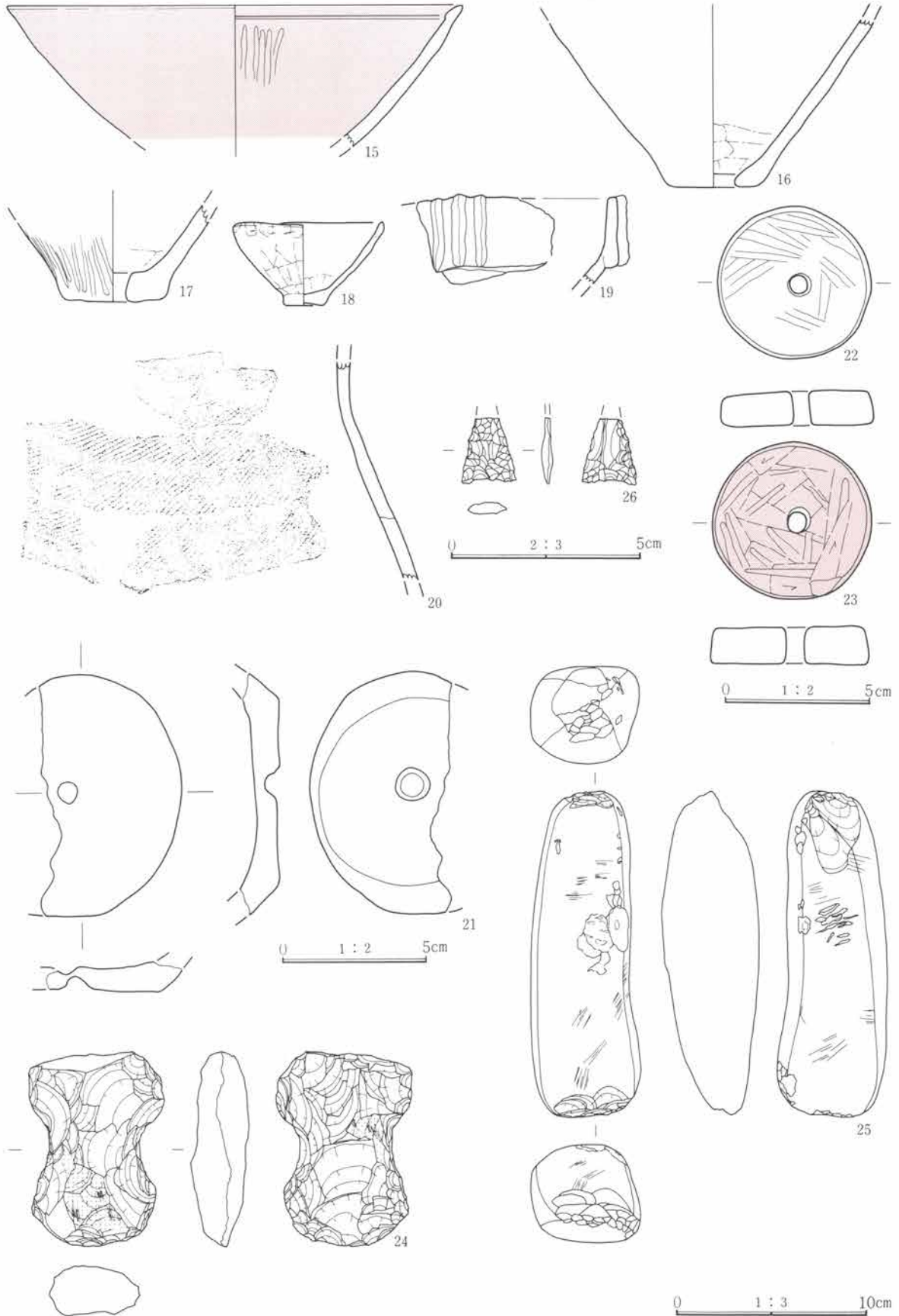
第145図 108号住居跡個体別遺物出土状況図



第146図 108号住居跡出土遺物実測図(1)



第147図 108号住居跡出土遺物実測図(2)



第148図 108号住居跡出土遺物実測図(3)

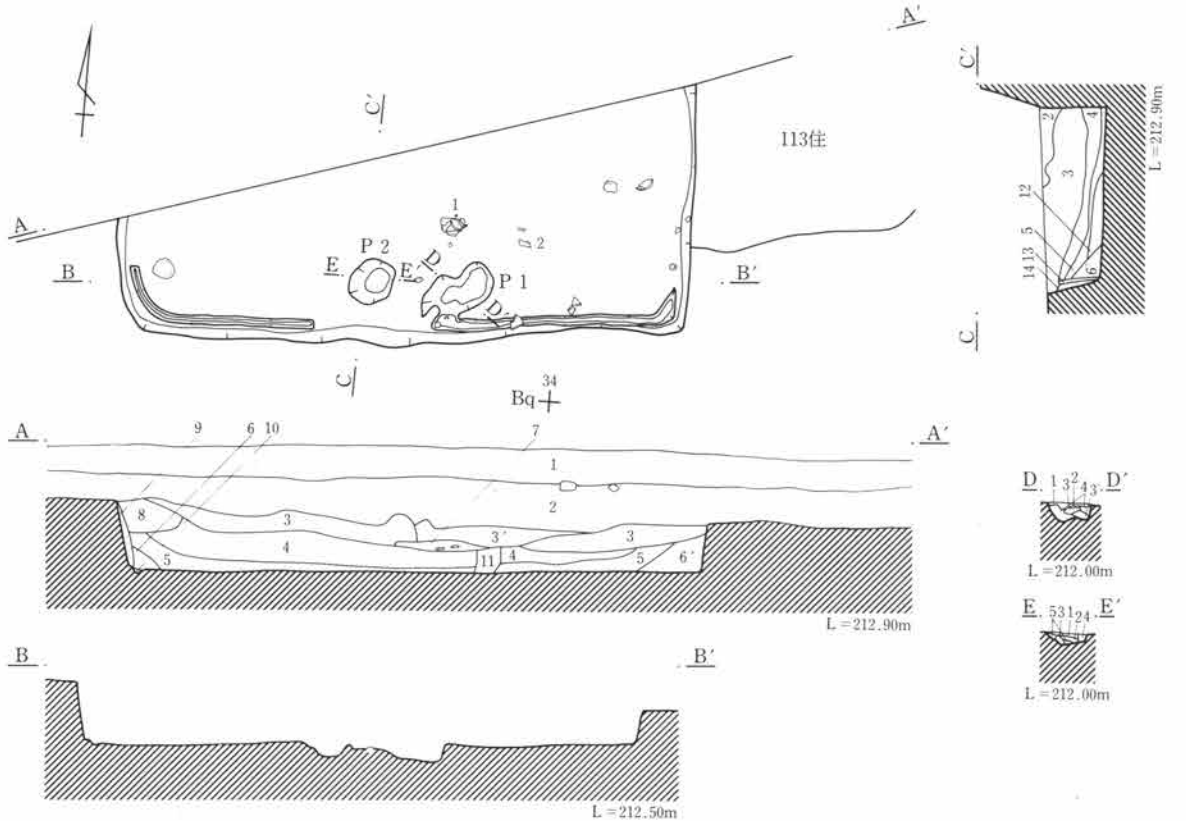
第3章 検出された遺構と遺物

B-112号住居跡 (第149・150図、P L32・58)

位置 Bq-33・34グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能

重複 113号住と重複し、113住に後出する。住居の大半は調査区外である。

壁 周壁は南辺部で良好に遺存している。残存壁高は48cmを測ることができ、直立気味に立ち上がる。南壁に沿って壁下周溝が検出されている。



- | | |
|---|--|
| 1 暗褐色土 現耕作土。粘性・しまりともにない。 | 6' 暗褐色土 第6層に近似、粘性強く、しまりがある。 |
| 2 黒色土 白・黄色粒、風化礫、炭化物、土器片を少量含む。粘性弱く、しまりあり。(上部は耕作されて第1層と同質。) | 7 黒褐色土 黄色粒、風化礫、炭化物を少量含む。粘性あり、しまり弱い。 |
| 3 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫、炭化物を含む。粘性弱く、しまりあり。 | 8 黄褐色土 白・黄色粒、風化礫を多く含む。粘性弱く、しまりあり。 |
| 3' 黒褐色土 第3層に近似、粘性あってしまり弱い。 | 9 暗褐色土 黄色粒を微量含む。粘性あり、しまり弱い。 |
| 4 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫、小礫を含む。粘性・しまりあり。 | 10 暗褐色土 第9層に近似、粘性がやや強い。 |
| 5 暗褐色土 少量の白・黄色粒、微量の炭化物・風化礫を含む。粘性強く、しまり弱い。 | 11 暗褐色土 白・黄色粒、小礫を含む。左右の土層との境界線は黒褐色を呈す。樹根の跡か？ |
| 6 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫、小礫を含む。粘性あり、しまり弱い。 | 12 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫を少量含む。粘性・しまりあり。 |
| | 13 黒褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性・しまりあり。 |
| | 14 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫を含む。粘性強く、しまりあり。 |

P1

- 1 黒褐色土 白色粒、微量の小礫・軽石含む。粘性弱く、しまりあり。
- 2 黄褐色土 白色粒を含む地山土のブロック。粘性なく、しまりあり。
- 3 黒褐色土 白・黄色粒、小礫、地山土(粘土質)を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
- 3' 黒褐色土 白・黄色粒、地山土を微量含む。粘性弱く、しまりあり。
- 4 黄褐色土 地山土を主体とし、白・黄色粒を含む。

P2

- 1 黒褐色土 白・黄色粒を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 2 褐色土 地山土、少量の白・黄色粒を含む。粘性・しまりあり。
- 3 暗褐色土 白・黄色粒を少量含む。粘性・しまりともに弱い。
- 4 暗黄褐色土 白・黄色粒、地山土、風化礫を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 5 黄色土 粘性・しまりあり、地山？。



第149図 112号住居跡

形状と規模 住居の大半が調査区外であるため形状は確定できないが、残存部の形状から方形、もしくは長方形になると思われる。規模は東西4.60mを測ることができる。比較的小型の住居である。

床面 粘質黄褐色土を平坦に踏み固めている。

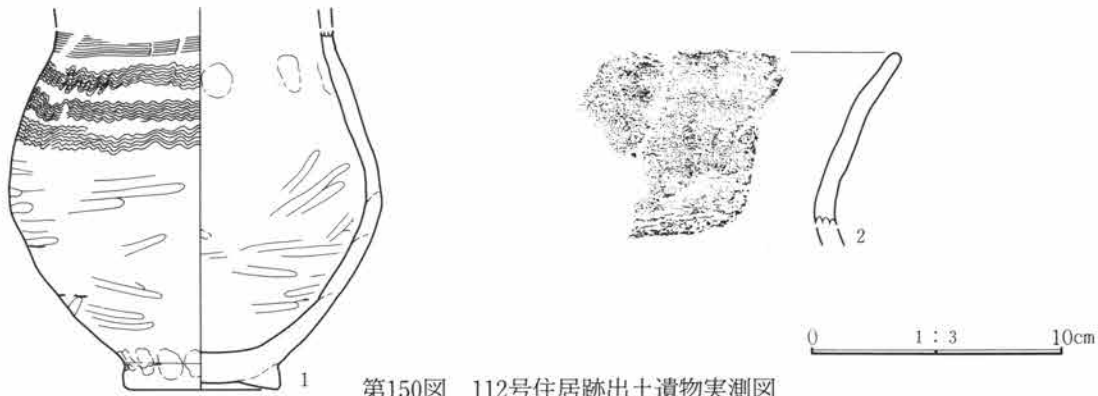
炉跡 検出されなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

柱穴 主柱穴は調査区外と推定され検出することができなかった。P1・P2は梯子穴の可能性が考えられる。

No	P 1	P 2
上端長径	65cm	40cm
下端長径	40cm	20cm
深 さ	14cm	11cm

出土遺物 出土遺物は大変少なく、ほとんどが覆土中からの出土である。P1近くの床面から出土した甕1点(1)と覆土中から出土した甕の口縁部片1点(2)を図化することができた。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第150図 112号住居跡出土遺物実測図

B-113号住居跡 (第151・152図、P L32・58)

位置 B9-33・34グリッド **床面積** 測定不能 **主軸方位** 測定不能

重複 112・114号住と重複する。114住に後出し、112住よりも古い。覆土上部で小土坑と重複している。住居の大半は調査区外である。

壁 南周壁のみを検出している。残存壁高は34cmである。

形状と規模 調査範囲が少なく、形状・規模ともに不明瞭である。東西辺は4.02mを測ることができる。

床面 粘質黄褐色土を床面としている。

炉跡 検出されなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

柱穴 主柱穴は調査区外にあると思われ検出することができなかった。

No	P 1	P 2
上端長径	35cm	53cm
下端長径	27cm	29cm
深 さ	18cm	20cm

出土遺物 遺物は極めて少ない。南壁近くの床面及び覆土最下層から甕2点(1・2)、台付甕1点(3)を検出したに過ぎない。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物

B-114号住居跡 (第151・153図、P L32・58)

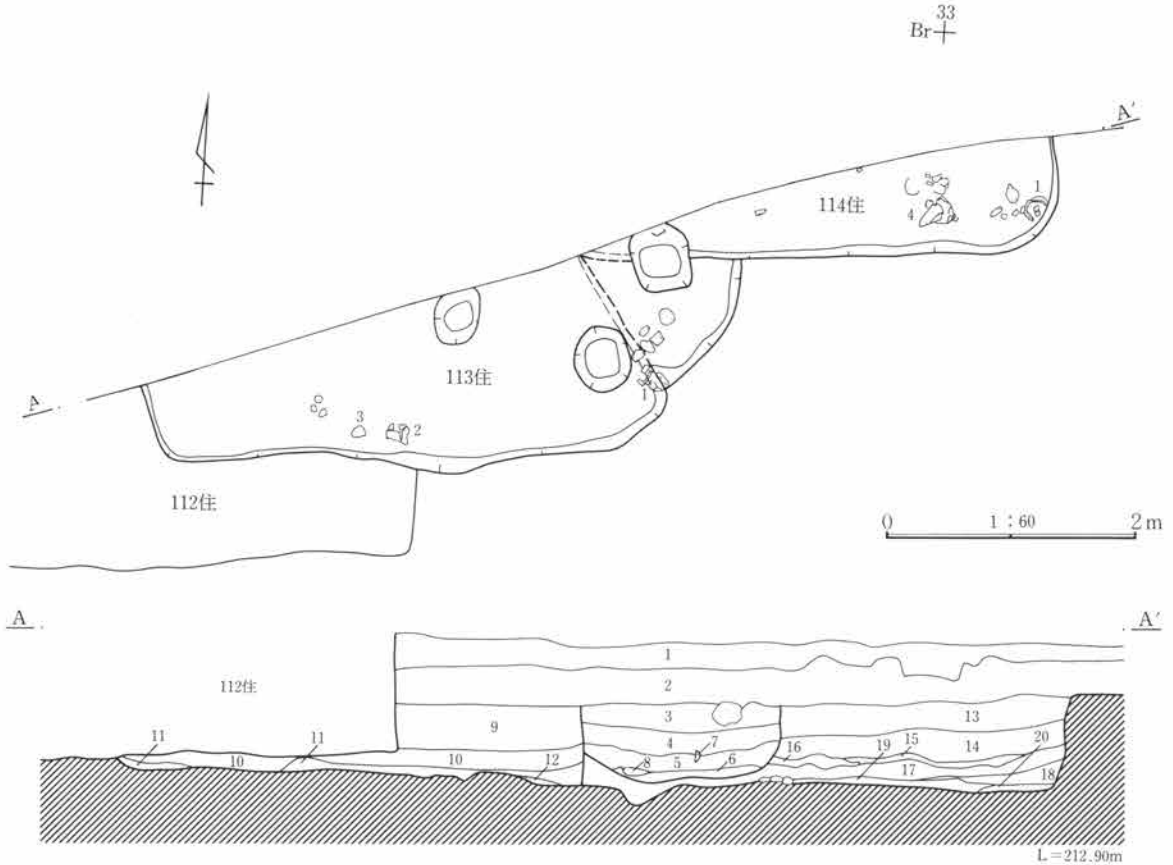
位置 Bq-32・33 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能

重複 113号住と重複している。西壁を切られている。上部で小土坑が重複、住居の一部が上部で切られている。

壁 南周壁・東周壁の一部のみが検出できた。残存壁高は南壁で僅かに12cmである。

形状と規模 調査範囲が極めて少なく、形状・規模ともに詳細は不明である。

床面 粘質黄褐色土を床面としている。



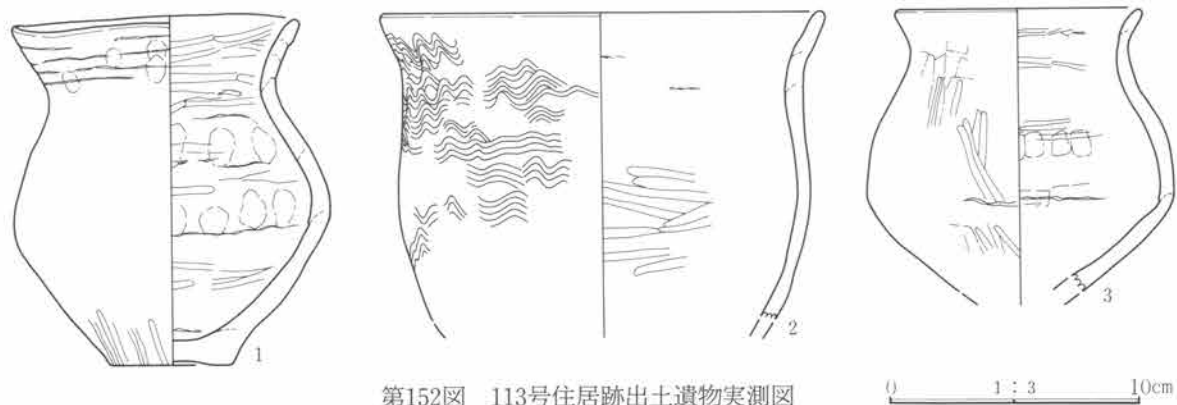
- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土 現耕作土。</p> <p>2 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫、地山土(黄色土)を含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>3 黒褐色土 少量の風化礫、礫(φ100~200mm)、やや多量の白・黄色粒、砂礫(φ1~2mm)を含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>4 黒褐色土 白・黄色粒、少量の風化礫・炭化物を含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>5 暗褐色土 白・黄色粒、炭化物、地山土ブロックを少量含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>6 黒色土 炭化物は層状をなし、白・黄色粒、風化礫、小礫(φ5~10mm)を少量含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>7 黒色土 白・黄色粒、風化礫、炭化物を含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>8 淡黄色土 地山土ブロックを主体とする。粘性・しまりあり。</p> <p>9 暗褐色土 白・黄色粒、多量の小礫(φ1~10mm)、少量の炭化物を含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>10 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫(φ5mm)、小礫(φ5mm)を含む。粘性弱くしまりあり。</p> | <p>11 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫、地山土、少量の炭化物含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>12 黒褐色土 白・黄色粒、炭化物、地山土を含む。粘性・しまりあり。</p> <p>13 黒褐色土 礫、白・黄色粒、多量の砂礫(φ1~2mm)を含む。粘性非常に弱く、しまりあり。</p> <p>14 黒褐色土 第13層に近似、含有物の量は少ない。</p> <p>15 暗黄褐色土 白・黄色粒、風化礫、非常に多量の地山土を含む。粘性・しまりあり。</p> <p>16 黒色土 小礫(φ5mm)、白・黄色粒、風化礫を含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>17 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫、地山土を含む。粘性弱く、しまりあり。</p> <p>18 暗褐色土 白・黄色粒、風化礫を少量含む。底部に炭化物ブロックあり。粘性・しまりあり。</p> <p>19 黒褐色土 白・黄色粒、炭化物を少量含む。粘性・しまりあり。</p> <p>20 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫を少量含む。粘性・しまりあり。</p> |
|---|--|

第151図 113・114号住居跡

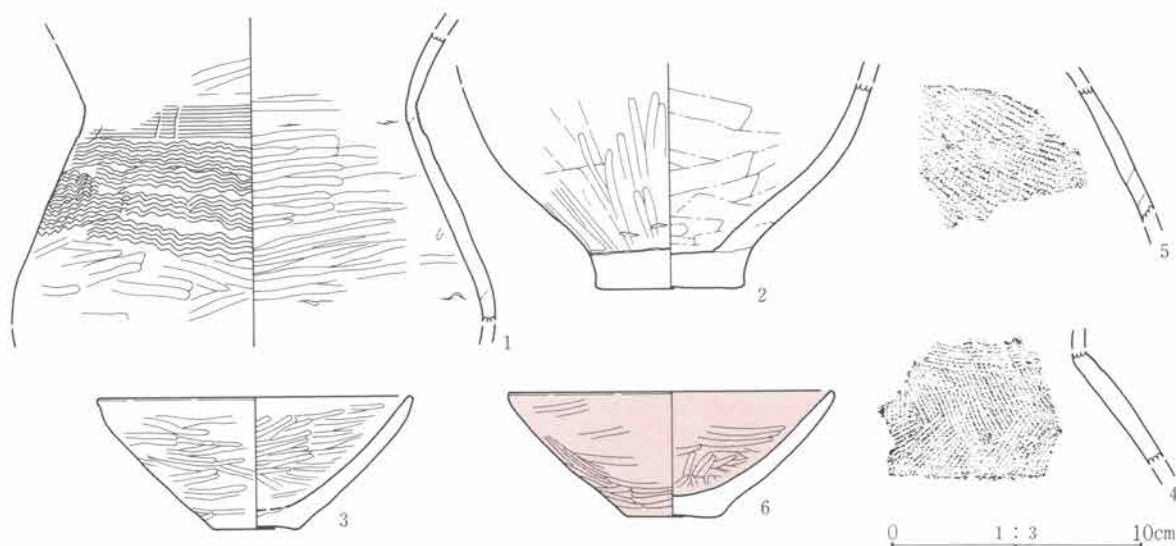
炉跡 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。

出土遺物 出土遺物は大変少なく、覆土上層からの出土が多い。覆土上層より出土した甕2点(1・4)、壺1点(2)、鉢1点(3)、覆土最下層より出土した赤色塗彩の鉢1点(6)、甕胴部片1点(5)を図化することができた。甕(5)は原体RLの横位の縄文を施した赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器である。甕(4)は頸部に簾状文、胴部に櫛描横羽状文を施文している。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第152図 113号住居跡出土遺物実測図



第153図 114号住居跡出土遺物実測図

B-115号住居跡 (第154~160図、P L33・58・59)

位置 Bo・Bp-35~37 床面積 測定不能 主軸方位 N-7°-E

重複 なし、北辺は調査区外である。

壁 北側の調査区外を除いて、良好な周壁を検出することができた。直立気味に立ち上がり、残存壁高は62cmを測ることができる。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸不明、短軸6.76mを測ることができる。

床面 砂礫混じりの暗黄色土を床面としている。凹凸は少なく、ほぼ平坦である。

炉跡 住居の南東部に炉石を据える形態の地床炉を検出することができた。炉石の東側に長軸44cm、短軸42cm、深さ7cmの楕円形の掘り込みを有し、長径25cm程のよく焼け込んだ焼土面を検出することができた。

貯蔵穴 南西部の南周壁下に位置し、長軸68cm、短軸32cmの半円形を呈する。

第3章 検出された遺構と遺物

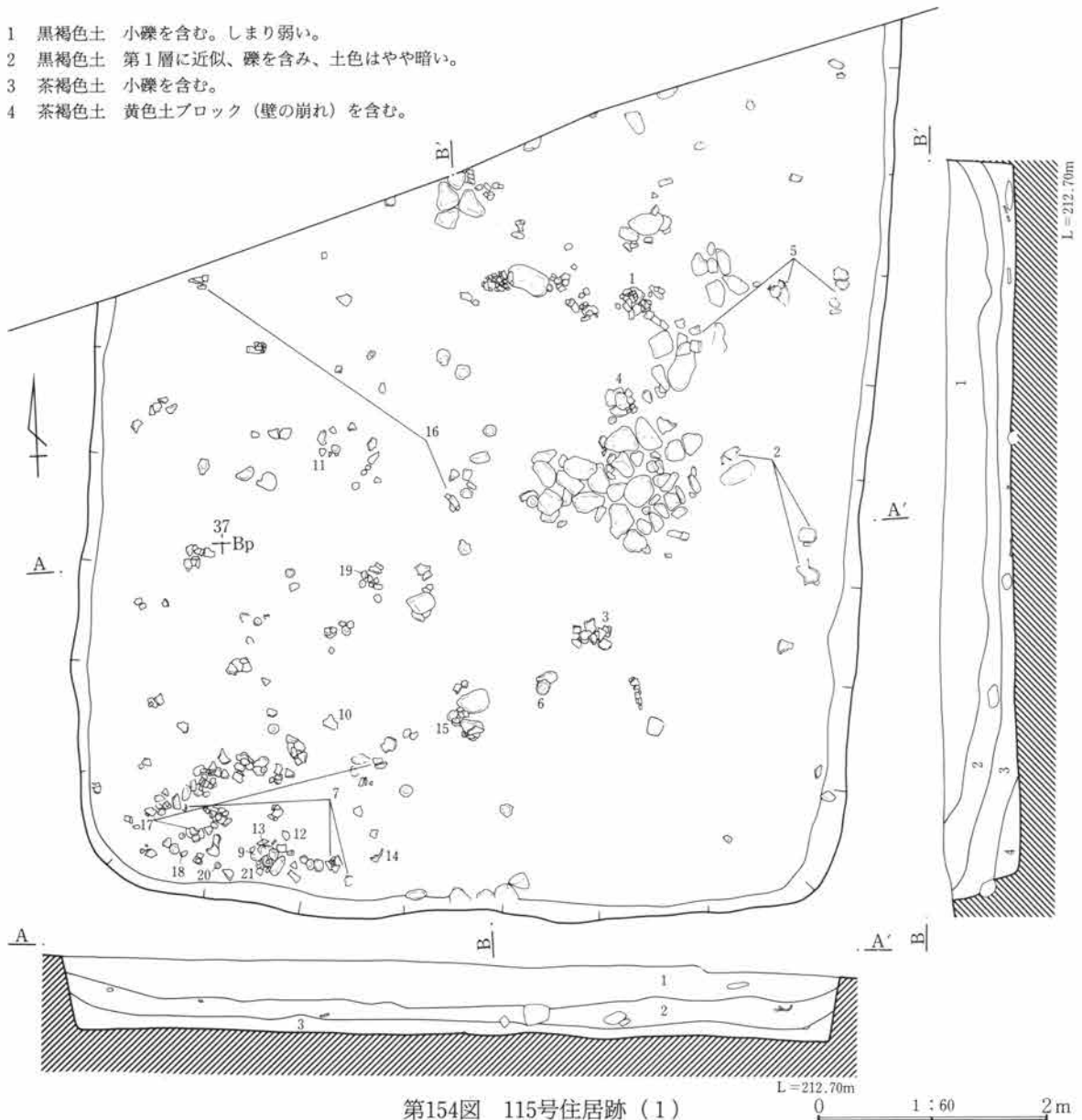
柱穴 P1・P2の2基が支柱穴になると思われる。4本柱構造になるとおもわれるが他の2基は調査区外で検出することができなかった。P6・P7は梯子穴になると思われる。

No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
上端長径	71cm	60cm	154cm	40cm	38cm	58cm	55cm
下端長径	60cm	51cm	148cm	28cm	27cm	47cm	31cm
深さ	19cm	37cm	6cm	20cm	11cm	42cm	40cm

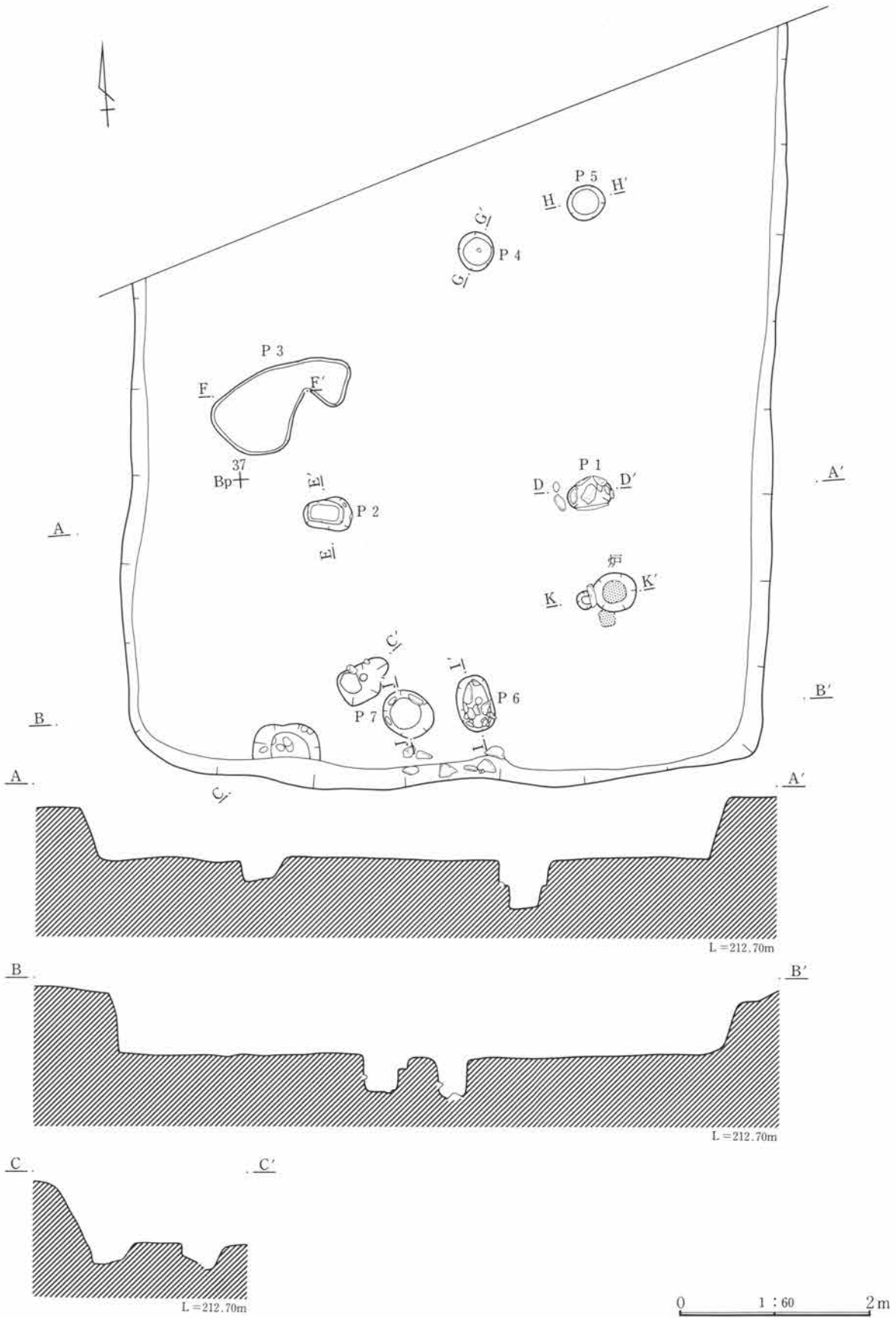
出土遺物 遺物は散在して出土している。南西隅の貯蔵穴内より鉢1点(12)、台付甕1点(9)、甕の胴部片1点(21)が出土している他は覆土の中・下層からの出土がほとんどである。図化可能な遺物は壺2点(1・4)、甕8点(2・3・5~8・21)、台付甕2点(9・10)、鉢5点(11~15)、高坏2点(16・17)、片口1点(18)、ミニチュア土器2点(19・20)である。壺(1)は外面及び内面の口縁部に赤色塗彩を施し、頸部に篋描の矢羽根状文を施文しており、長野の吉田式系の外来系土器と思われる。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

- 1 黒褐色土 小礫を含む。しまり弱い。
- 2 黒褐色土 第1層に近似、礫を含み、土色はやや暗い。
- 3 茶褐色土 小礫を含む。
- 4 茶褐色土 黄色土ブロック(壁の崩れ)を含む。

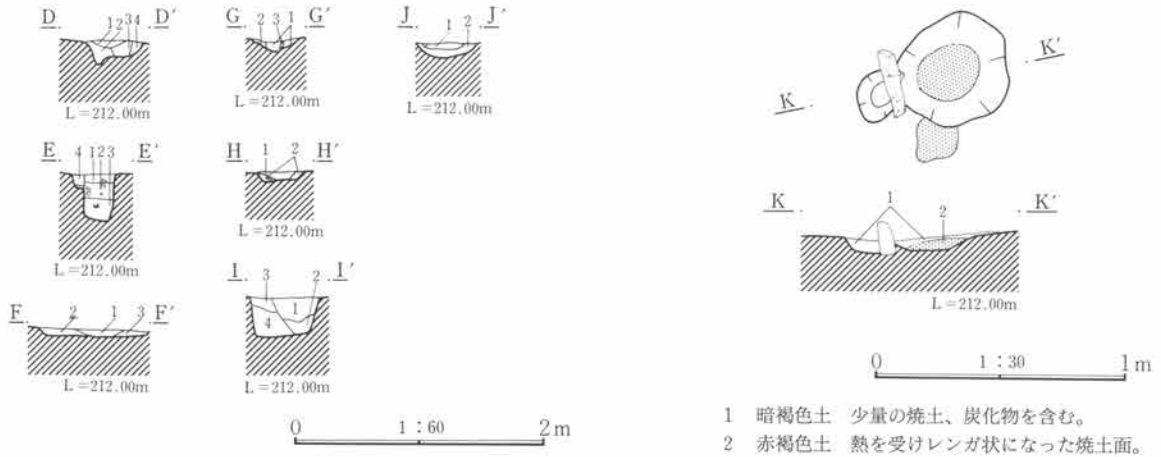


第154図 115号住居跡(1)



第155図 115号住居跡(2)

第3章 検出された遺構と遺物



P1

- 1 暗褐色土 黄色砂粒、少量の白・黄色粒・風化礫を含む。粘性なく、しまりあり。
- 2 暗褐色土 風化礫、少量の黄色砂粒含む。粘性・しまりともに弱い。
- 3 暗褐色土 風化礫、黄色砂粒を少量含む。粘性・しまりあり。
- 4 暗褐色土 風化礫、少量の黄色砂粒を含む。粘性・しまりあり。

P2

- 1 黒褐色土 黄色砂粒を含む。粘性なく、しまりあり。
- 2 黒褐色土 礫、少量の黄色砂粒を含む。粘性なく、しまり弱い。
- 3 黒褐色土 小礫を含む。粘性・しまりともに弱い。
- 4 暗褐色土 礫を多く含む。粘性なく、しまりあり。

P3

- 1 黒褐色土 白・黄色粒、風化礫、少量の焼土粒を含む。粘性なく、しまりあり。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒を含む。粘性なく、しまりあり。
- 3 黒褐色土 風化礫、少量の焼土粒を含む。下部は焼土となっている。粘性なく、しまりあり。

P4

- 1 黒褐色土 黄色粒を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
- 2 黒褐色土 第1層に近似、しまりは弱い。
- 3 暗褐色土 白色粒を含む。粘性・しまりともに弱い。

P5

- 1 黒褐色土 黄色粒を含む。粘性弱く、しまりあり。
- 2 暗褐色土 第1層に近似する。

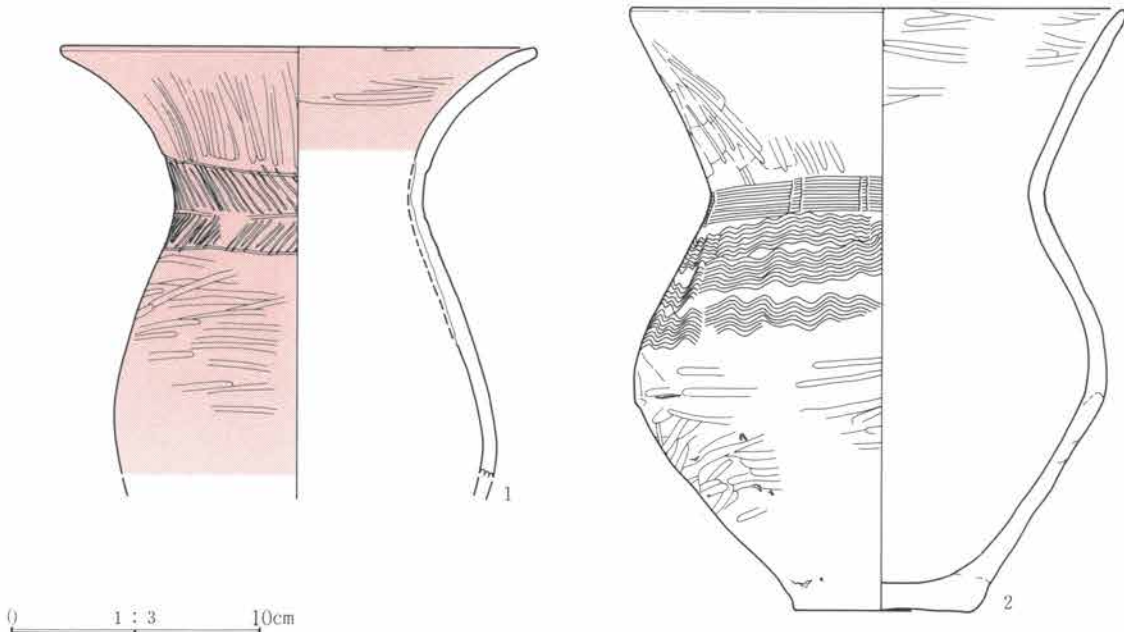
P6

- 1 暗黄褐色土 礫、黄色粒、地山土を含む。粘性・しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 砂質。粘性あり、しまり弱い。
- 3 黒褐色土 小礫を含む。やや砂質。粘性弱く、しまりあり。
- 4 黒褐色土 礫を少量含む。粘性あり、しまり弱い。

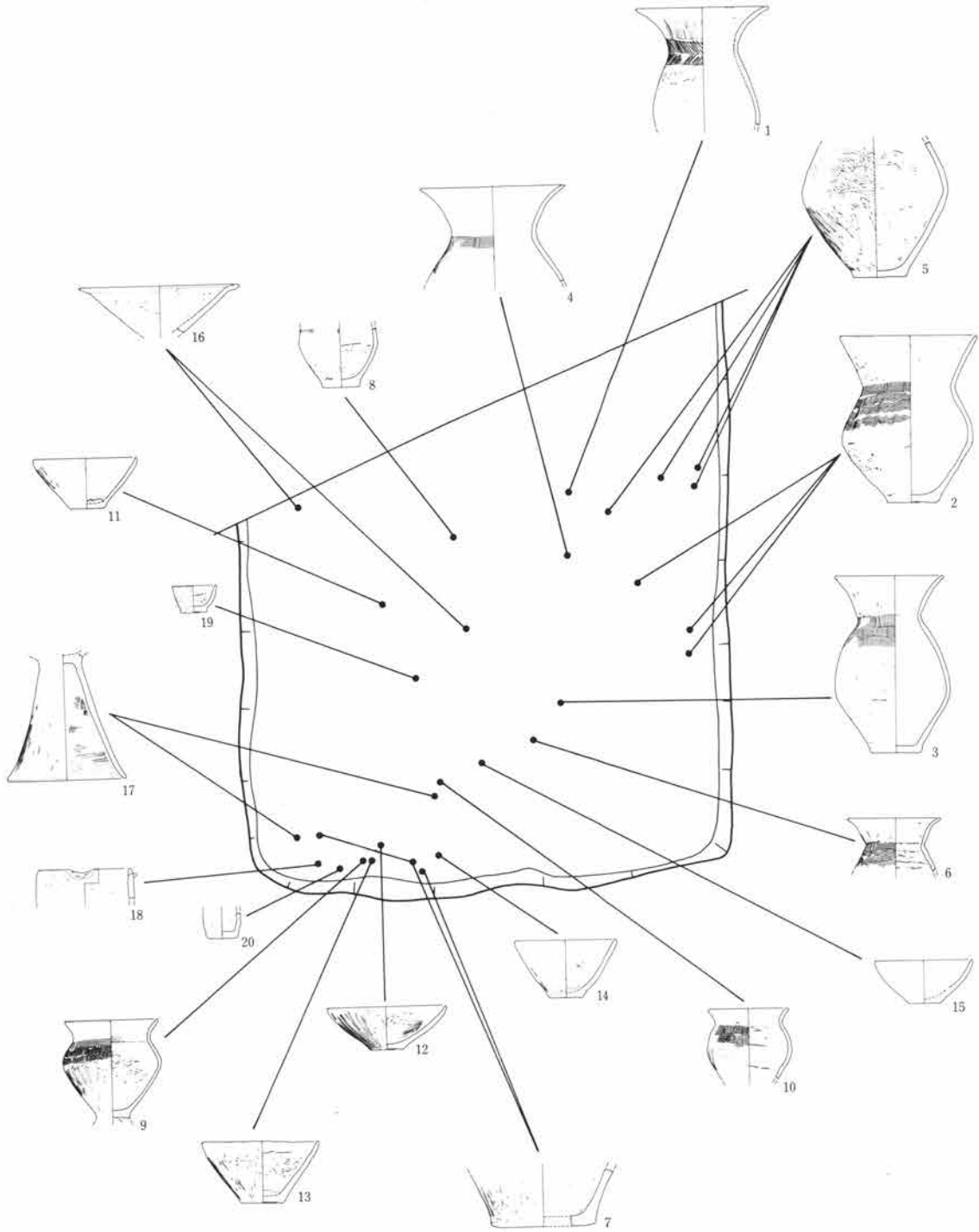
P7

- 1 暗褐色土 黄色粒、礫を含む。やや砂質。粘性弱く、しまりあり。
- 2 暗黄色土 礫を含む黄色砂層。

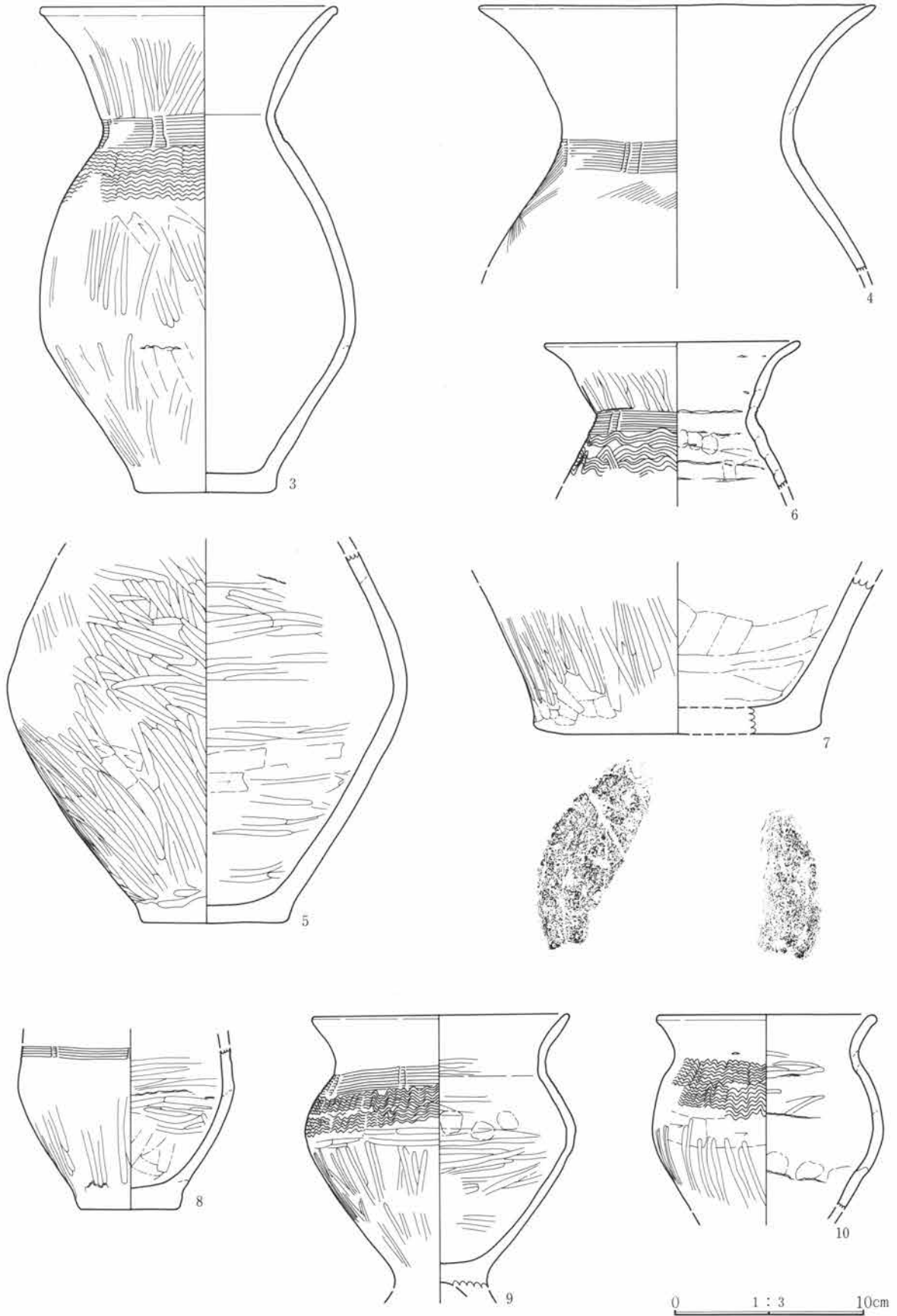
第156図 115号住居跡(3)、炉



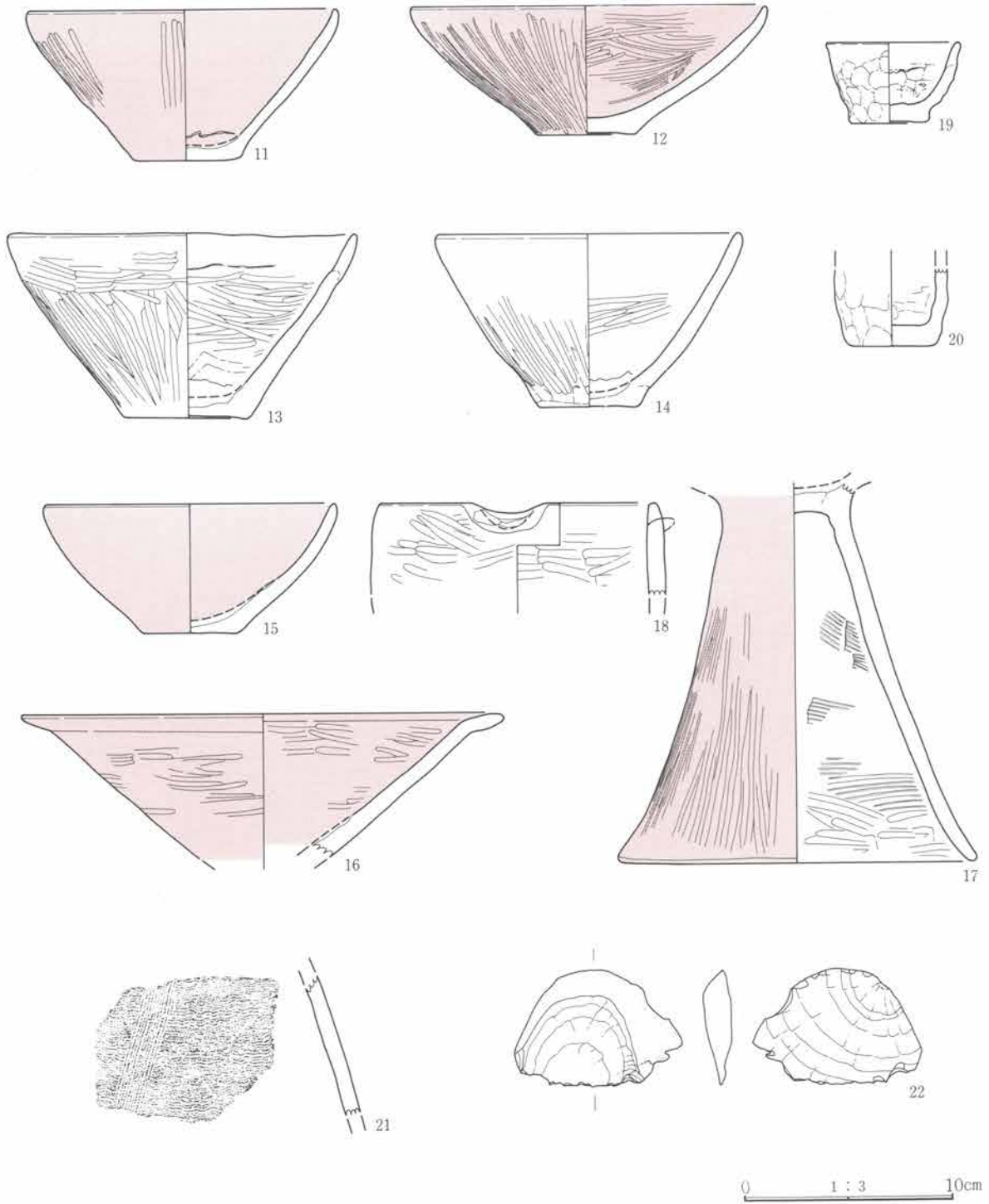
第157図 115号住居跡出土遺物実測図(1)



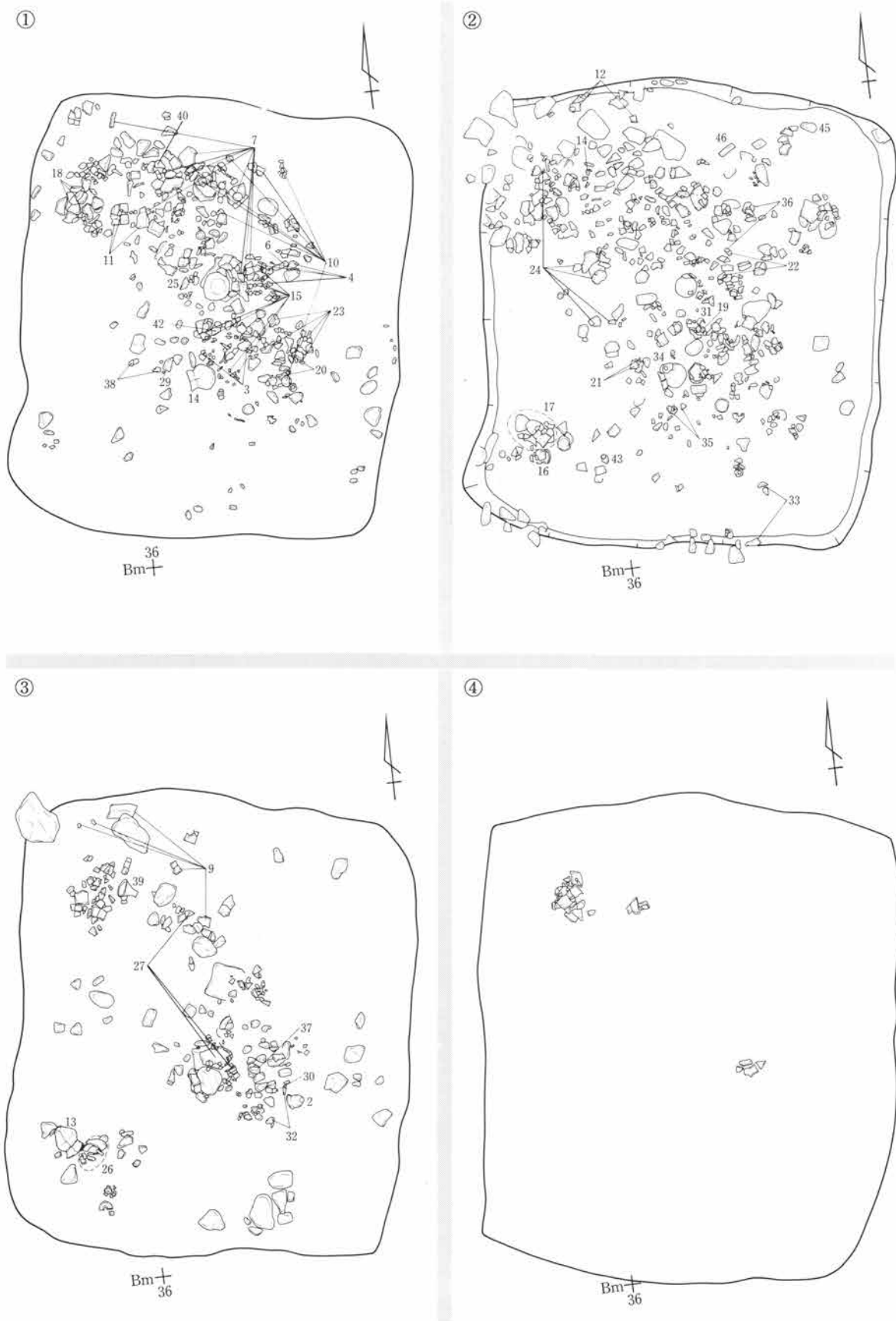
第158図 115号住居跡個体別遺物出土状況図



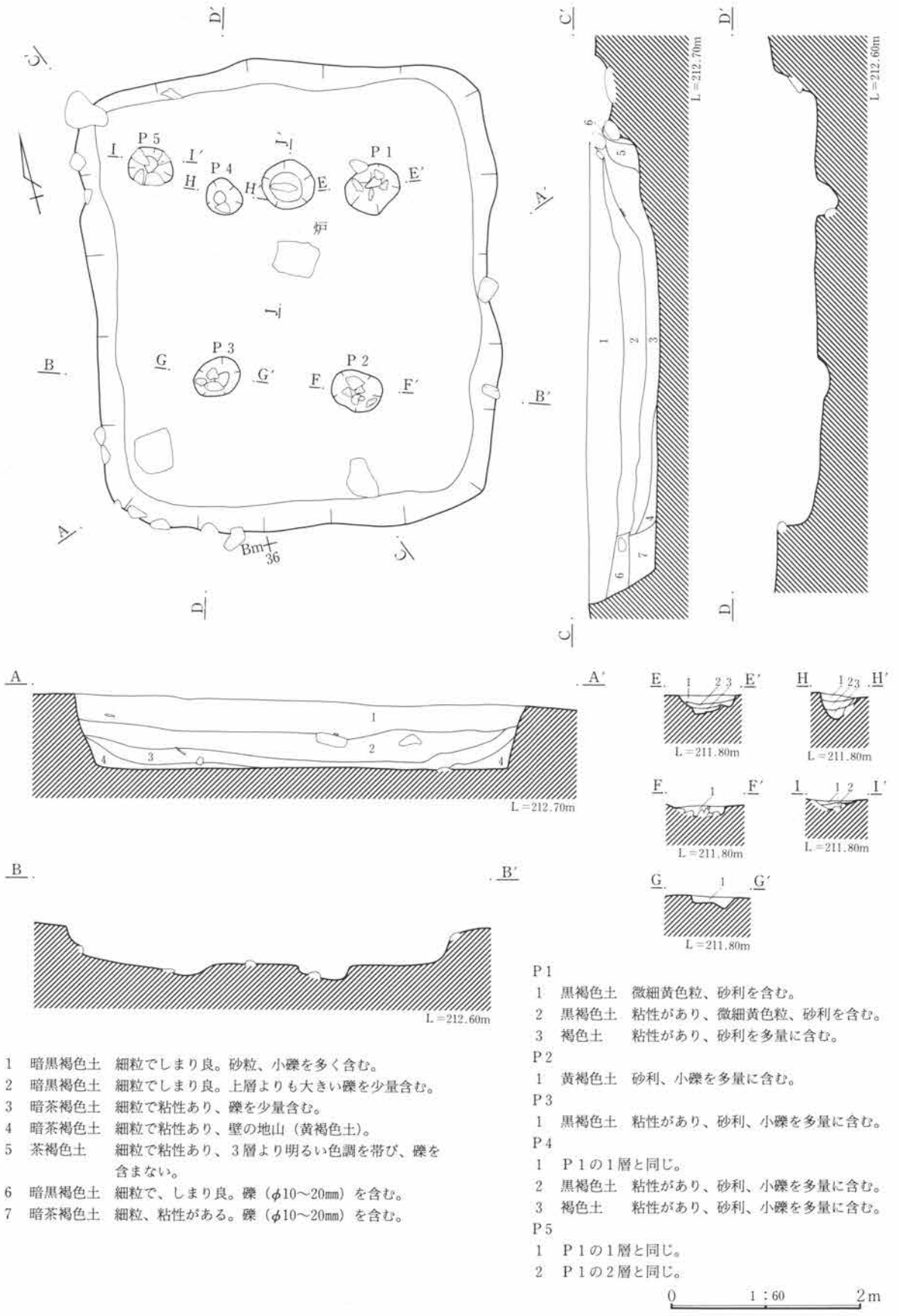
第159図 115号住居跡出土遺物実測図（2）



第160図 115号住居跡出土遺物実測図(3)



第161図 116号住居跡 (1)



- 1 暗黒褐色土 細粒でしまり良。砂粒、小礫を多く含む。
- 2 暗黒褐色土 細粒でしまり良。上層よりも大きい礫を少量含む。
- 3 暗茶褐色土 細粒で粘性あり、礫を少量含む。
- 4 暗茶褐色土 細粒で粘性あり、壁の地山(黄褐色土)。
- 5 茶褐色土 細粒で粘性あり、3層より明るい色調を帯び、礫を含まない。
- 6 暗黒褐色土 細粒で、しまり良。礫(φ10~20mm)を含む。
- 7 暗茶褐色土 細粒、粘性がある。礫(φ10~20mm)を含む。

- P1
 - 1 黒褐色土 微細黄色粒、砂利を含む。
 - 2 黒褐色土 粘性があり、微細黄色粒、砂利を含む。
 - 3 褐色土 粘性があり、砂利を多量に含む。
- P2
 - 1 黄褐色土 砂利、小礫を多量に含む。
- P3
 - 1 黒褐色土 粘性があり、砂利、小礫を多量に含む。
- P4
 - 1 P1の1層と同じ。
 - 2 黒褐色土 粘性があり、砂利、小礫を多量に含む。
 - 3 褐色土 粘性があり、砂利、小礫を多量に含む。
- P5
 - 1 P1の1層と同じ。
 - 2 P1の2層と同じ。

0 1:60 2m

第162図 116号住居跡(2)

第3章 検出された遺構と遺物

B-116号住居跡 (第161~171図、P L 34・35・59~61)

位置 Bm・Bn-35・36グリッド 床面積 16.06m² 主軸方位 N-10°-W

重複 住居上部で123号住と重複、本住居が先行する。

壁 周壁は全周を検出することができた。立ち上がりはやや不明瞭であるが、外傾気味に立ち上がり、残存壁高は73cmを測ることができる。礫層を壁土としている。

形状と規模 隅丸方形に近い隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.76m、短軸4.20mを測ることができる。

床面 地山の礫が露出しており、住居の南西部は特に凹凸が目立つ。

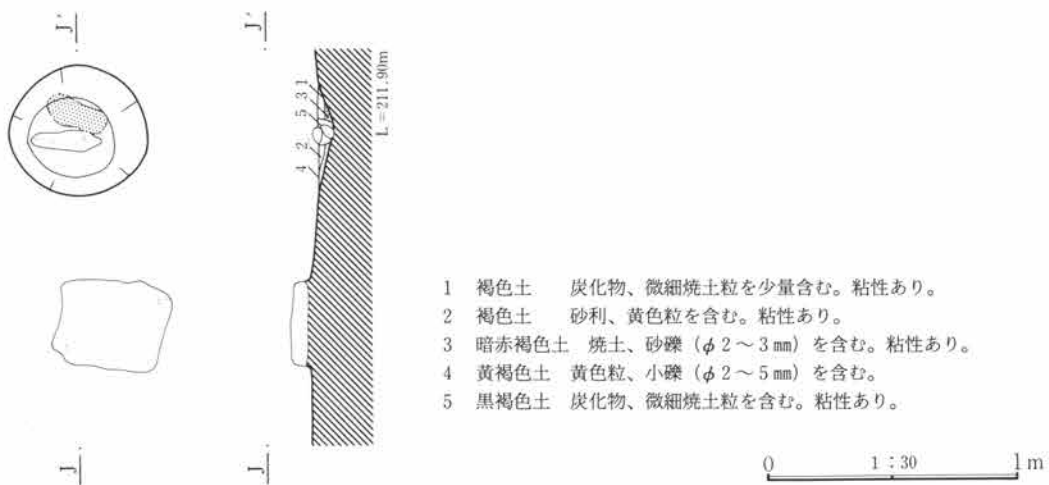
炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴(P1・P4)間にあり、炉石を据える形態である。長軸50cm、短軸47cm、深さ6cm程の楕円形の掘り込みを有し、炉石の北側には24cm×12cmの小規模な焼土面が検出できた。

柱穴 P1~P4が支柱穴になると思われるが、P2・P3は掘り込みが浅く不明瞭である。

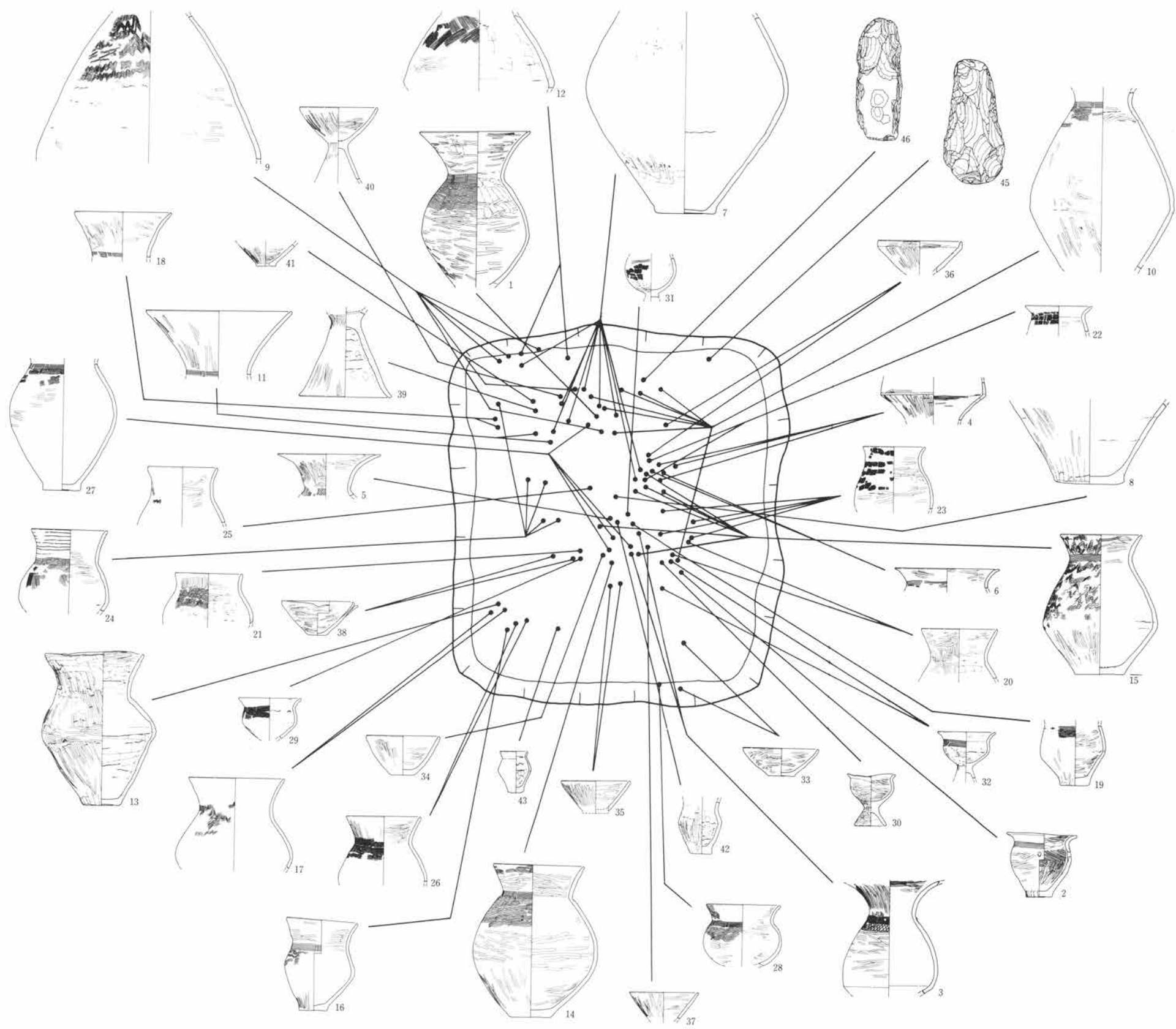
No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
上端長径	59cm	54cm	50cm	40cm	49cm
下端長径	19cm	—	18cm	13cm	18cm
深 さ	20cm	12cm	12cm	24cm	9cm

出土遺物 住居のほぼ全面から多量の遺物が出土しているが、住居中央部から北西隅にかけて集中する傾向が認められる。しかし、床面遺物は極めて少なく、覆土中からの出土がほとんどである。遺物は覆土中層から下層にかけて何層にも積み重なって出土しており、土器廃棄場の様相を呈する。図化可能な遺物も非常に多く、壺12点(1~12)、甕15点(13~27)、台付甕5点(28~32)、鉢5点(33~37)、片口1点(38)、高坏2点(39・40)、甑1点(41)、ミニチュア壺2点(42・43)、石鍬2点(45・46)、器種不明遺物1点(44)、総点数46点を図化することができた。壺(3)は頸部簾状文、胴上位に斜格子文を有する赤彩土器で、胴下位に外稜をもって鋭くくびれる形態であり、箱清水式の外来系土器と考えられる。甕(22)は原体LRLの縦位施文の斜縄文、甕(23)は原体LRと原体RLの不規則な羽状縄文、台付甕(31)は原体LRLの縄文を施文した赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器である。甕(24)は口縁部に粘土帯接合痕を残し、胴上位に楕円横羽状文を施文した赤井戸、吉ヶ谷式と佐久型の箱清水式両方の影響が認められる。

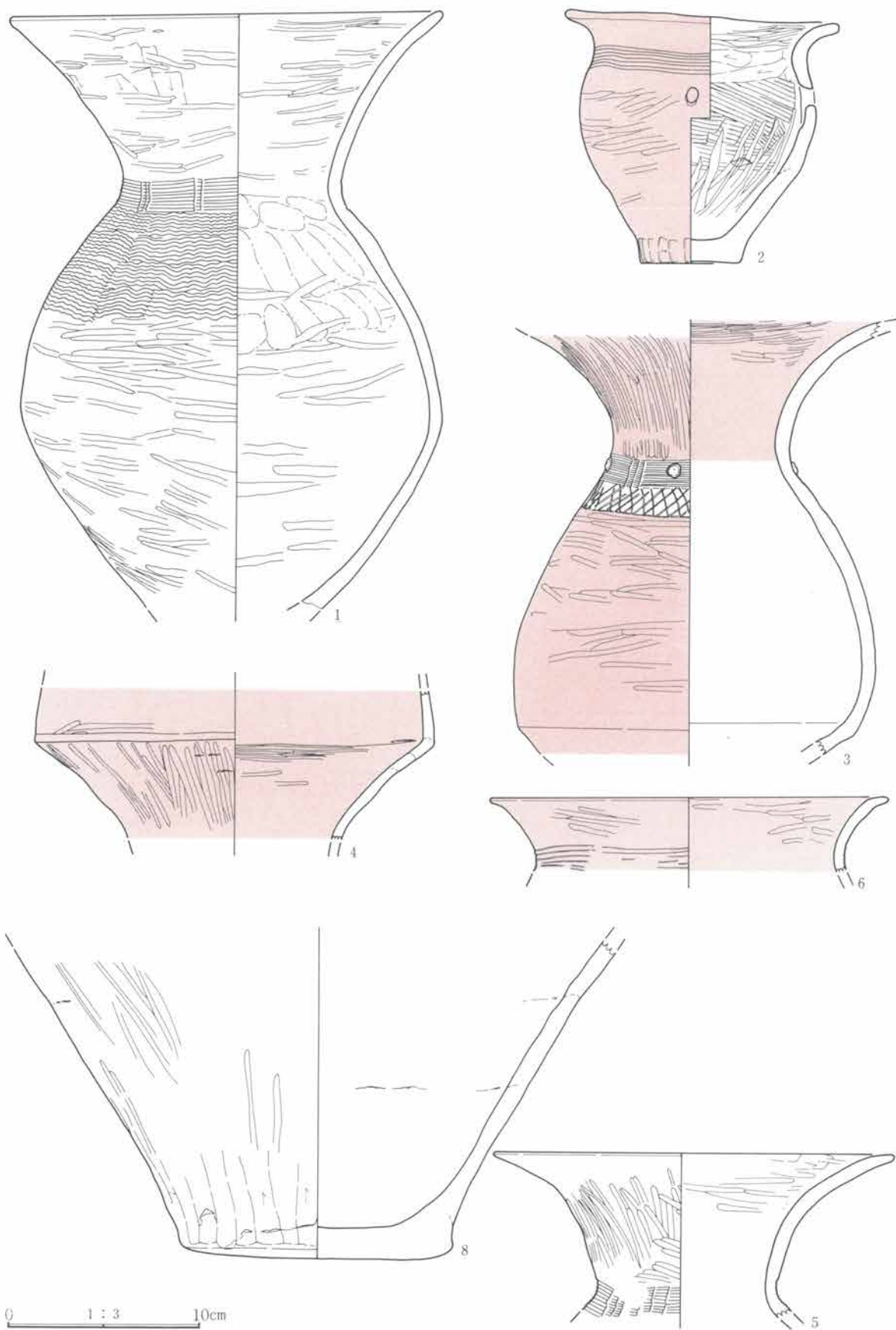
時期 弥生時代後期の住居跡と考えられる。



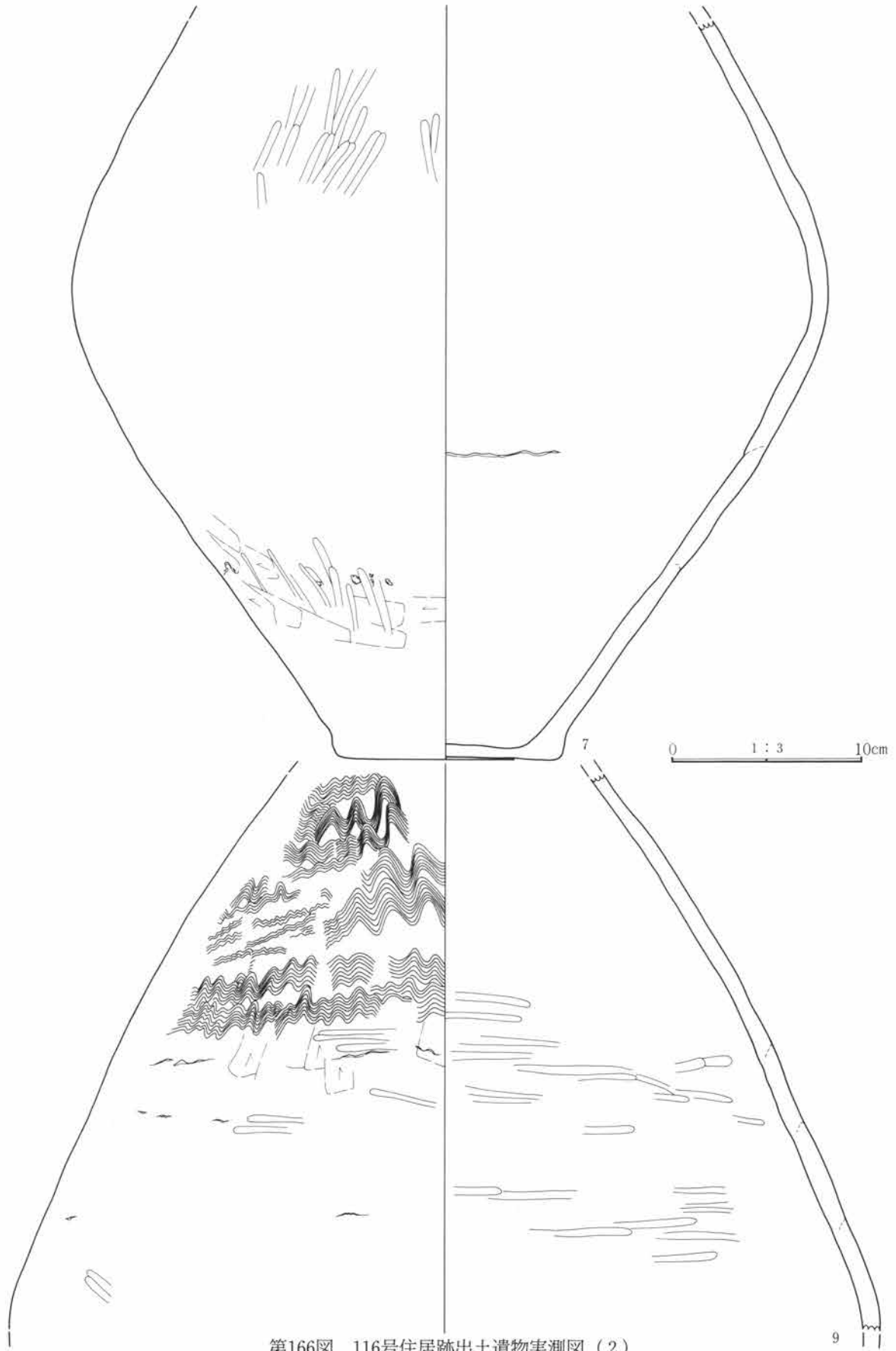
第163図 116号住居跡炉



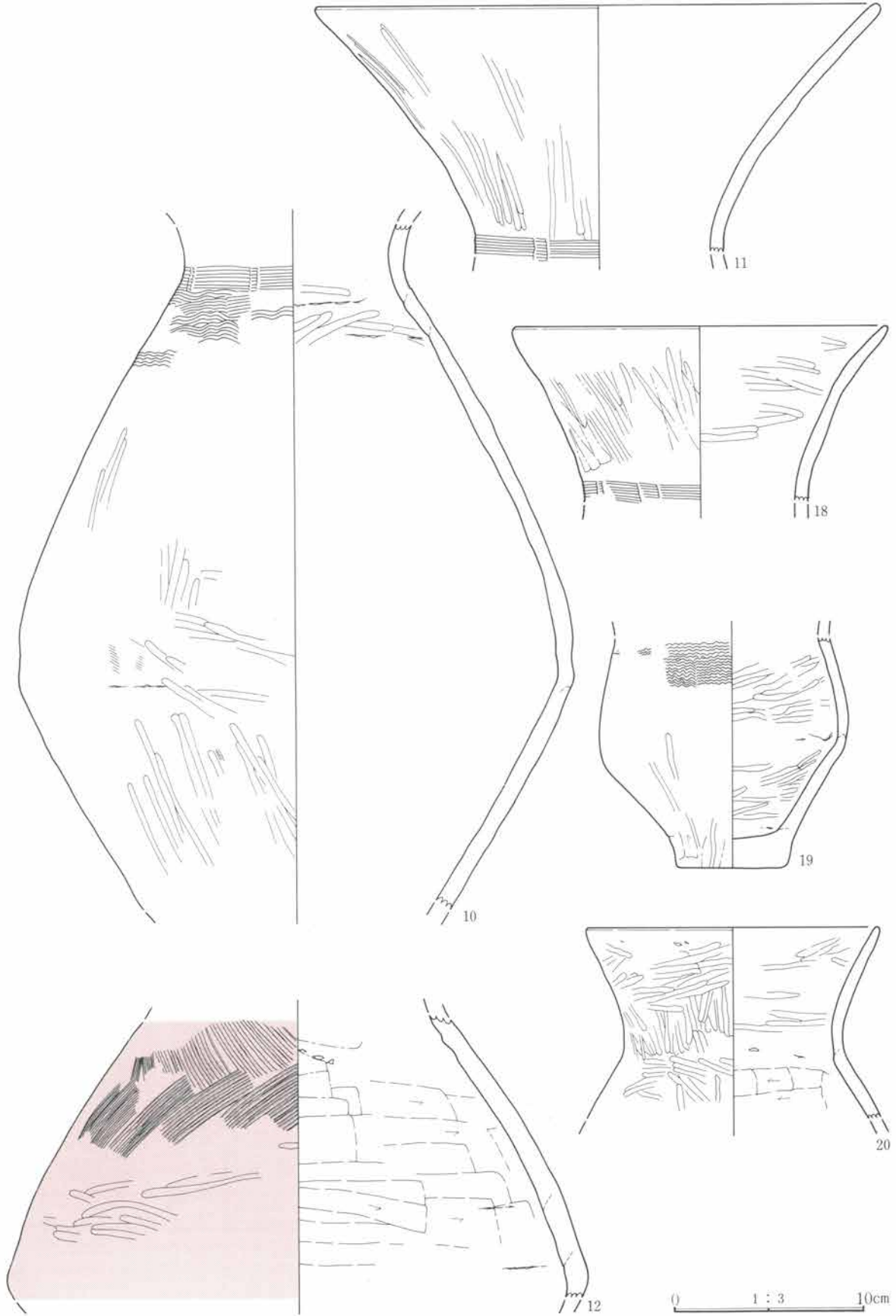
第164图 116号住居跡个体別遺物出土状況图



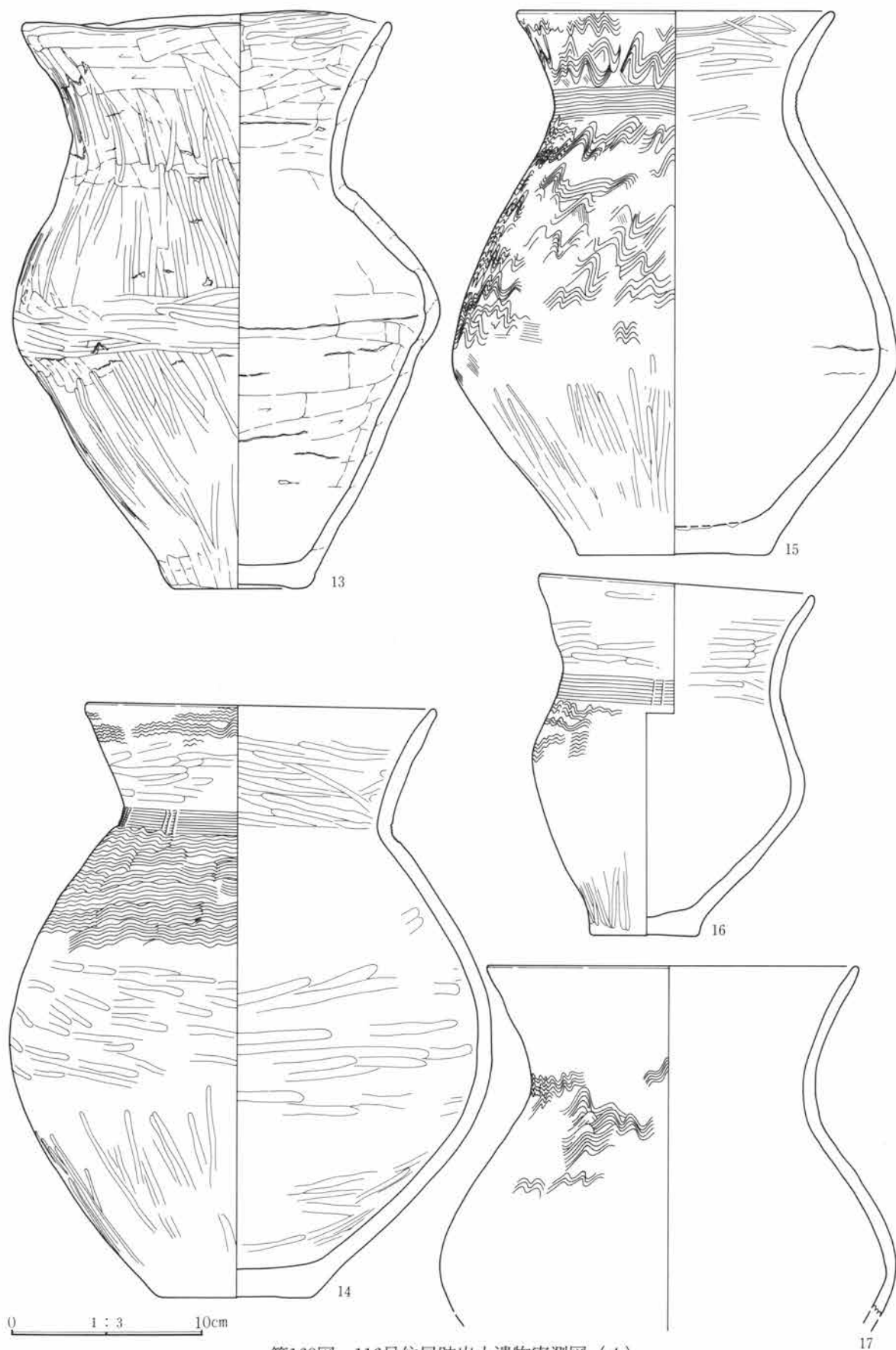
第165図 116号住居跡出土遺物実測図(1)



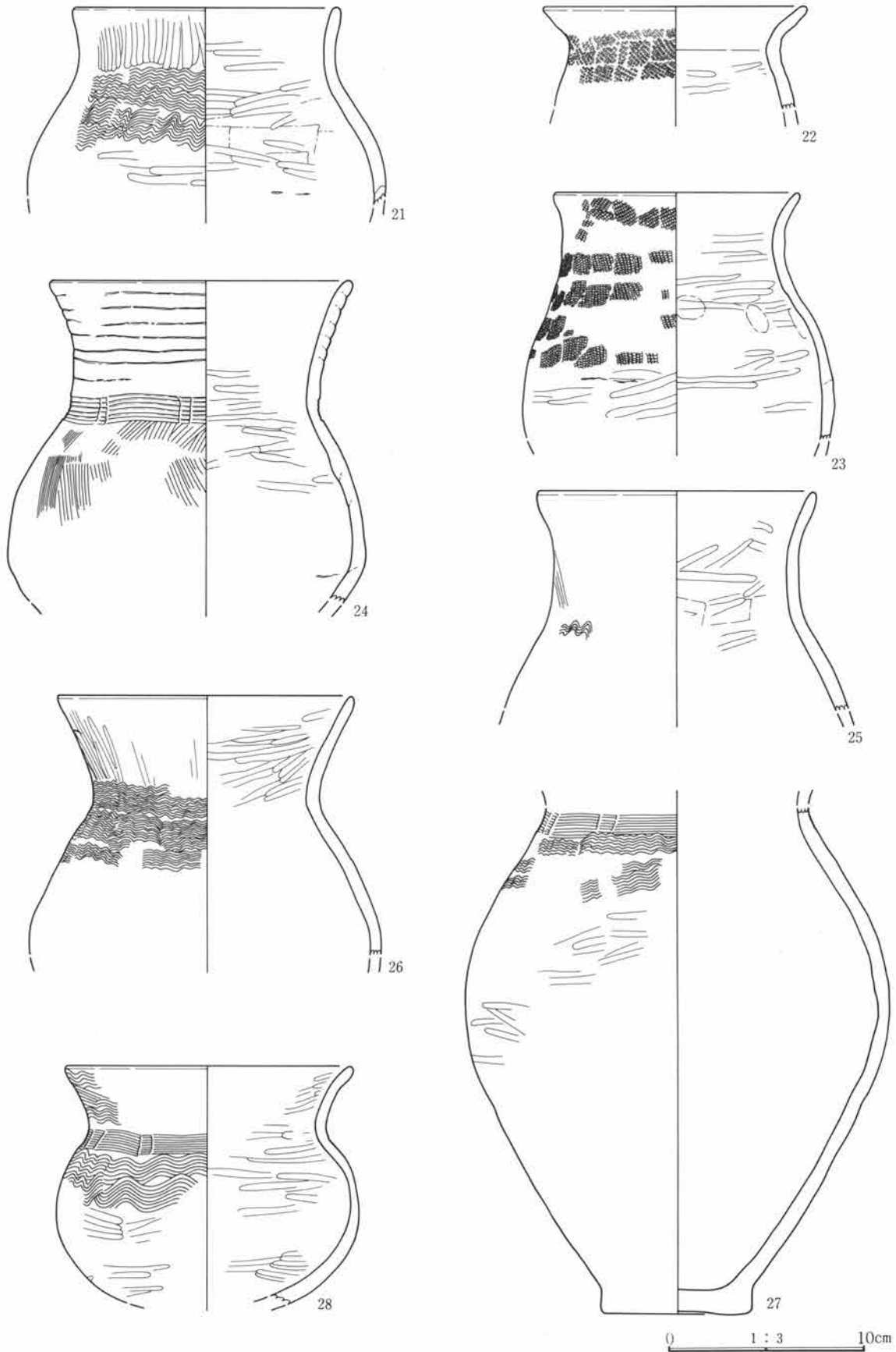
第166図 116号住居跡出土遺物実測図(2)



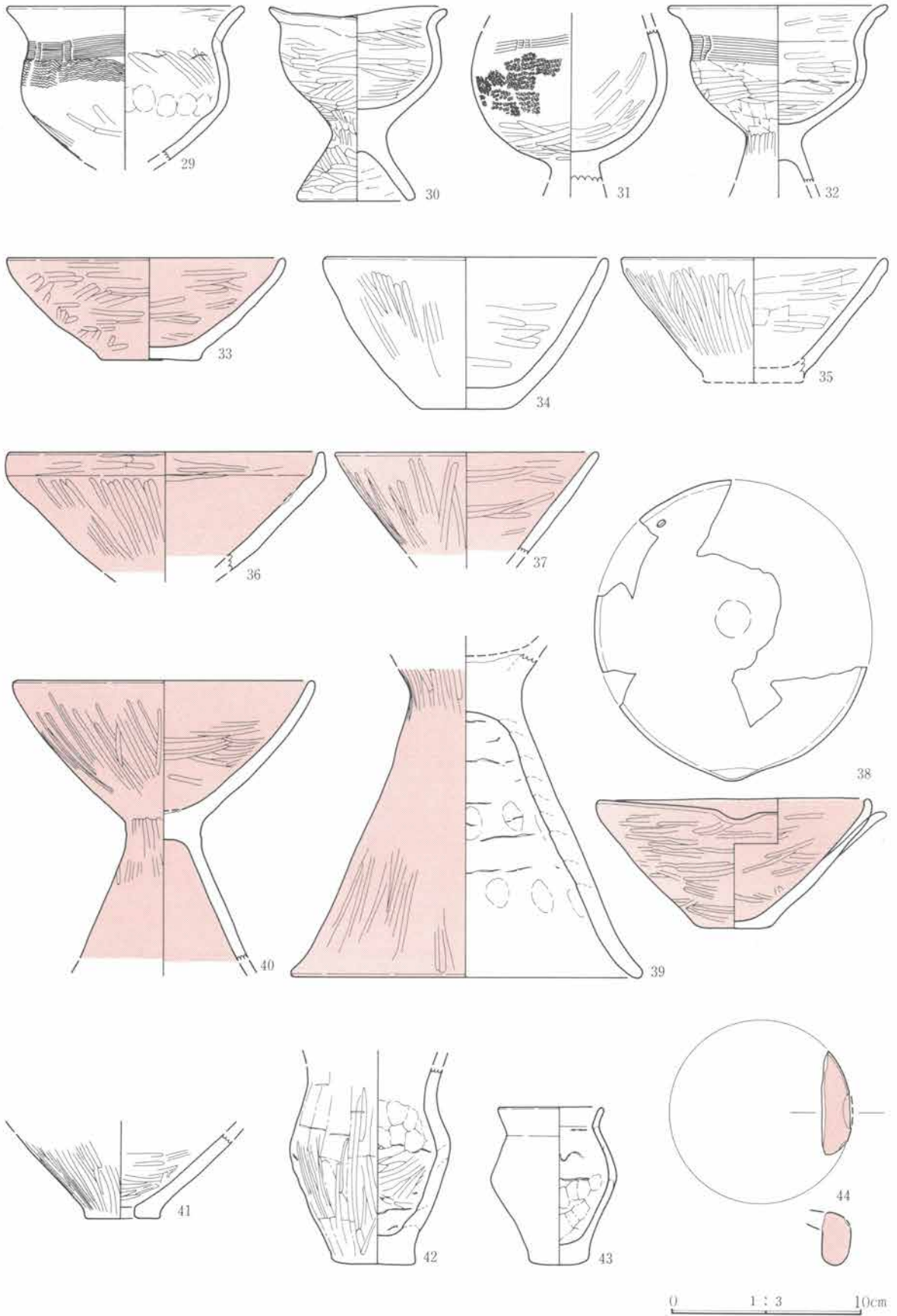
第167図 116号住居跡出土遺物実測図(3)



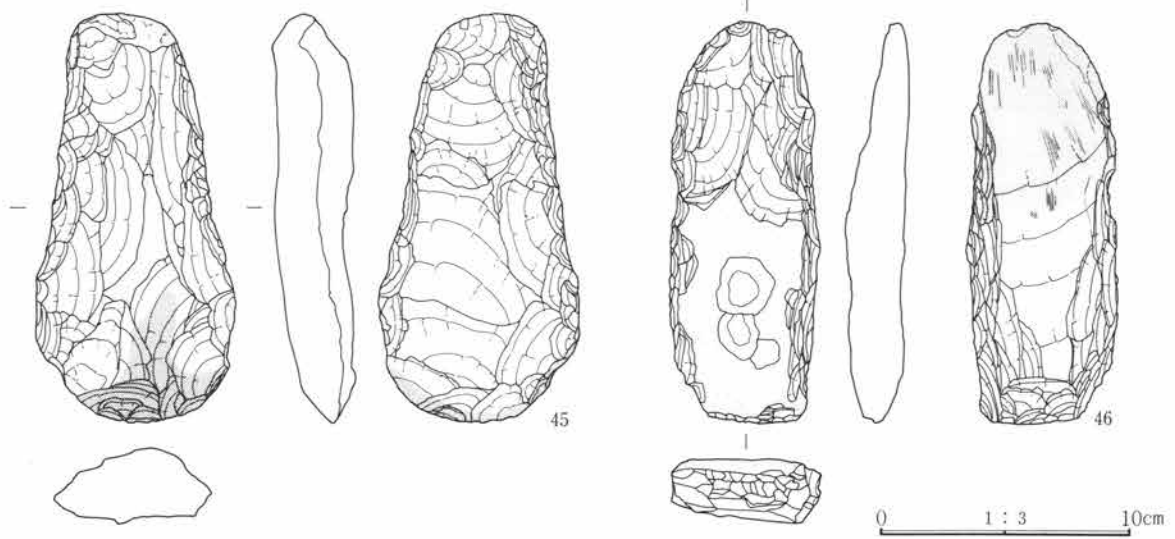
第168図 116号住居跡出土遺物実測図(4)



第169図 116号住居跡出土遺物実測図(5)



第170図 116号住居跡出土遺物実測図(6)



第171図 116号住居跡出土遺物実測図(7)

B-118号住居跡 (第172・173図、P L35・62)

位置 Bo-39グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能

重複 なし、住居の大半は調査区外である。

壁 調査範囲が大変少なく、検出できた周壁はごく一部に過ぎない。残存壁高は75cmを測ることができる。

壁土は上層より小礫混じりの暗茶褐色土、黄色の砂利層が観察できる。

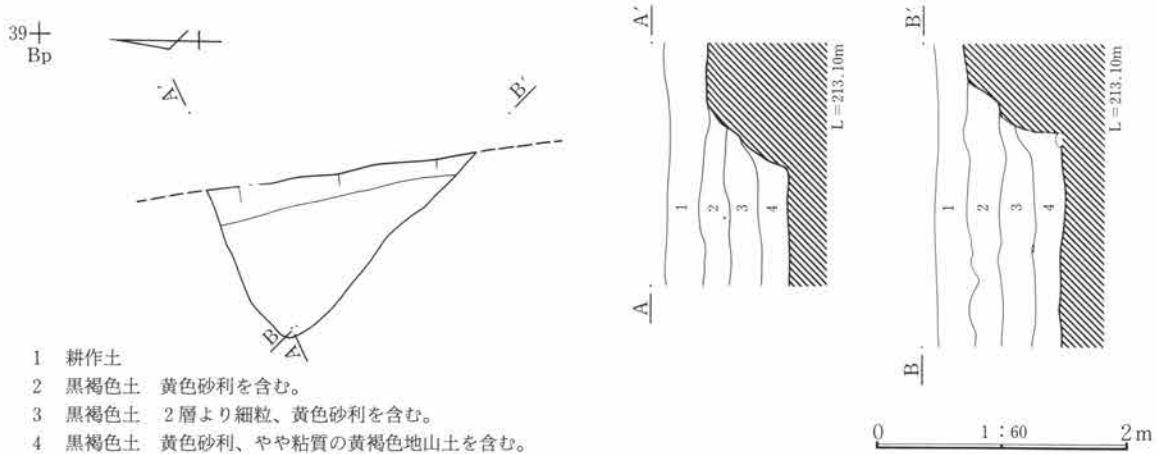
形状と規模 調査範囲が住居のごく一部であるため、形状、規模ともに詳細は不明である。

床面 検出面が少なく詳細は不明である。

炉跡 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

出土遺物 出土遺物は極めて少ない。覆土上層より出土した鉢1点(1)、甕の頸部片1点(2)を図化したに過ぎない。

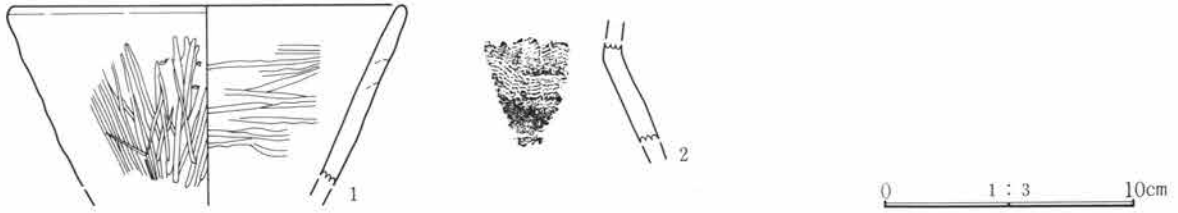
時期 調査範囲が極めて少なく、形状・規模・住居内の施設等いずれも不明であり詳細を把握することはできない。遺物も覆土中の数点のみであるため時期を限定するのは大変難しい。遺物の破片中に波状文施文の土器が含まれることから弥生時代後期の住居跡と推定される。



- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 黄色砂利を含む。
- 3 黒褐色土 2層より細粒、黄色砂利を含む。
- 4 黒褐色土 黄色砂利、やや粘質の黄褐色地山土を含む。

第172図 118号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第173図 118号住居跡出土遺物実測図

B-132号住居跡 (第174~176図、P L 36・62)

位置 Be・Bf-28・29グリッド 床面積 測定不能 主軸方位 測定不能

重複 141号住と重複か?

壁 明確な立ち上がりは確認できなかった。

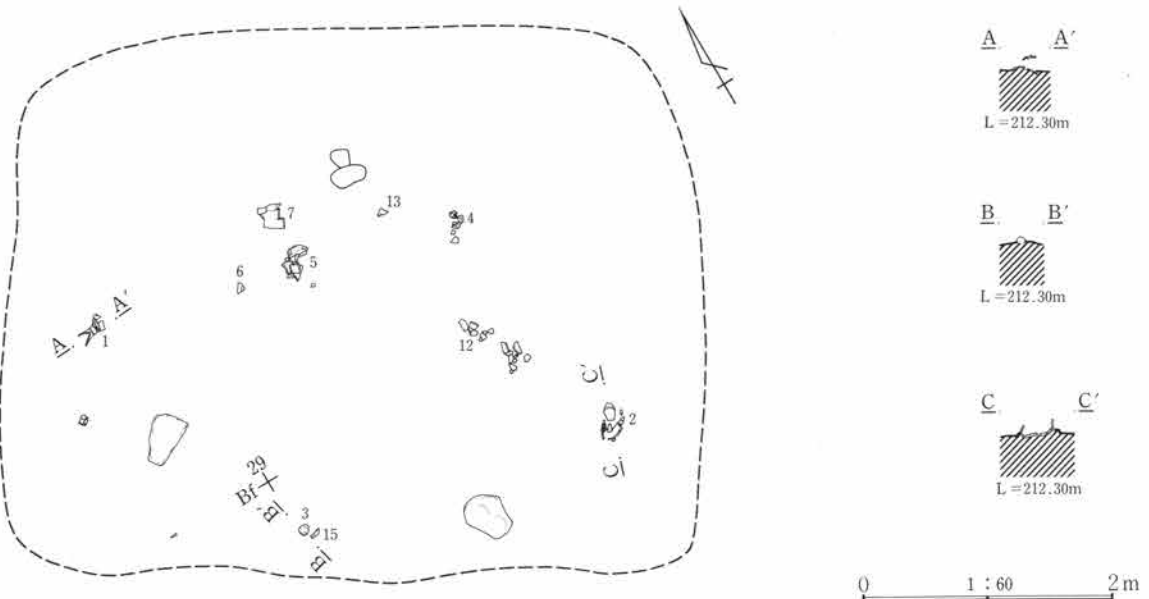
形状と規模 調査当初から住居の輪郭が認定できず、形状、規模ともに不明である。破線は遺物の分布状況をもとにした推定線である。

床面 住居の範囲が不明瞭で床面の認定も明確ではないが、調査時には遺物検出面を床面としている。所々に地山の小礫が露出しており、僅かに凹凸が認められる。

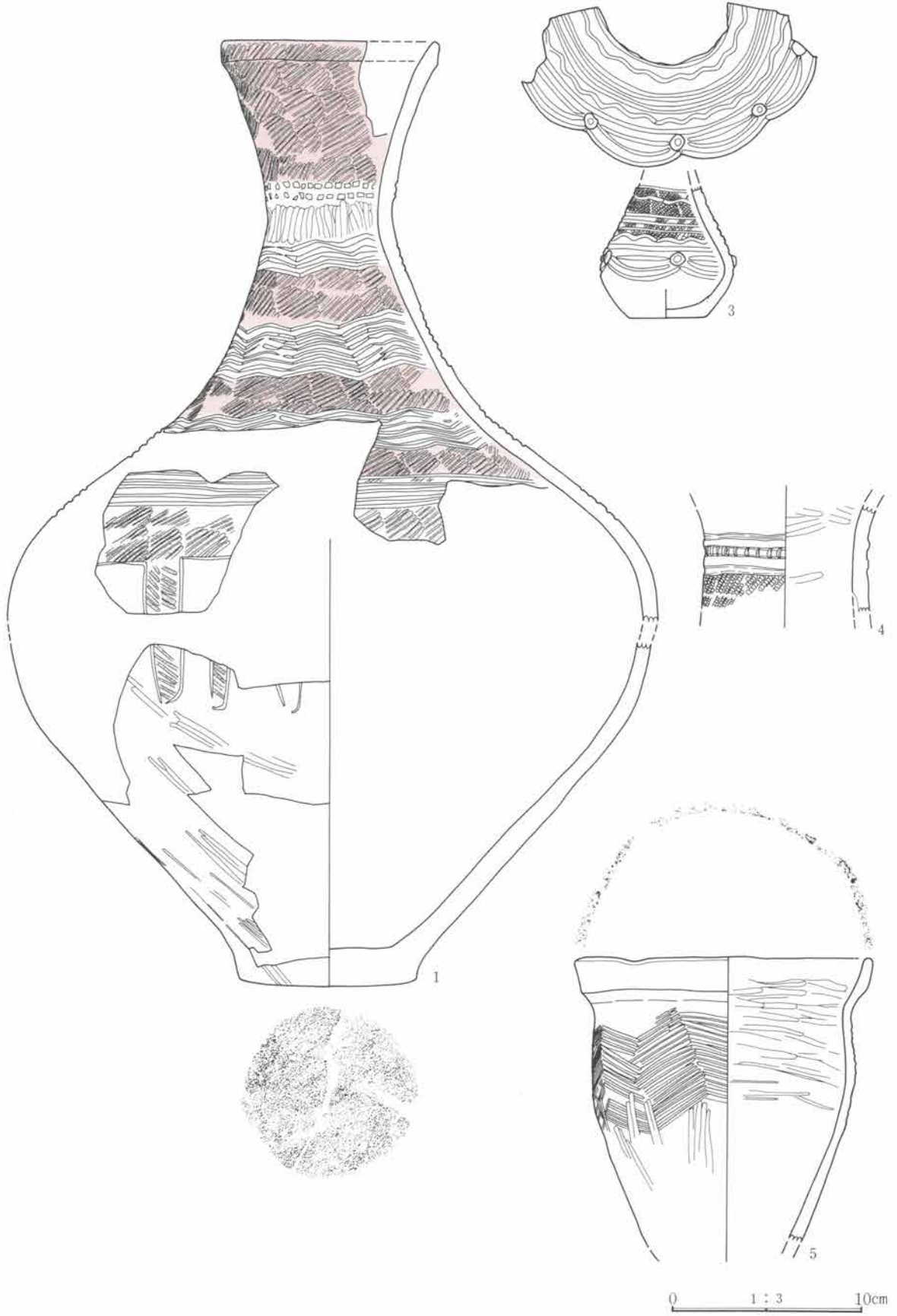
炉跡 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。

出土遺物 床面直上より壺4点(1~4)、甕5点(5~7・12・13)、二次加工のある剥片1点(15)が、覆土中より甕の口縁部片3点(8~10)、壺の胴部片1点(11)が出土している。壺(1)は胴部が大きく張り、細い筒状の頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、器形的には阿島式あるいは須和田式土器に類似している。文様は原体Lの縄文を地文として、口縁から胴部にかけて刺突文、ヘラ描連続山形文、ヘラ描平行沈線文、舌状文を隔なく施した細頸壺である。平行沈線より上の縄文部分には赤色塗彩が施されている。他の土器と異なり、器形にも文様構成にも古い要素が見られることから本遺構に伴うものか疑問が残る。

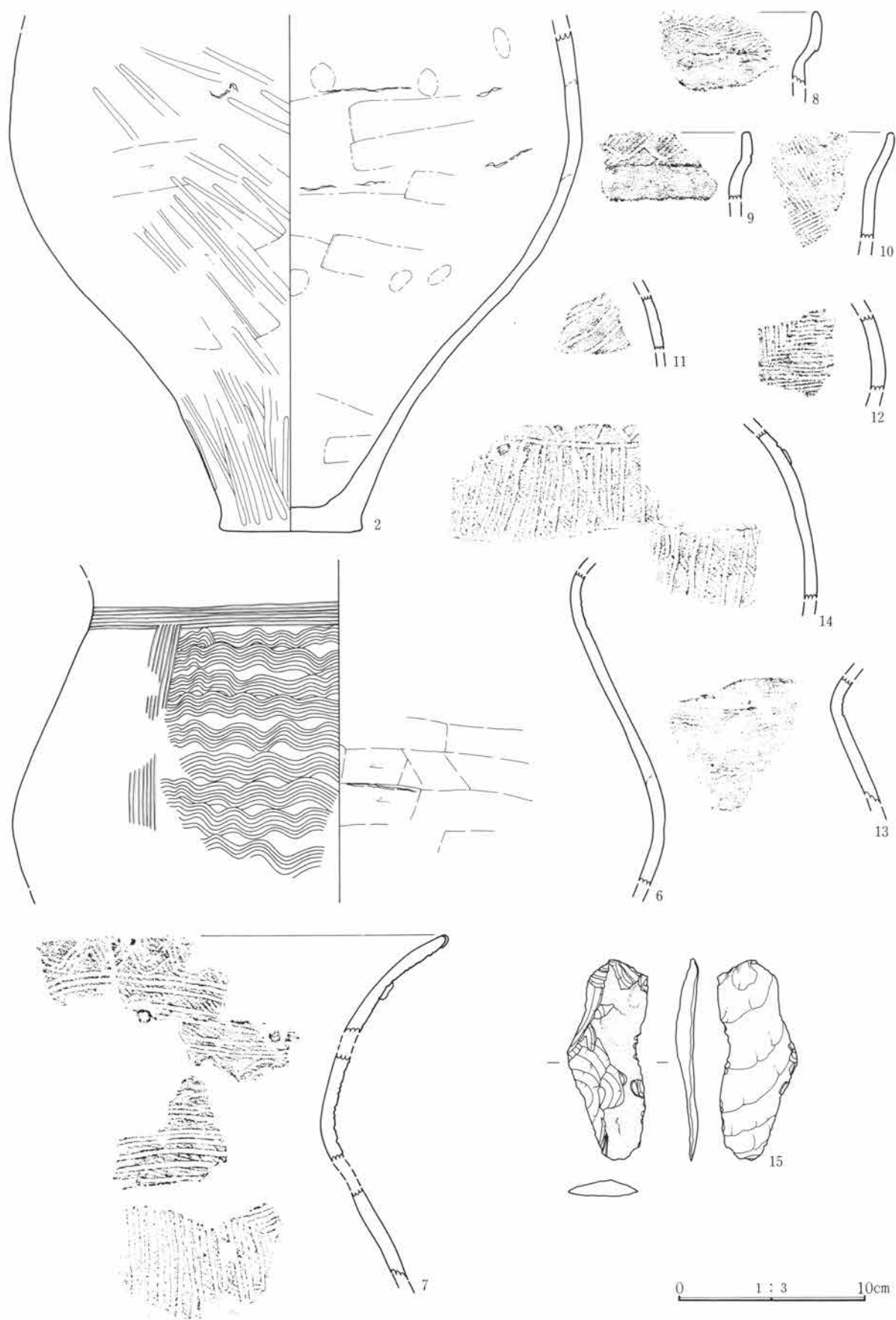
時期 出土遺物から弥生時代中期後半の住居跡と考えられる。



第174図 132号住居跡



第175図 132号住居跡出土遺物実測図(1)



第176図 132号住居跡出土遺物実測図(2)

B-162号住居跡 (第177~180図、P L 37・62・63)

位置 Bo-23グリッド 床面積 (20.67㎡) 主軸方位 N-19°-W

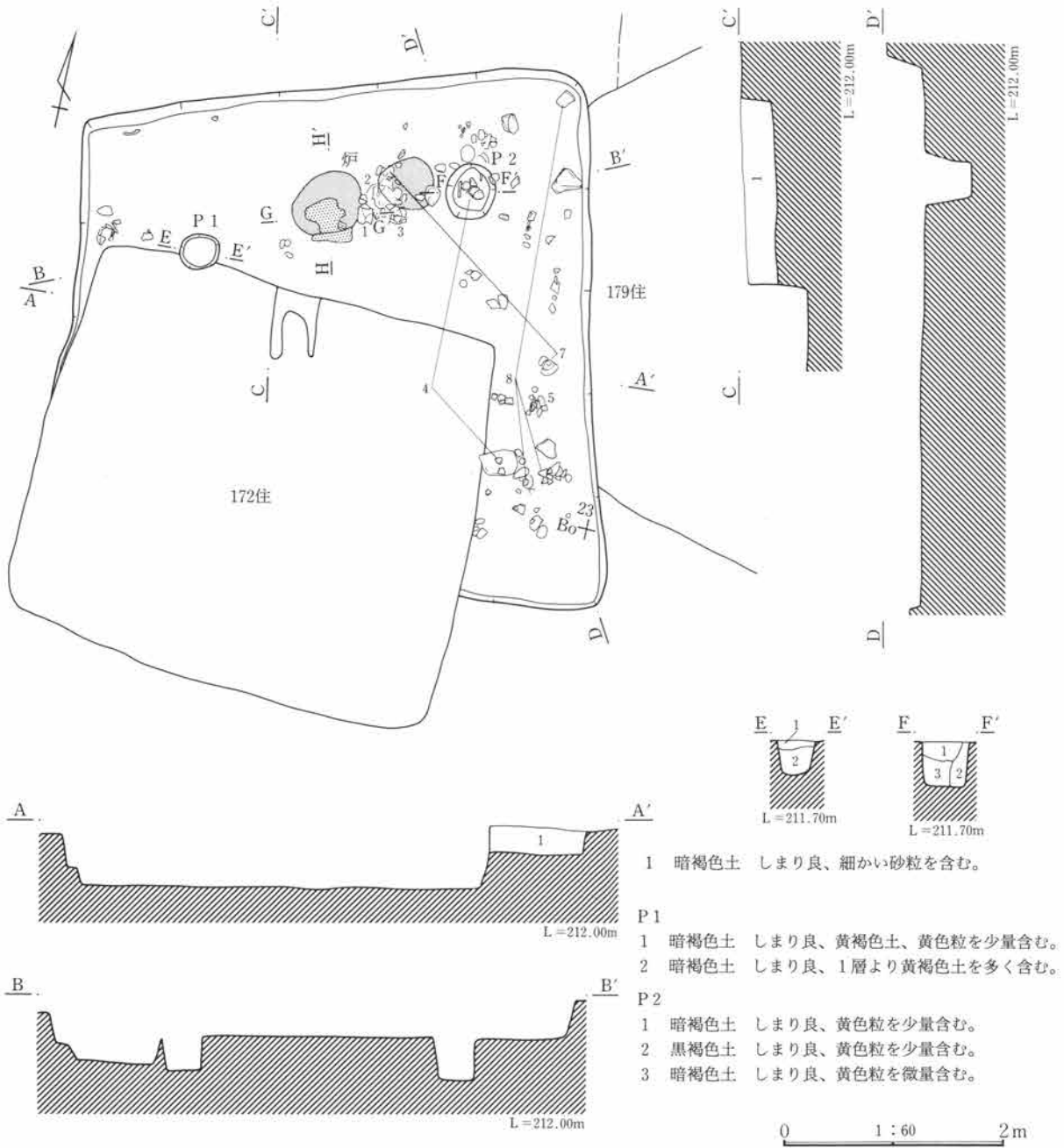
重複 172・179・184号住、17号土坑と重複。179・184号住、17号土坑に後出し、172号住に先行する。172号住に住居の大半を切られ、残存部は2分の1程である。17号土坑の上部に住居を構築している。

壁 172号住居との重複部である南周壁、西周壁の大半を失っている。残存部の検出状態も良好ではない。残存壁高は10~30cmを測ることができ、僅かに外傾して立ち上がる。粘質黄褐色土を壁土としている。

形状と規模 方形を呈する。規模は長軸4.70m、短軸4.50mを測ることができる。

床面 粘質黄褐色土を床面としており、平坦である。

炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴 (P 1・P 2) 間にある。長軸46cm、短軸37cmの不整形の焼土面



第177図 162号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

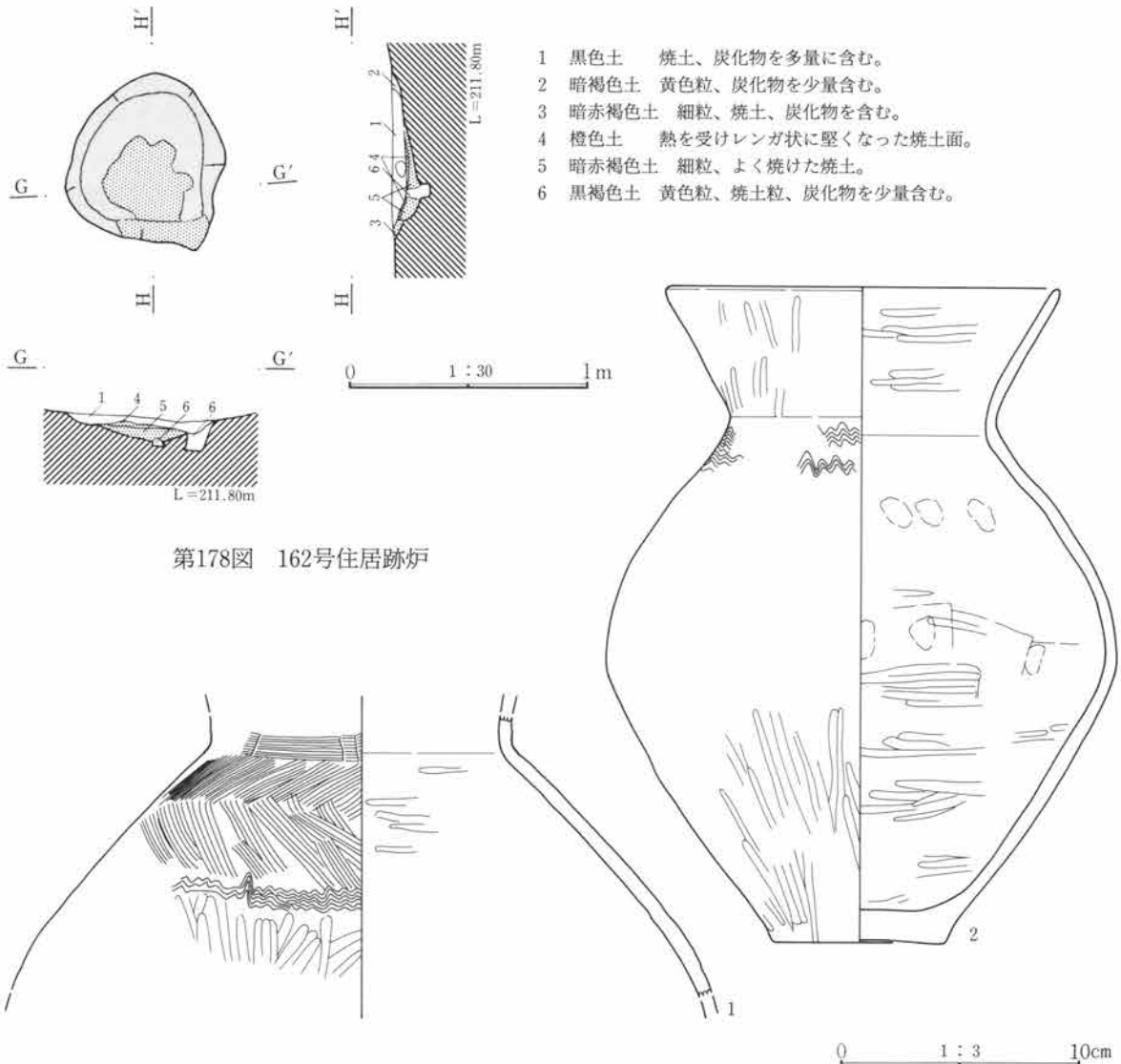
を有し、深さは最深部で16cmを測ることができる。楕円形を呈する地床炉である。焼土の周りには炭化物の広がりが認められる。炉の東側には、楕円形を呈する炭化物の広がりが検出された。

柱穴 P1・P2の2基は支柱穴になると思われる。4本柱構造になると思われるが、他の2基は172号住に切られ検出できなかった。

No.	P1	P2
上端長径	37cm	50cm
下端長径	31cm	37cm
深さ	30cm	48cm

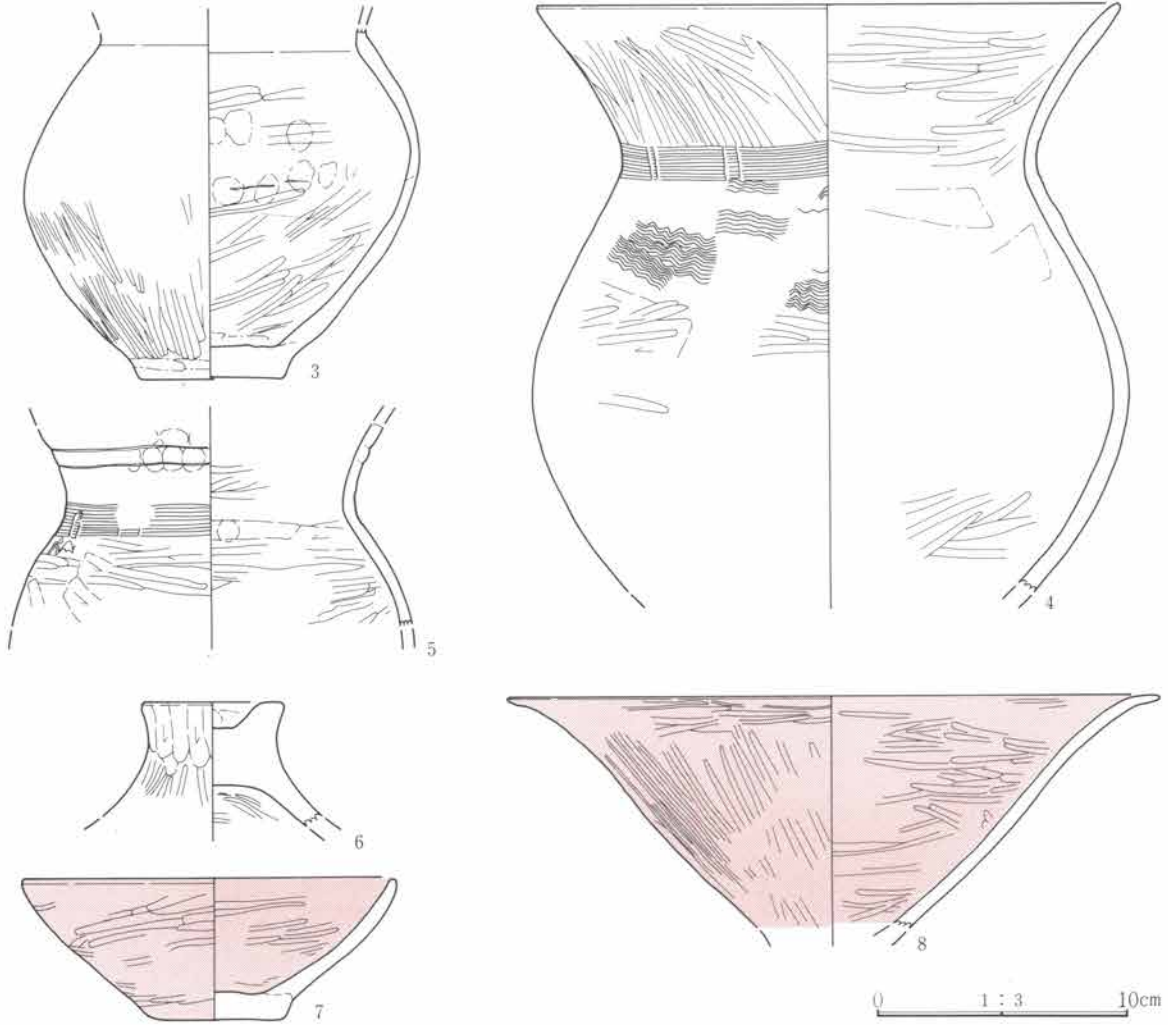
出土遺物 遺物は散在して出土している。床面及び覆土中より壺1点(1)、甕4点(2~5)、蓋1点(6)、鉢1点(7)、高坏1点(8)が出土している。壺(1)は胴上位に櫛描横羽状文を施文しており他地域からの影響が考えられる土器である。甕(5)は口縁部に粘土帯接合痕が見られ、赤井戸、吉ヶ谷式の影響が考えられる。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第178図 162号住居跡炉

第179図 162号住居跡出土遺物実測図(1)



第180図 162号住居跡出土遺物実測図(2)

B-164号住居跡 (第181~183図、P L37・38・63)

位置 Bk-23・24グリッド 床面積 17.39㎡ 主軸方位 N-17°-W

重複 北辺を163号住に切られ、南東隅の周壁上部を147号住に切られている。

壁 北周壁の大部分と東周壁の一部を163号住に、南東隅の周壁上部を147号住に切られて失っている他は良好な周壁を検出することができた。直立気味に立ち上がり、残存壁高は40cmを測ることができる。粘質黄褐色土を壁土としている。

形状と規模 北辺を他住居に切られプランは明瞭ではないが、残存部の形状から隅丸長方形と推定される。規模は長軸4.80m、短軸3.96mを測ることができる。

床面 粘質黄褐色土を床面としている。凹凸は少なく平坦である。

炉跡 炉は住居の中軸線上、北側の支柱穴(P1・P4)間にあり、炉石を据える形態の地床炉である。炉石は火を受け中央より2つに割れている。長軸60cm、短軸50cm、深さ6cmの掘り込みを有し、炉石の北側には22cm×15cmの真赤に焼け込んだ焼土面が検出できた。

貯蔵穴 住居の南東隅の南周壁下に位置し、長軸60cm、短軸48cm、深さ34cmの楕円形を呈する。最深部より土器片が数点出土している。

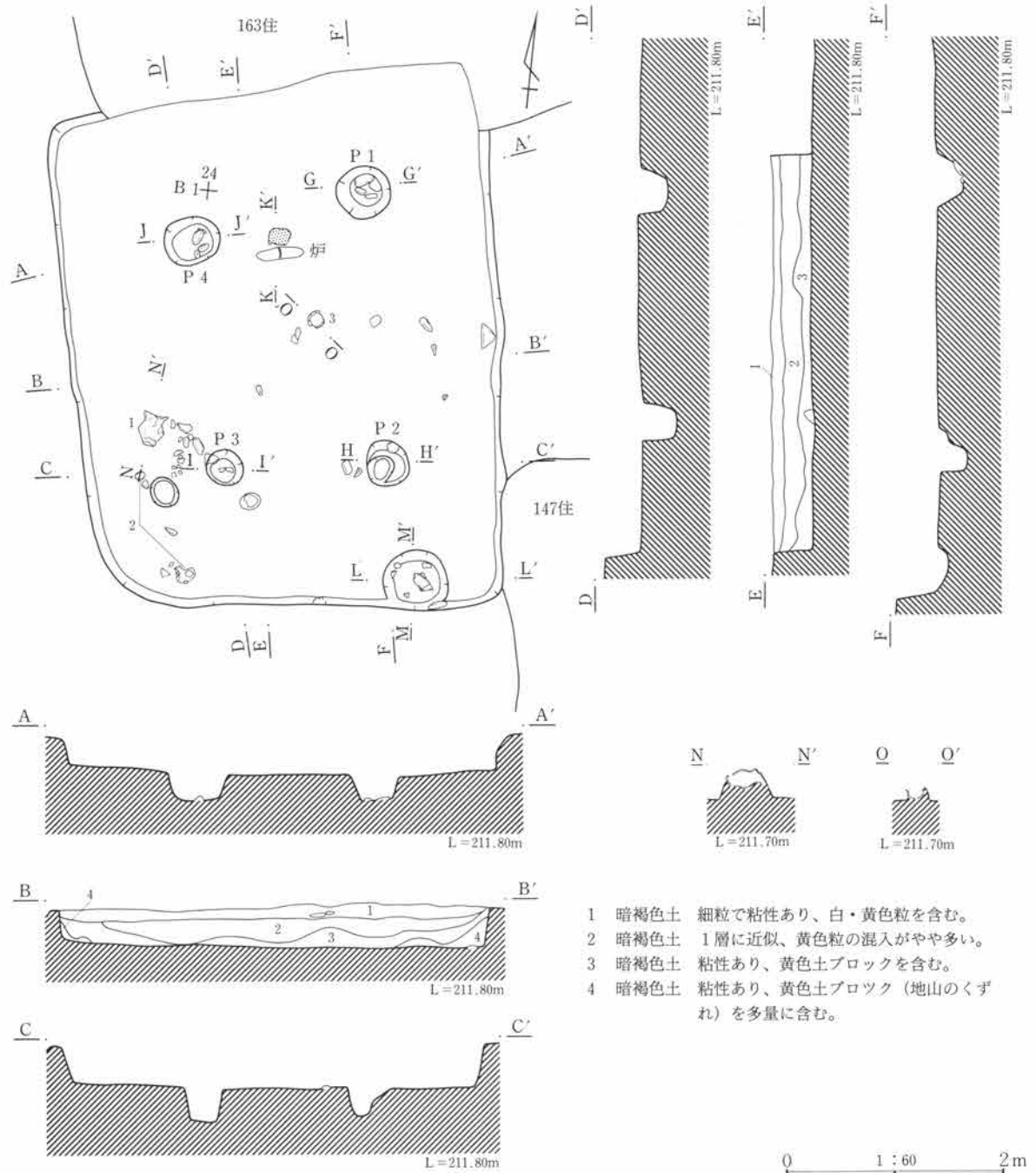
第3章 検出された遺構と遺物

柱穴 P1～P4の4基が支柱穴で、4本主柱の上屋構造が考えられる。

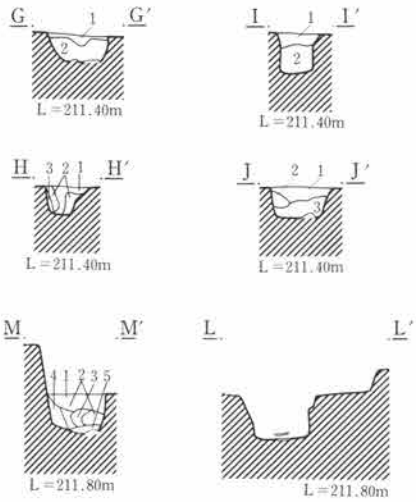
No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
上端長径	48cm	41cm	33cm	51cm	49cm
下端長径	27cm	33cm	23cm	36cm	41cm
深 さ	24cm	26cm	30cm	28cm	10cm

出土遺物 住居の南西隅に遺物が集中して出土している。甕2点（1・2）が覆土下層より出土している。また、中央部の床面直上から台付甕1点（3）が出土している。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第181図 164号住居跡（1）

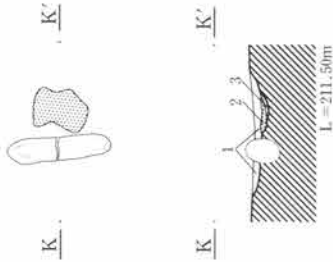


- P1
 1 暗褐色土 粘性あり、焼土粒を少量含む。
 2 黄褐色土 細粒の粘質土。
 P2
 1 暗褐色土 粘性あり。
 2 黄褐色土 P1の2層と同じ。
 3 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む粘質土。
 P3
 1 暗褐色土 粘性良、白色粒、炭化物、黄褐色土ブロックを少量含む。
 2 暗褐色土 粘性あり、白色粒、黄褐色土ブロックを微量含む。
 P4
 1 暗褐色土 粘性あり、黄色粒を微量含む。
 2 P1の2層と同じ。
 3 黄褐色土 暗褐色土を微量含む。

0 1:60 2m

P5 (貯蔵穴)

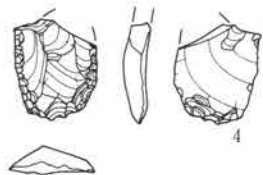
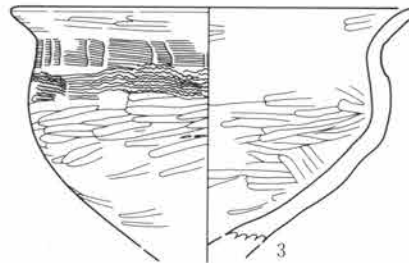
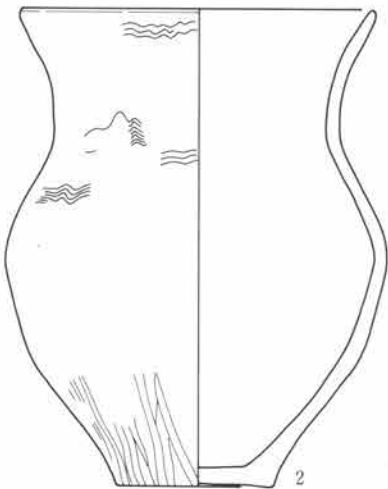
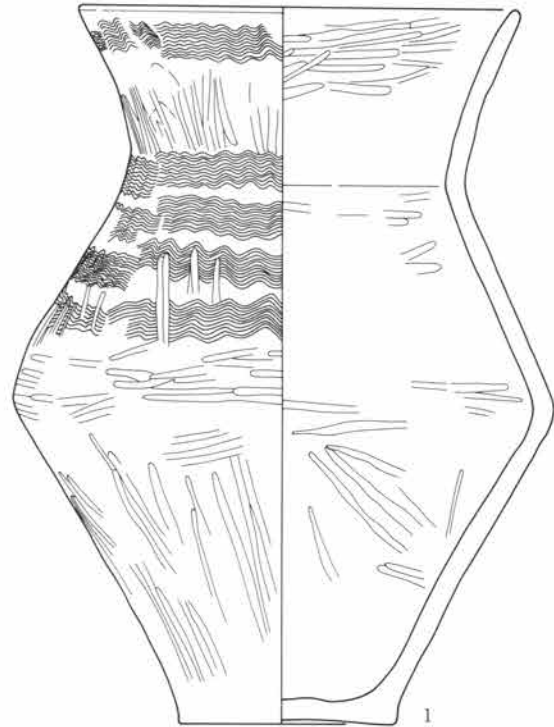
- 1 暗褐色土 粘性あり、黄褐色土ブロックを少量含む。
 2 暗褐色土 粘性あり。
 3 褐色土 細粒粘質土。
 4 暗褐色土 粘性あり、黄褐色土ブロックを多く含む。
 5 黄褐色土 細粒で弱い粘性あり。



- 1 暗褐色土 細粒で、粘性がある。
 2 赤褐色土 レンガ状に焼けた焼土面。
 3 黄褐色土 少量の焼土を含む細粒の粘質土。

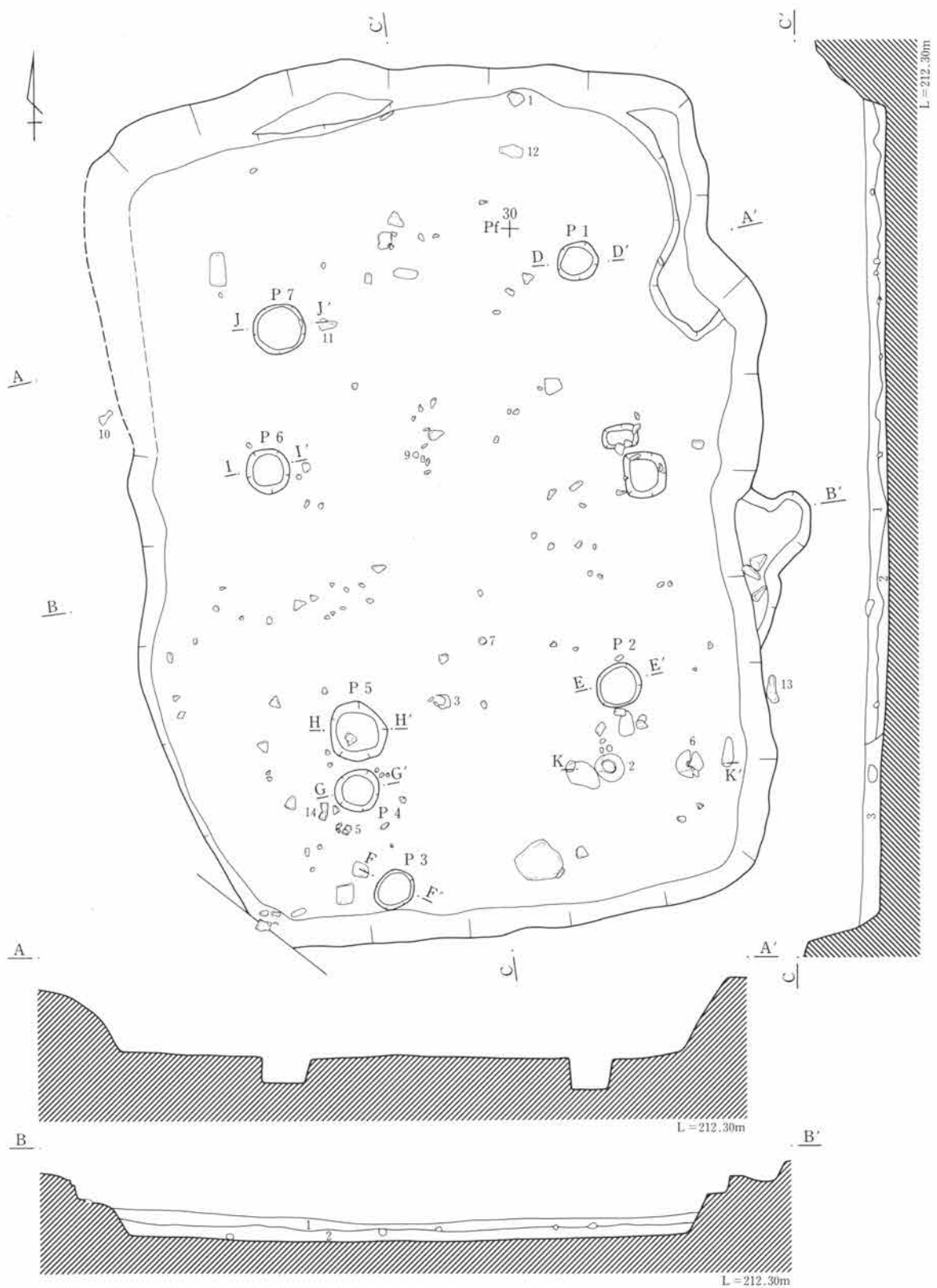
0 1:30 1m

第182図 164号住居跡(2)、炉



0 1:3 10cm

第183図 164号住居跡出土遺物実測図



- 1 黒褐色土 砂利・礫 (φ40~100mm) を含む。
- 2 黒褐色土 黄色土ブロック、礫 (φ40~50mm) を含む。
- 3 暗茶褐色土 パミス、黄色土を含む。

0 1 : 60 2m

第184図 168号住居跡 (1)

B-168号住居跡 (第184~187図、P L 38・63・64)

位置 Bd~Bf-29・30グリッド 床面積 42.80㎡ 主軸方位 N-12°-W

重複 住居の上部を128・151号住によって切られている。

壁 周壁の検出状態は良好で全周を検出することができた。外傾して立ち上がり、残存壁高は77cmを測ることができる。西・北周壁は上部に礫を含む粘質黄色土、東・南周壁は小砂利混じりの粘質黄色土を壁土としている。

形状と規模 隅丸長方形を呈する。規模は長軸8.40m、短軸6.00mを測ることができる。

床面 礫を含む粘質黄色土を床面としている。

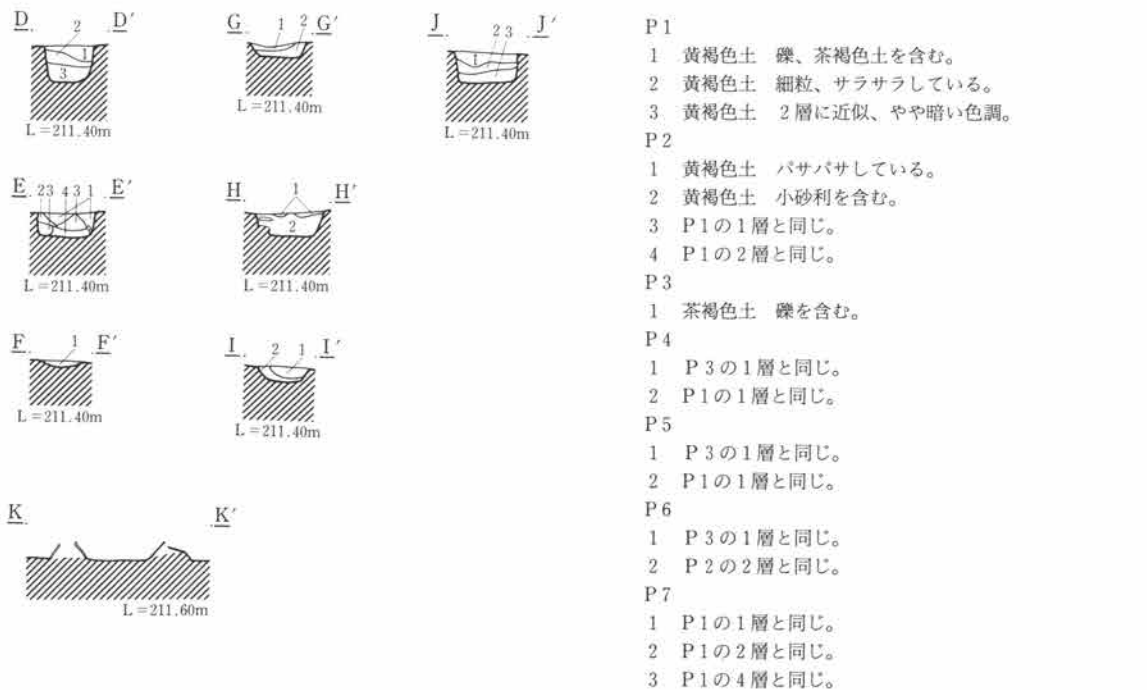
炉跡 住居の中軸線上、北側の支柱穴(P1・P7)間に火を受けた痕跡の残る炉石を検出することができた。焼土面は検出できず、明瞭な掘り込みも認められなかった。

柱穴 P1・P2・P5・P7の4基が支柱穴になると思われる。

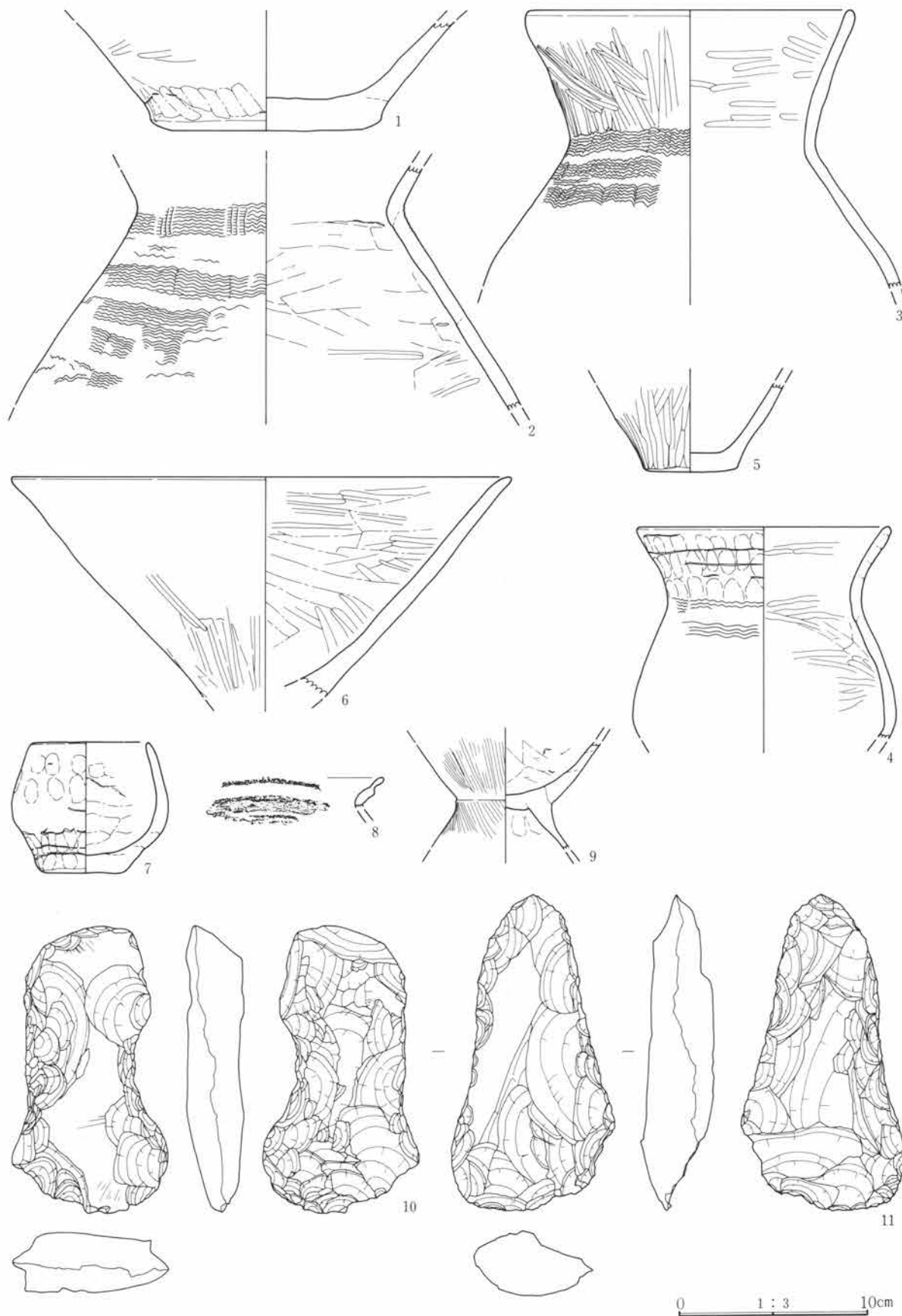
No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
上端長径	41cm	48cm	42cm	46cm	60cm	45cm	52cm
下端長径	34cm	39cm	35cm	32cm	45cm	33cm	44cm
深さ	31cm	21cm	11cm	13cm	24cm	11cm	27cm

出土遺物 住居の南東隅の床面直上から甕1点(3)と高坏1点(6)が並んで出土している。その他の遺物は散在して出土しており、床面及び覆土下層から壺1点(1)、甕3点(2・4・5)、ミニチュア土器1点(7)、古式土師の台付甕1点(9)が、覆土上層より甕1点(4)、古式土師の台付甕S字口縁部1点(8)、石鍬4点(10~13)が出土している。

時期 出土遺物から弥生時代終末期から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第185図 168号住居跡(2)



第186図 168号住居跡出土遺物実測図(1)



第187図 168号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

B-174号住居跡 (第188~191図、P.L.39・64)

位置 B1~Bn-24~26グリッド 床面積 78.58㎡ 主軸方位 N-66°-W

重複 住居の北東隅を156・173号住に、南辺の一部を140・163号住に、西辺を158号住によって切られている。

壁 重複部が多く、周壁の検出状態は悪い。残存壁高は28cmを測ることができる。

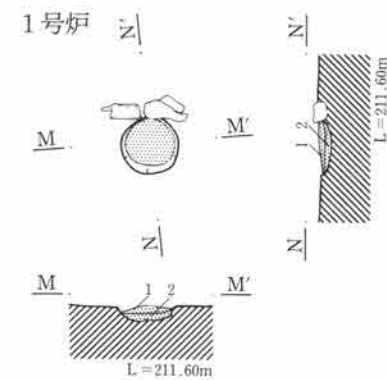
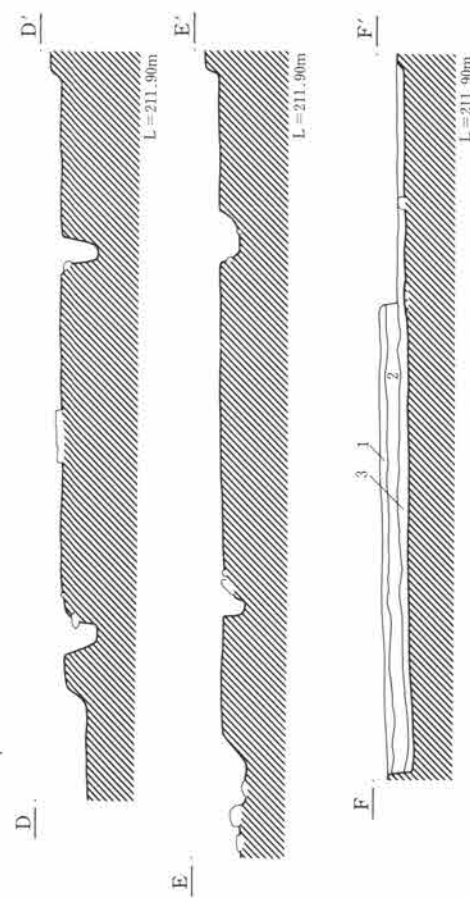
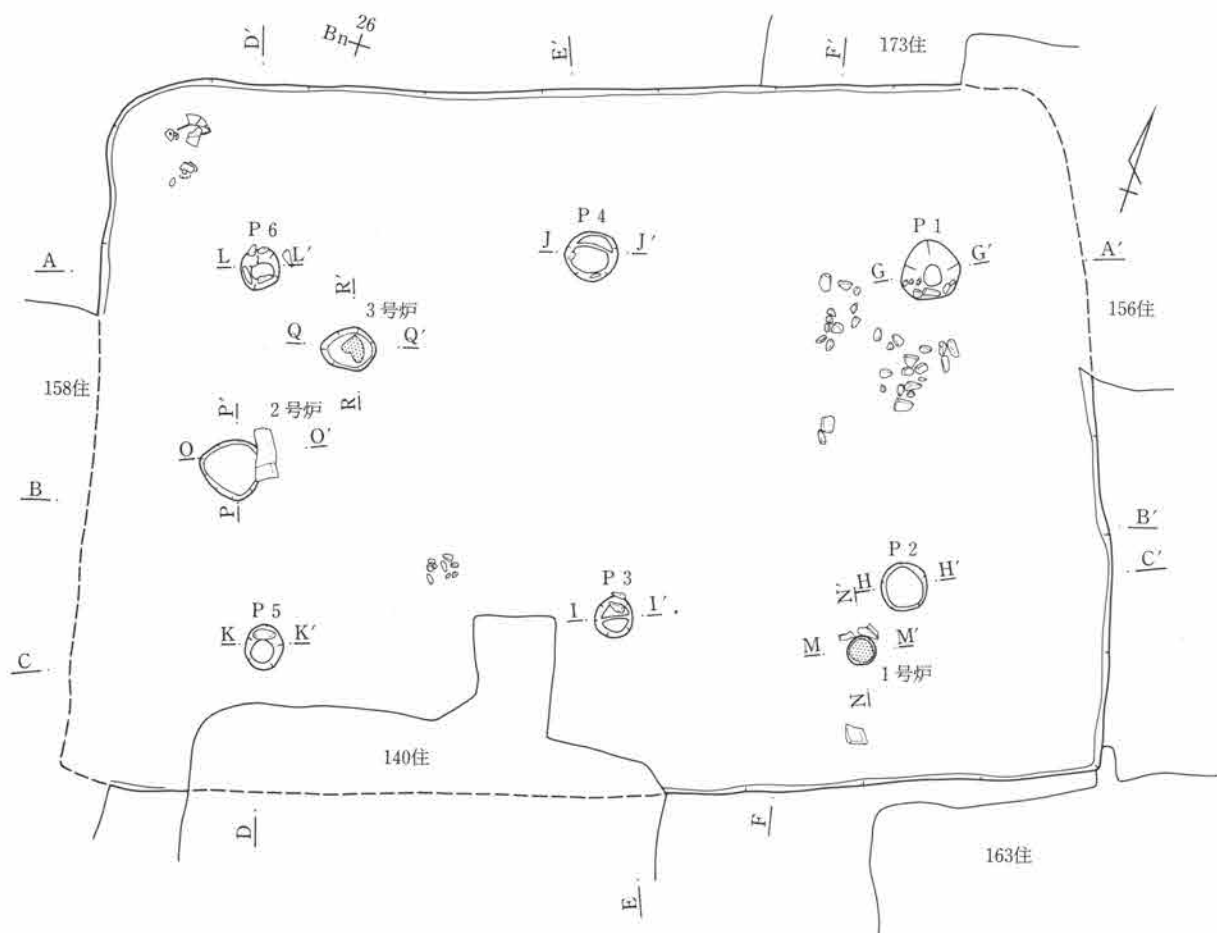
形状と規模 重複によって住居の北東隅、南西隅を失い形状はやや不明瞭であるが、残存部の形状及び支柱穴の位置等を考慮すると東西に長い長方形を呈すると考えられる。B区最大の大型住居であり、規模は長軸10.80m、短軸7.48mを測ることができる。

床面 住居の北西隅に大小の礫が集中して出土している。床面にも地山の礫が所々に露出しており僅かな凹凸が見られるが概ね平坦である。

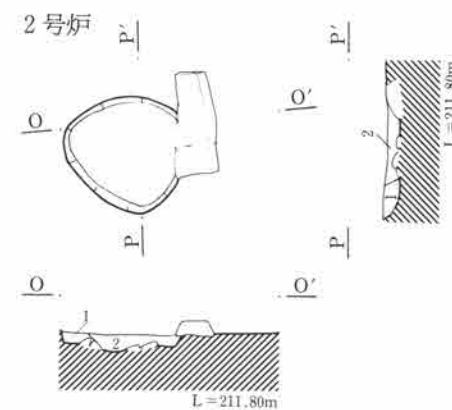
炉跡 3基の炉を検出することができた。炉1はP2の南側に位置し、炉石を据える形態の地床炉である。炉石は熱を受け2つに割れており、炉石の南側には径30cm程の真赤に焼けた円形の焼土面が認められた。炉2は住居の中軸線上、西側の支柱穴(P5・P6)間にあり、砂岩の平石を炉石に使用した地床炉である。焼土面は認められなかったが、覆土中に焼土・炭化物が見られ、炉石の上部は熱を受け黒色化している。P6の南東には長径30cm程の小規模な焼土溜まり炉3が検出された。焼土の西側には灰白色の灰層が認められた。



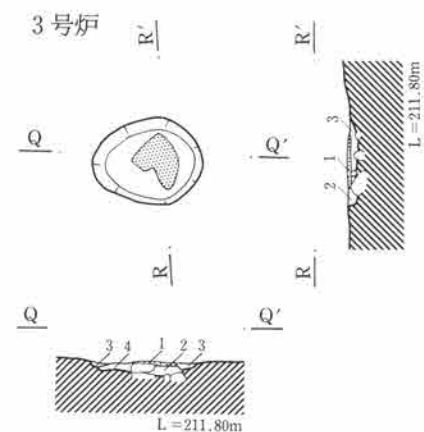
第188図 174号住居跡(1)



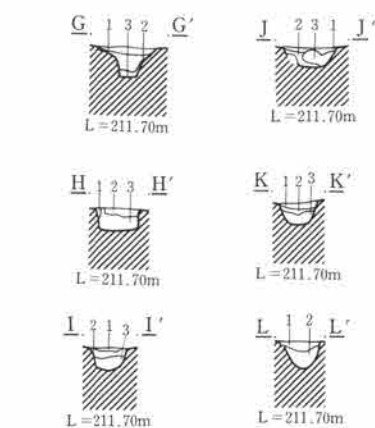
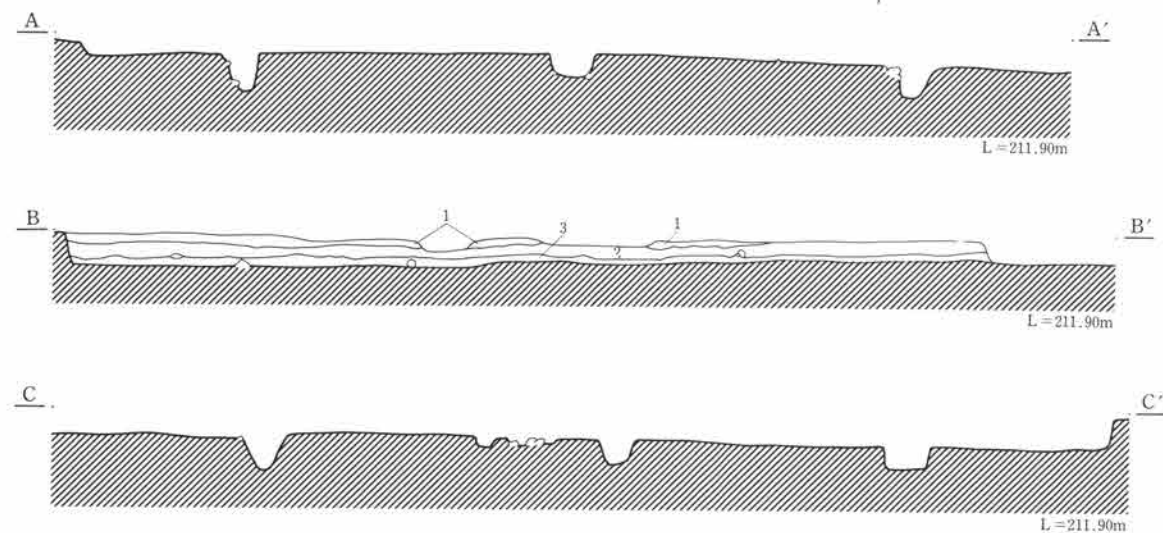
- 1号炉
- 1 赤褐色土 熱を受け、レンガ状になった焼土面。
 - 2 暗赤褐色土 細粒の焼土。



- 2号炉
- 1 暗褐色土 焼土粒、炭化物、黄色粒を少量含む。
 - 2 暗褐色土 粘性あり、焼土粒、炭化物、黄色粒を含む。



- 3号炉
- 1 赤褐色土 熱を受け、レンガ状になった焼土面。
 - 2 暗赤褐色土 黄色粒を少量含む、焼土層。
 - 3 暗褐色土 粘性あり、黄色粒を少量含む。
 - 4 灰白色土 微粒子のサラサラした灰層。



- P3
- 1 灰褐色土 粘性あり、炭化物を少量含む。
 - 2 灰褐色土 粘性あり、褐色土、炭化物を少量含む。
 - 3 褐色土 粘性あり、微量の黄色粒を含む。
- P4
- 1 灰褐色土 粘性あり、黄色粒を微量含む。
 - 2 茶褐色土 細粒、粘性あり。
 - 3 茶褐色土 粘性あり、礫を少量含む。
- P5
- 1 暗褐色土 粘性あり、炭化物、黄色粒を少量含む。
 - 2 褐色土 粘性あり、黄色粒を少量含む。
 - 3 褐色土 粘性あり、礫を多く含む。
- P6
- 1 暗褐色土 橙色・黄色粒を微量含む。
 - 2 暗褐色土 1層より、橙色・黄色粒を多く含む。

- 1 暗褐色土 粒子粗く、白色粒、小砂利を少量含む。
- 2 暗褐色土 粘性あり、白色粒、小砂利を少量含む。
- 3 灰褐色土 細粒、粘性あり、黄褐色土ブロックを含む。

- P1
- 1 暗褐色土 粘性あり、礫、茶褐色土を少量含む。
 - 2 茶褐色土 粘性あり、礫を含む。
 - 3 茶褐色土 粘性あり、2層より礫の混入が少ない。
- P2
- 1 暗褐色土 粘性あり、黄色粒を少量含む。
 - 2 黄褐色土 細粒、弱い粘性あり。

0 1:80 2m

第189図 174号住居跡 (2)

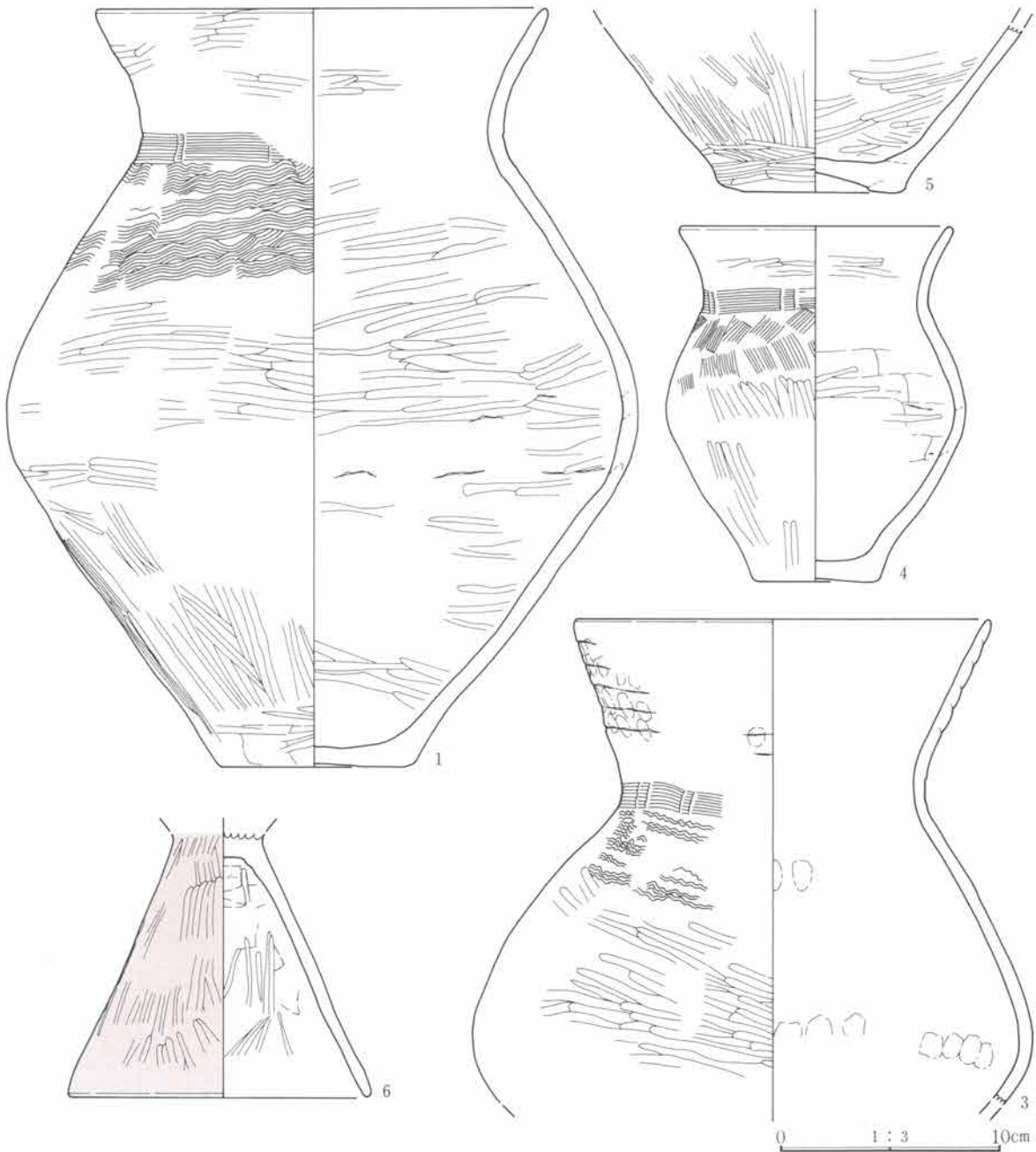
0 1:40 1m

柱穴 P 1～P 6 の6基が支柱穴になると思われる。

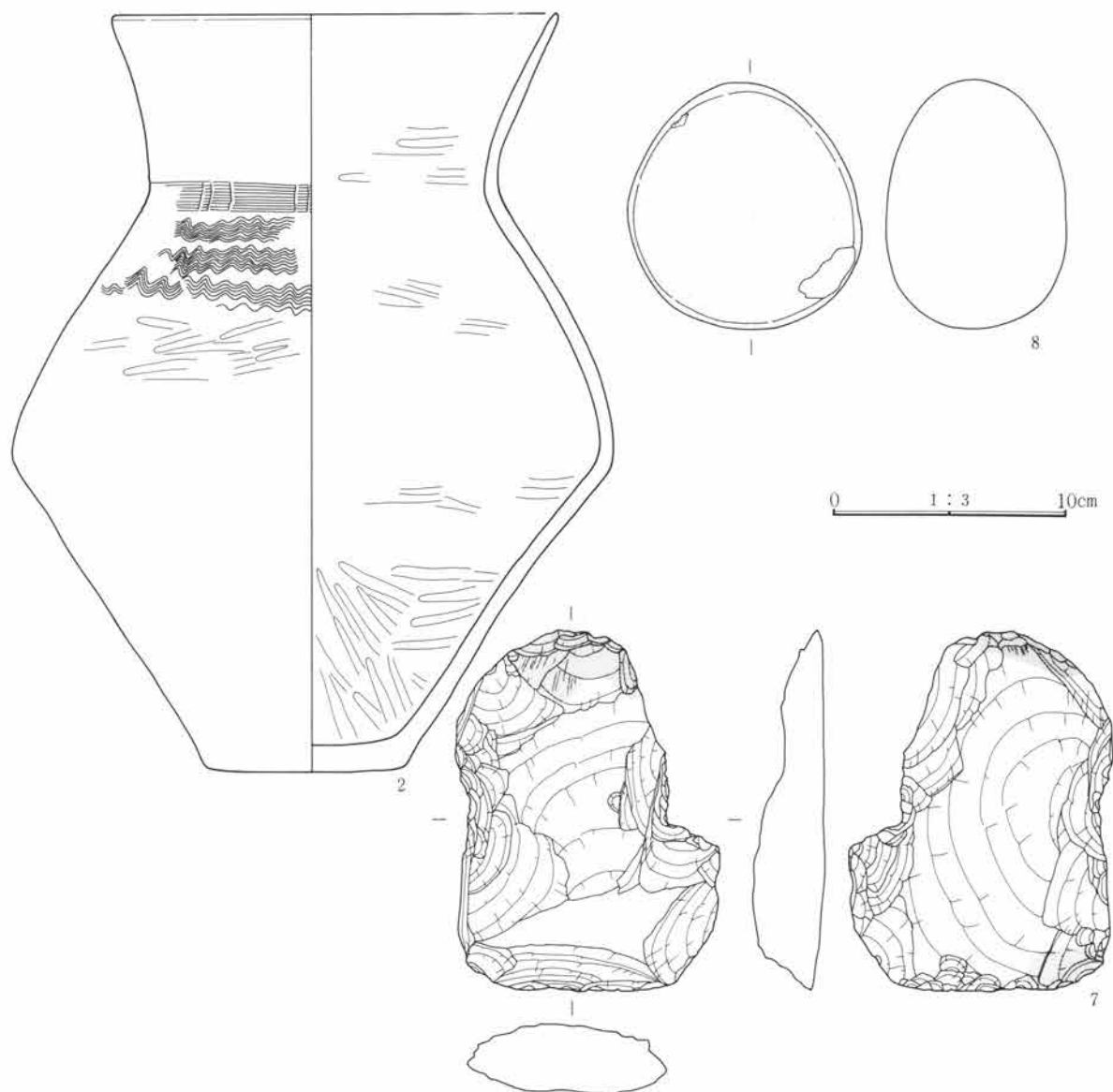
No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
上端長径	62cm	50cm	43cm	56cm	47cm	40cm
下端長径	22cm	42cm	30cm	38cm	24cm	24cm
深 さ	32cm	24cm	23cm	21cm	35cm	41cm

出土遺物 遺物は散在して出土している。床面及び床面近くから甕5点（1～5）、高坏1点（6）、覆土中より石鍬1点（7）、磨石1点（8）が検出できた。甕3は口縁部に粘土帯接合痕を残し、甕4は頸部に簾状文、胴上位に、櫛描横羽状文を施文している。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第190図 174号住居跡出土遺物実測図（1）



第191図 174号住居跡出土遺物実測図(2)

B-178号住居跡 (第192~194図、P L 40・65)

位置 Bh・Bi-24~26グリッド 床面積 48.36㎡ 主軸方位 N-80°-W

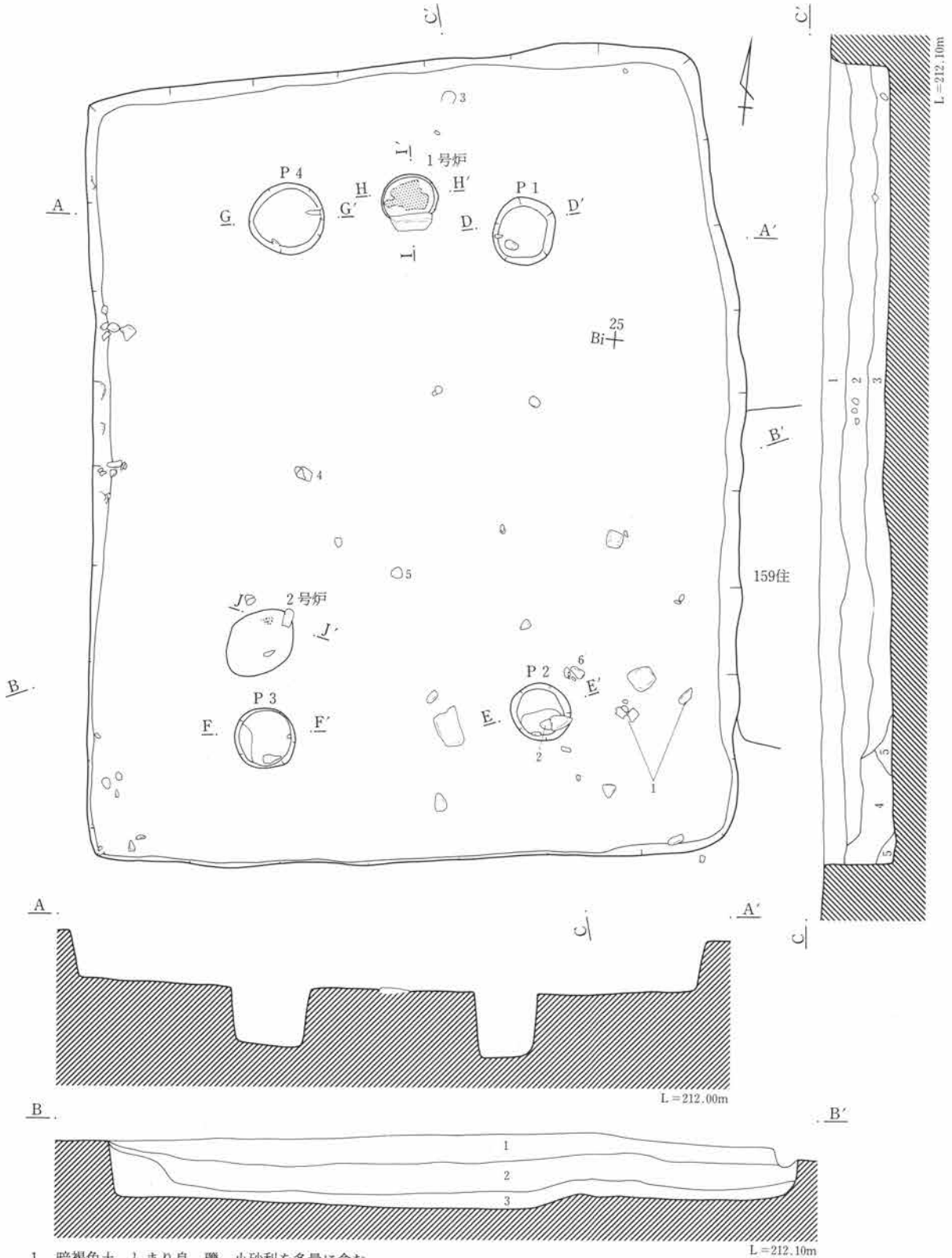
重複 南西隅を72・80号住に、東辺は上部で159号住に切られている。

壁 重複部の南西部を除いて、良好な周壁を検出することができた。垂直に近い立ち上がりを示し、残存壁高は62cmを測ることができる。壁土は上層より礫層、粘質黄褐色土の順に観察できる。

形状と規模 長方形を呈する。規模は長軸7.92m、短軸6.60mを測ることができる。

床面 粘質黄褐色土を床面としている。凹凸は少なく平坦である。

炉跡 炉1は住居の中軸線上、北側の支柱穴(P1・P4)間にあり、炉石を据える形態の地床炉である。炉石の北側の掘り込みの規模は長軸56cm、短軸41cm、深さ14cmを測ることができ、径30cm程の真赤に焼けた不整形の焼土面が認められた。炉2はP3の北側に位置するが、80号住の貯蔵穴によって大半を壊され、半分に分かれた炉石と僅かな焼土面のみが検出され、形状等は不明瞭である。



- 1 暗褐色土 しまり良、礫、小砂利を多量に含む。
- 2 暗褐色土 1層よりも小砂利の混入が少なく、やや大ぶりの礫を含む。
- 3 褐色土 黄色粒・黄色土ブロックを含む粘質土。
- 4 暗褐色土 黄色土ブロック、黄色粒、小礫、小砂利を少量含む、粘質土。
- 5 褐色土 黄色土ブロックを多く含み、黄色粒、小砂利少量含む、粘質土。

0 1 : 60 2m

第192図 178号住居跡 (1)

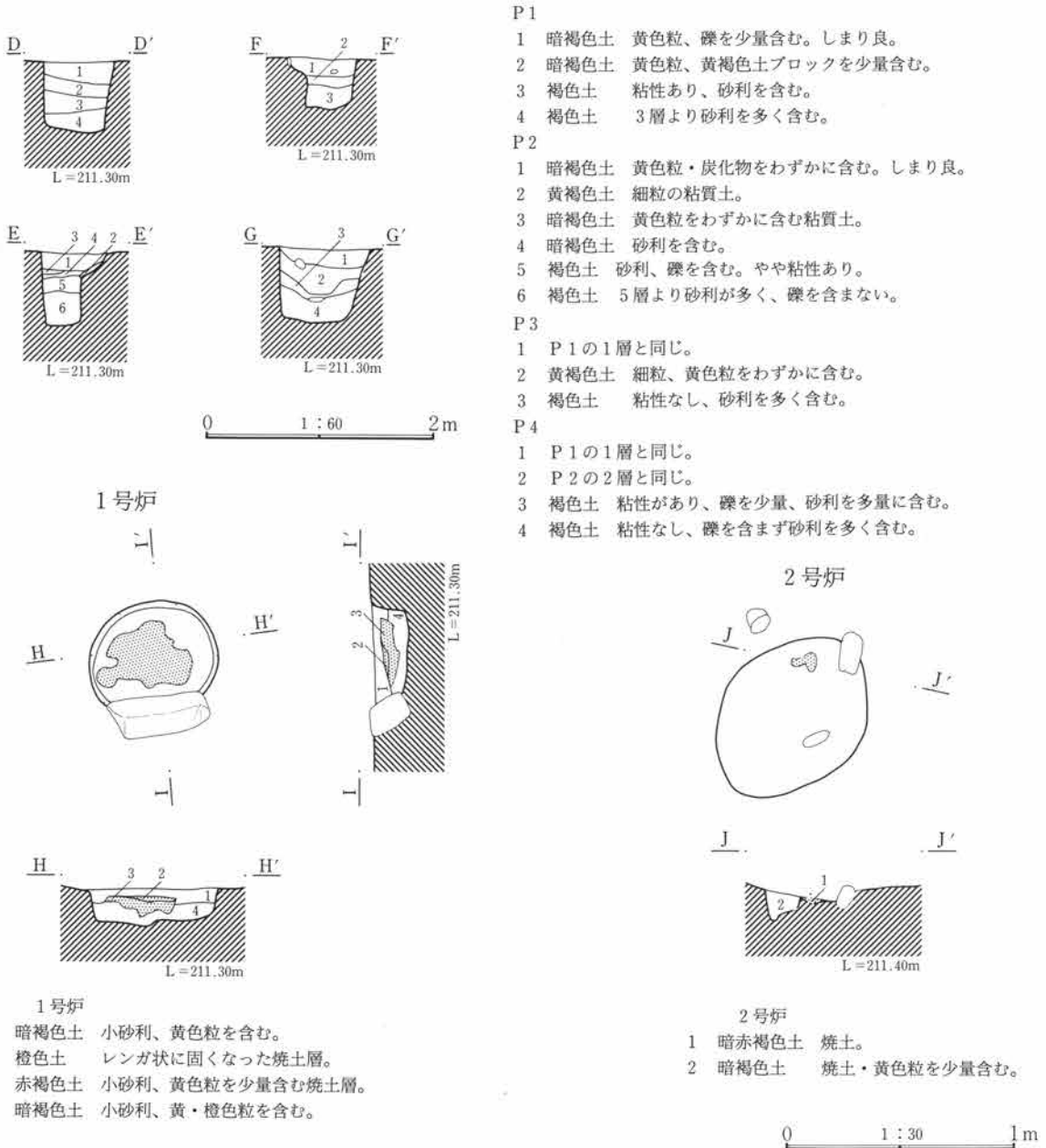
第3章 検出された遺構と遺物

柱穴 4基の支柱穴を良好に検出することができた。

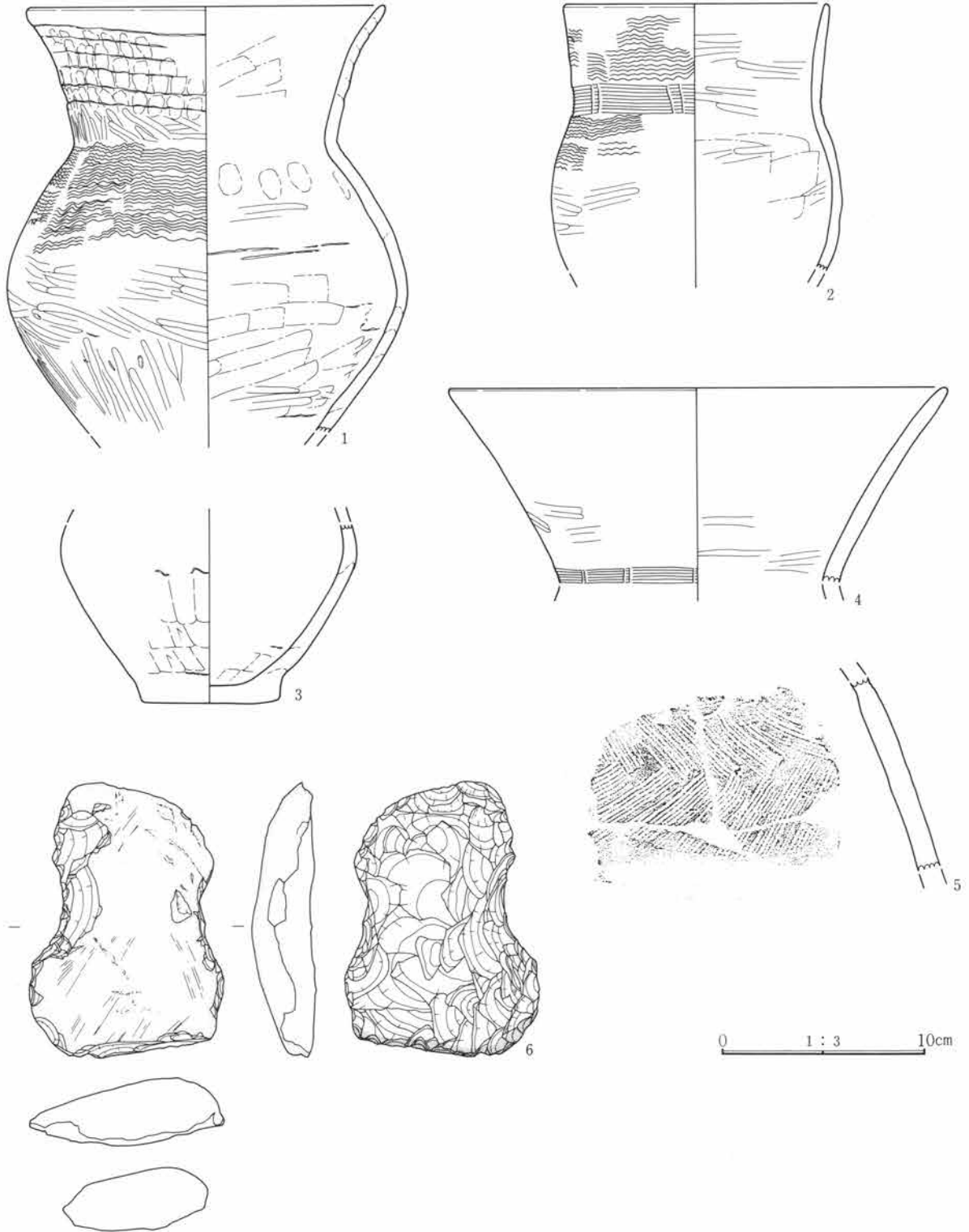
No.	P 1	P 2	P 3	P 4
上端長径	68cm	58cm	61cm	78cm
下端長径	51cm	43cm	53cm	68cm
深 さ	65cm	60cm	47cm	62cm

出土遺物 出土遺物は少なく、散在して出土している。床面直上及び床面近くから甕3点(1・3・4)、壺の胴部片1点(5)、石鍬1点(6)、ピット内(P2)より甕1点(2)が出土している。甕(1)は口縁部に粘土帯接合痕を残しており赤井戸、吉ヶ谷式の影響が考えられる。壺(5)は胴上位に櫛描横羽状文を施文し、赤色塗彩を施している。

時期 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第193図 178号住居跡(2)、炉



第194図 178号住居跡出土遺物実測図

第4節 埋甕と出土遺物

B-2号埋甕（第195・197図、P L 12・65）

Bo-35グリッドに位置する。上面径49cm、底面径49cm、深さ31cmの掘り方を有する。調査の不備により掘り方の形状は不明である。覆土は黄色粒・風化礫混じりの暗褐色土である。埋設土器は胴下位から底部を欠損した加曾利E III式期の深鉢型土器で、逆位の状態で検出されている。

B-3号埋甕（第195・197図、P L 12・65）

Bo-21グリッドに位置する。上面51cm×49cm、深さ25cm程のほぼ円形を呈する掘り方を有する。掘り方の断面形は逆台形を呈し、埋設土は黒色土混じりの粘質褐色土である。縄文時代中期加曾利E IV式期の深鉢型土器の胴部から底部が正位の状態で埋設されていた。

B-1号埋甕（第195・196図、P L 13・65）

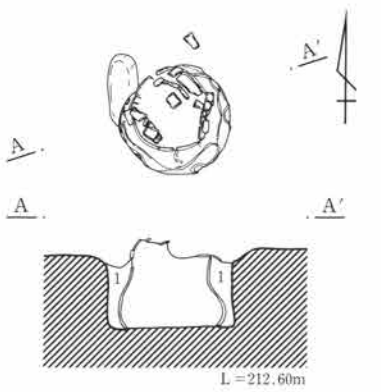
Bp-30グリッドに位置する。土器を埋設する土坑の規模は上面99cm×（63cm）、底面82cm×（50cm）、深さ31cmである。形状は楕円形を呈する。埋設土は粘性が強く、しまりの良い褐色土である。土坑の西半から大型壺の胴中位以下が、東半より大型壺の底部がほぼ正位状態で出土している。埋設土器内部の土壌は残存脂肪分析を実施した。

B-4号埋甕（第195・196図、P L 14・65）

Bq-21グリッドにおいて検出された。土器を埋設する土坑の規模は上面75cm×67cm、底面53cm×46cm、深さ14cmである。形状は楕円形を呈する。覆土は少量の黄褐色土粒とパミスを含む黒褐色土である。埋設土器は底部を欠損した弥生時代中期後半の受口状口縁を有する甕型土器で、2分の1が横位状態で出土している。

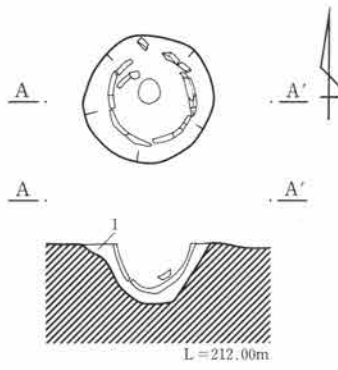
B-5号埋甕（第195・196図、P L 13・66）

Az-17グリッドの北東隅に位置する。長径66cm、深さ38cm程の掘り方を有し、断面形は半円形を呈する。埋設土は黒色土と礫混じりの黄色土の混土層であり、焼土、炭化物等は認められなかった。埋甕は胴上位から胴中位にかけて櫛描縦羽状文を施した弥生時代中期後半のほぼ完形の甕型土器であり、正位の状態で出土している。埋甕の南側には東西4.3m、南北2.3mの範囲に大小の礫が集中して出土している。北側にはおおぶりの礫が散在して出土している。遺構写真や遺構図面から方形を意識した複数の人為的な配石遺構の可能性が考えられるが調査資料が乏しく埋甕との関連は不明である。



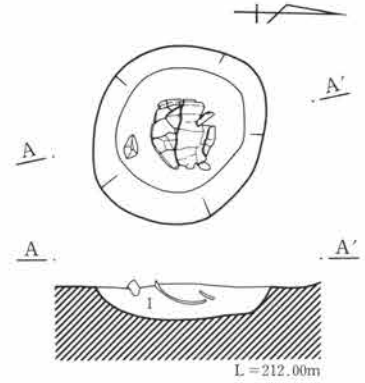
1 暗褐色土 しまり弱く、粘性あり。黄色粒、風化礫含む。ややザラザラ。

2号埋甕



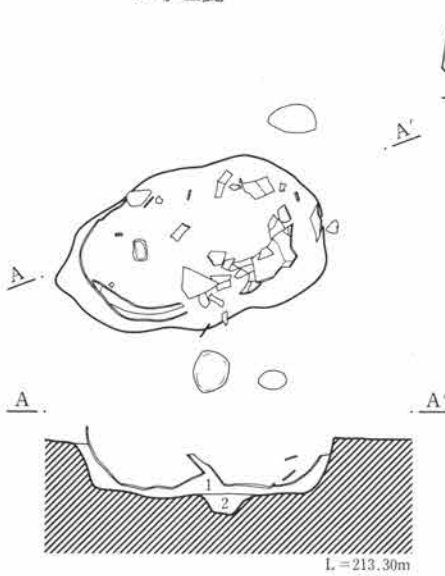
1 褐色土 粘質褐色土に黒色土が混入。

3号埋甕



1 黒褐色土 少量の黄褐色粒とバミスを含む。しまりなく、粘性あり。

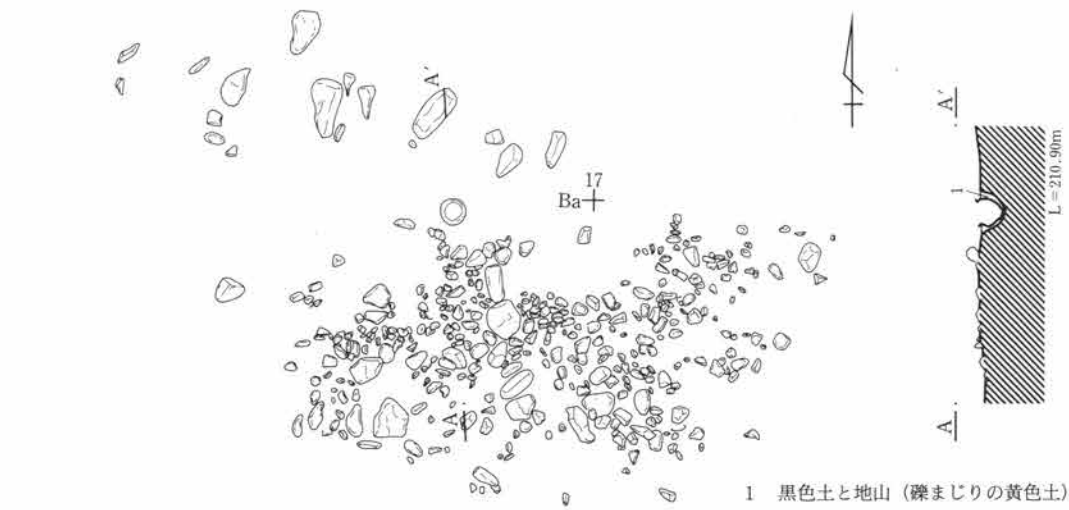
4号埋甕



1 褐色土 しまりよく、粘性強い。
2 褐色土 しまりやや弱い、粘性は1層よりやや強い。

1号埋甕

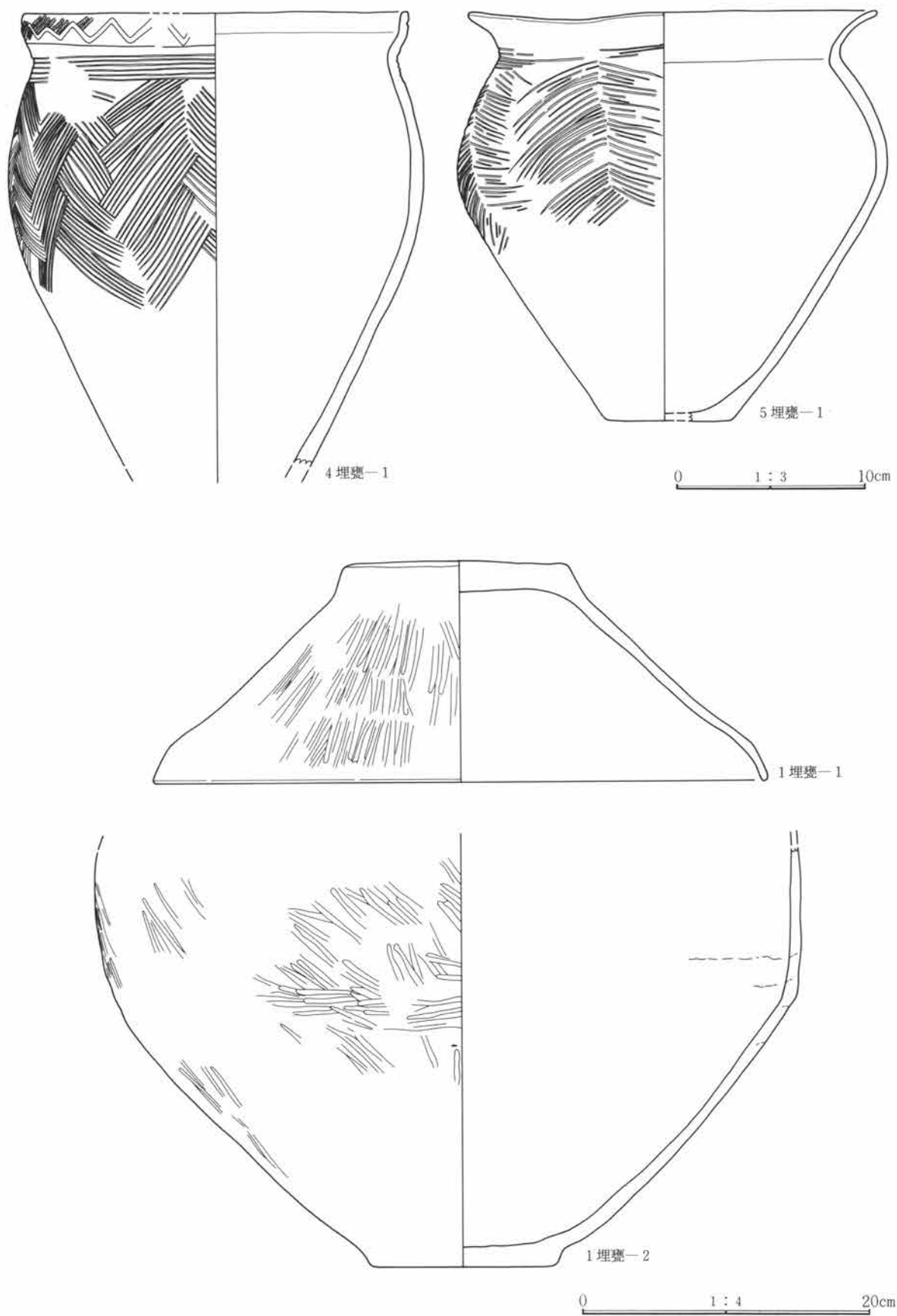
0 1:30 1m



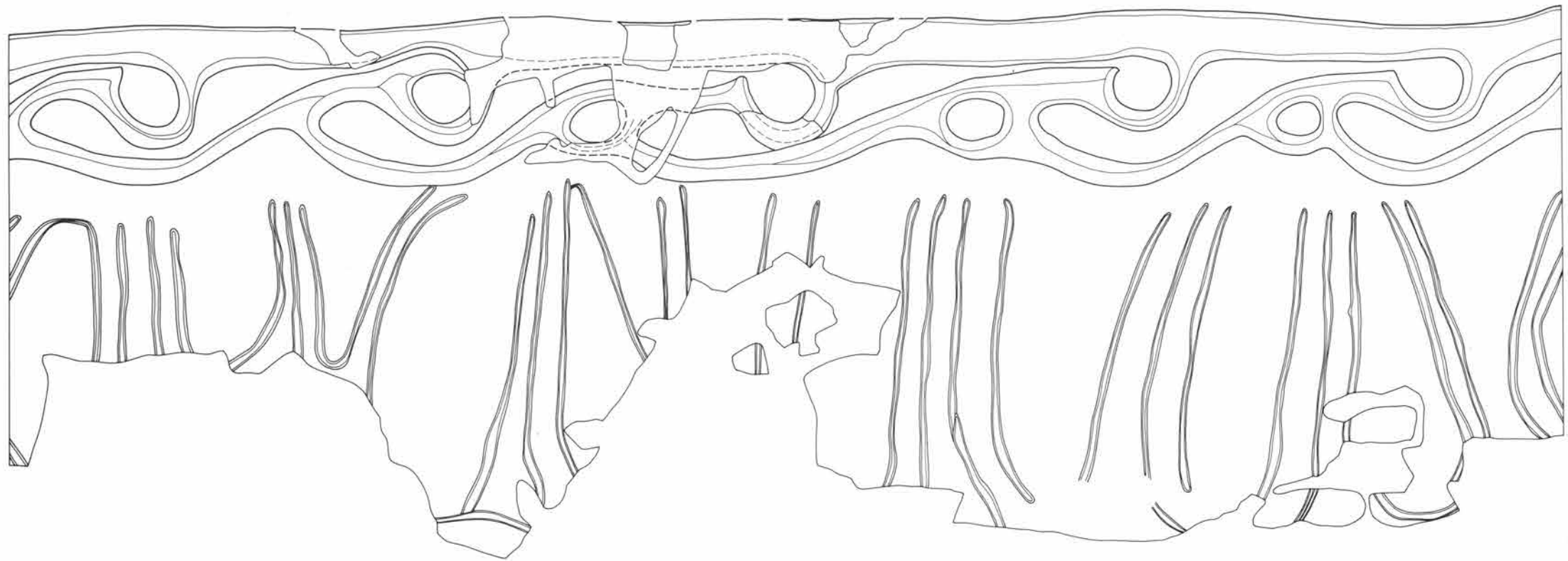
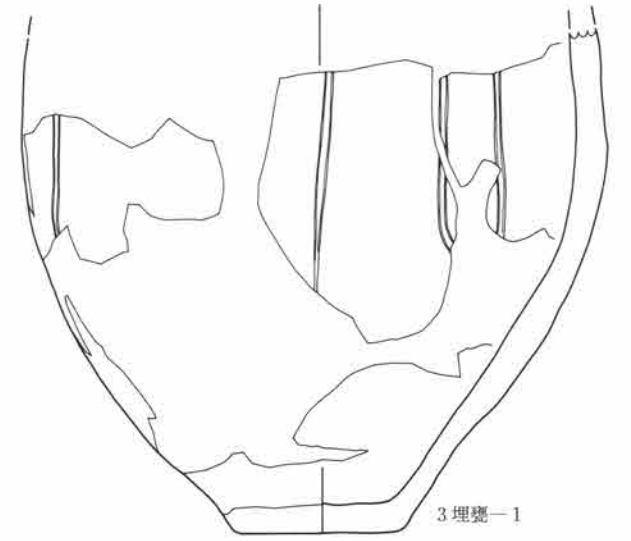
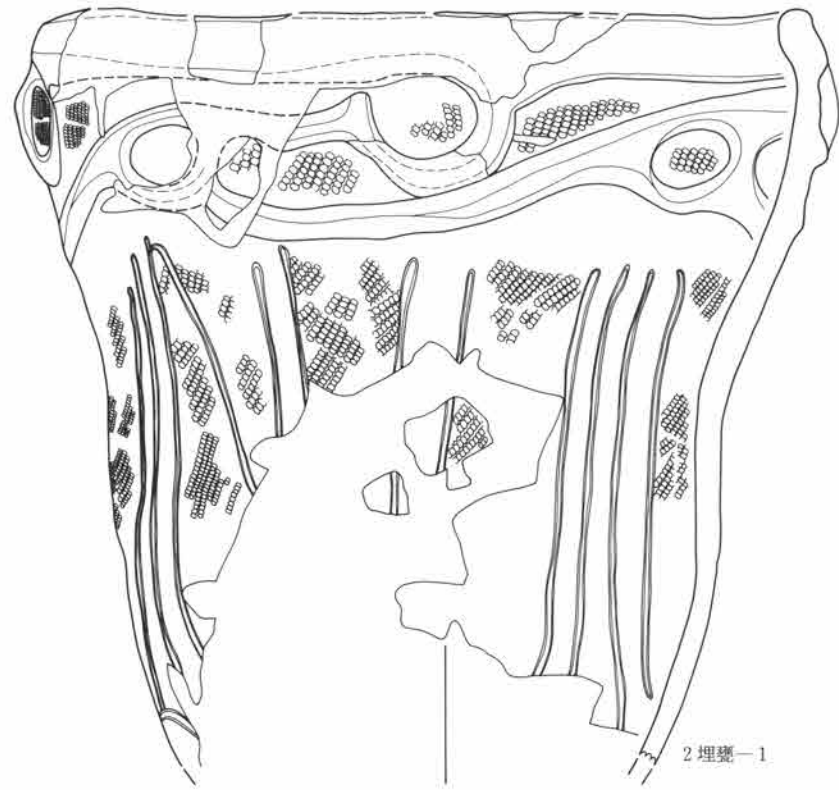
1 黒色土と地山(礫まじりの黄色土)の混土層。

5号埋甕

第195図 1~5号埋甕



第196図 1・4・5号埋壺出土遺物実測図



第197图 2・3号埋甕出土遺物実測図

0 1:4 20cm

第5節 土坑と出土遺物

B-9号土坑（第198・200図、P L12・66）

Br-25グリッドに位置し、97号住の北側に近接して検出された。重複関係はもたない。規模は東西0.87m、南北0.82m、深さ0.44mを測ることができる。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦である。直立気味に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。出土遺物は覆土中から49点の縄文土器片が出土している。出土遺物から時期は縄文時代前期黒浜式期と思われる。

B-17号土坑（第199・201図、P L12・66）

Bo-23グリッドに位置する。162号住に先行し、162号住の床下より検出された。壁の一部を162号住の支柱穴に破壊されている。規模は東西1.97m、南北1.85m、深さ0.39mを測ることができる。平面形は円形を呈し、底面は中央部に僅かにくぼみが見られる。北側には径60cm程の炭化物の広がり認められた。立ち上がりは僅かに外傾し、断面形は逆台形を呈する。出土遺物は縄文土器片15点、スクレイパー1点、剥片4点がいずれも覆土中より検出されている。出土遺物から、時期は縄文時代前期黒浜式期と思われる。

B-6号土坑（第198・201・202図、P L14・66）

Bp-30グリッド南西隅に位置し、108号住の東側に近接する。重複関係はもたない。規模は東西2.14m、南北1.16m、深さ0.30mを測ることができる。平面形は楕円形を呈する。底面には地山の礫が露出しており、凹凸が認められる。遺物は土坑の中央部にまとまって出土している。いずれも覆土上・中層からの出土である。壺4点（1～4）、台付甕1点（5）、スクレイパー1点（6）を図化することができた。出土遺物から、時期は弥生時代後期と思われる。

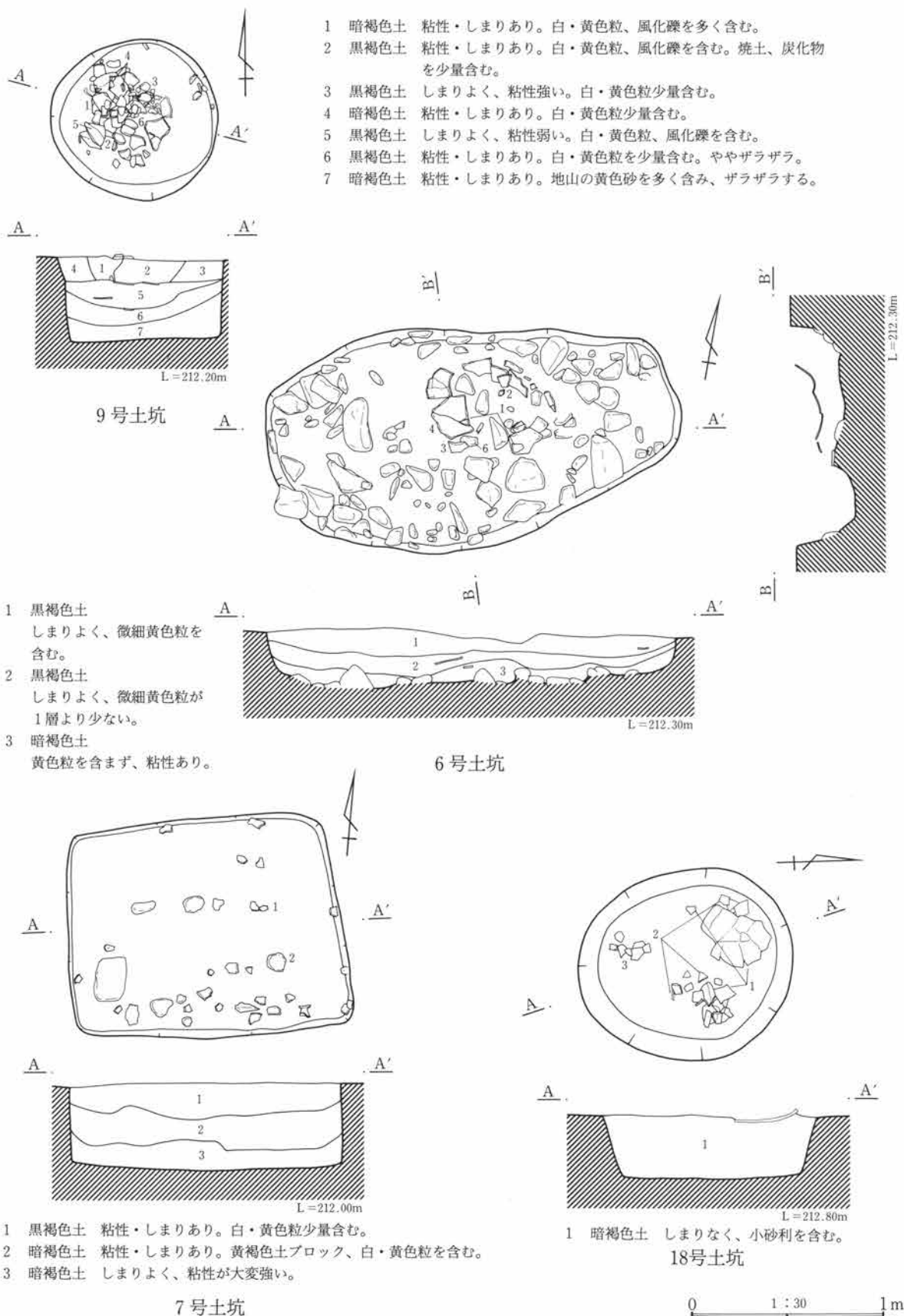
B-7号土坑（第198・202図、P L14・66）

Bp-23グリッド北西隅に位置する。98号住の東側に近接して検出された。重複関係はもたない。規模は東西1.48m、南北1.06m、深さ0.45mを測ることができる。平面形は長方形を呈し、床面は平坦である。垂直に立ち上がり、断面形は長方形を呈す。弥生土器片が29点出土している。床面近くから出土した甕の底部1点と頸部片1点を図化することができた。出土遺物から時期は弥生時代後期と思われる。

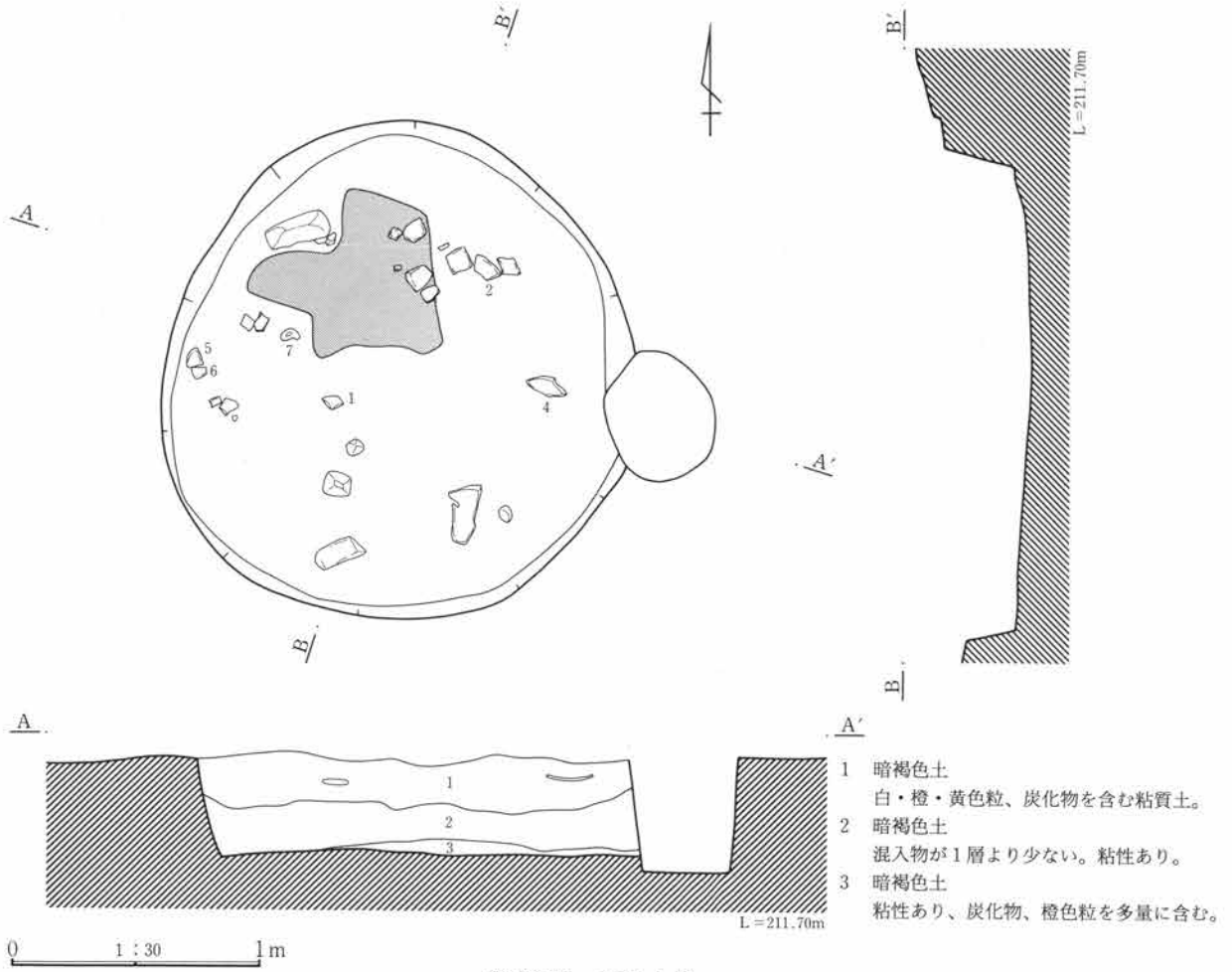
B-18号土坑（第198・202・203図、P L14・66）

Bq-28グリッドに位置する。重複関係は認められない。規模は東西0.97m、南北1.10m、深さ0.30mを測ることができる。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。やや外傾気味に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。弥生時代中期の壺2点（1・2）、甕1点（3）が出土している。壺（1）は頸部に篋描平行沈線文3条、胴部はハケメ後ヘラミガキ、胴上位の一部には原体Rの縄文を施文している。壺（2）は胴上位にハケメ後文様を施文。篋描沈線で舌状文、沈線の内側に刺突文、舌状文の間に波状文を縦方向に施文している。甕（3）は口唇部に刻目痕、胴部に櫛描縦羽状文、一部波状文を施文している。出土遺物から、時期は弥生時代中期後半とおもわれる。

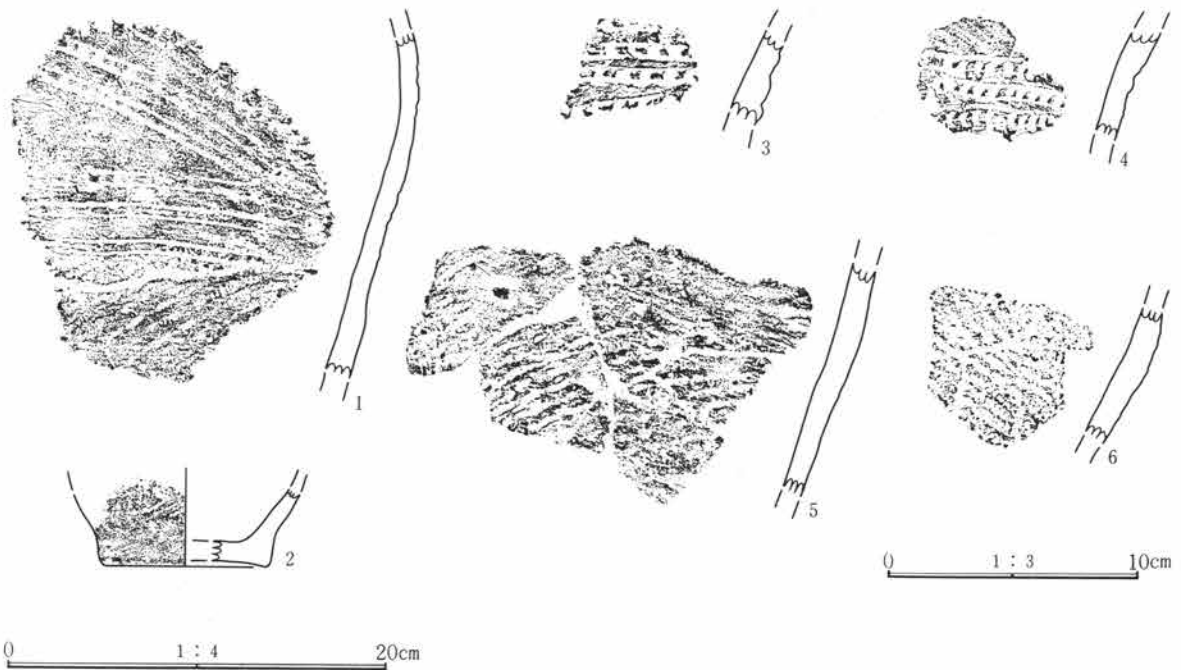
第3章 検出された遺構と遺物



第198図 9・6・7・18号土坑

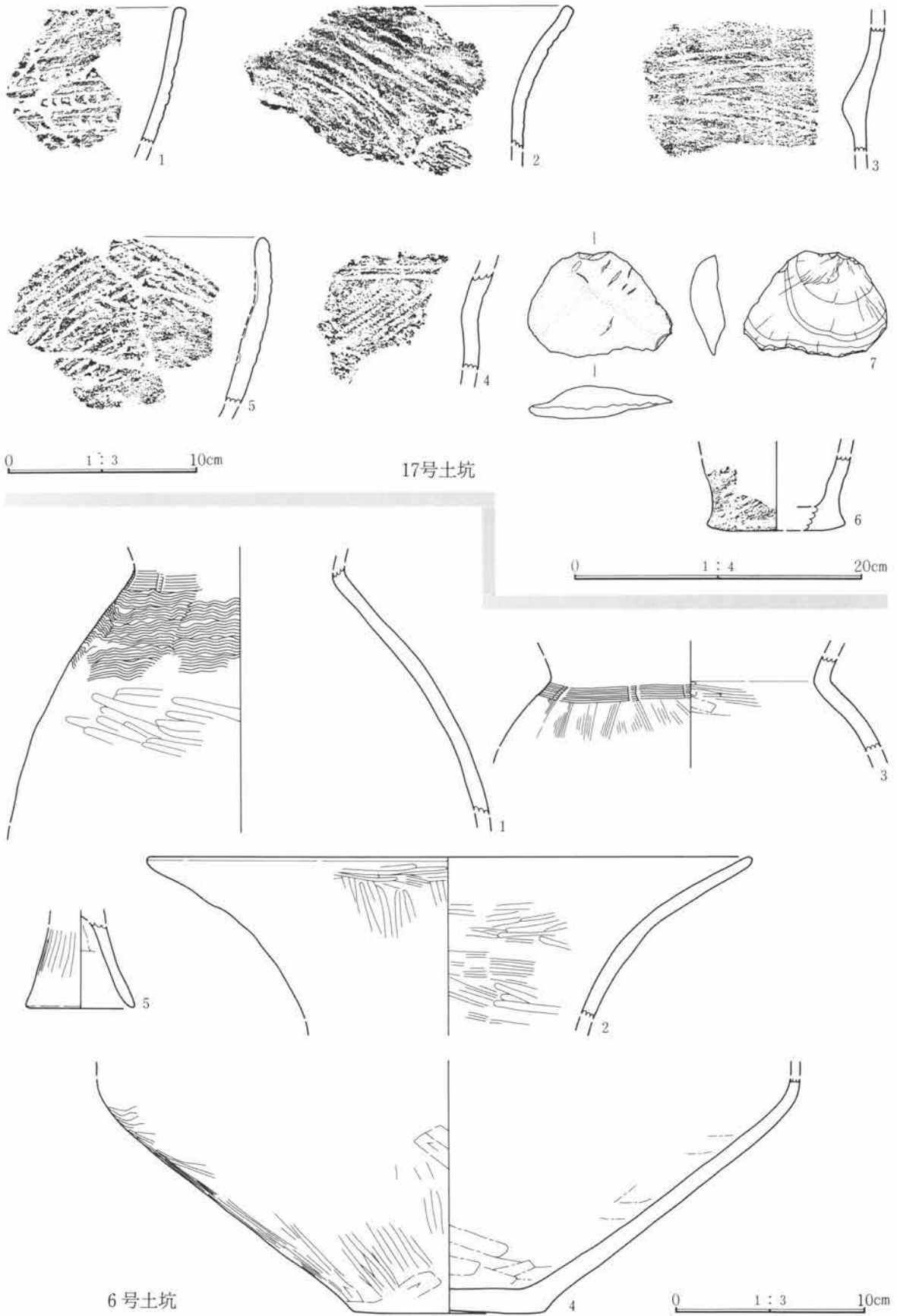


第199図 17号土坑

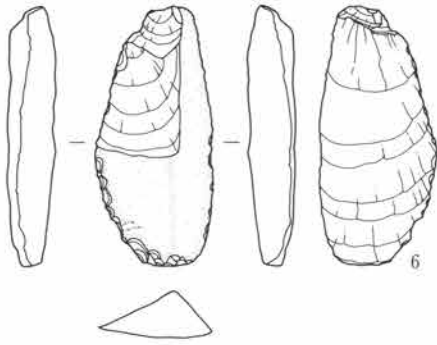


第200図 9号土坑出土遺物実測図

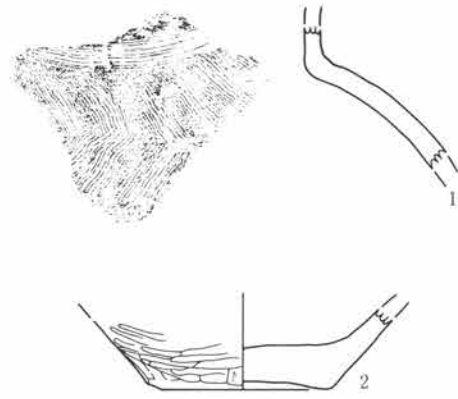
第3章 検出された遺構と遺物



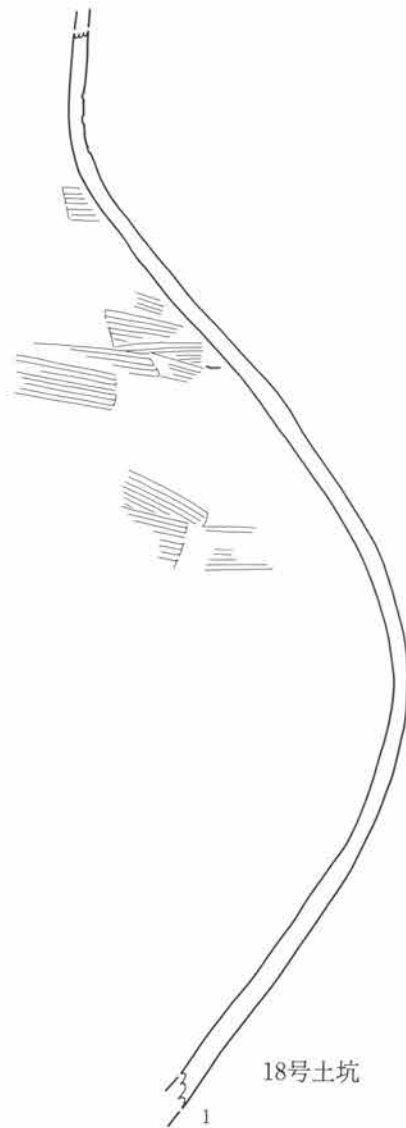
第201図 17・6号土坑出土遺物実測図



6号土坑



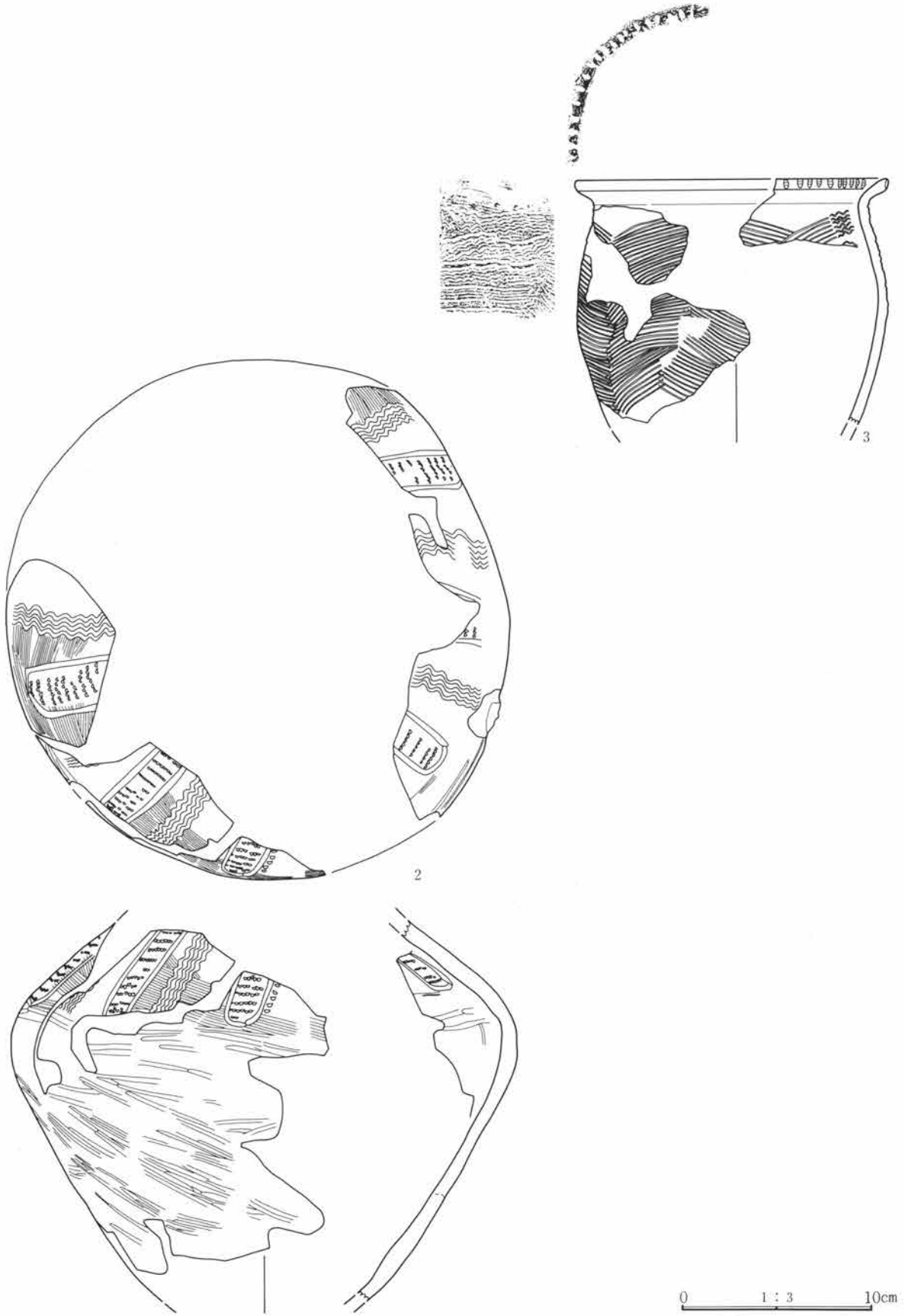
7号土坑



18号土坑

0 1:3 10cm

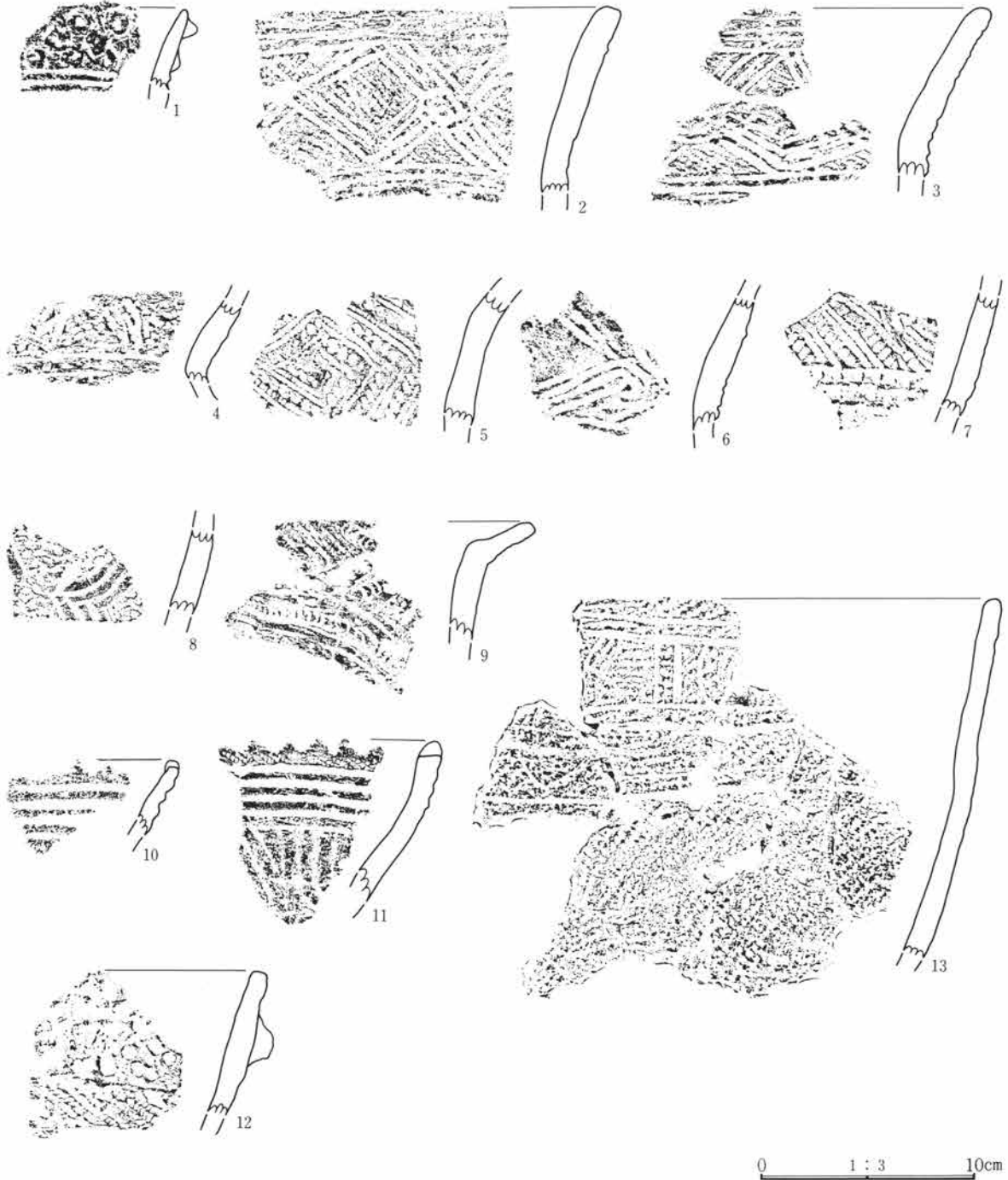
第202図 6・7・18号土坑出土遺物実測図



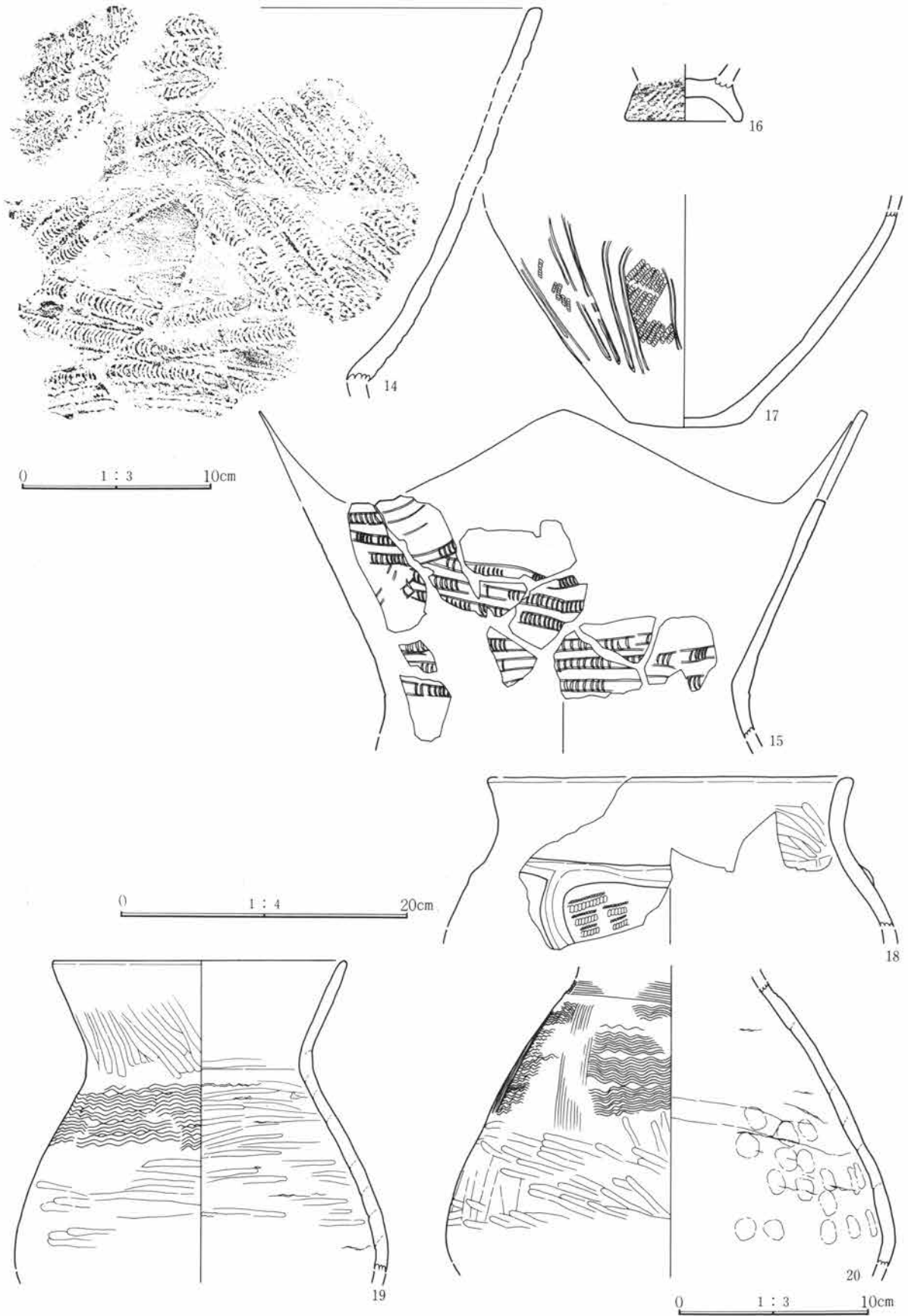
第203図 18号土坑出土遺物実測図

第6節 遺構外出土遺物 (第204~206図、P L66・67)

本調査では、多量の遺物が遺構確認面から出土した。グリッド出土遺物・表採遺物のうち、縄文土器18点、弥生土器2点、土製紡錘車1点、石器8点(打製石鏃3点・打製石斧1点・石皿1点・凹石1点・磨製石斧1点・石鏃1点)を図化した。縄文土器のうち1は縄文前期関山I式に、2~13は縄文前期関山II式に、14~15は縄文前期有尾式期に、17・18は縄文中期加曾利EIV式期に比定されよう。

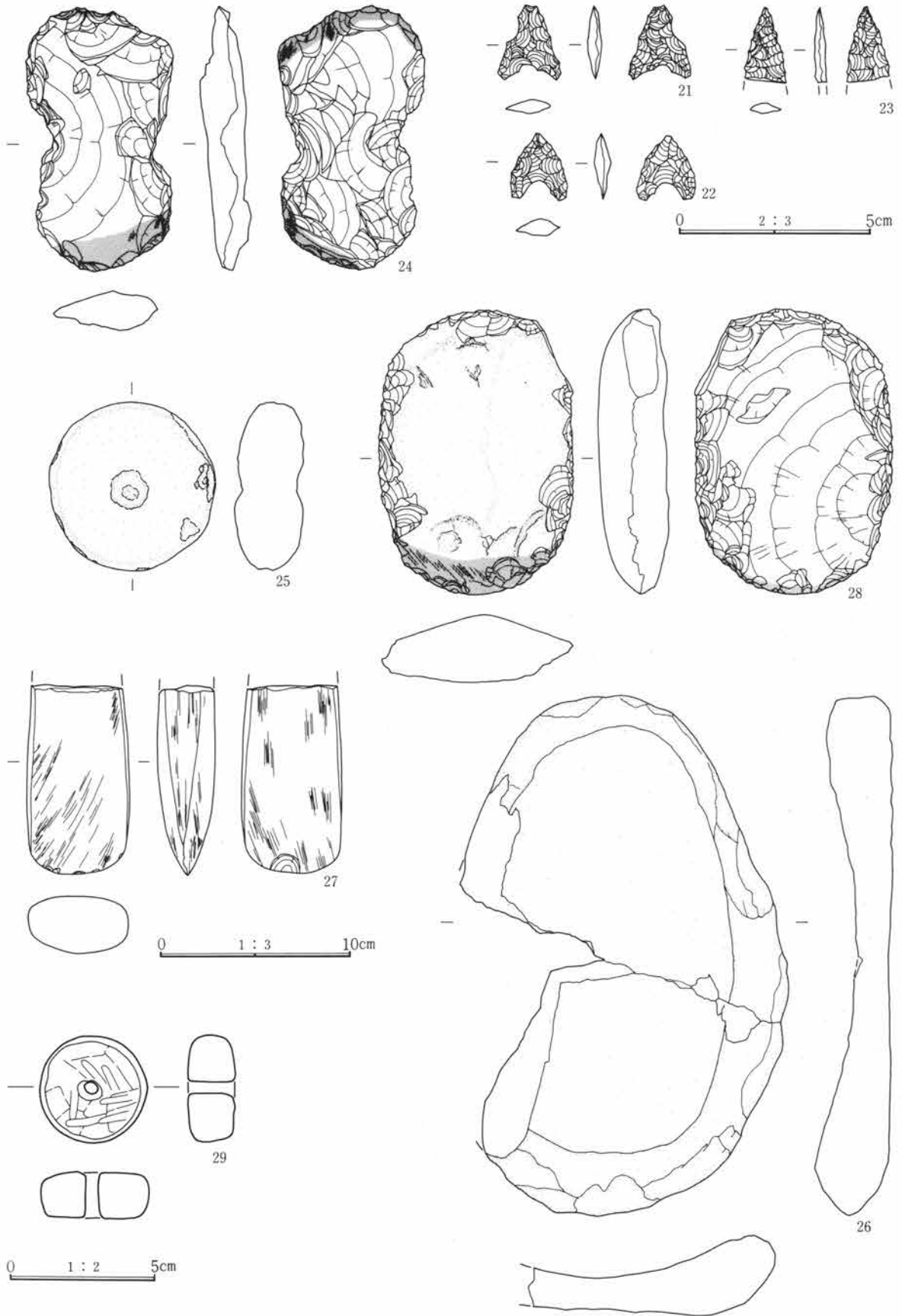


第204図 グリッド出土遺物実測図(1)



第205図 グリッド出土遺物実測図(2)

第6節 遺構外出土遺物



第206図 グリッド出土遺物実測図(3)

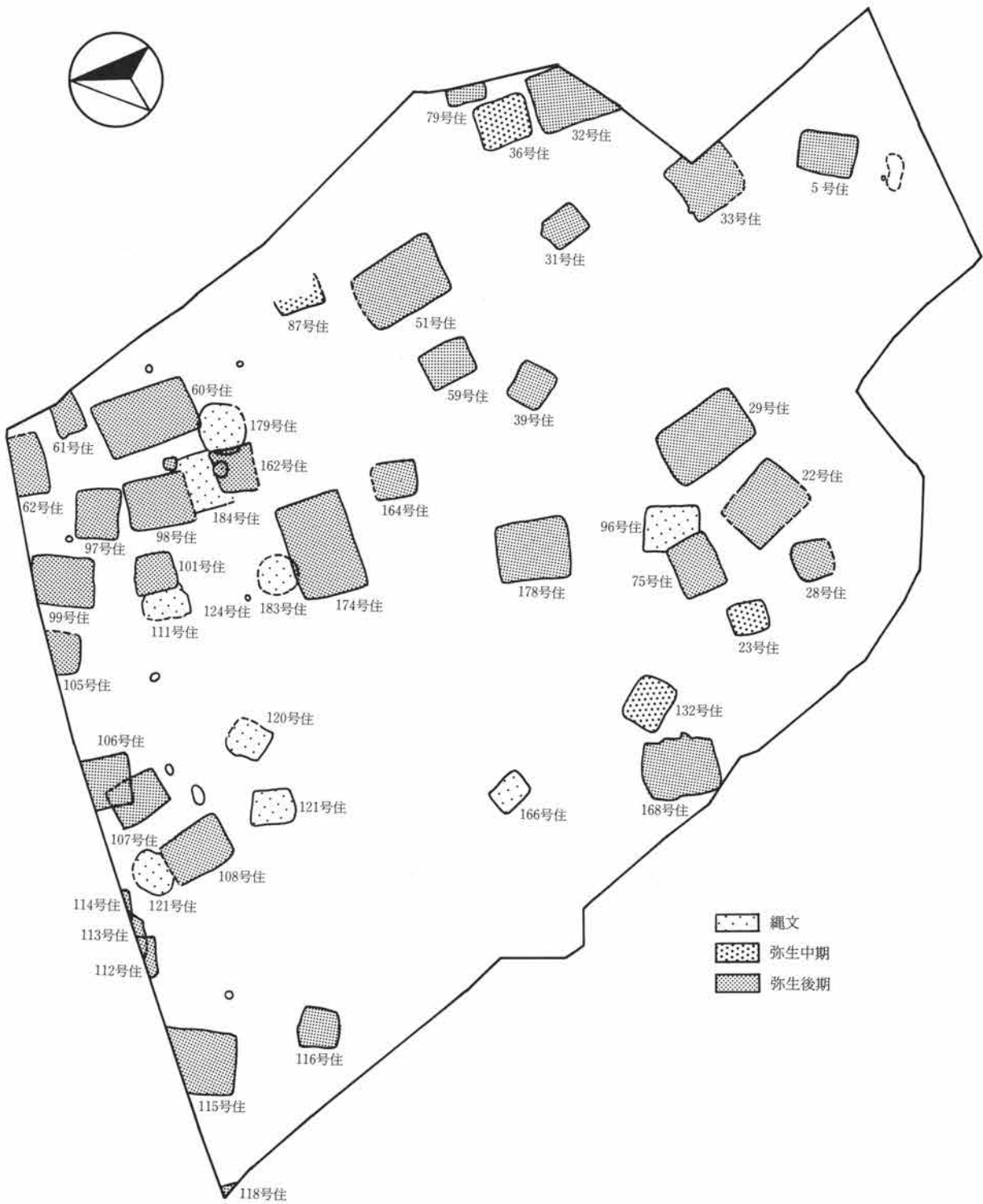
第4章 まとめ

第1節 縄文時代

本遺跡で調査した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡10軒(前期9)、埋甕2基、土坑2基である。前期の住居跡は重複で破壊されたものや範囲が不明瞭なものが多く、形状が明瞭に確認できた住居は9軒中5軒にすぎない。3軒(120・122・166住)は長方形に近い形状を示し、121号住は不整形、179号住は楕円形を示す。住居の面積は確認可能なものが4軒あり、最小11.59㎡、最大22.80㎡を示し、いずれも小規模住居である。炉、柱穴等住居内の施設が明瞭に確認できたものも少ない。柱穴が確認できた住居は166号住1軒のみで、主柱穴は4箇所を確認されている。炉の確認できた住居跡は4軒である。124・166・184号住は石囲炉、179号住は地床炉と思われる。111号住からは2基の埋設土器が検出された。北壁よりと南壁よりから、いずれも正位状態で出土している。9・17号土坑も縄文前期黒浜期の遺構と考えられる。124号住は炉辺部に石を配した敷石住居と思われる。炉内より検出された埋設土器から加曽利EIV式期の住居跡と考えられる。2基の埋甕も中期加曽利E式期の遺構である。

今回の調査では、前期前半(関山I式)から中期後半(加曽利EIV式)の遺物が検出された。関山I式期に比定される土器は、遺構外から検出された第204図-1のみである。口縁部の小破片で全体を把握できないが、貼付文、平行沈線が認められる。関山II式期と考えられる土器は第204図-2～13がある。いずれも遺構外からの検出である。すべて小破片で全体を把握できるものはない。第204図-9は片口土器で注口部に半截竹管の平行沈線、爪形文が施される。他はいずれも深鉢型土器と考えられる。第204図-10・11は口縁部に集合角状突起が認められ、平行沈線で文様構成されている。第204図-5は羽状縄文で菱形を構成、第204図-2・3はRLRの縄文を地文とし、平行沈線で菱形文を構成している。第204図-12は刺突文、RLのループ文で文様構成されている。今回の調査で最も多く検出された土器は、前期前半黒浜式・有尾式系の土器である。第8図96住1～11、第13図111住1～25、第19図120住1～18、第23・24図121住1～20、第26図122住1～17、第34図166住1～7、第38・39図179住1～36、第42・43図183住1～26、第49・50・51・52図184住1～33、第200図9土坑1～6、第201図17土坑1～6、第205図14・15がある。黒浜式・有尾式系の土器は深鉢形土器を主体とする。この時期の土器で顕著なのは、大きい波状口縁を持つ土器である。第28図-2・8、第42図-1・2・4、第49図-3等がこれにあたる。主幹文様は無地文上に平行沈線文と爪形文の盛行をみる。平行沈線文・爪形文は菱形・三角形構成をとるものを主流としている。これらの主幹文様は有尾式系のモチーフである。原体では、各種縄文が認められる。その中では単節が最も多く5割弱を占める。次いで無節が多く4割弱を占める。ループ縄文は少なく1割に満たない。縄文は羽状が多く4割強を占めている。

今回の調査で検出された住居跡10軒のうち9軒は縄文前期黒浜式期のものである。調査区内で検出された遺構で最も古い段階で、当遺跡において初めて居住活動が行われたのもこの時期である。1軒を除いて調査地の北端部に集中して検出されており、国道254号線を隔てたC区南端部にも同時期の住居跡が10数軒検出されていることから、当時の集落の中心がこの付近から北方にかけて展開されていたことが予想される。現在までに当該期の集落は分郷八崎⁽¹⁾・三ツ後沢⁽²⁾・糸井宮前⁽³⁾・見立溜井⁽⁴⁾・中棚遺跡等⁽⁵⁾で検出されているが、鍋川流域では当該期の集落の調査例はなくたいへん重要な調査例となっている。今後、国道254号線以北や他地域をあわせて細かい検討を加えることにより鍋川流域の縄文前期の様相がより鮮明にされるとと思われる。



第207図 縄文・弥生時代の遺構分布図

第2節 弥生時代の遺構と遺物について

今回報告する南蛇井増光寺遺跡B区から検出された弥生時代の遺構は、中期後半の竪穴住居跡4軒、後期の竪穴住居跡34軒、中期後半の埋甕2基、土坑1基、後期の埋甕1基、土坑2基である。しかしながら、本遺跡の弥生時代の集落はさらにC区以北に大きく広がり、住居跡の総数は約185軒（内後期181軒）におよんでおり、群馬県内でも最大規模を誇る集落址であることが判明している。これらのことから本遺跡の集落構造に細かい検討を加えることは竊川流域の弥生後期の集落構造を探る上で大変意義深いものがある。また、出土遺物もたいへん多く、膨大な量におよんでいる。良好な資料も数多く出土しており、竊川流域の弥生式土器の編年を考える上でたいへん重要な手掛かりになるものと思われる。しかし、今回報告分の住居跡は調査総数の約5分の1弱であり、今後報告されるC区以北を加えなければ、弥生集落および弥生式土器の総合的な考察はできないため、ここではB区で検出された中期後半と後期の住居跡および出土遺物のおよその傾向を書き記すに留めたい。

第1項 弥生時代中期後半の遺構・遺物について

1 遺構について

中期の住居跡は23・36・87・132号住の4軒である。出土遺物からいずれも中期後半の住居跡と考えられる。すべてB区南半部から検出されており、36・87号住は東より、23・132号住は西よりの地点より検出されている。しかし、1地点に集中しておらず、その分布は散在する傾向が窺える。また、中期後半の住居跡はC区以北からは検出されていないため、北側への広がりには考えられない。西・東への広がりも否定できないにしても、中期後半の集落は竊川の縁辺部に限られる小規模なものであったことが推定される。23・36号住の2軒は掘り込みは浅いがプランは明瞭で隅丸長方形とやや形のくずれた長方形を呈する。87号住は他の住居に切られておりプランは不明瞭であるが、残存部の形状から長方形もしくは方形を呈するものと推定される。132号住は表土掘削時に遺物が露出しており、調査時においても明瞭なプラン確認を行うことはできなかった。柱穴、炉等の住居内の施設等も検出できず住居とするにはやや疑問が残るが遺物の広がり大きく土坑等とは考えにくいことから調査時において住居としている。住居の規模が確認できたのは23号住の12.88㎡、36号住の26.00㎡の2軒である。いずれも30㎡以下の小規模な住居跡であり、大規模なものは認められない。竪穴の長軸、短軸の長さの比は短軸1に対して、23号住は1.23、36号住は1.13を示し、いずれも比率が小さい。柱穴が明瞭に検出されたのは36号住のみである。支柱穴は4本構造になると思われる。23・132号住は未検出、87号住は他住居に切られており2基のみの検出であった。壁下周溝、貯蔵穴はいずれの住居でも検出されなかった。炉は36号住で住居の北側やや東よりに長径25cm程の焼土面を検出することができた。やや不明瞭ではあるが地床炉の可能性が考えられる。その他の遺構としては、埋甕2基、土坑1基があげられる。いずれも中期の住居からは遠く離れた地点より検出されている。4号埋甕は受口状口縁を有する甕形土器が横位状態で、5号埋甕は完形の甕形土器が正位状態で出土している。出土遺物からいずれも住居と同時期の中期後半の遺構と考えられる。また、18号土坑からは中期後半の壺形土器2点と甕形土器1点が出土している。

2 弥生時代中期の遺物について

中期の土器の器種は壺・甕の2種類のみで他の器種は認められず、出土量も少ない。壺は14点出土している。完形品は認められず、器形が明瞭に確認できるものも少ない。壺は器高40cmを越える大型のものから10

cmに満たない非常に小型のものまで確認できた。大型の壺には胴部が大きく張り、頸部が筒状に細くくびれる形態のものが多い。小型壺は第77図36住一2、第175図132住一3の2点が出土している。大型壺には頸部のみに文様が施文されるものと口縁から胴部まで隈無く文様が施されるものの2種類が確認された。壺に見られる文様はヘラ描文と縄文が多く、櫛描文は第109図87住一2、第203図18土坑一2の2点に見られるだけである。口唇部の文様としては縄文が、口縁部から頸部の文様にはヘラ描平行線文、山形文、刺突文、縄文等が見られる。胴部にはヘラ描平行線文、山形文、連弧文、波状文、舌状文、刺突文、縄文などの文様が主に施文されている。第175図132住一1は比較的遺存状態が良く、器形も明瞭に把握できる。胴部は大きく張り、細い筒状の頸部から口縁にかけて緩やかに外反する。文様は原体Lの縄文を地文とし刺突文、ヘラ描山形文、平行線文、舌状文が口縁部から胴中位まで隈なく施文されており、平行線文より上の地文の縄文部分には赤色塗彩が施されている。器形的には阿島式あるいは須和田式土器に類似し、文様構成にも古い要素が認められることから、他の遺物と異なり中期の遺物の中でも最も古い様相を呈するものと考えられる。甕は12点の確認されている。口縁部が受口状を呈する形態のものと、単純に外反する形態のものが認められる。132住一5・8・9と4号埋甕はいずれも受口状口縁を有し、132住一7・10、5号埋甕、18土坑一3の口縁部は単純に外反する。甕に見られる文様は櫛描文が多く、縄文、ヘラ描文も若干認められる。受口状を呈する口縁部には地文に縄文が施され、ヘラ描山形文が施文されている。132住一5は口唇部に縄文が、18土坑一3は刻み目が施されている。頸部には櫛描平行線文、櫛描簾状文が認められる。胴部に見られる文様としては櫛状工具による横羽状文、縦羽状文、波状文、平行線文、T字文、ヘラ描の平行沈線文、山形文、「コ」の字重ね文、鋸歯文、円形浮文などが施文されている。以上、出土した土器はいずれも中期後半の竜見町式土器又は栗林式土器に比定される。第196図4号埋甕一1は長野県佐久市岩村田北西の久保遺跡⁽⁶⁾に見られる甕形土器に類似し、長野県佐久地方の強い影響が考えられる。第59図23住一1は清里庚申塚遺跡出土の竜見町式土器と同様の傾向が器形・文様等に窺える。今後、両者との詳細な比較検討が必要である。

石器は耕作具と考えられる石鍬3点第59図23住一2、第109図87住一5・6、加工具と考えられる扁平片刃石斧1点第109図87住一4、伐採用の磨製石斧と考えられる太型蛤刃石斧1点第109図87住一7、2次加工のある剥片1点132住一15が検出されている。扁平片刃石斧と太型蛤刃石斧はいずれも中期の特徴的な石器である。

3 今後の課題

南蛇井増光寺遺跡B区における弥生時代中期の住居および出土遺物について簡単にまとめてみた。遺構量、遺物量ともに少なく、集落としても小規模なものと考えられるが県内でも数少ない弥生中期の集落のひとつであり、たいへん重要な調査例になるものと思われる。

これまで、甘楽・富岡地方の弥生時代中期後半の集落址としては鑄川の支流高田川の左岸に位置する環濠集落小塚遺跡⁽⁸⁾が知られていた。しかし、その他には発掘調査例はなく、遺物散布地としても阿曾岡遺跡等の少数の遺跡が知られるにすぎなかった。だが、近年上信越自動車道建設に伴う発掘調査によって、富岡市に隣接する妙義町でも高田川の河岸段丘上に位置する古立東山遺跡、古立中村遺跡等で中期後半の住居跡や土坑等が検出され、調査例が僅かながらも増加してきている。今後、本遺跡とこれら近隣の遺跡との関連づけが重要な課題になるとと思われる。また、県内の平野部では高崎市新保遺跡、同浜尻遺跡、同雨壺遺跡、同上並榎南遺跡⁽¹⁰⁾、前橋市清里庚申塚遺跡等があり、これらの平野部の遺跡との対比・検討も必要である。さらに、本遺跡が長野県の佐久地方に近いという地域性を考えると佐久市岩村田北西の久保遺跡等の佐久地方の遺跡との対比・検討も重要な課題である。

第4章 まとめ

第2項 弥生時代後期の遺構と遺物について

1 弥生時代後期の住居跡

形状および面積について

南蛇井増光寺遺跡B区の住居跡はほとんどが隅丸長方形あるいは長方形を基調としているが、稀に隅丸方形、方形に近い住居跡が認められる。以下に住居跡規模の傾向を見て行くことにする。

第3表 弥生時代後期住居跡の面積・規模・形状等一覧表

面積(m ²)	住居No	規模(m)	長短比	形状				柱穴・ピット
				長方形	隅丸長方形	方形	隅丸方形	
①10m ² ~20m ² 未満 (12.91) 13.75 16.06 (16.86) 17.39 18.10	61	3.10×(4.50)	1:1.45	○				柱4
	31	3.50×4.40	1:1.25	○				柱4
	116	4.20×4.76	1:1.13		○			柱4+他1
	28	4.00×(4.34)	1:1.08		○			柱4+他1
	164	3.96×4.80	1:1.21		○			柱4+他1
	101	4.66×4.70	1:1				○	柱4
②20m ² ~30m ² 未満 (20.67) 21.44 24.97 26.77 27.72 (27.76)	162	4.50×4.70	1:1.04			○		柱2
	59	4.28×5.32	1:1.24	○				柱2・梯子穴2
	97	4.72×5.92	1:1.25		○			柱4
	75	4.80×6.20	1:1.29	○				柱4+他3
	5	4.70×6.18	1:1.31	○				柱4
	107	4.30×6.16	1:1.43	○				柱2+他5
③30m ² ~40m ² 未満 (32.92) (35.12)	99	5.34×6.66	1:1.25	○				柱4+他1
	108	5.08×(7.20)	1:1.44	○				柱4
④40m ² ~50m ² 未満 40.39 42.80 (46.50) 48.36 49.64	98	5.68×7.48	1:1.31	○				柱4
	168	6.00×8.40	1:1.40		○			柱4+他3
	33	6.70×7.04	1:1.05	○				柱4
	178	6.66×7.92	1:1.19	○				柱4
	22	6.24×8.12	1:1.30	○				柱4+他3
⑤50m ² ~60m ² 未満 (58.38) 59.00	32	6.60×(9.30)	1:1.41		○			柱3+他1
	29	6.28×10.08	1:1.60		○			柱4+他1
⑥60m ² 以上 63.76 70.12 78.58	60	6.32×10.60	1:1.67	○				柱4
	51	6.84×10.40	1:1.52	○				柱4
	174	7.48×10.80	1:1.44	○				柱6
⑦計測不可能 — — — — — — — — — —	39	—	—					—
	62	東西 6.90	—					柱2
	79	南北 4.20	—					—
	105	東西 4.40	—	○				柱2
	106	東西 5.78	—	○				柱2+他4
	112	東西 4.60	—					梯子穴2
	113	—	—					他2
	114	—	—					—
	115	東西 6.76	—	○				柱2+梯子穴2+他3
	118	—	—					—

方形を呈する住居は33・162号住が、隅丸方形に近い住居は101号住があげられる。33号住を除いてはどれも20m²前後の小規模の住居跡である。他はすべて長方形もしくは隅丸長方形を呈する。中でも長方形の住居の割合が高く後期34軒中18軒を占めている。隅丸長方形の住居がこれに次ぎ7軒が検出されている。他の7軒は重複あるいは調査区外等で検出部が少なく形状は不明瞭である。B区で検出された住居跡の形状は画一化の傾向が窺える。また、竪穴の長軸、短軸の長さの比は短軸1に対して長軸1~1.67の範囲にある。短軸に対して長軸が特に長い住居が29号住と60号住の2例で、比率は1.60と1.67を示す。長軸比が1.4を越える住居は9軒あるがこのうち6軒は40m²を越える大型住居である。面積40m²未満の小・中規模の住居は概ね1~1.3の範囲に含まれる。大型の住居は長軸方向に縦長になる傾向が顕著である。

住居の面積については最小は61号住の12.91㎡、最大は174号住の78.58㎡であり、住居規模には大きな差があることが認められる。小・中規模の住居は12.91㎡から35.12㎡の間に14軒を数えることができる。しかしながら、床面積は段階的で限られた数値への集中は認められない。大型住居は40.39㎡から78.58㎡の間に10軒を数えることができる。このうち、29・32・51・60・174号住の5軒は50㎡を越える面積を有する超大型の住居跡である。この間の床面積も段階的で一定の数値への集中は見られない。総体的に見ると相当規模の住居跡が段階的にかなりのバラツキを見せる傾向が窺え、大型住居の割合が比較的多いことも注目できる。

柱穴配置

B区で検出された後期の弥生住居中最大規模を誇る174号住は長軸を東西方向に持ち、支柱穴6本を有する。しかし、他の住居はいずれも住居のほぼ対角線上に方形配置された4本の支柱穴を基本としている。59・112・115号住は支柱穴の他に入口施設と思われる梯子穴が南壁際に2基検出されている。

壁 溝

B区で検出された後期の住居跡は原則として壁下周溝をもたない。壁下周溝が検出された住居は僅かに2例のみである。99号住では東壁沿いの一部に、112号住では南壁に沿って壁下周溝が検出されている。

貯 蔵 穴

99・115・164号住の3軒から貯蔵穴が検出されている。いずれも住居の南壁沿いからの検出である。99号住では、南東隅から長

軸77cm、短軸60cm、深さ21cmの半円形を呈する貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴の上部には完形の甕がつぶれた状態で遺存していた。115号住では、長軸66cm、短軸32cm、深さ22cmの半円形を呈する貯蔵穴が南西部より検出されている。164号住では、南東隅より楕円形を呈する貯蔵穴が検出されている。しかし、後期34軒中僅かに3軒の検出であり、その割合は僅かに9%である。

後期の炉跡について
弥生時代後期の住居跡の炉の位置は、住居の中軸線上、北側の主

第4表 南蛇井増光寺遺跡B区炉一覧表

住居No	位 置	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時 期	形 態 ・ 備 考
5	住居中軸線上北側支柱穴間	円 形	39	36	14	弥生後期	地床炉
28	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	55	48	6	弥生後期	地床炉
29	南西部	円 形	45	42	6	弥生後期	地床炉+炉石、炉石の代わりに土器片使用
32	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	65	32	5	弥生後期	地床炉+炉石
33	中央北より	楕 円 形	60	54	—	弥生後期	地床炉
36	北側・東より	三 角 形	25	17	—	弥生中期	地床炉?
59	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	42	34	16	弥生後期	地床炉+炉石
60	住居中軸線上北側支柱穴間の外側北壁より	楕 円 形	50	26	5	弥生後期	地床炉+炉石
75	西側支柱穴間	楕 円 形	81	75	9	弥生後期	地床炉+炉石
97	①北側支柱穴間やや東より ②西側支柱穴間やや内より	楕 円 形 不整楕円形	69 59	49 42	6 10	弥生後期	地床炉+炉石 地床炉
98	①住居中軸線上北側支柱穴間やや外側北壁より ②西側支柱穴間	楕 円 形 楕 円 形	64 —	52 —	8 —	弥生後期	地床炉+炉石炉内に赤彩の壺が遺存 地床炉+炉石、範囲不明瞭
99	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	41	31	5	弥生後期	地床炉+炉石
106	東側支柱穴間	楕 円 形	47	41	7	弥生後期	地床炉+炉石、炉西方に灰・炭化物の高まり
108	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	58	38	10	弥生後期	地床炉+炉石、L字状
115	南東部	楕 円 形	44	42	7	弥生後期	地床炉+炉石
116	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	50	47	6	弥生後期	地床炉+炉石
162	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	46	37	16	弥生後期	地床炉
164	住居中軸線上北側支柱穴間	楕 円 形	60	50	6	弥生後期	地床炉+炉石
168	住居中軸線上北側支柱穴間	—	—	—	—	弥生後期	地床炉+炉石?
174	①南東部 ②西支柱穴間 ③北西部	円 形 楕 円 形 楕 円 形	30 64 58	30 60 46	8 9 8	弥生後期	地床炉+炉石 地床炉+炉石 地床炉
178	①北支柱穴間 ②南西部	楕 円 形 —	56 —	41 —	14 —	弥生後期	地床炉+炉石 地床炉+炉石 (炉石は一部が残るのみ)
炉未検出の住居		22・23・31・39・51・61・79・87・101・105・107・112・113・114・118・132号住					

第4章 ま と め

柱穴間を原則とする。炉を検出できた20軒中、14軒（5・28・32・59・60・97・98・99・108・116・162・164・168・178住）が北側の主柱穴間もしくは北側の主柱穴間よりやや北壁よりに炉跡を有し、33号住は北側中央付近に炉を有する。その他は変則的で、29号住は住居の南西部、75号住は西側主柱穴間、106号住は東側主柱穴間、115号住は住居の南東部に炉を有する。また、97・98・174・178号住の4軒は複数の炉を有する。97号住を除いてはいずれも40㎡を越える大型住居である。特に174号住は78.58㎡とB区で最大規模を誇り、3基の炉が検出されている。炉の形態は地床炉、地床炉+炉石の2形態があり、他の形態は検出されなかった。地床炉は5・28・33・97住の炉2・162・174住の炉3の6例であり、残りの19例はいずれも地床炉+炉石という形態である。なお、29号住は炉石の代わりに土器片を使用している珍しい例である。以上のことから、この時期の最も一般的な炉は住居の中軸線上、北側の主柱穴間にあり、一石の炉石を据え炉石の北側を浅く掘りくぼめた形態であると考えられる。

2 弥生時代後期の遺物について

本報告書で取り上げた後期の土器の総点数は348点である。これらの土器群を器種別にみると壺・甕・台付甕・鉢・高坏・甑・ミニチュア土器・蓋・器台・片口を確認することができる。取り上げた遺物には比較的良好な資料が多いが小破片も含まれ、各器種別の総数については今後の詳細な検討によって若干の変動があることが予想される。

(1) 壺

破片を含めて53点が検出できた。比較的遺存状態が良く、良好な資料が数多く検出されている。口縁部は外反する形態のものと、強く外反するが端部で直立気味に立ち上がり、受口状になるものに分かれる。口縁が外反するものの割合が多く口縁部が明瞭に確認できた27点の内19点を数えることができる。口縁が受口状を呈するものは62住-1・2、99住-1・26、106住-1、108住-18、116住-2・4の8点である。

文様は、口縁部・頸部・胴上位に施文される例が多い。口唇部に文様が施される例はなく、口縁部も無文のものが多い。口縁を確認できた27点の内22点が無文である。口縁部に見られる文様としては波状文と縄文の2つがあげられる。波状文は第69図31住-1と第137図106住-1の2点に認められる。第126図99住-26は受口状口縁で端部に原体LRの斜縄文を施している。また、第148図108住-18も受口状口縁で縦方向に3条の突帯が認められる。頸部の文様は簾状文が多く頸部を明確に確認できた32点の内26点に認められる。2連止めのものが最も多く17点を占める。その他には3連止め、4連止め、5連止め等が認められ、等間隔止めものは確認できなかった。櫛歯の数は6本から13本まで確認できた。7本から11本に集中する傾向が窺えるが、バラエティーがある。その他の文様としては、第156図115住-1の矢羽根状文と第165図116住-3の簾状文上に円形浮文を貼付した例が認められる。

胴部は胴上位に文様が集中している。文様が確認できた24点の内、最も多く見られる文様は櫛描の波状文であり、13点を数えることができた。そのほとんどが頸部の簾状文直下に施文されている。波状文の次に多く見られる文様としては櫛描の横羽状文の7点があげられる。波状文と同様に頸部の簾状文と組み合わせられて文様構成されており、単独で施文される例は少ない。その他の文様としては、31住-2の波状文+簾状文、61住-1の簾状文、106住-1の斜走文+波状文、162住-1の横羽状文+波状文があげられるが、いずれも点数は少なく1点ずつの出土である。赤色塗彩を施したものは31住-3・13、61住-1、115住-1、116住-2・3・4・6・12、178住-5の10点が確認できた。115住-1は口縁部が朝顔状に開き、頸部にヘラ描矢羽根状文を施した赤色塗彩の土器であり信州地方の吉田式土器の影響が窺える。116住-3は胴部最大径が胴下位に位置し、胴下位に外稜をもつ。頸部は大きくくびれ口縁は大きく外反する。外面は頸部文様帯と

胴下位以外には全面に赤色塗彩が施されている。頸部に13本単位の3連止め簾状文を1段、簾状文直下にヘラ描斜格子文1段を施文し、簾状文上に円形浮文を等間隔で6個貼付したたいへん珍しい文様構成である。器形的には信州地方の箱清水式土器に類似し、信州地方の影響を強く受けた土器と考えることができる。

(2) 甕

破片を含めて167点が検出されている。比較的遺存状態の良好なものが多く、完形及び口縁から底部までの器形が明瞭な個体が23点確認できた。法量は大小さまざまで法量による分類も可能と思われる。

口縁部の形態は「く」の字状あるいは「弓」状に外反する例が圧倒的に多い。この他には、折り返し口縁、2段以上の多段口縁が認められる。胴部は胴中位付近で強く張り球形化するものが多い。

文様は壺と同様に口縁部・頸部・胴上位に施文されることが多い。口唇部に施文されることは少なく、第126図99住-34の刻みの付加と第137図106住-9のLRの縄文押圧の2例を数えるに過ぎない。口縁部も無文が多く、口縁を明瞭に確認できた117点の内82点約70%を占める。無文のもの他には波状文、縄文を施したものがある。波状文を施した例は第56図22住-1・3をはじめ21例を確認することができた。このうち端部のみに施文された例が7例認められた。106住-2は口縁部に、22住-1は口縁端部から胴上位まで波状文に限らず施文されている。口縁部に縄文を施した例は10例確認されている。61住-3、106住-8はRを、22住-2、106住-4はLを、61住-4、99住-30、106住-3・9はLRを、99住-27はLRLをいずれも斜位に施文している。口縁のみに施文されることは少なく、胴上位まで施文されるものが多い。

頸部にはほとんどのものに簾状文が施文されている。簾状文は2連止めで一段を施文するものが一般的で、簾状文を確認できた62点中47点を数えることができる。3連止め簾状文がそれに次いで12点確認されている。櫛歯の数は5本から11本の範囲に認められるが8本から10本の間に集中する傾向が窺える。施文方向は右回りのものがほとんどである。簾状文以外の文様は少なく波状文、縄文、横羽状文等がわずかに認められる。

胴部は上位に文様が集中している。文様としては、波状文、横羽状文、斜走文、縄文が認められ、頸部の簾状文、波状文等と組み合わせられて文様構成される例が多い。口縁部が無文で頸部に簾状文、胴上位に波状文を施文する例が最も多く31住-6など29例が確認されている。口縁部波状文、頸部簾状文、胴上位に波状文を施文する例は22住-3など9例がある。波状文のみで文様構成されるものは24点確認できた。口縁部が無文で頸部から胴上位まで波状文が施されるものが最も多く16例認められた。胴部に見られるその他の文様としては、横羽状文、斜走文、縄文があげられる。横羽状文、斜走文を施文した土器は29住-1、98住-3を初めとして、14例が確認できる。また、胴部に縄文施文の見られる土器は61住-3・4など16例を確認できた。甕に見られる文様構成は簾状文、波状文を主体とするが、横羽状文、縄文等も比較的多くみられ、バラエティーに富んでいる。

(3) 台付甕

台付甕は24点が確認できた。完形品は少なく、第137図106住-5、第170図116住-30の2点を数えるにすぎない。106住-5は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、台部はハの字状に外開する。文様は口縁に波状文が1段、頸部に簾状文、胴上位に波状文2段が施されている。116住-30は小型で無文の完形品である。文様構成は頸部に簾状文のみが施文されるものは第95図60住-16、第170図116住-32の2点があげられる。口縁部に波状文、頸部に簾状文、胴上位に波状文を施文した土器は106住-5、第142図107住-5、116住-28・29が認められる。頸部に簾状文、胴上位に波状文が施文される土器は第87図59住-6、第125図99住-15、第142図107住-6、第147図108住-8・9、第159図115住-9、第183図164住-23等が認められる。115住-10は胴上位に波状文のみを施文している。また、116住-31は口縁、台部ともに欠損しているが頸部に簾状文、

第4章 まとめ

胴上位に原体LR Lの縄文を施文した珍しい例である。台付甕で縄文を施文した土器は1例のみである。台部のみのものが60住-17・18、99住-16、107住-6、168住-9、6土坑-5があげられる。第186図168住-8・9は古式土師のS字口縁部と外面にハケメ調整の見られる台部と思われる。

(4) 鉢

鉢は40点が出土している。内外面に赤色塗彩が施されたものが多く21点を数えることができる。17点は無彩である。第159図115住-13・14は内面の一部に赤色塗彩の痕が認められる。器形は体部が内湾する形態のものと、体部が直線的に開き逆台形を呈する形態のものに大きく分けられる。

(5) 高 坏

高坏は35点を確認できた。赤色塗彩を施したものが一般的で25点を数えることができる。完形品はなく、脚部のみのもものが12点、坏部のみのもものが10点と多数を占める。比較的遺存状態のよいものが数例認められる。第99・100図61住-7・8、第102図62住-7、第142図107住-8、第170図116住-40はいずれも坏部が碗状を呈し、脚部はハの字状に外開する。第102図62住-4・5、第125図99住-20は坏中で屈曲し、口縁部は外反する。また、99住-20は口唇部に刻み目が認められる。第147図108住-13は口縁部が直立気味に立ち上がりやや受口状を呈する。第126図99住-21は多段口縁で外面の粘土帯上に指頭圧痕が観察でき、赤井戸式土器の影響が考えられる。第96図60住-23、第133図105住-2、第160図115住-16、第180図162住-8はいずれも大型品の坏部で口縁部で外反する。第83図51住-10、第87図59住-8、108住-13には坏部と脚部の接合部に棒状のホゾが観察でき、製作方法の一端を示すものとして注目される。

(6) 甌

甌は11個体が確認できたが完形品はない。なお、この他に甕形の土器を焼成後甌に転用したものが1例確認されている。器形が明瞭にわかるものは1点のみで、他はすべて下半部のみを検出である。第57図22住-8は、鉢形の形状で、底部中央に径10mm程の焼成前の穿孔が一孔あり、口縁部は折り返し口縁である。第87図59住-10、第100図61住-9・10、第126図99住-23・25、第142図107住-7、第148図108住-16・17、第170図116住-41は下半部の破片でいずれも底部に焼成前の一孔を穿ってある。第125図99住-24も下半部の破片であるが他のものと異なり、径3mm程の小円孔が多数確認できる。第56図22住-1は甕形土器の完形品であるが、底部に焼成後の一孔が穿たれ、甕として使用したものを甌に再利用したものと思われる。

(7) ミニチュア土器

ミニチュア土器は9例が確認されている。第160図115住-19・20、第186図168住-11はいずれも成形の粗雑な手捏土器である。第100図61住-11、第148図108住-18はいずれも鉢型の土器である。また、第96図60住-27、第102図62住-12、第170図116住-42・43はすべて壺型の形状を呈するものと思われる。

(8) 蓋

蓋は59住-11と61住-12、162住-6の3例が確認できた。59住-11は径6.5cmで内外面共に輪積み成形痕が明瞭に残る。61住-12、162住-6は一部のみで遺存で明瞭ではないが蓋のつまみ部と思われる。

(9) 器 台

第102図62住-8の1点のみの出土である。器受部から脚部に径1.2cm程の貫通孔が見られ、脚部に4個の円孔を穿っている。

(10) 片 口

3点を確認できた。完形品はなく、形状の明瞭なものは、第170図116住-38の1点のみである。内外面に赤色塗彩を施し、鉢状の形態で張り出しの弱い注ぎ口を持つ。体部は直線的に外傾し、口縁はやや内湾する。

また、口縁部には焼成前の小円孔が一孔ある。第126図99住一37は鉢状の形態の口縁部片で内外面に赤彩を施している。第160図115住一18は口縁部片で、他の2個体と異なり形状は深い椀状を呈するものと思われる。口縁部は僅かに内湾し、注ぎ口の張り出しは弱い。いずれも樽式土器に見られる片口の一般的な器形である。また、第118図98住一7は口縁部を片口状に欠いた鉢であるがその形状から片口になる可能性が考えられる。

(11) 赤色塗彩の土器・土製品

器面を赤色塗彩した土器は62例が確認できた。いずれも住居内からの出土である。赤色塗彩の施された器種は壺・鉢・高坏・片口の4種である。塗彩を施した壺は11例をあげることができる。壺には頸部の文様帯を除いた外面全体と内面の口縁部に塗彩を施したものが一般的である。鉢は23例が確認されている。そのほとんどが内外面に塗彩を施したものである。片口は2例が確認されている。鉢と同様にいずれも内外面に塗彩を施している。高坏は25例が確認されている。坏部は内外面に、脚部は外面に塗彩が施されている。この他に赤色塗彩を施した遺物としては第138図106住一11、第148図108住一23の土製紡錘車、第170図116住一44の土製品があげられる。

(12) 土製品について

弥生後期の土製品で最も多く
検出されたものは土製紡錘車である。住居内より8点、遺構外より1点、合わせて9点が出土している。完形品は少なく108住の2点とグリッド出土の1点の計3点である。他はいずれも2

第5表 南蛇井増光寺遺跡B区出土紡錘車一覧表

No	出土遺構	遺存状態	材質	径	厚さ	孔径	重量	時期	備考
1	B-60住	1/2	土製	4.3	1.0	1.1	11	弥生後期	
2	B-62住	3/4	土製	(8.4)	1.8	(1.0)	63	弥生後期	大型
3	B-62住	3/4	土製	(5.0)	1.1	(0.8)	16	弥生後期	
4	B-99住	1/2	土製	4.0	1.4	0.6	15	弥生後期	
5	B-101住	1/2	土製	4.6	1.2	0.5	15	弥生後期	
6	B-106住	1/2	土製	5.4	1.5	0.7	29	弥生後期	表面と側面に赤色塗彩痕
7	B-108住	完形	土製	5.4	1.2	0.6	45	弥生後期	
8	B-108住	完形	土製	5.5	1.3	0.8	55	弥生後期	全面に赤色塗彩痕
9	Br-25G	完形	土製	3.8	1.6	0.5	27	弥生後期	

分の1程の残存率を示す。大きさは最小がグリッド一29の径3.8cm、最大は62住一14の径8.4cmであるが、他は4.0~5.5cmの間に集中する。形状はいずれも円盤形で、両面がほぼ平坦なものと、片面が平坦で他面がやや膨らみを持つものに分かれる。106住一11は表面と側面に赤色塗彩の痕が見られ、108住一23は全面に赤色塗彩を施した痕が観察できる。赤色塗彩の観察できる土製紡錘車は群馬郡群馬町の西浦北遺跡⁽¹⁵⁾、長野県佐久市西裏遺跡⁽¹⁶⁾で検出例があるが、出土例の少ない遺物として注目される。その他には、61号住より土製勾玉と思われる土製品が出土している。また、116住一44は下部に棒状の突起を持ち赤色塗彩を施した土製品と思われるが原型を把握できないごく一部の検出であるため、形状・用途ともに明瞭ではない。

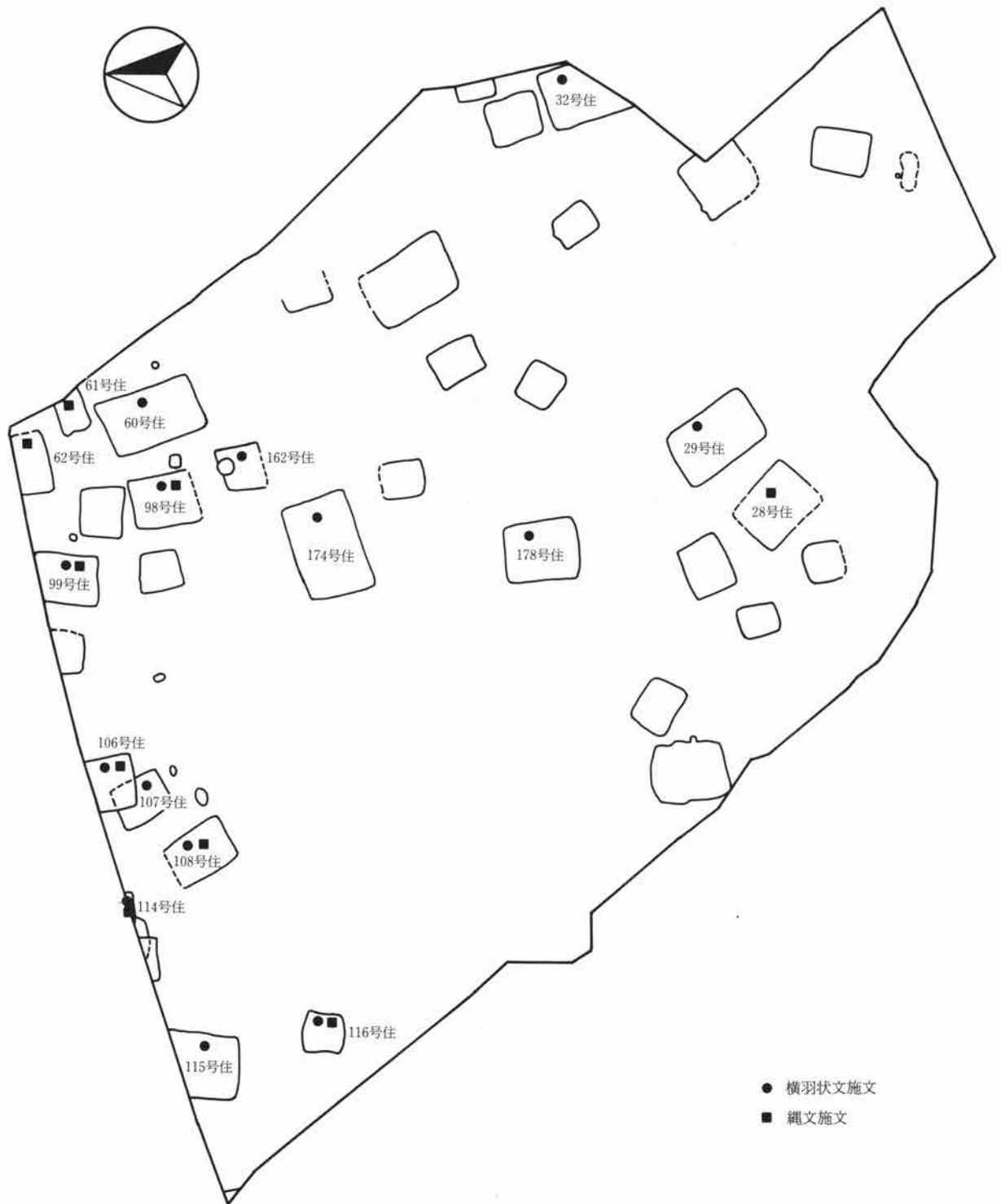
(13) 文様構成の地域的特色について

弥生時代後期の土器の多くは口縁部・胴部に施された櫛描の波状文と頸部の簾状文を主とする文様で構成される。しかし、本遺跡ではこれらの土器に混じって縄文施文土器21点、櫛描横羽状文・斜走文施文土器24点が検出されている。縄文施文土器、横羽状文・斜走文施文土器はいずれも単独で出土することなく波状文施文土器と共伴する。第208図はその出土状況を表した図である。

櫛描横羽状文・斜走文施文の土器について

櫛描横羽状文・斜走文の施文された土器は住居内より22点、土坑より2点、計24点が出土している。櫛描横羽状文・斜走文を施文した後期の土器は県内の他地域では検出例が少なく、本遺跡を特色づける土器として注目される。検出された器種は、壺・甕の2種類である。

文様構成は口縁部が無文で、頸部に簾状文(2連止め・3連止め)、胴上位に横羽状文を施したものが最も多く壺4点(98住一2、99住一2、108住一2、115住一4)、甕4点(98住一3、99住一33、116住一24、174



第208図 横羽状文・縄文施文土器出土分布図

第6表 南蛇井増光寺遺跡B区櫛描横羽状文・縄文施文土器一覧表

遺物番号	器種	口縁形態	縄文	櫛描羽状文	文様構成			備考
					口縁部	頸部	胴部	
22住-2	甕		○		口縁～胴上位に原体Lの斜縄文			
29住-1	甕			○		2連止め簾状文	櫛描斜走文・簾状文	
-9	甕			○		櫛描横羽状文・簾状文		
32住-5	甕			○		2連止め簾状文	櫛描斜走文	
60住-11	甕			○		2連止め簾状文	波状文・櫛描横羽状文	
61住-3	小型甕		○		口縁～胴上位原体Rの斜縄文			
-4	小型甕	折り返し	○		口縁～胴中位原体LRの斜縄文			
62住-11	甕		○			頸部～胴部原体LRの斜縄文		
98住-5	甕	多段口縁	○		頸部～胴上位原体RLの斜縄文			
-2	壺			○		2連止め簾状文	櫛描横羽状文	
-3	甕			○		2連止め簾状文	櫛描横羽状文	
-13	甕			○		3連止め簾状文	櫛描横羽状文	
99住-10	甕	多段口縁	○		頸部～胴上位原体Lの斜縄文			
-13	小型甕		○		頸部～胴上位原体RLの斜縄文			
-14	小型甕	多段口縁	○		頸部～胴上位原体Rの斜縄文			
-26	壺	受口状	○		LR斜縄文			
-27	甕		○		口縁～胴上位に原体LRの斜縄文			
-30	甕		○		LR斜縄文			
-35	甕		○				原体Lの斜縄文	
-2	壺			○		簾状文	櫛描横羽状文	
-5	甕			○		3連止め簾状文	横羽状文・3連止め簾状文	
-12	甕			○		簾状文(不規則)	横羽状文・簾状文(不規則)	
-32	甕			○	波状文	頸部～胴部櫛描斜走文		
-33	甕			○		簾状文	櫛描横羽状文	
106住-3	甕		○		口縁・胴上位にLR斜縄文、頸部ナデ、口縁端部にrの捺糸			
-4	甕		○		口縁～頸部原体LRの斜縄文			
-8	甕		○		Lの斜縄文			
-9	小型甕		○		口唇部LR	簾状文	波状文	
-1	壺	受口状	○		端部波状文	簾状文	櫛描斜走文・波状文	
107住-9	甕			○		2連止め簾状文	櫛描横羽状文	
108住-20	甕		○		頸部～胴部に原体LRの斜縄文			
-2	壺			○		簾状文	櫛描横羽状文	
114住-5	甕		○		原体RLの斜縄文			
-4	甕			○		簾状文	櫛描横羽状文	
115住-4	壺			○		3連止め簾状文	櫛描横羽状文	
116住-22	甕		○		頸部～胴上位原体LRの斜縄文			
-23	甕		○		口縁～胴上位原体LRの斜縄文			
-31	台付甕		○			3連止め簾状文	原体LRの斜縄文	
-12	壺			○			櫛描横羽状文	赤色塗彩
-24	甕	多段口縁	○			2連止め簾状文	櫛描横羽状文	
162住-1	壺			○		2連止め簾状文	櫛描横羽状文	
174住-4	小型甕			○		2連止め簾状文	櫛描横羽状文	
178住-5	壺			○		簾状文	櫛描横羽状文	赤色塗彩
6土坑-3	甕			○		2連止め簾状文	櫛描横羽状文あるいは斜走文	一部波状文
7土坑-1	甕			○		2連止め簾状文	櫛描横羽状文	

住-4)が確認されている。また、178住-5の壺1点と98住-13、107住-9、114住-4、7土坑-1、6土坑-3の甕5点はいずれも口縁部を欠損し、詳細は明らかでないが、同様の文様構成となっている。このうち、116住-24は粘土帯接合痕が明瞭に残る多段口縁で赤井戸式土器の影響も認められる。その他の文様で構成される土器は点数がすくなくいずれも1点ずつの出土である。口縁部は無文のものが多く、106住-1は口縁端部に波状文が認められる。頸部は簾状文が施文されるのが一般的である。胴部の文様としては、斜走文+簾状文(29住-1)、横羽状文+簾状文(99住-5・12、29住-9)、波状文+横羽状文?(60住-11)、斜走文(32住-5)、横羽状文+波状文(162住-1)、横羽状文(116住-12)、斜走文+波状文(106住-1)が認められる。以上、櫛描横羽状文・斜走文施文土器に見られる文様構成の傾向を簡単にまとめてみた。今

第4章 まとめ

まで、群馬県地方では弥生時代後期の樽式土器に櫛描横羽状文・斜走文が施文される例は少なかった。しかし、信州の佐久地方では栗林式土器を出自とする櫛描横羽状文・斜走文が吉田式の主文様として盛行し、途切れる事なく後期の新しい段階まで継承され、古墳出現期に終焉を迎える。これらは、信州の他地域では見られず、佐久地方の地域的特色となっている。⁽¹⁷⁾99住-32の甕に見られる波状文+斜走文の文様構成は佐久地方の土器と類似し、佐久地方の強い影響が窺える。佐久地方の土器は口縁から胴部まで文様が限なく施文されることを考慮すると、その他の土器は、文様構成の上からは違いが見られるが、県内の他地域では検出例の少ない櫛描横羽状文・斜走文施文の土器が多数検出されたことは佐久の影響を考慮する必要がある。今後報告されるC区以北の資料を加えて更に詳細な検討を加えて行くことが重要な課題である。

縄文施文土器

縄文施文土器は21点が検出されている。いずれも住居内からの出土であり、22・61・62・98・106・108・114・116住の9軒から検出されている。縄文施文土器が単独で出土する住居はなく波状文あるいは櫛描横羽状文施文の土器が共伴する。器種は壺・甕・台付甕が確認されている。壺・台付甕は僅か1点ずつで、他の19点はすべて甕である。法量の大きいものは少なく、口径は12cm前後に集中する傾向が窺える。器高の確認できた土器は僅か3点で12cm前後が2点、17cmが1点である。大型品は少なく、小～中型品がほとんどである。口縁部の形態は頸部から口縁にかけて「く」の字状、あるいは弓状に外反するものが多い。61住-4は折り返し口縁、98住-5、99住-10・14は多段口縁、99住-28は受口状口縁である。原体はRの斜縄文2例(61住-3、99住-14)、Lの斜縄文が4例(22住-2、99住-10・35、106住-8)、LRの斜縄文が9例(61住-4、62住-11、99住-26・30、106住-3・4・9、108住-20、116住-23)、RLの斜縄文が3例(98住-5、99住-13、114住-5)、LRLの斜縄文が3例(99住-27、116住-22・31)認められた。単節が最も多く約60%を占める。施文位置は破片が多くやや不明瞭なものもあるが、口縁から胴上位あるいは頸部から胴上位に施文される例がほとんどである。櫛描横羽状文と合わせて注目される土器である。106住-9は中期の遺物の可能性が考えられるが、他はいずれも赤井戸、吉ヶ谷式の外来系土器と考えられる。

(14)石器について

南蛇井増光寺遺跡B区の弥生時代後期の住居跡からは、磨製石鏃1点、打製石鏃3点、石鏃17点、磨製石包丁1点、磨石3点、スクレイパー4点、砥石6点、石皿1点、剥片4点等が出土している。なかでも、耕作具と考えられる石鏃の出土量が圧倒的に多いことが注目される。石鏃の石材は硬質泥岩がもっとも多く、その他に粗粒安山岩、変質安山岩、細粒安山岩、緑色片岩、変玄武岩などが認められる。98住-15の磨製石包丁も注目される遺物の一つである。磨製石包丁は県内での出土は極めて少なく明瞭に確認されているのは安中市荒神平遺跡、高崎市新保田中村前遺跡、前橋市二之宮町宮川遺跡等で検出されている僅か8例に過ぎない。⁽¹⁸⁾本遺跡では、後期の比較的大型の住居98号住居跡の覆土中より検出されている。石質は珪質頁岩で、形状は外彎刃で背部が弧を描く杏仁様形態を呈する。多量に検出された石鏃と合わせて詳細な検討が必要である。

3 今後の課題

以上、南蛇井増光寺遺跡B区の弥生時代後期の住居跡及び出土遺物について概要をまとめてみた。今回の報告は、全報告分(181軒)の5分の1弱に過ぎず、その全容を明らかにするにはC区以北の報告を待たなければならない。今回の成果に、C区以北の報告を加えさらに詳細な検討を加えることで本地域の弥生後期の集落構造や土器編年がより明瞭に解明できるものと思われる。また、本遺跡と同じ富岡市内に所在する内匠上之宿、⁽¹⁹⁾内匠日影周地、⁽²⁰⁾下高瀬寺山、⁽²¹⁾中高瀬庚申山遺跡では、上信越自動車道の調査に伴って、後期の小集

落が検出されている。さらに、同調査に伴って検出された比高差60mの丘陵上に展開する弥生後期の⁽²⁾大集落中高瀬観音山遺跡では、100軒以上の住居跡が検出されている。今後、本遺跡の成果に⁽²⁾鐮川流域のこれらの遺跡を加え、詳細な比較検討を行うことによって今まで明らかでなかった⁽²⁾鐮川流域の弥生後期の集落構造を明らかにして行くとともに、各遺跡間の関連を考えていくことが重要な課題である。

註

- (1) 北橋村教育委員会 『分郷八崎遺跡』 1986年
- (2) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『三後沢遺跡・十二原遺跡』 1986年
- (3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『糸井宮前遺跡II』 1986年
- (4) 赤城村教育委員会 『見立溜井遺跡』 1985年
- (5) 昭和村教育委員会 『中棚遺跡』 1985年
- (6) 佐久埋蔵文化財調査センター 『北西の久保遺跡』 1987年
- (7) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『清里・庚申塚遺跡』 1981年
- (8) 富岡市教育委員会 『小塚・六反田・久保田遺跡』 1987年
- (9) 富岡市教育委員会 『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』 1987年
- (10) 妙義町教育委員会 『古立東山遺跡、古立中村遺跡、八木連裡沢遺跡、八木連荒畑遺跡』 1990年
- (11) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『新保遺跡II』 1988年
- (12) 高崎市教育委員会 『浜尻遺跡』 1981年
- (13) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『熊野堂遺跡III地区、雨壺遺跡』 1984年
- (14) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上並榎南遺跡』 1985年
- (15) 群馬町教育委員会 『西浦北遺跡』 1989年
- (16) 佐久埋蔵文化財調査センター 『西裏・竹田峯遺跡』 1986年
- (17) 小山岳夫氏(長野県御代田町教育委員会)のご教示による。
- (18) 平野進一・相京建史 『群馬県出土の磨製石包丁』『群馬県立博物館紀要第12号』 1991年
- (19) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『内匠諏訪前遺跡、内匠日影周地遺跡』 1992年
- (20) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『年報9』 1990年
- (21) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『年報9』 1990年
- (22) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『年報9・10』 1990・1991年

南蛇井増光寺遺跡I整理参考文献

- (1) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』 1986年
- (2) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『日高遺跡』 1982年
- (3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『有馬遺跡II』 1990年
- (4) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『戸神諏訪遺跡』 1990年
- (5) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『熊野堂遺跡(1)』 1984年
- (6) 群馬県立博物館 『笹遺跡』 1966年
- (7) 高崎市教育委員会 『引間遺跡』 1979年
- (8) 青木和明、飯島克巳、若狭 徹 『箱清水式土器と樽式土器』『弥生文化の研究』第4巻 1987年
- (9) 北武蔵古代文化研究所、群馬県考古学談話会、千曲川水系古代文化研究所 第7回三県シンポジウム『東日本における中期後半の土器』 1986年
- (10) 井上唯雄、柿沼恵介 「入門講座、弥生土器—北関東1〜4」『考古学ジャーナル』140・141・143 1977年 145 1978年
- (11) 群馬県考古学談話会 第3回三県シンポジウム群馬県資料 『弥生終末期の土器—四世紀の土器』 1982年
- (12) 小山岳夫 「地域編年の再検討」『信濃』42—10 1990年
- (13) 飯島克巳・若狭 徹 「樽式土器編年の再構成」『信濃』40—9 1988年
- (14) 佐藤明人 「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬の考古学』 1988年
- (15) 相京建史 「清里・庚申塚遺跡のその後」『群馬の考古学』 1988年
- (16) 平野進一 「弥生土器の終焉」『群馬の考古学』 1988年
- (17) 群馬県考古学研究所他 『縄文前期の諸問題』 1987年
- (18) 大木紳一郎 「赤井戸式土器の祖型について」『研究紀要』8 1991年
- (19) 外山和夫・津金沢吉茂・井上 太 『群馬県地域における弥生時代資料の集成I』 群馬県立博物館報告第14集 1978年
- (20) 北武蔵古代文化研究所、群馬県考古学談話会、千曲川古代文化研究所 第5回三県シンポジウム資料 『出現期古墳の地域性』 1984年

第3節 井出遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子、福島道広

長田正宏

帯広畜産大学生物資源科学科 中野益男

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと⁽¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子⁽²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子⁽³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁽⁴⁾。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて井出遺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

1. 土器および土壌試料

井出遺跡は3世紀頃のものとして推定されている。分析する土器試料は遺構内から単独で出土した直径約50cm、深さ約30cmの甕である。この甕が出土した地点は住居跡の外であり、そこから10mくらい離れた所に弥生時代の集落跡が存在している。試料採取地点を図1に示す。試料No.1からNo.7までは土壌試料である。このうち試料No.1は甕内の中心部分から、No.2からNo.5は甕内底部のそれぞれ北東、南東、南西、北西部分から採取した。試料No.8からNo.13までは土器試料で、試料No.8からNo.11はそれぞれ上記土壌試料No.2からNo.5の土器と接していた部分、No.12は甕の西側面、No.13は甕の東側面を分析した。

2. 残存脂肪の抽出

土器および土壌試料40～563gに3倍量のクロロホルム-メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、

再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は0.0008~0.0254%、平均0.0063%であった。この値は出土土壌を土壌墓かどうか判定した宮城県摺萩遺跡の土壌試料の0.0030%⁽⁵⁾、兵庫県寺田遺跡の土壌試料の0.0016%⁽⁶⁾、出土遺物を甕棺と判定した静岡県原川遺跡の土壌試料の0.0041%⁽⁷⁾と比べるとほぼ同じくらいの値で、分析には十分量であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。この単純脂質には遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサノール-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィー⁽⁸⁾で分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

土壌試料No.1からNo.7では主要な脂肪酸は中級脂肪酸のパルミチン酸で全体の約31~37%を占めていた。一般に考古遺物はパルミチン酸の分布割合が高い。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解してパルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う不植物から来していると推定される。パルミチン酸の次に多いのがパルミトレイン酸またはオレイン酸でほぼ同程度の20%前後含まれており、その次に多いのがステアリン酸で約4~14%を占めていた。これら中級脂肪酸は全体の80%以上を占めていた。また高等動物、特に臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられるベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら2つの合計で約5~13%と比較的少なく分布していた。甕内部土壌試料No.1~No.5は甕外側土壌試料No.6およびNo.7とほぼよく似た脂肪酸組成のパターンを示していたことから、これらは同質の土壌で植物腐植土の影響を強く受けていることを示している。

土器試料No.8からNo.13では甕底部である試料No.8からNo.11と甕側面である試料No.12、No.13とでは脂肪酸組成パターンが若干異なっていた。試料No.8~No.11では主要な脂肪酸はパルミチン酸で全体の約38~62%を占めていた。試料No.8からNo.10ではオレイン酸が検出されず、パルミトレイン酸、ステアリン酸は各々約6~9%、12~15%分布していた。試料No.11ではパルミトレイン酸、オレイン酸、リノール酸が各々約14%、11%、8%分布していた。高級脂肪酸のベヘン酸、リグノセリン酸は試料No.8~No.10でそれら2つの合計で約14~21%と土壌試料に比較して高く分布し、動物遺体の存在の可能性を示唆していた。試料No.11では炭素数20以上の脂肪酸は全く検出されなかった。側面土器試料No.12、No.13では主要な脂肪酸はパルミチン酸であるが、その分布割合は約25~30%と、他の土器、土壌試料よりも低く、多少性質の異なる脂肪酸組成パターンを示した。

第4章 まとめ

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から4~18種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

動物由来のコレステロールは土壌試料No.1からNo.7で約5~6%、試料No.8からNo.13ではNo.12の7%を除き約14~19%と多く分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4~8%含まれている。試料No.12を除く他の土器試料のいずれもその数値をはるかに上回っていた。植物由来のシトステロールは試料No.1で9%、No.10で16%と少なかったが、他の試料中では約22~46%という、一般的な植物腐植土にみられる平均的な含有量であった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は0.6以上である。⁽⁹⁾試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように土壌試料No.1からNo.7では試料No.1でその値が0.6であった他はすべて0.1前後の値であった。土器試料No.8~No.13では試料No.10、No.11、No.13が0.6以上の値を示し、他は0.2~0.5の値を示した。従って土器試料には動物脂肪が残存していた可能性が高い。甕内の土壌試料も甕外の対照土壌試料もその値が高くなかったのは、甕内に後から周辺土壌が落ち込み、両者がほぼ似通った性質を示したためと思われる。このことは試料No.1からNo.7の脂肪酸組成パターンがほぼ同じであることもよく一致する。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に土壌を再葬墓土壌と判定した宮城県摺萩遺跡、土壌を土壌墓と判定した兵庫県寺田遺跡、甕棺を幼児埋葬用と判定した静岡県原川遺跡の土壌試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図4に示す。土壌試料No.1からNo.7と土器試料No.12、No.13は摺萩遺跡の土壌試料と共に相関行列距離0.2以内でA群を形成した。残りの土器試料No.8からNo.11は原川遺跡、寺田遺跡の土壌試料と共に相関行列距離0.2以内でB群を形成した。またA、B群は相関行列距離0.25以内にあり互いに類似していることを示している。以上のことから井出遺跡から出土した甕とその内外の土壌はヒトが埋葬されていた土壌や甕棺の試料に類似しているといえる。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、

第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を第215図に示す。試料No.9を除きいずれの試料も第2象限内に分布した。第214図の樹状構造図でA群を形成した試料は第2象限内のX軸に近い位置に分布し、B群を形成した試料は第1象限から第2象限のX軸上の幅広い範囲で、Y軸上も原点から遠く離れた位置に分布した。これらの位置での分布は高等動物の体脂肪、骨油、臓器の存在を示唆している。従って出土土器内には高等動物遺体が存在した可能性が強い。

7. 総括

井出遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析を行った。甕土器には動物遺体の存在を示唆するベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸、動物性のコレステロールが分布していた。それらの数理解析の結果から、この土器はヒト遺体の埋葬用の甕棺であった可能性が強い。特に甕の大きさや摺藁遺跡、原川遺跡の土壌試料との類似度から判断すると、幼児埋葬用であった可能性もある。

参考文献

- (1) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」 『Archaeo. Physika.』.10巻、1979、pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻、1981、pp146.
- (3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle: 「Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻、pp33.
- (4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6)、1984、pp124.
- (5) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「摺藁遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 宮城県教育委員会.
- (6) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏: 「寺田遺跡土墳墓状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.
- (7) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡Ⅰ—昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79.
- (8) M.Nakano and W.Fischer: 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.』, 358巻、1977、pp.1439
- (9) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻、1984、pp40.

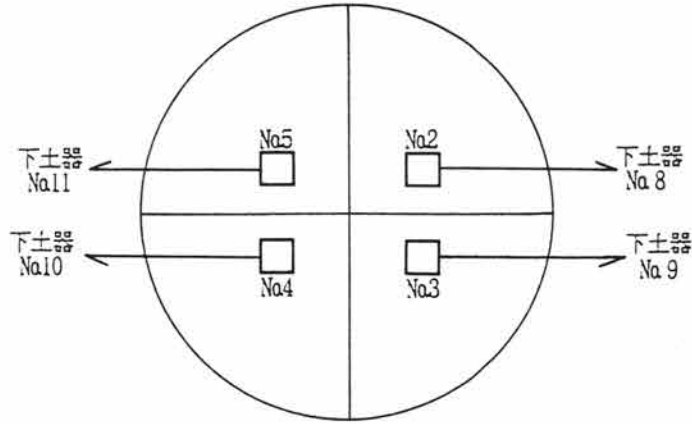
第4章 まとめ

第7表 土器および土壌試料の残存脂肪抽出量

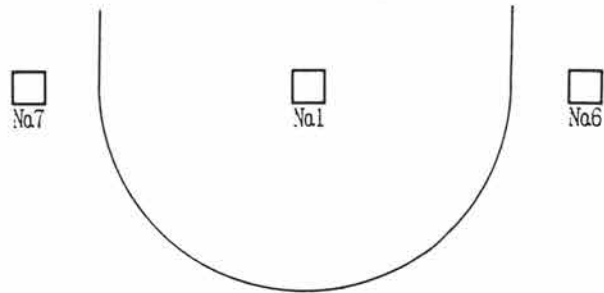
試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	甕内中央土壌	450.1	14.6	0.0033
2	甕内北東底部土壌	440.9	58.9	0.0134
3	甕内南東底部土壌	446.9	12.5	0.0028
4	甕内南西底部土壌	457.1	27.9	0.0061
5	甕内北西底部土壌	457.2	9.2	0.0020
6	甕外東側面土壌	454.9	15.1	0.0033
7	甕外西側面土壌	466.3	17.2	0.0037
8	No. 2 下底部土器	158.3	40.3	0.0254
9	No. 3 下底部土器	562.7	4.3	0.0008
10	No. 4 下底部土器	39.6	0.9	0.0023
11	No. 5 下底部土器	173.6	5.6	0.0032
12	甕西側面土器	276.3	9.3	0.0034
13	甕東側面土器	163.1	19.2	0.0118

第8表 試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	4.82	8.76	0.55
2	5.18	33.15	0.16
3	5.34	40.72	0.13
4	6.49	46.05	0.14
5	5.55	35.47	0.16
6	5.92	31.05	0.19
7	—	26.54	0
8	13.57	28.29	0.48
9	16.32	42.97	0.38
10	15.03	15.91	0.94
11	14.75	22.32	0.66
12	7.06	30.93	0.23
13	18.88	25.79	0.73

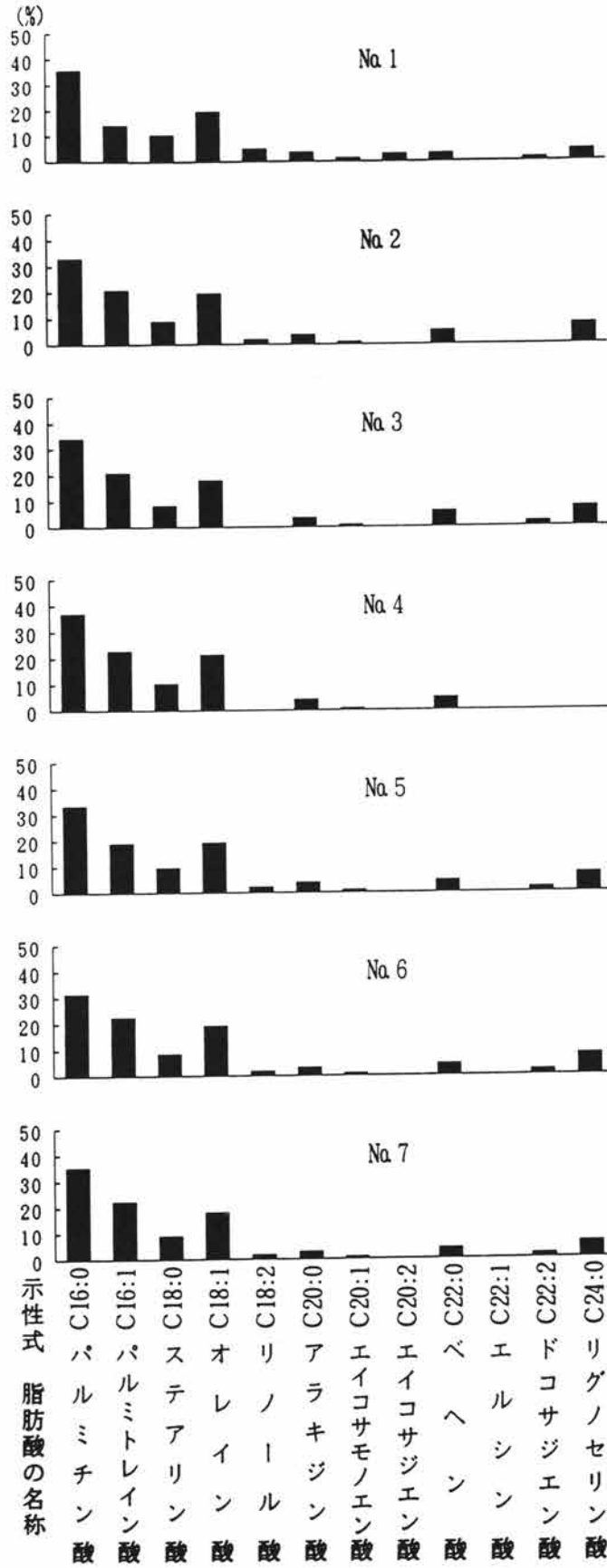


(平面図)



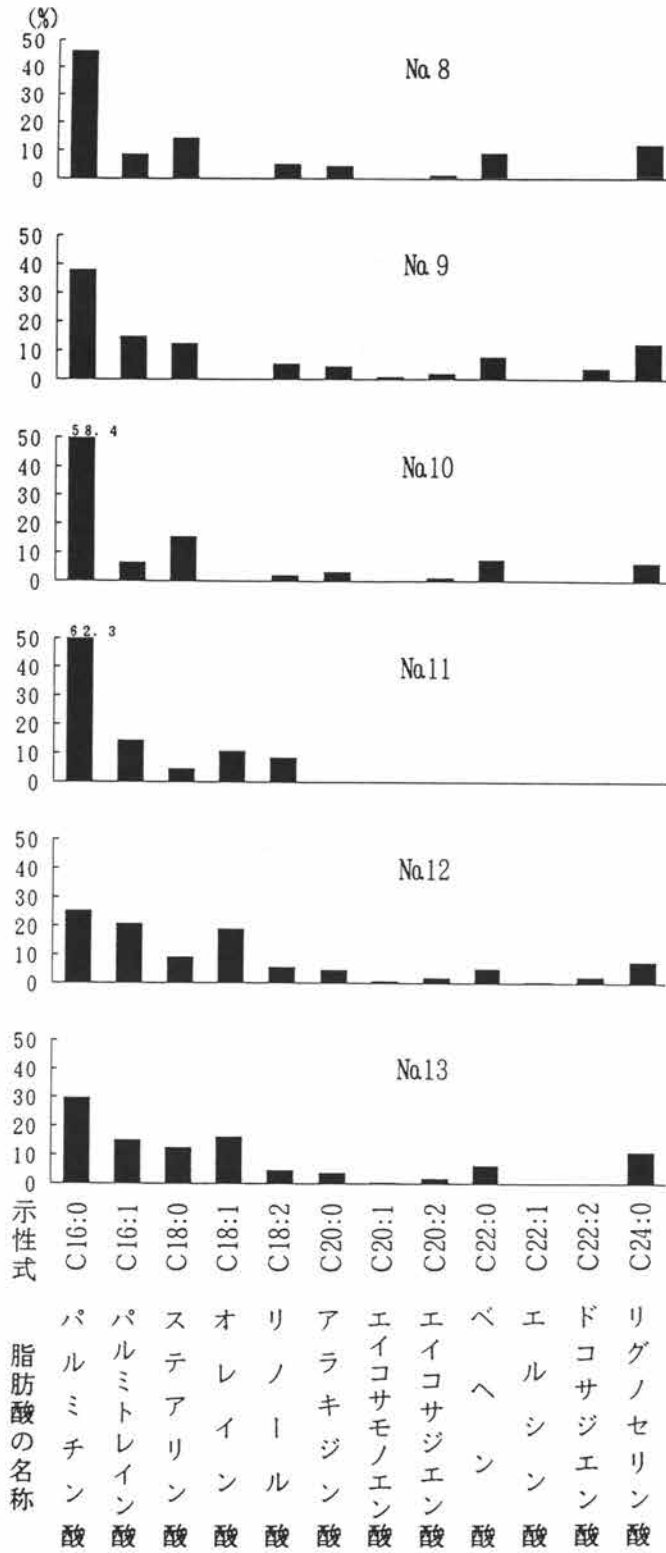
(断面図)

第209図 土器および土壌試料採取地点図

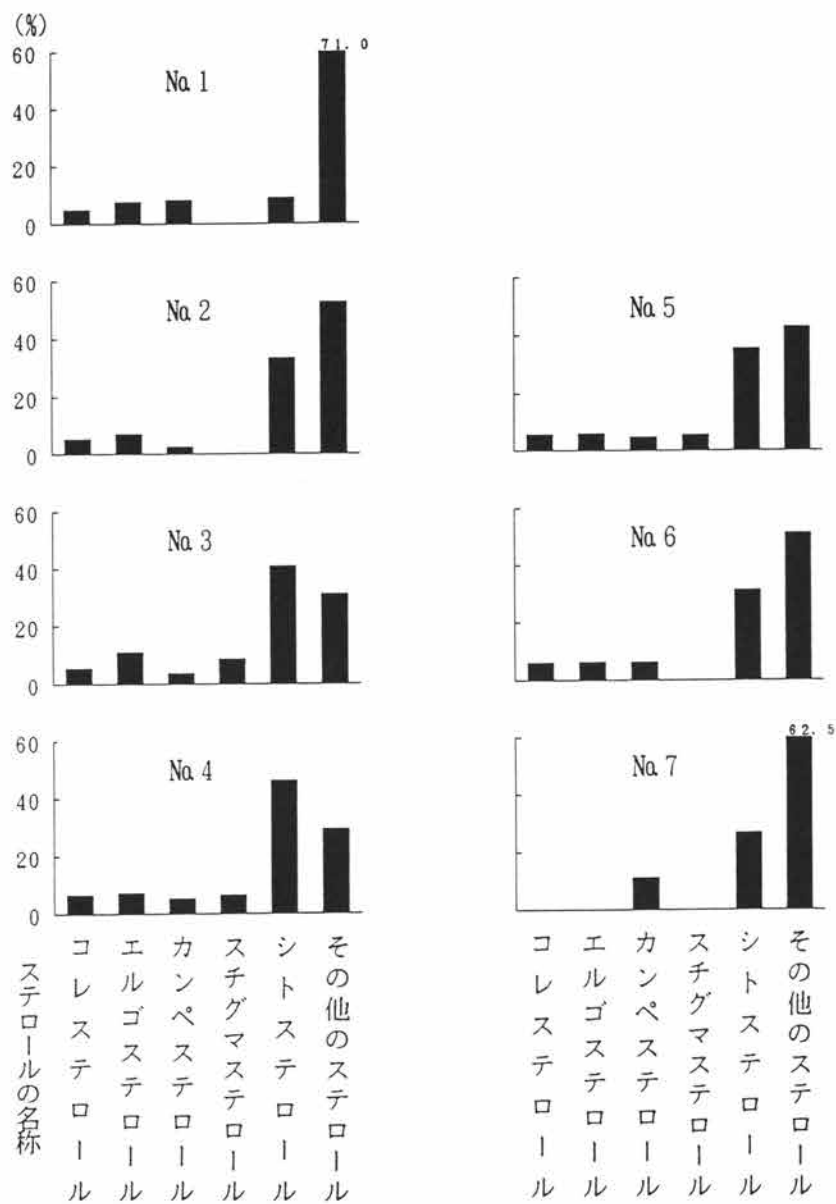


第210図 土壤試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

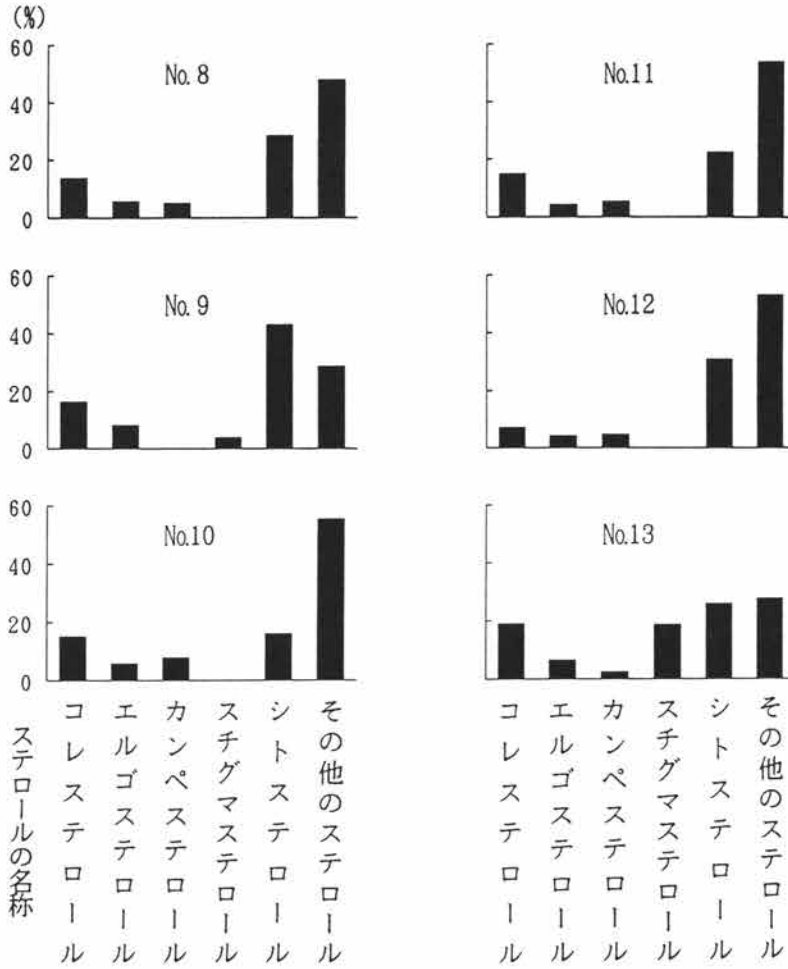
第3節 井出遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析



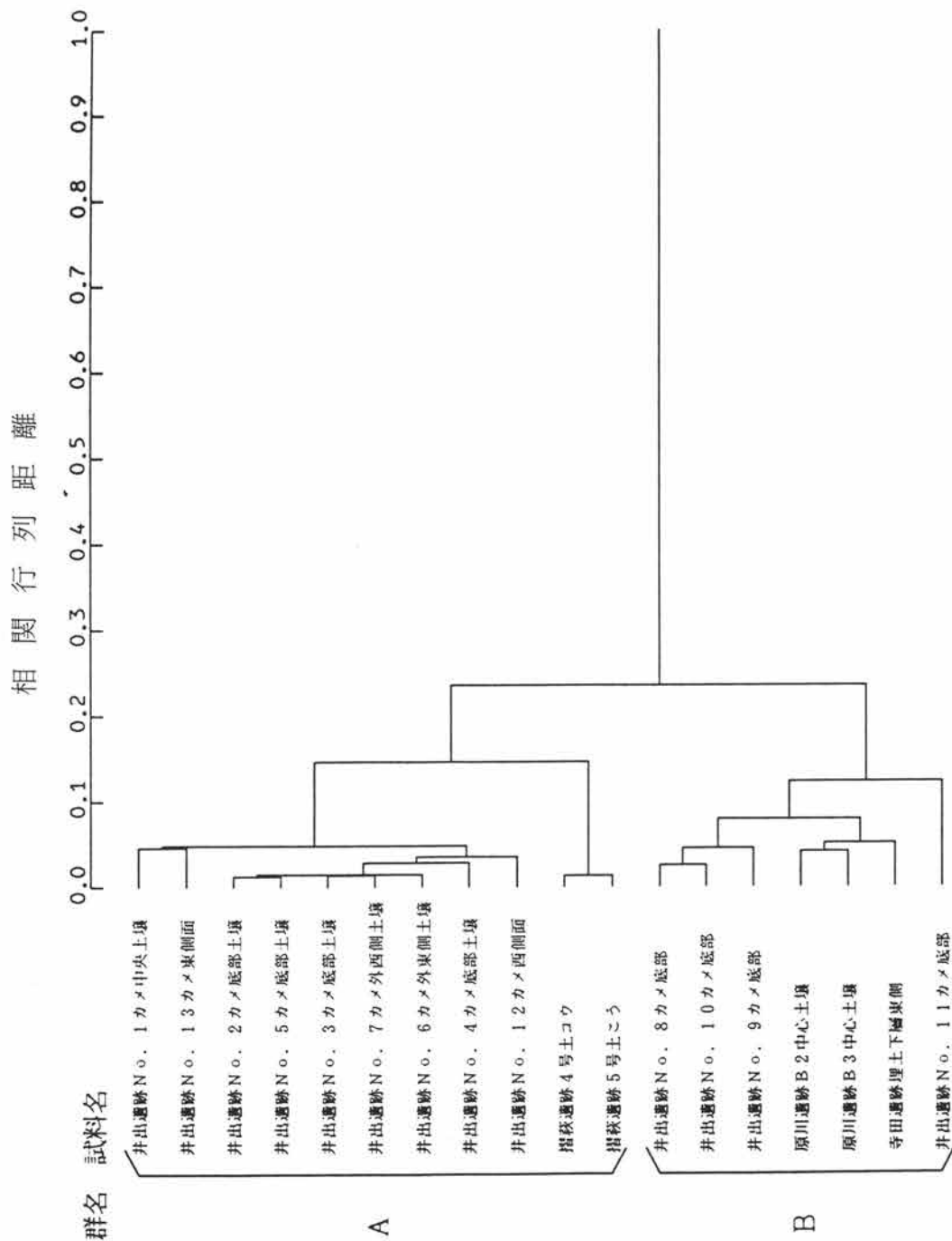
第211図 土器試料に残存する脂肪の脂肪酸組成



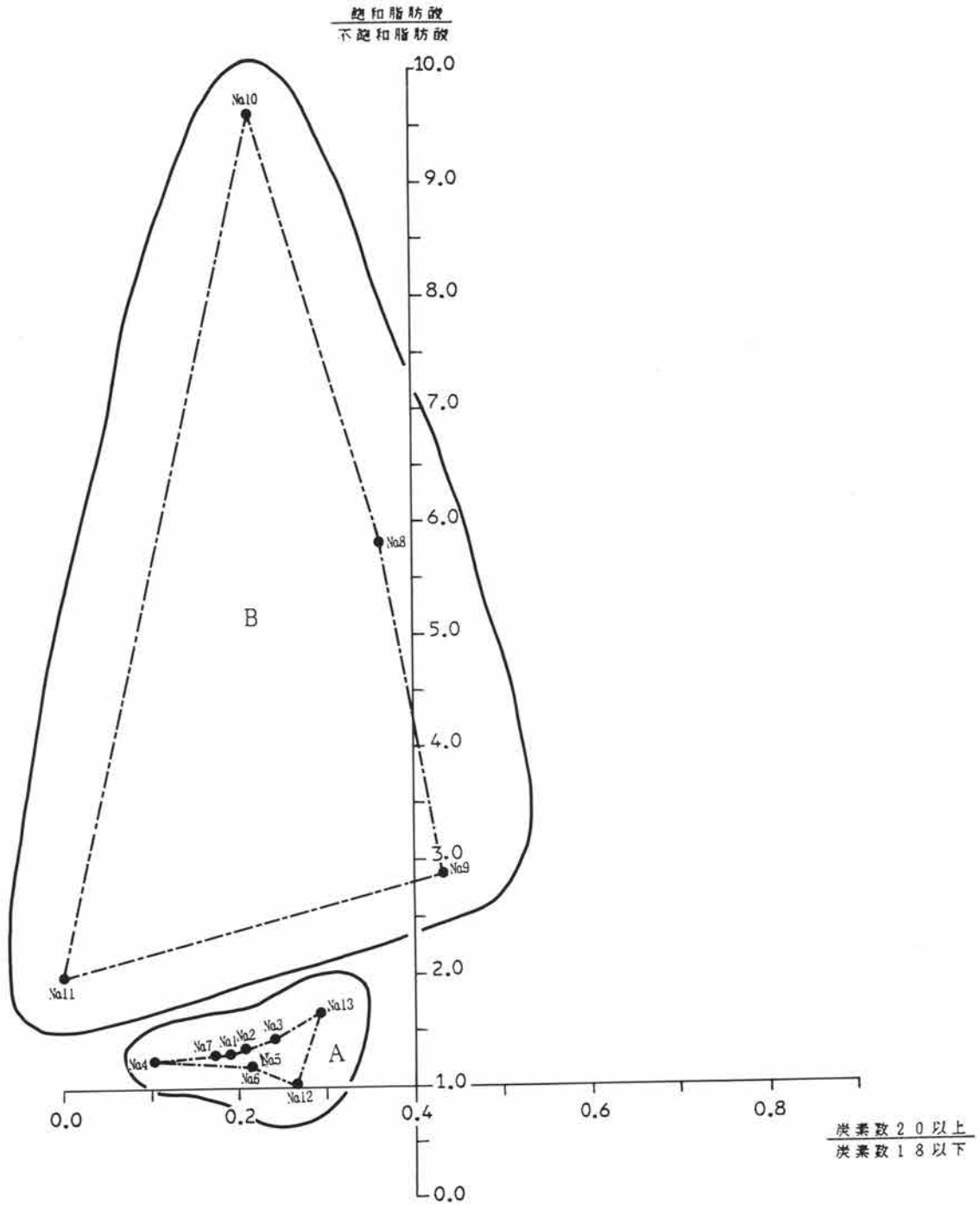
第212図 土壌試料に残存する脂肪のステロール組成



第213図 土壌試料に残存する脂肪のステロール組成



第214図 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第215図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

発掘調査報告書抄録

フリガナ	ナンジャイゾウコウジイセキ
書名	南蛇井増光寺遺跡 I
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第14集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第142集
編著者名	伊藤 肇 依田治雄
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒 377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦 1992年12月25日

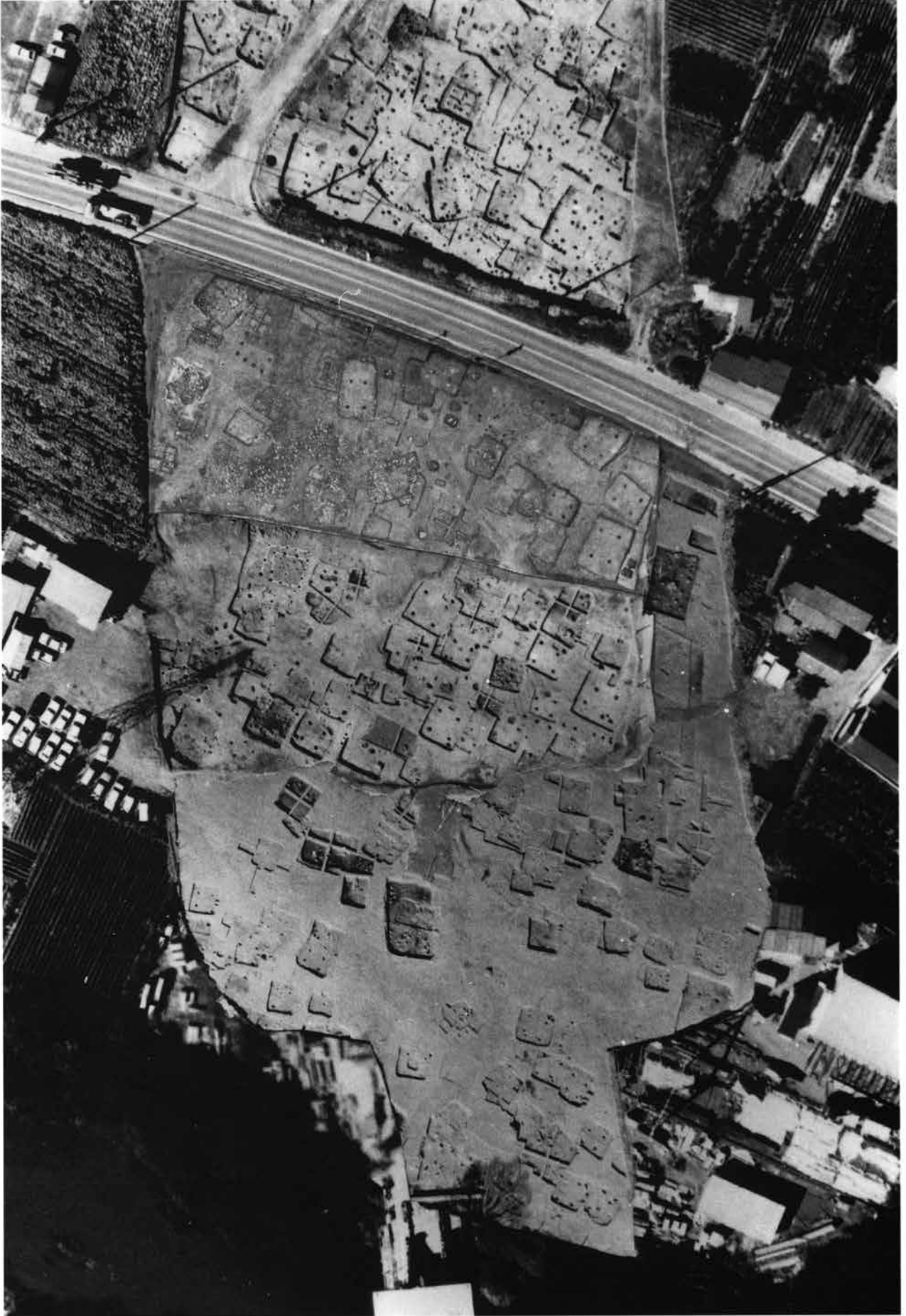
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ナンジャイゾウコウジ 南蛇井増光寺	トミオカシオオアザナンジャイ 富岡市大字南蛇井	10210		36°14′06″	138°49′21″	19881001- 19890219 19900407- 19901208	4,000 4,600	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南蛇井増光寺	住居跡	縄文時代前期 弥生時代中期～ 弥生時代後期	竪穴住居跡 10 軒 土坑 2 基 埋甕 2 基 竪穴住居跡 38 軒 土坑 3 基 埋甕 3 期	土器 打製石鏃 打製石斧 石皿 石匙 スクレイパー 土器 土製紡錘車 石鏃 太型蛤刃石斧 扁平片刃石斧 磨製石鏃 石包丁	縄文時代前期から平安時代にかけての集落址 今回は、縄文・弥生時代の遺構、遺物を報告

写 真 图 版



航空写真 南蛇井増光寺遺跡全景 (モザイク写真)



航空写真 B区全景 (モザイク写真)



B区 第2次調査遺構検出状況



B区 第2次調査遺構検出状況



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



吉田小児童見学



96号住居跡遺物出土状況全景（西より）



111号住居跡全景（南より）



111号住居跡遺物出土状況（西より）



111号住居跡埋設土器（南より）



111号住居跡埋設土器（南より）



111号住居跡埋設土器（南より）



120号住居跡遺物出土状況（東より）



120号住居跡全景（北より）



120号住居跡遺物出土状況



121号住居跡遺物出土状況（北より）



121号住居跡全景（南より）



122号住居跡遺物出土状況（南より）



122号住居跡遺物出土状況（北より）



166号住居跡全景 (南西より)



166号住居跡炉 (南西より)



179号住居跡遺物出土状況 (南より)



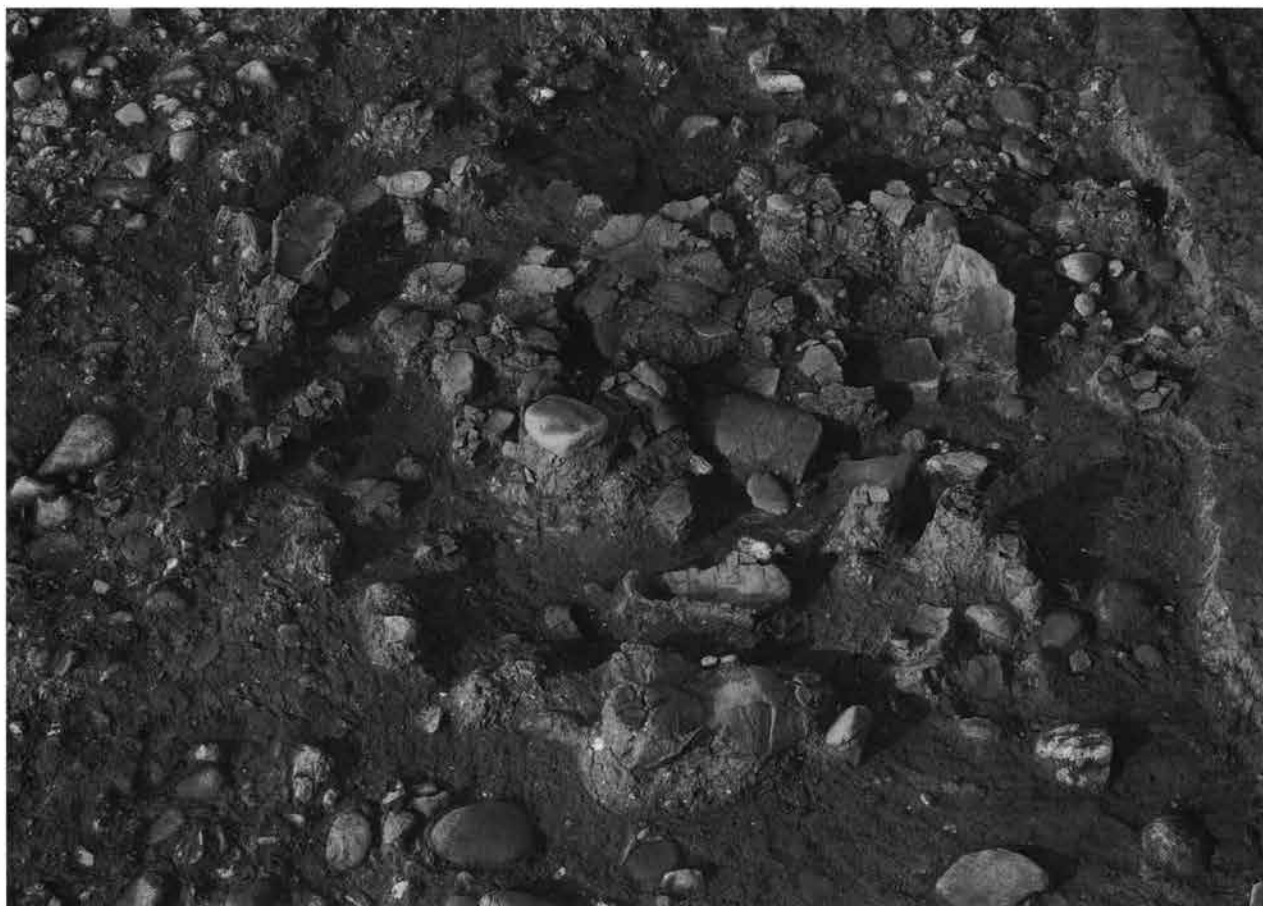
179号住居跡全景 (南より)



179号住居跡炉 (南より)



183号住居跡遺物出土状況（南より）



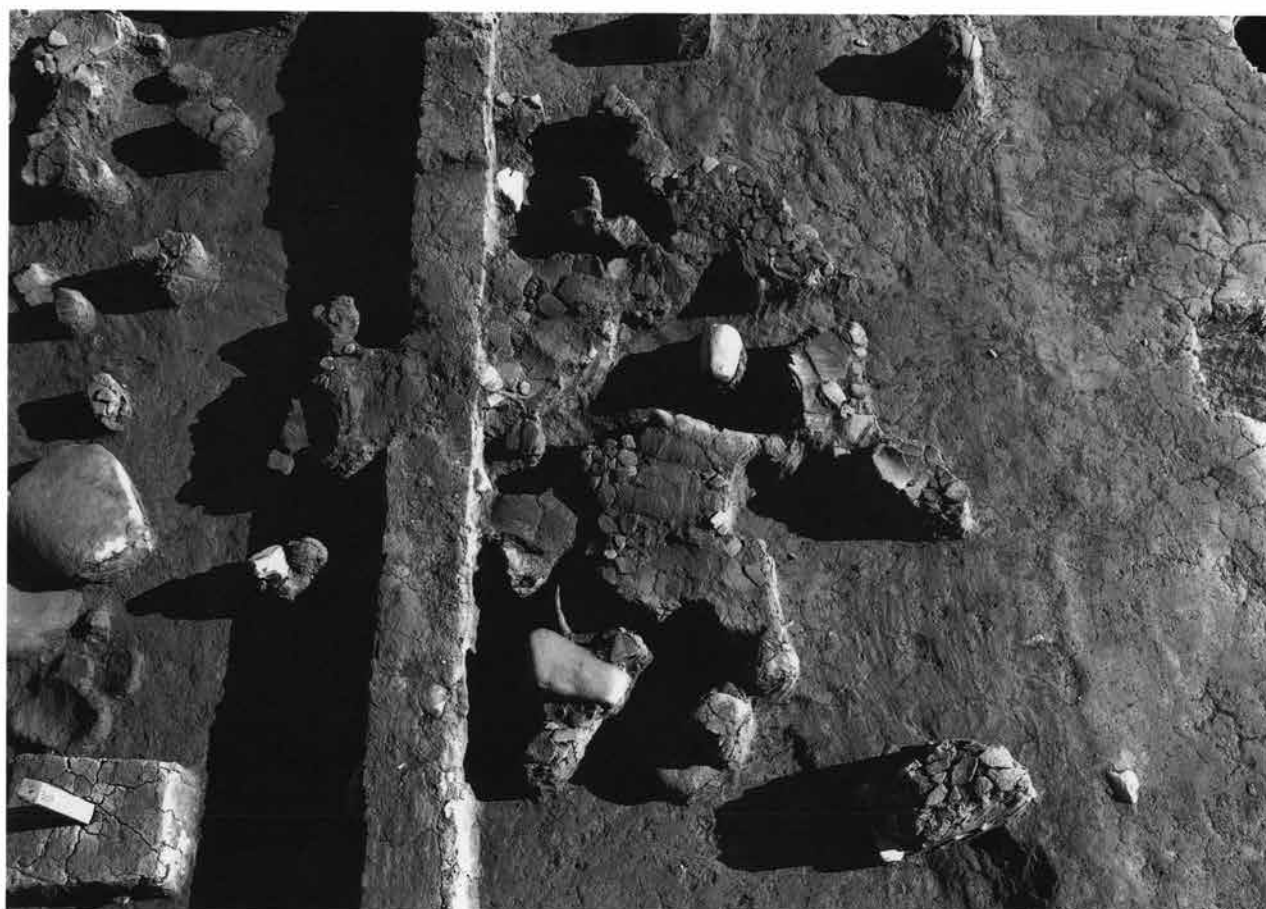
183号住居跡遺物出土状況（南より）



183号住居跡遺物出土状況（東より）



183号住居跡遺物出土状況（西より）



184号住居跡遺物出土状況（西より）



184号住居跡遺物出土状況（南より）



184号住居跡炉（南より）



2号埋甕出土状況 (南より)



2号埋甕出土状況 (西より)



3号埋甕出土状況 (南より)



9号土坑遺物出土状況全景 (南より)



17号土坑遺物出土状況全景 (南より)



1号埋甕出土状況（南より）



1号埋甕出土状況（南東より）



5号埋甕出土状況（東より）



5号埋甕出土状況（西より）



4号埋甕出土状況（西より）



6号土坑遺物出土状況全景（南より）



7号土坑遺物出土状況全景（南より）



18号土坑遺物出土状況（西より）



5号住居跡全景（西より）



22号住居跡全景（南西より）



22号住居跡遺物出土状況（西より）



22号住居跡遺物出土状況（東より）



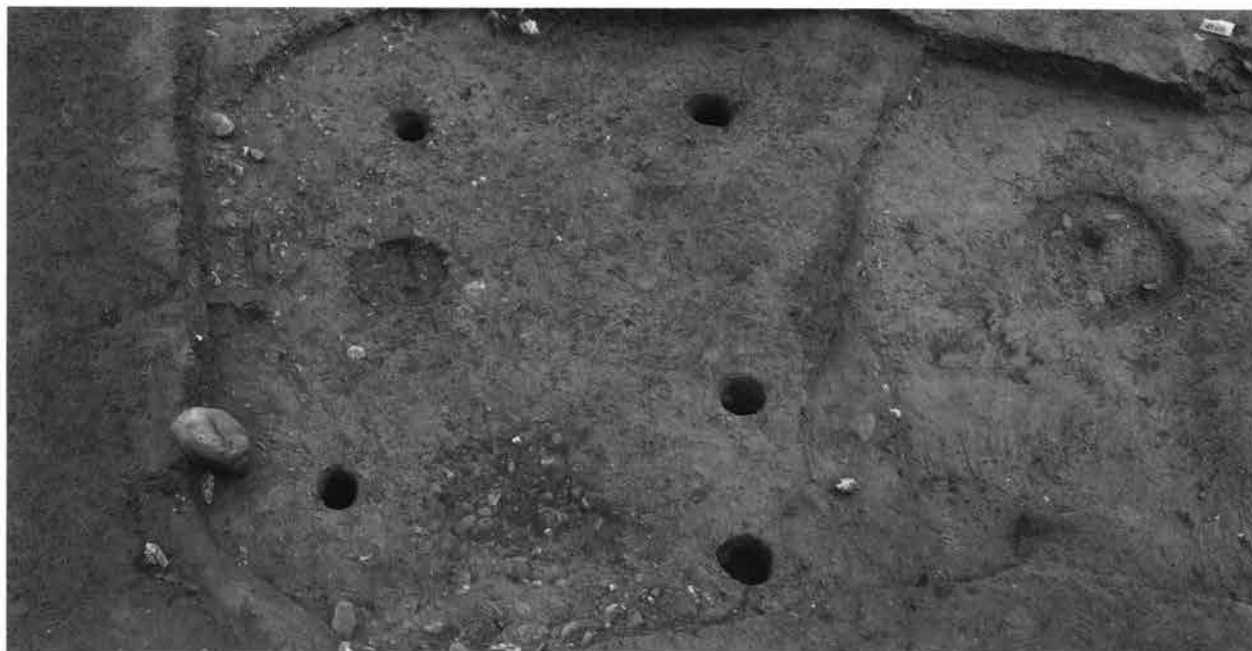
23号住居跡全景（西より）



23号住居跡遺物出土状況（東より）



23号住居跡遺物出土状況（西より）



28号住居跡全景（西より）



28号住居跡炉（北より）



28号住居跡遺物出土状況（西より）



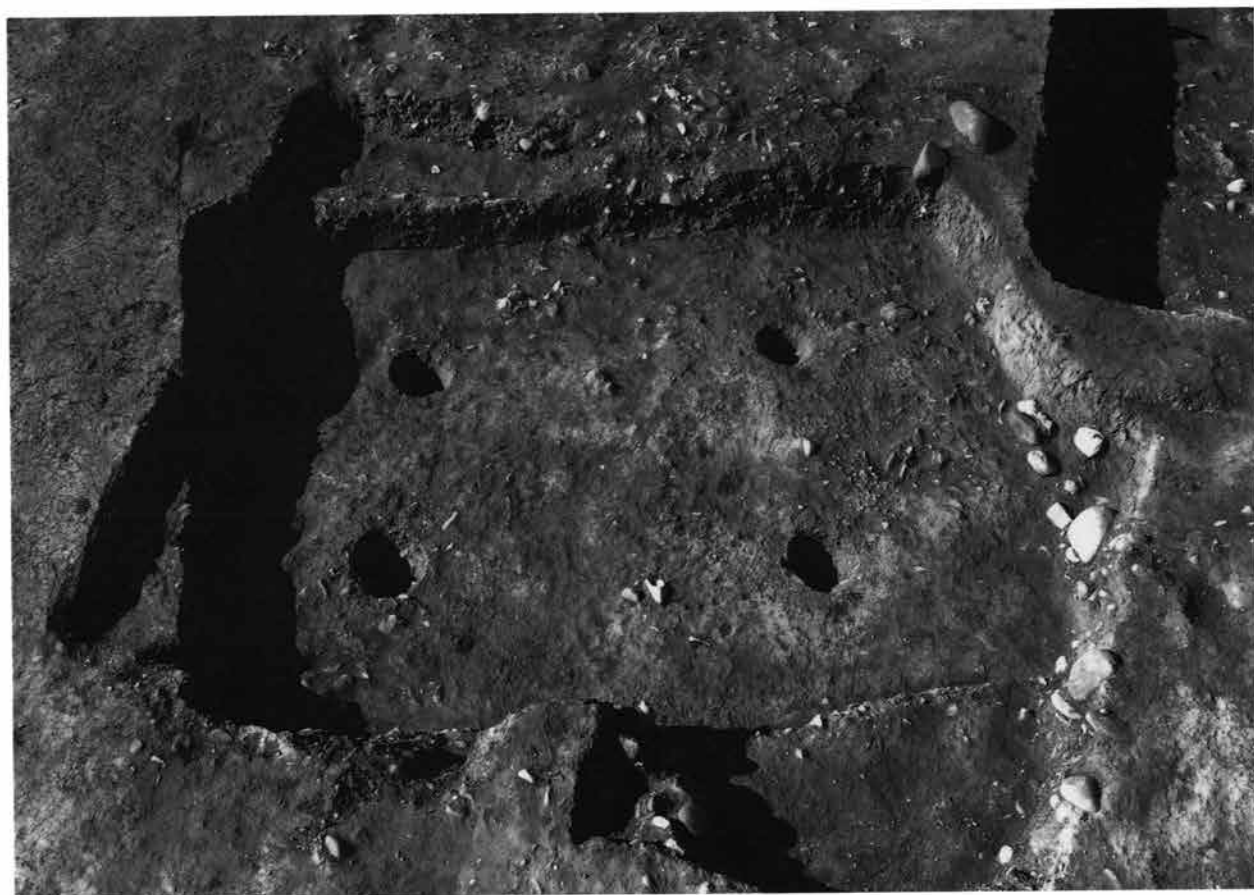
29号住居跡全景（東より）



29号住居跡全景 (東より)



29号住居跡炉 (西より)



31号住居跡全景 (東より)



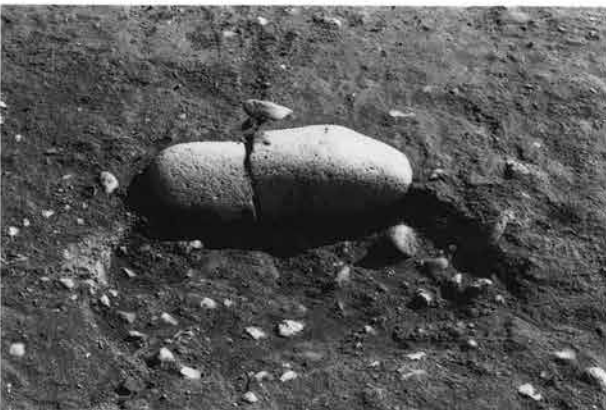
31号住居跡遺物出土状況 (西より)



31号住居跡遺物出土状況 (北西より)



32号住居跡全景（東より）



32号住居跡炉（北より）



32号住居跡遺物出土状況（西より）



32号住居跡遺物出土状況（北東より）



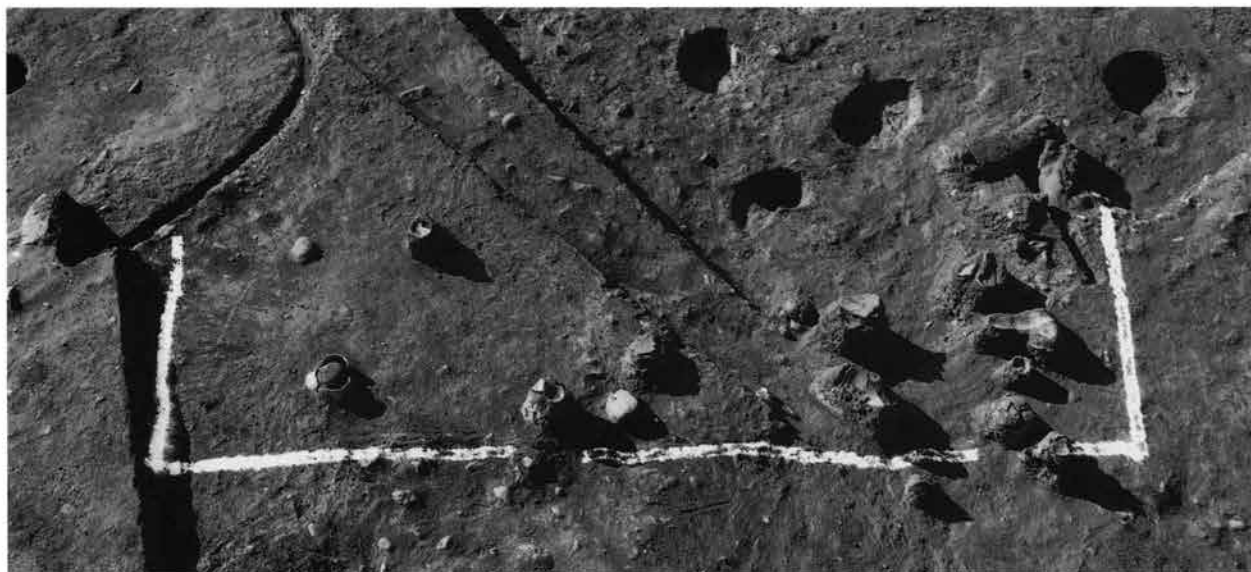
32号住居跡遺物出土状況（東より）



33号住居跡全景（北西より）



36号住居跡全景（西より）



39号住居跡全景（北東より）



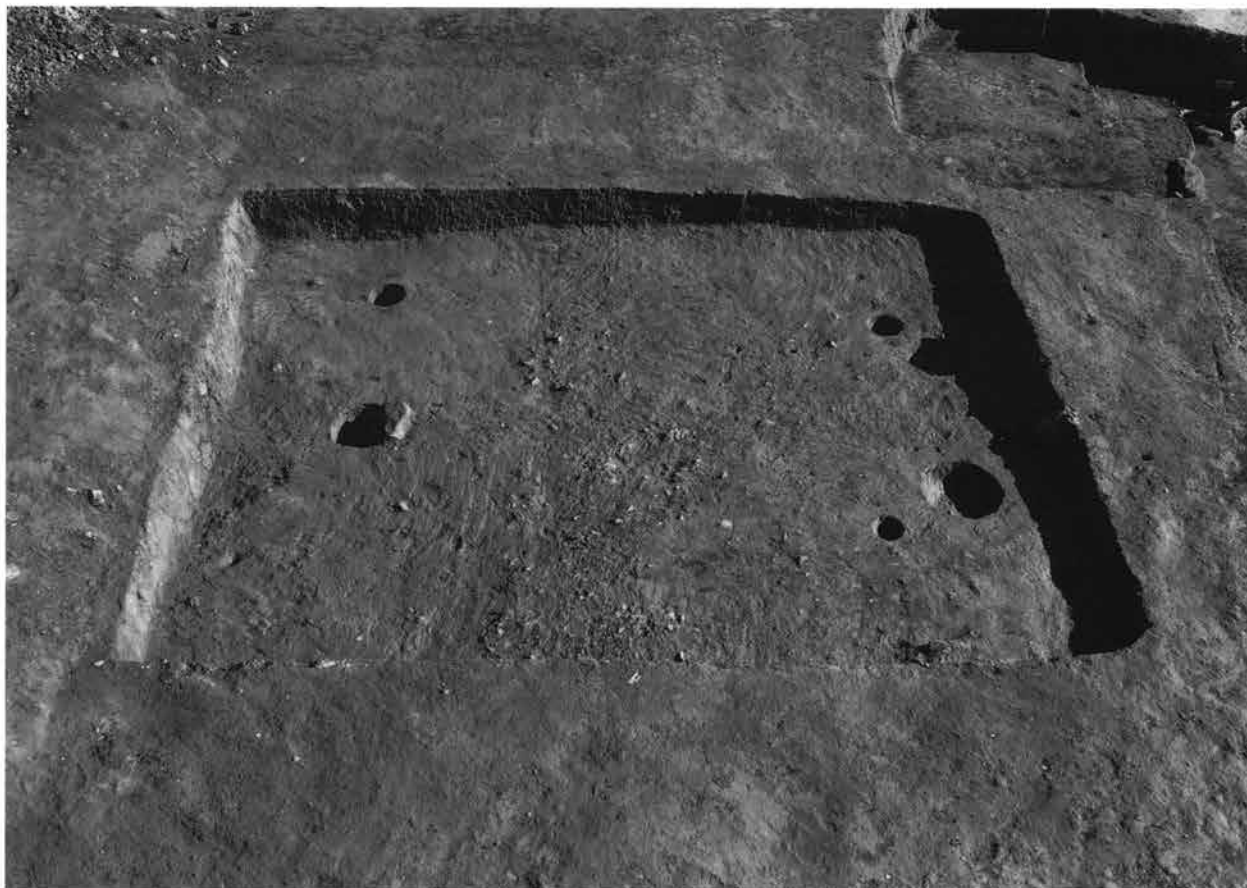
51号住居跡全景（南西より）



51号住居跡遺物出土状況（西より）



51号住居跡遺物出土状況（西より）



59号住居跡全景（南西より）



59号住居跡遺物出土状況（北西より）



60号住居跡全景（南西より）



60号住居跡遺物出土状況（南より）



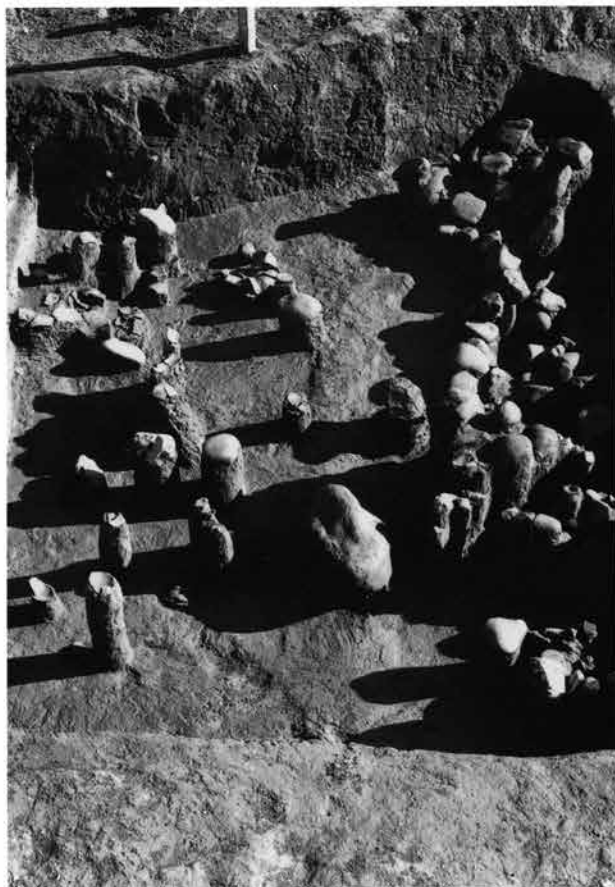
60号住居跡遺物出土状況（南より）



60号住居跡遺物出土状況（南より）



60号住居跡炉（西より）



61号住居跡遺物出土状況全景（西より）



61号住居跡全景（西より）



62号住居跡遺物出土状況全景（東より）



62号住居跡全景（南より）



62号住居跡遺物出土状況



75号住居跡全景（西より）



75号住居跡炉（西より）



75号住居跡遺物出土状況（西より）



79号住居跡全景（西より）



87号住居跡全景（東より）



97号住居跡全景（西より）



97号住居跡遺物出土状況（西より）



97号住居跡炉（南より）



98号住居跡全景（西より）



98号住居跡柱穴遺物出土状況（南より）



98号住居跡1号炉（東より）



98号住居跡 1号炉 (南より)



98号住居跡 2号炉 (北より)



99号住居跡全景 (南より)



99号住居跡遺物出土状況 (南より)



99号住居跡遺物出土状況 (南より)



101号住居跡全景（南より）



105号住居跡全景（南より）



106号住居跡全景（南より）



106号住居跡遺物出土状況（南より）



106号住居跡遺物出土状況（南より）



106号住居跡遺物出土状況（東より）



106号住居跡炉（西より）



107号住居跡全景（東より）



107号住居跡遺物出土状況（南より）



107号住居跡遺物出土状況（西より）



108号住居跡全景（西より）



108号住居跡遺物出土状況（南より）



108号住居跡炉（北より）



112号住居跡全景（南より）



112・113・114号住居跡全景（東より）



113号住居跡遺物出土状況（東より）



115号住居跡全景（東より）



115号住居跡遺物出土状況全景（南より）



115号住居跡遺物出土状況（南より）



115号住居跡炉（東より）



116号住居跡全景（南より）



116号住居跡遺物出土状況全景（南より）



116号住居跡遺物出土状況（南より）



116号住居跡遺物出土状況（西より）



116号住居跡炉（南より）



116号住居跡炉（南より）



118号住居跡全景（東より）



132号住居跡遺物出土状況全景（西より）



132号住居跡遺物出土状況（西より）



132号住居跡遺物出土状況（西より）



132号住居跡遺物出土状況（西より）



162号住居跡全景（南より）



162号住居跡炉（南より）



164号住居跡全景（東より）



164号住居跡貯蔵穴（北より）



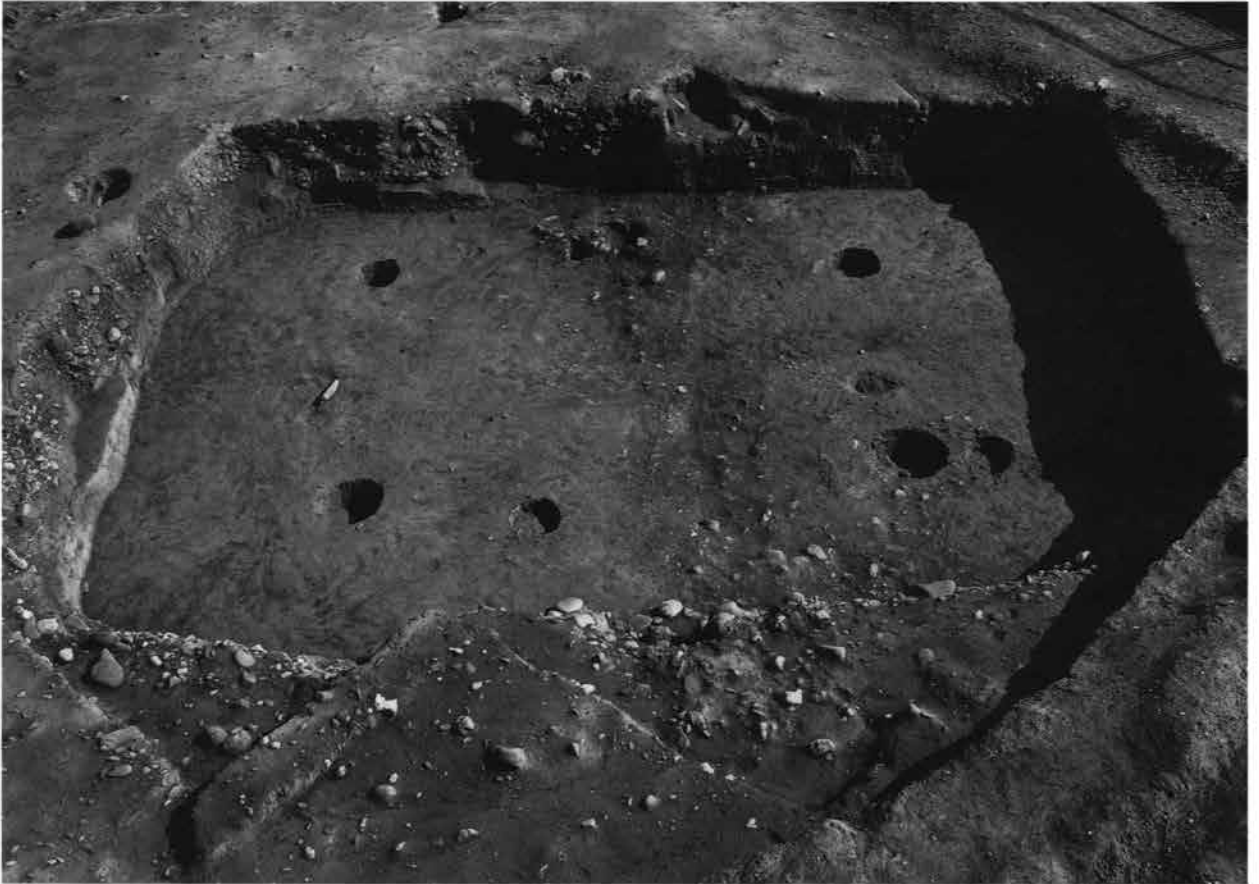
164号住居跡遺物出土状況（東より）



164号住居跡遺物出土状況（東より）



164号住居跡炉（東より）



168号住居跡全景（西より）



168号住居跡遺物出土状況（西より）



168号住居跡炉（東より）



174号住居跡全景（南より）



174号住居跡遺物出土状況（南より）



174号住居跡1号炉（南より）



174号住居跡2号炉（東より）



174号住居跡3号炉（東より）



178号住居跡全景（東より）



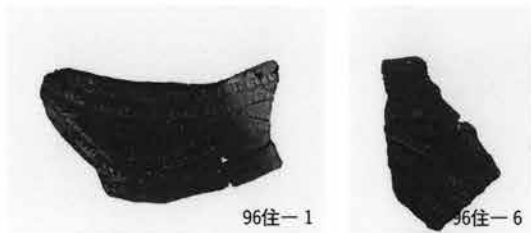
178号住居跡柱穴内遺物出土状況（西より）



178号住居跡1号炉（東より）



178号住居跡2号炉（西より）



96住-1



96住-6



96住-12



111住-4



96住-7

96住-11

96住-9



96住-8

96住-10



111住-5



111住-7



111住-1



111住-2



111住-6



111住-8



111住-3



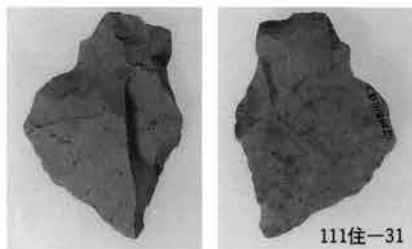
111住-26



111住-27



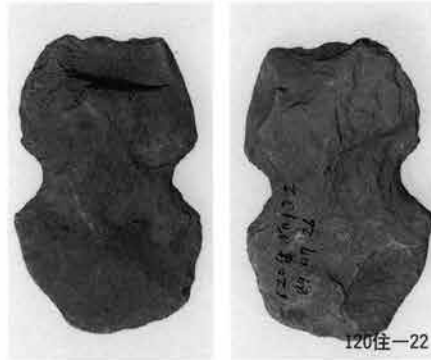
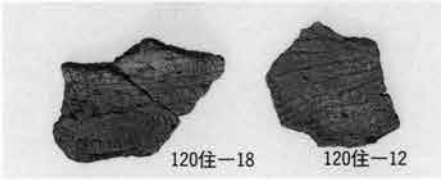
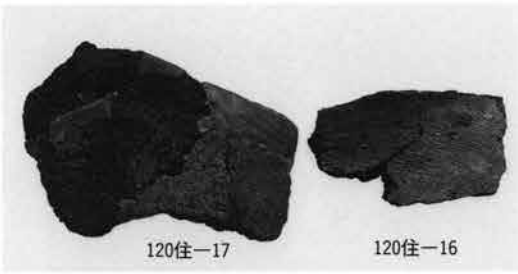
111住-32



111住-31



111住-28

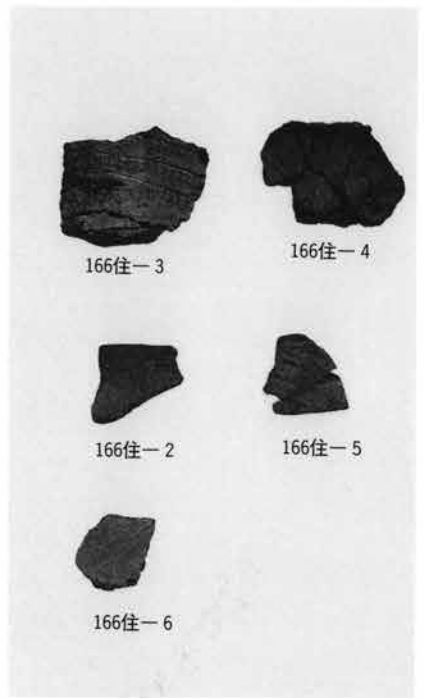




122住-2



124住-1



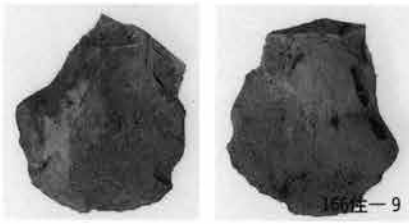
166住-3

166住-4

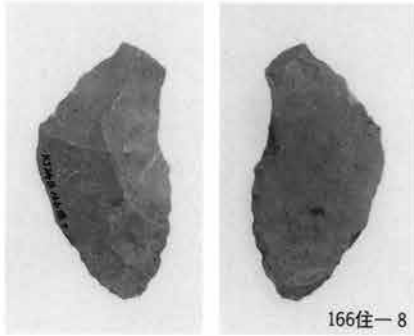
166住-2

166住-5

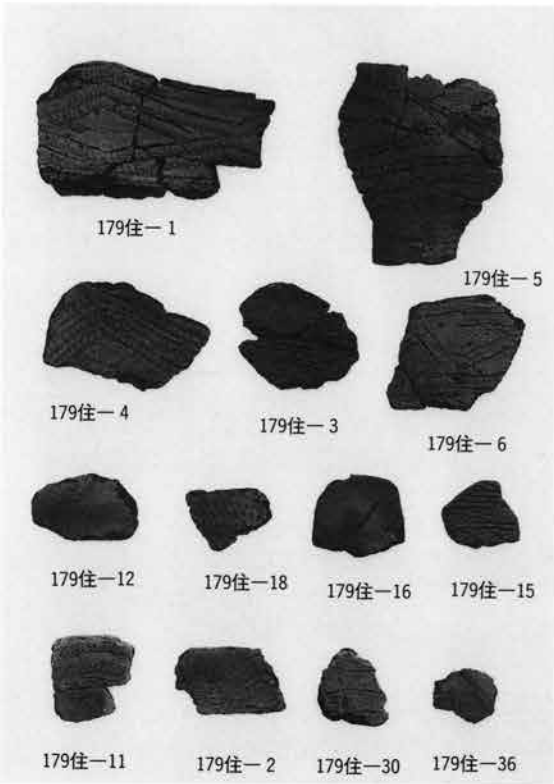
166住-6



166住-9



166住-8



179住-1

179住-5

179住-4

179住-3

179住-6

179住-12

179住-18

179住-16

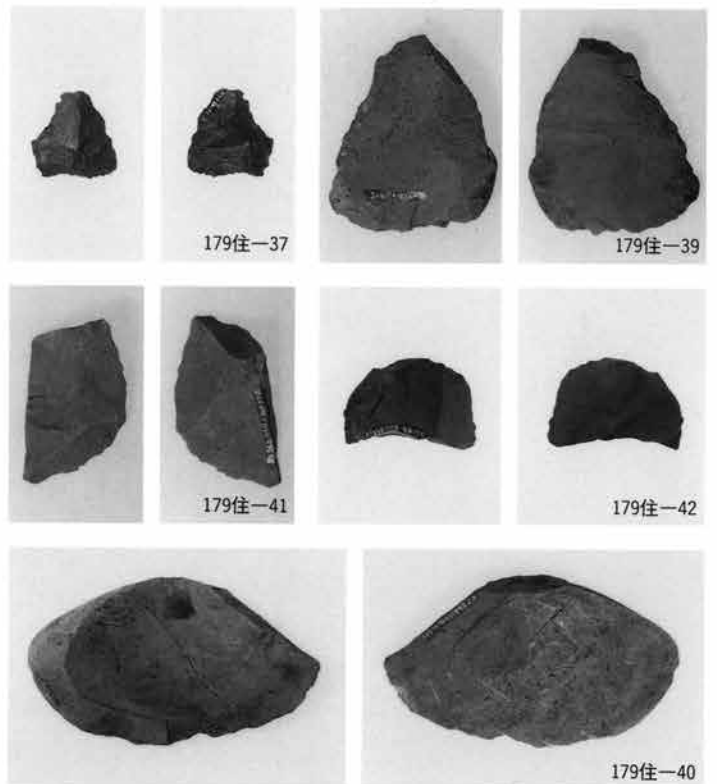
179住-15

179住-11

179住-2

179住-30

179住-36



179住-37

179住-39

179住-41

179住-42

179住-40



179住-43



179住-38

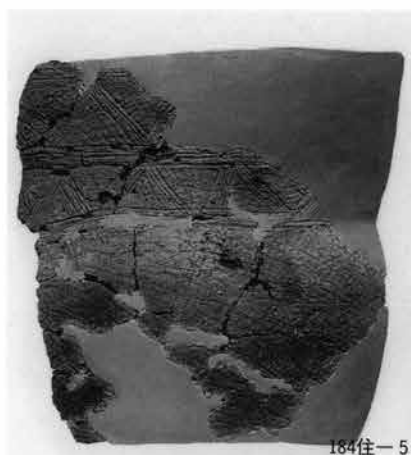




184住-1



184住-2



184住-5



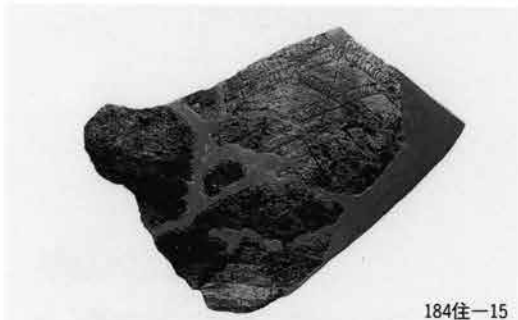
184住-3



184住-4



184住-6



184住-15



184住-7



184住-8



184住-36



184住-34



184住-35



5住-1



5住-2



5住-4



5住-3





22住-1



22住-2



22住-6



22住-3



22住-7



22住-8



22住-9



28住-1



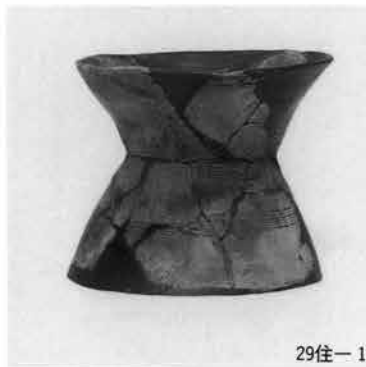
23住-1



23住-2



28住-4



29住-1



29住-3



29住-6



29住-2



29住-12



29住-13



31住-5



29住-11



31住-4



31住-2



31住-1



31住-3



31住-11



31住-12



31住-6



31住-9



32住-1



31住-10



32住-6





51住-11



59住-1



59住-2



59住-5



59住-3



59住-4



59住-8



59住-10



59住-11



59住-7



59住-6



60住-2



59住-12







61住-9



61住-10



61住-12



61住-11



61住-13



62住-1



62住-3



62住-4



62住-9



62住-8



62住-7



62住-10



62住-15



62住-16



75住-1



62住-14



75住-2



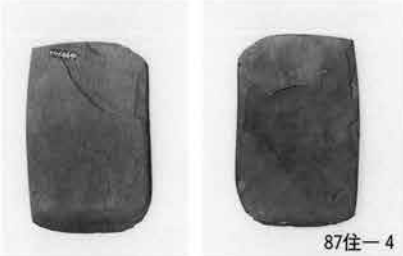
75住-4



79住-1



79住-2



87住-4



87住-1



87住-6



87住-7



87住-5



97住-1



97住-2



97住-4



98住-3



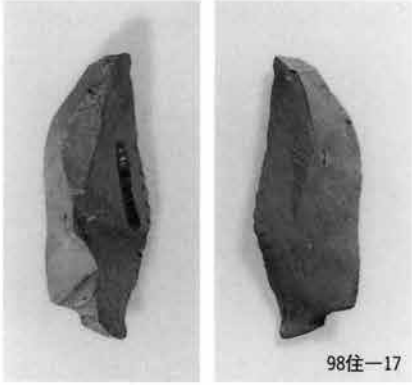
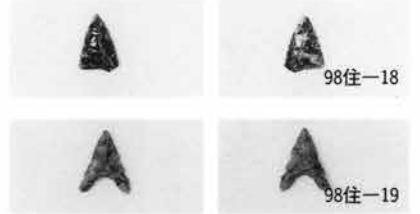
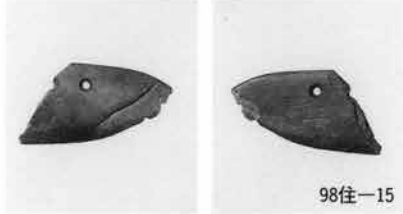
98住-1



98住-4



98住-5





99住-19



99住-20



99住-22



99住-21



99住-24



99住-25



99住-39



99住-43



99住-40



99住-38



99住-41



99住-42



101住-5



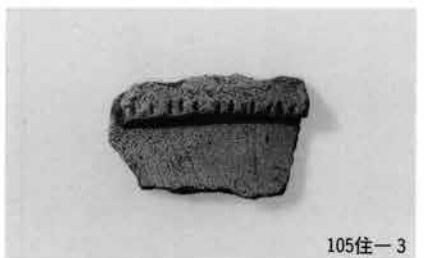
101住-1



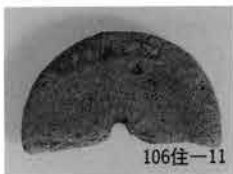
101住-6



101住-7



105住-3





108住-7



108住-16



108住-13



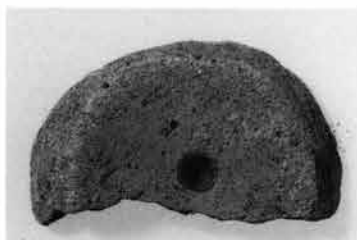
108住-9



108住-18



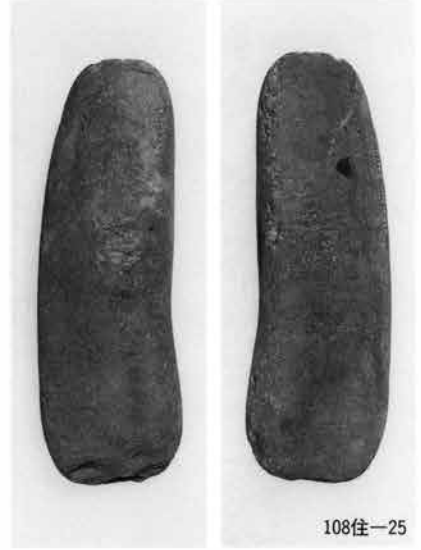
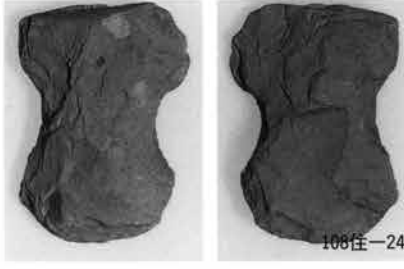
108住-21



108住-22



108住-1









116住-32



116住-34



116住-38



116住-36



116住-35



116住-39



116住-42



116住-44



116住-40



116住-41



116住-43



116住-45



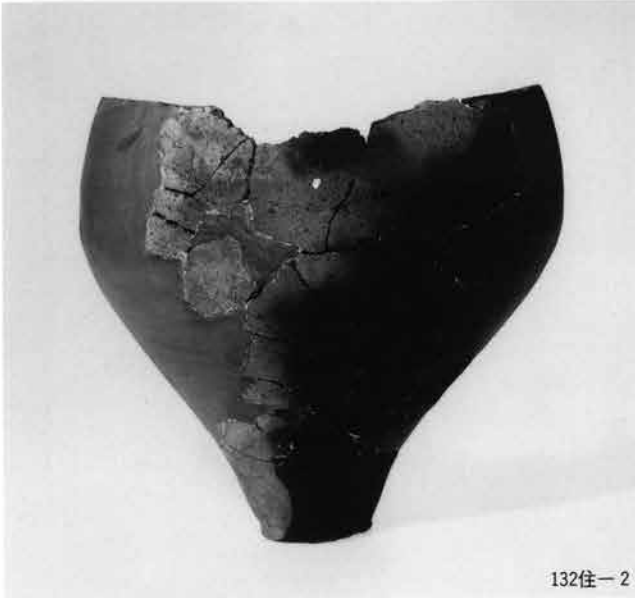
116住-46



118住-1



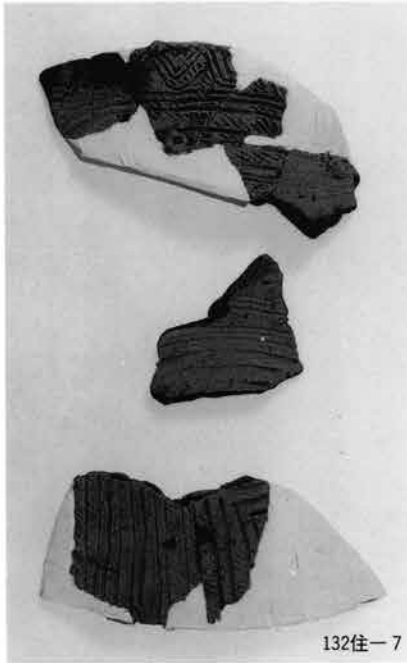
132住-3



132住-2



132住-1



132住-7



132住-5



132住-6



132住-15



162住-7



162住-2



162住-4



162住-8



164住-1



164住-3



164住-2



168住-2



168住-7



168住-3



168住-4



168住-10



168住-6



168住-11





168住-12



168住-14



168住-13



174住-7



174住-1



174住-2



174住-3



174住-4



174住-6



174住-8



178住-1



178住-6



178住-2



178住-3



4号埋甕-1



2号埋甕-1



1号埋甕-1



3号埋甕-1



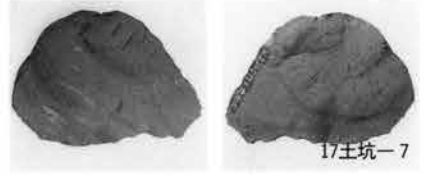
1号埋甕-2



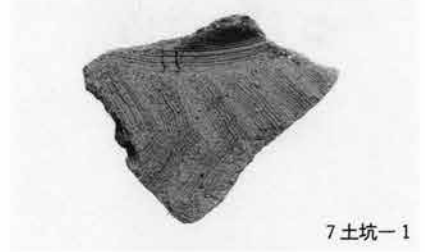
5号埋甕-1



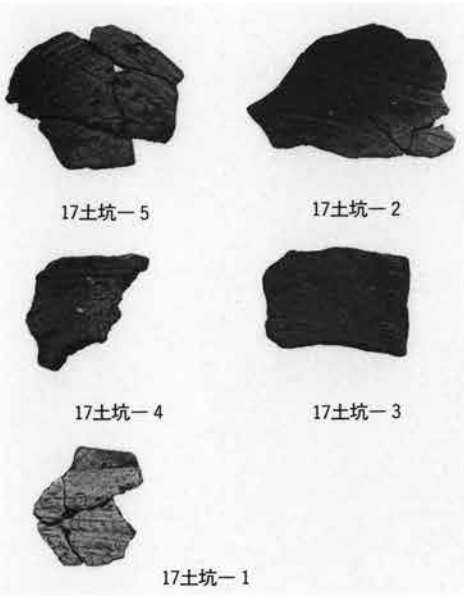
9土坑-1



17土坑-7



7土坑-1



17土坑-5

17土坑-2

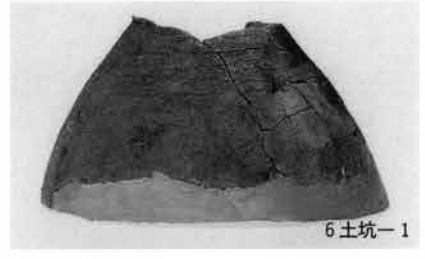
17土坑-4

17土坑-3

17土坑-1



6土坑-6



6土坑-1



18土坑-3



18土坑-2



18土坑-1



Gr-2

Gr-3

Gr-1



Gr-5

Gr-11

Gr-6



Gr-7

Gr-4

Gr-8



Gr-12

Gr-9

Gr-10



群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第142集

南蛇井増光寺遺跡Ⅰ

(本文編)

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第14集

平成4年12月18日 印刷

平成4年12月25日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

印刷／朝日印刷工業株式会社

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第142集

『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ』

正誤表

《本文編》

頁	行	誤	正
例言	20行	綿貫銳二郎	綿貫銳次郎
凡例	10行	軽石	礫層
7頁	第2図グリッド配置図右上	B u	C a
19頁	第2表 南蛇井増光寺遺跡 報告遺構一覧表 埋甕位置	A z - 1 7	A t - 1 7
180頁	20行	A z - 1 7	A t - 1 7